

I S 世界を舞う剣刃

イナビカリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふと気づいたら辺り一面白い空間

そこに現れたのは神様と名乗る女

そして、自分が手違いで死んでしまったと伝えられた

「貴方にはお詫びとして『インフィニット・ストラトス』の世界に転生して貰うわ。後、特典を3つあげるわよ。」

そして彼が要求したのは『健康な体』『少しいい頭』『自活出来る土地』だった

彼は原作に関わらずひっそり暮らしたいと言ったが

「こんなのでもいいの!?!…追加特典2つあげるからIS関係のをお願いよ。」

余りにしつこいのでやむを得ず、使うつもりが無い3機のISと1つの剣術を要求して彼は『インフィニット・ストラトス』の世界へと転生した

「彼がどんな物語を紡いでいくのか楽しみだわ♪」

神様の手違いで死んでしまった主人公が『インフィニット・ストラトス』の世界に転生して生きる話です。

原作に関わらない様にのんびりひっそり暮らしていたのに何故かIS学園に入れられてしまい結局原作に関わるハメになります。

初投稿ですが気軽に呼んで下さい。

目次

設定

キャラクター設定

機体設定①

機体設定②

原作開始前

第000話：プロローグ

第001話：壊れ始める日常

第002話：兔襲来！

第003話：兔悩む

第004話：発覚

第005話：暴露

第006話：調査報告

72

66

59

52

41

38

25

21

6

1

第007話：温泉兔

第008話：兔のお願い

第009話：宝探し

第010話：説教

第011話：年上の妹

第012話：起動

第013話：新しい日常

第014話：発見

第015話：二人目

第016話：入学前のお願い

第017話：セシリア・オルコット

178

第018話：父と母の謎

185

168

161

153

142

129

120

112

99

90

82

第019話：父と母の真実	195	ス	312
第020話・模擬戦【ドットブラスライ ザーVS霧纏の淑女】	207	第030話：クラス代表	325
第021話：試合後	224	第031話：決闘	337
第022話：暴露②	233	第032話：意気込み	348
第023話：向かうべき場所	245	第033話：布仏本音	356
第024話：約束	260	第034話：帰宅	370
第025話：入学準備	271	第035話：代表決定戦	381
1学期		第036話・第1試合【ドットブラスラ イザーVS蒼い雲】	394
第026話：IS学園	277	第037話：出陣！戦国龍!!（前編）	
第027話：再会	288	426	
第028話：再会後	300	第038話：出陣！戦国龍!!（後編）	439
第029話：ジャーマンスープレック			

第039話：第2試合【戦国龍VS白

式】

第040話：代表決定戦後 | 477

第041話：地神刀オオテナタ

497

第042話：一夏の反省会（十モツピ

の野望）

509

第043話：クラス代表、織斑一夏

519

第044話：実習授業

第045話：名刀・六道剣！ | 546

第046話：更識簪 | 577

第047話：歓迎会と来訪者 | 602

第048話：中国の代表候補生

622

第049話：簪の闇 | 650

第050話：家にご招待 | 667

第051話：驚愕の出会い | 686

第052話：兎との一夜 | 709

第053話：簪の勉強・鈴の訓練

733

第054話：簪のお願い | 764

第055話：織斑一夏…黄昏に死す

（笑）

| 777

第056話：完成！打鉄式 | 798

第057話：ドッキリと説教 | 808

第058話：姉妹喧嘩の行く末

828

第059話：クラス代表対抗戦【甲龍V

S
白式】

852

第060話：乱入者【ドットブラスライ

ザーV S
ゴレムI】

881

第061話：報告と制裁

911

第062話：鈴の決意

925

第063話：M A · D A · O

939

第064話：暴露③

956

第065話：フランスの金、ドイツの銀

第066話：妹襲来！

979

998

第067話：第3の鬼

1011

第068話：模範演技【ラインバレルV

S
蒼い雫&甲龍&白式&疾風の再誕】

1037

第069話：剣刃（つるぎ）

1077

第070話：二振りの青の剣刃（つる

ぎ）

1099

第071話：第二回織斑家家族会議

1124

第072話：放課後の訓練

1141

第073話：剣刃（つるぎ）の意思、白

の光剣と紫の霊剣

1164

第074話：怒りの奥義！九頭龍閃（こ

このつがしらのりゅうのひらめき)

1188

第075話：御剣の理と二大奥義

1212

第076話：トーナメントの内容

1224

第077話：蒼い雫の行く末

1240

第078話：起動！ワイバーン・ガイア

!!

第079話：翼竜強襲？

第080話：制限時間

第081話：未練

1272

1281

1318

1353

第082話：タッグトーナメント開催

1382

第083話：三つ巴のタッグバトル【戦

国龍VS黒い雨VS白式&疾風の再誕改

式】

第084話：戦国龍、墜つ【戦国龍VS

偽暮桜】

第085話：進化の時！我が名は戦国

龍皇!!

第086話：戦場を駆ける駿馬！その

名は轟焰!!【戦国龍皇VS偽暮桜】

1459

第087話：自分のルール

1476

第088話：廃棄品と完成品	—	1494
第089話：クロエとラウラ	—	1422
第090話：父の願い・娘の決意	—	1225
1538	—	
第091話：生まれ変わった淑女と暴走気味の黒兎	—	1558
第092話：盗難事件発生！盗まれた戦国龍皇!?	—	1577
第093話：龍皇の逆鱗	—	1589
第094話：復活の永遠	—	1616
第095話：炎龍刀・真打!!	—	1631
第096話：恋の作戦会議	—	1657
第097話：休日デート♪（トラブル	—	1671

編	—	
第098話：休日デート♪（買い物編）	—	1671
第099話：休日デート♪（告白編）	—	1689
1703	—	
第100話：淑女の最後の我儘	—	1714
第101話：これまでとこれから	—	1725
第102話：海的一幕	—	1731
第103話：剣刃（つるぎ）くその式	—	1738
第104話：女同士の座談会	—	1763

- 第105話：蒼炎の不死鳥！ハルファス・バーゼ!! ————— 1782
- 第106話：第4世代(?) 紅椿 1812
- 第107話：事件発生!?!? ————— 1833
- 第108話：緊急作戦会議 ————— 1840
- 第109話：白と紅の敗北【白式&紅椿VS銀の福音】 ————— 1860
- 第110話：第2陣出撃!! ————— 1875
- 第111話：蒼と白の勝利【蒼炎の不死鳥&白き翼竜VS銀の福音】 ————— 1886
- 第112話：歪んだ結論 ————— 1893
- 第113話：姉の心、妹知らず
- 1903
- 第114話：臨海学校終了 —————
- 第115話：白式・雪羅 —————
- 第116話：一学期の終わり ————— 1934
- 夏休み
- 第117話：夏休み突入！一夏の弟子入り志願!?!? ————— 1943
- 第118話：弟子入り成功! ————— 1953
- 第119話：幸先の悪い始まり!?!? 1960
- 第120話：修行開始！永遠の薪割り 1960
- 特訓!! ————— 1966
- 第121話：永遠の危機!?!? 忍び寄る魔 1966

(ホモ)の手!?

1977

第122話：永遠を守れ!織斑一夏(ホ

モ)対策会議!?

1984

第123話：第3回織斑家族会議

1993

第124話：一夏の今後

2004

第125話：紅椿の利用方法

第126話：不死鳥の帰国

2014

第127話：不死鳥の力

第128話：イグニッションプラン開

幕

幕

2046

第129話：奪われたサイレント・ゼ

ファイル

2054

第130話：襲撃者の実力【黒い雨VS

無音の蝶】

2063

第131話：失意のラウラ

2071

第132話：最期の会話

2078

第133話：クロエの決意

2089

第134話：風の翼!裂空丸飛翔!!

2092

2101

第135話：巨鳥襲来!?

2109

第136話：再会する姉妹

2119

第137話：兄からの贈り物 緑の双

刃と妖刀

2125

第138話：姉妹の絆!ファントム・グ

ルゼオン!!

2140

第139話：騒動後の大混乱 —

2153

第140話：死神の猛威【ファントム・

グルゼオンVS黒兎隊】

第141話：淑女の亡命 —

2161

第142話：父の真実 —

第143話：引越し挨拶 —

第144話：兎に睨まれた龍 —

第145話：暴露④ —

第146話：規格外 —

第147話：降臨！打鉄天魔！！

2209

第148話：武器封じ！六天連鎖（ラッ

シュ）！！【打鉄天魔VS白式・雪羅】

2203219721922184217821682161

2214

第149話：次の題材 —

2227

第150話：闇夜を照らす月！月光龍

（ユエガンロン）咆哮！！ —

2232

第151話・第5世代の対決【打鉄天魔

VS月光龍】 —

2243

設定

キャラクター設定

名前

火ノ兄ヒノエ 永遠トワ

性別

男

年齢

15歳（本編開始時）

転生前 20歳

趣味

畑仕事

寝る事

容姿

【バトルスピリッツ ブレイヴ】の【馬神弾】の髪を少し長めにし、色は白地に先端が赤くなっている

制服

額に無地の赤いバンダナを巻いている

IS学園の制服風の丈の長い羽織を着ている

羽織の下は上着を着ていない以外は織斑一夏と同じ服装
腰に3機のISの待機状態の刀をそれぞれ差している

左側に【戦国龍】の日本刀

右側に【ラインバレル】の太刀

後ろに【ドットプラスライザー】の軍刀

特典

健康な体

普通より少し良い頭（中の上か上の下辺り）

ある程度自給自足のできる土地

追加特典

3機のIS

飛天御剣流の秘伝書（るろうに剣心）

専用機

戦国龍（バトルスピリッツ烈火魂）

ドットプラスライザー（ダンボール戦機ウオーズ）

ラインバレル（鉄のラインバレル）

使用技

原作の飛天御剣流の技全て（キネマ版も含めて全てになっている。但し、キネマ版では九頭龍閃

つという事に

が奥義になっているので天翔龍閃と合わせて奥義が二
なっている）

オリジナル技

龍槌閃・鉄槌（上段から刀を相手に叩き付けて地面ごと相手を押し潰す技）

龍翔閃・烈破（刀を逆手に持ち、下から振り上げる途中、地面に剣先を引っ掛けその反動を

利用して相手を斬りつける技）

龍巻閃・山嵐（相手を周囲もろとも上に巻き上げるように斬り上げる技）

九頭龍閃・天突（九つの斬撃を一つに束ねることで9倍以上の威力と突進力

を

持つ奥義）

情報

神様が原因で死んだ人間

死んだお詫びとして特典を貰って「IS」の世界に転生した

生前から普段はのんびりした性格だが、同時に、相手が誰であろうと物怖じせず言いたい事はハッキリ言う性格でもある

口調は老人の様な話し方をするがこれはワザとではなく生前からの喋り方の為、直すことが出来ない、と言うより直すつもりがない

転生したからといって「IS」の世界で何かしようと言う気は一切なく、最初に貰った特典も生活に必要な物ばかりである為、日々を平穩に暮らせればいいとしか考えていない

一人で暮らしているが生前の知識と家にあった大量の参考書を読んでいる為、人並の一般教養は身につけている

特典で貰った島でヒツソリと暮らしていたが篠ノ之束と出会い、さらに織斑一夏がISを動かしてしまった為、強制的にIS学園に送り込まれてしまう（報復として織斑一夏にジャーマンスूपレックスをかけた）

上記の理由から織斑一夏に対してあまり良い印象は持っておらず、何の接点もない自分の生活を壊した奴と言う認識がある

その為、自分から積極的に関わろうとは思っていない

幼い頃から畑を耕したりしていたので身体能力は高く、追加特典で貰った『飛天御剣流』を日々の修行で修得しており、そこから独自の技もいくつか編み出している

その為、戦闘能力は織斑千冬と同等かそれ以上の強さを持つ

機体設定①

専用機名

戦国龍

世代

第3世代（実際は第5世代）

操縦者

火ノ兄永遠

武装

日本刀

槍

特殊能力

剣刃作製能力

・【バトルスピリッツ】の系統：剣刃を造る能力
ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力

六道剣

る

・以下の6つの刀の内の一振りを召喚する。
・一度呼び出すと単一ワンオフ・アビリティ仕様を解除しない限り他の刀は召喚できない。
・機体の赤い部分が装備した刀の色に変わる（ただし「炎龍刀オニマル」の時は変わらない）

・能力と呼び出す際の台詞は以下の通り。

・炎龍刀オニマル：色：赤

：属性：炎

：特徴：攻撃

：能力及び説明：刀身に炎のエネルギーを纏わせて斬る

六道剣最強の攻撃力を誇る

：台詞：燃え上れ！猛き炎の剣【炎龍刀オニマル】！！

・風翼刀ドウジキリ：色：緑

：属性：風

：特徴：速度

：能力及び説明：風を操り竜巻や鎌鼬を起こす事が可能

自分のスピードが4倍から5倍にまで上が

・地神刀オオテンタ：色：白
 ：台詞：風を纏いし神速の刃【風翼刀ドウジキリ】!!

：属性：地&氷

：特徴：防御

：能力及び説明：刀身から氷を作り出せる

刀身を振動させ地震を起こしたり斬った物

を分解できる

六道剣の中で最硬の防御力を持つ

：台詞：大地を揺るがす凍える剣！【地神刀オオテンタ】!!

・雷命刀ミカヅキ：色：黄

：属性：雷&光

：特徴：回復

：能力及び説明：雷を発生させることが可能

一度だけ自分のSEを完全に回復できる

六道剣の中で一番の切れ味を誇る

：台詞：雷光轟く金色の剣【雷命刀ミカヅキ】!!

・水覇刀ジュズマル：色：青

：属性：水

：特徴：耐久

：能力及び説明：水の壁や弾丸を作り出せる

自分が受けるダメージを全て1/5にする。

：台詞：荒ぶる海原を制する刃【水覇刀ジユズマル】!!

・妖刀ムラサメ：色：紫

：属性：闇

：特徴：吸収

：能力及び説明：斬った相手のエネルギーを吸収出来る。

そのエネルギーで自分のSEを回復できる。

または攻撃エネルギーに変えて撃ち出せる。

：台詞：闇より生まれし全てを喰らう刃【妖刀ムラサメ】!!

ISの深層意識

バトスピの【剣聖姫ツル】の髪の色が赤になっている姿。

・ノリが軽い。

待機状態

日本刀

・普通の刀としても使用できる。

（見た目はバトスピの【姫鶴一文字】）

説明

転生特典として貰ったISの一つ。

【バトルスピリッツ】の【戦国龍ソウルドラゴン】をそのままISにした機体。

ISを装着する際は待機状態の刀を頭上で円を描き身に纏う（元ネタは【牙狼】の鎧召喚）

武装は槍と刀が一本ずつ。

他のISと違い機体が人間と全く同じ動きが出来るので無駄な動きも無く、細かい動きが出来る。

単一仕様能力は【バトルスピリッツ】の【天下五剣】と【妖刀】を呼び出す能力。

ただし、一度に呼び出せるのは一本だけと制限が掛かっている。

後に特殊能力が追加され【バトルスピリッツ】の【系統：剣刃】を造る事が出来る様になった。

ただし、【六道剣】が既にあるので造った【剣刃】は誰かにあげている。

自分の為と言うより他人の為の能力。

特典だけあってチート級の能力を持つが邪念を持つ者が使おうとすると死なないレ

ベルで燃やされる。



専用機名

ドットプラスライザー

世代

第3世代（実際は第5世代）

操縦者

火ノ兄永遠

武装

マルチギミッククサツク×2

・片手銃：ブラストマグナム

必殺ファンクション：クイックスナイプ

・両手銃による高速3連射

・片手剣：ブラストソード

り下ろす

必殺フアंकション：コスモスラッシュ

・エネルギーを集中し巨大な剣を形作り、一気に振

・双剣：デュアルブレード

必殺フアंकション：ライトニングランス

・槍に電撃を纏わせて放つ突き

・楯：プラストガード

特殊機能

ラグナロクフェイズ

・機体の各部装甲を変形・展開した高出力形態

武装

・ヴァリアブルクロー

必殺フアंकション：シャイニング・ラム

・全身が光り輝き一直線に貫く突進技

：オーバー・カタストロフ

・9体に分身しての全方位からの連続攻撃

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力

ドットフェニックス

・ドットブラスライザーの支援機

・ミサイル、レール砲、ビーム砲を装備しており、単体での戦闘も可能。

・ドットブラスライザーと合体しドットブラスライザー・ジーエクストにパワーアップする

ドットブラスライザー・ジーエクスト

・合体後、SEを完全に回復させる

必殺フアंकション：真刀・カムイ

・巨大なレーザーソードで相手を斬り裂く

ISの深層意識

【戦国龍】のコアと同じ姿をしている

・3機のコアは深層意識でリンクしているのでどの機体も同じ姿になっている。

待機状態

軍刀

・普通の軍刀としても使用できる

説明

転生特典として貰ったISその2。

【ダンボール戦機ウオーズ】の【ドットブラ斯拉イザー】をそのままISにした機体。
 こちらは二次移行セカンドソフトはしない。

ISを装着する際は待機状態の軍刀で正面に円を描き身に纏う（【牙狼】の鎧召喚を元
 にしている）

武装は原作と同じ【マルチギミックサクク】

高出力形態【ラグナロクフェイズ】に変形する事で機体の性能は数倍に上がる。

ワンオフ・アビリティ
 単一仕様能力は支援機【ドットフェニックス】を呼び出す能力。

原作と同じように【ドットブラ斯拉イザー】と合体する事で【ドットブラ斯拉イザー・
 ジーエクスト】になる。

SEを消費することで必殺技【真刀・カムイ】を使える。

こちらもチート級の能力を持つが同じように邪念を持つ者が使おうとすると触つた
 だけで弾き飛ばされる。



専用機名

ラインバレル

世代

第3世代（実際は第5世代）

操縦者

火ノ兄永遠

武装

太刀×2

エグゼキューター

圧縮転送フィールド

特殊機能

自己再生能力

・機体の自己修復とSEの自動回復が出来る

転送

・任意の場所に転移出来る

・ただし、転移先に異物があると転移できない

・機体に触れていれば他の人間や物体も転移できる

ワンオフアンビレリティー
単一仕様能力

時間停止

- ・一定範囲内の時間の流れを極端に遅く出来る
- ・完全に時間が止まっていないので攻撃を行えばダメージも通る
- ・能力を解除すればその間のダメージを一気に受ける
- ・これを使用している間は「ラインバレル」の特殊機能は発動しない

ISの深層意識

【戦国龍】のコアと同じ姿をしている

- ・3機のコアは深層意識でリンクしているのでどの機体も同じ姿になっている。

待機状態

太刀

- ・普通の太刀としても使用できる。

(見た目はラインバレルの太刀と同じ物)

説明

転生特典として貰ったISその3。

【鉄のラインバレル】の「ラインバレル」をそのままISにした機体。

こちらも二次移行はしない。
セカンドソフト

ISを装着する際は待機状態の太刀を地面に突き刺し1回転して円を描き身に纏う

(こ)ちらも【牙狼】の鎧召喚を元にしてている)

原作と同じように再生能力を持つているが、こちらは機体だけでなくSEも自動で回復し続ける能力が追加されている。

単一仕様能力は【時間停止】と言う能力だが、完全に止める訳では無くSEを消費し続ける事で周囲の時間の流れを極端に遅く出来る能力。

完全に時間が止まっていけないので攻撃を行えばダメージも通る。

能力を解除すればその間のダメージを一気に受ける(ONE PIECE)の【ノロノロの実】みたいな物)

これを使用している間は【ラインバレル】の特殊機能は発動しない。

こちらもちート級の能力を持つが同じように邪念を持つ者が使おうとすると半径10K圏内のどこかに強制転送される。



専用機名

戦国龍皇

世代

第5世代

操縦者

火ノ兄永遠

武装

槍

十字槍

六道劍りくどうけん

・炎龍刀オニマル⇒炎龍刀オニマル・真打

・風翼刀ドウジキリ

・地神刀オオテンタ

・雷命刀ミカヅキ

・水覇刀ジュズマル

・妖刀ムラサメ

待機状態

日本刀

・普通の刀としても使用できる

(見た目はバトスピの姫鶴一文字)

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力

轟焰

・馬型の支援機

・蹄を鳴らすと自分の左右に炎の壁を作り出し、持っている六道剣を巨大化させる

説明

【戦国龍】が二次移行した姿

【バトルスピリッツ】の【戦国龍皇バーニング・ソウルドラゴン】をそのままISにした

た機体

武装は二本の槍と【戦国龍】の単一仕様の【六道剣】を装備している

【六道剣】は左右の腰に一本ずつと鎧の羽にそれぞれ2本ずつ装備されている

二次移行した事によって【六道剣】の制約が無くなっているが、能力は刀を持たなければ発動出来ないのと同時に使えるのは二つまで

ただし、対象に刀を突き刺す等して手元に無い場合でも発動する能力もあるので、その場合は3本目の能力を使う事が出来る

単一仕様は馬型支援メカ【轟焰】の召喚に代わっており、姿は【午の十二神皇エグゼシード】となっている(呼び出す際は刀で『午』の字を書いて呼ぶ。こちらの元ネタ

機体設定☒

専用機名

ワイバーン・ガイア

世代

第5世代

操縦者

布仏本音

武装

アーム・カノン×2

ウイング・ブレード×2

テール・ブレード

レーザー・ブレス

1 2 連装背部ミサイル×2

つるぎ
剣刃：夢幻の天剣トワイライト・ファンタジア

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力

トライデント・スマッシュャー

・頭部のレーザー・ブレスと両腕のアームカノンでそれぞれ高エネルギーをチャージし一点に収束して撃つ

待機状態

3つの勾玉がついた首飾り

説明

元ネタは「ダンボール戦機ウオーズ」の「ワイバーン・ガイア」をそのままISにした機体

篠ノ之束が「ドットブラスライザー」の中のデータを元に作り上げた第5世代型試作1号機

束が永遠と仲のいい布仏本音を気に入ったのでデータ収集もかねて彼女にあげた布仏本音は本機を「ワイワイ」と呼んでいる

最初に造った事と、原作の「ワイバーン・ガイア」を元にしていただけに従来のISよりも5倍近い大きさになっている

もはやISと言うより怪獣型のロボットにしか見えない

更に従来のISと違い本機を操縦する際はISスーツは手足のみ身に着けていれば動かせるので一々着替える必要が無い

武装は全身に多数装備されている重火器

近接武器として翼の「ウイング・ブレード」と尻尾の「テール・ブレード」が装備されている

遠距離武器は口から放つ高出力レーザー「レーザー・ブレス」と両腕に装備された連射型レーザー砲「アーム・カノン」、背中には12連装のミサイル発射管が左右に搭載されている

更に追加武装として永遠から剣刃つるぎの一つ「夢幻の天剣トワイライト・ファンタジア」を渡されており、この剣は口にくわえて使用する

その巨体のせいで半端じゃない威圧感があるのだが乗っているのが布仏本音の為、迫力は半減している

機体内部はコックピット以外の空間もあり3、4人は軽く入れるので居住性まである初めてのISでもある

機体の中に入り込むという使用上、水中潜行も出来る上に「ウイング・ブレード」を高速回転させる事で地面を掘って地中潜行さえ可能となっている

文字通り陸海空の全てを移動できる規格外の機体

ワンオフ・ファンタジー
単一仕様は頭部と両腕のエネルギーを一つに纏めて放つ「トライデント・スマツ

シャー」

ただし、機体がデカ過ぎる為、試合では使用が禁止されてしまった

新しいISが出るたびに更新していきます。

原作開始前

第000話：プロローグ

〽? Side

? 1

「……………ここは、どこじゃ?」

ワシは気づいたら辺り一面真っ白な場所にいた。確か家で寝ていた筈なんじゃが?

? 2

「ようやく気付いたのね!」

? 1

「へっ?」

声のした方を向くとそこには長い黒髪の女性がこつちを見ていた。

? 1

「お主、何もんじゃ!」

? 2

「初対面の相手に失礼な言い方ね!」

? 1

「ム！それは確かにすまぬ！申し訳ない！」

? 2

「アラ、思ったより素直じゃないの。変わったしやべり方だけどそのままでもいいわよ。」
それはありがたい、敬語で話すのはちと面倒じゃからな。

? 1

「ありがとうございます！えくと、それでここはどこか教えて貰えんかの？それと、お主は誰かの？」

? 2

「ここ？ここはあの世とこの世の狭間よ。私はあまてらすおのみかみ【天照大神】って言うのよ。ヨロシクね

♪それで、貴方の名前は？」

? 1

「これは失礼を、ワシの名はひのえとわ【火ノ兄永遠】と言います。よろしゅう。」

これがワシの名前なんじゃが女つぽい随分変わった名前だと自分でも思つとる。

永遠

「して【天照】じゃと？日本神話の最高神と言われる、あの【天照】かの？」

天照大神

「そうよ。私の事知ってるのね。」

永遠

「そんなに詳しくは知らんがの……ここが、あの世とこの世の狭間？……という事はワシは死んだという事ですかの？」

天照大神

「ぶっちゃけて言えばそうよ♪」

そつかくくく、ワシ死んだのかくくく……

天照大神

「死んだと知った割には能天気な奴ね？」

永遠

「そりゃ、死んだのは残念じゃが何時かは死ぬわけじゃしな、それが今と言うだけじゃろ？」

天照大神

「まあ確かにそうだけど……」

永遠

「それで、ワシはこれからどこに行くのかの？天国か？地獄か？」

天照大神

「残念だけどどちらでもないわ。」

永遠

「……………はっ？」

どっちでも無いとはどういう事じゃ？まさか生き返らせてくれるとでもいうんかの
お？

天照大神

「半分正解よ。」

永遠

「半分？…：ていうか、もしやワシの考えを読んどるのか？」

天照大神

「大正解♪」

永遠

「大正解ではないわ！神様でもプライバシーの侵害じゃぞ！で、半分とはどういう事
じゃ？」

天照大神

「あゝゝそれはね、貴方本当はここで死ぬ人間じゃなかったのよ。」

永遠

「へ？」

どういふ事じゃ？

天照大神

「実はね、私の弟の【須佐之男】が仕事中に……お茶を溢しちやつてね……貴方の人生が書かれた書類をね……ティツシユの代わりにしちやつて……お茶拭いてそのままゴミ箱に……捨てちやつたんだ♪……テヘツ♪」

テヘツ♪て……

永遠

「へ……そ……か……ワシの人生がティツシユにか………神様、お願いがあるんじやが？」

天照大神

「ナ、ナニカナ……」

永遠

「その【須佐之男】と言う神様を殴りたいんじやが構わんかのお？」

ワシの残りの人生を雑巾の代わりにしおつて、幾ら何でも許せん！

天照大神

「ま、待つて！貴方の気持ちも分かるけど、あの子は私と姉の【月詠】の二人で半殺しに

してシバイておいたから！ねっ！」

むう、本当かのお？

天照大神

「本当よ！ならこれ見なさい！」

む！何じゃこのモザイクだらけの肉塊は？これが【須佐^{すさ}之男^の】か？

永遠

「確かに言う通りの様じゃの…ちと、やりすぎな気もするが…自業自得じゃな。」

天照大神

「そういう事よ…で、話を戻すけど。悪いけど貴方は元の世界には戻せないのよ。」

永遠

「では、どうなるんじゃ？」

天照大神

「貴方には別の世界に転生してもらおう！」

永遠

「……………それはよく二次小説に出てくる漫画やアニメの世界に飛ばすというあれか？」

天照大神

「正解♪それで、貴方には【インフィニット・ストラトス】の世界に転生して貰おうと思

うんだけど？この話って知ってる？」

永遠

「まあ、多少は…」

天照大神

「それじゃ今から貴方には特典をあげるわ。今回は特別に3つあげるわよ♪何がいい？」

永遠

「そうじゃのお、まず一つ目は【健康な体】じゃ。病気とかにならん体が欲しい。二つ目は【普通より少し良い頭】にしてくれ。大体、中の上か上の下辺りがいいのお。三つ目は【ある程度自給自足のできる土地】が欲しい。島でも山でもどっちでもいいが近くに小さくてもいいから町があるとありがたいのお。この三つで頼む。」

天照大神

「え？そ、そんなのでいいの？ISの世界だから世界一の力や頭脳が欲しいとか言うと思っただのに。」

永遠

「そんなもんいらん！ワシはひつそりのんびり暮らせればそれでいい。原作になんぞ関わると面倒ごと巻き込まれっぱなしでないか！」

天照大神

「えゝそんな事言わないでさゝ…もしかしたら貴方ハーレムを作れるかもしれないのよ！関わってみようよ〜！」

永遠

「お主それでも神様か！嫌じゃと言つとる！」

天照大神

「そう言わず、今ならI S 関連の特典を2つ追加してもいいから！何なら特典1つでI Sを2つ、いや、今なら3つあげるわよ！今がお買い得よお客さん！もってけドロボー！」

永遠

「何故、通販みたいになつとるんじゃ？…しつこいのお…言わんと転生させてくれんのか？」

天照大神

「ぶっっちゃけその通り♪」

永遠

「仕方ない、ではさつき言った通りI Sは3機貰うぞ！」

天照大神

「うん！いいよ♪それでどんなのが欲しいの？」

永遠

「まずは【バトルスピリッツ】の【戦国龍ソウル・ドラゴン】で頼む。」

天照大神

「【バトルスピリッツ】！またマニアックなのを！カードゲームなら【遊戯王】とかかと思っただのに！」

永遠

「やかましい！全世界のバトスピファンの皆さんに謝れ！【遊戯王】も好きじゃがこっちも好きなんじゃから別にいいじゃろ！…2体目はそうじゃな…【ダンボール戦機】の【ドットプラスライザー】にしてくれ。」

天照大神

「これまた面白いチョイス♪」

永遠

「しつこいぞ！3体目は【鉄のラインバレル】の【ラインバレル】じゃ。」

天照大神

「あら？最後はてつきり王道の【ガンダム】かと思っただけど…意外だわ。」

永遠

「喧嘩売つとんのか己は！」

天照大神

「そんなつもりはないわよ♪」

永遠

「確かに【ガンダム】は好きじゃが別にいいじやろうが！」

天照大神

「ごめんごめん♪それで細かい設定とかある？あるなら今の内にしておくけど？」

永遠

【ドットプラスライザー】は原作のままがいい。ワンオフ・アビリテーター 単一仕様で【ドットフェニックス】を呼べるようにして欲しい。【ラインバレル】の方は自己修復にエネルギーの自動回復を追加してくれ。」

天照大神

「フムフム、OK♪で【ソウル・ドラゴン】は？」

永遠

【二次移行にセカンドソフト【戦国龍皇バーニング・ソウルドラゴン】三次移行をサードソフト【戦国龍神テンカフブ】になるように頼む。ワンオフ・アビリテーター 単一仕様は二次移行は天下五剣と妖刀をえるようにしてくれ。セカンドソフト 二次移行は【午の十二神皇エグゼシード】を呼ぶようにして欲しい。サードソフト 三次移行は【戦国

六武将」を呼べるように頼む。移行したら前の単一仕様ワンオフ・アビリティの武装を標準装備出来るように設定してくれ。後3機の中にそれぞれの機体のデータと原作のキャラクター以外の全データを入れてくれ。：以上じゃ！」

天照大神

「最後のは随分細かいわね。まあ大丈夫よ。……はい、全部終わったわよ。」

永遠

「で、特典はあと一つか？」

天照大神

「ええそうよ。でもISに何かしら関わる物だけだね。何がいい？」

永遠

「では「るろうに剣心」の「飛天御剣流」を覚えられる様にしてくれ。それは制限に引っかけるかのお？」

天照大神

「いいえ、戦う為に使えるから大丈夫よ。だけど覚えられるって？」

永遠

「初めから使える様にしないで欲しいという意味じゃ。秘伝書か何かを残すみたいにして欲しいんじゃないよ。」

天照大神

「君ってホント変わってるわね！そういうのは大概努力も何もしないで使える様にして欲しいって頼むのに。」

永遠

「別に努力が好きという訳ではないがの。ただ、何もしないでそういった物は欲しくないといいだけじゃよ。」

天照大神

「フーン、ま、分かったわ。…さて、これで準備は全部終わったわ。それとISは【白騎士事件】が起こったらあなたに届くようにしておくわね。」

永遠

「ああ、それで構わん。どうせ、使わんじやろうしな。」

天照大神

「いやいや、せっかく用意したんだから使ってよ！」

永遠

「まあ置物ぐらいにはなるじやろ。」

天照大神

「だ〜か〜ら〜…」

永遠

「ほれ、準備が出来たんじやろ。はよ、送ってくれ。」

天照大神

「あーもーもー分かったわよ！じゃいくわよ！ポチツとな。」

随分古いネタじやの〜ん？…ワシの足元の床が消えて大きな穴になりおった！…
という事は…

永遠

「…ぎゃあああああああー…！！」

こうしてワシは「インフィニット・ストラトス」の世界に飛ばされてしまったんじや。

………

………

………

天照大神

「…ハア〜ホント変な子。でも、面白い子ではあったわね。関わりたくないと言っただけ
どそうはいかないからね♪…それと、おまけを一つ追加しておくからね♪………さて彼
がどんな物語を紡いでいくのか楽しみだわ！」

〜永遠 Side out〜

第001話：壊れ始める日常

く永遠 Side

皆さんこんにちは！この度「インフィニット・ストラトス」の世界に転生した火ノ兄永遠じゃ。

今、ワシは先祖代々受け継がれているという小さな小島【火紋島^{かもんとう}】で一人で自給自足の生活をしてる。

何でワシがそんな所で暮らしているかと言うとじゃな。

転生したワシは赤ん坊から人生をやり直したんじゃがワシが5才の時に両親が事故で亡くなってしまったんじゃ。

ワシにはとても優しい良い両親だったんじゃが生憎とワシには父と母以外に身内と呼べる者がおらんくてな。

そしたらうちの先祖が昔から管理しているという島があるということが分かって、そこで暮らすことにしたんじゃよ。

まあ、この火紋島はあの神様がくれた特典の一つなんじゃが、この島、実は色々便利な物が沢山あるんじゃよ。

島の中央には温泉！そこそこ大きな家！自生している果物！川や海には簡単に捕れる沢山の魚！と、至れり尽くせりなんじゃよ。

神様め！ある程度と言っておいたというのに、更に今住んどる家も中には野菜の種や米の苗、農業系やその他の大量の本がぎっしり置いてあったんじゃ。

そしてワシがこの島に移り住んだ時には既に「白騎士事件」は起きた後だったから家の中に神様が用意した3体のI Sが置いてあったんじゃよ。

まあワシはこの世界のゴタゴタには関わるつもりが無いから、このI S達には悪いがひっそりと暮らさせてもらうつもりじゃが、自我があるというからたまの話し相手にもなつて貰つておる。

ワシは火紋島で暮らし始めてまず行ったのは畑作りからじゃった。

毎日鋤を振つて小さな畑を作った後、家にあつた野菜の種の中からまずはトマトの種を植えてみた。

それから、参考書を見ながら毎日本水を撒いて、雑草を抜き、畑を広げていく生活をしていた。

時間が余った時は家の中で見つけたもう一つの特典「飛天御剣流」の秘伝書を読んで劍の鍛錬に勤しんでいたんじゃ。

それから時が経ち、初めて植えたトマトを収穫し早速食べたがお世辞にも店に置いて

ある物に比べてうまいとは言えん物じやったが、それでもとうまいものじやった。その間に、他の野菜も植えて少しずつ畑を大きくしながら田んぼ作りにも挑戦したがこっちは畑以上に苦労した。

田畑を耕して、釣りをして、島の動物達と遊び、剣の鍛錬をしながらの毎日はとても楽しい日々じやった。

ワシがこの火紋島で暮らし始めて9年の月日が流れたある日、ワシがいつもの様に畑を耕している時じやった。

ズドオオオオオオオオオオオー………!!

ワシの日常が壊れる時が来てしまった。

く永遠 Side out く

第002話：兔襲来!

〔東 Side〕

ハロハロ! 私は天災科学者の篠ノ之東さんだよ♪

東さんは今、助手のクーちゃんとマイロケットで絶賛飛行中なんだ!...けどね...

東

「あ、あれ?」

クロエ

「東様! ロケットのコントロールが突然効かなく...」

東

「分かってるよ! 一体なんで?」

そう、いきなりロケットがコントロール不能の状態になっちゃったんだよ!

東さんお手製のロケットに異常が起きるなんて信じられない!

クロエ

「た、東様! ダメです、墜落します!」

東

「クーちゃん！衝撃に備えて！」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ………!!

東&クロエ

「キヤアアアアアアアアアアアアアア………!!!」

〜東 Side out〜

〜永遠 Side〜

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ………!!

永遠

「な、何じやあああああーっ」

島に何か落ちてきおったぞ………向こうは西の海岸じやな、とりあえず行ってみるか！

………

………

………

永遠

「何じやこれはっ？」

墜落地点についていたワシが最初に見たのは巨大な人参じやった。

永遠

「人参? いや、人参型の乗り物かのお? ……ん?」

ワシが人参に近づくと中から二人の女性が出てきおった!

二人とも気を失っておるが大きなケガはしておらんようで安心したが、それでも少なからずケガをしておった

永遠

「…」のまま放つとく訳にもいかんか…」

ワシは一先ず二人を自分の家に連れて行く事にした。

永遠 Side out

東 Side

東

「う、う……ん……あれ?」

目を覚ました私の目に映ったのは見た事もない天井だった。

確か私は墜落するロケットの中にいたはずなのに。

東

「ハッ! クーちゃん!」

そうだ！クーちゃんはどこ！どこにいるの！

東

「クー……あつ、クーちゃん……」

クーちゃんは私の隣で眠っていた。

私は安堵すると同時にクーちゃんが手当てされているのに気付いた。

よく見ると私もそうだった。

東

「……は、ど……?」

ガラッ

東

「誰だ!」

突然、扉が空いたからそつちを見るとお盆を持った男の子が入って来た。

永遠

「お！目を覚ましたようじゃの！……もう一人はまだみたいじゃな?」

東

「誰、お前?」

永遠

「お前とは失礼じゃな…お主達のケガの手当てをした者じゃよ。」

東

「……………」グ~~~~ツ「あっ!」／／／

永遠

「カカカツ!…ほれ、粥と茶じゃ。あまりうまくないかもしれないが腹に何か入れておく
とよいぞ。」

東

「あ、ありがとう…」

差し出されたお粥を食べながら私は目の前の子供の事を考えていた。

東

「……ちそう様……」

永遠

「ウム!お粗末様じゃ。」

変わった子だな?しゃべり方も何かジジ臭いし、一体何者なんだろう?

永遠

「ワシの名前は火ノ兄永遠という、お主の名は?」

東

「?…ねえ、私の事知らないの?自分で言うのもなんだけど世界でもかなりの有名な人だけだよ?」

幾ら子供とはいえ私の事を知らない人間がいるなんて…

永遠

「そうなのか?すまんがワシはこの島で9年間一人で暮らしておつてな。テレビもラジオも無いからそういう事には疎いんじゃないよ。」

東

「え?」

今この子は何て言った?

ここで9年間一人で暮らしている?

東

「ねえ、今一人で暮らしてるって君、家族は?…それに、ここはどこなの?」

永遠

「ここか?ここは火紋島と言ってな、ワシの先祖が代々所有しておる島じゃよ。ワシの家族は5つの時に事故で亡くなってしまつてな、他に親戚もおらんからそれ以来ここで暮らしとるんじゃないよ。」

東

「5つって！5才で島で一人で生きてきたの！」

永遠

「そうじゃよ。それでスマンが名を教えてくださいんかのお？」

東

「えっ！あ、そうだったね。私は篠ノ之東！天災科学者の篠ノ之東さんだよ！ブイブイ！」

永遠

「篠ノ之東？…もしやISを作ったというあの篠ノ之東博士かのお？」

東

「およ！東さんの名前は知ってたんだね！」

「なんだ、知らなかったのは顔だけなんだ…」

永遠

「まあ名前くらいしか知らんがな…それで、なんでその天災が人參に乗って島の海岸に突き刺さったんじゃ？」

東

「…それが良く分からないんだよ。いきなりロケットのコントロールが効かなくなつて、そのままこの島に墜落したみたいなんだ。」

ほんと、訳が分からないよ！

あ、そうだ！

東

「ところでさ、君は私達をどうするの？」

永遠

「？……どうとは？」

東

「警察にでも突き出すのかって聞いているんだよ？」

永遠

「………は？なんで？」

東

「なんでって東さんの名前を知ってるなら私達が世界中から追われているのは知ってるでしよー！」

永遠

「……ああ、そういうことか！」

もしかして気づいてなかった？だとしたらミスったかも……

永遠

「心配せんでもそげな事はせんぞい。そのつもりならわざわざ家まで運んで手当なんぞせんわい! 違うかのお?」

言われてみればそうだ…でも…

束

「じゃあ何が目的なの?」

他に理由がある筈だと思っていたのに…

永遠

「目的なんぞ無いわい! ただ目の前でケガをしていたから助けた。それだけじゃよ!」

束

「え!? それだけ?」

永遠

「それだけじゃよ。…いや、他にあるとしたら…」

やっぱり! 何か目的があるんだ!

永遠

「少し話し相手になって欲しかったくらいかのお。」

束

「ハア? 話って…」

この子何言つてんの？

永遠

「さつきも言うたがワシはここで一人で暮らしとる。まあ偶に近くの港町に行く時はその人達とよく話をするんじやがな。この島で気軽に話をしたことは無いんじやよ。」

東

「そうなんだ。」

永遠

「まあすぐに出て行くというなら止めはせんが、お主らのロケットは動くのかのお？」

東

「……………あ！」

「そうだった！急いで修理しないと！」

東

「忘れてた！ねえ、東さんのロケットはどこにあるの？」

永遠

「墜落した海岸にそのままじゃ。…動けるなら案内するが？」

東

「このくらいどうって事ないよ！案内して！」

永遠

「分かった。ついてきんさい。」

私はそのまま彼について行った。

けど、残したクーちゃんがこの家で見つけたトンでもない物と、彼の正体を聞いた時は本当に驚いた!

そして、彼が私の夢を一気に近づけてくれるなんて思いもよらなかった。

く東 Side out く

第003話：兔悩む

（永遠 Side）

ワシは今、博士とロケットのある海岸に向かつておるんじやが、今までの話からロケットに異常が起きたのは、もしやあの神様の仕業ではないかと考えているところじや
ワシはこの世界の出来事に関わりたくないとはつきり言うたからな、無理矢理関わらせる為に博士のロケットを落としたのかもしれないのお

ま、大丈夫じやろ！確かこの博士、妹と友人の姉弟以外の人間は道端の石ころ程度にしか考えんらしいからな、ロケットを直したらさっさと出て行くじやろ

この島にはあの博士が興味を持つような物は無いしの
ワシも久しぶりに人と話が出来たしな

永遠

「おー！見えてきたぞー！」

しかし…何か忘れてる気がするのお？

（永遠 Side out）

く東 Sideく

私は前を歩く少年についていきながら彼、永遠と名乗った子の事を考えていた
たった一人で5歳の頃から自給自足でこの島で暮らしていると言われた時は、さすが
に信じられなかった

でも、家の周りにあつた畑や田んぼを見ると彼が言ってることは嘘ではないというの
が分かった

だからこそ彼の事が気になった！私が箒ちゃん達以外に興味を持つ人間がいるなん
て思わなかったよ

そんな事を考えていると

永遠「お！見えてきたぞ！」

目的の場所についての間にか着いていた

………

………

………

私は早速ロケットの機体とシステムの確認を始めた

機体の方は墜落による破損が運よく少なかったお陰で飛ばうと思えばすぐに飛べる
状態だった

でも、システムの方は酷い状態だった

墜落による影響かロケットのプログラムの殆どが壊れてしまっていた

これじゃ幾ら天災の私でも一からプログラムを作り直さないとこのロケットは使うことが出来ない

永遠

「どんな感じじゃ?」

東

「うん、機体は損傷が少ないからすぐに直せるよ。…でも、システムが殆ど壊れちゃってる…」

永遠

「そうか…して、システムの復旧にはどのくらいかかりそうかの?」

東

「ここまで壊れてると一から作り直した方が早いね。…作るにしても1週間はかかるかな?」

永遠

「フム、1週間か…その間どうするんじや?」

東

「ハア〜どうしょ?」

ホントにどうしょ…一番いいのはこの子の家に泊めて貰うのがいいかもしれないけど自分から頼むのは東さんのプライドが……

永遠

「ならその間うちに泊まるか?」

東

「え!?!…いいの?」

向こうから提案してくれた

永遠

「別に構わんぞ。さっきも言ったが話し相手が欲しかったからの。飯と寝床位なら用意するぞ。」

東

「……………ホントにいいの?」

永遠

「いいぞ。」

東

「……………ホントのホントに?」

永遠

「いいと言つとる。」

東

「…ホントのホントのホントに？」

永遠

「お主しつこいぞ！嫌ならその辺で野宿しとれ！」

東

「ごめんなさいごめんなさい！泊めてください！お願いします！」

いくら何でも野宿は嫌だ！

永遠

「全く素直にそう言えばよかろう…」

東

「あう、ごめんなさい…」

永遠

「じゃがこの人參はどうするんじゃ？」

東

「あ、それは大丈夫！粒子変換して拡張領域パススロットにしまえるから君の家まで持っていけるよ

！」

永遠

「それは良かった！さすがに地元の漁師さんに見つかりと面倒じゃからな。」

東

「アハハハツそうだね…」

私は笑いながらロケットを拡張領域バズスロットにしまった

永遠

「さて、ここにはもう用がないなら帰るかのお。もう一人もそろそろ目を覚ましておる頃じゃろうしな。」

東

「うん、そうだね。」

私は彼の家に戻った

そして家が見えてくると家の前にクーちゃんが立っていた

私達に気づいたクーちゃんは、酷く狼狽えた表情をしながら近づいてきた

クロエ

「た、東様!?!ご無事ですか!?!」

東

「大丈夫だよ。クーちゃんも大丈夫だった？」

クーちゃんが目を覚ましてるのに安堵していると次の彼女の言葉で私の思考は停止してしまった

クロエ

「私のことより東様！ここはどこですか？あの家に見た事もないISが3機あるんですよ！」

東

「……………え？」

永遠

「……………あ！」

ISが3機ある？どういうこと？

く東 Side out く

第004話：発覚

くクロエ Side

皆さんこんばんは！私は篠ノ之束様の助手を勤めるクロエ・クロニクルといます。束様と乗ったロケットが突然墜落し、目を覚ますと見知らぬ部屋に寝かされています。た。

私の体に包帯等が巻いてあることから誰かが助けて手当してくれました。隣にもう一つ布団があることからこっちに束様が寝ていたのでしょう。

しかし、肝心の束様がいまませんね？他の部屋にいるんでしょうか？それに助けてくれた人にお礼も言わないといけませんね。

私は起き上がって家中の部屋を探し回りました。

クロエ

「後はこの部屋くらいでしょうか？……、これは？」

そして一番奥の部屋の戸を開けるとそこには信じられないものがありました。

クロエ

「ア、IS?…何でここに?…しかも3機も?」

そう、その部屋にあったのは3機のISでした！

私は今まで東様の研究のお手伝いをしてきたので色々なISを見てきました。

ですが、こんな機体は見たことがありませんでした。

クロエ

「これは一体？……ハッ！東様！」

そうです！今は東様の安否を確認しなければ！

あんな物がある家に長居するのは危険過ぎます。

しかし、家中を探しましたが誰もいないということは東様は外にいるということですね。

私はすぐに家を出て周囲を探していると、東様がこちらに歩いて来ているのを見つけました。

ただ、東様の隣に見知らぬ少年がいました。

私は彼の姿を見た途端先程のIS達が頭に浮かび東様の元に駆け出していました！

クロエ

「た、東様?!?!無事ですか?!」

東

「大丈夫だよ。クーちゃんも大丈夫だった？」

東様が無事でよかったです！…ですが…

クロエ

「私のことより東様！ここはどこですか？あの家に見た事もないISが3機あるんですよ！」

東

「……………え？」

永遠

「……………あ！」

東様と少年が揃って驚いていた。

東様はただ知らなかった見たいな表情ですが、少年のこの表情は何でしょうか？

まるで忘れていた物を思い出したかのような、そんな表情をしていますね。

くクロエ Side outく

く永遠 Sideく

いかん！すっかり忘れとった！そういえばうちにはこの博士が興味を持つ物があつたんじやったー！！

まずい、あれの事を聞かれたらどうしたらいいんじや！と言うか、絶対聞いてくる！

なんて説明すればいいんじゃない！

東

「…ねえ？」

永遠

「!?…ナ、何カノオ？」

東

「詳しく聞かせてくれるよね？（ニコツ）」

永遠

「…ハイッ……………」

腹を括るしかないのお…

く永遠 Side outく

く東 Sideく

東

「まずは、クーちゃんが見つけたって言うISを見せて。」

私はとにかくその3機のISが気になった。

永遠

「…分かった…こっちじゃ…」

ISのある場所に向かっている途中クーちゃんが話しかけてきた。

クロエ

「あの、東様、この人は一体？」

東

「東さん達を助けてくれた子だよ。変わってるけど悪い子じゃない…と、思うんだけどね…」

さっきまではそう思ってたんだけどISを持つてるなんて知ったらなく…

クロエ

「そうだったんですか！あ、あの…」

永遠

「ん？」

クロエ

「お礼を言うのが遅くなっちゃいました！私はクロエ・クロニクルと言います。先程は助けて頂いてありがとうございます！」

永遠

「これはご親切に、ワシは火ノ兄永遠と言う。以後お見知りおきを。」

クロエ

「よろしくお願ひします。」

永遠

「よろしゅうな……ほれ、ココじゃ……」

二人が話してる間に目的の部屋についていた。

東

「……………な、何これ!？」

部屋に入った私の第一声がそれだった。

中に入ったのは3機のIS、全てが全身装甲^{フルスキン}、しかも軽く見ただけでも私より遥かに

高度な技術で造られてるのが分かる機体達だった。

フツツこの東さんが思わず嫉妬してしまう程の完成度だよ。

3機のISの中でも特に目を引いたのは中央にあるIS、戦国武将のような赤い鎧を着た龍のIS、その存在感は動かしてもいないのに私でさえ怯んでしまう程の威圧感を醸し出していた。

クロエ

「…あの、東様、このISは何なんでしょう?」

東

「…クーちゃん、詳しくは調べてみないと分からないけど、これだけは言えるよ。…束さんでもこのISを造る事は出来ない!」

クロエ

「た、束様でも!?!」

本当に何なのさ!このIS!?

束

「聞かせて貰うよ?このISの事!そして君自身の事!」

永遠

「……………ハア、分かった…」

フツツさつきまでとは違う意味で今はこの子に興味津々だよ♪

束 Side out

第005話：暴露

（東 Side）

あれから私達はI Sのあった部屋から居間に移動していた

彼は私とクーちゃんにお茶を出して、自分の分のお茶を一気に飲み干すと大きな溜息をついた

永遠

「ハア、さてどこから話したらいいかのおく…」

東

「I Sも気になるけど、とりあえず君の正体から頼むよ。」

永遠

「分かった…まず先に言うところがワシが今から言う事は本当じゃ。信じるかどうかはお主に任せる。良いかの？」

東

「うん！分かった。」

クロエ

腹筋割れるかと思つたよ

永遠

「ムウ…話を続けてよいかの？」

東

「ああ、うん大丈夫。でもそれならあのI Sの事も納得できるね。というかこの世界で東さん以上のI Sを造るなんて神様にしか出来ないからね。」

クロエ

「確かにそうですね。」

永遠

「ワシが言うのもなんじやが信じてくれるのか？こんな突拍子もない話を？」

東

「うん！信じるよ！あのI Sが何よりの証拠になるしね！」

クロエ

「その通りです。」

永遠

「そ、そうか…まさか信じるとは思わなかったのお。」

東

「それでさ、それでさく、東さんはとーくんにお願いがあるんだけど？」

永遠

「と、とーくん!？」

東

「そ！永遠だからとーくん！これから東さんは君の事をそう呼ぶよ！」

とーくんの話を聞いてすっかり彼の事を気に入っちゃったよ

永遠

「まあ、そう呼びたいなら別に構わんが、お願いとは何じゃ？」

東

「それはモチロン！あの3機のISを詳しく調べさせて欲しいんだよ！」

グフツツ神様の造ったISなんて興味がそそられる代物だよ（ジユルリ）

クロエ

「東様！ヨダレ、ヨダレ。」

東

「おっと、失礼。それでいいかな？」

永遠

「ダメと言つてもコツソリやりそうじゃしな、まあ壊さんかったら構わんぞ。」

東

「壊さないよ！」

永遠

「スマン、念の為じや。あれらは使わんとは言つてもたまの話し相手の一つじやったからな。少し心配になつたんじや。」

え！話つてもしかして！

クロエ

「話し相手ですか？」

永遠

「I Sのコアには人格があると聞いたのでな、会話は出来んが暇潰しにはなつてたんじやよ。」

やっぱり知つてたんだ！

東

「……………とーくんつて、ホントに変わつてるね。コアに人格がある事は結構知れ渡つてるけど、そんな風に話しかけてる人間なんて聞いた事無いよ。」

永遠

「そうかの？…まあずっと一人じやったからな…それが理由かの？」

それでも嬉しいな♪

東

「…とーくん、ありがとう！」

永遠

「何じゃ、突然？」

東

「あの子達の話し相手になってくれて。皆の母親としてホントにありがとう！」

永遠

「カカツ、気にせんでいい。それよりI Sを調べるんじやなかったか？」

東

「あつ！そうだった、クーちゃん手伝って！」

クロエ

「はい！」

私は早速クーちゃんとI Sの調査を始めた

〈東 Side out〉

第006話：調査報告

く東 Side)

私は今とーくんの許可を貰ってこの3つのISを調べてるんだ

その結果、この3機のISについて幾つか分かった事がある

まずは名前、赤い龍のISは「戦国龍」、白いISは「ドットプラスライザー」、白い鬼のISは「ラインバレル」って言うんだって

次に、3機とも、一次移行の状態ファーストシフトで既に単一仕様ワンオフ・アビリティが使えると言う事が分かった

さらに「ドットプラスライザー」と「ラインバレル」は二次移行が出来ないけど単一仕様ワンオフ・アビリティとは違う特殊機能が搭載されていたんだ！

「ドットプラスライザー」は『ラグナロクフェイズ』っていう強化形態、機体性能を何倍にも跳ね上げるんだ！

しかも単一仕様ワンオフ・アビリティは『ドットフェニックス』っていう支援メカなんだけど、単体でも高い戦闘力を持つてるのに合体して更にパワーアップさせる事ができるんだよ！

「ラインバレル」は本当に驚いた！

ISには自己修復能力があるけど、破損が酷いと治るのに何日もかかる！

でも、この機体の修復速度は通常のISとは比べ物にならない！

これは修復じゃなくて再生だよ！

だからこのISは戦闘中でもどれだけ酷い状態でもアツと言う間に元に戻っちゃうんだよ！

しかも、同時にSEまで自動で回復し続けるトンでもない代物だったんだよ！

その上【ラインバレル】にはもう一つ能力があるんだよ！

【転送】って言う能力…いわゆるワープが出来るんだよ！

しかも【圧縮転送フィールド】って言うのを作り出して任意の空間を別の場所に転送できるんだよ！

こんなの喰らったら絶対防衛なんて何の役にも立たないよ！

最後に【戦国龍】このISが一番凄いや！

他の2機とは違って特殊機能は無いけど性能は一番高い上に単一ワンオフ・アビリティ仕様が凄すぎる

！

【六道剣】っていう6本の刀を呼び出すんだけど、それぞれが異なる能力を持つ強力な刀なんだよ！

唯一の欠点として一度に使えるのは1本だけって制限が掛かってるんだけどね！

色々調べた私とクーちゃんの出した結論は

クロエ

「…何というか…凄い…としか言いようが無いですね。」

東

「ホントだよ。しかも、凄いの意味が3機とも違うんだもん。」

クロエ

「全くです！」

と、まあ、凄い！の一言しか出なかったんだよ

東

「フウ、一度とーくんの所に戻ろっか？」

クロエ

「はい。」

一通り調べ終えた私とクーちゃんはとーくんのいる居間に戻る事にした

く東 Side outく

く永遠 Sideく

東

「ただいま〜！」

永遠

「お！戻ったか。ちょうど晩飯の用意が出来たところじゃ。」

東

「ホント！わくわくお腹ペコペコだよ〜！」

クロエ

「本当ですね！」

本当に腹がへつとる様じゃな

永遠

「ほれ、魚の煮付けと刺身、野菜のサラダじゃ。…大した物では無いが食ってくれ。」

東

「ううん、十分美味しそうだよ！ね、クーちゃん？」

クロエ

「はい、美味しそうです！」

そう言ってくれるとありがたいのお

永遠

「では、いただきます！」

東&クロエ

「いただきま〜す！」

……

…

一応、調査内容を聞いてみるかの

永遠

「のお博士、調査の方はどんな感じじゃ？」

東

「うん、一通りは終わったよ。あれってホントに凄いな！その言葉しか出てこないよ。」

永遠

「博士にそこまで言わせるとは、それ程の物じゃったか…」

東

「そうだよ！後、と〜くん！」

永遠

「何かの、博士？」

東

「私の事は東って呼んで♪」

永遠

「えーいや、しかし…」

東

「東さんはそう呼んで欲しいんだ♪」

名前と呼べ、か、じゃがその前にあの事を話しておくべきじゃの

ワシは持っていた茶碗を置くと姿勢を正した

東

「どしたのとーくん？」

永遠

「篠ノ之博士、クロエさん、名前を呼ぶ前にどうしても言っておかねばならん事がある。」

東&クロエ

「？」

永遠

「二人の乗ったロケットが墜落した原因はワシかもしれない！」

クロエ

「!?…ど、どうしてですか？」

永遠

「…ワシは転生する時、この世界ではひっそり暮らしたいと神様に言ったんじゃ。…」

じゃが神様はワシにこの世界で起こる出来事に関わって欲しそうにしておった。…そこで神様はワシに関わるつもりがないなら無理矢理関わらせようと考え、二人のロケットをこの島に落としたのかもしれないのじゃ。」

クロエ

「……………」

永遠

「もし、そうだとしたら、二人には本当に申し訳ない事をした。じゃからワシには博士の名を呼ぶ資格は…」

東

「…とーくん…そんな事気にしなくていいよ♪」

永遠

「しかし…」

東

「ていうか、そんな事分かってたよ。」

永遠&クロエ

「え!?!」

東

「確かに最初は分からなかったよ。でも、とーくんの正体を聞いた時、ロケット落としたその神様なんじゃないかなあって思ったんだよ。」

永遠

「分かった上で名を呼べと？」

まさか気づいておっただとは

東

「そうだよ。そもそもロケットを落としたのはとーくんじゃないでしょ。それに、そのお陰でとーくんに会えたし、あのIS達を知る事が出来たんだもん。東さん的には感謝感激なんだよ！だからとーくんが責任を感じる必要なんて無いんだよ。」

永遠

「篠ノ之博士……」

東

「東だよ♪」

永遠

「…わかった、東さん！これで良いかの？」

東

「うん♪よろしい。」

クロエ

「では私の事もクロエと呼んでください。」

永遠

「?…クロエさんは名前で呼んどるが？」

クロエ

「さん付けを止めてください。」

永遠

「そう言う事か。…じゃあ、これからはクロエで。」

クロエ

「はい♪」

永遠

「改めて、東さん、クロエ、ありがとう！」

東

「うん♪」

クロエ

「はい♪」

この二人には敵わんのお…

〈
永遠
S
i
d
e
o
u
t
〉

第007話：温泉兔

（東 Side）

とーくんと一悶着起きたけど無事に落ち着いて良かった

そういえば東さん達食事中だったね！残りを食べちやおう

……

……

……

永遠&東&クロエ

「ごちそう様。」

東

「あゝ美味しかった！」

永遠

「それはありがたいのお…時に二人とも、着替えを持つとるか？」

東

「え？…うん、あるけど？」

とーくん、東さん達に何を？…もしかして食後のデザートに東さん達を…／／／

「何か変な妄想しとらんか？温泉に案内しようと思ったんじやが…」

東

「エッ！ア、アハハハッ！ナ、何ノ事カナ？」

「やばい、バレてる……………ん、今何て言ったの？」

東

「…とーくん、今温泉って…」

クロエ

「あるんですか？」

永遠

「あるぞ。この島の中心にの。」

東

「ホントに！温泉何て久しぶりだよ！」

クロエ

「本当ですね。」

永遠

「で、入るのか？入らんのか？」

東&クロエ

「入ります！」

うわ〜楽しみ〜

永遠

「んじゃ、着替えを持ってついてき。」

東&クロエ

「は〜い！」

………

………

………

と〜くんに案内されて森の中を抜けると、その先には大きな温泉が湧いてたんだよ

東

「うわ〜温泉だ！温泉！」

クロエ

「東様！落ち着いて下さい！」

東

「あーごめん、ついハシャいじやって。」

永遠

「ワシは戻つとるから二人はゆつくり浸かつときんさい。…ただし一つ注意しとくぞ。」

東

「ん？なに？」

「この温泉何か曰くがあるのかな？」

永遠

「この温泉は島の動物達も入りに来るから間違つても動物達に攻撃なんぞせんでくれよ

！」

クロエ

「動物も来るんですか!？」

永遠

「来るぞ。猿や狐、狸に狼や熊がな。」

え？猿や狐はともかく熊や狼！

東

「ちよ、ちよつととーくん！、幾らなんでも熊や狼つて！」

永遠

「心配せんでもこの島の動物達はみんな大人しゆうてな。特にこの温泉ではみんな借りてきた猫のように大人しくなるんじや。：ほれ、そこ見てみ。」

東&クロエ

「え？」

とーくんの言った方を見るとそこには大きな熊と狸が仲良く温泉に浸かっている所だったんだよ

クロエ

「…本当に大人しいですね。」

永遠

「まあ、見ての通りじや。あやつらも此処では間違つても暴れんから安心して入りんさい。」

東

「う、うん。」

とーくんはそう言って家に戻っていった

私とクーちゃんは怖いけどとりあえず温泉に入ることにした

………

………

：

東

「あ~~~~、極楽♪極楽♪」

クロエ

「東様、親父臭いですよ?」

温泉に入つて数分、最初の恐怖心はアツと言う間に消えうせて温泉を堪能していたんだ!

クロエ

「……………東様…これからどうするんですか?」

温泉を満喫しているとクーちゃんが今後の事を聞いてきた

東

「…さつきも言ったけどロケットのプログラムは今壊れてる。だから、新しく作り直さないと使えないんだよ。」

クロエ

「それは分かっています。私が聞きたいのはその後です。」

その後か、どうしよつかなく?

東

「分かってるよ。東さんもね、最初はロケット直したらさつきとこの島から出ようって考えてたんだ：でも、とーくんやあのISと出会ったせいで今、凄く迷ってるんだよ：」
とーくんのISは凄く気になるしもっと詳しく調べたい！

東

「でもあれは東さんでも作り出せないオーバーテクノロジーの塊。出来る事なら、あんなISを作ってみたいけどね。」

クロエ

「もっと細かい調査は出来ないんですか？」

東

「無理だね！これ以上となるとそれこそ細かくバラさないといけない。バラしたけど元に戻せないなんて事になったらさすがにシャレにならないからね。」

クロエ

「そうですね…」

東

「せめて、あの3機の設計図かなにかがあればいいんだけどね：そんな物さつき調べた時には見つからなかったからなく。」

クロエ

「……………そういえば東様、永遠さんにはそのこと聞いたんですか？」

東

「ううん。聞いてないよ。」

とーくん、ISを使えるみたいだけどあんまり興味がなさそうだもんね〜

クロエ

「一応、聞いてみたらどうですか？もしかしたら何か知ってるかもしれないかもしれませんし。」

う〜ん、何も知らないと思うけど…一応ね

東

「そうだね！この後聞いてみよっか！」

クロエ

「はいー！」

それからしばらく私達は温泉でゆっくりした後、着替えてとーくんの家に帰ったんだ

〜東 Side out〜

第008話：兔のお願い

〜東 Side〜

東

「ただいま〜！いいお湯だったよ！」

永遠

「おかえり。それは良かったのお。」

じゃ、早速聞いてみますか！

東

「ね〜ね〜とーくん？」

永遠

「ん？何じゃ？」

東

「あのI Sの設計図みたいな物って持ってる？」

永遠

「持っとらんど。」

あ、やっぱり

そう思ったら…

永遠

「…と言うか東さん達、さつきISSを調べとったんじやる？気づかんかったんか？」

東&クロエ

「え？」

何のこと？

永遠

「昼間説明したがあの3機はワシが生前おった世界のアニメやゲームに出てくるロボットを元にしとる。まあ【戦国龍】はロボットではないが、それは置いとくとして…ワシが仕様からあの3機を貰う時に、機体の設計データと元になった作品の全データを入れておく様に頼んだんじやが…気づかんかったか？」

東&クロエ

「ええええええええええええええええええええええええ…っ!!」

え！何それ？そんなデータあったの？

この東さんが見落としたっていうの!?

東

「と、とーくん！そのデータ見せて貰っていい！」

クロエ

「お願いします！土下座でも何でもしますから見せて下さい！」

束

「そ、そうだね！まずは誠意を見せないと！」

よし！早速☆DO☆GE☆ZA☆タゼ！

永遠

「落ち着かんかいアホ共!？」

ゴンツゴンツ

束

「アウチツ！」

いったあぁー！箒ちゃんとかーちゃんにしか殴られたこと無いのに！

クロエ

「ううっ痛いです…」

永遠

「トチ狂ったお主らが悪い！土下座なんぞせんでも見たかったら見ればよかるお。」

束

「ホント！」

永遠

「ただ…何処にあるかまではワシも知らんぞ。」

東

「それでもある事は確かなんだよね！」

永遠

「あの神様がワシの注文通りにデータをに入れておればな。」

東

「それだけ分かれば十分だよ！後は自分で探すから！ね！クーちゃん！」

クロエ

「はい！」

それでは早速……………

永遠

「ちよい待ち！今日はもう遅い、データ探しは明日からにしんしやい。」

東

「えくくく！でも、東さんは早く探したいんだよ！」

永遠

「お主ら朝から色々あつて疲れたじやろ。気持ちには分かるが今日は一晩グツスリ寝て疲れを取つてからやりんさい。」

クロエ

「…確かに永遠さんの言う通りですね。束様、今夜はゆつくり休みましょう。」

束

「う〜〜〜！分かつたよお…」

永遠

「よろしい！部屋と布団は昼にお主らが使つとつたのを使うといい。」

クロエ

「はい。…あの永遠さんは？」

永遠

「ワシは座布団の枕とドテラの掛布団で十分じや。」

束

「え！でもそれじや…」

永遠

「カカカツ！女子を床で寝かすわけにはいかんからな。」

クロエ

「ですが…」

永遠

「ワシはもう寝かせて貰うぞ。明日も朝から畑の手入れをせねばならんからな。おやすみ。」

束&クロエ

「あ…」

とーくん、私達が何か言う前にさっさと寝ちやつた

クロエ

「…束様、せっかくのご厚意ですから使わせてもらいましょう。」

束

「…うん…」

私とクーちゃんも寝る事にした

く束 Side outく

くクロエ Sideく

私は布団に入って今日起きた事を思い返していました

密度の濃い驚きの連続でした

クロエ

「……………東様……」

東

「何、クーちゃん？」

私は隣の東様に話しかけていました

クロエ

「……永遠さん……なんであんなに優しいんでしょう？」

東

「そうだね……いきなりやってきた見ず知らずの私達を、手当してくれた……ご飯を食べさせてくれた……温泉に入れてくれた……布団を貸してくれた。正直、こんなにゆつくり寝るのも何時以来かな……」

クロエ

「……そうですね……永遠さんこの世界では、もう身内はいないんですよね？」

東

「うん……だからこの島で暮らしてるんだよね」

クロエ

「……私と同じか……」

事情は違うけど、私と同じ天涯孤独の身…

東

「どしたのクローちゃん？さつきから少し変だよ？」

クローエ

「あ、すいません！…ただ…」

東

「ただ、何？」

クローエ

「…お兄ちゃんって…ああいう人の事なのかなって…思ってた…」

東

「え!？」

クローエ

「わ、忘れてください！ちよつとした気の迷いってやつです！年も私の方が上ですし！」

わ、私は何を言ってる!？」

東

「……………いいんじゃないかな…」

クローエ

第009話：宝探し

～東 Side～

東

「ふわ～～～よく寝た～～～。」

クロエ

「おはようございます。」

東

「クーちゃん、おはよう。今何時？」

う～ん、久しぶりにグツスリ眠れたな～

クロエ

「9時少し前です。」

東

「とーくんは？」

クロエ

「書き置きによると、永遠さんは、もう畑に向かわれたみたいですよ。後、朝ご飯を用意

してあるとも。」

東

「そうなんだ。東さんにも見せて。」

ええつと『二人ともおはよう、畑仕事に行くので11時頃には戻ってきます。朝ご飯を用意しておいたから食べてください。追伸、作業はご飯を食べてからするように！』

東

「……飯食べよつか……」

クロエ

「はい。」

東さんの行動が読まれてる

く東 Side out く

くクロエ Side く

さて朝ご飯も食べ終わりましたから、宝探しを始めましょう！

宝物とは勿論、昨日教えてもらった3機のISの設計データの事です♪

ですが…

束

「う〜〜〜ん？ 一体どこにあるんだよ〜〜〜！」

クロエ

「見つかりませんね〜〜〜…」

いくら探しても見つからないんですよ〜…

束

「何処かにあるはずなんだけどな〜…」

永遠さんが嘘をつくとも思えないですし……………ん？

クロエ

「……………あれ？」

束

「どしたのクーちゃん？」

クロエ

「束様、此処にロツクの掛かったデータがあります。」

束

「え！ ホント!?!」

もしかしてこれでしょうか？

東

「確かにロックが掛けられてるね！でもこんなもの東さんにかかればお茶の子……………あれ？」

…東様？

東

「……………開かない…」

クロエ

「ええっ!？」

そんな！東様でも開くことが出来ないなんて！

東

「あーもー！ムカつくー！これどうやって開けるのさ！」

クロエ

「お、落ち着いてください！必ず開く方法があります！」

そうです！必ず開け方があるはずです！

きつと……………あ！

くクロエ Side outく

く東 Sideく

私は今必死にこの宝箱の鍵を開ける方法を考えてるんだ！
すると…

クロエ

「……………もしかして…」

東

「クーちゃん何か思いついたの？」

クロエ

「このロック、永遠さんじゃないと開かないんじゃないんですか？生体ロックみたいになってるのかもしれない。」

東

「え？」

……………とーくんが？

……………宝箱の？

…鍵？

東

「それだよ！このデータ、とーくんじゃないと開けないんだ！」

それなら東さん達が見つけれなかった理由も分かる

東

「考えてみたらこのI Sは神様がとーくん用に造った機体。中のデータもとーくんが頼んだ物、だとしたら、とーくん以外が勝手に調べられないようにしていてもおかしく無い！」

きつとそうだ！お宝を手に入れるための鍵はとーくんだよ！

東

「ならやる事は一つ！とーくんを「ワシがどうかしたか？」…って、とーくん！」

永遠

「何をそんなに驚いとるんじや？データは見つかったのか？」

とーくんグッドタイミング！

東

「とーくん！丁度いい時に戻って来たね！手伝って！」

永遠

「は？手伝うって、ワシはお主らほど電子機器に強くは無いぞ。」

東

「そんな事は分かってるよ！いいからこっち来て！」

永遠

「落ち着かんか！クロエ、どういう事じゃ？」

クロエ

「実は先程から探してるんですがそれらしい物はまだ見つかってないんです。ですが、ISの中に鍵の掛かったデータを見つけたんです。」

永遠

「ならその中に入っとるのか？」

クロエ

「私達もそう思って、鍵を開けようとしたんですが全く開かないんです。」

永遠

「束さんでもダメなんか？」

クロエ

「はい、それで色々考えた結果、永遠さんが鍵になっているという結論に辿り着いたんです。」

永遠

「ワシが鍵!?!」

クロエ

「はい。」

束

「という訳でとーくん！この鍵開けて！」

永遠

「いや開けると言われてもどうやれば…」

クロエ

「とりあえず、ISに触れて『開け！』って念じてみたらどうです？」

束

「そうだね、まずはそれでいこう！」

永遠

「いやいや、そんなおとぎ話みたいな事…」

束

「物は試しって言うでしょ！」

永遠

「はいはい…（開け〜開け〜）……………やっぱり開かん…」ガチャ「あれえ!？」

束

「開いたーーーーー！」

ホントに開いた！クーちゃん天才だよー！

クロエ

「冗談だったのに……………」

永遠

「冗談じゃったんかい!？」

束

「とにかく開いたんだからいいじゃん！…さて、まずは「ドットブラスライザー」からつ

と……………!？」

これは!？」

クロエ

「束様?」

束

「フツ…フフフフツ…アハハハハハハハハハツ!!」

永遠&クロエ

「どうしたんじや（ですか）!？」

束

「凄い!…凄すぎるよ!クーちゃんも見てごらんよ!…これはお宝だよ!宝の山だよ!

アハハハハハハツ!!!

永遠

「落ちつかんかー!?」

ドゴンツ!

束

「アイターー!?!?!」

グオオオオーツ!き、昨日より強い一撃!

永遠

「一体何を興奮しとるんじゃ?」

束

「興奮するよ!するに決まってんじゃん!これ見てしない方がおかしいよ!」

とーくん分からないの!

永遠

「そ、そうなのか…」

クロエ

「……………フ、フフフ…」

永遠

「…ク、クロエ？」

クロエ

「…東様の言う通りですよ…この【ドットブラスライザー】の設計データ、そしてLBXと言う手の平サイズのロボットのデータ…凄すぎますよ！」

さすがクーちゃん分かってる〜

永遠

「…そう言われてもワシはお主らの様な科学者では無いからのお…」

クロエ

「そうですけど…凄く興奮するんですよ〜！」

束

「分かる！すつごく分かるよクーちゃん！」

永遠

「とにかく一度落ち着け！…それで中のデータが目的の物だったんじゃない？」

束

「うん、そうだよ！」

永遠

「まあ、お主らの反応からそうだとは思ったが…で、これはお主らの役に立つのかのお

？」

東

「モチロンだよー…それにしても…【ドットプラスライザー】って元は手の平サイズのロボットだったんだね。」

クロエ

「驚きましたね〜。」

東

「それを人間サイズか〜…」

永遠

「造れそうか？」

東

「ううん、ISとして造るにはすぐには無理だよ。中に入る人の事も考えないといけないからね。…それでもこのデータは凄く役に立つよ！これだけでも東さんの夢に1歩どころか100歩は近づくよ〜。」

永遠

「東さんの夢か…確かISで宇宙に行く事、じやったか？」

東

「そうだよ！それが東さんの夢なんだ！それを世界中の馬鹿共が勝手に兵器にしちやつたんだよ！ホント腹立つ！」

永遠

「確かにのお……じゃがな東さん、ワシは造ったお主にも少しは問題があると思うぞ。」

東

「えー！」

とーくんなんでそんなこと言うの？

く東 Side outく

第010話：説教

（東 Side）

永遠

「確かに東さんの夢は素晴らしい！じゃが、ISには女しか使えんという欠点がある。それが今の世界を作った原因じゃ。東さんがその問題を直す前に世に出てしまったとしても解決策も残さず、世間から雲隠れした東さんにも責任の一端はあるとワシは思うんじゃ。」

東

「それは…」

永遠

「東さん、一つ聞く…【白騎士事件】…あれは東さんの仕業か？」

東

「!?…うん…私がやった…ISを認めて欲しくて…幼馴染のちーちゃんに手伝って貰って…」

永遠

「束さん、ワシも偉そうな事を言うつもりは無いが、言わせて貰うぞ。」

とーくん？

永遠

「このバツカモオオオオオオオー！認めて欲しくて事件を起こすじやと！アホかお前は！【白騎士事件】を起こして証明したのはISの有用性では無いじやろ！兵器としての有用性じやろが！しかも女しか使えん欠陥を残して事件を起こしおって！そんなに認めて欲しかったらISで宇宙に上がって地球や月の写真なり動画なり撮影してくるとか他にも方法はあったじやろが！短気を起こして安易な方法をとっておって！結局造ったお主自身が自分の夢をぶち壊したんじやろが！違うか!？」

束

「う、うう……その通り、です……」

…とーくんの言う通りだ…

…私が【白騎士事件】を起こして証明したのは兵器としての価値だけ…

…認めさせるなら他にも方法はいくらでもあった…

…それこそとーくんの言ったように地球や月の写真を撮ってきたりすればよかった

…

…でも、あの時の私はそんな簡単なことすら思いつかなかった…

…私がしたことは一番やってはいけない事だったんだ…

…自分で自分の夢を壊した、その通りだ…

…箒ちゃん達とも離れ離れにならなくて済んだんだ…

…私は自分の夢だけでなく家族や生活まで自分の手で壊してしまった…

…そして今の世界を作ったのは私だ…

…あの時の私がつとよく考えていれば世界はこんなに酷い事にはならなかったんだ…

…とーくにハッキリ言われて私は改めて自覚した…

…I Sが原因で起きた事件の全ては私が原因だ…

…世界中の人達を不幸にしたのは…

…私なんだ…

東

「…う…うう、うわあああああああああああーんんん!!!」

クロエ

「東様!？」

東

「ううっ…ヒック…う、グスツ…ど…れば…いの…どう…すれば…いの

？」

クロエ

「東様……………」

永遠

「……………ワシには答えられんよ…それは自分で見つけねばならん…」

東

「そんなあ…」

クロエ

「……………」

永遠

「…じゃが、それを見つけれたら、その時は、ワシでよければ力になろう…」

クロエ

「永遠さん！」

東

「…とーくん…ホント…？」

永遠

「ワシ何ぞでよければな。」

東

「ホントのホントに？」

永遠

「無論じゃ。」

東

「ホントのホントのホントに？」

永遠

「…しつこいぞ…やめてもいいんじゃないぞ？」

東

「ごめんなさいごめんなさい協力してください！」

永遠

「ホントに疑り深い人じゃの。昨日と同じくだりじゃぞ。」

東

「え!?…あ、そうだったね。アハハハハハ………」

永遠

「ようやくと笑ったか。」

東&クロエ

「え？」

あれ、そういえばいつの間にか笑ってる…

永遠

「カカカツ、泣かせて凹ませたワシが言うのも変じゃがな…東さんには一度、自分を見つめ直す事が必要じゃと思つてな。ああ言つたんじゃよ。すまんかつたな。」

東

「うゝゝゝ！とーくん酷いよ！」

永遠

「じゃが、これで少しは分かつたじゃろ？」

東

「…う、うん…でもすぐには答えが出ないよ…」

永遠

「カカカツそれでいいんじゃよ。時間をかけて探せばいいんじゃ。」

東

「…うん、そうするよ…」

永遠

「じゃが、答えはちゃんと出さねばならんぞ。」

束

「わ、分かってるよ！天災の束さんに出せない答えなんて無いんだよ！」

永遠

「カカカツならその時を楽しみにしておるよ。」

束

「…ありがと、とーくん…」ボソツ

永遠

「何か言ったか？」

束

「ううん、何でもないよ！」

永遠

「そうか？」

クロエ

「フフツ…」

永遠

「クロエもどうしたんじゃ？」

クロエ

「何でもありませんよ〜♪」

永遠

「変な娘じゃの?…さて、説教はここまでにして昼飯にするかの。」

東

「ホント!お腹ペコペコだよ〜♪」

とーくん、必ず答えを見つけるからね!

〜東 Side out〜

第011話：年上の妹

くクロエ Side

お説教が終わったのでお昼を食べる為、私と束様は居間にいます
永遠さんはお昼の準備をしてくれています

食事を待っていると束様が私に話しかけてきました

束

「クーちゃん、今こそ昨日言ってた事を実行する時だよ！」

クロエ

「えええっ！ホ、ホントに言うんですか？」

束

「当然だよ！」

クロエ

「ううっ 恥ずかしいです〜…」

何でこんな事に…

永遠

「真つ赤な顔して何しとるんじゃ？」

クロエ

「うえ！と、永遠さん！な、何でもありましえん！」

あう…囁んじやつた…

永遠

「？」

束

「プツ、まあまあ、早くご飯にしよ♪」

永遠

「…そうじゃな。ほい、ラーメン。」

束

「ワ～イ！いただきます♪」

永遠&クロエ

「いただきます。」

私はお昼を食べながらいつ言おうかタイミングを見計らっていました

そして！

永遠

「…クロエ、お茶取ってくださいんか？」

今が好機！

クロエ

「は、はい！ど、どうぞ…『お兄ちゃん』…」

い、言ってしまった〜〜

永遠

「すまん…」

……………あれ？

永遠

「す〜…」

反応が無い？

束様も無反応に驚いています

永遠

「す〜…?!?!ぶふうふうふうふう…?!?!」

噴いたあああああ———！！

永遠

「ゲホツゲホツ、お兄ちゃんじゃと！」

束

「アハハハハハハハハハッ！とーくん反応遅いよ！」

束様…笑いすぎです

永遠

「クロエ！どういことじゃ！」

クロエ

「は、はい…実は、昨日の夜……………」

私は昨夜の事を話しました…

詳しくは【第08話：兎のお願い】に書かれています

……………

……

…

クロエ

「……………という訳です…」

事情を話し終えた後の永遠さんの顔は、何とか微妙な表情をしていました

クロエ

「…あの…永遠さん？」

東

「クーちゃん違うでしょ！そこはお兄ちゃんだよ！」

クロエ

「うううう……」

永遠

「……一つ、いや二つ聞きたい。」

クロエ

「は、はい！」

永遠

「まず一つ。今の話から東さんが提案したようじゃが、それは冗談から言ったのか？本気で言つとるのかどつちなんじゃ？」

東

「もちろん東さんは本気と書いてマジだよ！それにクーちゃんは東さんの義理とはいえ娘だからね、子供のお願いは叶えてあげるのが親の勤めでしょ♪」

永遠

「なるほどのお……二つ目じゃが……クロエ、お主はワシを兄と呼んだが年はそつちが上じゃ、それでも兄と呼びたいのか？」

永遠さんの質問はどちらも当然の内容だった

疑問を持たれても仕方の無い事です

でも、私は…

クロエ

「確かに年は私が上です…それでも、私は…永遠さんを兄と呼びたいんです！」

永遠

「…そうか…」

東

「で、で、とーくん！クーちゃんのお兄ちゃんになつてくれる？くれないの？どっち？」

永遠

「……………」

やっぱり駄目なんでしょうか…

永遠

「まあ、構わんぞ。」

クロエ

「え！…今、何て？」

永遠

「構わんと言ったんじゃが。」

クロエ

「本当ですかああああ!!」

東

「やったね!クーちゃん!」

永遠

「…ただ、『お兄ちゃん』はやめてほしいのお…くすぐったくてな…すまんが他の呼び方にしてくれんか?」

クロエ

「は、はい!…えくと、なら他にはどんなのが…兄さん?兄貴?兄上?兄者?兄様?」

どれがいいんでしょう?

永遠

「…今のじゃと…兄貴と兄者はお主には合わん呼び方な気がするのお…」

東

「そうだね…東さん的には兄上か兄様がクーちゃんに合うと思うけどな。」

クロエ

「うーん、永遠兄上?言いにくいですね。永遠兄様?こっちの方が言いやすいですね!

兄様でどうですか？」

永遠

「そうじゃな。それでいいじゃろ。」

クロエ

「はい！これからよろしくお願いしますね♪永遠兄様♪」

永遠

「よろしゅう頼むぞ、クロエ。」

エヘッ兄様♪兄様♪私の永遠兄様♪

束

「それじゃあこれからとーくんも束さんの子供だね！」

永遠

「それは違うじゃろ！」

束

「ガーン!!即答!?!」

クロエ

「フフフッ♪」

永遠兄様~~~~♪

）
ク
ロ
エ
S
i
d
e
o
u
t
）

第012話：起動

～永遠 Side～

クロエがワシの妹になるというサプライズ付きの昼飯が終わると東さんが頼みごとをしてきた

東

「とーくん、お願いがあるんだけど。」

永遠

「今度は何じゃ？まさか、あの3機のISを動かせとか言うんじゃないかな？」

東

「ピンポ～～ン！大正解♪座布団10枚追加♪」

永遠

「大喜利？つうか、何故に動かす必要があるんじゃない？」

東

「それはね、確認だよ！」

永遠

「確認？」

東

「そ、とーくんあのI Sを神様に貰ってから一度も動かしてないんでしょ？男のとーくんがホントに動かせるのかを確認したいんだよ。他にも動作テストをしたいんだ。」

永遠

「確かにそうじゃが…ワシは別に動かさなくても困らんしのお…」

ワシにとってあの3機はただの話し相手代わりの置物なんじやがな

クロエ

「兄様！そんなこと言わずにお願いしますよ！」

東

「ほらほら、可愛い妹の頼みを断るのかな？」

永遠

「ぬう！それを言われると…」

東

「(クーちゃんもうひと押し！)」

クロエ

「(はい！) お願いします！永遠兄様！」ウルウル

ぬう〜上目遣いをお願いされては断りづらいではないか!

永遠

「ええーい!分かった、動かせばいいんじゃない!」

クロエ

「ありがとうございます♪兄様♪」

束

「それじゃ〜早速いつてみよ〜♪」

ハア〜面倒じゃな〜…

〜永遠 Side out〜

〜束 Side〜

と〜くんの説得に成功した私達は早速ISの実働テストを始める事にしたんだ!

永遠

「それでまずどれからいくんじゃ?」

束

「う〜ん、そうだね〜?…よし!まずは【ドットブラスライザー】で行こう!」

永遠

「あいよ……あれ？」

東

「どしたのとーくん？」

永遠

「ISってどうやって装着するんじや？」

ズゴツ!?

クーちゃんと一緒にコケた

東

「とーくん！知らないの？」

永遠

「知らんぞ!!」

クロエ

「兄様、機体に触れて展開しろと念じて下さい。」

永遠

「分かった。(展開しろ……)」

カッ！

永遠

「ヌッ！」

【ドットブラスライザー】が光り出したと思っただけ、気づいた時には目の前に【ドットブラスライザー】を纏ったとーくんがいたんだ

…と言うよりどちらかと言うと中に乗り込んだ感じだね

束

「とーくんどんな感じ？」

永遠

「頭の中にこいつの使い方が送られてきおった。」

束

「なら最初の段階はクリアだねーそれじゃ次は歩いてみて。」

そう言うのとーくんは歩き始めたんだけど、やっぱり初めてだから歩き方が少しぎこちないけどちゃんと動かせてるね

それからしばらくは歩行を初めとした機体の動作練習をしてたんだけど、始めてから2時間位でISで走れるほどになってたよ

束

「凄いよ、とーくん！こんなに早く動かせるなんて！」

永遠

「うゝむ、普段から畑仕事で鍛えとるからかのお？」

クロエ

「そうかもしれないね。」

東

「よし！それじゃあ次は武器のテストだよ！…確か【マルチギミックサック】だったわけ？それを出して！」

永遠

「分かった。」

へセツトアツプ ブラストソード

東

「な、何？」

いきなり電子音声が聞こえたと思ったら【ドットブラスライザー】のバックパツクの一部が二つ外れてそれが変形したんだ！

そのままとーくんがそれを掴むとエネルギーの刀身を持つ二本の片手剣になったんだよ！

クロエ

「これが…【マルチギミックサック】!？」

永遠

「これはその一つの形態じゃよ。」

とーくんがそう言つて「マルチギミックサクサク」を上には振り投げたら

〈セツトアップ ブラストマグナム〉

また電子音が聞こえて今度は二丁拳銃に変形したんだ！

東

「今度は銃に!?!」

〈セツトアップ デュアルブレード ブラストガーター〉

次は片方は片手剣と同じ刃が左右両方ついた双剣に、もう片方は大型の盾になったん

だよ！

クロエ

「今度は双剣と盾！」

永遠

「これで全部じゃ。」

東

「なるほどね、状況に合わせて形状を切り替えるんだね。拡張領域パススロットの武器を入れ換

えるのとはまた違うね。」

クロエ

「はい、通常の I S は武器を切り替える場合、拡張領域パススロットにある武器と使用中の武器を取り替えます。その間に隙が生まれます。ですが「マルチギミックサク」はその場で変形させるだけなので時間のロスも少なく対応も早くなります。」

束

「ホントにこれだけでも十分凄いね。」

永遠

「そうなのか？」

「そうなんだよ！とーくんいまいち分かってないみたいなんだよね。」

束

「次はいよいよこの機体の目玉！「ラグナロクフェイズ」に行ってみようかー！」

永遠

「行くぞー！」

〈ラグナロクフェイズ〉

電子音が聞こえると「ドットブラ斯拉イザー」の機体各所が展開・変形し始めたんだ。変形が終わるとそこには今までとは全く違う「ドットブラ斯拉イザー」がいたんだよ

！

束

「…これが…【ドットプラスライザー ラグナロクフェイス】!」

クロエ

「す、凄い! 何て迫力!」

永遠

「これで良いかの?」

束

「う、うん…大丈夫だよ!」

この後も私達は【ドットプラスライザー】の単一仕様と残る2機の確認もしていつ

たんだ

………

………

………

全部のテストが終わって改めてとーくんのISのデータを見るとホントに化け物としか言いようがない性能だったよ!

クロエ

「束様、この3機は世代で言うならどれに当てはまりますか?」

東

「そうだね〜：今の世の中は第3世代の開発に取り掛かった頃だけ〜：東さんなら第4世代を造る事が出来る。〜でも、この3機はそのさらに上いわば第5世代にあたるね。」

クロエ

「第5世代ですか!？」

東

「うん、ホントなら第6や第7でもいいんだけどね。便宜上は第5世代がいいと思うよ。」

クロエ

「そこまでですか!？」

東

「うん、化け物だよこのIS！特に【戦国龍】は化け物を通り越してるよ！」

永遠

「化け物は酷いのお。」

東

「だってそうとしか言いようがないんだもん！」

永遠

「さいですか…所で【戦国龍】が化け物を通り越してるとはどういう事じゃ？」

東

「それはね、まず【戦国龍】の動き方なんだよ。」

永遠

「動き方？」

東

「そ！I Sは機械だから手足の動かし方がどうしても機械的になっちゃうんだよ。でも【戦国龍】は殆ど人間と変わらない動き方が出来るんだよ。」

永遠

「それがそんなに凄い事なののお？」

クロエ

「凄いですよ！人間と変わらないという事はそれだけムダの無い動きが出来るという事なんですよ！」

永遠

「なるほど、確かにそれは凄いな。特に戦いにおいてはその差はかなり大きいのだ。」

東

「お！分かってくれたんだ。良かった良かった。で、次はやっぱり…単一仕様だね。」

永遠

「何か馬鹿にされた気がするが……まあいいか。あの6本の刀の事か？」

東

「そうだよ！一本一本が無茶苦茶な能力持つてるし！あれ一本で一つの単一ワンオフ・アピリテイ仕様だよ！何なのあの刀！それが6本もあるなんて滅茶苦茶だよ！卑怯だよ！一本欲しいよ！
つうか寄越せ！」

永遠

「何か最後願望が入つとるな。確かにそうかもしれんが、一度に使えるのは一本だけと制約が掛かつとるからそれ程騒ぐ事はなかるお。後、やらんぞ。」

クロエ

「確かにそうですけど、それでも切り替えて使う事は出来ますから十分に脅威になるんですよ。後、東様は落ち着いて下さい。」

東

「ハアハア、そういう事だよ。しかも他の2機と違って【戦国龍】は二次移行も出来るからね。進化したらどうなるのか東さんでも見当つかないよ。」

ホントどんなISになるんだろ？

永遠

「それで【戦国龍】を化け物を通り越してると言っつつたのか。」

東

「そういう事……とりあえず実働テストはこれで終わりだね。とーくんのおかげで貴重なデータが沢山取れたよ。ありがとね♪」

クロエ

「兄様、お疲れ様です♪」

永遠

「それは良かった。じゃあワシは畑を見てくるかの。」

東

「うん、いつてらっしや〜い。」

さてと、今日取ったデータを纏めようかな

このあと私は【戦国龍】と【ラインバレル】の中のデータを確認するとまた大笑いをはじめ、戻ってきたとーくんにもまた拳骨を食らう羽目になっちゃったんだ

く東 Side out く

第013話：新しい日常

く永遠 Sideく

…オカシイ…

東さん達がこの島に墜落してすでに2週間、確かロケットの修理には1週間必要だと
言っていた筈じゃが…

東

「とーくん、今日の夕飯はく？」

クロエ

「兄様、今日は私が作りましょうか？」

何故まだいるんじゃ？

………

………

………

仕方ない、一度聞いてみるかの

永遠

「東さん、ちと聞きたい事があるんじゃないか？」

東

「ん〜、な〜に〜？」

永遠

「もう2週間たつがロケットの修理は終わつてるのか？」

東

「え？……あつ！……忘れてた……」

クロエ

「東様!？」

永遠

「つまり……まだ何もしとらんという事かのお？」

東

「ア、アハハハハツ……そういう事……だつて、だつて！とーくんが悪いんだよ！あんな
凄いいS持つてるんだもん！ずっと中のデータを調べるのに夢中になってたんだもん
！」

永遠

「人のせいにするでない！……まさか、何もしとらんとは思わなかった……」

東

「……めんなさい……」

クロエ

「?…ですが、急にどうしたんですか? そんな事を聞いて?」

永遠

「ん?…いや、東さんがロケットの修理に1週間かかると言っておったのに、2週間もここに居るからな…:どうなつとるのか気になったんじゃよ。」

東

「ガーン!? とーくんは東さんたちの事が邪魔なの?」

クロエ

「そ、そんな! 嘘ですよね?」

永遠

「いやいや、何故にそうなる! てつきり修理が終わつたらすぐに出て行くと思つとつたから聞いただけじゃぞ。」

東

「ああ、そういう事。…確かに最初はそのつもりだったんだけどね…:この島つて結構居心地が良くてついつい長居しちゃってるんだよ。…それに、せっかくクーちゃんに兄

妹が出来たのにすぐに離れ離れにするのはねく…」

確かにそうじゃなく…

クロエ

「束様く…」

永遠

「確かに束さんの言う通りじゃな。ワシもせつかく出来た妹と離れるのは忍びないしの。」

クロエ

「兄様く…ううつ、私などの為に…お二人共…ありがとうございます…」

永遠

「泣くでない。ワシも考え無しに聞いてしもうた。二人共、申し訳ない！」

束

「いいよ別に。とーくんが聞いて来たのは当たり前前の事だし。」

クロエ

「その通りです！…それで束様、実際どうするんですか？」

束

「う〜くん？束さんとしてはまだあの3機のデータの全部見てないし、とーくんが良

ければまだしばらくはお世話になりたいんだ。」

なるほど、ワシ次第という訳か…って考える必要もないのお

永遠

「ワシは構わんで。好きならだけ居てくれても。」

東

「ワ~~~~~イ! やった~~~~♪」

クロエ

「兄様、ありがとうございます♪」

永遠

「じゃ、晩飯にするかの。」

東&クロエ

「は~~~~い♪」

今の生活も悪くはないのお♪

………

………

………

その日、ワシは変な夢を見た…

？

『おくい！』

永遠

『んがっ？誰じゃ！』

？

『私よ私！』

永遠

『…げ！お主は天照！』

天照大神

『げ！とは何よ！神様に向かって失礼しちゃうわ！』

永遠

『何の用じゃ？わざわざ人の夢にまで出てきおって！』

天照大神

『スルーしないでよ！…まあいいわ。あの3機を起動させたわね？』

永遠

『したが…それがどうしたんじゃ？』

天照大神

『実はね、あの3機には仕掛けをしておいたのよ。』

永遠

『何じゃと!』

天照大神

『言っておくけど危険な物じゃないわよ♪貴方を転生させた時に私がつけておいたおまけデータよ♪』

永遠

『おまけデータ?』

天照大神

『そ♪それを出す為の条件があこの3機を全て貴方が起動させる事♪そっちのデータも好きに使っていいからね♪』

永遠

『一体何のデータじゃ!』

天照大神

『それは見てのお楽しみ♪じゃあね〜♪』

永遠

『……………(碌なデータじゃなさそうじゃし束さん達には黙っとくかの。)(』

天照大神

『ちなみに一緒に住んでる二人にもこの事は伝えてあるからね♪』

永遠

『へ？……ちよつと待てーっ!!』

ワシは叫びながら目を覚ました…

永遠

「…何じゃ今の夢は…まさか本当に…」

ドタドタ…

永遠

「ん？」

束

「とーくーん!!」

クロエ

「兄様ーっ!!」

束さんとクロエが慌てながらワシの部屋に入って来た…まさか…

永遠

「…な、何じゃ？」

東

「とーくん！今変な夢見たんだけど！」

クロエ

「私もです！」

永遠

「…本当に伝えおったのか！あの神は…」

東

「どういう事？」

永遠

「実は……………」

ワシはさっきの夢の内容を話した…

二人は当然驚いとったが、追加データの事を聞いた途端に目の色を変えおった

東

「…追加データ…面白そうだね…よし！早速確認するよ!!」

クロエ

「はい!!」

永遠

「…はあ〜〜…」

ワシ等はそのまま3機が置いてある部屋に行つてISにアクセスすると…

東

「おお！確かにデータが追加されてるね〜！え〜つと…このデータ群は何て読むのかな？…【G・U・N・D・A・M】？」

永遠

「【ガ、ガンダム】じゃと!？」

東

「【ガンダム】？…これそう読むんだね…さて中身は〜つと……………」

永遠

「よりもよつてこれか…」

東

「凄いよと〜くん!!この多種多様の機体のデータはこの3機のデータ量を上回っている

よー」

クロエ

「本当に凄いですね!」

東

「…ねくとーく〜ん♪」

永遠

「…ハア…好きにせい…」

東

「やった〜〜つ!!」

あのボケ神めええええええーっ!!

〜永遠 Side out〜

第014話：発見

（永遠 Side）

東さん達がワシの島に墜落してから1年たった

この1年、東さんとクロエはワシのISにあったデータと追加のデータを解析して、それを元に東さん製の第5世代機の開発に取り掛かっておる

出会った頃の東さんなら第4世代を造るのも結構な時間が掛かったそうじゃがワシのおかげで東さんの技術力は飛躍的にアップしたらしい…実感はないがな

そのおかげで、最近になって新型はようやっと形になって来たらしいがさすがにワシのISと比べると性能は劣るそうじゃ

ちなみにこの島は東さんが一部改造してテレビやネットが使える様にしてくれたんじゃ

そんなある日、3人でテレビを見ながらくつろいでると…

TV

『先程、藍越学園とIS学園の合同入学試験会場にて男性がISを起動したとの事です！』

ん?…今、なんつった?

T V

『I Sを動かした男性の名前は【織斑一夏】さん、15歳。織斑さんは藍越学園の試験を受ける為に会場に来たのですが、道に迷ってしまい間違ってI S学園の入試会場に迷い込み、そこで試験の為に用意してあったI Sに不意に触ってしまったところ、起動したとの事です。』

東

「いっくーいっくーいっくーん!?!」

永遠

「ほく男の操縦者か〜…」

クロエ

「兄様以外にもいたんですね〜…」

東さんは驚いとるがワシとクロエは気にならんかったな

永遠

「ん?…確か織斑一夏という東さんがよく話していた者と同じ名前じゃな。…偶然とは恐ろしいのお〜…」

東

「違うよ！本人だよ！何してんのあの子は………!?」

クロエ

「こんなに取り乱す東様も久しぶりですね〜…」

永遠

「うちで暮らすようになって免疫出来てたようじゃからなく〜…」

初めは毎日のように驚いとしたから最近はそのな驚くことは無くなったようじゃが

TV

『織斑さんは第一回モンドグロツソで優勝した織斑千冬さんの実の弟であるとの事です。』

束

「一体何でこんな事に！とりあえずちーちゃんに詳しく聞かないと！」

ちーちゃん？ああ、織斑千冬の事か

TV

『なお、織斑一夏さんは話し合いの結果、IS学園に入学する事になったそうです。』

永遠

「IS学園？」

クロエ

「その名の通りI Sを学ぶ為の学校です。この学園はどの国にも属していません。そして、あらゆる国家、組織はI S学園に一切干渉できないという国際条約があるんです。」

永遠

「ほくくく、しかしその織斑という奴は大丈夫かのお？その学校は女しかおらんのじゃろ？ストレス溜まって死なんといいがなく。」

クロエ

「ありえそうで怖いですね。∴兄様はI S学園に行きたいですか？」

永遠

「興味ないのおく∴」

ワシにはどうでもいい事じゃからなく

く永遠 Side out く

く東 Side く

私は今、急いでちーちゃんに連絡を取ってるんだ

P r r r r r r

千冬

『もしもし。』

東

「ちーちゃん！さっきのニュース何なの！」

千冬

『東か！丁度良かった私もお前に聞きたい事があった！』

東

「聞きたい事って？」

千冬

『この件はお前が関係しているのか？』

東

「そんな事してないよ！してたら慌てて電話なんかしないよ！」

千冬

『そう言われてみるとそうだな。』

東

「それで何でいっくんがISを動かしちゃったの？」

千冬

『ああ、テレビで言ってた通りなんだが、あの馬鹿は藍越の入学試験を受けに行つてどう

いう訳かIS学園の用意していた【打鉄】の置いてある部屋に迷い込んでな。」

東

「それを触つて起動させちゃったんだね…」

千冬

『…そうだ…ハア…お陰で今朝からその対応に追われている始末だ。』

声だけでもちーちゃんが疲れてるのが分かるね

永遠

「しかしその織斑という奴は大丈夫かのお？その学校は女しかおらんのじゃろ？ストレス溜まって死なんといいがなく。」

クロエ

「ありえそうで怖いですね。」

とーくんとクーちゃんは相変わらずのんびり話してるし

千冬

『所で東、お前の他にも声が聞こえるんだが誰かいるのか？』

東

「うん、二人いるよ。今一緒に暮らしてるんだ。」

千冬

『一緒について、お前がか!』

東

「それどういう事かな? 東さんだつていつまでも昔と同じじゃないんだよ。少しずつ他の人にも興味を持つようになってるんだよ。」

千冬

『なんだと!?!』

東

「まあそれは別にいいけどさ。けどそつちは大変だね。まさかいつくんもISを動かすなんてね。」

千冬

『まったくだ。……………東…今何て言った?』

東

「へ?」

千冬

『今、一夏『も』と言ったな?』

東

「あ!?!」

やばい！口が滑った!?! どうしよ
く 東 Side out く

第015話：二人目

く千冬 Sideく

私の名前は織斑千冬、IS学園で教師をしている

私は今、弟の一夏がISを動かしたため学園の他の教師たちと一緒に対応に追われている

全く、あいつは何をやつとるんだ！受験会場を間違えるとは後で思いっきり説教してやる！

そんな忙しい中、私に電話がかかってきた

千冬

「もしもし。」

東

『ちーちゃん！さっきのニュース何なの！』

幼馴染の篠ノ之束だ

だがこちらでも聞きたい事があったから丁度良い

千冬

「東か！丁度良かった私もお前に聞きたい事があった！」

東

『聞きたい事って？』

千冬

「この件はお前が関係しているのか？」

東

『そんな事してないよ！してたら慌てて電話なんかしないよ！』

千冬

「そう言われてみるとそうだな。」

東は関わっていないと言った、確かにアイツの言う通り関わっているなら電話なんかかけてこないな

私は東に事情を話しながらある事に気づいた

電話の向こうから東以外の男女の声が聞こえる

永遠

『しかしその織斑という奴は大丈夫かのお？その学校は女しかおらんのじゃろ？ストレス溜まって死なんといいがなく。』

クロエ

『ありえそうで怖いですね。』

聞こえてきた会話を聞いて私はその通りになりそうだと思つた

一夏の奴、本当に死ななければいいが

それにしても、あの東が妹と私、一夏以外の人間に興味を持つようになるとはな
そのまま東と話しているとアイツは気になる事を口にした

東

『まさかいつくんもISを動かすなんてね。』

千冬

「まったくだ。」

ん？いつくんも？も、とはどういう意味だ

千冬

「東…今何て言つた？」

東

『へ？』

千冬

「今、一夏『も』と言つたな？」

東

『あ!?!』

まさか!他にもいるのか!?

く千冬 Side outく

く東 Sideく

やばい!何とか誤魔化さないと!

千冬

『答えろ東!今の言葉はどういうことだ!?!』

東

「ナ、何ノ事カナく…」

千冬

『誤魔化すな!お前まさか一夏以外の男の操縦者を見つけていたのか!?!』

東

「ギクツ!?!」

千冬

『やはりそうなんだな!』

東

「ア、アハハハ…何ヲ言ツテルノカナチーチャン…イツクン以外ニISSヲ動力カセル男ガ
イル訳無イジャン…」

千冬

『なるほど、今お前と一緒にいる奴がそうなんだな?』

束

「ソ、ソレハ…」

どうしよ〜!もう誤魔化しきれないよ〜!

千冬

『後でそいつの詳しい情報を送れ!分かったな!』

束

「……………」

千冬

『分かったな!』

束

「…ハイ…」ガチャ

電話を切った私は恐る恐る後ろを振り向いた

永遠&クロエ

「……………」

二人は冷めた目でこつちを見ていた
今の私にできる事はただ一つ！それは

東

「ごめんなさ〜〜い！」

DO☆GE☆ZAをする事だよ

〜東 Side out〜

〜千冬 Side〜

東からの電話を切った私は今日一番の深い溜め息をついた

千冬

「は〜〜〜〜…」

？

「あ、あの…織斑先生…」

私を呼んだのは同僚の女性教師、山田真耶だった

真耶

「さっきの電話の内容って…」

よく見るとさつきまで対応に追われていた他の教師達も全員が手を止めて私の方を
見ていた

千冬

「はい…二人目が見つかったみたいですよ…」

教師達

「そんな～～～～～～!!?」

この日一番の絶叫が響き渡った

ああ、これで仕事が増えるな…

千冬

「…すみませんがそういう事です。…私は理事長にこの事を報告してきます…」

教師達

「悪夢だ～～～～～～!!?」

本当にその通りだ！今日は確実に徹夜の残業決定だな…

こんな事になるなら東に余計なことを聞かなければよかった…

ハア…

く千冬 Side out

第016話：入学前のお願い

（永遠 Side）

今ワシは束さんのロケットを使ってIS学園の校門前に来とる

事の発端は束さんが織斑千冬にワシの事をバラしてしまうたのが原因じゃ

まあ。土下座して謝ってきたから軽く説教して束さんは許したんじゃが、問題はその後じゃった

束さんは仕方なくワシの情報を学園に送ったんじゃが、それからすぐにワシにもIS学園に入学しろと言う連絡が来たんじゃよ

建前はワシの身を守るためとか言うもったが裏で何を考えているのやら
そんな事を考えていると…

？

「すまない、待たせてしまったか？君が火ノ兄永遠君で間違いないか？」

永遠

「ん？そうじゃが。」

スーツを着た二人の女性がやってきた

千冬

「私は織斑千冬。こちらは山田真耶。この学園で教師をしている。」

永遠

「ああ、おんしがちーちゃんか？」

千冬

「渾名で呼ぶな！織斑先生と呼べ！」

永遠

「入学もしとらんに先生をつける必要はなかるお。」

千冬

「…確かにそうだが入学したら先生をつける…それとちーちゃんは止める！」

永遠

「承知した。して今日は何の用じゃ？」

千冬

「…ああ、簡単な筆記試験と面接、ISによる模擬戦をして貰う。」

真耶

「後、火ノ兄君の制服を作るので採寸をとらせて貰います。」

永遠

「さよか…面倒じゃなく…」

さつさと帰って畑の手入れをしたいのお…

千冬

「面倒でも何でもこれからお前はここに通うんだやる気を出せ！」

永遠

「はいよ。…まったく織斑一夏とか言う奴のせいでとんだ迷惑じゃ！」

千冬

「……………弟がすまん…」

永遠

「織斑さんが悪い訳では無かるお。」

奴に会ったら一発ぶん殴ってくれる！

く永遠 Side outく

く千冬 Sideく

私は今、目の前にいる二人目の男性操縦者の事を考えていた

元からののか老人のような変な話し方をするがブリュンヒルデと言われた私を相手にしても全くひるまず話してくる

その上私たち教師がいるにも拘らず面倒だ何だと言う始末だった

束といたからなのか元からなのか分からんが変わった奴だな

とりあえず今日の予定を教えとくか

千冬

「今日の予定だが初めに筆記試験を行う。それが終わったら昼食を挟んでまずは服の採寸、面接、最後に模擬戦となっている。何か質問はあるか？」

永遠

「特に無いのお。ただ入学する代わりに2つ頼みがあるんじゃないか？」

千冬

「内容にもよるが…」

永遠

「まず一つは入学したら織斑一夏に一撃入れさせて欲しい！あやつのせいでワシの生活は壊されたんじゃないかな！」

真耶

「ちよ、ちよつと待つてください！入学早々暴力事件を起こす気ですか！」

永遠

「じゃからこうやって前もって頼んどるんじゃないやろ。」

真耶

「それなら織斑君も同じじゃないですか！」

永遠

「ワシと奴が同じなわけなかるお！」

まさか一夏を殴らせると言うとはな、さてどうするかな？コイツの言う事も一応分かる

…待てよ…これはもしかしたら丁度いいかもしれないな

千冬

「…ちなみに何をするつもりだ？」

永遠

「そうじやな普段なら拳骨じゃが…奴にはバイルドライバーを食らわせてやるかの。」

千冬

「……………ジャーマンスープレックスにしてくれ…」

真耶

「織斑先生！何言ってるんですか！自分の弟にプロレス技かける許可を出すなんて!？」

千冬

「…いや、火ノ兄の言う事も分かる。それに、いい機会なんですよ。」

真耶

「いい機会って何がですか？」

千冬

「…実は、一夏の奴、男の自分がISを動かした事で、一種の被害妄想の様なものを持ち始めてるみたいなんですよ。」

真耶

「…被害妄想ですか？」

千冬

「ええ、アイツはこの火ノ兄と同じでこの学園に強制入学する事になってます。そのせいか、自分が望んでココに来た訳じゃないと、自分は被害者だと考えているようなんです。」

真耶

「そんなまさか…」

千冬

「私にはそう見えるんです。だからアイツの腐った根性を叩き直すにはいい機会だと思っただですよ。一夏によつて被害を受けた火ノ兄ならアイツも文句は言えないでしょうから。」

永遠

「ほく…なら殺つてもいいんじゃないかな？」

真耶

「…字が違いますでしたか？」

永遠

「気のせいじゃよ。」

いや、明らかに殺すと書いて殺ると言つたなコイツ

千冬

「叩き直すとは言つたが、後に響かない程度で頼む。それと、弟との確執はそれを最初で最後にしてくれ。」

永遠

「初めからそのつもりじゃ。ただし、奴が気に入らん事をするようなら容赦はせんがな
！」

千冬

「ああ、それで構わん。私の場合は教師と身内の間に挟まれて動けない時もあるからな。
…それで二つ目は何だ？」

永遠

「この学園は全寮制と聞いた。放課後になったら家に帰りたいんじゃないよ。」

千冬

「なんだと!?!:お前の住んでる島からこの学園までバスや電車を乗り継いでも数時間かかる筈だぞ!」

コイツ本当に何考えてるんだ!?

永遠

「片道8時間はかかるの。じゃがISなら1時間程度で行く事が出来るじゃろ。」

千冬

「ISで学園に登下校させて欲しいというのか?…理由は?…ただ家で寝泊まりしたいだけというならこの場で却下するぞ!」

永遠

「一応それもあるんじゃないが、一番の理由は畑と田んぼじゃ。」

千冬

「畑と田んぼ?」

永遠

「そうじゃ、ワシの住んどの島には幼い頃から作り育てた大事な田畑があるんじゃない。こんな所に監禁されとつたら10年かけて作った大切な畑も田んぼもダメになってしまう

うからの。」

真耶

「何も自分でやらなくてもご両親に頼むとか…」

永遠

「ワシに家族はおらんぞ。5歳の頃から今の島で一人で暮らしとるからな。」

真耶

「す、すみません!?!失礼な事を言つて!」

永遠

「気にせんでいいぞい。まあそういう訳じゃ。政府がやってくれるなら別じゃがまずやらんじやろ。じゃから夕方になつたら家に帰りたいんじやよ。無論、朝になつたら学園には戻つてくるからの。」

千冬

「…………それは私には答えられんな。理事長に話を通しておくから少し待つていてくれ。」

永遠

「よろしく頼む…それと山田さん、さつきワシと織斑は同じじゃと言うとつたが今もそう思うんか?」

山田先生は横目に私を見ながら答えた

真耶

「…違いますね。…織斑先生には悪いですが火ノ兄君と織斑君では暮らし方が違いすぎます。火ノ兄君はここに入ったら帰る場所が無くなるかもしれないから…」

千冬

「…山田先生の言う通りですよ。火ノ兄の事情に比べたらうちの弟は恵まれていますよ。生活出来る家があるんですから。」

…火ノ兄が一夏に一撃入りたいと言った気持ちも分かるな…

千冬

「火ノ兄、とりあえず弟に一撃入れる話は許可する。アイツが何か言っても私が黙らす。二つ目のI Sの登下校は理事長の判断を待つことになる。」

永遠

「承知した。出来れば二つ目も早めにお願います。」

千冬

「分かっている。」

こいつは私達と違ってたった一人で生きてきたのか…

く千冬 Side out く

第017話：セシリア・オルコット

セシリア Side

わたくしはイギリスの代表候補生セシリア・オルコットと申します
本日はここIIS学園でわたくしは入学試験を受けに来た次第ですわ

しかし、なんだか少し騒がしいですわね？入学試験とはこんなに騒がしいものだったのかしら？

セシリア

「さて、後は模擬戦だけですわね。…まだ時間はありますわね。」

少しその辺りを散歩でもしてきましようか

セシリア Side out

永遠 Side

永遠

「あくやつと面接まで終わったのお…」

ワシは今廊下を歩いとる

筆記試験も終わり、昼飯を食った後、服の採寸と面接まで何とか無事に終わって後は最後の模擬戦だけじゃから、それまで暇つぶしに散歩しとるんじゃないよ

ワシがボくつと歩いとると…

？

「きゃっ！」

永遠

「おっと、すまん、こちらの不注意じゃった、大丈夫かの？」

？

「は、はい！こちらこそすみません。」

永遠

「むー！」

？

「え？…お、男？」

ワシがぶつかつたのは金髪ロールの女子だったんじやが、この娘、ワシを見た途端に目を丸くしおつた

？

「な、何故ここに男性がいるのですか!？」

永遠

「又オ！お、落ち着かんか！ワシは試験を受けに来ただけじゃ！」

？

「試験ですつて！…はっ！あなたが今噂になっている世界で初めての男性操縦者ですわね？」

永遠

「ん？違うぞ。ワシは二人目じゃよ。」

？

「え!?ふ、二人目！他にもいたんですの！」

永遠

「そうみたいじゃなく…一人目のせいでもいい迷惑じゃ…おつと、これは失礼をワシは火ノ兄永遠と言う者じゃ。そちらの名を教えて貰えんかのお？」

うゝゝゝむ、この娘のリアクション、さつきからオーバーすぎる気がするのお

ゝ永遠 Side outゝ

ゝセシリア Sideゝ

わたくしとぶつかったのは今話題の男性操縦者でした

ですが、ブリュンヒルデの弟ではなく、二人目との事でした

まさかもう一人いたなんて思ってもみませんでしたわ

永遠

「ワシは火ノ兄永遠と言う者じゃ。そちらの名を教えて貰えんかのお？」

それにしても変な喋り方ですわね？しかし、向こうが名乗ったのならこちらも名乗らないといけませんわね！

セシリア

「これはご丁寧に、わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。」

永遠

「オルコットさんじゃな。お主もワシと同じように試験を受けに来たのかのお？」

セシリア

「ええ、後は模擬戦だけですわ。まあわたくしの実力なら合格間違いなしですが！」

永遠

「ワシも後は模擬戦だけでの、試合までまだ時間があつたんでブラついたんじやよ。」

わたくしと同じ理由ですわね

セシリア

「…そうですか…あの一つ聞いてもよろしいですか？」

永遠

「何じゃ？」

セシリア

「あなたのその話し方は何ですか？」

永遠

「ん？…何と言われても…昔からこの喋り方じゃからなく…ずっと一人じゃったから気に留めた事が無いのお…」

セシリア

「え？…あのずつと一人…というのは…」

一人つてどういう…」

永遠

「まあ、大した事では無いんじやが、ワシは5才の時から島で一人で暮らしとるんじやよ。」

セシリア

「な、なんで…」

ホントは聞いてはいけない事…でも聞きたいと考えてしまった

永遠

「5才の時に両親が事故で死んでの、親戚もおらんからどうしようかと考えとつたら、ワシの家には先祖代々所有しとる小さな島があると知つたんじやよ。」

セシリア

「…その島で今まで一人で…」

永遠

「そうじやよ…まあ1年前から二人ほど同居人が増えたがな。」

セシリア

「あの…年はいくつですか？」

永遠

「?…15じやが？」

セシリア

「15歳…では14歳までの9年間は一人で暮らしておられたんですね?…その間どのように暮らしてたんですか？」

永遠

「どのようにつて…最初の頃は島に生つとる果物や魚を釣つたりしとつたな。それから畑と田んぼを耕して少しずつ大きくしたんじや。今は野菜や米を作つて暮らしとるん

じやよ。」

なんですのこの人！わたくしも両親は既にいませんが彼の人生はわたくしとは比べられないほど凄まじい人生ですわ！

なのに…なんでこの方は自分の過去を話してもこんな風に笑っていられるんですの？

くセシリア Side outく

第018話：父と母の謎

セシリア Side

わたくしは彼の過去を聞いてもう一つ聞きたい事がありました…

セシリア

「もう一つ聞いてもよろしいですか？」

永遠

「何じゃ？」

セシリア

「…」両親の事を…どう思ってますか？」

永遠

「ワシの両親？…あまり覚えておらんが…じゃが…優しい父と母じゃったよ。…いつもワシに笑いかけてくれたとった。…二人の仲もとてもよかった。…ワシの記憶にはいつも笑顔の両親の姿しかないので。」

両親の事を話す彼の顔はとても優しい表情をしていました

わたくしはあんな表情で自分の両親の事を話す事はできませんわね

セシリア

「…羨ましいですわね…」

永遠

「何が羨ましいんじゃない？」

彼は自分の両親に誇りを持つてる…ですが、わたくしは彼の様に自分の両親に誇りを持つことが出来ない…それが、凄く羨ましい

「セシリア Side out」

「永遠 Side」

この娘さつきからワシの過去の事を聞いてくるが一体何を知りたいんじゃない？

考えるのも面倒じゃし直接聞くかの

永遠

「のう、オルコットさん。お主ワシの何が知りたいんじゃない？言つとくがワシの昔話なんぞ何の面白味も無いぞい。」

セシリア

「!?…は、はい…少し思う所がありました…：…：ヒノエさんの過去を聞いたのですからわたくしも話しますわね。」

永遠

「いや、ワシは別に…」

セシリア

「いえ！聞いて下さい!!?…聞いて欲しいんです…」

永遠

「そうか…ならその前に場所を変えんか？いつまでも立ちっぱなしでは疲れるじやろ？」

セシリア

「そうですね。」

ワシ等はとりあえず休憩室に移動して自販機で飲み物を買うと、備え付けの椅子に座るとオルコットさんが自分の両親の事を話し始めた

家を守り大きくするために尽力した母とその母に対して卑屈な父を見て育ったこと、その為、母は尊敬しているが父に対しては憤りを感じていた

しかし、ある時、両親を列車の事故で亡くしてしまい、それ以来勉強を重ねて周囲の大人たちから両親の遺産を守る為に頑張っていたことを話してくれたんじや

セシリア

「…わたくしは母はともかく父には誇りが持てません。…ですから、母だけでなく父に

も誇りを持ってしているヒノエさんが羨ましいんです。」

永遠

「…誇りつて程でもないがおお…」

セシリア

「ヒノエさんがそうは思わなくてもわたくしにはそう思えます！…わたくしもヒノエさんの様に胸を張って父と母の話をしてみたいですわ。」

永遠

「そうか…」

しかし、彼女の両親…もしや？

永遠

「…のう、オルコットさん。いくつか聞いても構わんか？」

セシリア

「はい、いいですけど。」

永遠

「話を聞く限りお主の両親は仲が悪かったんじゃないやよな？」

セシリア

「ええ、母は父を見下し、父は母に屈服してましたわ…」

永遠

「それは、何時からじゃ？」

セシリア

「何時からと申されても…わたくしが物心つく頃にはそうなっていましたわ。」

永遠

「つまり何年もの間、仲が悪いにも拘らず離婚もせずに一緒にいたと言うわけじゃな？」

セシリア

「?…そうですわね…」

間違いないかも知れんな…後で東さんに調べてもらうかの

永遠 Side out

セシリア Side

ヒノエさんがしてくる先程からの質問、一体どういう事なんでしょうか？

ですが、今までの質問から彼が導き出した答えにわたくしは耳を疑いました

永遠

「フムツ………オルコットさん。…これはワシの予想なんじゃが、お主の両親は仲が悪いフリをしていたのではないか？むしろ夫婦仲は良かったんじゃないかのお？」

セシリア

「えっ!?!…で、でしたら何故、仲の悪いフリなど…」

永遠

「…おそらく…お主を守る為か…お主の家に擦り寄る輩を排除する為、ではないかの?」

セシリア

「わ、わたくしを!?!」

永遠

「そう考えると辻褄が合うんじゃないよ。お主の両親が仲が悪いにも拘らず一緒に居続けた理由にも説明がつくんじゃ。」

セシリア

「!?!」

永遠

「多分じゃが…お主の父は、自ら道化や餌になっておったんじゃない。…不甲斐ない父親を演じる事でお主の家に群がる連中の目を自分に向けさせる事で、そやつらをお主から遠ざけたんじゃない。…そして父親に近寄ってきた所を母親が駆除しておった…そんな所だと思っんじゃない?」

そ、そんな……だとしたら…わたくしは…お父様なんて事を…

永遠

「最初にも言うたがあくまで予想じゃ。…じゃが、ワシの予想が当たっていたとしたら………オルコットさん、お主は両親に愛されておったと言う事じゃよ。」

セシリア

「!?…お父様…お母様…」

永遠

「お主はさつき父を誇りに思えないと言うとつたが…もし予想通りなら、自慢の父親ではないかの?…家族を守る為に自分を犠牲にし続けた…立派な父親ではないのかのお。」

セシリア

「あ…ああつ…うあああああああつ…お父様あああーっ!…お母様あああーっ!…」

ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!お父様、お母様、ごめんなさい!

わたくしがバカでした!ごめんなさい!?

セシリア Side out

永遠 Side

弱ったのお…

セシリア

「うええええええええええーん!!」

泣かすつもりは無かつたんじやがな…

とはいえ、今は好きだけ泣かせておくかの…

永遠

「…好きだけ泣きんさい…溜めこんどつたモンも全部出しんさい…」

セシリア

「!?…う、うわあああああああーん!!」

永遠

「うおつとー!…よしよし…」

抱き着いて来るとは思わんかつたが…まあ、よいか…

とりあえず背中をさすつとくかの…

この娘も苦労しとつたんじやな…

く永遠 Side out

く千冬 Side

千冬

「……………」

セシリア

「うわあああああああああーんっ!!」

火ノ兄に模擬戦の説明をしようと探していたんだが…今は出て行かない方がいいか

…

それにしてもセシリア・オルコツトか…火ノ兄の推測通りだとしたら、彼女にとつて

は自慢の両親だな…私達の親とは比べ物にならない

しばらくこのままにしておいてやるか…

真耶

「あっ！織斑先「シッ！」っ!？」

千冬

「静かにしてください!」

真耶

「すみません…一体どうしたんですか?」

千冬

「(あれを…)」

私はやってきた山田先生に泣いているオルコットとそれをあやす火ノ兄を見るように施した

真耶

「(!?!:何かあったんですか?)」

千冬

「(色々あったんですよ。:今はそつとしておきましょう。)」

真耶

「(::そうですね。でも、この後あの二人は試合なんですけどどうします?)」

千冬

「(試合の順番を最後にしてください。理由は火ノ兄は試合内容の説明の為、オルコットはI Sの調整の為という事にしておいてください。)」

真耶

「(フツツ、分かりました。任せてください!)」

私と山田先生が休憩室を後にする時、火ノ兄がこちらに向かって僅かだが頭を下げていた:::気づいていたのか

フツ:::さて、他の連中を説得してくるとするかな

く千冬 Side outく

第019話：父と母の真実

セシリア Side

わたくしは数年ぶりに声を上げて沢山泣きました：

ヒノエさんはわたくしの父が家族を思いやる優しい人だと言ってくれさった：

母と一緒にわたくしをずっと守ってくれていたのだとおっしゃって下さいました：

真実は分かりません：それでも、嬉しかった！父と母の二人の娘としての誇りをわたくしに与えてくださいました

セシリア

「…ヒツク…グスツ…ハア…ありがとう…ごぎいます…」

永遠

「…礼を言われることはしとらんよ。…むしろ、ワシの勝手な解釈でお主を泣かせるような事を言ってしまうすまなかつた。」

セシリア

「…いいえ…ヒノエさんのお陰でわたくしは父と母に誇りを持てるようになりました。」

永遠

「…じゃが…真実は分かつたらんのだぞ？違つとつたらお主の心は深く傷ついてしまふじやろう。…そうなたつた場合はワシはどう償えば…」

セシリア

「…ですから国に戻り次第、父と母の事を調べてみようと思います。…例え、ヒノエさんの予想と違つても今日のこの時、この想いは絶対に忘れません。そして、ヒノエさんの事をわたくしは絶対に恨みません。」

永遠

「…強いのお、お主は…」

セシリア

「そんなこと…あ、あの、ヒノエさん！…わたくしの事はセシリアとお呼びください。さんもいりません。…後、ヒノエさんの事を…と、永遠さんと、呼んでもいいですか？」

永遠

「ん？…ああ、構わんよ。セシリア…」

セシリア

「…ありがとうございます、永遠さん♪」
／／

よかつたですわ…

くセシリア Side outく

く永遠 Sideく

セシリアを元気づけたのはいいんじやが真実はどうなつとるんじやろうかのお…
ワシを恨まんと言うとるが…違った場合、心が傷ついてしまうのは確実じやしな…
どうするかのお…

P r r r r r

永遠

「ん？すまんセシリアちよつと待つてくれ。…はい、もしもし。」

一体誰が…って、この携帯をくれたのは東さんじやし、番号を知つとるのも東さんと
クロエだけじやつたな

束

『ハロハロく、とーくん？東さんだよ〜♪』

永遠

「ああ、東さん、丁度良い時に、すみませんがちと調べて欲しい事が…」

セシリア

「え!?!…束?…」

東

『フフン♪分かってるよ。オルコット夫妻の事だね?』

永遠

「何故そのことを?...まさか、この携帯...」

東

『そういうこと♪ま、その話は後でするとして、とーくん、携帯をスピーカーに切り替えて。』

永遠

「分かった...」

ワシは携帯をスピーカーに切り替えてセシリアにも聞こえるようにした

東

『さて、話は聞いていたよ。セシリア・オルコットちゃん。私は篠ノ之東だよ♪』

セシリア

「し、篠ノ之博士!は、初めまして、イギリスの代表候補生をしております、セシリア・オルコットと申します!」

東

『うん!よろしくね♪早速だけどね、君の両親の事、東さんがもう調べちゃったよ。』

セシリア

「えええっ!？」

東

『もし君が聞きたいならこの場で教えてあげるよ。どうする?』

セシリア

「……………お願いします! わたくしは1秒でも早く両親の事を知りたいんです!」

東

『分かったよ。…というか、とーくんつてき…探偵になれるんじゃない?』

ん? それはどういう…そうか!

セシリア

「そ、それは…つまり…」

セシリアも気づいたか!

東

『とーくんの推理は殆んど正解だよ♪君の両親は君を守る為に周りの馬鹿共を騙して排除してきたんだよ。』

セシリア

「ほ、本当ですか?」

「あ〜〜お前達…模擬戦の時間だ…すまんがこれ以上は待つてやれん…」

永遠

「なぬっ?…ゲ!開始時間を過ぎとる!?!」

セシリア

「グスツ…ああ!わたくしもですわ!?!」

いつの間にかこんなに時間がたつとったのか!

セシリア

「ど、どうしましょう!このままでは試合放棄で不合格ですわ!」

永遠

「落ち着かんか、セシリア!恐らく大丈夫じゃ!」

セシリア

「え?何故ですの?」

永遠

「織斑さんが今頃呼びに来たからじゃ。」

千冬

「まあ、そういう事だ。お前たち二人の試合は今日の最後に変えておいた。」

真耶

「さすがにこれ以上は待てないので急いで準備をお願いします。オルコットさんはこれからすぐですから早くして下さいね。その次が火ノ兄君です。」

セシリア

「はい、すぐに！」

永遠

「頑張るんじゃぞ！セシリア。」

セシリア

「任せて下さい！今のわたくしに不可能はありませんわ！」

そう言うときセシリアは山田さんと試合の準備に向かって行った

千冬

「…あの様子なら試合の方は大丈夫だな。…さて火ノ兄、お前はその間に試合のルールを説明しておくぞ。」

永遠

「はいよ。つとその前に…東さん、セシリアの両親の件、ありがとうございます。」

千冬

「何!?!」

東

『いいよ気にしなくて♪東さんとしてもあの子の両親は久しぶりに好感が持てる人達だったからね♪』

千冬

「…東…お前ホントに変わったな。」

東

『おや、ちーちゃん、久しぶり♪まあ、それはとーくんにお世話になったからだね♪』

千冬

「聞きたかったんだがお前と火ノ兄はどういう関係なんだ？」

東

『ん、東さんの乗ったロケットがとーくんの島に墜落してそのまま居ついたんだよ。』

千冬

「…それだけか？…それだけでお前がここまで変わるとは思えんのだが？」

東

『まあその時に色々あったんだよ。とーくんに思いつきり説教されたからね。』

千冬

「説教って！…内容は分らんがお前がその説教を真面目に聞いたのか？」

東

『失礼だなく……そりやそうだよ……とーくんの説教は10年前の事なんだから……』

千冬

「な!?……火ノ兄!お前知ってるのか!？」

永遠

「束さんを問い詰めたんじやよ。ここではあまり言えんがお主にも少し言つとくぞ。」

千冬

「な、何だと!」

永遠

「あの事件が引き金になってこの世界は狂っていったんじや!そして、その元凶は束さんとお主じや!例え束さんに誘われたからと言つてもお主も同罪じや!束さんにはその罪を認識させる為に説教をした!織斑千冬!お前はこの世界を壊した責任をどう取るつもりじや!」

千冬

「……………それは……」

永遠

「束さんはその答えを今も探しておる。お主はどうじや?束さんに全ての責任を押し付けるか?無関係と言つて好き放題に生きるか?束さんと同じように償う方法を探すか」

？」

千冬

「……………」

永遠

「まあどうしようとお主の勝手じゃ。じゃが、償うというなら、その時はワシはお主らを手伝うつもりじゃよ。」

千冬

「…わ、私は…」

永遠

「一つ言つとくがワシはお主の正体を誰にも言わん！ワシが言つても意味が無いからのお。…さて、説教はこの位にしとくかの。束さん、ワシも試合があるんでもう切るぞ。」

束

『うん、終わったら連絡してね♪迎えのロケットを送るから。』

永遠

「あいよ！それじゃ、また後で。」

携帯の事は帰ってからでいいか

永遠

「さて織斑さん模擬戦のルールを教えてくださいませんかのお。」

千冬

「あ、ああ……」

永遠

「はあ……今はワシの言った事を覚えておればいい。すぐに答えろなどは言わんよ。……
ほれ、いい加減頭を切り替えんか！」

千冬

「……分かった……まずは…………」

さて、この人は答えを出せるかのお？

く永遠 Side out く

第020話・模擬戦【ドットブラ斯拉イザーVS霧纏の淑女】

（永遠 Side）

織斑さんから試合の説明を聞き終わったワシが試合会場に向かつとると試合を終えたセシリアと会った

永遠

「おお、セシリア！試合には勝ったのか？」

セシリア

「はい、わたくしと「ブルー・ティアーズ」なら余裕でしたわ♪…これも永遠さんのおかげですわ！」

永遠

「ワシは何もしとらんよ。お主の両親の事を調べてくれたんも東さんじゃしな。礼なら東さんに言うてくれ。」

セシリア

「いいえ！永遠さんのおかげです！…本当に感謝しております。…あの、一つお願いが

…

永遠

「何じゃ?」

セシリア

「篠ノ之博士にお礼を伝えておいて下さいませんか?…わたくしには連絡する方法が無いもので。」

永遠

「そういえばそうじゃったな…分かった伝えておくぞい。」

セシリア

「ありがとうございます!」

永遠

「…所で『ブルー・ティアーズ』とは…お主の専用機かの?」

セシリア

「はい、その通りですわ。」

永遠

「専用機を持つとは、やはりお主は凄いのお。」

セシリア

「そ、そんなこと…」／／／

永遠

「時に今からワシの試合なんじゃが見ていくか？」

セシリア

「よろしいのですか!？」

永遠

「ああ、専用機を持つお主に意見を聞いてみたいので。」

セシリア

「わたくしでよろしいのでしたら…」／／／

永遠

「ありがたい…では行くかの。」

セシリア

「はい♪」

という訳でセシリアと一緒に会場に向かったんじゃ…

織斑さんにセシリアも試合を見れるように頼んだんじゃが、条件として入学するまで今日の試合の事は誰にも口外しない様に言われたんじゃ

無論、イギリス政府への報告も禁止されたが、セシリアはその条件を承諾して、織斑

さんと管制室でワシの試合を見ることになった

く永遠 Side outく

く千冬 Sideく

これから火ノ兄の試合だが、事前の情報によるとアイツは既に専用機を持っているの事だった

機体のスペックデータも見せて貰ったが全身装甲フルスキンの第3世代型の機体か…何か違和感を感じるな

それもこれからの試合を見れば分かるかもしれないな…

そんな事を考えていると、アリーナに火ノ兄が出てきたが…ISを纏っていないだど！何を考えてるんだ？

セシリア

「永遠さん、ISはどうしたんでしょうか？」

真耶

「分かりません。」

すると、火ノ兄は腰の後ろに差していた刀を抜くと切っ先を正面に向けた…

アレは…軍刀か？

千冬

「何をするつもりだ？」

そのまま、正面に刀で円を描くとその軌跡は光の円になって、そこから火ノ兄を光が包み込んだ

光が消えると私達の前には白い全身装甲フルスキンのISを纏った火ノ兄がいた

真耶

「な、なんですか!?!あのISは!?!」

千冬

「あれが火ノ兄のIS【ドットブラ斯拉イザー】か!?!」

セシリア

「【ドットブラ斯拉イザー】…全身装甲フルスキンのISなんて初めて見ましたわ!?!」

「【ドットブラ斯拉イザー】には驚いたがとりあえず試合を始めなければな

千冬

「山田先生!試合を始めてください!」

真耶

「は、はい!?!」

セシリア

「あの、織斑先生…永遠さんの対戦相手は誰なんですか？」

千冬

「ん？…ああ、あいつはもう一人と同じで勝敗に関係なく入学が決まっている。だが、実力を図る意味も含めてこの学園の生徒会長に相手を頼んだ。」

セシリア

「生徒会長、ですか？」

千冬

「お前はまだ知らなかったか？ I S 学園の生徒会長は学園最強の人間がなる事になっている。」

セシリア

「学園最強!? そんな人をぶつけたんですか!？」

千冬

「そうだ。…さあ、始まるぞ。」

さて、アイツの実力を見せて貰おうか

く千冬 Side out く

く永遠 Side く

「ドットブラ斯拉イザー」を纏ったワシの前に髪の色と同じ水色のISを纏った女子おなごが現れた

永遠

「お主がワシの相手か？」

？

「ええ、そうよ。私は更識楯無、IS学園では生徒会長を務めているけどロシアの国家代表でもあるわ。そしてこれが私のIS【ミステリアス・レイディ（霧纏の淑女）】よ。よろしくね、火ノ兄君♪」

永遠

「これはご丁寧に。ワシは火ノ兄永遠、一応二人目の男の操縦者となつとる。こやつの名は「ドットブラ斯拉イザー」じゃ。…しかし、国家代表が相手とは驚いたのおく…」

楯無

「とてもそんな風には見えないわよ。それに私も驚いたわ。あなたのそのISには！」

永遠

「そうなんか？」

楯無

「そうよ！フルスキャン全身装甲なんて私も初めて見たんだもの。…その力、見せて貰うわ！」

そう言うのと生徒会長は持っていた槍を構えた

永遠

「承知した!」

へセットアップ ブラストソード

それに合わせて、ワシは【マルチギミックサック】を片手剣にして構えた

楯無

「何よその武器?」

永遠

「【マルチギミックサック】 っちゆう物じゃ。」

真耶

『それではこれより、火ノ兄永遠VS更識楯無の模擬戦を始めます!』

山田さんのアナウンスが始まる

真耶

『それでは、試合開始!』

ワシは生徒会長に正面から斬りかかった

じゃが、さすがは国家代表、簡単に受け止められてしもうた

楯無

「甘いわね！その程度では私に一撃当てられないわよ。」

永遠

「じゃろうな！」

ワシは距離を取ると「マルチギミックサック」を放り投げた

楯無

「？」

へセットアップ ブラストマグナム

楯無

「二丁拳銃!？」

片手銃に切り替えて射撃攻撃を始めると「マルチギミックサック」の変形に驚いたのか回避が遅れたせいで2発ほど命中しおった

楯無

「ぐっ！…銃にもなるなんてね。…ならこっちも射撃よ！」

生徒会長は槍に装備された4門のガトリングで攻撃してきたが、ワシは「マルチギミックサック」を再び変形させた

へセットアップ デュアルブレード ブラストガーター

双剣を回転させ攻撃を防ぐとそのまま生徒会長に向かって突っ込んでいった

楯無

「クツ…まだ変形するなんて…一体いくつの形態があるのよ！」

ワシに射撃が効かないと分かると生徒会長は槍を構えなおし接近してきたワシの双剣を受け止めるとそのまま鏢迫り合いになった

永遠

「…これで全部じゃよ…」

楯無

「え？」

永遠

「変形はこれで全部じゃと言ったんじゃ！」

ドガツ

ワシはそう言つて生徒会長に回し蹴りを喰らわせた

楯無

「ぐうっ！」

生徒会長が怯んだ隙にワシは左手の【マルチギミックサック】を盾から片手銃に変形させ至近距離で撃った

楯無

「きゃああああーっ!!」

フム、今度は結構当たったの、じゃが一端距離を取るかの

く永遠 Side out く

く楯無 Side く

みんなく私は更識楯無♪IS学園の生徒会長でくロシアの国家代表よん♪

つてそんなこと言ってる場合じゃないわね！私は今、織斑先生に頼まれて二人目の男性操縦者の模擬試合の相手をしてるんだけど…

何なのよこの子！国家代表の私と互角の実力を持つてるなんて聞いてないわよ!?

しかも、何このIS！フルスキャン全身装甲だし、武器は変形しまくるし、今までのISの常識が通用しないわよ！

楯無

「…ぐうう！」

さっきの至近距離からの射撃は効いたわね…まさか、左手の盾だけ銃に変形させるなんて…考えてみたらそのぐらい出来て当然か！

今は様子見の為か距離を取ってるけど…それが命取りよ！

楯無

「…ねくえ？今日はやけに蒸し暑いとは思わない？」

見せてあげるわ！「ミステリアス・レイディ」の真の力を！

永遠

「ん？…悪いんじやが全身装甲フルスキのせいでしょうというのは分からんのじやよ。」

ガクツ…私のいつものネタが通じない…まあいいわ！

楯無

「そ、そう…なら仕方ないわね…」

永遠

「お主さつきから何を言つとるんじや？やる気あるんか？」

楯無

「あるに決まつてるでしょ！私にこれを使わせるとは思わなかったけどね！」

永遠

「？」

楯無

「恨まないでねく♪…喰らいなさいクリア・パッション【清き熱情】！」

永遠

「!?」

「な、何なの、その姿!?それに、なんでダメージを受けてないの!?!」

永遠

「ラグナロクフェイズ」：お主がさつき使った爆発と同じような位置付けでな、「ドット
ブラスライザー」の高出力形態じゃよ!」

高出力形態!?何よそれ!? I S 自身も変形するなんて聞いてないわよ!?

楯無

「だ、だとしても【クリア・バツン熱情】を受けたのに何で無傷なのよ?」

永遠

「簡単じゃよ。お主が爆発を起こすのと同時にこちらも【ラグナロクフェイズ】を発動させたんじゃよ。」

楯無

「え?」

永遠

「爆発の衝撃を【ラグナロクフェイズ】に変形する時に起きる余剰エネルギーで相殺した
だけじゃよ。」

楯無

「そ、そんな!?!…【クリア・バツン熱情】が…効かないなんて…」

私の一撃必殺の技を余剰エネルギーだけで防ぐなんて

どうする！もうナノマシンも残ってない！【ミストルテインの槍】も【沈セツクむ床ヴァベツク】も使えない…後は【蒼流旋】しか使える武器が無い

こちらは殆どの武装を失ったっていうのに向こうは殆どノーダメージ…

でも、ここで引くわけには…負けるわけには…いかない!!

永遠

「どうしたんじゃ？もう手品は終わりかのお？」

楯無

「クツ…ええ、ここからは…正面からのガチンコ勝負よ！」

永遠

「よかろう…いくぞおおおーっ！」

火ノ兄君が向かって来た…でも！

楯無

「は、速い!？」

バキッ

楯無

「グッ！」

両腕に展開された爪で攻撃してるけど…パワーもスピードもさっきまでとは違いすぎる！

何なのよ…このIS！

永遠

「うおりのいやあああああーっ！！」

ドガツ…バキツ…ベキツ…

楯無

「ガツ…グツ…ガハツ！」

くううつ、動きが早すぎて追いつけない…

永遠

「…止めじゃあああーっ！」

楯無

「え!？」

気付いた時には火ノ兄君は私の真上にいた…

永遠

「必殺ファンクション！」

へアタックファンクション シヤイニング・ラム

第021話：試合後

く千冬 Side)

今の私はただ驚く事としかできなかつた

真耶

「な、何ですかあの性能!」

セシリア

「永遠さん…凄すぎますわ…」／／／

オルコットが頬を赤らめているがそれは置いておこう

しかし、何だあのISは？ 束から貰ったスペックデータとは明らかに違いすぎるぞ!

…【マルチギミックサクク】と呼ばれる変形武器

…機体の能力を向上させる高出力形態【ラグナロクフェイズ】

…本当に第3世代なのか?…下手をすると第4世代を超えているぞ

一度火ノ兄と束に聞いただしておくか

千冬

「山田先生、火ノ兄をココに呼んで下さい。」

真耶

「はい、分かりました。」

千冬

「オルコツト、お前は どうする？」

セシリア

「わたくしもちちらにいて宜しいでしょうか？」

千冬

「ああ、構わんぞ。」

セシリア

「ありがとうございます♪」／／／

こいつ火ノ兄に惚れてるな…まあ分からなくはないが

く千冬 Side outく

く永遠 Sideく

永遠

「あゝやっと終わったの…」

楯無

「お疲れ様々。火ノ兄君強いわね々お姉さん驚いちやった。」

永遠

「そうかの…よう分からんなく…」

楯無

「…ねえ…君つてさつき私と試合した子よね？」

永遠

「そうじゃよ？」

楯無

「…さつきと雰囲気が違うんだけど？」

永遠

「はあ？」

「そう言われてもなく…」

真耶

「火ノ兄君！織斑先生が管制室の方に来て欲しいそうです！」

永遠

「あいよ…」

「管制室か…セシリアもまだおるかの？」

く永遠 Side outく

く楯無 Sideく

織斑先生が呼んでるっていうから私も付いて来たんだけど…

セシリア

「永遠さん！国家代表を相手に勝ってしまったわなんて流石ですわ！」

永遠

「カカカツ、大した事無いぞい。」

セシリア

「フフツ、ご謙遜を…」／／／

永遠

「いやホントの事じゃが。」

…この子、誰？

楯無

「ね、貴方、ココは関係者以外は立ち入り禁止なんだけど。」

セシリア

「はい？…許可なら貰ってますわよ。」

楯無

「えー…：ホントに？…：所で貴方は？」

セシリア

「あー！これは失礼いたしました。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生です。」

楯無

「何でそんな子がココに？」

理由を聞こうとしたら織斑先生がやって来た

千冬

「来たか火ノ兄！…：早速だがいくつか聞きたい事がある。」

永遠

「…：ワシのI Sの事かの？」

千冬

「そうだ。…：事前に束から提出された【ドットブラスライザー】のスペックデータと今日のお前の試合を見ると明らかに性能が違いすぎる。」

え!?今、束って！まさか篠ノ之束博士!?

それに性能が違うってどういうこと？

楯無

「ちよつと待つて下さい！今のはどういう意味ですか？」

千冬

「言つた通りの意味だ。資料と実物の性能が違いすぎる。」

楯無

「そんな事…」

千冬

「説明してもらどうぞ！あのISの事を！」

永遠

「そう言われてもワシが造つたもんで無いからなく…説明なんぞ出来んぞい。」

確かにその通りよね…実際に戦つた私だから分かるけど、あんなIS篠ノ之博士にし
か造れないわよね

千冬

「……………そうか…なら、お前のISをこちらで調べたい。暫くの間預けてくれないか？」

永遠

「別に構わんが…壊さんでくれよ。」

真耶

「壊しませんよ!!」

千冬

「私達が壊すとも思ったのか？」

永遠

「まあ東さんにも言った事じゃから念の為と言う奴じゃよ。」

千冬

「束にも言ったのか………ん?…オイ!それはどういう意味だ!」

永遠

「は?何がじゃ?」

千冬

「今お前は『束にも言った』と言った。それはつまり【ドットブラ斯拉イザー】を造ったのは束では無いという事だな?」

真耶

「ええっ!?!」

楯無

「篠ノ之博士以外にあんなI Sを造れる人がいるっていうの!」

セシリア

「永遠さん！どういう事ですか？」

永遠

「ナンノコトカノ〜…」

露骨に目線を反らしたわね

この子、嘘をつくのは苦手みたいね

？

「とーくんって時々おつちよこちよいになるんだよね〜♪」

楯無

「誰!?!」

千冬

「その声は…束!?!」

セシリア&真耶

「ええっ!?!」

永遠

「束さん!」

束

「ハロハロ〜、久しぶり&初めまして♪私が天災の束さんだよ〜♪」

何でここにISの生みの親が来てるのよー！？
く楯無 Side out く

第022話：暴露②

く千冬 Sideく

東

「やつほく♪ちーちゃん、さつきぶりく♪」

千冬

「電話ではな。…実際に会うのは随分と久しぶりだな。」

東

「ニヤハハツ♪そうだねく。」

まさか東が来るとはな…

セシリア

「あ、あの…篠ノ之博士！わ、わたくしセシリア・オルコットと申します！」

東

「ん？君がセーちゃんか♪君もさつきぶりだねく♪」

セシリア

「セ、セーちゃんですか！…はっ！あの篠ノ之博士、父と母の事、ありがとうございます」

！改めてお礼を言わせて下さい。」

オルコツトをあだ名で呼ぶだと！……ホントに変わったなコイツ

東

「気にする事ないよ♪それにね、さつきとーくん達にも言つたけど、君の両親は東さんが好感が持てる人達だったからね。久しぶりに気分が良くなる人を知る事が出来たよ。」

セシリア

「あ、ありがとうございます！……そう言つて……いただける……グスツ……父と母も……喜んで
いると……ウウツ……思います。……」

永遠

「良かったの〜セシリア。」

セシリア

「グスツ……永遠さんのおかげです……ありがとうございます！」

オルコツトの両親は……本当に娘の事を大切に想つていたんだな………羨ましいな……
なあ一夏……

真耶

「ううっ……良かったですね〜……」

楯無

「……………あの〜…話が見えないんですけど〜…」

束

「誰？この巨乳メガネと水色？」

真耶

「巨乳メガネ!？」

楯無

「水色って！髪の色ですか？私達の扱い雑すぎませんか？」

確かに変わったが…やっぱり束は束だったか…なぜか安心したな

千冬

「もう少し言い方を考えろ！…巨乳メガネは私の同僚で、水色はこの学園の生徒会長だ。」

真耶&楯無

「織斑先生もヒドイ！」

千冬

「冗談だ。」

永遠&束

「アハハハハハッ!!!」

セシリア

「フフフツッ！」

しかし、ここに東が現れたのはちようど良かった

く千冬 Side outく

く楯無 Sideく

まさかこの私が山田先生と一緒に織斑先生に弄られるなんて

千冬

「さて、弄るのはこの位にして、東…火ノ兄のISの事、何か知っているなら教えて貰うぞ。」

やつと本題に入ったわね…

東

「うくん、それは東さんじゃなくてとーくんに聞いたほうが良いよ。」

千冬

「何？…火ノ兄、どういうことだ？」

永遠

「…仕方ないのお…ISの事を話すんじやったらワシの事も話さねばならんく…」

千冬

「ならそれも話せ！心配しなくても聞いた事は誰にも話さん！山田先生、更識、オルコツト、お前達もだ！」

真耶

「分かりました！」

セシリア

「絶対に言いません！」

楯無

「…分かりました。」

千冬

「更識、今の間は何だ？」

楯無

「え?! いえ、何でもありません！」

やばい!?

千冬

「更識…お前は出て行け。即答出来なかった時点でお前は危険だ。」

楯無

「そんな！」

束

「そうだね。悪いけど君にはまだ聞かせない方がいいね。日本の対暗部用組織『更識家』
17代目現当主・更識楯無。」

楯無

「!?…知ってたんですか？」

さすがは篠ノ之博士って所ね…

束

「この束さんに知らない事なんてないよ。悪いけど君が日本政府にとーくんのことを報告する可能性がある限り聞かせられないね。」

…これ以上ココにいるのは無理ね…でも

楯無

「……………ハア、分かりました。…ですが、火ノ兄君に一つだけ質問させて下さい。」

千冬

「…いいだろう。」

永遠

「何じゃ？」

楯無

「…あなたはI S学園の生徒達に危害を加える様な事を考えてる？」

今年は妹の簪ちゃんも入る！…これだけは聞いておかないと！

セシリア

「永遠さんはそんな事をする人ではありません！」

楯無

「オルコットさんは黙ってて！これはI S学園生徒会長として聞いているの！」

セシリア

「!？」

永遠

「…ワシの望みはな、気のおける者と静かにのんびり暮らすことだけじゃ。それ以外に

興味は無い。」

楯無

「……………分かったわ。今はその言葉を信じさせて貰うわ。」

永遠

「本当の事なんじゃが…」

その言葉が本心が見極めさせてもらおうわよ！それに…

楯無

「では、私はこれで……いつか、お姉さんにも教えてね♪」

私も彼の事が知りたいしね♪

く楯無 Side outく

くセシリア Sideく

更識会長が出て行かれたのでやっと永遠さんのお話を聞けますわね

それにしてもあの方、永遠さんが学園に危害を加えるかを聞くなんて、失礼千万ですわ！

永遠さんが…わたくしの両親の事を考え励まして下さった永遠さんが…そのような事をする筈ありませんわ！

千冬

「それでは火ノ兄、改めて聞かせてもらおうか？」

永遠

「うむ、実はワシはな……」

そして永遠さんはご自分の事を話してくださいました

お話の内容は【第00話：プロローグ】を読んで下さいまし♪

全てを語り終えた時、わたくし達は…

千冬

「…プツ…ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!」

東

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!」

真耶

「織斑先生…プツ…篠ノ之博士も…フツフツ…」

セシリア

「…フフツ…フフツ…」

笑っていました

真耶

「クフフツ…ふ、二人とも…クフツ…笑いすぎですよ…」

千冬

「アハハハハッ…な、何を言ってる…クククツ…山田…先生も…クハハッ…笑ってるだろ…ア…ツハハハハハハハハハハッ…」

東

「アハハハハハハハハハハッ…あゝ久しぶりに聞いたけど…やっぱり面白いね…ヒ…ツヒ

くツ…お腹痛い…」

永遠

「……………」プルプル

あら？気のせいかな永遠さんの肩が震えているような？

永遠

「……………いい加減にせんかあああああーっ！！」

ガンツ！

セシリア

「アタツ！」

バゴンツ！

千冬

「オゴツ！」

ゴンツ！

真耶

「アウツ！」

ドゴンツ！

束

「アイターツ！」

永遠さんわたくし達全員に拳骨するなんて

セシリア

「い、痛いです〜…」

永遠

「何時までも笑つとるお前らが悪い！特にその二人!？」

織斑先生と篠ノ之博士は特に大声で笑つてましたものね〜…

千冬

「ツ〜ツ！火ノ兄！私と束だけ音が大きかったぞ！」

束

「ホントだよ〜何で束さんとちーちゃんだけ…」

永遠

「お主ら二人が馬鹿笑いしとるからじゃ！」

千冬

「オイ！馬鹿笑いは無いだろ！」

永遠

「そうとしか見えんわい！…いい加減話を続けるぞ！」

そ、そうですわね！
くセシリア Side
o u t
く

第023話：向かうべき場所

く千冬 Sideく

信じられんな…別の世界から転生してきたなど…だが、それなら火ノ兄の機体も分かるな

千冬

「…しかし、お前の前世は何というか…運が無かったというか…どう言えばいいのか…」

真耶

「すみません…私には何も言えません…」

永遠

「言わんでいいわいつ!？」

真耶

「すみませ〜んっ!」

こいつ本気で怒ってるな…

セシリア

「…ですが…わたくしは感謝しております。」

千冬

「何をだ？」

セシリア

「…永遠さんが前世で亡くなった原因は…確かにその、酷い理由ですけど…そのお陰でわたくしは、永遠さんに出会う事が出来ましたから…」
／／／

東

「なるほど…そういう考え方もあるね〜♪」

永遠

「…そうじゃな…確かにセシリアの言う通りじゃな。あの阿保神のお陰でセシリアや東さん、クロエに出会えたんじゃないからな。」

セシリア

「永遠さん♪」
／／／

東

「その通りだよ♪」

永遠

「二人とも、ありがとな！」

火ノ兄を死なせた神に、少なくとも東やオルコットは感謝してるみたいだな

永遠

「話が逸れてしまおうたな。問題はワシの前世では無く、ワシのISの出所じやろう。」

千冬

「ウ、ウムツ：そうだったな。：だが、これで違和感の正体が分かったな。」

セシリア

「織斑先生、違和感とは何のことでしょうか？」

千冬

「ああ、事前に提出された資料を見ていて何か違和感を感じていたんだ。しかも、試合が進むにつれてその違和感は膨れ上がっていった。」

束

「へへ、さすがちーちゃん。【ドットプラスライザー】の異質さに気付いてたんだ。」

千冬

「まさか神が造ったISだとは思わなかったがな。」

真耶

「あの、篠ノ之博士：博士はあの機体を調べられたんですよね？」

束

「ん？したけど…」

真耶

「では、博士は【ドットプラスライザー】の解析が出来たんですか？」

東

「……………」

千冬

「…東？」

どうしたんだ？…まさか!?

千冬

「……………お前でも無理だったのか？」

セシリア&真耶

「ええっ!？」

東

「…ウガーーーーッ！そうだよ！半分も出来なかったよ！仕方ないでしょ！東さん以上の技術で造られてるんだから！完全にオーバーテクノロジーの塊だよ！東さんでも造れないよ！造れるなら造ってみたいよ！文句あるかあああああーーーーっ!!!」

セシリア

「ヒーーーーーッ!!」

真耶

「す、すみませーんっ!!」

千冬

「た、東がキレた!それ程の物なのか!」

東

「ハアハア、そういう事だよ。まあ、とーくんが協力してくれたおかげで何とか出来たけどね。一人じゃ無理だったよ。」

千冬

「協力とはどういう事だ?」

永遠

「鍵を開けただけじゃよ。」

セシリア

「鍵、ですか?」

東

「そー東さんだけじゃ全部調べられなくてね、とーくんに聞いてみたら神様にISの設計データや元になったデータがISの中にあるって教えてくれたんだ。」

千冬

「なんだと！」

永遠

「じゃが肝心のデータにロックが掛かっとな。東さんでも開けられんかったんじやよ。」

真耶

「篠ノ之博士でもですか!？」

東

「そうだよ！それで色々考えた結果、とーくんが鍵になってるって分かったんだよ。で、とーくんに鍵を外してもらって、無事にデータも手に入れて解析も済んだんだよ。」

千冬

「東、そのデータは今ここにあるか？」

東

「悪いけどデータはあげないよ。」

千冬

「何故だ!？」

「どういうつもりだ？」

東

「ちーちゃんに渡すってことは、この学園で管理するってことだよ。もしデータの一部でも奪われたら世界は今以上に酷くなる。そう断言出来るほどなんだよ!」

千冬

「……………だが、お前が持つていても……」

東

「ちーちゃん、東さんはね……これ以上世界を混乱させたくないんだよ……ISによつて誰かを苦しめる原因を増やしたくないんだよ。」

千冬

「東……」

あの東がこんなことを言うなんて……

東

「だからデータは渡せない。このデータはISを本来あるべき姿、あるべき場所に還す為に使いたいんだよ。勿論とーくんの許可も貰つてるよ。」

セシリア

「あるべき姿?」

真耶

「あるべき場所?」

東

「君たちも知ってるでしょ。 I Sは本来、宇宙で活動する為のマルチパワードスーツなんだよ。それが今じゃただの兵器、女尊男卑なんてくだらない思想の象徴に成り下がってる。」

真耶

「…は、はい…」

東

「だから東さんは I Sを宇宙に還してあげたいんだ！そして、いつかはとーくんといっくん以外の男も使える様にして男女平等の世界に戻りたいんだよ。」

千冬

「…東…」

それがお前の出した答えなのか？ I Sを本来の場所に還し、世界のあるべき姿に戻すそれが今の世界を作ってしまったお前の答えなのか…

それに引き換え、私は…

お前と同じ罪を持つ私はその罪の償い方が分からない…見つからない…

仮に私が正体を明かしたとしても、死んだ者は帰ってこない…傷が癒える訳でもない

…

世界中の憎しみが私一人に向くならまだいい、だが、確実に一夏も巻き込んでしまう

…

関係のない一夏を巻き込む可能性がある以上正体を明かす事も出来ない…

結局、私には何も出来る事が無いという事しか分からない…

だが、それでも答えを探さなければならぬんだな…

千冬

「…そうか…私に出来る事があつたら言ってくれ…力になる…」

今の私に出来る事と言つたらそのぐらいしかないか…

束

「お願いね〜♪」

セシリア

「篠ノ之博士！わたくしにもお手伝いさせてください！」

真耶

「わ、私もです！」

この二人は私の様に後ろめたさもなく、純粹に力になりたいんだろうな…

束

「セーちゃんもメガネっ子もありがとね〜♪」

真耶

「ううう…メガネっ子ですか？ 巨乳メガネよりはマシですけど…」

東

「それからセーちゃん、東さんの事は名前がいいよ♪」

セシリア

「は、はい！…えっと、では…東さん…でよろしいでしょうか…」

東

「うん♪それでよし♪」

永遠

「して東さん、これからどうするんじや？」

東

「とーくんは知ってるけど、今、第5世代の試作機を開発してるんだ♪」

千冬

「第5世代だど!?!」

真耶

「各国でも第3世代の開発に取り掛かったばかりなのに…」

セシリア

永遠

「ワシにはその辺がよう分からんがな…」

東

「ちなみに第5世代はIS本来の目的である宇宙で活動する為の試験用の機体だからね。」

千冬

「宇宙か…」

東

「詳細は言えないけど真空の宇宙空間で活動するから全身装甲フルスキんの機体になってるよ。」

セシリア

「永遠さんの機体と同じですね。」

東

「とーくんのお陰で宇宙に行くなら全身装甲フルスキんが一番いいって分かったんだ！」

永遠

「フム…ならワシのISは宇宙で活動できるという事かのお？」

東

「確証はないけど多分できるよ。まあすぐに調べる方法もあるけどね。」

セシリア

「どうやるんですの?」

東

「簡単だよ!水に沈めればいいんだよ♪」

真耶

「な、何ですか!?!」

東

「宇宙空間も水中も呼吸が出来ないのは同じだからね。潜って普通に呼吸が出来て動ければ宇宙でも最低限の行動は出来るんだよ。ちなみに、宇宙飛行士も宇宙空間での活動訓練は水の中でやってるんだよ。」

真耶

「そ、そうだったんですか!?!」

東

「勉強不足だよメガネっ子!仮にもI S学園の教師なんだからさ!」

真耶

「すみません…」

東

「ついでだからとーくん。帰ったら試してみる?」

永遠

「やってみるかの。新型の開発にも役立つじやろ。」

束

「そうだね♪やろ〜やろ〜♪」

千冬

「……………」

今の束は凄く楽しそうだな…

当然か…贖罪の方法も見つかった上に、自分の夢に向かって正しい道を突き進んでい
るんだからな…

束

「およ?どしたのちーちゃん?」

真耶

「織斑先生?」

永遠

「ん?」

セシリア

「どうなさったんですか？」

千冬

「…いや、何でもない…そんなに楽しそうなお前を見たのは久しぶりだと思ったただけだ

…」

東

「う〜ん？そつかなく？」

千冬

「そうだ…」

私も…見つけなければな…

私の贖罪の方法を…

く千冬 Side outく

第024話：約束

（セシリア Side）

わたくしは今、永遠さんと先ほどの試合の事を話し合っています

試合前の約束ですから…ですが

永遠

「セシリア、お主から見てワシの戦い方はどう見えたかの？」

セシリア

「…はい…正直に申せば…言う事はありません…」

永遠

「へ？」

セシリア

「永遠さんの実力はわたくしよりも遥かに上です…むしろわたくしの方が勉強になりました。」

永遠

「何が？」

セシリア

「武器を切り替える際の判断の速さ、そして、更識会長の使った爆発にも瞬時に対応されていきました。…今のわたくしでは永遠さんと戦っても勝てる見込みはありません…」

永遠

「勝てんか…なら、お主はどうする？」

セシリア

「え？」

永遠

「勝てぬ相手だからといって初めから諦めるか？それとも、たとえ勝てずとも意地を見せて食らいつくか？」

「そんな事…決まっています！」

セシリア

「永遠さん……わたくしは…戦いもせずに負けを認めたくありませんわ！父と母はわたくしを守る為にずっと戦ってきました！そんな二人に守られてきたわたくしが、自分より強いからと言って逃げる訳には参りません！もし逃げたら父と母に顔向けができません！」

永遠

「そうか…ならココに入ったら勝負してみんか？ 正々堂々と互いに全力を出し合つてな…」

セシリア

「はいっ！ その時はわたくしの全身全霊をかけてお相手させていただきます！」

永遠

「それは、楽しみじゃのお♪…ココに入る楽しみが一つ増えたわい。」

セシリア

「フフツ♪それはわたくしもですわ♪」

わたくしも今からすぐく楽しみですわ♪

永遠

「ではセシリア、次に会うのは入学の時じゃ。それまでワシも腕を磨いておくぞい！」

セシリア

「あら…それは困りますわね…さらに差がついてしまいますわ！」

永遠

「カカカツ♪そんなに困った顔しとらんぞ？」

セシリア

「フフツ♪そうですわね…わたくしは帰国したらずぐに訓練に入りますわ！ 少しでも永

遠さんに追いつくために、今まで以上に自分を鍛え上げますわ！」

永遠

「そうか、頑張るんじゃぞ！じゃが、無理をしすぎて体を壊さんようにな。適度に休む事も大事じゃぞ。」

セシリア

「はい♪(忠告ありがとうございます)」

永遠

「約束じゃぞ！」

セシリア

「約束ですわ♪」

次にお会いした時、永遠さんとの約束を破らない為にも頑張りますわ！

くセシリア Side outく

く千冬 Sideく

千冬

「ハア~~~~~:」

東

「どしたのちーちゃん？そんな深い溜め息ついて？」

千冬

「ん？…いや、なんでも無い…」

東

「なんでも無い訳ないでしょ。悩み事でもあるの？」

こいつ…分かって言ってるのか？

千冬

「…………お前が羨ましくてな…」

東

「何が？」

千冬

「私たちは、火ノ兄に説教をされる事であったの自分達の過ちを再認識した…」

東

「…うん…」

千冬

「そして、お前はその贖罪の方法を見つけた。…それは同時にお前の夢を目指す行為だ。…しかも、今度は間違わずに正しい道をお前は歩いている。」

東

「…そうだね…」

千冬

「…私には…それが羨ましくてな…火ノ兄に言われて改めて気づかされた。…いくらお前の口車に乗せられたからと言っても、あの事件はお前と私の二人で起こしたものだ。」

「…今の女尊男卑なんて世界を作った原因は私達だ。…全ての始まりは私なんだ!!」

「…今も男と言う理由だけで傷ついている人達が大勢いる…」

「…その人たちが傷つくそもそもの元凶は…私なんだ！」

東

「ちーちゃん…」

千冬

「…何が…何がブリュンヒルデだ!?!…何が世界最強だ!?!…私はそんなに褒められる様な人間じゃない!世界中の人達を不幸にした犯罪者だ!テロリストだ!そんな私が何故のうのうと生きているんだ!」

東

「…じゃあどうするの?ちーちゃんはもうどうしたいの?」

千冬

「それが分からないんだ!…自分でも何をすれば良いのか分からないんだ…:…火ノ兄の言ったように…お前に責任を押し付ける事も考えた…無関係を決め込む事も考えた…:…だが…出来ないんだ…:…それを選ぶ事が…出来ないんだ…」

いつの間にか私は涙を流していた

千冬

「…だから…すべき事を見つけたお前が…私は羨ましいんだ!」

東

「…:…ちーちゃん…:それは私も通った道だよ…:とーくんに言われて…:一年近く一人で考えた…:悩んで、苦しんで、考えた末の答えが今の私なんだよ…:だから私は何も言えない…:何も言わない…:これはちーちゃんが自分自身で考えないといけない事だから…」

千冬

「東…」

東

「…でもね…:一つだけ約束するよ!」

千冬

「え!?!」

東

「…私はちーちゃんがどんな答えを出そうと…それを受け入れるよ！」

千冬

「…本当か？」

東

「本当だよ♪この約束だけは絶対に破らないよ♪ただし！」

千冬

「な、何だ！」

東

「死ぬって言うのだけは絶対に許さないからね！」

千冬

「な！ば、馬鹿か貴様は！いくらなんでも死ぬなんて方法、選ぶわけ無いだろうが！」

東

「本当にく？」

千冬

「本当だ!?いくら私でも死んで楽になりたいとは思わん！」

東

「どうかなく？」

千冬

「東……貴様……いい加減にしろよ！」

こいつは……そんなに私を怒らせたいのか!?

東

「……プツ……アハハハハハハッ……」

千冬

「な、何を笑う!？」

東

「あゝごめんごめん……いやゝやつと怒ったと思つてね。」

千冬

「は?！」

東

「とーくんに説教された時のマネだよ。」

千冬

「マネ?！」

東

「そゝまあ東さんの時は笑わせたんだけどね……一年前、とーくんに叱られた時、私も今

のちーちゃんみたいに泣いて凹んじやっただよ…でも、とーくんがその後すぐに笑わせる方に話を持っていったんだよ♪」

千冬

「火ノ兄は何でそんな事を…？」

東

「とーくんはね、徹底的に凹ませる事で自分のやった事を見つめ直させるんだよ！それを分からせると、怒らせるなり、笑わせるなりして元の状態に戻すんだよ。」

千冬

「無茶苦茶だな…」

東

「まくねく…でも、そのお陰で前向きに考えられる様になっただよ！」

千冬

「そんな馬鹿な…」

東

「じゃあ今のちーちゃんはどうかなのさ？さつきまであれだけ凹んでたけど今はどうかなの？」

千冬

「何?…あれ? そういえば…」

東

「つまりそういう事だよ。…無理矢理戻す事で悪い考えを出来なくしてるんだよ。」

千冬

「…確かに…今は意地でも死んでたまるかって気持ちだな。」

東

「なら、もう大丈夫だね♪でも、ちゃんと自分で考えてね!」

千冬

「分かってる!」

東も答えを出したんだ! 私も見つけ出してみせる!

く千冬 Side outく

第025話：入学準備

～永遠 Side～

試験を終えて数日、ワシは入学の為の準備をしておつた

と言つても準備なんぞ着替えを用意する程度じゃから前日にやればいいんで、今日は
課の畑仕事と鍛錬の合間に束さん達からISの勉強をして貰つとる

時々、束さんの研究を手伝つたりもしとるがの

新型のデータ取りの為とはいえIS纏つて海にダイブしたのは流石に少し怖かつた
がの

束

「とーくん、どうしたの？ぼくつとして？」

クロエ

「兄様？」

永遠

「いや、この間の海に潜つた時の事を思い出してな…」

束

「あく、あれね〜…」

永遠

「てつきり海岸から海に入って行くものと思つとつたのに…まさか、空中から海のと真ん中に落つことされるとはのお…」

束

「ニヤハハツ…でもそのお陰でとーくんの機体、フルスキーン全身装甲のISなら真空の宇宙でも呼吸が出来る事が分かったんだからさ♪」

永遠

「別にそれだけならまだいい！じゃが、海の底まで潜らせる事はなかるお…」

束

「…いや〜、つい勢いで…」

永遠

「何じゃと？」

クロエ

「お、落ちて着いて下さい！その時、取れたデータはしっかり役に立ってますから！兄様の苦勞は無駄じゃありません！」

束

「そもそも、そうだよ！とーくんの犠牲は無駄じゃないよ！」

永遠

「まだ死んどらんわ!？」

勝手に殺すな!？」

東

「ごめんなさ〜い！」

永遠

「全く！」

こんな感じで日々を過ごしていったんじゃ！

〜永遠 Side out〜

〜東 Side〜

東

「と〜ころでとーくん？」

永遠

「ん？」

東

「学園には3機全部持つてくの？」

永遠

「そのつもりじゃが。」

それは困るな……

東

「出来れば【ラインバレル】は置いてつてくれないかな？」

永遠

「【ラインバレル】をか？」

東

「うん！あの子の再生能力を新型に使えないか調べたいんだ！」

永遠

「なるほどの……」

東

「宇宙で活動する時、とーくんの機体の中で一番役に立つのは【ラインバレル】だからね

！」

永遠

「？」

とーくん分かってないみたいだね

クロエ

「いいですか、宇宙では何が起こるか分かりません！」

東

「漂流物に当たって損傷する事だつてあるかもしれないんだよ。それが原因で命を落とすことだつてあるかもしれないんだ。」

クロエ

「そういつた時【ラインバレル】なら壊れてもすぐに直りますしエネルギーも自動で回復します。」

東

「だから【ラインバレル】が一番生存率が高い機体なんだよ！」

永遠

「なるほどな！そういう事じゃつたらいいぞ。」

東

「やったく♪とーくんありがとう♪あ、心配しなくてもずっとじやないから後で届ける

よ♪」

永遠

「別に急ぐ必要は無いからの。それに【戦国龍】と【ドットブラスライザー】の2体があれば十分過ぎる程じゃからな！」

東

「確かにそうだね〜♪」

永遠

「じゃから、納得行くまでやればよい。」

東

「うん♪そのつもりだよ〜♪」

よ〜しっ！やったるぞ〜！

〜東 Side out〜

1学期

第026話：IS学園

～一夏 Side～

真耶

「このクラスの副担任になった山田真耶と言います。よろしくお願いします」

一夏

「……………(き、気まずい…)」

俺は織斑一夏、世界で初めての男のIS操縦者としてここIS学園に強制入学されてしまった

俺は1年1組に編入されたんだけど、現在、クラス中の生徒の視線が俺に集まっている

その理由は簡単！俺以外は全員女子だからだ！クラスどころか学園でただ一人の男だから皆珍しいんだろう…

だからってそんなにガン見しないでいいだろうと思う…そんな事を考えていると…

真耶

「…くん?…斑くん? 織斑一夏くん!」

一夏

「え? は、はい! 俺!」

真耶

「大声出してごめんなさい! で、でもね、今自己紹介で『あ』から始まって次は『お』で始まる織斑くんなの。嫌かも知れないけどやってくれないかな?」

一夏

「い、嫌とかじゃないですから! そんなに謝らなくてもやりますから!」

真耶

「本当ですか? 本当にやってくれますか?」

一夏

「やります! やりますから…えー…織斑一夏です、よろしくお願いします。」

女生徒達

「……………」

何だ、この視線! 他にも何か言わないといけない空気になってる…えーと…

一夏

「…い、以上です!」

女生徒達

「……………」

ズンガラガツシャーン!!

みんなコケた…

一夏

「あれ?ダメ?」

あ、よく見たらコケてない子もいる…

?

「駄目に決まってるだろ馬鹿者!?!」

スパアーン!

一夏

「つてえ!げ!呂布!?!」

じゃない、千冬姉!?!

千冬

「誰が天下の飛將軍だ馬鹿者!?!」

ズドーン!!

一夏

「うごっ!!ち、千冬姉!」

千冬

「織斑先生と呼べ馬鹿者!」

ガンツ!

一夏

「ぐおお!!」

さ、三回も殴らなくても…

真耶

「織斑先生。もう会議は終わったんですか?」

千冬

「ええ、山田先生、クラスへの挨拶を押し付けてしまい申し訳ない。」

真耶

「いいえ。副担任ですからこれくらいはしないと…」

千冬

「さて、私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。私の仕事はこれから一年でお前達を使い物になる操縦者に鍛えぬくことだ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導する。そして「IS」を使う事の意味も伝えていくつもりだ。逆

らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」

我が姉ながらどこの軍隊だよ…

生徒達

「キヤーーーーーーッ!!!」

一夏

「ぐあああぁーっ！耳があー!!」

何だいきなり！

生徒1

「キヤー！千冬様、本物の千冬様よ！」

生徒2

「ずっとファンでした！」

生徒3

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

生徒4

「私、お姉様の為なら死ねます！」

最後の人何言ってるの！

千冬

「毎年毎年…なぜこれだけお調子者ばかりが集まるんだ…この反応が来るたびに嫌でも新年度が来たことを体感させられる…」

毎年こうなのか！

生徒5

「キヤーーーーー！お姉様！もつと叱って！罵って！」

生徒6

「でも時には優しくして！」

生徒7

「そして、つけあがらないように躡をして〜！」

どんどん酷くなってる…

千冬

「で…？挨拶も満足にできんのか、お前は…」

一夏

「千冬姉、俺は…」

スパアーン！

千冬

「織斑先生と呼べ！」

一夏

「……はい、織斑先生……」

何も殴らなくても……

生徒8

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟？」

生徒9

「それじゃあ、世界で唯一男でI Sを使えるっていうのもそれが関係して……」

生徒10

「いいなあっ……代わって欲しいな……」

やばい！もうバレた！

千冬

「さて、まずは全員に一つ伝えておく。このクラスだが実はまだ全員揃ってはいない。一人遅れている。2時間目には来ると先程連絡があったので、その時、紹介をしてもらう。以上だ！」

一人いないのか……けど女子なんだよな……どうせなら男が来てくれないかな……

真耶

「ではHRを終わります。……それからオルコットさんは少しお話があるので来てくださ

い。」

セシリア

「はい。」

あれ、この子さつきコケなかった子だ…あの子だけ呼んでどうするんだろ？

〜一夏 Side out〜

〜セシリア Side〜

わたくしは今、山田先生に呼ばれた理由を聞いています

セシリア

「先生方、何か御用でしょうか？」

千冬

「ああ、さつき言った遅れている奴と言うのが火ノ兄でな…」

セシリア

「永遠さん!? 永遠さんもこのクラスなんですか!?!」

真耶

「え、ええ…それで、火ノ兄君にとつては始めての学園生活ですからオルコットさんには学園内での世話をお願いしたいんです。」

セシリア

「喜んでやらせていただきますわ！」

永遠さんと同じクラスなんてもはや運命ですわ！

千冬

「…それから、お前には先に言っておく…」

セシリア

「はい？」

千冬

「…実はな、火ノ兄が来たら私の弟の一夏にジャーマンスープレックスをかける事になっっている。」

セシリア

「ジャーマ、何ですの、それ？」

真耶

「プロレス技です。」

セシリア

「何故永遠さんがそんな事を？」

真耶

「それはですね……………」

詳しくは【第16話：入学前のお願い】を読んで下さい♪

真耶

「……………」という訳です。」

セシリア

「確かに永遠さんの言う通りですわね。永遠さんの生活を壊したんですものその位されて当然ですわ！……………ですけど…織斑先生は本当によろしいのですか？」

千冬

「構わん！…アイツは今、自分がただの被害者だと思つてココにいる。あいつの軟弱な精神を叩き直すには、織斑によつて被害を受けた火ノ兄が丁度良い。」

セシリア

「そうですか。後、永遠さんの登下校はどうなっておりますか？」

千冬

「それは火ノ兄が来てから言う。」

セシリア

「分かりました。」

もうすぐ永遠さんに会えるのですね♪楽しみですわ／＼／＼

く
セ
シ
リ
ア

S
i
d
e

o
u
t

く

第027話：再会

（一夏 Side）

HRが終わって休憩に入ると俺に向けられる視線は更に増えていた
このクラス以外の生徒もやってきて俺を見ているからだ

これじゃあ動物園のパンダと同じじゃないか…

？

「ちよつといいか？」

見覚えのある黒髪ポニーテールの子だな…つて！

一夏

「お前…箒か！」

箒

「ああ…一夏、少し話がある…ついて来い…」

一夏

「ああ、分かった。」

俺は箒について行ったけど、教室を出る時…

セシリア

「ルン♪ルン♪ルン♪…」

さつき先生に呼ばれた子が上機嫌で戻ってきた

一夏

「……………」

箒

「おい！早く来い！」

一夏

「あ、ああ、すぐ行く！」

で、俺達は学園の屋上にやってきたんだ

一夏

「久しぶりだな箒！」

箒

「ああ、久しぶりだな…」

…何で不機嫌なんだ？

一夏

「…どうかしたのか？機嫌が悪そうだが？」

箒

「悪くなど無い!!…とところで一夏! さつきの女は何だ!!」

一夏

「さつきの?」

箒

「お前とすれ違った金髪の女だ! ずっとあいつを見ていただろ!!」

…ああ、さつきの子か

一夏

「いや、さつきHRが終わる時、あの子だけ先生に呼び出されただろ。戻ってきたら機嫌が良くなってたからどうしたのかなって思ったただけぞ。それに、俺の自己紹介の時、あの子だけコケてなかったからな。それで少し気になっただけだ。」

箒

「…本当か?」

一夏

「本当だって。」

箒

「……………まあ信じてやろう…」

絶対信じてないな…

箒

「何だ!？」

一夏

「い、いや、何でもない!？」

箒

「そうか…」

ハア…相変わらず短気だな…

一夏

「じゃあ、改めて、久しぶりだな箒。」

箒

「…ああ。」

一夏

「そう言えば、去年の剣道の全国大会で優勝したんだよな。おめでとう。」

箒

「な、何で知ってるんだ!？」

一夏

「いや新聞で見たんだけど…そう言えば、引越してから会って無かったけど、親父さんや東さんは元気か？」

箒

「!?……………あの人は…姉さんは…私とは関係ない！」

一夏

「え?…それってどういう…」

それからチャイムが鳴って教室に戻った俺達は千冬姉の出席簿を喰らう羽目になった…

く一夏 Side outく

くセシリア Sideく

わたくしは今、心が張り裂けそうなほど昂ぶってますわ!

もうすぐ永遠さんに会える♪待ち遠しいですわく♪

千冬

「授業を始める前に先程言った遅れている生徒の事だが、まだ学園に到着していない。」

セシリア

「…え?」

織斑先生は今何と？

千冬

「どうも思ったより遅れているようで、とりあえず着いたらすぐこの教室に来るように伝えておいた。だから、授業中に来るかも知れんのでそのつもりでいるように。」

ガンツ！

真耶

「オルコットさん!？」

ザワザワ…

真耶

「オルコットさん！しっかりして下さい！」

セシリア

「…何で…何で永遠さん来てないんですか…先程来るっておっしゃったじゃないですか…」

真耶

「そ、それは…」

千冬

「…すまん…」

ガンツ!!

千冬

「オルコツト!?!」

セシリア

「シクシクシクシク………」

千冬

「文句は遅れているアイツに言ってくれ……」

セシリア

「シクシクシクシク………」

永遠さくくくん………」

くセシリア Side outく

く一夏 Sideく

生徒達

「……………」

今、この教室の中は何とも言えない空気になっていた……

セシリア

「シクシクシクシク……」

その理由は他でもないこの子、セシリア・オルコットだ……前の授業が終わる時に呼び出されて、上機嫌になって戻って来たんだけど……遅れて来る生徒がまだ来てないと知った瞬間……

セシリア

「シクシクシクシク……」

……こうなってしまった……

彼女、そんなに会うのが楽しみだったのか……

とはいえ、それでも授業は進んで行ってる訳なんだけど……俺にとってはそっちのほうが大問題だった！

……なぜなら！

真耶

「織斑君……今までで分からない所はありますか？」

一夏

「……すみません……全部分かりません……」

授業の内容が全く分からないからだ！

真耶

「…ぜ、全部ですか？」

一夏

「全部です…」

真耶

「ホントに全部からないんですか？」

一夏

「全く分かりません…」

真耶

「え、えええ!？」

千冬

「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」

参考書?…えーと、確か…あ!

一夏

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

ドゴンツ!

一夏

「グボツ!」

千冬

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者!!」

そ、そう言えば…確かに…

コンコン

千冬

「ん?…山田先生、少し頼みます。」

真耶

「あ、はい!」

千冬姉が廊下に出て行った…た、助かった!

千冬

「遅いぞ!…一体今まで何をしていた!」

なんだ!千冬姉の怒鳴り声が聞こえてきた…って事は…遅れた子が来たのか?

千冬

「(まあ、言い訳は後で聞くがその前に一つ頼まれてくれ。)」

よく聞こえないけど千冬姉が何か頼んでるみたいだな…

教室に戻ってきた千冬姉は一人の生徒を連れてきた

けど、その生徒は!

一夏

「……えっ?……お、男!?!」

俺と同じ男だったからだ!俺以外に男の操縦者がいたのか!

ザワザワ…

クラスの生徒全員が驚いていた

千冬

「(すまんが頼む…:)」

千冬姉が小声で何かを言うとその男は小さく頷いて、いまだに泣いてるオルコットの所に向かった

セシリア

「シクシクシクシク………」

?

「ハア……いい加減正気に戻らんかあああーっ!!!」

ドゴーンッ!

セシリア

「アガッ!」

生徒達

第028話：再会後

く千冬 Sideく

やれやれ、やっと元に戻ったか…

千冬

「すまんな火ノ兄。私達ではどうしようもなかった。」

永遠

「ワシは別に構わんが一体何があつたんじゃ？セシリアがこんな状態になる程の事があつたんか？」

千冬

「お前が遅れて来たからこうなつたんだ!？」

永遠

「む！それはすまんかったの。」

千冬

「それで、何故遅れた？」

永遠

「実は慣れない土地じゃから道に迷おてしもうてな。さつきようやく着いたんじゃよ。」

千冬

「?…お前、試験の日は時間前に来ていただろ?」

永遠

「あん時はロケットを使ったからの。今回は普通の乗り物で来たんじゃよ。」

千冬

「何故ロケットで来なかった?」

永遠

「一昨日からメンテ中で使えんかったんじゃよ。」

千冬

「そういう事か…分かった…なら早速だが、火ノ兄、自己紹介をしろ。」

永遠

「あいよく…え、ワシは火ノ兄永遠と言う。『永遠』と書いて『とわ』と読むんじゃ。こげな喋り方じゃがよろしゅう頼む。好きな事は寝る事と畑仕事じゃ。嫌いなもんは女だからというて威張りくさつとる女尊男卑の雌豚共じゃ。」

ザワ…

ハア…雌豚か…ここまでハツキリ言うとはな…

永遠

「後は…もう一つあるが言わんところ。以上じゃ！」

千冬

「よろしい、織斑よりはマシな紹介だな。火ノ兄、お前の席はオルコットの隣だ。」

永遠

「はいよ。」

生徒1

「ちよつと待って下さい！」

千冬

「何だ？」

生徒1

「何でその男を咎めないんですか！そいつは私達を雌豚と言って罵ったんですよ！なるほど、こいつは女尊男卑の信者か…」

千冬

「…自己紹介で何を言おうと自由だ。それに、火ノ兄は女尊男卑の女とは言ったが、全ての女とは言っていない。」

生徒1

「そ、それは…」

千冬

「火ノ兄の言葉に反応するという事は、お前は女尊男卑主義者か？」

生徒1

「そ、それがいけないっていうんですか！」

千冬

「いや…誰がどんな考えを持つとうとそれは個人の自由だ。だが、私は女尊男卑を認めていなくてな。嫌悪していると言つてもいいな。」

生徒1

「そんな!?何故ですか！プリュンヒルデと呼ばれるあなたが、私達女性を導いていく方が私達を否定するんですか!？」

コイツ…そんな事を考えていたのか…

千冬

「私をプリュンヒルデと呼ぶな！私にお前達の勝手な理想を押し付けるな！私はどこにでもいる普通の人間だ！苦手な事もあれば嫌いな物もある只の人間だ！二度と私にそんなふざけた事を言うな！分かったか！」

生徒1

「グツ…分かり…ました…」

一夏

「…千冬姉…」

千冬

「織斑先生だ！何度言えばわかる！」

さて、さっきの続きをするか

千冬

「それと織斑…火ノ兄が来た事で有耶無耶になって助かったと思っっているようだが、さっきの参考書の件、まだ終わってはいないぞ！」

一夏

「ゲツ！」

千冬

「やはりそう考えていたな！後で再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな！」

一夏

「い、いや…一週間であの分厚さはちよつと…」

往生際の悪い奴め！

千冬

「やれと言っている！」

一夏

「…はい…」

永遠

「…参考書？セシリア、ワシが来る前になんかあったのか？」

セシリア

「さあ？わたくしも永遠さんに拳骨される前の記憶が曖昧で…」

永遠

「さよか…山田先生、何があつたんじゃ？」

真耶

「あ、はい、実はですね……………」

山田先生は火ノ兄とオルコットに先程の一夏の事を話すと…

永遠

「馬鹿かコイツは？」

一夏

「グッ！」

セシリア

「阿呆ですのこの方？」

一夏

「グハッ！」

まあ当然の反応だな…

真耶

「ふ、二人ともいくら本場の事でも言い過ぎですよ。」

一夏

「ゲハアツ！」

千冬

「山田先生も言い過ぎです。その通りですから否定はしませんが。」

一夏

「ゴペアアツ!？」

パタツ…

ん？何をしてるんだこいつは？

千冬

「起きるか馬鹿者!!」

ドゴンッ！

千冬

「織斑…貴様、授業中に寝るとはいい度胸だな！」

一夏

「い、いや、千冬姉…俺はそんなつもり…」

千冬

「織斑先生だ！」

ガンツ！

チーーン…

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

千冬姉の一撃を喰らい意識を失った俺が何とか復活すると、授業が再開されていた

千冬

「色々ありましたが、山田先生、授業の続きをお願いします。」

真耶

「はい…あ！…火ノ兄君、授業の内容は分かりますか？一応ココまで進めたんですけど？」

そうだ！俺は全く分からないんだ！アイツだって分からない筈だ！俺は一人じゃない！一緒に叱られようぜ！

俺は心の中でサムズアップをしたけど…

永遠

「…その辺りなら分かるぞい。」

…俺は一人だった…

真耶

「良かったです！ちゃんと予習をしてきたんですね♪」

永遠

「他にやる事も無かったしのお…参考書は暇潰しにずっと読んでたんだよ。」

千冬

「理由はともかくやっているなら問題ない。このクラスには参考書を捨てた上に何一つ勉強しなかった馬鹿が一人いるからな。」

一夏

「ううっ…」

千冬

「…ハア…火ノ兄…すまんが、その馬鹿に勉強を教えてやってくれ。」

ち、千冬姉！俺の為に！

永遠

「断る！」

一夏

「…え？…な、何で…」

千冬

「何故断る？」

永遠

「決まっとる！何故ワシがソイツの尻拭いをせんといかん！勉強しなかったのは他でもないソイツ自身じゃ！ワシには関係ない！」

確かにそうだけど…

一夏

「そんな事言わずに、なあ、頼むよ。」

永遠

「嫌じゃと言うとる。第一、ワシに頼まずとも教わるなら他にもおるじやろうが！」

一夏

「そ、そうかもしれないけど…どうせなら男同士で教えて欲しいんだよ。」

永遠

「やめんか気色悪い！ホモか貴様！ワシにそつちの趣味は無いわい！ワシの好みはれつきとした女子じゃ！男に欲情しとるホモは近寄るな！」

生徒2

「そ、そんな〜織斑君がホモだったなんて〜！」

生徒3

「せつかくのイケメンなのに〜〜！！」

生徒4

「…×永…いや…ここは永×一がベストかしら？ジュルリ…」

一夏

「あんたら何言ってるんだ!?!:俺はホモじゃねええええ〜っ!?!」

ヒソヒソ…

なんかクラスの子が小声で話し始めたぞ！

千冬

「静まれ貴様ら!!今は授業中だというのを忘れたか!それから織斑!放課後になったら家族会議だ!何時から男に走ったか問いただすからな!」

一夏

「だから俺はホモじゃなあああああーっ！！」

永遠

「変態は黙つとれ！…織斑先生。騒がして申し訳ない！」

千冬

「ああ……分かつてはいたが…やはり断るか…」

永遠

「分かつとつて聞いたんか？」

え？…どういうことだ？

永遠

「そもそも、織斑先生は知つとるじやろ………」

知つてゐるつて…何をだ？

永遠

「…ワシが…織斑一夏を嫌つとるのを…」

……俺が……嫌い!?

く一夏 Side outく

第029話：ジャーマンスープレックス

く千冬 Sideく

一夏

「俺が嫌いって……どういうことだ！何で今日会った奴に嫌われなきゃならないんだ！」

永遠

「……さっきワシは、嫌いなものがもう一つあると言ったじやろ。」

一夏

「………まさか！」

永遠

「そうじゃ！ワシのもう一つの嫌いなモンはな……ワシの生活をぶち壊した織斑一夏！お前じゃ！」

一夏

「お、俺が？どうしてだよ！俺が何したって言うんだよ!？」

仕方ない……教えてやるか……

千冬

「…織斑…お前がI Sを動かした事で、火ノ兄は帰る家が無くなるからだ。」

一夏

「…え？」

ザワザワ…

一夏

「…帰る家が…無い…」

千冬

「火ノ兄はな、物心ついた頃からコイツの家が代々所有している小さな島でたった一人で生きて来た。」

一夏

「…一人で？」

千冬

「そうだ！その島に住む人間は火ノ兄一人だ！コイツは趣味が畑仕事だと言ったが、あれは自分で作った畑や田んぼを毎日手入れしていると言う意味だ！」

ザワザワ…

千冬

「そんな暮らしをしている人間を全寮制のこの学園に入れればどうなる？手入れが出来

ない田畑は荒れる。植えていた野菜は収穫できずに腐る。帰った時には畑も田んぼも荒れ放題だ。元の状態に戻すだけでも数か月はかかるだろうな。」

一夏

「……………」

千冬

「織斑…お前は家に帰った時、何か失っている物はあるか？」

一夏

「……………ない……………」

千冬

「だろうな…だから火ノ兄はこの学園に入る原因を作ったお前が嫌いなんだ。」

一夏

「…俺だって…好きで動かした訳じゃ…」

千冬

「それは火ノ兄も分かっている。だから火ノ兄は入学前に私達とある約束をしている。」

一夏

「約束？」

千冬

一夏

「ち、千冬姉！な、何でそんな事を…」

千冬

「織斑先生だ!?!…お前、自分が望んでココに来た訳じゃないと思っっているな?…」

一夏

「うっ!?!」

千冬

「やはりそうか！いいか！人は望む望まざるに関わらず集団の中で生きていくものだ。火ノ兄の様に始めから一人で生きていたならともかく、集団で生きてきた上でそれを放棄するなら、人であることをやめろ！」

一夏

「……………」

千冬

「そして火ノ兄に一撃入れさせるのは、お前のその軟弱な根性をお前によって被害を受けた火ノ兄の手で叩き直す為だ！」

一夏

「そ、そんな!?!」

千冬

「安心しろ…火ノ兄にはお前に対する確執はこの一発が最初で最後にするようにつてある。何より火ノ兄自身がそう言つてたからな。これが終わればただのクラスメイトとして接するそつだ。」

永遠

「そういう事じゃ！さて、いい加減やるとするかの！」

一夏

「ヒッ…ま、待つてくれ！」

「ここまで言つてまだ逃げようとするか…」

永遠

「断る！くたばれやあああああーっ！！」

一夏

「ぎゃあああああああああーっ…」

ドゴオオオオーン！

箒

「い、一夏あああああーっ！」

千冬

「綺麗に決まったな…練習でもしてたのか?…見事なブリッジだ!」
セシリア

「あれがジャーマンズスープレックスですか!始めてみましたわ。」

一夏

「…ブクブク…」ピクピク

うゝむ、泡拭いて痙攣してるな…

箒

「一夏!しっかりしろ一夏!」

千冬

「火ノ兄、起こせ!」

永遠

「へい…よつと!」

ほお、気付けが出来るのか…

永遠

「ふんっ!」

一夏

「はっ!…ぐ、いっつゝゝゝっ!」

永遠

「さてこれでワシの気は済んだ。これからよろしくの、織斑。」

一夏

「え!？」

箒

「き、貴様! 一夏にあんな事をしてよくそんな事を言えるな!？」

永遠

「誰じゃおんしは？」

千冬

「…篠ノ之箒、束の妹だ…」

生徒達

「ええええええええええー!!」

生徒1

「篠ノ之さんって、あの篠ノ之博士の妹!？」

生徒2

「織斑先生が担任で男性操縦者が二人いて篠ノ之博士の妹もいるクラス!」

生徒3

「今年はなんてラッキーなの！」

箒

「私はあの人と関係ない!!」

生徒達

「!?!」

箒

「………すまない……だが、私は確かに妹だが、あの人とは関係ない、何処にいるのかも知らないんだ……」

生徒達

「………」

……まさか、火ノ兄の家にいるなんて思わないだろうか……

永遠

「……篠ノ之と言うたか、さつき織斑先生が言うのとつたじやろ。コイツへの確執はこれつきりじやと。」

箒

「そんなこと信じられるか！」

永遠

「別におんしに信じて貰う必要は無いのお。決めるのは織斑じゃ、おんしでは無い。まあワシの方から積極的に関わるつもりは無いから安心せい。ホモになんぞ近寄りたくもないしの。」

一夏

「まだ言うのかよ!？」

箒

「……………」

一夏

「箒！その沈黙はやめてくれ！」

箒

「……………」

一夏

「何か言ってくれよおおおーっ!!」

永遠

「変態は放つといて…時に織斑先生、頼んどいたもう一つの件はどうなったんじゃ？」

一夏

「おおおいつ!？」

「ここでそれを聞いてくるか…」

千冬

「ああ、理事長からの許可を貰うことが出来た。今日から大丈夫だそうだ。」

永遠

「それは良かった…織斑先生、後で理事長先生にお礼を伝えて貰ってもよろしいかの？」

千冬

「ああ、分かった。」

セシリア

「永遠さん良かったですわね♪」

永遠

「何じゃ知つとつたのか？」

セシリア

「はい♪織斑先生から教えていただきましたの♪」

永遠

「そうじゃったか。…織斑、勉強は自分で頑張るんじやな。ワシは放課後から朝まで学園におらんからな。」

一夏

「は?」

生徒1

「え!居ないってどういう事?」

千冬

「…火ノ兄は学園に入学する際、条件を2つ出した。1つはさっきの織斑に一撃入れる事。2つ目が、このIS学園から自宅までの登下校をさせて欲しいと言うものだ。」

生徒2

「いいんですか!?そんなこと許可して?」

千冬

「火ノ兄は特例だ。さっき言ったコイツの家の事情の為だ。」

生徒3

「あ…」

千冬

「そういう事だ。織斑、火ノ兄がお前の勉強を断ったのはこれが理由でもある。」

一夏

「…少しでも早く…畑の手入れをする…」

千冬

「そうだ。」

キーン！キーン！カーン！キーン！

千冬

「時間か…授業を終わる前に伝えておく。次の時間は最初にクラス対抗戦の代表を決める。推薦したい者がいたら考えておけ。それから火ノ兄は入学手続きの書類を渡すからついて来い。以上だ！」

…まあ、誰が推薦されるかは予想がつくけどな…

く千冬 Side out

第030話：クラス代表

セシリア Side

クラス代表ですか…わたくしは誰にしましょうか？

やっぱり、永遠さん…ではダメですわね…永遠さんでは強すぎて意味がありません
もの…織斑先生もそう考えているでしょうね

まあ、誰でもいいですわね…推薦された方を適当に選びましょうか…

セシリア

「さて、予習でもしましょうか…」

一夏

「…ちよつといいか？」

セシリア

「はい？」

一夏

「セシリア…オルコット、だったよな？」

セシリア

「そうですね、名前位ちゃん覚えてたらどうですか。」

一夏

「す、すまない…まだ全員を覚えきらなくて…」

セシリア

「…まあいいですわ。それで、織斑さん、わたくしに何か御用ですか？」

一夏

「ああ、アンタ、火ノ兄と仲がいいだろ？」

セシリア

「モチロンですわ♪…と言うより、女性をアンタ呼ばわりするなんて本当に失礼な方ですわね！」

一夏

「わ、悪い…って、それなら火ノ兄はどうなんだ？人の事をホモだ変態だ言うアイツは！」

セシリア

「永遠さん？…永遠さんは話し方そのものがアレですもの。それに、アレでも最低限の礼節を弁えた話し方はしますのよ。男女関係なくアノ話し方ですから分かりづらいでしょうけど。あなたの呼び方は永遠さんへの話し方が原因でしょう。」

一夏

「そういえば…千冬姉にもあの話し方だった…でも、俺ってそんなに変な話し方だったのか？」

セシリア

「そうですね！あれではあの様に言われて当然ですわ！…それで用件は何ですか？」

一夏

「そうだった。君は火ノ兄の事を知ってたみたいだけど、いつ知ったんだ？俺は二人目がいるなんて初めて知ったぞ。」

ザワ：

織斑さんの言葉にクラスの方たち全員が反応しましたわね…当然ですか

セシリア

「永遠さんが入学試験を受けに来た時ですわ。わたくしもその日は試験を受けに来ていましたので、そこで永遠さんとお会いしましたの。その時に永遠さんには色々とお世話になって親しくなつたのですわ。」

一夏

「そうなのか…あれ？でも俺も試験は受けたけど他の受験者には会わなかったぞ？」

セシリア

「さあ？もしかしたら男性という事で一般の方とは別の場所で受けたのでは？わたくしと永遠さんはお互いに散歩をしていた時に偶然お会いしましたもの。」

一夏

「…それなら君しか知らなかった理由になるか…試験と言えば模擬戦には勝ったのか？」

セシリア

「モチロン勝ちましたわ！女生徒ではわたくしだけと聞きましたわ。」

一夏

「あ、いや、君じゃなくて火ノ兄の方だけど…流石に、そこまでは知らないか…」

セシリア

「紛らわしい聞き方しないでください！」

一夏

「わ、悪い！」

セシリア

「ハア…勝ちましたわよ。」

一夏

「え？」

セシリア

「ですから、永遠さんは勝ちました！わたくしも織斑先生から許可を貰って試合を見ていたので間違いありません！」

一夏

「そ、そうか…」

セシリア

「?…何故そんなにガツカリしているんですか？」

一夏

「え?!いい、いや、そんな事無いぞ！気のせいだよ！気のせい！」

セシリア

「?…おかしな方ですわね？」

キーン！コーン！カーン！コーン！

セシリア

「織斑さん、早く席に戻ったほうが良いですわよ。」

一夏

「…ああ…」

セシリア

「？」

一体何がしたかったんでしよう？

くセシリア Side out く

く一夏 Side く

火ノ兄永遠か：俺がISを動かしたせいで被害を受けた人間：

そして：俺の事をホモだの変態だの言った野郎！！

……俺そんなに変な言い方したのかなく：

オルコットから詳しい事を聞こうとしたけど、結局大した事は分からなかった：

千冬姉は、俺が被害妄想を持っていると言った：

だから、火ノ兄にジャーマンスープレックスをかけさせたと言った：

俺の根性を叩き直すと言った：

俺はいつの間にか：千冬姉に：そんな風に思われる人間になっていたのか：

く一夏 Side out く

く千冬 Side く

千冬

「それでは、前の時間に言ったようにまずは再来週行われるクラス対抗戦に出場する代表を決める。これはそのままクラスの代表にもなるからそのつもりでいるように。それでは、自薦、他薦は問わない！誰かいないか！ちなみに選ばれた者に拒否権は無い。」

生徒1

「はい！織斑君を推薦します！」

一夏

「お、俺〜！」

生徒2

「私は火ノ兄君がいいです！」

永遠

「む！ワシか？」

生徒3

「私もそれがいいと思います！」

生徒4

「私は織斑君で！」

案の定一夏と火ノ兄の二人を推薦してきたか…だがな〜

一夏

「ちよ、ちよつと待つてくれよ！千冬姉！」バキツ！「織斑先生…」

千冬

「自薦、他薦は問わないと言った！拒否権は無い。それから一つ言い忘れたが…火ノ兄は代表には出来んからな。」

一夏

「な、何でだよ！」

やはりそう思うか…オルコットは分かっていたみたいだな

千冬

「さつきも言った火ノ兄の家の事情だ。代表になれば帰る時間が遅くなるからだ。」

本当はもう一つ理由があるがまだ言わない方がいいだろう…

一夏

「待つてくれよ！俺は納得いかねえ！」

千冬

「ほお、私の決定に納得がいかないか？」

一夏

「ああ、いかないね！確かに火ノ兄の事情も分かる！俺の勉強を見るとかそういうのなら文句はねえ！」

永遠

「元から見るともりは無いぞ！」

一夏

「ウグツ…とにかく、そういう個人的な理由なら構わない！けど、それで全ての事が許されるなんて納得いかねえ！織斑先生！教師が生徒一人に鼻履していいのかよ！」

他の連中も同じみたいだな…

千冬

「……………仕方ない。言うしかないか…」

真耶

「そうですね…多分言わないとみんな納得しませんよ…」

千冬

「お前達、さつき織斑が火ノ兄一人を鼻履していると云ったがそれは違うぞ。」

一夏

「え？」

千冬

「私はクラス代表に火ノ兄を選べないと言っただけだ！他の事に関しては全てお前達と同じ扱いだ。」

生徒1

「なんで、クラス代表だけダメなんですか？」

千冬

「火ノ兄が強すぎるからだ。コイツが代表になると完全な出来レースになるからな。」

生徒達

「ええええええええええーっ！！！！」

生徒2

「出来レースって、そんなに強いんですか？」

千冬

「そうだ！正直に言つて火ノ兄に勝てる奴は教師も含めてこの学園には一人もいないだろう。この私も含めてな！」

生徒達

「ええええええええええーっ！！！！」

生徒3

「お、織斑先生より強いって……」

生徒4

「そんな人がいるの……」

永遠

「それはさすがに言いすぎじゃぞ。」

千冬

「事実だろ。そういう訳で「ふぎけんなっ!!」っ!？」

一夏

「コイツが…こんな奴が…千冬姉より強いだと!ふぎけんな!俺は絶対に認めねえぞ!
!」

全くコイツは…ん?…まずいな…何とか収めなければ!

千冬

「お前に認めて貰う必要は無い。私自身が認めている事だからな。誰が何と言おうとそれは変わらん。」

一夏

「俺は納得できねえ!こんなよく分かんねえ奴が千冬姉以上だなんて信じられるか!」

いかん!このままでは!

ドガンッ!

生徒達

「!？」

∴止められなかつたか

セシリア・オルコツトを∴

∴千冬 Side out ∴

第031話：決闘

く千冬 Side

さて、どうやって收拾をつけるかな…

今のオルコツトは簡単には止まりそうにないな…

セシリア

「……………随分勝手な事を言いますわね…貴方…」

一夏

「オ、オルコツト!」

セシリア

「…織斑先生…一つお聞きしてよろしいですか…」

千冬

「な、何だ!」

セシリア

「候補が二人以上いる場合はどうやって決めますか…」

千冬

「あ、ああ、試合を行って決めようと思っていたが…」

セシリア

「…では、わたくしは自薦いたします…」

永遠

「落ち着かんかセシリア!? ワシは気にしとらんから!」

セシリア

「永遠さんがよくてもわたくしが許せません!…決闘です…」

永遠

「セシリア!」

セシリア

「決闘ですわ!?! あなたのその性根、今度はわたくしが叩き直しますわ!」

一夏

「何だと!」

セシリア

「逃げますの?」

一夏

「!?…おう、いいぜ。四の五の言うよりも分かり易い!」

セシリア

「いいでしょう！では、わたくしが勝ったら永遠さんに今までの非礼を詫びて土下座しなさい！」

一夏

「へっ！いいぜ、土下座でも何でもやってやるよ！」

セシリア

「その言葉、もはや取り消せませんわよ！」

一夏

「取り消す気なんてねえよ！」

セシリア

「わかりました！ではこの場にいる人たち全員が証人です！」

一夏

「分かった。」

コイツ…自分が誰に喧嘩を売ってるのか分かってるのか？

一夏

「オイ！ハンデはどの位欲しい？」

…分かってなかったか？

セシリア

「あら？早速お願いですか？あれほど大口を叩いた割に情けないですわね？」

一夏

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかな〜と？」

自分が何を言ってるのかも分かっていないのか…

念の為、山田先生に聞いておくか…

千冬

「(山田先生…試験の時、確かコイツは…)」

真耶

「(はい…私が自爆してしまったので不戦勝で勝ったみたいなものです…)」

千冬

「(それでハンデをやるって言ってるのかコイツは…)」

真耶

「(そうみたいです。…どこからこんな自信が出てくるんですか?)」

千冬

「(私にもわからん…まさかここまで馬鹿だったとは…)」

生徒達

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!!」

何だ!?

生徒1

「織斑くん、それ本気で言っているの?」

生徒2

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ?」

生徒3

「織斑君と火ノ兄君は確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ!」

生徒4

「しかも、オルコツトさんは専用機を持つてる代表候補生よ。勝てるわけないよ!」

この小娘ども…

セシリア

「お黙りなさい!!永遠さんといついでに織斑さんという例外がある以上、条件は同じです!後は互いの実力が物を言うのです!わたくしは今、織斑さんと話してるんです!横からくだらない事を言わないで下さい!」

生徒達

「……………」

一夏はついで扱いか……まあいいか……

しかし、実力が物を言う、か……オルコットの奴……分かっているじゃないか……これも火ノ兄のお陰か……

……それに引き換えついで扱いされたうちの弟は……

一夏

「……じゃあ、ハンデはいい。」

千冬

「!?」

コイツは………情けない……今の私にはその言葉しか出てこない……

永遠

「………情けないのお……」

千冬

「火ノ兄!?!」

セシリア

「永遠さん?いきなり何を?」

永遠

「織斑一夏……お主はほんに……情けないのお……」

一夏

「俺が…情けないだ?!」

永遠

「そうじゃ…情けないが駄目じゃったら失望したと言うべきかの…」

一夏

「失望だとおお?!」

永遠

「お主、自分が今まで何を言ったのか分かつてるのか?…まあ、分かつてはおらんじやろ
うな…そうでなければあんな台詞は出てこんか…」

一夏

「な、何言ってるんだ!」

やはり分かっていなかったか…

永遠

「織斑…お主さつきセシリアにハンデをやると言ったな。何故そんな事を言った?」

一夏

「何でって…」

永遠

「セシリアが弱いと思うて言ったんじやろ。セシリアを女と見下して出た言葉じやろ！」

一夏

「うっ…」

永遠

「その後、他の生徒達からセシリアの事を聞いた途端にお主はハンデを撤回した。何故取り消した？」

一夏

「それはっ…」

永遠

「セシリアが自分より強いと分かったから撤回したんじやろ！自分より強い相手じゃからアツサリと手の平を返したんじやろ！」

一夏

「ぐっ…」

火ノ兄の奴、相当怒ってるな…

一夏の胸ぐらに掴み掛るとはな…

永遠

「織斑！貴様は自分より弱い相手は見下し、強い相手には媚び諂うのか！勝てんと分かればやる前から怖気づくか！貴様には例え負けると分かっているにしても意地を見せようという気持ちさえないんか！」

一夏

「うっうっ…」

永遠

「お前の様な奴を何というか知つとるか！腰抜けと言うんじゃ!!そんな奴を情けないと、失望したと言って、何が悪い!!」

一夏

「こっつ腰抜け！」

永遠

「違うか！違うなら否定してみせい！言い返してみんか!!」

一夏

「…ぐっうっ…」

…火ノ兄に突き飛ばされても立ち上がる事も出来ないか…
ん？こっつちを見た？

永遠

「言い返せんなら姉に助けを求めるか？」

一夏

「!?」

永遠

「ほんに情けない男じゃ…相手をするのも馬鹿らしい…」

一夏

「くっ…ううっ…うううっ…」

ハア…もはや言葉も出ないか…火ノ兄の言う通り本当に情けない…

火ノ兄も一夏に興味を無くしたように無表情になつてな…

永遠

「…織斑先生…ワシは代表にはなれんが、代表決定の試合には出してくれんかの？」

千冬

「…別に構わないが…いきなりどうした?…」

永遠

「なに、セシリアと戦いたいと思つたんじゃよ!」

セシリア

「永遠さん…あつ!…フフッフフッフ♪」

永遠

「あの日の約束を果たそうと思っ
てな！」

約束だと？

く千冬 Side outく

第032話：意気込み

（一夏 Side）

俺は今、悔しさと後悔の気持ちで一杯だった：

火ノ兄は俺を情けないと、失望したと、そして、腰抜けと言った：

初めは、そんな風に言われて悔しかった！けど：俺はそう言われても否定できなかつた：少し冷静になって考えるとその通りだったからだ：

俺はオルコットを女だからと見下してしまった：強いと分かると手の平を返してしまつた：

そんな俺に火ノ兄は意地を見せる気持ちすら無いのかと言つた：

何一つ言い返す言葉が出てこなかつた：

俺は今になって後悔していた：何でオルコットにあんな事を言つちまつたんだ：

そして今、火ノ兄とオルコットは：互いに睨み合つていた

永遠

「あの日の約束を果たさそうと思うてな！」

セシリア

「フフツ♪それはわたくしも言おうと思いましたがわ！」

約束？この二人、何を約束してたんだ！

永遠

「それは良かった！ならばワシも全身全霊をかけてお主と一戦交える事にしよう！」

セシリア

「わたくしもこの勝負を楽しみにしておりました。正々堂々とお互いの全力を出し尽くしましょう！」

この二人、試合をする約束をしていたのか！

千冬

「お前達、盛り上がるのも結構だが試合は一週間後だぞ！」

永遠

「一週間後か…クカカツ！今から待ち遠しいのお！」

セシリア

「本当ですわ！ですが、待つのもまた楽しいですわよ！」

永遠

「カカカツ！違うない！」

セシリア

「フフフツ♪そうでしょう♪」

バチバチ…

二人の間で火花が散ってる…

でも…なんだ！この胸を締め付ける感覚は！

一週間後の試合は俺も出るのに…

火ノ兄もオルコツトもお互いの事しか見ていない…

二人の眼には…もう俺が映っていない…

俺自身の自業自得とはいえ…

この二人にとって俺は、すでに戦う価値すら無いってのかよ…

箒

「おい！その試合には一夏も出るんだぞ！貴様ら一夏の事を忘れるな！」

一夏

「ほ、箒！」

永遠

「そう言えばそうじゃったな。すっかり忘れておったな…」

セシリア

「永遠さんとの試合の事しか考えていませんでしたわ…」

一夏

「!？」

やっぱり…そうなのかよ…

箒

「貴様らあぁーっ!!」

千冬

「黙れ篠ノ之！試合に関係ない奴は黙っている!!」

箒

「グッ…」

セシリア

「そうですね織斑さん。先程の土下座の件はもういいですわ。」

一夏

「え？」

セシリア

「あなたの土下座なんて見る価値ありませんもの。試合も勝ち負けにも興味が無くなり
ましたわ。」

興味が無くなっただと！

何だよそれ……

一夏

「……………」

何なんだよ……

この悔しきは……………

く一夏 Side out く

く千冬 Side く

千冬

「……………」

一夏の奴、悔しさが顔に滲み出ているな

それも仕方がない、オルコツトを女だからと見下し、自分より強いと分かると手の平を返す……そんな奴は情けない！腰抜け！と火ノ兄に言われたんだからな

まあ、私もその意見には同意できるからな……全く我が弟ながら情けない

しかも……火ノ兄には腰抜け呼ばわりされ、オルコツトには興味が無いと言われた
 そして今、火ノ兄とオルコツトは一夏を全く見ていない

一夏もそれが分かっているからこそ、ああやって表情に出ているんだろう

その上、たった一週間で一夏がこの二人に特に火ノ兄に追いつける訳もない…となる
と…

後は一夏がどれだけ喰いついていけるかだな…

もしくは、喰いつく事すら出来ないのかもな…

まあその時はその時だ…キツイ説教をしてやるか…

千冬

「お前達、そのくらいにしておけ！」

永遠

「あいよー！」

セシリア

「はい♪」

一夏

「……………」

千冬

「試合は一週間後だ！それまでに全員ベストコンディションにしておくように！」

永遠

「分かっどるぞい！」

セシリア

「当然ですわ！」

一夏

「……………はい…」

千冬

「織斑…さつきまでの威勢はどうした？」

一夏

「……………」

千冬

「…私は何も言わんぞ。お前の自業自得だからな。」

一夏

「!?……………はい…」

火ノ兄とオルコツトはともかく問題は一夏だが…このまま放つとくか
千冬

「山田先生、授業を始めましょう。」

真耶

「はい。」

とりあえず、授業をするか…
く千冬 Side out く

第033話：布仏本音

（永遠 Side）

あの後、試合を行う事が正式に決まったんで授業を始めたんじや…

で、今は昼休憩じや！ワシも腹が減ったし飯にするかの

セシリア

「永遠さん♪お昼を一緒にしませんか？」

永遠

「ん？別に構わんが…食堂で食うんか？」

セシリア

「そうですが？どうかなさいましたの？」

永遠

「いや、一応弁当を持ってきたからここで食おうと思っただんじやが…まあ食堂で食えばよいか。ワシもご相伴に預らせて貰おうかの。」

セシリア

「フフツ♪それでは参りましょう♪」

という訳でワシはセシリアと食堂に向かったんじゃ

……

……

……

食堂に着くと中にいた生徒たちの視線が一気にワシに向けられてきたが気にせん事にした

料理を持ってきたセシリアと開いていた席に座ると、持ってきた弁当を出した

セシリア

「…あの永遠さん…何ですの、それ？」

永遠

「弁当じゃが？」

セシリア

「お弁当って…どう見ても竹にしか見えませんが…」

永遠

「ああ、この中に「ね〜ね〜…」ん？」

トレイを持った3人の女子が話しかけてきた…

? 1

「な〜に〜それ〜?」

? 2

「あ、あの相席良いですか?」

永遠

「ワシは構わんぞ。セシリアは?」

セシリア

「わたくしも構いませんわよ。」

? 3

「よし!」

3人は空いていた席に座ると自己紹介を始めたんじや

静寂

「あの、私、鷹月静寂って言います!よろしくお願いします!」

清香

「私は相川清香。清香でいいよ。」

本音

「私は布仏本音〜♪本音でもものほほんでも好きに呼んでね〜。ひののん、セッシー、よろしくね〜♪」

セシリア

「セツシーって、わたくしの事ですか？」

永遠

「ひののん？」

本音

「そくだよ♪」

永遠

「ひののん…つと、こつちも名乗らんな。ワシは火ノ兄永遠じゃ。よろしゅうな。」

セシリア

「セシリア・オルコットですわ♪」

本音

「それでひののん、これなくに〜？」

セシリア

「…お弁当らしいですわ…」

清香

「え！これが？」

静寐

「竹にしか見えないけど…」

永遠

「見た目はそうじゃがこれを開くと…」

本音

「うわ〜♪おむすびだ〜！」

中には笹で包んだ塩むすびが4つと沢庵が入っているんじや

清香

「本当にお弁当箱だったんだ…」

永遠

「何じゃ知らんのか？昔の人は竹を弁当箱や水筒にしておったんじやぞ。」

静寂

「そう言えば、時代劇のドラマでも時々出てたね…」

セシリア

「そうなんですの？」

永遠

「そうじゃ。それにこうすると竹の風味が付いて旨味も増すんじやよ♪」

本音

「へ〜〜〜…」ジーーー

永遠

「ん？」

本音の視線がワシのおむすびにくぎ付けになつとるな…

永遠

「…………塩むすびじゃが、食うか？」

本音

「食べる〜〜〜！いただきま〜す♪あむっ…」

ワシが1個本音に渡すと…旨そうに食べ始めた

静寂

「ど、どう？」

本音

「んっくん！…おいし〜〜♪」

清香

「ほ、ホント！」

セシリア

「…あの…永遠さん…」

永遠

「…お主もか？」

セシリア

「…は、はい…」
／／／

静寂&清香

「…あの～～～…」

永遠

「だと思ったわい…」

静寂&清香

「…」
／／／

永遠

「……………食いんさい。」

セシリア&静寂&清香

「いただきま〜す♪」

セシリア

「…本当においしいですわ♪」

静寂

「うん♪丁度いい塩加減だわ♪」

清香

「笹って味がするのね♪」

本音

「でしよ♪」

永遠

「……………」

喜んでくれるのは嬉しいんじやが…ワシの昼飯…沢庵しか残つとらんのお…

セシリア

「おいしかったですわ♪…あー！」

本音

「セツシー…どくしたの〜？」

セシリア

「永遠さんのお昼…」

静寐&清香

「ああっ!?!」

永遠

「…ああ、気にせんでいい…ハア…」

そういうとワシ残った沢庵を口に放り込んだんじや

仕方がない、沢庵と水で腹を満たすか…

セシリア

「…え〜と…と、永遠さん、わたくしのお食べ下さい！」

静寐

「…わ、私のもいいよ！」

清香

「私も！」

本音

「分けてあげる〜♪」

永遠

「…すまん…」

ワシはありがたく4人の料理から少しずつ貰っていた…お陰で腹も十分満た

されたわい

本音

「ところでひののん？」

永遠

「何じゃ？」

本音

「変な喋り方だね？」

永遠

「…そうかの？」

本音

「そだよ。」

永遠

「昔からこれじゃからの…直せと言われても直せんわい。直す気も無いがの。」

本音

「そっか。」

永遠

「話し方じゃったらワシほどではないがお主も変わつとるぞ？随分間延びした話し方じゃと思うたが。」

本音

「うん？私も昔からだからね…直せないんだ。」

永遠

「カカカツ、そうじゃな。直せんのお。」

本音

「カカカ〜♪そうなのだ〜♪」

永遠

「マネするでない！」

本音

「カカカ〜♪ごめ〜ん♪」

永遠

「全く…変わった娘じゃ…」

セシリア

「ム〜〜〜！」

ん？セシリアの奴、頬を膨らませてどうしたんじや？

永遠

「どうかしたんか？」

セシリア

「何でもありません!？」

永遠

「そ、そうか…」

本音

「アハハ〜♪セツシー面白〜い♪」

セシリア

「本音さん!!」

永遠

「カカカッ♪お主も十分面白いぞ♪」

本音

「ム〜ッ!ひののんヒド〜イ!」

永遠

「カカカカッ♪」

静寐&清香

「アハハハッ♪」

布仏本音か…ほんに面白い娘じゃ…

その後もワシ等は他愛のない話をしてから教室に戻ったんじや

〜永遠 Side out〜

く一夏 Sideく

一夏

「……………」

楽しそうだな…火ノ兄やオルコット達の笑い声がこつちまで聞こえてくる…

…それに引き換えこつちは…

箒

「一夏！今日の放課後から私がお前を鍛えてやる！お前を腰抜け等と言った奴等に目にも見せてやれ！」

…火ノ兄とオルコットがいる方を睨みながら箒がキレてるんだよな…

ていうかこつて食堂なんだけどな…

一夏

「箒…少しは場所を考えろよ…」

箒

「え？……………はっ！す、すまん！」

俺に言われて箒も周りの視線に気づいたみたいだな

俺が腰抜けって言われた事が他のクラスにも知られたか…

一夏

「もう遅いよ…」

箒

「本当にすまん！…それもこれも全部あいつ等が…」

一夏

「いや、俺が言うのもおかしいけど、今のは全部お前が悪いだろ！責任逃れするなよ！」

箒

「ううっ…すまない…」

俺…これからどうなるんだろ…

く一夏 Side outく

第034話：帰宅

（永遠 Side）

昼飯を食った後、午後の授業も終わったんで今は放課後じゃ！

初日だけに色々あったがさっさと帰るとするかの

早う畑を見にいかなとな！

…そう思つとつたんじゃが…

真耶

「織斑君、火ノ兄君、まだ教室にいてくれましたか。」

永遠

「ん？どうかしたんかの？」

真耶

「はい。実は寮の鍵を渡し忘れてしまいました。」

一夏

「あれ？確か一週間ぐらいは家から通う事になってたと思うけど？」

永遠

「山田先生、ワシは家から通えるように許可は貰つとるが?」

真耶

「ええ、火ノ兄君はそうです。ただ、織斑君なんですが…事情が事情なので今日から入寮して貰う事になりました。急に決まった事なので今は空き部屋が無いんです。ですから、すみませんが相部屋になります。」

一夏

「え? そうなんですか…まあいいですよ。相部屋つて火ノ兄なんですよ? なら一人部屋と変わらないじゃ「馬鹿者!」…え?」

千冬

「火ノ兄は元から自宅通学だ! 初めから寮に部屋は無い!」

一夏

「えっ!?!」

真耶

「そういう事なので、織斑君は女子との相部屋になります。」

一夏

「ええええーっ!!」

真耶

「本当にごめんなさい！」

一夏

「いやそんなに謝らなくても…」

真耶

「……………」ウルウル

一夏

「そんな顔しないでください！怒ってないですから！」

真耶

「本当ですか…」

一夏

「本当ですから落ち着いて下さい！」

真耶

「ありがとうございます…ではこれが鍵です。1025号室が織斑君の部屋です。」

一夏

「どうも…あ、俺の荷物！」

千冬

「私を手配しておいてやった。ありがたく思え。着替えと携帯の充電器があれば十分だ

ろ。残りは休みの日にも取りに行け。」

一夏

「…はい、ありがとうございます…」

真耶

「後、夕食は6時から7時に寮の一年生用食堂で取って下さい。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど…織斑君は今のところ使えません。」

一夏

「何ですか?」

千冬

「馬鹿かお前は! 同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか?」

一夏

「え!」

真耶

「お、織斑君! 女子とお風呂に入りたいんですか!」

一夏

「い、いや、入りたくないです!」

真耶

「えっ？女の子に興味が無いんですか!？」

千冬

「やはりお前…」

さつきは冗談のつもりじゃったが、まさかコイツ、本物じゃったとは…

一夏

「え？…な、何？」

永遠

「…織斑…ワシの半径1m以内に入ってくるでないぞ！」

一夏

「おい！それどういう意味だ！」

千冬

「やはり家族会議を開くしかないか…」

一夏

「そういう事かよ！だから俺はホモじゃねええええーっ!!」

永遠

「ワシ等は誰もお主がホモとは言つとらんぞ。」

一夏

「えっ！」

千冬

「…自分で認めたか…」

一夏

「違うつつつてんだろーがーっ!!俺は普通に女の子が好きだーっ!!」

千冬

「言い訳は後でじっくり聞かせて貰うとして、火ノ兄、寮にお前の部屋は無いが、食堂で食事をする事は出来る。食事の時間は覚えておけ。」

永遠

「承知した。わざわざ申し訳ない。」

真耶

「いいえ、では私達は会議があるのでこれで失礼しますね。織斑君、道草しないで寮に帰るんですよ。火ノ兄君は気をつけて帰って下さいね。」

永遠

「ワシは大丈夫じゃよ！」

千冬

「そうか…ではまた明日な！…織斑…夕食が終わったら私の部屋に來い！家族会議だ！！」

一夏

「ちよ！ホントにやるのかよ!？」

千冬

「当たり前だ！」

真耶

「あははは……」

山田先生…笑い声が濁いとるぞ…

永遠

「ではワシはこれで…また明日！」

真耶

「あ、はい、さようなら！」

一夏

「千冬姉えええーっ!!」

馬鹿の聲が木霊しとるが無視じゃな

………

……

…

さて、ようやく帰れるが、セシリアに一言挨拶しとくかの…

永遠

「え〜〜つと…おお！ いたいた。お〜い、セシリア！」

セシリア

「永遠さん♪今からお帰りですか？」

永遠

「うむ！ じゃが帰る前にお主に挨拶しとこうと思うての。」

セシリア

「まあ♪わざわざ、ありがとうございます♪」／／／

永遠

「気にせんでいい。」

セシリア

「はい♪ですが、永遠さんともっとお話したかったですわ…」

永遠

「すまんの…今日はもう戻らんといかんから勘弁してくれ。明日の放課後でいいなら少

し話さんかの?」

セシリア

「よろしいんですの?」

永遠

「1時間程度でいいなら構わんよ。」

セシリア

「十分ですわ♪」／／／

永遠

「それは良かった!では、また明日な!」

セシリア

「はい♪また明日お会いしましょう♪」

ワシはセシリアと別れた後、校門前で「ドットプラスライザー」を展開して、家に帰ったんじやが、この時、ワシのISを見ていた者がおる事に気づかんかったんじや…

く永遠 Side outく

く? Sideく

?

「な、何アレ！アレもISなの!？」

私は偶然、学園から飛び立ったISを見てしまった…

その姿に私は驚いたままISが飛び去った方角をずっと見続けていた…

一瞬だけ見えた白い機体を思い出して私は…

？

「…カツコいい……………」

そう呟いていた…

く？ Side outく

く千冬 Sideく

今私の前には夕食を終えた一夏が正座している

千冬

「さて、家族会議を始めようか…」

一夏

「……………」

千冬

「一夏……………」

一夏

「……………はい…」

千冬

「何時から男に走ったあああああーっ！！」

一夏

「誤解だあああああーっ！」

私達の家族会議は朝まで続いた…

く千冬 Side outく

第035話：代表決定戦

（永遠 Side）

あれからアツと言う間に一週間が過ぎ今日は試合当日じゃ！

初日に家に帰った後、束さんに織斑との一件を話そうとしたんじやが既に知っていたんじや

謝ろうと思うたら束さんも織斑の言った事には呆れ果てていたようで気にせんでいいと言うてくれたんじや

むしろ言うてくれたと感謝されたぞい！

後、織斑には国から専用機が用意される事になったそうじや

まあ、ワシやセシリアには関係ない事じやが、その方が手加減せんで済むから丁度良かったわい

で、今ワシは織斑と同じピットにいるんじやが…織斑の機体がまだ届いとらんらしい

一夏

「…なあ、箒？」

箒

「……………」

一夏

「気のせいかもしれないんだが…」

箒

「気のせいだ!」

一夏

「この一週間、剣道しかしてこなかったんだが…」

箒

「……………」

一夏

「肝心のI Sの事、何も教えて貰ってないんだが?」

何じゃと!?

箒

「仕方ないだろ!お前のI Sが来てないんだから!」

一夏

「そうだけど…知識とか基本的な事とかあつただろ。」

箒

「……………」

つまりコイツはこの一週間何もしたらんのか？

まさか全部篠ノ之任せにしとったとは…やはりコイツは馬鹿じゃな！

後、何故にその篠ノ之がおるんじゃ？

千冬

「火ノ兄、織斑の機体がまだ届いていないから初戦はお前とオルコットで試合をして貰う。」

永遠

「あいよ！…時に織斑先生？」

千冬

「何だ？」

永遠

「何故に篠ノ之がおるんじゃ？ココは関係者以外は立ち入り禁止の筈じゃが？」

千冬

「ああ、それはな…」

箒

「私は一夏の幼馴染だ！いて何が悪い！」

千冬

「……こう言つて勝手に居座っているんだ……」

永遠

「さよか……篠ノ之……お主の言い分じゃつたら友達でもクラスメイトでもココにいい事になるぞ。」

箒

「何だと!？」

永遠

「それにお主、何かと幼馴染と言ふ言葉を使つとるが幼馴染ゆうんは何の力もないただの呼び方の一つじゃ。幼馴染じゃからといって織斑のおる所に来ていい理由にはならんぞ。一度辞書で調べてみい。『幼馴染の居る所には何処だろうと来てもいい』なんて載つとらん筈じゃ。」

箒

「き、貴様!？」

永遠

「ワシ……何か間違つたこと言つたかの?」

千冬

「いいや、お前は何一つ間違つた事は言つてないぞ！」

箒

「千冬さんまで！」

一夏

「ま、待つてくれよ千冬姉！…俺は箒がいても…」

千冬

「織斑先生だ！お前の意見は聞いていない！この場所は火ノ兄が言ったように関係者以外立ち入り禁止の機密区画だ！そこに勝手な理由で入り込んでる時点で篠ノ之は幾つもの規則を犯しているんだ！」

箒

「!?…私が…規則違反!?!」

千冬

「当たり前だ！私達教師が許可したならともかく、お前は勝手に入ってきたんだからな

！」

箒

「な、なら今すぐ許可を下さい！」

千冬

「馬鹿かお前は！既に入り込んでおいて今更許可をよこせとは何様のつもりだ！」
箒

「そ、それは…」

真耶

「お待たせしましたーっ!!織斑君の専用機が届きましたよ!…って何ですかこの空気？」

千冬

「何でもありません！少し馬鹿に説教をしていただけです。」

箒

「うっ!」

真耶

「はあ…何かあったんですか？」

千冬

「気にする必要はありません。それで例の物は？」

真耶

「あ、はい、織斑君はこちらに来て下さい。」

そこには一つの白いISがあったんじや

ワシの「ドットプラスライザー」と色が被つとるな…

一夏

「これが俺の…」

真耶

「はい！織斑君の専用機【白式】です！」

一夏

「【白式】…」

千冬

「織斑、すぐに初期化フォーマットと最適化ファインテューニングを済ませるぞ！さつさと【白式】に乗れ！」

一夏

「は、はい！」

千冬

「その間に火ノ兄とオルコットの試合を行う。火ノ兄、準備は？」

永遠

「出来とるぞ。……あつちはいいんかの？」

篠ノ之の方を指さすと…

千冬

「ほつとけ！オルコットの方も終わっているな？」

真耶

「はい！いつでも出られるそうです！」

箒

「……………」

ほつとけと言うならほつとくかの…

ワシには関係ないしの…

逆恨みされそうじゃが…

そんな時は無視すりゃいいか…

く永遠 Side outく

く一夏 Sideく

千冬

「火ノ兄！オルコットが待っている！早く行って来い！」

永遠

「了解…んじゃ、ちよつくら行って来るかいのお…」

あれ？…そう言えばアイツIISスーツ着てないぞ？

しかも、ISじゃなくて刀を持ってカタパルトから歩いてアリーナに出て行ったけど

…

一夏

「あの…ちふ、織斑先生…火ノ兄の奴、ISスーツに着替えていないけど？それに、ISじゃなくて刀を持って行ったんだけど？ていうか何でアイツ刀なんか持ってんだ？」

千冬

「ん？ああ、それはな…火ノ兄のISは少し特殊でな…あの刀がISの待機状態だ…ちなみにアレは軍刀と呼ばれる刀だ…その上、アイツはISスーツがいらんだ…まあ、見れば分かる。」

一夏

「ISスーツ着なくていいのか…いいなあ、面倒臭くなくて…」

千冬

「それに関しては私も同意見だ。一々着替えるのが面倒な上にあの格好だからな…」

真耶

「そうですね…面倒ですし、あの格好ですからね……」

みんなそう思ってたんだ…確かにISスーツって傍目にはスク水だもんなく…

ザワザワ…

一夏

「なんか騒がしいな？」

千冬

「大方、火ノ兄がIS無しで出て来たからだろ。小娘共これからタップリと驚くとい
い！」

真耶

「そうですね〜アレは驚きましたもんね〜」

一夏

「…どういう事だよ？」

千冬

「見てれば分かると言ったぞ。モニターを見ていろ。そろそろ始まる。」

一夏

「え？」

そう言われて視線をモニターに戻すと、火ノ兄が軍刀を抜いて正面に向けていた

一夏

「何してんだアイツ？」

そのまま、軍刀で正面に円を描くと刀の切っ先が通った後が光の円になった

その円から光が出ると正面にいた火ノ兄を包み込んだ

一夏

「何だ!?!」

光が消えるとそこにいたのは火ノ兄じゃなくて白い全身装甲フルスキーンのISが立っていた

一夏

「な、何だよアレ!?!…アレが火ノ兄の…」

千冬

「そうだ!アレが火ノ兄のIS『ドットプラスライザー』だ!!」

一夏

「『ドットプラスライザー』…か、かっけええ!」

ISっていうかロボットじゃねーか!?

く一夏 Side outく

くセシリア Sideく

フツツ♪永遠さんと出会ってから今日まで、積み重ねてきたわたくしの力を遂に見せる時が来ましたわ!

永遠

「すまん！待たせたかの？」

セシリア

「いいえ、大丈夫ですわ♪」

永遠

「そうか！」

セシリア

「この日を楽しみにしておりました！…永遠さん！！わたくしと【ブルー・ティアーズ】の力を見せて差し上げますわ！！」

永遠

「望むところじゃ！ワシと【ドットブラ斯拉イザー】が受けて立つわい！！」

へセツトアツプ ブラストソード

【マルチギミックサクサク】を出しましたわね！

セシリア

「…最初は片手剣ですか。」

永遠

「コイツが一番使いやすい形態じゃからな。」

まずは様子見、という事ですわね…

アナウンス

『それではこれより、火ノ兄永遠VSセシリア・オルコットの試合を始めます。……………試
合開始!』

セシリア

「行きますわよおおおおおーっ!!!」

永遠

「来いやあああああーっ!!!」

くセシリア Side outく

第036話：第1試合【ドットブラスライザーVS蒼い雪】

〔簪 Side〕

…私は更識簪

…一応日本の代表候補生をしている

…でもある理由でまだ専用機は持っていない

…今私は1組のクラス代表を決める試合を見に来ている

…試合には二人しかいない男性操縦者も出ると言うからどの程度の物か少し気になった

…そして、私は驚きと感動に体が震えていた！

…何故なら、私の目の前に以前見かけたあの白いISが現れたからだ！

簪

「…やっぱりカッコいい…【ドットブラスライザー】って言うんだ…」

…今、試合をしている【ドットブラスライザー】は私の好みのも真ん中だった！まさか、男性操縦者のISとは思わなかったけど…

本音

「かんちゃんのお味にピッタリのISだね〜♪」

簪

「そうだね!…って、ほ、本音!」

この子は布仏本音、一応私の専属メイドをやっている

簪

「…ねえ、本音はあの機体の事は知ってた?」

本音

「ん〜?私は何も知らないよ〜♪ひののん、ISを一度も使わなかったもん♪」

簪

「…そうなんだ…」

…それにしても火ノ兄さんだっけ、変なこと言ってたな、形態ってどういう事かな?

〜簪 Side out〜

〜三人称 Side〜

《アリーナ》

試合開始と同時に最初に仕掛けたのはセシリアだった

セシリア

「先手必勝！」

セシリアは大型ライフル「スターライトmkⅢ」で攻撃したが、永遠も向かって来るレーザを躲し、或いは剣で弾きながら接近しようとしていた

だが、セシリアの射撃によって中々近づけずにいた

永遠

「チツ……（……この形態では不利か……ならば……）」

〈セツトアップ プラストマグナム〉

永遠は片手剣では不利と判断し「マルチギミックサック」を片手銃に変形させた

永遠

「射撃には射撃じゃ！」

セシリア

「わたくしに射撃で勝てるでも！」

二人はそのまま射撃戦を開始した

永遠は連射性で、セシリアは精密性で勝負していたが、射撃ではやはりセシリアの方が一枚上手であった

セシリア

「やはり、永遠さんは、射撃が得意では無いようですわね！」

永遠

「バレとったか！やはり接近戦で行くしかないのぉ！」

へセツトアツプ デュアルブレード ブラストガーター

永遠は「マルチギミックサク」を双剣と盾に変形させると、向かって来るレーザーを回転させた双剣で防ぎながらセシリアへと突っ込んでいった

セシリア

「クッ……（やはり、あの形態が一番厄介ですわね！）」

今度はセシリアが苦い表情をしながらレーザーを撃っていたが、全て防がれてしまい、ついに接近を許してしまった

永遠はそのまま双剣でセシリアに斬りかかったが……

永遠

「はああああーっ！」

セシリア

「まだですわ！」

ガキイン！

セシリアは左手に接近武装「インターセプター」を展開して防いだ

永遠

「…接近戦も出来たんか！」

セシリア

「…得意ではありませんが…出来ないわけではありませんわ！」

そのまま力勝負の鏝迫り合いになったがパワーは「ドットブラ斯拉イザー」が上の為
セシリアは押され始めた

セシリア

「くううっ！（力は向こうが上…でしたらー）」

セシリアは右手に持っていた「スターライトmkⅢ」を放り投げ砲身の方を掴み直す
と、なんとライフルでそのまま永遠を殴りつけた

ボカアアッ！

永遠

「何いいい!？」

観客

「ええええええええーっ!!」

永遠を殴りつけた隙に再びセシリアは距離を取った

セシリア

「ハアハア……ど、どうです永遠さん！」

永遠

「ググッ……頭に響くのお……ライフルで殴るとは……じゃがそげな使い方をしとるといずれ使い物にならなくなるぞ！」

セシリア

「……安心して下さい！このライフルは今の様な事を想定して強度を上げております！」

観客

「ええええええええーっ！！」

観客も驚いていた……それもその筈、何処の世の中にライフルで殴る事を考えている人間がいると思うのだろうか

セシリア

「……永遠さん相手に接近戦が短剣1本では不安しかありませんもの。ですから、ライフルの強度を上げて鈍器として使用出来る様にしましたわ。」

永遠

「……ワシと戦う為にライフルをハンマー代わりに出来るようにしたんか……面白い!!」

観客

「……………」

二人の会話を聞いて観客たちも気づいた

セシリアは永遠との戦いの為だけにライフルを改造したのだと

永遠

「じゃが、そんな奇襲は二度は通じんぞ…行くぞおーっ!!」

セシリア

「今度はそう簡単に近づけさせません！踊りなさい！『ブルーティアーズ』の奏でるワルツ舞曲を！」

セシリアはそう言うのと機体から2つのパーツを切り離れた

永遠

「何じゃこれは!？」

セシリア

「これがわたくしのIS『ブルー・ティアーズ』の奥の手、自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』ですわ！」

永遠

「…機体と同じ名前の装備じゃと？」

これがイギリスが開発した第3世代兵器、通称『BT兵器』である

セシリアのISはこの武装のサンプリングを兼ねている為、機体と武装の名前が同じ

なのである

セシリア

「それでは、今度は3方向からの攻撃をお見舞いいたしますわ。」

永遠

「ククツ…そこなくてはなああ！」

《管制室》

千冬

「…オルコットの奴、模擬試験の時より遥かに強くなってるな。」

真耶

「そうですね。多分、火ノ兄君と戦う為にあの日から今日まで血の滲む様な努力をしてきたんでしょうね。」

千冬

「そうだな。だから、火ノ兄もそれに全力で答えているんだろ。」

教師二人はセシリアの成長を素直に褒めていた

《ピット》

一夏

「す、すげえ……」

一夏は自分の予想以上の二人の戦いに驚いていた

《アリーナ》

永遠とセシリアの戦いはさらに苛烈さを増していった

だが、セシリアはまだ永遠が本当の力を使ってこない事に僅かながらイラついていた
セシリア

「永遠さん……いい加減本気になったらどうです？」

ザワ……

セシリアの言葉に会場の生徒達は動揺した

それもそうだろう、あれだけの戦いをしてまだ本気を出していないと言ったのだ、それも本人ではなく対戦相手が言っているのだから

永遠

「そうじゃな……ワシもそろそろ使おうと思うてたんじゃ。」

〈ラグナロクフェイズ〉

永遠

「行くぞ!!」

電子音声が出ると「ドットブラスライザー」の各所が展開・変形し始めた。変形が終わると最初とは全く違う姿の「ドットブラスライザー」がそこにはいた。観客

「ええええええええーっ!!」

《管制室》

千冬

「遂に本領発揮か!」

真耶

「オルコツトさん、大丈夫でしょうか?」

千冬

「さあな、だがアイツはあの形態を知っている。何かしらの対策はあるだろ。」

真耶

「そうだといいですね。」

教師二人はセシリアの対応策に期待していた

《ピット》

一夏

「へ、変形した！」

箆

「何なんだあのふざけたISは!？」

一夏

「…カツケえええ…」

《観客席》

箆は目を見開いて驚いていた

箆

「な、何あの姿！武器だけじゃなくて…ISまで変形するの!？」

本音

「凄いね〜♪」

箆

「…カツコいいいいー……」

「ドットブラスライザー」の変形に箆は感動すら覚える程興奮していた

同じ頃、観客席の別の場所にいた楯無は自分が負けた時の事を思い出していた
楯無

「…遂に出したわね！…セシリアちゃん、あの姿の火ノ兄君に勝てるのかしら？」
扇子に『本領発揮』と書かれた通りの姿になった相手に、セシリアがどれだけ喰いついていけるのか見守っていた

《アリーナ》

永遠

「行くぞセシリア！」

両腕に展開した爪「ヴァリアブルクロウ」で斬りかかった
生徒達はその速さに目を見開いて驚いていた

何故なら先程までとは比べ物にならない速さだったからだ

セシリア

「くっ！」

セシリアは躲したが、永遠は続けて攻撃を仕掛けた…しかし…

永遠

「…この速度に追いつくか…」

永遠の連続攻撃をセシリアは紙一重とはいえ全て避けて見せたのだ

セシリア

「…はい…あの日の試合の事は一度も忘れた事はありません…わたくしは今日までずっと頭の中でシミュレーションしてきました…お陰でわたくしの思考は『ラグナロクフェイズ』の速度にギリギリですが追いつけるようになりました…」

永遠

「……………」

セシリア

「…思考が追いつけるようになれば後は体を追いつけるように鍛えるだけですわ!」

生徒達

「……………」

セシリアは簡単に言っているが、彼女の話を聞いて生徒達は言葉を失ってしまっていた

セシリアの強さは試合を見ていれば十分に伝わっていた

そして、その強さを手にする為にどれだけ努力したのか、想像が出来ないほどだった
しかも、それは全て、セシリアの目の前にいる男と戦う為だけに手にしたのだ

永遠

「…お主は…ほんに強い女子じゃのお…」

セシリア

「永遠さん…」

永遠

「お主の様な強い者と戦える事を、ワシは嬉しく思うぞ！」

セシリア

「ありがとうございます！永遠さんにそう言ってもらって頂けて光栄ですわ！」

観客席にいる生徒達は、この時分かったのだ…この二人は互いに認め合っているのだと…

認め合っているからこそ、互いに高め合い全力を出して戦えるのだと…

生徒の何人かはそんな二人を羨望の眼差しで見ていた

永遠

「ならば、改めて第2ラウンドといこうかの？」

セシリア

「望むところですよ！」

永遠

「行くぞおおおーっ！」

永遠はセシリアへと向かっていった

セシリア

「こちらにも出し惜しみは無いですわ！」

セシリアはビットを4基射出し全方位から攻撃を仕掛けた

永遠

「クッ！4基じゃと!?2基ではなかったんか！」

セシリア

「当然です！永遠さん相手に初めから切り札を全て使うほど馬鹿ではありませんわ！」

永遠

「カカツ…なるほどなああああーっ!!」

《管制室》

真耶

「凄いですね！オルコットさん！」

千冬

「ええ、まさか『ラグナロクフェイズ』の速度に追いつけるまでになっているとは…今のオルコットなら国家代表にも匹敵するかもしれません。」

真耶

「それも全ては火ノ兄君との出会いのお陰ですね。」

千冬

「そうですね。…今頃、アイツはどうしているかな？」

真耶

「織斑君ですか？」

千冬

「ええ、…まあ自分との実力差を見てビビッてるでしょうね。」

真耶

「はあ…」

《ピット》

一夏

「アイツ等…こんなに強いのか…」

千冬の予想通りビビッていた

《アリーナ》

現在、永遠はセシリアの他方向から攻撃に苦戦を強いられていた

永遠と出会う前のセシリアはビットを動かす際にそちらに意識を集中しなければならぬ為、本人は攻撃できず動く事さえ出来なかつた

しかし、今のセシリアは永遠との戦いを目標として努力を重ねた結果、ビットを操作する時も移動と攻撃が可能となっており、更に、ビットも以前よりも速く細かい動きが出来る様になっていた

永遠

「チイツ…（セシリアを直接狙うのは無理そうじゃな…狙うならまずはビットか！）」

セシリア

（永遠さんが狙うとしたらまずはビットの筈…ならば！）

永遠は自分に一番近いビットに向かつて行きそれを破壊した

しかし、それがセシリアの狙いでもあつた

永遠

「…よし！次…ガッ！」

永遠がビットを破壊する時に隙が出来ると考えたセシリアは、ビットの1基を囲にして残りの3基で一斉攻撃を仕掛けたのだ

永遠

「グウツ！…まだじゃない！」

攻撃を受けながらも永遠は3基の内の1基をさらに破壊した

さすがにビットの数が半分となったのでセシリアも一端ビットを下げた

永遠

「流石じゃなセシリア！」

セシリア

「それ程でもありませんわ！」

永遠

「ククツ、謙遜するでない！『ラグナロクフェイズ』の動きについていけとる時点で、お主は強い！さっきからそう言うとるじゃろ。…セシリア…ワシは今とても楽しいぞ…お主との勝負は、ほんに楽しいなあ！」

セシリア

「永遠さん…フフツ♪…はい！わたくしも楽しいですわ♪」

笑顔で笑い合う二人を見て生徒達も二人が心から楽しんで戦っている事が伝わっていた

永遠

「…故にワシは、お主に敬意を表し『ドットブラスライザー』の真の力を見せよう！」

セシリア

「真の力？【ラグナロクフェイズ】ではありませんの？」

永遠

ワンオフ・アビリティ

「単一仕様能力起動！」

セシリア

「え？」

永遠

「来い！【ドットフェニックス】!!」

永遠がそう叫ぶと青い戦闘機が現れた

セシリア

「あれは…戦闘機?!」

この戦闘機こそ【ドットブラ斯拉イザー】の単一仕様ワンオフ・アビリティ【ドットフェニックス】だった

セシリア

ワンオフ・アビリティ

「永遠さん！単一仕様を使えましたの!?!」

永遠

「使えるぞ。一応紹介しておくかの。コイツが【ドットブラ斯拉イザー】の単一仕様ワンオフ・アビリティ

「ドットフェニックス」じゃ。」

セシリア

「ドットフェニックス」…」

永遠

「コイツはワシの支援機でな。ワシとの連携も出来るんじやが今回はそれは使わん。本命のもう一つの機能を使う。」

セシリア

「もう一つ?」

永遠

「ドットフェニックス」!」

〈ドットブラ斯拉イザー ドッキング・シークエンス〉

永遠の呼びかけに答える様に「ドットフェニックス」から電子音声で聞こえると次の瞬間「ドットフェニックス」は5つに分離した

それと同時に「ドットブラ斯拉イザー」も機体の装甲が白から赤へと変わっていった
セシリア

「ドットブラ斯拉イザー」が、赤く!?!」

〈ドッキング・スタート〉

機体が赤く染まった【ドットプラスライザー】に5つに分離した【ドットフェニックス】のパーツが合体していった

最初は両足にパーツが接続され、次に背中のバックパックが外れ、【ドットフェニックス】本体部分が接続された

最後に右腕に巨大な槍、左腕に大型のシールドが装備された

（ドットプラスライザー・ジーエクスト）

そこには【ドットフェニックス】と合体した【ドットプラスライザー】の新たな姿があった

セシリア

「がっ合体しましたの!？」

永遠

「さよう!これが【ドットプラスライザー】の最終形態【ドットプラスライザー・ジーエクスト】じゃ!!」

セシリア

「【ドットプラスライザー・ジーエクスト】!？」

《管制室》

千冬

「ドットブラスライザー・ジーエクスト」だと!？」

真耶

「何ですかあれー!!」

千冬

「落ち着け!…何なんだあのISは!変形機能の他にも合体機能まで搭載していたのか!どこまで規格外の機体なんだ!あれでは完全にどこぞの合体ロボットそのものだぞ!」

真耶

「ホントですよ…」

教師二人は案の定、合体に驚いていた

《ピット》

一方こちらは…

一夏

「何だよアレ!」

箒

「一夏？」

一夏

「無茶苦茶カツコいいじゃねえかー！！」

一夏は「ドットブラスライザー」の合体に男のロマンを感じていた

《観客席》

そしてこちらも…

簪

「カカカ、カツコいいいいいいいい！！！！」

本音

「か、かんちゃん…」

簪

「見て見て本音！合体だよ合体！合体ロボットキターー！！」

本音

「かんちゃん…」

目をキラキラさせる簪は興奮のあまりキャラが崩壊していた

一方、楯無は…

楯無

「まさか変形だけじゃなくて合体まで出来るなんて…私の時は使わなかったのに！」
自分と戦った時に使わなかった事に不満を漏らしていた
ちなみに扇子には『不満』と書かれていた

《アリーナ》

永遠

「まずは周りのビットが邪魔じゃな！」

セシリア

「え？」

永遠はそう言った瞬間残る二つのビットの内の一つの前に移動し槍で斬り裂いていた

セシリア

「は、速い！」

セシリアはすぐに最後のビットを動かそうとしたが、既に永遠は最後のビットの前に来ていた

永遠

「これで全部じゃー！」

そして最後の1基を破壊した

セシリア

「…そ、そんな…」

セシリアが驚くのも無理は無かった

【ラグナロクフェイズ】でも永遠は2基破壊するのにも手こずっていたのだ
それが、合体した途端、残りの2基を一瞬で破壊してしまった

セシリア

「…これが…【ドットプラスライザー】の真の力…」

永遠

「はあああああああーっ！！」

セシリア

「はっ!？」

ガキーン!

永遠は槍で斬りかかったが、セシリアはそれをライフルで受け止めた

セシリア

「グウウー…まだ…です…」

永遠

「今のは効いたぞ！」

セシリア

「!?」

セシリアの予想通り煙の中から声が聞こえてきた

槍を横薙ぎに振り煙を吹き飛ばすとそこから「ドットプラスライザー・ジーエクスト」が出てきた

セシリア

「…少しはダメージを与えたと思ったのですが…あまり効いていないみたいですね」

ザワザワ…

生徒達も至近距離でミサイルの直撃を食らって破損が小さいとは思わなかったよう
で動揺していた

永遠

「…確かに機体の損傷は軽微じゃが、SEはそれなりに減ったぞ。」

セシリア

「フフツ…それは良かったです♪…ですが、わたくしはまだ負けていません！」

セシリアは「スターライトmkⅢ」を永遠へと向けた

しかし「ブルー・ティアーズ」は既に限界が近くなっており、これ以上の長期戦は不可能な状態だった

そして、セシリア自身もその事に気づいていた

セシリア

（「ブルー・ティアーズ」…もう少しだけ…付き合ってください！）

永遠

「…それでこそセシリアじゃ！なればこそ、ワシも最後まで全力を尽くす！！」

永遠はそう言うのと背中中のレール砲を展開し、セシリアに照準を合わせた

永遠

「行くぞ！！」

そのままレール砲と翼に装備された8発のミサイルを一齐に発射した

セシリア

「くっ！」

レール砲は躲す事が出来たが残りのミサイルがセシリアを追いかけてきた

ミサイルの幾つかは撃ち落せたが残りが「スターライトmkⅢ」に命中し破壊されてしまった

「無事かセシリア！」

セシリア

「…うつ…永遠…さん？…やっぱり…永遠さんは強いですわね…」

永遠

「何を言う！お主も強かったではないか！」

セシリア

「…でも負けてしまいましたわ…やっぱり負けるのは悔しいですわね…」

永遠

「すまん、少々やり過ぎた。」

セシリア

「フフツ♪構いませんわ♪」

永遠はそのままセシリアが出てきたピットの方に戻っていった

《ピット》

一方、一夏は二人の実力を見て驚愕していた

一夏

「何だよあの強さ!?!…俺は今から…アイツと戦うのか!?!」

一夏は一週間前の姉の言葉を思い出していた

千冬

『火ノ兄に勝てる奴は教師も含めてこの学園には一人もいないだろう。この私も含めてな！』

一夏

「アレは冗談じゃなかったのかよ！」

これから自分が戦う相手の実力に恐怖していた

三人称 Side out

第037話：出陣！戦国龍！！（前編）

（永遠 Side）

ワシはセシリアを抱き上げたままピットに戻ってきた

セシリアを下ろすとワシ等はISを解除したんじや

永遠

「セシリア、大丈夫か？」

セシリア

「はい、この位何ともありませんわ。」

永遠

「…そうか、次の試合は出られるかの？」

セシリア

「…無理ですわね…機体のダメージが大きすぎますわ…」

永遠

「…そうか…なら織斑先生にお主が棄権する事を伝えておくれ。」

セシリア

「お手数お掛けします。」

永遠

「気にせんでいい…そもそも、ワシが…」

セシリア

「永遠さんのせいではありません!それにこれは、それだけ永遠さんが本気で戦ってくれたという証明ですもの!」

永遠

「…ありがとうございます…セシリア…」

セシリア

「感謝するのはこちらの方ですわ♪約束を守っていただきありがとうございます♪」

永遠

「カカツ、お主はほんに良き娘じゃのお…」

セシリア

「と、永遠さん／＼／」

この後ワシは向かいのピットにおける織斑先生にセシリアが棄権すると伝えたんじゃ

く永遠 Side out く

く一夏 Sideく

千冬

「織斑…さつき火ノ兄から連絡が来た。オルコットは機体のダメージが大きいかから棄権するそうだ。」

一夏

「棄権…」

千冬

「まあ、あれ程の攻撃を受けたんだ、当然といえば当然だな。」

そんな奴とこれから戦うのかよ…

一夏

「なあ…千冬姉…俺、勝てるかな…」

あんな…あんな化け物みたいな奴に

千冬

「…織斑先生だ…まあ今はいいか…お前は何を言ってる…」

一夏

「千冬姉！」

もしかして千冬姉は俺が勝てることを信じてくれてるのか！

そうだよな！俺には千冬姉と同じこの【雪片式型】があるんだ！

千冬姉と同じ武器を使って負ける訳がない！

そう思ってたら…

千冬

「…お前が勝てる訳ないだろ？」

一夏

「ち、千冬姉…」

箒

「千冬さん!?!」

何で…何でそんな事…

千冬

「…何故そんな事を言うんだ…とやりたい顔だな。理由は簡単だ。この一週間のお前を見てれば期待出来る訳無いだろ。」

一夏

「え!?!」

千冬

「…どうやらお前には、一週間前の火ノ兄とオルコットのメッセージが届かなかつたよ

うだな…」

一夏

「メツセージってなんだよ！あいつらは俺を…」

千冬

「俺をさんざん馬鹿にして無視しただけ…か？」

一夏

「うぐ……そ、そうだよ！違うのかよ！」

箒

「千冬さん！どういう事ですか!？」

千冬

「…お前まだいたのか…自分で出て行くと思ったんだがな…」

箒

「あ…」

千冬

「フンツ…一夏、お前気付いてないのか…ならさっさと出ろ！試合をしながら火ノ兄が教えてくれる筈だ。」

一夏

「何で今教えてくれないんだ!」

千冬

「それでは意味が無い!…だが二つ程教えてやる。一つ目はあの二人がお前を無視したのはワザとだ。」

一夏

「え?…ど、どういう事だよ?」

千冬

「その通りの意味だ。二つ目は火ノ兄がお前を無視する前に言った言葉はワザとじゃない。後は自分で考えろ!」

一夏

「俺を無視したのがワザとで…その前がワザとじゃないって…」

千冬

「あの時は私もお前の言った事に呆れ果てていたからな…」

一夏

「!?…それじゃあ、千冬姉も俺を腰抜けて言うのかよ…」

千冬

「言われる様な事をお前は口にしたんだ!もつと考えてから物を言え!」

一夏

「うっ！」

千冬

「言われたくなかったら、そうではないと周りに認めさせるんだな！分かったらさっさと逝ってこい！」

一夏

「…字が違わなかったか？」

千冬

「…気のせいだ！」

深く聞かない方がいいな…

一夏

「…じゃあ、行ってくる…織斑一夏、【白式】行くぜ!!」

1週間前の事、力づくでも聞き出してやる!

く一夏 Side out く

く永遠 Side く

さて、次の試合じゃな…こいつを使うかの…相手は役者不足じゃが…

永遠

「セシリア、すまんがこれを預かって貰っていいかの？」

そうやってワシは腰に差しとった軍刀をセシリアに渡した

セシリア

「永遠さん…これって【ドットブラスライザー】ですわよ！」

永遠

「そうじゃ、次の試合、ワシは別のISを使おうと思うてな。」

セシリア

「別のって…他にもありましたの!？」

永遠

「ああ、じゃが相手が役者不足かもしれないな。」

セシリア

「かも、ではありませんわ!完全な役者不足です!…今の織斑さんでは永遠さんに勝つのは不可能ですもの。一撃当てられれば十分だと思いますわ。」

永遠

「やはりそんなところか…」

セシリア

「ええ、この一週間は篠ノ之さんに剣道を教わっていたそうですが、殆どサンドバッグになつていただけらしいですわ。」

永遠

「それは本人がさつき言うておつた…篠ノ之もそれしかしとらんらしい…と言うかサンドバッグになつとつたんか…他に何かしていたとか聞かんかったか？」

セシリア

「わたくしはそれしか知りません。恐らく何もしていないと思いますわ。」

永遠

「やはりそうか…馬鹿かアイツは？つて馬鹿じゃったな。奴には危機感ゆうもんが無いんじゃないか？」

セシリア

「無いと思いますわ。馬鹿ですから。」

永遠

「ハア…一週間前にあれだけ危機感を与えたというに…」

セシリア

「わたくし達がワザと無視して煽つた意味がありませんでしたわね。」

永遠

「恐らく、と言うか絶対に気付いとらんな…少しでもやる気にさせようと思ったんじやが無駄じゃったか…ハア、こいつを使うのが可哀想になって来たのお…」

ワシは一振りの日本刀をセシリアに見せた

セシリア

「それがISですの?と言うかまた刀ですわね。」

永遠

「そうなんじゃよ…次の試合はコイツの初陣じゃ。出来ればお主の様な実力者が初戦の相手がよかったんじやが…相手があんなしよぼい相手とはなく…」

セシリア

「でしたら何故わたくしとの試合で使わなかったのですか?」

永遠

「それでは不公平じゃろ!お主の機体や戦闘映像は調べれば出てきおったからな。逆にワシのデータはあの模擬戦しかないからの。あの時と同じISを使わんとお主が情報面で不利じゃろ!」

セシリア

「永遠さん…そこまで考えて下さったのですね…」
／／

永遠

「うむ。じゃから織斑との試合で使うしかないんじゃないや。どうせ人前に出すんじゃないや。試合の時の方がいいからのお。」

セシリア

「その考えはわたくしにも分かります。どうせなら大勢の前で見せたいですから。」

永遠

「そういう事じゃよ。…さて、そろそろ行くかの。」

いつの間にか織斑がアリーナで待つとるからな

永遠

「どうやら、ファーストシフト一次移行は済んだようじゃな。」

セシリア

「その様ですわね。それでは大丈夫だと分かっていますが頑張ってください♪」

永遠

「おうよー!」

ワシは前の試合と同じように歩いてピットからアリーナに出て行くと、織斑がワシを睨んできおった

ワシは無視してI Sを呼ぶ準備を始めた

永遠

「さあ、ゆくぞ…今日がお前の初陣じゃ!出陣するぞ!」【戦国龍】!!!

ワシはそう言うのと、刀を抜き頭上で大きな円を描いたんじゃ!

く永遠 Side out く

く一夏 Side く

火ノ兄は前の試合と同じようにISを纏わず歩いて出てきた

俺は上から睨みつけたけど、アイツはまるで気にしていなかった:

そして、火ノ兄がISを展開しようとした時、俺は違和感を感じた…その理由はすぐに分かった

前の試合、火ノ兄のIS…【ドットプラスライザー】は待機状態が軍刀って言う刀だったけど…でも今は、違う刀を持っていた

…どうということだ?そう思った時!

永遠

「さあ、ゆくぞ…今日がお前の初陣じゃ!出陣するぞ!」【戦国龍】!!!

火ノ兄がそう叫んで刀を抜くと、さつきと違って頭上で円を描いた

そして、さつきは円から光が出たのに今回は炎が出てきた

炎が火ノ兄を包むとその炎は丸い球体になって俺のいる高さまで上ってきた

第038話：出陣！戦国龍!! (後編)

く千冬 Side

千冬

「【戦国龍】だと!?何だあれは!?あれもISなのか!？」

火ノ兄の奴、他にもISを持っていたのか!？」

だが、何だあの機体は！管制室のココからでも感じる圧倒的な存在感！そして威圧感！

これほどの威圧感を出すISなんて私は知らんぞ！

それ以前に下手をしたら一夏の奴は立つ事すら出来ないぞ？

真耶

「おおお織斑先生！ななな何ですかアノISは!？」

千冬

「そんな事は私が聞きたい位です!？」

真耶

「す、すみませ〜ん!」

千冬

「いえ、こちらもすみませんでした…火ノ兄の奴…とんでもない物を出してきたな！」

真耶

「ホントですよ…」

あれも神とやらが造ったISなのか…

く千冬 Side outく

く箒 Sideく

箒

【戦国龍】…

私は一夏と対峙しているそのISに目を奪われていた…

いや、心を奪われてしまっていた…

何て美しく雄々しい姿なんだ…

私の中の武士の血が沸き立っている…

箒

「素晴らしい…」

私にはそれだけしか考えられなかった…

あのI Sこそ私に相應しい!

あんな田舎者には宝の持ち腐れだ!

私は必ずあのI Sを私だけの物にして見せる! そう心に誓った!

千冬

「……………」

↳ 箒 Side out

↳ 楯無 Side

楯無

「まさか他にもI Sを持っていたなんて…でも何なのアノI S?」

会場にいる殆どの子達があの機体の威圧感に飲み込まれている!

もっと詳しく調べないといけないみたいね!

↳ 楯無 Side out

↳ 簪 Side

本音

「かんちゃん大丈夫?」

簪

「…なんとか…危うく飲まれるところだった…本音は？」

本音

「正直かなりきついよ。ひののん、凄いの出してきたね。」

簪

「…そうだね…でも何なんだろうあの機体？もう一つあるなんて思ってもみなかった…」
ただ、そこにいるだけであれだけの存在感を出すなんて…

く簪 Side out

くセシリア Side

セシリア

「あれが、永遠さんのもう一つのIS【戦国龍】…」

なんとという機体なんでしょう…威風堂々としたその姿は王の風格を漂わせていまし
た

セシリア

「本当に悔しいですわね…出来ればわたくしが最初に戦いたかったですわ…」

わたくしはいつの間にか織斑さんに嫉妬していましたわ

まだ戦っていないとはいえ【戦国龍】は「ドットブラスライザー」を超えるISだと分かりましたわ

その最初の相手に選ばれるなんて…羨ましいですわ

ですが今は【戦国龍】の力をこの目に焼き付けさせていただきますわ!

～セシリア Side out～

～東 Side～

クロエ

「東様! 兄様が【戦国龍】を起動させました!」

東

「とうとう使ったんだね! で、相手は?」

クロエ

「織斑! 夏様です!」

東

「いっくんか…いっくんじゃ相手にならないだろうね…」

クロエ

「そうですね。むしろ立っていられるかも怪しいですよ?」

束

「そうだね……まあ死にはしないから大丈夫だよ！それじゃクーちゃん！【戦国龍】の
戦データを取るよ！」

クロエ

「分かりました！」

さて、とーくんの最強の IS 【戦国龍】の力を見せて貰うよ！

く束 Side outく

く一夏 Sideく

一夏

「ゴクツ………」

なんだこの IS！目の前にいるだけなのに心臓を鷲掴みにされたような感覚だ！

一夏

「ハア、ハア……」

何もしてないのに体力が削られていくみたいだ！

永遠

「どうしたんじゃ？まだ試合も始まっくらんのに、そげに息を切らしおって。」

一夏

「な、何でもない!!」

永遠

「さよか。」

一夏

「試合の前に聞きたい事がある。一週間前、俺を無視していたのはワザとなのか？」

永遠

「む?…何故そう思った？」

一夏

「千冬姉が教えてくれた!それ以外はお前が教えてくれるって!」

永遠

「ハア…なんじゃ…結局自分じゃ気付かなかったか…」

一夏

「何だよその溜息は!」

永遠

「…いや、お主がここまで馬鹿とは思わなかっただけじゃ。」

一夏

第039話：第2試合【戦国龍VS白式】

～三人称 Side～

《管制室》

千冬

「始まったか…」

真耶

「織斑先生…織斑君が勝てる見込みはどの位あるんですか？」

千冬

「織斑にもさつき聞かれたがアイツが勝てる見込みは0だ。」

真耶

「0…ですか？」

千冬

「ええ、この一週間のアイツを知れば勝てる訳が無い。火ノ兄に一太刀当てられれば上出来と言うレベルだ。」

真耶

「そうなんですか？」

千冬

「ああ、恐らく火ノ兄とオルコツトも私と同じ考えだろう。何しろアイツは一週間もの間、殆ど何もしてないんだからな。まあ教えていた方にも問題はあるみたいだが。」

千冬はそう言いながら自分の後ろにいる、ピットから勝手について来た箒に聞こえる様に答えた

箒

「……………」

千冬

「…まあ、そういう訳でアイツはこの試合は絶対に勝てない。火ノ兄に説教されながら叩きのめされて終わりだ。」

真耶

「そうですか…」

《アリーナ》

一夏

「うおおおおおおおおおーっ！！」

一夏は永遠に正面から斬りかかったが…

ガキイイーン！

一夏

「何いい！」

永遠は左手に持った槍で片手で受け止めていた

永遠

「…軽い剣じゃな…」

一夏

「何だと！」

永遠

「軽いと言ったんじゃ…」

そのまま一夏の剣を弾き槍の柄で一夏の横腹を殴った

一夏

「ガッ！…ク、クソツ！うおおおおおー！つ！！」

永遠

「また突っ込んできおったか…」

永遠は今度は受ける事はせず一夏の攻撃を全て軽々と避けてみせた

一夏

「クソツッ！何で当たらないんだ！」

永遠

「…攻撃が単純だからじゃ…この程度なら目を閉じてても避けられるわい…」

一夏

「クッ！馬鹿にするなあああーッ！」

永遠

「…お主は正面から突っ込む事しか知らんのか？」

永遠は再び避けるが、今度はただ避けるだけではなかった

永遠

「ワシの手足にばかり気をとられん方が良いぞ。」

一夏

「え？…ガッ！」

突然、一夏は殴られたような衝撃が来たのでそちらの方を見ると…

一夏

「し、尻尾だと！」

そう、永遠は避けると同時に【戦国龍】の尻尾を一夏に叩きつけたのだ

永遠

「この尻尾がただの飾りかと思ったんか？ちゃんとワシの意思で動かせるぞい。」

一夏

「なっ！」

永遠

「まあ尻尾の事は別にいい：所でお主、さつきから何をやつとるんだ？」

一夏

「何だと！」

永遠

「先程から猪の様に突っ込んでくる事しかしとらんではないか。」

一夏

「猪だと!？」

永遠

「違うんか？」

一夏

「違うに：決まってるんだろおおおーっ！」

一夏は否定しながらまたも突っ込んだ

永遠

「…どこが違うんじや？」

永遠は懲りずに突っ込んできた一夏を槍で地面に叩き落とした

一夏

「がああああーっ！」

永遠も一夏を追って地面に降りて行つた

一夏

「ぐっ…くそおお…」

永遠

「どうした？この程度で終わりか？」

一夏

「…これならどうだ！【零落白夜】発動!!」

一夏は【白式】の単ワンオフ・アビリティ一仕様【零落白夜】を発動させた

永遠

「【零落白夜】？」

一夏

「そうだ！【零落白夜】は千冬姉が世界を制した時と同じ単ワンオフ・アビリティ一仕様だ！俺はこの剣で、

大切な人を守る男になるんだ!!」

永遠

「…で?」

一夏

「な、何…」

永遠

「じゃから、それがどうしたんじゃ? 姉と同じ? それが何じゃ? 大切な人を守る? お主に守れるだけの力があるんか?」

一夏

「クツ…:…なら、その力を思い知らせてやる! いくぞおおおーっ!」

一夏は【零落白夜】を発動させて斬りかかったが…

永遠

「さつきと何も変わつとらんな…」

攻撃パターンが変わっていない為、簡単に避けられた

一夏

「くそおーっ! 何で、何で当たらないんだ!」

永遠

「…ハア…お主、この一週間何をしとった？」

一夏

「何!？」

永遠

「ワシとセシリアは今日の為に普段以上の鍛錬に励んでおった。…クラスの代表を決めるだけとはいえ、真剣勝負をするんじゃからな、当然の事じゃ。」

一夏

「そ、それは…」

永遠の突然の問いに一夏は答える事が出来なかつた

それもその筈、彼はこの一週間、箒に剣道の稽古を付けて貰った事以外は何一つして
いないのだから

永遠

「何もしとらんのだらろ？」

一夏

「!?…そ、そんな事ない！」

永遠

「…織斑…ワシもそろそろ堪忍袋の緒が切れそうなんじゃが…」

一夏

「それが何だ！俺は、俺は皆を守るんだあああーっ！」

ブチッ!!

永遠

「…この…馬鹿もんがああああああーっ!!」

一夏

「ぐあああああああーっ!!」

遂に永遠の堪忍袋が切れてしまい、一夏は槍の突きを喰らい後方に吹き飛ばされてしまった

永遠はそのままゆっくりと一夏の方に歩きだした

永遠

「…貴様、いい加減にせえよ…『大切な人を守る男になる』じゃと…どの口が言つとるんじゃ…」

一夏

「な、何…」

永遠

「…もう一度聞くぞ…この一週間何しとつた…」

一夏

「……………」

永遠

「放課後何しとった…篠ノ之に剣道を教わった…シバかれてサンドバッグになつとっただけじゃろ…」

一夏

「うっ…」

永遠

「授業中何しとった…ノートすら取らんかったじゃろ…」

一夏

「ううっ…」

永遠

「休憩中何しとった…教師二人に質問らせんかったじゃろ…」

一夏

「あ…ああ…」

永遠

「入学するまで何しとった…参考書を間違えて捨てた…何故すぐに新しいのを発行して

貰わなかった……」

一夏

「そ、それは……」

永遠

「姉に叱られるのが嫌だったか……覚える必要が無いと思ったか……」

一夏

「ち、ちが……」

永遠

「違うならそんな時何しとった……強制入学じゃからずっと遊んどったか……」

一夏

「べ、勉強だ!」

永遠

「一般教養だけか……IS学園に入ると決まっとなのにそっちには手を付けなかったか

……」

一夏

「……」

永遠

「今迄何しとつた…：I Sの勉強をしたんか…：対戦相手のワシ等の事を調べたんか…：自分が今使つとる機体の事を調べたんか…：…：答えんかい!!」

一夏

「ううっ…」

永遠

「貴様!それによく『大切な人を守る』等と言えたな!それとも何か!姉と同じようにI Sに乗れて、姉と同じ武器を使えれば、姉と同じ事が出来ると思つたか!」

一夏

「!?!」

永遠

「凶星か?…：愚かもんが!世界を制したのは織斑千冬であつて貴様では無い!貴様は織斑一夏であつて織斑千冬では無い!姉が出来れば弟も出来る訳でも無い!」

一夏

「ぐううっ…」

永遠

「織斑…：貴様は…：実力も無い…：経験も無い…：知識も無い…：覚悟すら無い…：今の貴様にあるのは無駄にデカいだけのつまらんプライドだけじゃ!そんな貴様が何を守ると言う

んじゃー！」

一夏

「……いけないのかよ……」

永遠

「ん？」

一夏

「……いけないってのかよ……大切な人を……家族や友達を守りたいって思うのが……いけない事なのかよ!？」

永遠

「……口だけは達者じゃな……」

一夏

「何だと!？」

永遠

「口は達者と言ったんじゃー!なら何故今まで何もせんかった!何もせんかったから今こうしてワシに追い詰められとるんじやろ!今の貴様がそんな事を言っても説得力なんぞ微塵も無いわ!」

一夏

…

セシリアは永遠を本気で怒らせる様な事をしないと誓った

《管制室》

管制室では永遠に説教をされている一夏の姿に千冬は呆れ果てていた

真耶

「火ノ兄君のお説教…容赦ないですね…」

千冬

「ああ。」

真耶

「…織斑先生は火ノ兄君が言った事をどう思いますか?…否定…しますか?」

千冬

「する必要は無い。全て事実だからな。」

箒

「!?!」

千冬

「火ノ兄が言ってる事は何一つ間違っていない。今の織斑は口先だけの男だからな。」

訓練も勉強もせず、私と同じ武器を使うというだけで強くなったと思ひ込んでいた。そんな奴が今日の為に努力してきたあの二人に勝てる訳がないだろ？」

真耶

「……………」

千冬

「アイツは一度、徹底的に潰された方がいいと私は思っている。その方がアイツも成長するだろうからな。」

真耶

「織斑先生がそう言うなら……そうかもしれないですね……」

箒

「……………」

箒は否定しない千冬を睨みつけるが千冬から来る無言の圧力で何も言えなかった

《観客席》

同じ様に観客席の箒も……

箒

「……………」

本音

「どしたのかんちゃん？」

簪

「…情けなくてね…」

本音

「何が？」

簪

「…私よりもあんな男の機体の方が優先されたんだと思うとね…」

本音

「かんちゃん…」

…説教されている一夏の姿を見て落ち込んでいた

《火紋島》

一方、永遠と一夏の試合をモニターしていた東達も…

クロエ

「兄様のお説教は相変わらず厳しいですね…」

東

「ホントにね〜…ガクガクブルブル……………」

以前説教された時の事を思い出したのか東は震えていた

東

「それにしても、今のいつくんは東さんでも呆れるくらい情けないね〜。」

クロエ

「そうなんですか？」

東

「うん。ホントはね、とーくんが帰ってきたら文句の一つも言おうと思ってたけど……
れを見たらそんな事言えないよ。」

身内にはとことん甘い東でさえ呆れていた

《アリーナ》

一夏

「うおおおおおおおーっ！！」

向かってくる一夏を永遠は躲すが今回はさつきまでと違っていた

永遠

「【飛天御剣流 龍巻閃】！」

一夏の突撃を回転しながら躲すとそのまま一夏の背中に回り込み回転の勢いのまま
彼を斬ったのだ

一夏

「ぐわああああああー……っ」

そのまま地面に倒れたが、すぐに起き上がった……だが……

一夏

「ぐうっ……何だ……今の技は？……はっ！」

すでに目の前に永遠が来ていた

永遠

「飛天御剣流 龍翔閃！」

一夏の懐に潜り込み、下から飛び上がり、刀の腹で斬り上げ、一夏を上空へと押し上げた

一夏

「がはあああああー……っ」

永遠もそのまま上空へと飛び上がり一夏を追い抜いた

永遠

「飛天御剣流 龍槌閃！」

真耶

「織斑先生も知らないんですか？」

千冬

「私もそんなに他流派に詳しい訳じゃないからな。ただ【飛天御剣流】と言うのは初めて聞いた。」

真耶

「そうですね…」

箒

「何故一夏の心配をしないんですか！自分の弟が一方的に倒されたと言うのに何でそんなに無関心なんですか！」

一夏をまるで心配していない千冬にとうとう箒がキレた

千冬

「…今は試合中だ。ましてや教師の私が弟だからと言って公私混同が出来るか。」

箒

「な!?!」

千冬

「そもそも、何故お前がココにいる？私はお前がココに来る事を許可していない。ピッ

トからここまで勝手について来た上に騒ぐとは何様のつもりだ。」
箒

「そ、それは…」

千冬

「フーン！」

それから千冬が箒の方を見ることは無かった

これは箒に早く出て行けと言う意味だったが、箒はそれに気付かずそのまま居座り続けた

千冬が視線をモニターに戻すと一夏が立ち上がろうとしていた

《アリーナ》

一夏

「う、ぐうう…」

永遠

「…ほう、立つか…」

一夏

「…あ、当たり前前だ…この位で…やられてたまるか…」

永遠

「さよか…ならさっさとかかってこい。」

永遠はそう言つて刀を鞘に納めると、前屈みになり、刀を抜く態勢となつた

一夏

（アレは確か…居合いの構え!?アイツ、居合いも出来るのか!）

一夏は永遠の体制が居合い斬り、抜刀術の態勢である事に気付いた

一夏

「でも確か…居合いは最初の一撃を防げばいい技だったはず…なら一撃目さえ防げば俺にもチャンスはある!」…行くぞ!」

一夏は永遠へと向かつて行つた

そして、一夏が間合いに入った瞬間、永遠は刀を抜き放つた

ガキーン!

一夏は永遠の居合い斬りをギリギリの所で防ぐ事が出来たが…

一夏

「…ぐっ!どうだ、防いだ…」バキィッ!「がはあああああーっ!」

永遠の剣を止めた瞬間、体に強い衝撃が走りそのままアリーナの壁に叩きつけられた

一夏

「…今のは…一体…」

永遠

「飛天御剣流 二段抜刀術 双龍閃！」

それは、永遠が左手に持った鞘で放った二撃目の抜刀術によるものだった

一夏

「に、二段…抜刀術!？」

永遠

「飛天御剣流…」

一夏

「ま、待つ…」

永遠

「土龍閃！」

永遠は間髪入れず、刀を地面に叩き付け、その衝撃で土石を一夏にぶつけた

一夏

「があああああああ————………」

全身にくまなく石をぶつけられた一夏はもはや限界だった

【白式】の装甲は所々が凹み、白かった機体もボロボロになっていた

永遠

「…どうした織斑…もう終わりか？」

一夏

「ううっ…何で…お前はこんなに…強いんだよ…」

永遠

「…ワシが強い訳ではない…貴様が弱すぎるんじや…」

一夏

「…俺が…弱い…」

永遠

「そうじや。試合前の答えを教えてやる…織斑…貴様は一週間前…ワシとセシリアがあれだけあからさまに煽ったと言うにそれに気付かんかった。」

一夏

「…煽った？」

永遠

「さつきも言うたが貴様はワシやセシリア、他の生徒と比べれば知識も実力も経験も無い。…じやから、ワシ等はあの時、貴様を無視する事で危機感を与えた。それと同時にやる気を起こさせようとしたんじや！まあ、本音でもあつたがな…」

一夏

「…そ、そんな…（あれは…俺の為に…）」

永遠

「じゃが貴様はそれに気付かず、今日まで、何もしとらんかった。」

一夏

「…それは…」

永遠

「あの時、貴様が気付いて今日まで自分を高めておれば、そこまでボロボロにならずに済んだじゃろうな。」

一夏

「…ぐ、うっ…」

永遠

「ワシとセシリアは己を高める為に常に努力してきた。それに引き換え、貴様は自分の危機感にすら気付かず何もせんかった。そんなワシ等と貴様との間にどれだけ実力に差があると思うとるんじゃ。」

一夏

「……………だったら…何で直接言わなかったんだ！…言ってくれば…」

永遠

「言えば真面目に訓練した、か？…甘ったれるな!!」

一夏

「!?」

永遠

「織斑…貴様、どれだけ他人に甘えれば気が済むんじや！本来はワシ等が言わずとも貴様が自分で気付いてすべき事じや！」

一夏

「あ…」

永遠

「それをワシ等はああいった方法でヒントを与えたんじや！じやが、貴様はそれに気付かず無駄に時を過ごしただけじやった！」

一夏

「……………」

永遠

「仮に言ったとして貴様は真面目に強くなろうと努力したんか！今の貴様を見ればそうは思えんな！」

一夏

「……………」

永遠

「貴様の様な奴は一度、心身共に徹底的に叩き潰してくれ！」

一夏

「え？……うわっ！」

永遠は一夏を掴むとアリーナの中央に投げ飛ばした

永遠

「織斑……覚悟はいいか！……この一撃で完璧に沈めてくれるわい！！」

そう言うのと永遠は上段の構えを取った

一夏

「ま、待ってくれ！」

永遠

「……貴様は最後まで情けない男じゃな！」

一夏

「え？」

永遠

『【白式】シールド・エネルギー0、勝者、火ノ兄永遠！』
生徒達

「……………」

試合終了のアナウンスが鳴っても観客席の生徒達は声を上げる事は無かった
永遠が放った技に全員が言葉を決して失っているのだ
永遠が刀を鞘に納めようとする時…

永遠

「最後の最後で意地を見せたか……………ん？」

ピシッ！…バキイイーンッ！

刀が砕けてしまった

永遠

「折れたか…【鉄槌】の威力に耐えられなかったか…」

永遠は折れた刀を見ながら自分の技の威力に驚いていた

永遠

「仕方ない…（…次に【鉄槌】を使う時は…アレでやるしかないのお…）」

そんな事を考えながら折れた刀を鞘に納めた

三人称 Side out

第040話：代表決定戦後

く千冬 Sideく

私は今日何度驚いたのか分からないがまた驚いている

その理由はアリーナの惨状が原因だ

火ノ兄が最後に放った技…その技でアリーナに円柱の形に大穴が開いてしまっているからだ

一体どうやったらあんな形に穴が開くんだ…

だが、とりあえず今は…

千冬

「…山田先生、火ノ兄に織斑を回収してピットに戻るように伝えて下さい。その後こちらに来るようにと。それと、オルコットも呼んで下さい。」

真耶

「分かりました！」

さて、火ノ兄達が来る前にコイツを片付けておくか…

千冬

「篠ノ之…お前何時までココにいるつもりだ？」

箒

「え？」

千冬

「試合も終わった。お前がココに居座る理由もない。私は今から火ノ兄の I S について話を聞かなければならない。部外者のお前が何時までいるつもりだと言ってるんだ。」

箒

「ま、待つて下さい！なら、オルコットは何故呼んだんですか？オルコットが居てもいいなら私がいてもいいじゃないですか！私もあの機体の事が知りたいんです！」

千冬

「馬鹿かお前は？オルコットは火ノ兄の I S に関して知っているから呼んだんだ。お前は火ノ兄とは何の接点もないだろうが。分かったらいい加減出て行け！」

箒

「ち、千冬さん…」

千冬

「篠ノ之！お前には後でココに入り込んだ事によるペナルティを与える！東の妹だからと言って軽くするつもりは無い！政府や委員会の横槍があつてもだ！」

箒

「そんな…」

千冬

「愚か者め！…最初の試合前に出て行っていれば、処罰する気は無かったと言うのに！私の忠告を無視して居座り続けた上に、火ノ兄のISの事を教えるだど！どこまで身勝手なんだ貴様は!!」

箒

「そ、それは…」

千冬

「もう一度言うぞ！とつとと出て行け!!」

箒

「…はい…」

千冬

「……………全く！やつと出て行ったか！」

真耶

「あのまま居座られたら細かい話が出来ませんでしたからね。」

千冬

「そうだな。君たちも今日はもういいぞ。後は、私と山田先生でやっておく。」
上級生達

「お疲れ様でした!」

私は管制室にいた上級生達も帰り、ここには私と山田先生しかない状態にした
それから少ししてオルコットがやって来た

セシリア

「失礼します!お呼びですか?」

真耶

「あ、待ってましたよ。後は火ノ兄君だけです。」

セシリア

「そうですか。…あの、先ほど篠ノ之さんとすれ違ったのですが凄い顔で睨まれたんで
すけど…」

千冬

「あの馬鹿め!…オルコット、篠ノ之が何か言ってきたても無視しておけ!」

セシリア

「?…はあくそう言うのでしたら…」

全く、何処まで他人に迷惑をかければ気が済むんだ!

く千冬 Side outく

く永遠 Sideく

ワシはとりあえず織斑を回収してピットに戻ると近くにいた人に後を頼み、織斑先生のおるところに向かったんじゃ

永遠

「何か用かの？つて用件は【戦国龍】の事じゃろ？」

千冬

「そうだ！簡単に聞くぞ。アレも神が造った機体なのか？」

真耶

「ええ！そうなんですか？」

永遠&セシリア&千冬

「……………」

ワシの事を知つとれば、普通は気付くと思うがお？

永遠

「…そうじゃ。アレもその一つじゃよ。」

千冬

「やはりそうか。…ん？『アレもその一つ』だと？まさか、あの2機以外にもISを持っているのか？」

永遠

「後1機あるぞい。」

真耶

「ええええええーっっ！！」

セシリア

「では永遠さんは全部で3機のISを持っているのですか？」

永遠

「そうなるの。じゃが残りの1機は手元には無いぞ。」

千冬

「…何故持つてないんだ？」

永遠

「今は東さんに預けとる。新型の開発の為に研究したい言うてな。」

真耶

「研究、ですか？」

千冬

「その3体目は何か特別な機能があるのか？神が造ったとはいえあの束がわざわざお前から借りてまで調べる程の機体なのか？」

永遠

「うむ、3体目の名前は「ラインバレル」と言うんじやが、この機体の特徴が……………」

ワシは「ラインバレル」の再生能力と空間転移について説明した

千冬

「…な、何だその化け物みたいな機体は!？」

永遠

「化け物は無いじやろ。ただダメージを負ってもその場ですぐに再生して、SEが勝手に回復して、ワープが出来るだけじやぞ。」

千冬

「それを化け物と言うんだ!!」

真耶

「そうですねよ！機体だけじゃなくてSEまで何のリスクも無しに自動で回復し続けるなんて！その上、空間転移ですよ！無茶苦茶過ぎますよ!!」

セシリア

「【ラインバレル】…高い再生能力と空間を操る事の出来る機体…正しく不死身の機体で

すわね。」

千冬

「全くだ！しかし、東はその機体で何を研究してるんだ？」

永遠

「ああ、それはな……………」

詳しくは【第25話：入学準備】を読んでくれい！

永遠

「……………」という訳じゃ！」

千冬

「なるほどな…確かにその研究が上手くいけば操縦者の生存率は飛躍的に上がる。その鍵となっているのがお前の【ラインバレル】か。」

永遠

「そういう事じゃよ。そんな訳じゃからワシもすぐに返せとは言うとらんし、好きなだけ調べると言ってる。じゃからいつワシの手元に戻るかは分からのじゃ。」

千冬

「そうか、なら【ラインバレル】はお前の所に戻って来た時に聞くとしよう。私もそういう理由なら何も言うつもりは無い。山田先生は？」

真耶

「私もいいですよ。」

千冬

「なら話を戻して、『戦国龍』について聞くぞ？」

永遠

「構わんよ。ワシに答えられる範囲でいいなら。」

千冬

「それで構わん。まず私の予想だが『戦国龍』、あの機体は『ドットプラスライザー』を上回る機体ではないのか？」

永遠

「そうじゃよ……ちなみに性能は『戦国龍』が一番で『ラインバレル』、『ドットプラスライザー』の順になつとる。」

セシリア

「『ドットプラスライザー』が一番弱い機体なんですか！」

永遠

「通常形態で比べればな。『ラグナロクフェイズ』や『ジーエクスト』になれば『ラインバレル』や『戦国龍』にも負けとらんよ。」

セシリア

「そうなんですか。」

千冬

「確かに【ドットブラスライザー】の強みは機体の能力を変形と合体で上げていくことだからな。」

永遠

「ただ、東さんは【戦国龍】は化け物を通り越した機体と言うとつたがな。」

千冬

「化け物を通り越しただと？どういう事だ？」

永遠

「東さんが言うには【戦国龍】は他のISと違って人間と殆ど変わらん動きが出来るらしい。」

千冬

「何だと!？」

永遠

「それと、ワンオフ・アビリティ単一仕様が強力過ぎると言うとつた。」

セシリア

「【戦国龍】も使えますの？もしかして【ラインバレル】もですか？」

永遠

「モチロン使えるぞ。後は二次移行出来る所かの。【ドットブラ斯拉イザー】と【ラインバレル】は出来んのじゃよ。」

真耶

「それって、あれ以上に強くなるって事ですか!？」

永遠

「そうなると思うぞ。これで全部じゃよ。」

千冬

「…確かに化け物を超えているかもな：単一仕様はどんなものか分からんが、ワンオフ・アベリテイ二次移行すればどうなるのか見当もつかん！」

セシリア

「あの、織斑先生、先ほど【戦国龍】が人と同じ動きが出来ると聞いた時、凄く驚いてましたが何故ですか？」

真耶

「そう言えばそうでしたね。」

千冬

「簡単だ。分かりきった事だがI Sは機械だ。特に手足は機械的な動きしか出来ない。だが【戦国龍】は人と同じ動きが出来る。つまりそれだけ無駄な動きが無いという事だ。」

永遠

「束さんもそう言つとつたぞい。ちなみにワシがさつき使つとつた【飛天御剣流】も【戦国龍】でなければ使えんのじゃよ。」

千冬

「そういえばそれも聞きたかった。あれはどこ流派だ？」

永遠

「アレも特典じゃよ。ただ、ワシは初めから使える様にはしてもらつとらん。」

セシリア

「どういう意味ですの？」

永遠

「ワシが望んだのは【飛天御剣流】を初めから使える体ではなく、【飛天御剣流】の習得できる方法なんじゃよ。」

千冬

「ちよつと待て！ならお前は自分の力だけであれらの技を使えるようになったのか！」

永遠

「そうじゃ。」

千冬

「…あれ程の技を自分一人でか…」

永遠

「…【飛天御剣流】の書物には最初に流派の理が書かれておった。『御剣の剣、即ち、時代時代の苦難から弱き人々を守ること』…とな。」

セシリア

「『苦難から弱き人々を守ること』…ですか…」

永遠

「ワシはこの理の様に偉そうに振舞うつもりは無い。じゃが、それでもワシの手の届く所にある者、大切な者を守る為にこの剣を使おうと決めとる。」

千冬

「守る為の剣か…」

永遠

「左様。じゃからワシは剣の鍛練に励み、数年かけて【飛天御剣流】を習得したんじやよ。」

千冬

「火ノ兄…もし他の生徒達から【飛天御剣流】について聞かれたらどうする？」

永遠

「…そうじゃな…なら【飛天御剣流】はワシの家にあった秘伝書から習得した古流剣術と説明しておくかの。何故家にあつたかは昔の事だから知らんと答えとけばよかろう。」

千冬

「それでいいだろ。」

永遠

「ちなみにじやが、最後に使った技はワシが自分で編み出した技じや。」

千冬

「あれか…いくらなんでもあれはやり過ぎだ！下手したら織斑が死ぬところだぞ！」

永遠

「ISを纏つてたんじや。あの程度の威力では死なんよ。」

千冬

「オイ、どういう意味だ！まさか、あれで手加減したのか!？」

真耶

「ええええーっ!!」

永遠

「あれで3割程度の威力じゃよ。生身で使った時と比べれば全力より少し強い程度じゃ。」

セシリア

「あ、あれで3割ですの…」

千冬

「そうか…お前自身も規格外の存在だったのか…」

永遠

「どういう意味じゃい！」

千冬

「その通りの意味だ！」

永遠

「納得いかんぞ！」

千冬

「納得しろ！………：そういえば忘れていた…火ノ兄、後でアリーナの穴を埋めておけよ！」

永遠

「無理矢理話を換えおつて！」

千冬

「やっておけよ！」

永遠

「ぬう…穴を埋めればいいんか？……なら丁度いいかもしれんな。」

セシリア

「何がですか？」

永遠

「【戦国龍】の単一仕様じゃよ。それを使って埋めようと思うてな。」

千冬

「あの穴を埋められる能力なのか？」

永遠

「そうじゃ。何なら今からやってもいいぞい。」

千冬

「…なら頼む。ここでの話も粗方終わったからな。」

永遠

「んじゃ、アリーナに戻るかの。」

千冬

「そうだな……それと火ノ兄、もう一つ言っておく事があった。」

永遠

「何かの？」

千冬

「篠ノ之に気を付けろ。」

……どういう事じゃ？

千冬

「アイツはお前の【戦国龍】を狙っているようだ。私も気を付けておくが、何を仕出かすか分からんから注意しておけ。」

永遠

「……あの娘は何を考えるとるんじゃ？」

千冬

「自分こそが【戦国龍】に相応しい使い手だと思ってるんだろ。もしかしたら盗む位はやるかもしれない。」

永遠

「……ハア……承知した。じゃが大丈夫じゃろ。そげな邪な考えを持つとるなら【戦国龍】の

防衛機能が働くじゃろ。」

真耶

「何ですそれ？」

永遠

「ワシのI Sには防衛機能がついとつてな。悪どい事を考えたもんが使おうとすると発動するん

じゃ。【戦国龍】の場合は死なんレベルで燃やされるんじゃよ。」

千冬

「随分物騒な機能だな。だが、燃やされた奴がいれば盗んだという証拠にもなるな。それに篠ノ之なら確実に燃やされるな。」

永遠

「そういう事じゃから、あまり気にせんでもいい。」

セシリア

「ですが、それでも危ないですわ。」

永遠

「大丈夫じゃよ。ワシも奪われるつもりは無いが、何なら一度燃やして、自分は使えないと分らせるのもいいかもしれん。」

千冬

「確かにそれはいい手だな。なら多少気に掛ける程度にするか。山田先生もそんな感じで頼みます。」

真耶

「いいんでしょうか？」

千冬

「私達がワザと盗ませる訳でもないですし、仮に篠ノ之が火ノ兄を襲ったとしてもコイツなら返り討ちに出来ます。」

真耶

「……………ハア、そうですね。分かりました。」

セシリア

「……………」

永遠

「セシリア、さつき織斑先生が言うとったじやろ。ワシなら返り討ちに出来るんじや。じゃから安心せい。」

セシリア

「…永遠さん…」

永遠

「大丈夫じゃ!!」

セシリア

「…はい♪」

永遠

「よし…じゃあ、穴を塞ぎに行くかの。」

千冬

「フツ、そうだな。」

何を笑つとるんじやろこの人？

く永遠 Side outく

第041話：地神刀オオテンタ

く千冬 Sideく

私達は火ノ兄が【戦国龍】の単一仕様ワンオフ・アビリティイで大穴を塞ぐと言うからアリーナに来ていた既に観客席は殆どの生徒が帰っていた

永遠

「ではやるかの。」

火ノ兄はそう言つて刀を抜き【戦国龍】を展開した

僅かに残っていた生徒達は現れた【戦国龍】に驚いているようで、全員の視線が集まっていた

千冬

「火ノ兄、頼む。」

永遠

「おうよ！単一仕様ワンオフ・アビリティイ能力起動！」

火ノ兄がそう言うと、【戦国龍】の周りに6つの色の異なる光の柱が現れた

それぞれ、赤・白・緑・黄・青・紫の色だった

永遠

「来たれ！【六道劍】!!」
りくどうけん

光が弱まると光の柱の中にそれぞれ光の色と同じ色の鎖で縛られた劍が現れた

千冬

「何だあれは!?!6つの劍?」

ザワザワ…

他の生徒達も騒ぎ出したな、早めに片付けた方がいいかもしれない

永遠

「ここはお前の出番じゃな!」

火ノ兄はそう言って、6本の柱の一つ、白い柱を見つめると…

永遠

「大地を揺るがす凍える劍!【地神刀オオテンタ】!!」

火ノ兄が劍の名前らしきものを呼ぶと、白い柱の中にあつた劍を縛る鎖が砕け、それと同時に柱も消え去り中にあつた劍が地面に突き刺さつた

ズズーーンッ

残りの5つの柱は白い柱が消えると同時に中の劍ごと消えていた

それにしても地面に刺さつただけでこの揺れとは、どれだけ重いんだ?

セシリア

「【地神刀オオテンタ】…」

真耶

「この剣で穴を塞ぐんですか？」

永遠

「そうじゃ。」

千冬

「一体どうやるんだ？」

永遠

「まあ見とれ。」

火ノ兄はそう言って「オオテンタ」という巨大剣を挿んだ
すると【戦国龍】の装甲、赤い部分が白く変色していった

セシリア

「!?!:..な、何ですの!?!」

千冬

「白くなつた!」

真耶

「でも、白い龍もカッコいいですよ！」

千冬

「そういう事では無い!？」

真耶

「すみません……」

ザワザワ……

さらに喧しくなってきたな……

千冬

「火ノ兄！早く終わらせろ！周りが騒ぎ出した！」

永遠

「あいよ！………ほい！」

返事をするに刀を振り上げ気の無い掛け声とともに振り下ろし地面に突き刺した

千冬

(やる気あるのか?)

そう思った瞬間……

ズズズズズズ……

千冬

「な、何だ!?……………こ、これは!?」

私達の目の前で凹んでいた地面が盛り上がりつつ来た

ズーーーーーンツ!!

次の瞬間にはあれほどの大きな穴が無くなりアリーナの地面はまっ平らになっていった!

永遠

「終わったぞい。」

千冬

「これは……」

セシリア&真耶

「……………」

山田先生もオルコットも呆然としてるな…

ザワザワザワザワ…

千冬

「火ノ兄!何をしたんだ!」

永遠

「これが【戦国龍】の単一仕様能力【六道剣】の一振り【地神刀オオテンタ】の能力の一

つじやよ。」

火ノ兄はそう言つて持つて持っている大剣を見せた

千冬

「…その刀の能力…いや、一つだと!? その刀にはまだ何かあるのか!？」

永遠

「さよう、【地神刀オオテンタ】は大地と氷を操る刀! この刀を使えば軽い地震を起こす事もこの学園程度なら氷漬けにする事も出来るんじやよ!」

千冬

「何だと!？」

真耶

「じ、地震に…氷漬け…」

永遠

「さらにこの刀を使用している間は【戦国龍】の防御力も上昇しての【地神刀オオテンタ】は【六道剣^{りくどうけん}】随一の防御力を持つ刀なんじやよ!」

生徒達

「……………」

生徒も今の説明を聞いていたのか、さつきまでの騒がしさが鳴りを潜めているな…ま

千冬

「そ、そうなのか…」

永遠

「そうじゃよ。」

真耶

「よ、よかったです…」

千冬

「だが、例え一本でも強力なのは確かだ。使用する時はくれぐれも注意しろ。」

永遠

「分かつとるぞい！」

千冬

「よし、穴も塞がったから、今日はもういいぞ！」

永遠

「ん！じゃあ帰るかの。」

セシリア

「そうですね。わたくしも部屋に戻りますわ。…それから織斑先生。」

千冬

「ん？」

セシリア

「代表の件ですが、わたくしは辞退いたします。」

千冬

「ああ、分かつてる。お前の場合は織斑と試合をする為だからな。」

セシリア

「結局出来ませんでしたけど。」

千冬

「今回は仕方ない。∴代表の件は分かった。後はゆっくり休め。」

永遠

「なら今日はこれで。」

セシリア

「また明日ですわ。」

千冬

「ああ、またな。」

さて、二人は帰したし残りの仕事をサッサと終わらせるか

後で一夏の見舞いにも行かないとな

く千冬 Side outく

く楯無 Sideく

私は今、驚きを通り越して驚愕していた！

管制室からアリーナに戻る彼らを見かけたから気になって後をつけて来たけど、まさかこんな物を見る事になるなんて！

火ノ兄君が試合で開けた穴を自分で塞ぐのは分かるけど、問題はその方法よ！

【戦国龍】の単一仕様で塞ぐなんて、何なのよあの刀！

楯無

「…【六道剣】りくどうけん…なんて代物なの!？」

あれ一本でこの力…しかも、あれで能力の全てじゃない…

そして、同じ物が後5本もある…

楯無

「…もし、あの模擬戦の時に【戦国龍】を使ってきていたら…」

考えただけで震えが来るわ…

楯無

「…織斑一夏より彼の方が要注意人物ね!…彼に後ろ盾が無いのは不味いわね…どつか

の馬鹿が手を出して彼が【戦国龍】を使ったら周囲が廃墟になりかねないわ。」

愛用の扇子にいつの間にか『危険人物』と出ていた：

何とかしないと…下手をすると日本が壊滅するかもしれないわね：

楯無

「…今度、織斑先生に相談しておこう…」

簪ちゃんを守る為にも！

でもまさか、その簪ちゃんがあんな行動を取るなんて、この時の私は思っても見なかったのよ！

く楯無 Side outく

第042話：一夏の反省会（+モツピーの野望）

一夏 Side

一夏

「……うっ……ううう……」

目を覚ました俺の目の前には白い天井が広がっていた

保険医

「あら、気づいたのね？」

一夏

「……は……」

保険医

「保健室よ。貴方は試合の後ここに運ばれたのよ。」

一夏

「……試合……そうか……俺……負けたんだ……」

保険医

「織斑先生に連絡しておくから、今はゆっくりしておきなさい。」

一夏

「千冬姉に…分かりました…」

俺が返事をすると思いの先生は出て行った…多分、千冬姉を呼びに行ったんだと思
う

一夏

「…負けたか…当然だよな…」

俺は試合前に千冬姉に言われた事、試合中に火ノ兄に言われた事、そして今までの俺
がしていた事を思い返していた

一夏

「…俺は今まで何していたんだろうな…火ノ兄の言う通りじゃねえか…」

自分がどれだけの加減な事ばかりしていたのか

一夏

「…今の俺に誰かを守るなんて…出来る訳無いじゃねえか…」

千冬

「…ようやく気付いたか…」

一夏

「千冬姉!？」

いつの間にか千冬姉がやって来ていた

千冬

「どうだ…今の気分は？」

一夏

「…最悪だよ…」

千冬

「…ほお…」

一夏

「…さっきまで…千冬姉と火ノ兄に言われた事を思い出していた…この一週間と入学前の自分を思い出していた…」

千冬

「……………」

一夏

「…そしたらさ…俺がどれだけ口先だけの人間なのかって分かったんだ…自分自身に嫌気が差したよ…これじゃあ、火ノ兄にボコられても仕方ねえよ…」

千冬

「なら…試合の時、火ノ兄に言われた事をお前は どう思う…否定するのか？…しないの

か？」

一夏

「否定したいよ……でも……出来ない……全部本当の事だよ……俺は火ノ兄の言う通りの馬鹿で情けない腰抜けだよ……」

千冬

「そうだ！」

一夏

「千冬姉……」

千冬

「今のお前は、馬鹿で、情けなくて、腰抜けで、いい加減で、口先だけのただの甘ったれた人間だ！」

一夏

「グッ……そこまで言わなくても……」

千冬

「全て本当の事だ！」

一夏

「……はい……その通りです……」

千冬

「もう分かっているようだな。お前が勝てなかった訳が…」

一夏

「ああ…勝てる訳ねえよ……千冬姉と同じ武器を持つてるからって同じ事が出来る訳無いのになあ…ずっと努力していた奴に…勉強も訓練も何一つしなかった俺が勝てる筈ねえよ…思い上がってたんだなあ俺…」

千冬

「その通りだ。」

一夏

「…そんな奴が誰かを守るなんて言えば、そりや怒るよな…なあ千冬姉…」

千冬

「なんだ？」

一夏

「…どうすればさ…大切な人を守る男になれるのかな…」

千冬

「…お前は自分で考える事を知らんのか！」

一夏

「うぐつ！…すみません…」

千冬

「ハア…全く…まずは強くなれ！」

一夏

「え？」

千冬

「自分で自分を守るくらいに強くなれ！」

一夏

「自分で…自分を…」

千冬

「そうだ！自分も守れない奴が他の誰かを守ることなど出来ん！まず自分を守る！それが出来るようになって初めて誰かを守る事が出来るんだ！」

一夏

「……………」

まずは自分を守るようになる、か…難しいな…

千冬

「それが出来ない奴が誰かを守るとしたら、それは自分の命を捨てる覚悟のある奴だけ

だ！お前にその覚悟があるか！」

一夏

「…無い…」

千冬

「ならば強くなれ！体を鍛えろ！知識を蓄えろ！経験を詰め！」

一夏

「……………」

千冬

「私が言えるのはここまでだ！どうするかはお前が決める！それから方法は自分で考えろ！私もそこまで面倒は見んぞ！」

一夏

「…分かった…」

千冬

「…なら私はもう行く。まだ仕事が残っているからな。」

一夏

「あ！千冬姉…もう一つ聞きたい事が…」

千冬

「ん？」

一夏

「火ノ兄の使っていた剣術って知ってるか？」

【飛天御剣流】…あんな剣術、俺は聞いた事無いんだよな

千冬

「ああ、アレか…アレは私も初めて聞いた流派だ。火ノ兄に聞いたらアイツの家にあった秘伝書の様な物に記されていた流派だそうだ。だから、誰が編み出したのかは火ノ兄も知らないらしい。だが、かなり古い流派の様だと言っていたな。」

一夏

「そっか…【飛天御剣流】か…」

火ノ兄も詳しくは知らないのか…

千冬

「じゃあな、今日はココでゆっくり休め。…ちゃんと反省しろよ。」

一夏

「うっ…はい…」

最後に余計な事言わないでくれよ…

く一夏 Side outく

〔 箒 Side 〕

箒

「……………」

私は今、千冬さんから管制室に勝手に入った事に対するペナルティとして反省文20枚を書くと言われ、それを書いている

箒

「……………【戦国龍】……………」

だが、私は今日の一夏の試合の時、対戦相手が使ったIS【戦国龍】の事しか頭に無かった

箒

「フ…フフフ…【戦国龍】…アレは私にこそ相応しい……………必ず手に入れる…フフフフツ…ハハハハハハハハハハハハハハハハツ……………」

私は【戦国龍】を自分が纏う姿を想像していると笑いが込み上げて来た

千冬

「五月蠅いぞ篠ノ之!!笑ってないでさっさと書け!!明日の朝までに提出しなければ10枚追加するからな!!」

箒

「は、はい!？」

千冬さんが部屋の外にいたのか…気を付けなければ…

千冬

「……………(分かり易い奴だ…やはり狙っていたか…)」

く箒 Side out く

第043話：クラス代表、織斑一夏

一夏 Side

俺は今、自分の耳が信じられなかった！

真耶

「それでは、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定しました！あ、1繋がりでゴロもいいですね！それでは皆さん拍手！」

パチパチパチパチ：

火ノ兄にボコボコにされた試合から、一晩明けた朝のHRで俺がクラスの代表に決定した

一夏

「ちよ、ちよつと待ってください！なんで俺なんですか！俺は火ノ兄にズタボロに負けたんですよ！オルコットにも勝った火ノ兄がなるんじゃないんですか！」

千冬

「お前は一週間前の事も覚えとらんのか…」

一夏

「え？」

一週間前？…何かあったっけ？

千冬

「私は言つた筈だぞ。火ノ兄はクラス代表に出来ない！お前が真つ先に突つかかつてきた筈だが？」

一夏

「ああっ!？」

「そうだ！思い出した！千冬姉の言う通りだ！」

千冬

「火ノ兄の力は昨日の試合で全員分かつた筈だ！まだ何か異議のある奴はいるか？」

生徒達

「……………」

「誰も何も言わない…：…そうだよな…：あれだけの強さを見せられたらな…：でも、それなら…：…」

一夏

「な、なら、オルコットは！」

セシリア

「わたくしは辞退しました。昨日の試合が終わった後に織斑先生に伝えてあります。」

一夏

「な、何で…」

千冬

「お前には記憶力が無いのか？オルコットが立候補したのはお前の言動にキレて叩きのめす為だぞ。」

一夏

「あ…」

「そう言えばそうだ…俺、あの時、火ノ兄やオルコットにキレられても仕方のない事を言っただ…」

千冬

「まあ結局出来なかったが、あの場合は仕方がないからな…そういう訳でオルコットも除外される。残ったのは推薦されていたお前だけだ。いい加減諦めて現実を受け入れろ！」

一夏

「…はい…」

真耶

「それでは織斑君。無事に代表に就任したのでクラスの皆に一言お願いします。」

一夏

「えええっ！」

何て言えばいいんだ…

一夏

「え、ええつと…が、頑張ります……………」

ズコッ！

また皆コケた…

ガンツ！

千冬

「お前はもう少し気の利いた事が言えんのか！」

一夏

「…す、すみません…」

千冬

「それからお前、火ノ兄とオルコットに言う事があるだろ。」

一夏

「え？……………あ！」

…そうだ、一週間前、俺は火ノ兄を馬鹿にしてオルコットを侮辱したんだ…

…その後、火ノ兄に滅茶苦茶に言われて、オルコットと一緒に無視されたけど

…それも元は俺の言った事が原因だ

…俺があんなこと言わなかったら二人とも何も言わなかったんだ

一夏

「…火ノ兄…オルコット…その…すまなかった!!」

永遠

「ワシは別に気にしとらん。ワシよりもセシリアに謝れ!それと、これからは考えて物を言え!お主、このままじゃと無自覚に周りを傷付けて終いには後ろから刺されるぞ

!」

一夏

「…ああ…気を付ける…」

永遠

「(…もう手遅れかもしれんが…)」

ん?最後のの方は声が小さくて聞こえなかったな…何て言ったんだ?

永遠

「後、お主を腰抜けと言った言葉は取り消さんし謝らんど。取り消して欲しいんじやつ

たら違うと証明するんじやな。」

一夏

「…分かつてる…ちふ、織斑先生にも昨日言われた…」

永遠

「さよか、まあ頑張るんじやな。」

一夏

「…ああ…」

後は、オルコットにも謝らないと…

一夏

「オルコット…本当にすまなかつた！」

セシリア

「もういいですわ。それから、わたくしも永遠さんと言いたい事は同じです。後ろから刺されて死ぬなんて惨めな死に方ですわよ。」

一夏

「…はい…」

…本当にそうなりそうで怖い…

セシリア

「それから織斑さん。クラス代表は他の生徒よりもI.Sの戦いを多く経験できます。知識も経験も実力も何もかも不足している貴方には丁度いい機会ですわよ。」

一夏

「え！そうなのか？」

セシリア

「ええ、あなたは嫌がってますけど、代表にはこういうメリットもあります。」

千冬

「オルコットの言う通りだ。織斑、お前はただでさえ他の奴らより遥かに遅れてるんだ。その位しないと追いつけんぞ。」

一夏

「…分かった！…やってやるよ！いつか火ノ兄やオルコットを越えてやる!!」

パチパチパチパチ…

皆が応援してくれてる！…俺、頑張るぞ!!

永遠

「そう言う事はワシに一太刀入れてから言うんじやな。ま、頑張れ。」

セシリア

「そうですね。いつになるか分かりませんが♪」

う！…いきなり心が折れそう…でも、頑張る！！

〜一夏 Side out〜

〜箒 Side〜

クラス代表が決定しHRが終わると一夏は、何故かあの火ノ兄の所に向かった

一夏

「頼む火ノ兄！俺を鍛えてくれ！！」

何だと！一夏、お前には私が教えているじゃないか！

永遠

「断る！！」

一夏

「何で!?!」

永遠

「…初日に織斑先生が言ったじゃろ。ワシは放課後になったら家に帰って畑仕事をするんじや。お主を鍛える時間なんぞありやせん。」

一夏

「で、でも、お前、時々オルコットと放課後に話してるだろ！だったら俺にも…」

永遠

「阿呆！セシリアとは一時間程度しか話したらんわ！その程度の時間で鍛えるのはそもそも無理じゃ！」

一夏

「そ、そんなあゝゝ…だったら、オルコット！」

貴様は私と言うものがありながら…

セシリア

「別に教えて差し上げても良いのですが…」

一夏

「だったら頼むよ！」

セシリア

「…わたくしもお断りしますわ。」

一夏

「どうして断るんだよ！」

セシリア

「でしたら、まずは後ろの方を説得して下さい。」

一夏

「え？」

一夏が後ろを振り向いてこつちを見た

一夏

「…箒？」

箒

「一夏！お前には私が教えているだろ！他の奴の手を借りるとはどういうことだ！」

一夏

「そ、それは…」

セシリア

「説得出来たらまた来て下さい。その時は教えてあげますわ。」

一夏

「…はい…」

説得だと！フン！私がそんな事を許すわけないだろ！

千冬

「……………」

この後、この時の会話を聞いていた千冬さんが一夏にオルコットから教わるように
言つて来た

私は反論したが一週間ISの事を何も教えていなかった奴は黙っていると言われ、何も言い返せなかった

ただ、オルコットも忙しいらしく週に2、3日しか教えられないと言っていた：その時は邪魔してやろうと思ったが：千冬さんから邪魔すれば補習を増やすと脅された

ㄱ 箒 Side out ㄱ

第044話：実習授業

く 永遠 Sideく

クラス代表も決まり今は午前中最後の授業じゃ

今日からISの実技に入るらしくての、全員今はISスーツに着替えてアリーナに集まっとる

もつとも、ワシはスーツが要らんからいつもの制服じゃが

しかし、うら若い娘子達がこげな格好しとると目のやり場に困るのお…はよ慣れんと

…

本音

「ねくねくひののん♪」

永遠

「本音か、何かの？」

本音

「何でひののんは制服なのく？」

永遠

「ワシのI Sはスーツがいらんからな。いつもの格好で十分なんじゃよ。」

本音

「へ〜いいな〜♪」

永遠

「そうかのか？」

本音

「うん♪だってこれ着替えるの面倒だもん♪」

永遠

「さようか。」

千冬

「お前達、お喋りはそこまでだ！授業を始めるぞ！」

織斑先生が来たんでワシ等はクラスの列に並んだんじゃ

千冬

「それではこれよりI Sの基本的な飛行操縦をしましょう。火ノ兄、織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ。」

織斑先生に呼ばれたワシ等はクラスの者達の前に移動したんじゃが：

永遠

「織斑先生…ワシはどっちの機体を使えばいいんかの？」

千冬

「そうだったな…なら、【ドットブラスライザー】を使え。それと、後で【戦国龍】も出してもらう。」

箒

「!？」

永遠&千冬

「……………」

織斑先生の言葉に篠ノ之が反応しおったな…まあ今はほつとくか…

永遠

「…あいよ。」

ワシは返事をする、軍刀を抜き正面に円を描いて【ドットブラスライザー】を展開した

千冬

「…火ノ兄…お前のISはそうしないと展開出来ないのか？」

永遠

「…どうもそうらしいんじやよ。」

千冬

「それなら仕方ないか……しかし……」

織斑先生がワシの隣を見ると未だに展開できずに苦戦中の織斑がおった……ちなみにセシリアはとつくに展開しとる

千冬

「早くしろ！」

一夏

「は、はい！」

織斑先生に睨まれた織斑は腕を突きだしガントレットに手を添えて集中してやつと展開しおった

千冬

「遅い！ 熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ。以後精進しろ！」

一夏

「……はい……」

織斑がやつと展開したから織斑先生は授業を進めた

千冬

「……よし、飛べ！」

織斑先生の指示と同時にワシとセシリアは急上昇した

織斑は反応に遅れたんかワシらより下を飛んどる

一夏

「お~~~~い！待ってくれ~~~~！」

千冬

『何をやっている！「ドットブラスライザー」はともかく、スペック上の出力は【白式】は【ブルー・ティアーズ】より上の筈だぞ。』

飛んでいきなり説教とはのお…

一夏

「自分の前方に角錐を展開するイメージって何だよ？感覚が掴めないんだよな。」

セシリア

「織斑さん、教科書はあくまでも参考ですわ。自分に合った方法を見つけてるのがよろしいですわよ。」

一夏

「そう言われても…大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。なんで浮いてんだ？これ？」

セシリア

「説明しても構いませんが長くなりますわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますわよ？」

一夏

「わかった。説明はしなくていいです。」

永遠

「お主じや半分も理解出来まい。」

セシリア

「そうですね。」

一夏

「ぐっ！本当の事だから言い返せない！」

永遠

「ようは慣れじやよ慣れ。飛ぶのに慣れるしかないんじやよ。」

一夏

「…慣れ…か…」

永遠

「そうじや。何事も慣れる事から始まるんじや。」

箒

『一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！』

永遠

「何じや五月蠅いのお！今の声は篠ノ之か？」

いきなり怒鳴り声が聞こえおったな

篠ノ之の奴、山田先生のインカム奪って喋つとるな

お！織斑先生に殴られて躓つとる

一夏

「……ここからでも地上の様子がよく分かるな。全員の顔がしっかりと見分けられる。」

セシリア

「これでも機能制限がかかっているんですよ。本当なら広大な宇宙空間での自分の位置を把握する為の物ですから。」

永遠

「しかし、何がしたいんじやあの娘は？あげな事すれば殴られるのは分かりきっておつたじやろうに？」

セシリア

「本当ですわ。」

一夏

「……………その…すみません…」

永遠

「別にお主が謝らんでも…」

セシリア

「…いいですわよ。」

一夏

「…はい…」

こやつも苦労しとるのお…

篠ノ之なら背中から刺しそうじゃしな…

千冬

『お前達、急降下と完全停止をやってみる。目標は地上から10cmだ。』

セシリア

「了解です。では永遠さん、織斑さん、お先に。」

織斑先生の指示が来て最初に動いたのはセシリアじゃった

さすがは代表候補生じゃ、簡単に合格した様じゃな

永遠

「なら、次はワシが行こう。」

「何がありましたの!？」

突然、アリーナ中に衝撃が走ったんじや

ワシとセシリアは音のした方を見ると、そこには砂埃が舞っておつてデカイ穴が開いておつた!

永遠

「…のうセシリア、この穴もしや?」

セシリア

「多分そうでしょう…」

千冬

「馬鹿者!! 誰が地面に大穴開けろと言つた!!」

やはりアイツか…

永遠

「織斑の奴、地面に突っ込んだようじやな…」

セシリア

「その様ですわね…」

千冬

「全く呆れてものも言えん…」

永遠

「まあ奴にはいい経験じゃろ。」

セシリア

「それもそうですわね。」

千冬

「……そうだな。」

織斑先生も交えてそんな話をしとると…

箒

「一夏！昨日あれほど私が教えただろうが！」

永遠

「…セシリア、ああ言つとるがどうなんじゃ？」

セシリア

「アレを教えていると言つていいのか…擬音だらけで何を言つてるのか分かりませんでしたわ。」

永遠

「何じゃそれは？そげな教え方あるんか？」

セシリア

「本人は教えているつもりなんでしょう…」

永遠

「そうか…まあ、篠ノ之に頼んだあやつが悪い。」

セシリア

「そうですわね。」

千冬

「……………」

さて、一応声を掛けとくか…

永遠

「織斑く、生きとるか？」

一夏

「ああ、大丈夫だ。」

やつと這い出て来たか…

箒

「ISを付けていて怪我をするわけないだろ。」

永遠

「お主は何を言つとるんじゃ？」

セシリア

「篠ノ之さん、あくまで殆ど怪我をしないだけですわ。内部に衝撃が入る事で、打撲のよ
うな痕が残る事もありますわよ。」

永遠

「そんな考えしとるといづれ大怪我するぞ。」

箒

「何だと!？」

千冬

「黙れ篠ノ之!二人の言う通りだ! I Sがあるからと言って怪我をしない訳ではない!
過信は大怪我の元だ!他の者も覚えておけ!」

生徒達

「はい!!」

箒

「クッ……………」

千冬

「授業を続けるぞ!織斑、武装を展開しろ。その位は出来るな?」

一夏

「は、はい。」

千冬

「よし、始めろ！」

集中する為に剣を構えるような姿勢になりおつたな…これがこやつのやりやすい姿勢かの？

暫くして、両手に光が集まりその光が収まるとその手には【雪片式型】が握られておつた

千冬

「遅い！0.5秒で出せるようになれ！」

厳しいのお…展開が1秒、武器が0.5秒か…

千冬

「次はオルコツト！」

セシリア

「かしこまりました。」

今度はセシリアが指名された

左手を肩の高さまで上げて、一瞬光るとそこには専用ライフル【スターライトmkⅢ】が握られておつた

そして、それを構え、セーフティを解除した

千冬

「1秒か…中々の速さだ。展開時の姿勢も問題ない。」

セシリア

「ありがとうございます。」

さて次はワシか…つてワシの武装は…

千冬

「最後に火ノ兄…と言いたいが【ドットプラスライザー】には拡張領域パススロットに武器はあるのか

？」

永遠

「無いのお…ちなみに【戦国龍】もじゃ。」

千冬

「やはりそうか。ならお前はやらなくてもいい。その代わり最初に言ったように【戦国龍】に機体を替えろ。」

永遠

「あいよー！」

しかし、何故【戦国龍】に替えるんじやろうか？

）
永遠
S
i
d
e
o
u
t
）

第045話：名刀・六道劍！

（永遠 Side）

織斑先生に言われて「ドットプラスライザー」を解除し【戦国龍】を展開したんじやが…

永遠

「何をするんじや？ 【戦国龍】の武器は刀と槍だけじゃぞ？」

千冬

「…確かに普通の武器はな…だが【戦国龍】には他にもあるだろ。」

永遠

「…まさか…」

千冬

「アレを出せ！」

永遠

「何じゃと!？」

セシリア

「待って下さい！アレを出すんですか！」

真耶

「アレは危険すぎますよ！」

一夏

「アレ?…アレってなんだ？」

アレが何か分かつとるセシリアと山田先生は狼狽えておるの、何も知らん織斑や他の生徒達は分かつとらんな

千冬

「二人とも落ち着け!?アレが危険なのは私も分かっている!だからこそ一度全てを見ておきたいんだ!」

真耶

「え?」

千冬

「火ノ兄がアレを使用した時、どれがどういった能力を持っているかを知らない私達も対応が遅れてしまう!だからこそ一度確認しなければならぬんだ!」

セシリア

「そういう事ですの…」

真耶

「確かにそうですね。アレは危険ですから対処法をキチンと用意しないとイケませんね。」

千冬

「そういう事だ！火ノ兄も分かったか！」

永遠

「んむ。分かったぞい！」

一夏

「オイ！そっちだけで納得するな！いい加減説明してくれ！」

そう言えばコイツの事を忘れとったな…

千冬

「ああ、すまん…忘れていた。」

一夏

「オオオオーイッ!!」

永遠

「喧しいぞ！今から説明してやるから静かにせんか！」

一夏

「…じゃあ何なんだよアレって!」

永遠

「せっかちじゃな。アレ言うんは【戦国龍】の単一仕様ワンオフ・アビリティの事じゃ。」

ザワザワ…

一夏

「単一仕様ワンオフ・アビリティ! そのISも使えるのか!」

永遠

「使えるぞ。【戦国龍】の単一仕様ワンオフ・アビリティは【六道剣】りくじゅうけんと言う6本の刀を呼び出す能力じゃ。」

一夏

「刀?…刀を呼ぶだけで何でそんなに慌てるんだ?」

千冬

「阿呆! ただの刀では無いから慌てるんだ!」

一夏

「ただの刀じゃないって…どういう事だ?」

千冬

「…織斑…昨日の試合でお前が最後に喰らった技があったな?…アレでアリーナがどうなったか知ってるか?」

一夏

「ア、アレか！…た、確かデカイ大穴が開いたって…聞いたけど…」

千冬

「そうだ。お前がさつき開けたのより大きい穴だ。だがその穴はもう塞がっている。火ノ兄が試合の後に塞いだからな。」

一夏

「そうなのか？…でもそれが一体？」

千冬

「まだ分からののか？…その大穴を【六道剣^{りくどうけん}】の1本で塞いだんだ。しかも一瞬でな。」

生徒達

「ええええええええーっ！！」

一夏

「あの穴よりデカイ穴を一瞬で塞いだ！」

真耶

「そうです！しかも穴を塞いだのは、その刀の能力のほんの一部でしかないそうです！」

生徒達

「ええええええええーっ！！」

千冬

「これで分かったか！私達はそんな物騒な物を今の内に確認しておきたんだ！」
生徒達

「は、はい！」

箒

「……………」

篠ノ之の奴…口元がゆるんだ…分かり易い奴じゃ…

セシリア

「(永遠さん…アレ…)」

永遠

「(分かつとる…じゃが今は無視せい…)」

セシリア

「(…分かりました…)」

千冬&真耶

「……………」

織斑先生と山田先生も気づいとるな…

千冬

「…火ノ兄！早速始めるぞ！全員火ノ兄から離れる！巻き込まれても責任は取らんぞ！」

蜘蛛の子を散らすように離れおったな…

永遠

「さて、始めるかの…単一仕様能力起動！」

ワシが単一仕様を発動させると周りに6色の光の柱が現れた

永遠

「来たれ！【六道剣】！！」

く永遠 Side outく

く一夏 Sideく

《1本目【炎龍刀オニマル】》

火ノ兄が単一仕様を発動させると【戦国龍】を取り囲むように6本の柱が現れた
よく見ると中に鎖で縛られた剣が1本ずつ入っていた

一夏

「…アレが【六道剣】？」

千冬

「そうだ。」

永遠

「それで、まずはどれからじゃ?」

千冬

「順番はお前に任せる。全部見せてくれればいいからな。」

永遠

「んー…なら、やはりコイツからかの!」

そう言うのと火ノ兄は赤い柱の方を向いた

永遠

「燃え上れ! 猛き炎の剣【炎龍刀オニマル】!!」

火ノ兄が剣の名前を呼ぶと赤い柱の中にある剣を縛る鎖が砕けた

赤い柱が消えると中から鏢が龍の頭でその口から炎の様な刀身を持つ剣が出て来た

一夏

「な、何だよコレ!」

永遠

「これが【六道剣】りくどうけんの一振り、【炎龍刀オニマル】じゃ!」

一夏

「炎龍刀オニマル」…カ、カッケエエ！」

千冬

「火ノ兄…この剣の能力は何だ？」

永遠

「うむ！『炎龍刀オニマル』の属性は炎じゃ。コイツは見た通り炎を操る事が出来るんじゃないが…刀身に炎のエネルギーを纏わせることが出来る…後はそうじゃな…例えばじゃが、休火山とかにコイツを刺せば簡単に噴火させる事も出来るの。」

生徒達

「ええええええええーっ！っ！！」

千冬

「ふ、噴火だと!？」

え!?!何だよそれ…

永遠

「炎龍刀オニマル」は【六道剣^{りくごうけん}】の中でも最強の攻撃力を持つ刀。ワシはコイツが一番使い慣れとるんじゃないよ。」

千冬

「そ、そうか…」

永遠

「【オニマル】の説明はこんなところかの。」

千冬

「分かった。…なら、次を頼む。」

永遠

「あいよ。単一仕様解除！……再起動！」

火ノ兄は何故か単一仕様を解除して【炎龍刀オニマル】を消して、再び発動させた

く一夏 Side outく

く千冬 Sideく

《2本目【地神刀オオテンタ】》

一夏

「何で単一仕様を解除したんだ？次の刀を出すならそのまま出せばいいんじゃないの

か？」

千冬

「【戦国籠】の単一仕様には一度に出せるのは1本だけと制限が掛かっている。他の刀

を出すには一端解除しないといけないんだ。」

一夏

「そうなんだ…」

永遠

「大地を揺るがす凍える剣！【地神刀オオテンタ】!!」

次に出したのは昨日見せて貰ったあの太剣だった

真耶

「ヒエエエエーッ!?オ、【オオテンタ】!?ガクガクブルブル…」

一夏

「や、山田先生!?!」

山田先生が急に震えだしたか…分からなくはないが…

セシリア

「…仕方ありませんわね…あの剣ですから…」

一夏

「え?どういう事?あの剣を知ってるのか?」

セシリア

「ええ、先ほど織斑先生が言っていましたでしょう。あの【地神刀オオテンタ】が穴を塞いだ剣ですわ。」

一夏

「え!?アレで!?…え?」

私達が火ノ兄の方を見ると【戦国龍】が【オオテンタ】を握る所だった
すると、鎧の赤い部分が白く変色していった

一夏

「し、白くなった?」

永遠

「この【戦国龍】はな…【六道剣】りくどうけんを発動させてその刀を握ると、機体の色がその刀と同じ色になるんじゃないよ。」

一夏

「え?でも、さっきは変わらなかったぞ?」

永遠

「【オニマル】の色は赤じゃ。【戦国龍】は元々赤じゃから変わる訳なからう。」

一夏

「あ、そっか!」

本音

「それで、この剣ってどんな力があるの?」

千冬

「私が教えてやろう。この剣は大地と氷を操れるそうだ。【オオテンタ】の力を使えば地震を起こす事もこの学園を氷漬けにする事も出来るらしい。昨日の穴を塞いだのもその力の応用らしい。」

一夏

「地震に氷漬け!？」

生徒達

「ええええええええええーっっっ!!」

真耶

「ガクガクブルブル……………」

だから、山田先生はこんな風になったんだが…

千冬

「さらに【オオテンタ】を使用している間は【戦国龍】の防御力も上がるらしい。火ノ兄が言うには【六道剣^{りくどうけん}】最強の防御力を持つそうだ。」

最強の防御力を持つ刀…【オニマル】と逆だな…

永遠

「そういう事じゃ。さて、次じゃな。解除……………起動。」

く千冬 Side outく

く真耶 Sideく

《3本目【風翼刀ドウジキリ】》

千冬

「次は何だ？」

永遠

「風を纏いし神速の刃【風翼刀ドウジキリ】!!」

真耶

「【風翼刀ドウジキリ】ですか…」

これが3本目の刀…羽の様な装飾がされた剣ですね…

一夏

「あれ？山田先生復活したんですか？」

真耶

「あ、はい、何とか…」

永遠

「この【ドウジキリ】は風を司る刀で色は緑じゃ。まあ、要するにじゃ…竜巻や台風を作

る事が出来るんじゃないよ。」

生徒達

「ええええええええーっ!!」

永遠

「いい加減飽きてきたぞ、そのリアクション…」

一夏

「いや、これしか取り様が無いと思うんだけど…て言うか今度は竜巻と台風!」

織斑君の言う通りですよ…

永遠

「さよう。後はコイツを使うと【戦国龍】のスピードが上がる位かの。」

真耶

「どの位上がるんですか?」

永遠

「およそ…4倍から5倍じゃな。」

真耶

「そ、そんなに…」

永遠

「そうじゃ。…やつと半分か…解除……………起動。」

〜真耶 Side out〜

〜セシリア Side〜

《4本目【雷命刀ミカツキ】》

セシリア

「4本目ですわね…」

永遠

「雷光轟く金色の剣【雷命刀ミカツキ】!!」

これが4本目の刀…鏝がその名の通り三日月の形をしたとても綺麗な刀でした…

セシリア

「【雷命刀ミカツキ】…とても美しい刀ですわね…」

永遠

「そうじゃろうな。【ミカツキ】は【六道剣】りくどうけんで最も美しい刀じゃからな。」

セシリア

「確かに納得できる美しさですわ。」

永遠

「じゃが、ただ綺麗なだけの刀でもないぞ。【ミカヅキ】は六道剣随一の切れ味を誇り、光と雷を操れる。その気になれば雷を雨の様に落とす事が可能じゃ。ちなみに色は黄色じゃ。」

生徒達

「ええええええええーっ!!」

一夏

「そんな事したら死んじまうぞ!」

永遠

「する訳なかるお…出来る言うだけじゃ。」

それでも十分恐ろしいですわよ!…まだ4本目だと言うのに…もう何でもありませんわね…

永遠

「後は【ミカヅキ】の能力じゃが…フム、丁度いい具合にSEが減つとるの。」

セシリア

「SEが?何故ですか?」

永遠

「ん?言つとらんかったか?【六道剣】を出すには一定量のSEが必要なんじゃよ。」

千冬

「聞いてないぞ！」

永遠

「それはすまんかった。」

千冬

「全く！SEが無いならすぐに補給して来い！」

永遠

「その必要は無い。この【ミカツキ】はその為の刀じゃからな。」

千冬

「何だと？」

永遠

「【雷命刀ミカツキ】は一度だけじゃが【戦国龍】のSEを完全回復出来る刀なんじゃよ。」

セシリア

「え！それでは…」

永遠

「今からコイツで回復する。」

永遠さんが【ミカツキ】を構えると刀が光り出しました

真耶

「お、織斑先生！本当に【戦国龍】のSEが回復してますー！」

山田先生がディスプレイで確認したのか驚いていました…

それにしてもこの刀も凄いですわね…まだ、あと2本もあるのですか…

永遠

「以上が【ミカツキ】の能力じゃ。…さて次じゃ。」

くセシリア Side outく

く一夏 Sideく

《5本目【水覇刀ジユズマル】》

火ノ兄はそう言つて5本目を出し始めた

永遠

「荒ぶる海原を制する刃【水覇刀ジユズマル】!!」

5本目は鏢に数珠が巻かれた青い剣だった

千冬

「【水覇刀ジユズマル】か…今迄のパターンで言えば…色は青、属性は水、出来る事は…

津波か洪水を起こすと言ったところか。」

一夏

「え？」

永遠

「ほぼ正解じゃな。生憎と洪水は無理じゃ。渦なら作れるがな。」

生徒達

「えええええええーっ！！」

千冬

「そうか…惜しかったな。だが、津波は合っていたか……その刀…水害そのものだな
…」

永遠

「…そうじゃな…さて、『ジュズマル』の能力じゃが…ダメージを5分の1にする。」

千冬

「……………は？」

真耶

「…5分の1…」

永遠

「そうじゃ。」

千冬

「…言われてみれば…どうなんだ？」

永遠

「確かに『ジユズマル』と『オオテンタ』は似てはいるが別の能力じゃよ。簡単に言えば『オオテンタ』は機体その物を頑丈にするんじや。それに対して『ジユズマル』はSEのダメージを5分の1にするんじやよ。」

千冬

「…なるほど、そう言われると別物だな…」

真耶

「そうですね。良く分かりました！」

永遠

「分かってくれたようじやな…ようやく最後の1本じやな…長かった…」

く一夏 Side outく

く千冬 Sideく

《6本目【妖刀ムラサメ】》

本当に長かったな…しかし、これが最後の剣か…一体どんなものだ？

永遠

「闇より生まれし全てを喰らう刃【妖刀ムラサメ】!!」

全員

「!?!」

…何だこの剣は…今迄の5本とはまるで違う…何という禍々しさだ…

セシリア

「と、永遠さん…何ですの…この剣…」

千冬

「…妖刀だと…」

永遠

「【妖刀ムラサメ】…闇を司る紫の刀じゃ…」

真耶

「ややや闇ですか〜〜…」

永遠

「そげにビビらんでもいいぞ…【ムラサメ】は他の5本に比べれば周りへの被害が一番少ない刀じゃぞ。」

セシリア

「そうなんですか!」

永遠

「そうじゃ【ムラサメ】の能力は吸収じゃ。」

真耶

「吸収?」

永遠

「さよう!【ムラサメ】に触れたり斬られたりすると相手のSEを吸収するんじゃよ。そして吸収したエネルギーを自分のSEに変えたり攻撃用に変えて撃ち出したり出来るんじゃ。」

…この刀は本当にそれだけのなのか?

千冬

「……………火ノ兄…それは本当か…」

永遠

「どういう事かの?」

千冬

「その通りの意味だ!…確かにその刀の能力は脅威だ!だが、他の5本に比べると明らかに地味すぎる!」

永遠

「…………やはり気付くか…」

千冬

「やはりその刀にはまだ何かあるんだな！」

永遠

「いや、今言った通りじゃ。…【ムラサメ】には吸収能力しかない。」

千冬

「何？」

永遠

「じゃがな、その吸収の規模が普通では無いんじゃないよ。」

セシリア

「普通では無いとは？」

永遠

「【ムラサメ】はな、エネルギーと呼べるものなら何でも吸収するんじゃない。ISのSEだけではない。電気や熱と言った物もじゃ。それも無尽蔵にな。」

千冬

「何だと！なんだその剣は!？」

真耶

「被害が一番少ないって、ある意味一番危険じゃないですか!？」

一夏

「…そうかな？」

千冬

「…織斑…今何て言った…」

一夏

「え？」

千冬

「…どうやらお前は【ムラサメ】の恐ろしさが分かって無いようだな…」

一夏

「そ、そんなに恐ろしいんですか…」

千冬

「馬鹿者!少し考えれば分かる事だろ!【ムラサメ】はあらゆるエネルギーを吸収する!つまり発電施設の電力を根こそぎ吸収する事も出来るという事だ!病院の様な重要施設の電気が無くなったらどうなるかお前にも分かるだろ!」

一夏

「あ！………何だよその剣！無茶苦茶じゃねえか！」

千冬

「今更遅いわ!？」

バゴンツ！

一夏

「ウゴツ！……ググツ……すみません……」

永遠

「心配せんでもそげな事せんよ。まあ、その気になれば人間の体力や精神力と言った物も吸収出来る代物なんじゃが……」

千冬

「そんな物まで!? 本当に妖刀だな!? ……頼むからそんな事しないでくれよ! ……しかし、これで6本全部か…全くだれもこれもこれも自然災害その物だな!」

…噴火・地震・氷漬け・竜巻・台風・落雷・津波・渦・吸収…これをコイツは一人で起こせるんだからな…

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

キーン！コーン！カーン！コーン！

千冬

「時間か…火ノ兄、お前の【六道剣】の対策はこちらでしておく。使うのはいいが、試合で通用するレベルに下げて使えよ。」

永遠

「あいよ！」

千冬

「よろしい！では、今日はこれで終わりだ！」

生徒達

「ありがとうございます！」

疲れたく…早く着替えて飯にしよ…

千冬

「待て織斑、どこへ行く？」

一夏

「…え？」

千冬

「お前には仕事があるだろ？」

一夏

「し、仕事？」

千冬

「お前が空けたアリーナの穴、どうするつもりだ？」

一夏

「……あ！」

「そうだ！俺が地面に激突した時に出来た穴の事、すっかり忘れてた！」

千冬

「あのままでは邪魔だ！ちゃんと埋めておけよ！」

一夏

「ええっ！……あ！そうだ火ノ兄！『オオテンタ』で塞いでくれ……っていない！」

俺は火ノ兄に手伝って（塞いで）貰おうと思ったけど……いつの間にかいなくなっていた……

一夏

「そ、そんな……」

俺はこの後、結局一人で穴を埋める事になった

火ノ兄なら一瞬で終わるのに……

一夏

「手伝ってくれたっていいじゃねえかよおおおーっ!!!」
俺の叫びはアリーナに虚しく響いていた…

……

……

…

永遠

「ん？」

セシリア

「永遠さん、どうかなさいましたか？」

永遠

「いや、今何か聞こえた気が…」

セシリア

「わたくしには聞こえませんでしたわ。」

永遠

「…空耳かの？…すまん気のせいの様じゃ。飯にしようかの。」

セシリア

第046話：更識簪

～永遠 Side～

ただ今ワシはセシリアと食堂で食事中じや

今回は弁当ではなく食堂の料理を食つとるぞい

セシリアと雑談しながら食べていると…

本音

「ひののん、セツシーと一緒に食べていくい？」

永遠

「ん？本音か、構わんぞ。…と、誰じゃ？」

本音が初めて見た女子とやって来た

本音

「この子はんちゃんって言うの～♪」

簪

「本音！渾名で呼ばないで！…えっと、更識簪です。1年4組の生徒です。一応日本の代表候補生もしてる。」

永遠

「これはご丁寧に。ワシは火ノ兄永遠じゃ。一応二人目の男の操縦者じゃ。」

セシリア

「セシリア・オルコットですわ。イギリスの代表候補生です。お見知り置きを。」

永遠

「…セシリアと同じ代表候補生か…うゝむ？」

メガネをかけた赤い眼と水色の髪の毛の娘か…なんかどっかで見たような気が…？

簪

「…な、何？」

セシリア

「永遠さん…更識さんの顔を見て何を唸ってるんですか！」

永遠

「ああ、すまん！…いや更識さんの顔、どこかで見た気がしてのお…」

セシリア

「…そう言われると、どこかで…」

どこじゃったかな…

簪

「…多分それは私のお姉ちゃん…私は更識楯無の妹…」

永遠

「更識楯無…ああ思い出した！ワシが試験の時に戦った相手じゃ！」

セシリア

「そうですね！忘れてましたわ！」

ガシャン！

永遠

「ん？」

何か倒れた音がしたのお？

音のした方を見たが誰もおらん…なんじやつたんかのお？

く永遠 Side out

く楯無 Side

楯無

（あ、危なかつた…もう少しで見つかる所だったわ…でもあの二人…）

火ノ兄君とオルコットちゃんを睨みながら…

楯無

(私の事忘れてたなんて酷いわよ!...それにしても...)

私は一緒にいる簪ちゃんに視線を向けた...

楯無

(何で簪ちゃんが一緒にいるのよ!私だって一緒にご飯食べたいのに!)

私は二人に嫉妬の念を送りながら監視をしていた

楯無 Side out

楯無 Side

永遠&セシリア

「!?!」

本音

「どつたの二人共々?」

永遠

「いや...何か妙な視線が...」

セシリア

「...何でしょうか、これは?」

二人は視線が気になるのか周りをきよろきよろしている...

本音

「私は分からないけどなく？かんちゃんは？」

簪

「…私も分からない…気のせいじゃないの？」

永遠

「気のせいではないのお…殺気の類では無いんじゃないが…」

セシリア

「そうですね…」

…まさか！

簪

「…ごめん…」

永遠

「何じやいきなり？」

簪

「…多分それ、私のお姉ちゃん…」

永遠&セシリア

「は？」

簪

「…お姉ちゃんが監視してるんだと思う…」

永遠

「何じゃと！」

簪

「……………」

お姉ちゃん…何してるの…

く簪 Side out

く楯無 Side

楯無

(やばいバレた!?)

私は簪ちゃんが教えるとは思わず動揺していた

だけどそれ以上に…

楯無

(でも何で！気配は消してる筈なのに！いきなり視線で気づくってどういう事！いつもと変わらないのに!?)

私の視線だけで気づいたあの二人に警戒を強めていた

楯無

(…今日はもう無理ね…引き上げるしかないか…)

私はそう判断し、食堂を後にした

後日、二人が私の視線に気づいた理由を聞いた時、私は自分で自分を殴りたくなるほど恥ずかしかった

楯無 Side out

簪 Side

永遠

「むー視線が消えた…」

セシリア

「…そうですね。」

…そんな事まで分かるの！この二人？

簪

「…本当にごめん…」

…なんでお姉ちゃんは私の邪魔ばかりするの…

永遠

「更識、お主が謝らずともよい。」

セシリア

「そうですね。更識さんが悪い訳ではありませんもの。」

簪

「…ありがと二人とも…」

永遠

「カカカツ、気にせんでいい。」

簪

「あの！…名字で呼ばれるの嫌いだから名前がいい…さんもいらなから…」

永遠

「む！そうか、なら簪で。それからワシも永遠でいいぞい。」

セシリア

「では、わたくしは簪さんで。わたくしも名前がいいですわ。さんも必要ありません。」

簪

「…うん…改めてヨロシク…永遠、セシリア…」

永遠

「それにしてもあの生徒会長は何考えとるんじや？人の食事を覗くとはストーカーか？織斑と言いいこの学園には犯罪者みたいな変態がおるな？」

セシリア

「本当ですわね！迷惑な方です！」

簪

「……………」

セシリア

「…簪さん…言っておきますけど、わたくし達は貴方を責めてる訳ではありませんよ。」

簪

「え？」

永遠

「ワシ等は生徒会長の更識楯無に迷惑しとるんじや！お主は更識簪じやろ？姉が迷惑かけたからと言って妹のお主が気にせずともよい。関係無いお主には何とも思つたらんよ。」

…更識簪…この二人は私を一人の人間として見てくれるの…

永遠

「じゃからお主が気にする必要は無い。そうじゃな、今度会ったらワシ等を覗いとつた

理由を問い詰めてやるかの！」

セシリア

「そうですね。内容によっては永遠さん、お説教をお願いしますわ。」

永遠

「カカカツ任せとけい！思いつきり凹ませちやる！」

…永遠とセシリア…優しいなく…でも私の事を知つたらなんて思うかな…

本音

「ひののんもセツシーもありがとね〜♪」

永遠

「何故お主が礼を言うんじや？」

本音

「私はこれでもかんちゃん専属のメイドだからね〜♪だからお礼を言ったんだ〜♪」

永遠

「メイド！お主が？」

簪

「…気持ちは分かる…でも本当の事。」

セシリア

「意外でしたわね〜！」

本音

「む〜みんな酷いよ〜！」

永遠

「カカカツ、すまんすまん！…：そう言えば本音、何か用でもあったんか？」

本音

「ほえ？」

永遠

「お主は初日しか来なかったからな、ワシ等に何か用でもあるのかと思うたんじゃが？」

本音

「あくそうだった〜！用があったのは私じゃなくてかんちゃんだよ〜♪」

簪

「ほ、本音!？」

永遠

「フム、簪の方じゃったか。用件は何じゃ？」

どどどどうしよ…：何て言えばいいんだろ!？」

簪

「あ、あの…と、永遠のI S…」

永遠

「ワシのI S? 【戦国龍】と【ドットブラ斯拉イザー】の事か?」

簪

「う、うん…」

永遠

「アレに興味あるんか? お主が興味を引く様な物かのお?」

セシリア

「…永遠さん…本気で仰ってます?」

永遠

「無論じゃ!」

セシリア

「ハア…いいですか永遠さん! あなたの機体はどちらも全身装甲のI Sです! それだけでも珍しいんですよ! しかも【戦国龍】はあの外見です! そして【ドットブラ斯拉イザー】は変形と合体まで出来る機体です! そのような機体に興味を持たない人などいません!」

簪

「そうだよ!!」

永遠&セシリア

「!？」

簪

「永遠の【ドットブラスライザー】は凄いよ！武器が変形してカッコ良かった！機体も変形してパワーアップした時は吃驚した！ワンオフ・アビリティ単一仕様で合体までした時は驚きを通り越して感動したよ！その上、必殺技まであるなんて最高だよ!!」

永遠

「か、簪？」

簪

「……はっ……ごごごごめん……」／／／

永遠

「……………【ドットブラスライザー】が気に入ったんか？」

簪

「……………うん……」／／／

本音

「かんちゃんはね、ロボットアニメとか特撮ヒーローとかが大好きなんだよ♪」

永遠&セシリア

「は？」

簪

「本音！」

永遠

「…ロボット…確かに【ドットプラスライザー】は見た目は完全にロボットじゃからな
…」

簪

「う、うん…それで…つい興奮しちゃって…」／／／

セシリア

「なるほど…」

簪

「…それに…」

永遠

「ん？」

簪

「…永遠とセシリアの試合…凄く感動した…【ドットプラスライザー】には確かに興奮し

ただけど…でも、二人の試合そのものにも感動したの…」

永遠&セシリア

「……………」

簪

「…セシリアは永遠と戦う為に自分を鍛え続けたんだよね？…同じ代表候補として見てもセシリアの実力は本物だった…たった一人と戦う為にそこまでしたなんて信じられなかったけど…でも、永遠はそれが分かったからセシリアと本気で戦ったんだよね？」

セシリア

「…そうですね。…永遠さんと正々堂々と本気で戦う…それがわたくしと永遠さんの約束であり目標でしたから…」

永遠

「…ワシもじゃよ。セシリアとI Sを纏って向かい合った時、約束を果たせる事が嬉しかったんじゃない…そしてセシリアはその約束の為に強くなっとった…じゃから、ワシはワシ自身とI Sの全ての力をもって答えたんじゃないよ…」

セシリア

「永遠さん♪」／／／

簪

「…いいなあ…そんな風に認め合えるなんて…」

永遠

「…どういう意味じゃ？お主の言い方じゃと、まるで認めてもらつた事が無いみたいなの言い方じゃぞ？」

簪

「……………」

セシリア

「簪さん…言いたくないならそれでも構いません。ですが、言わなければ誰にも伝わられませんよ。態度だけで分かるほどわたくし達は器用ではありません。」

簪

「…うん……………少し…考えさせて…」

永遠

「構わんぞ…ワシ等はお主が自分から言ってくれるのを待つだけじゃよ…」

セシリア

「そうですね。」

簪

「…ありがとう…」

永遠

「…簪…一つ言つとくぞ。お主が何を抱えとるのかは知らんが、ワシ等で良ければ力になる。それだけは覚えておくんじやぞ。」

セシリア

「ええ♪いつでも相談して下さい。」

簪

「…うん………」

…なんで…この二人は…会ったばかりの私にこんなに優しいんだろう…

…一番優しくして欲しかった人は…私を『無能』と切り捨てたのに…

…この二人というほうが…凄く落ち着くな…

…簪 Side out…

…永遠 Side…

ん？…簪のこの表情…もしや…

永遠

「……………簪………」

簪

「…な、何？」

永遠

「…間違っておつたら謝るが…お主…勘違いしかけとらんか？」

簪

「え？」

永遠

「ワシ等は確かに力になるとは言った。じゃが、お主が依存する存在になる気は無いぞ

！」

セシリア

「永遠さん？」

永遠

「力を貸すがそれはお主の悩みを解決する手伝いをする為じゃ！お主の逃げ込み先になるつもりは無い！」

簪

「!？」

「当たつとつたか…危なかつたな…」

永遠

「やはりそう考え始めておったな！もしそのつもりなら今言った事は無しじや！今後ワシ等に話しかけるな!!」

簪

「そんな!？」

永遠

「…お主が抱えとるものと向き合う気になつたら話しかけて来い！それ以外はワシは関わらんぞ！セシリア！お主も分かつたな！」

セシリア

「…分かりましたわ…」

簪

「……………」

本音

「…かんちゃん…」

簪

「…くっ……………」

本音

「かんちゃん!？」

…行つてしまつたか…

本音

「ひののん！何であんな事言つたの！」

永遠

「言つた通りの意味じゃ。下手すると簪は織斑の様な甘つたれになつてしまふぞ！」

本音

「え？」

セシリア

「…あんな風になるのはさすがに不味いですわね…」

永遠

「じゃからああ言つた。後は簪次第じゃ。本音、お主も簪を思うなら相談に乗る程度にしておくんじゃ。」

本音

「…何で？」

永遠

「一週間前と昨日の織斑を思い出してみたい。奴は自分で言つた事を理解せず、困つた事があればすぐに周りに頼る。まず自分で考えて行動するという事をしとらんかった。」

…下手をすると簪も周りの人間…ワシやセシリアに頼りっぱなしの人間になりかねん。
…そうなたら戻すのは大変じゃぞ！」

本音

「……………」

永遠

「織斑は昨日ワシがシバいて説教してトドメに半殺しにしてようやつと分からせたんじゃぞ。奴はそこまでせんとならん程に手遅れじゃった。じゃが、簪は口で分からせる事が出来る位置にまだおる。」

本音

「…おりむー…手遅れだったんだ…」

永遠

「周りの環境も原因かもしれないが、アイツは色んな意味で馬鹿じゃからな…口で言っただかるんじやったらあの時に気付いておる！」

セシリア

「…そうでしたわね…」

本音

「…おりむー…」

永遠

「…環境と言う意味では簪も同じかもしれないが、織斑よりはまだマシじゃろう。」

セシリア

「…恐らくそれが簪さんの悩みなんでしょうね…」

永遠

「うむ！じゃから簪はまだマシなんじゃよ。」

本音

「何で？」

永遠

「簪と織斑の一番の違いはな、さっき言った環境を本人が受け入れているかどうかの違いなんじゃよ。」

本音

「？」

永遠

「いいか？織斑は自分の環境を完全に受け入れそれが当たり前だと思つとる。自分が困った事があれば周りが助けてくれる。特に重要な事、大事な事は自分は考える必要がない。周りが考えてくれる。そげな考えを持つとるからあんな風になったんじゃ。」

本音

「……………」

永遠

「じゃが、簪は自分を取り巻く環境に疑問を持つとる。もし、簪が依存出来る存在に出おうたら織斑の様になるじゃろう。」

本音

「…かんちゃん…」

永遠

「分かったか本音？それとも、簪もあんな風になつて欲しいんか？」

本音

「……………」フルフル

永遠

「よろしい。」

さて、今のを聞いて柱の陰で立ち聞きしとる奴はどう考えるかの…

〈永遠 Side out〉

〈一夏 Side〉

一夏

「……………俺…そこまで酷い状態だったんだ…」

穴を塞いで急いで昼食を取りに来たら、火ノ兄達とのほほんさんの会話が聞こえて来た

言われてみると思い当たる節はある…自分で考えて行動した事なんて…中学の頃、生活費を稼ぐ為にバイトした位だ…

一夏

「……………あ!?!」

そういえば…昨日…

一夏

『…どうすればさ…大切な人を守る男になれるのかな…』

千冬

『…お前は自分で考える事を知らんのか!』

試合の後…千冬姉に聞いた事…十分大事な事じゃねえか…それを…

自分で考えず千冬姉にすぐに頼ってしまった…火ノ兄の言う通りだ…

一夏

「……………本当に手遅れじゃねえか…」

……俺自身で何とかしないと……
く一夏 Side out く

第047話：歓迎会と来訪者

（永遠 Side）

簪と出会って色々あってから2日が経ち、今日の授業も無事に終わったのでワシは家に帰ろうとしたら、清香と静寐が話しかけてきた

清香

「火ノ兄君！もう帰っちゃうの？」

永遠

「ん？そうじゃが。」

静寐

「…もし良ければだけど…今日は暫く残ってくれないかな？」

永遠

「理由は？」

清香

「うん！実はこの後織斑君の代表就任の歓迎会をしようと思ってるんだ！」

静寐

「それで、出来ればクラス全員でやりたいんだよ！だから…」

永遠

「何時頃始めるんじゃない？」

清香

「え！いいの！」

永遠

「時間によるの。あまり遅いと無理なんじゃが…」

静寐

「えっとね！今夜の6時から始めようと思ってるんだけど…どうかな？」

永遠

「ちと待ってくれ…ええ〜〜と…」

ワシは参加した場合の予定を計算した…

永遠

(終わりを7時にして…向こうに着くの1時間かかるから…こっちで晩飯を食って…束さん達には先に食ベといて貰って……畑を……風呂が……寝るのは…

……………)

清香

「…ひ、火ノ兄君…無理ならいいんだよ…」

永遠

「…いや、大丈夫じゃ！」

静寢

「…ホントにいいの？」

永遠

「構わんよ。折角、クラスメイトが開いてくれたイベントじゃからな。参加せんと罰が当たるとわい。」

清香

「ありがとう♪」

永遠

「…じゃが7時になったら途中ででも抜けさせてもらうぞ。…構わんかの？」

静寢

「うん♪それでいいよ♪」

永遠

「で、場所は？」

清香

「1年の食堂だよ！」

永遠

「分かった、時間になったら行く。」

静寂

「うん♪待ってるね♪」

永遠

「…さて、東さんに連絡しとくかの…」

ワシは東さんに連絡した後、始まるまでセシリアと話したりしながら時間を潰したん
じゃ

く永遠 Side outく

く一夏 Sideく

清香

「それでは、織斑くんのクラス代表就任を祝して！」

全員（一夏以外）

「カンパーパーイ!!」

一夏

「…えっと…ありがとう…」

俺は今、困惑していた

一夏

(…何故こんな事に?…確か、6時になったら1年の食堂に来て言われて来たんだよな…それで、来たらいきなりこうなったんだよな…)

永遠

「何じゃ、織斑…折角皆が祝ってくれとると言うのに…もつと喜んだらどうじゃ?」

一夏

「い、いや…俺、この事知らなかったんだけど?」

永遠

「サプライズと言う奴じゃ。お主を驚かそうと思うたんじゃろ。それとも折角の皆の好意を邪険に思うとるんか己は?」

一夏

「そんな事あるかよ!?!」

永遠

「なら楽しめ! 楽しまんぞと損じゃぞ!」

一夏

「あ、ああ……」

火ノ兄はそう言つて自分の席に座つた

よく見ると他の子達の席はお菓子やジュースだけなのに、アイツの席だけ普通の食事が用意されていた

どうやらアイツは今日はココで夕食を取るつもりらしい

でも、火ノ兄の言う通り折角皆が用意してくれたパーティーだから楽しむことにした
火ノ兄も食事を取りながらオルコットや他の生徒達と話していた

それから時間が7時になると……

永遠

「むー時間じゃな。……皆ーすまんがワシはここまでじゃー！この後も皆で楽しんでくれ！
ではなー！おやすみー！」

全員

「おやすみなさ〜い♪」

一夏

「才、オイ！本当に帰つちまうのか！」

永遠

「初めからそういう約束で参加したんじゃよ。ではな。」

?

「はいは〜い♪新聞部です。話題の新入生の男子2人に質問しに来ました〜♪つてアレ? ちよつと貴方!?!」

火ノ兄が帰ろうとしたら新聞部を名乗る人がやって来た

永遠

「すまんがワシはもう帰るんでなインタビューはあやつ一人にしてくれ。」

新聞部

「あーちよつと待って!?!」

火ノ兄は新聞部の人々が止めるのも聞かず外に出て行ってしまった

新聞部

「…行っちゃった…:…あ、皆、私は二年の黛薫子。よろしく。」

黛先輩はそう言うのと名刺を俺に渡してきた

黛

「本当は火ノ兄君にも色々聞きたかったけど帰っちゃたから仕方ないわね。」

………いいタイミングで帰りやがったなあ野郎! ……狙ってたのか? ……そんな訳な

いか…

黛

「…さて気を取り直して！織斑君、クラス代表になってどう言う気持ちか教えてくれる？」

一夏

「えーと、これから頑張つていきます？」

黛

「どうして疑問系？後もう少しいいコメントを頂戴。例えば、俺に触つたら火傷するぜ！とかさ〜♪」

一夏

「むしろそのセリフは火ノ兄の方が合う気が…」

黛

「え!? そうなの……よし彼のコメントはこれで行こう！」

一夏

「アイツなら物理的に燃やせるからな…」

黛

「…マジで？」

一夏

「マジですよ！…勝手にそんな事書いたら先輩も説教されながら燃やされますよ…」

黛

「……………私は何も聞かなかったわ……」

一夏

「……そうした方が身の為ですよ……」

黛

「なら織斑君！いいコメントお願い！」

しまった！火ノ兄が駄目なら俺に来るんじゃないやねえか！……仕方ない！

一夏

「自分、不器用ですから……」

黛

「うわっ、前時代的なコメント……………まあいいや、捏造しておくから。」

一夏

「なら聞く必要ないだろ！捏造するなら俺だけじゃなくて火ノ兄のも捏造しろよ！」

黛

「ハッハッハッ……何ヲ言ツテルノカナ……取材ヲシテナイ人ノ事ヲ書クナンテ出来ル訳無
イジヤナイカ……ハッハッハッ……」

一夏

「物凄い棒読みじゃねえか！そんなに説教されるの嫌なのかよ！」

黛

「嫌に決まってるでしょ！彼の説教って一切の容赦が無いから恐れられてるのよ！もう学園中に広まってるんだから！噂じや織斑先生まで説教されて凹みまくったらしいのよ！」

一夏

「千冬姉まで?！」

先輩の情報に他の子達まで驚いている

それはそうだ！あの千冬姉に：世界最強と言われた俺の姉を凹ませるまで説教が出る人間がいるなんて信じられる訳なかった

黛

「あくまで噂よ？でも、火の無い所に煙は立たないっていうし：もしかしたらって事もあり得るのよ。」

一夏

「……………」

まさか！…本当に？

黛

「…ねえ織斑君！もしよければこの事を聞いて来てもらって良いかな？報酬は弾むからさー！」

一夏

「んな事出来るか!!」

黛

「え〜〜いいじゃないし〜い減るもんじゃないし〜！」

一夏

「俺の寿命が減るんだよ！俺はまだ死にたくない！」

黛

「ケチ〜！ぶ〜ぶ〜！」

一夏

「よし分かった！後で千冬姉に黛先輩が聞きたい事があるって伝えておくよ！」

黛

「ごめんなさい私が悪かったです…だから…それだけはやめてー！？」

一夏

「全く！」

黛

「…なら…オルコットさん！何か知らない？」

今度はオルコットに振ったか…懲りない人だな…

セシリア

「…そうですね…織斑先生ではありませんがわたくしの知り合いの方が一人…永遠さんのお説教を受けたそうですわ。」

黛

「え!?織斑くんじゃなくて？」

セシリア

「違いますわ。その方のプライバシーの為、名前は言いませんが入学する前に一度ですが、永遠さんのお説教はキツイと愚痴を聞かされましたわ。」

黛

「そ、そこまでなの…」

セシリア

「ええ、わたくしが知っているのはそのくらいです（流石に東さんの名前は出せませんもの）…先輩、これ以上の深入りは地獄に片足を入れている様なものですわよ。」

黛

「……………はい…諦めます…」

セシリア

「賢明な判断ですわ。」

黛

「……よし！今までの事は綺麗サツパリ忘れてインタビューの続きよ！」

一夏

「忘れるのかよ……」

「と言うか他に何を聞かっていうんだよ……」

黛

「織斑君……ホモってホント？」

一夏

「ブウウウウウウウー……ツ!!」

黛

「ウワツ!!?汚いなく!いきなりどうしたの?」

一夏

「ゲホツゲホツ!どうしたもこうしたもあるか!今何て言った!!」

黛

「え?ホモって聞いたんだけど?」

「めめめ滅相もないです！おおお俺が好きなのはれっきとした女の子です！男には興味ありません!!」

俺は全身から冷や汗を流しながら身の潔白を証明しようとした！

セシリア

「…本当ですか？」

一夏

「神に誓って嘘ではありません！」

セシリア

「…神に誓って…ですか？………まあいいでしょう……ですが……もし不純な理由で永遠さに近づけば……どうなるか分かりますわね……」

一夏

「ははははい!!（確実にライフル的にされる!）」

セシリア

「…ライフルの的になる程度ですむと思っっているのですか？」

一夏

「!?（バ、バレてる！てか違うのかよ!）」

セシリア

「ビットも合わせて砲身を直接貴方の体に当てて零距离で蜂の巣にしますわ…文字通り穴があくまで…」

一夏

「ヒイイイイイーッ!!」

そんな事されたら本当に死んじゃう！

周りを見たら他の子達もオルコットの殺気に当てられて、中には気絶しかけている子までいる

セシリア

「分かりましたね…」

一夏

「はい!!」

セシリア

「…黛先輩…」

黛

「は、はい!!」

セシリア

「貴方も下らない事ばかり聞いていないで新聞部らしい仕事をしたらどうですか？」

黛

「でででもね！織斑君のホモ疑惑は皆知りたがってる事で…」

セシリア

「人の噂も七十五日と日本では言うそうですわよ。そのような噂放っておけばよろしいのでは？」

黛

「そ、それは…」

セシリア

「わたくしは織斑さんがホモでも同性愛者でも変態でも興味はありません…」

一夏

「…そこまで言わなくても…」

セシリア

「何か？」

一夏

「何でもありません！」

セシリア

「……………ですが…貴方のせいで噂が長続きすると関係の無い永遠さんにも迷惑がかかる

「んですよ？それとも永遠さんのお説教が聞きたいんですか？」

黛

「!?……………ごめんなさいもう聞きません真面目に記事を書きます!？」

セシリア

「よろしいですわ。」

一夏

「……………」

それから、黛先輩は借りてきた猫のように大人しくなつて、俺やオルコットに取材を
していった

最後に、専用機を持つ俺とオルコットの写真を撮りたいと言つて来たけどオルコット
が火ノ兄がいらないから嫌だと断つた

確かに火ノ兄も専用機を持つているんだから3人で撮るべきだよな

黛先輩もその理由に納得したのかあつさり引き下がって今日のパーティーはお開
きとなつた

〈一夏 Side out〉

〈? Side〉

？

「此処がI S学園ね！…待ってなさいよ！一夏!!」

私は数年ぶりの幼馴染との再会を楽しみにしていた！

（？） Side out（）

第048話：中国の代表候補生

一夏 Side

生徒1

「織斑君、おはよ〜♪ねえ、転校生の話って聞いた？」

朝、教室に入るなりクラスメイトの一人が話しかけてきた

一夏

「転校生？この時期に？」

入学してまだ1ヶ月も経ってないのにか？

生徒2

「うん、なんでも中国の代表候補生だったさ。」

一夏

「…中国か…」

中国と聞いて…俺は中国に帰ったもう一人の幼馴染の少女のことを思い出していた

セシリア

「あら皆さん。朝から賑やかですが、どうかなさいましたの？」

生徒1

「あ！セシリア！」

生徒2

「隣の2組に転校生が来たらしいんだよ！しかも、中国の代表候補生なんだって。」

セシリア

「代表候補生ですか？」

生徒1

「セシリアはどう思う？」

セシリア

「…そうですね…やはり実力が気になりますわね。」

生徒2

「やっぱりそこが気になるんだ。」

箒

「このクラスに転入してくる訳ではないのだろうか？騒ぐ程の事でもあるまい。」

まあ確かにそうなんだけど…しかし…

一夏

「…どんな奴なんだろうな？」

箒

「…気になるのか？」

一夏

「ああ、少しな。」

箒

「フンツ…」

何でいきなり不機嫌になるんだ？俺何か怒らせる様な事言つたかな？

箒

「お前にそんな事を気にする余裕はあるのか？もう少しでクラス対抗戦だろう？」

一夏

「うっ！そうだった…」

そうだ、俺それに出るんだよな…

俺なんかより遥かに強い奴が二人もいるのになあ…

セシリア

「それでは、対抗戦に向けてより実戦的な訓練をいたしましょう。織斑さんの機体は燃費が悪いですから、エネルギー切れの自滅をしない様にしませんと。」

一夏

「じ、自滅!？」

セシリア

「その様な負け方はしたくないでしょう?」

一夏

「はい!お願いします!」

箒

「……………チツ!」

何で舌打ちするんだ?

所でこの対抗戦、実は優勝したクラスの全員には学食デザートフリーパス半年分が配られるらしく、その為代表の俺に掛かる期待は結構大きい

一夏

「まあ、やれるだけやってみるか。」

本音

「やれるだけじゃダメだよ。」

生徒1

「織斑くん、勝ってね!」

生徒2

「フリーパスの為にもね！」

生徒3

「クラスみんなの幸せは織斑くんに託された！」

みんなが俺の勝利を願ってる

甘いのが好きな人にはたまらない景品だもんね。

生徒1

「まあ、専用機持ちちって1組と4組しか居ないから楽勝だよ！」

へえ、4組にもいるのか…

？

「その情報…古いわよ…。」

突然聞こえてきた聞き覚えの無い声

いや聞いた事のある声でした

俺は声が出した方を向くと…

？

「2組も専用機持ちが代表になったから。そう簡単には勝てないわよ！」

そこにいたのは俺のもう一人の幼馴染

一夏

「鈴…お前、鈴か!？」

鈴

「そうよ!中国の代表候補生【凰鈴音】!今日は宣戦布告に来たわ!」

鈴はそう言つて小さく笑つた…でも…

一夏

「何やってんだ、すげえ似合わないぞ。」

鈴

「んなつ…何て事言うのよあんたは!？」

鈴の雰囲気か元に戻ったら、ちょうど火ノ兄がやつて来た

永遠

「はよ〜つす!」

鈴

「ん!」

永遠

「ん?」

鈴

「お、男!？」

永遠

「誰じゃお主？」

鈴

「な、何で一夏以外に男がいるのよ!？」

永遠

「何でと言われてものお………む！」

火ノ兄は急いで自分の席に座った……どうしたんだ急に？

鈴

「ちよつと！こつちの質問に答えなさいよ！」

？

「おい。」

鈴

「何よ！」

スパン

千冬

「嵐、クラスへ戻れ！それと入口に立つな、邪魔だ。」

鈴がいきなり現れた千冬姉に出席簿でシバかれた

アイツ、千冬姉が来たのを察して席に座ったな

鈴

「千冬さん……」

千冬

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。それとも……」

千冬姉は再び出席簿を構えた

それを見た鈴は素直に引き下がった

鈴

「わ、分かりました！じゃあ一夏、後でね。逃げないでよ!?それからアンタの事も聞かせて貰うからね!」

そう言い残すと2組へ戻って行った

永遠

「……………だから誰なんじゃ?」

千冬

「では、SHRを始める。織斑、号令!!」

こうして今日も授業が始まった

けど、何故か簿が授業に集中できなかつた為、千冬姉達に何度も注意を受けていた

（一夏 Side out）

（鈴 Side）

私は凰鈴音！中国の代表候補生で織斑一夏の幼馴染よ！

この学園に来たのは私が好意を寄せている一夏が初の男性操縦者として入学したのを知って追いかけて来たからよ！

けど、驚いたわ！2組に戻って聞いたたら一夏以外にも男の操縦者がいるんだって！

しかも、そいつはあのブリュンヒルデと言われた千冬さんより強いらしく、千冬さん自身も認めているらしい

とにかく一夏の事も合わせて詳しく聞いた方がいいかもしれないわね

それで今は休み時間の食堂よ！

鈴

「待ってたわよ！一夏！」

食券販売機前で仁王立ちして待ってたのよ！（ラーメン装備）

一夏

「何が待ってただよ。そこに居ると食券出せないだろ。」

鈴

「わかってるわよ。あんたが来ないのがいけないのよ。」

私がどいたら食券を買って料理を持って一夏と一緒のテーブルに座ったわ

一夏

「久し振りだなあ。お前、いつの間に日本に帰ってきたんだ？おばさん元気？いつ代表候補生になつたんだ？」

一夏が矢継ぎ早に質問してきた

鈴

「質問ばつかしなさいですよ！あんたこそなんでIS使ってるのよ？ニュース見て吃驚したわよ。」

一夏と会話していると一緒に着いて来た黒髪ポニーテールの生徒が説明を求めて来た

箒

「一夏、そろそろどういう関係か説明をしろ！」

鈴

「関係って…／／／」

箒

「まさか付き合ってるのか!？」

突然付き合ってるなんて言われて顔を真っ赤にしてみました

鈴

「ベベべ別に付き合ってる訳じゃあ。」

一夏

「どうぞ。ただの幼馴染みだよ。」

コイツは！一年ぶりに会っても変わってないわね！

一夏

「なんだよ？なんで睨むんだよ。」

鈴

「ふん、なんでも無いわよ。」

箒

「幼馴染だと？お前の幼馴染は私だけの筈だろ!？」

一夏

「えーと、箒が引越したのが、小4だろ？鈴はその後に来たんだ、で中2の頃に中国に帰ったから大体1年ぶりだな。」

「この子も一夏の幼馴染？…そう言えば昔言ってたわね

一夏

「で、こつちが箒、前に言つたら？俺の通つてた道場の娘だよ。」

鈴

「そう言えばそんな事言つてたわね。」

一目見て分かつたわ！この子は私と同類、ライバルだわ！

鈴

「初めまして、よろしく。」

箒

「ああ、よろしく。」

互いに握手をしたけどその瞬間、私達の間で戦いのゴングが鳴つたのが確かに聞こえた

でも今はやりあう時じゃないわ…それにもう一人の事も聞かないと

鈴

「所で一夏！もう一人の事を教えてよ。ココに来るまでに二人目がいるなんて聞いた事無いんだけど？」

一夏

「火ノ兄の事か？…アイツは何というか…一言でいうなら…千冬姉以上の化け物だよ…」

鈴

「化け物って…クラスの子達も言ってたけど千冬さんより強いってホントなの？」

一夏

「…ああ…千冬姉本人がそう言ってた…俺も最初は信じられなくて千冬姉の言葉に反論したんだ…けどな…」

鈴

「けど…どうしたのよ？」

一夏

「その後そいつと試合したら…俺、一発も当てる所か掠らせる事も出来ずに…」

鈴

「一夏？」

一夏

「…ボコボコにされて説教されてトドメに半殺しにされた…」

鈴

「半殺し！…マジで？ I Sを纏ってたんでしょ！」

一夏

「…ああ…でもさ、アイツの攻撃、殆どが絶対防御を突き破って来てさ…俺の専用機も新

品だったのがアツと言う間にスクラップ寸前にされたんだよ。」

鈴

「絶対防御を突き破ってスクラップ寸前！どうやったらそんな事出来るのよ！」

一夏

「分からねえ…ただ最後に喰らった技…馬鹿デカイクレーターが出来たらしくてな…俺も地面にめり込む程潰されたんだよ…」

鈴

「…アンタよく生きてたわね…」

一夏

「ホントにな…後から千冬姉に聞いたら、実力の3割も出してなかったんだよ…」

鈴

「3割!? たったそれだけの力しか出してない相手に負けたの!」

一夏

「ああ…心も体もボロボロにされたよ…」

鈴

「心もって…そう言えば説教されたって言ってたわね。どういう事?」

一夏

「…すまん、それは聞かないでくれ…アイツの説教、ホントに堪えてるんだ…」

鈴

「一体何を言われたのよ？」

一夏

「…今迄の俺がどれだけ酷かったのかを言われたんだよ…アイツの言った事…何一つ否定出来なかつたんだ…悪い…これ以上は言いたくないんだ…」

鈴

「一夏…：…ねえ！アンタクラス代表なんでしょ？なら今度の対抗戦に出るんだよね！私がI Sの操縦を教えてあげようか！」

一夏

「え？」

バンツ！

箒

「必要ない！一夏に教えるのは私の役目だ！頼まれたのは私だ！そうだな一夏！」

鈴

「外野は黙ってなさいよ！私は一夏に聞いているのよ！」

箒

「何だと！」

一夏

「…あく悪いけど鈴…間に合ってるんだわ。」

鈴

「え!?!コイツで十分だっていうの!」

箒

「フフン♪」

「この勝ち誇った顔ムカつくわね！」

一夏

「いや、箒じゃないんだ。」

箒

「え?」

一夏

「コーチはオルコツトに頼んでるんだよ。千冬姉からもそうしろって言われてるし。」

箒

「…いい、一夏…」

鈴

「オルコット？」

一夏

「セシリア・オルコット：イギリスの代表候補生だよ。俺達のクラスメイトなんだ。」

鈴

「イギリスの代表候補生！だったら同じ候補生の私でもいいじゃない！」

一夏

「：それがな、オルコットは火ノ兄と互角に戦えるぐらいに強いんだよ。うちのクラスで一番強いのが火ノ兄で次がオルコットなんだよ。」

鈴

「納得出来ないわよ！そいつがどれだけ強いかわからないけど私より強い訳ないじゃない！」

一夏

「いや、多分お前でも勝てないと…」

鈴

「何ですって!!!」

永遠

「お主ら五月蠅いぞ！場所を弁えんか！」

一夏

「ひ、火ノ兄!?それに、オルコット!」

鈴

「アンタは二人目!」

永遠

「何じゃその呼び方?ワシの名は火ノ兄永遠じゃ!お主の名は?」

鈴

「…凰鈴音よ!鈴でいいわ!」

永遠

「ならワシも永遠で良い。それからお主らさつきから声が大きいぞ!周りの者達に迷惑じゃ。少しは声を小さくして喋らんか!」

一夏

「…ご、ごめん…」

鈴

「…悪かったわよ…」

箒

「フンツ!」

永遠

「ハア……ではな……」

一夏

「ちよつと待つてくれ！ 鈴、この子が俺のコーチをしてくれているセシリア・オルコットだよ。」

セシリア

「？」

鈴

「アンタがセシリア・オルコットね！」

セシリア

「はい、わたくしがセシリア・オルコットですわ。よろしくお願いしますね。凰さん。」

鈴

「鈴でいい……アンタ！ 私と戦いなさい！」

セシリア

「はい？」

永遠

「何じゃいきなり？」

セシリア

「理由を聞いても宜しいですか？」

鈴

「アンタが一夏にコーチしてるって聞いたからよ！一夏は私よりアンタの方が強いつて言つて私のコーチを断つたのよ！だから私の方が強いつて証明するのよ！」

セシリア

「なるほど…織斑さん…」

一夏

「は、はい！」

セシリア

「わたくしと永遠さん、そして織斑先生は言いましたよね…考えてから物を言う様にと…何故わたくしが今日会つたばかりの人に喧嘩を売られなければならないんでしょうか？貴方はわたくしの事をどう説明したのですか？」

一夏

「そ、それは…」

鈴

「アンタ、3人に同じ事を言われたの!？」

永遠

「織斑…貴様はまだ分かつたらんかったか…もう一度潰されてみるか？」

一夏

「そ、それだけは!？」

永遠

「…お主が馬鹿をやるのは勝手じゃ!じゃがワシ等を巻き込むな!やるなら一人でやれ!」

一夏

「…はい…」

これが一夏が言つてた説教か…確かに厳しいみたいね…

永遠

「それから鈴!」

鈴

「な、何!」

永遠

「お主の善意はありがたいんじゃが、こやつにものを教えるのは対抗戦が終わってからにしてくれんか？」

鈴

「え？」

永遠

「この馬鹿は1組の代表じゃ。お主は2組の代表じゃろ？試合前にそんな事すると互いの手の内を明かす事になりかねんぞ。」

鈴

「あー！」

永遠

「分かったか？すまんがそういう訳じゃから大会が終わるまでは我慢してくれ。」

セシリア

「その後でしたら変わりますわ。わたくしも色々忙しいですし、鈴さんが代わりに指導してくれるならありがたいですわ。」

鈴

「え、いいの？」

この二人が言ってる事は至極真つ当な事だ…さつきは頭に血が上ってたけど落ち着いて考えてみるとその通りだった

セシリア

「…鈴さん…ちよつとこちらに…」

鈴

「な、何よ!？」

セシリアに呼ばれて私達は部屋の隅に移動した

セシリア

「鈴さん…心配しなくてもわたくしは織斑さんに興味はありませんわ。」

鈴

「え?」

セシリア

「織斑さんが好きなんでしょう?だからわたくしに怒ったんですよね?」

鈴

「セ、セシリア!」／／／

セシリア

「フフツ♪大丈夫です。わたくしが織斑さんになびく事はありません。断言してもいいですわ!」

鈴

「…アンタ…もしかして永遠が?」

セシリア

「はい♪ですがこれは内緒でお願いしますね♪わたくしも言いませんから♪」

鈴

「…うん♪分かったわ♪」

セシリア

「お願いしますね♪」

鈴

「…でも、今度私と勝負して！どっちが強いのか知りたいのは本当だから！」

セシリア

「フフツ♪分かりましたわ。その時はお相手いたしますわ！」

鈴

「約束よ！」

セシリア

「約束ですわ！」

鈴

「…………でも良かった…アンタが一夏を好きじゃなくて…」

セシリア

「はい?」

鈴

「セシリアが相手じゃ勝てるかどうか分からないんだもん!」

セシリア

「では、篠ノ之さんなら勝てる?」

鈴

「少なくともアンタよりかは勝てる確率が高いわよ!」

セシリア

「篠ノ之さんが聞いたら怒りますわよ。」

鈴

「聞かれなかったら平気よ。だから言わないでね!」

セシリア

「フッフ分かりましたわ♪」

私たちは笑い合うと一夏達のいる席に戻っていった

セシリア

「永遠さん、お待たせして申し訳ありません。」

永遠

「気にせんでいい。織斑、ワシ等はまだ行くぞ。久しぶりに会って嬉しいとはいえ、声はもう少し下げて話すんじゃないぞ。」

一夏

「…はい…気をつけます…」

セシリア

「それでは鈴さん、また♪」

鈴

「うん！またねセシリア！永遠！」

永遠

「ああ、ではな。」

セシリア

「失礼します。」

二人は食事を取る為、違う席に向かった…

一夏

「…オルコットと何話してたんだ？随分仲良くなってたよな？」

鈴

「大した事は話してないわよ。今後勝負しようって約束したくらいよ。」

一夏

「そ、そうか…」

鈴

「一夏…良い奴等ね…あの二人…」

一夏

「え？」

箒

「何処がだ！あいつ等は一夏を散々馬鹿にした挙句に火ノ兄は半殺しにしたんだぞ！」

一夏

「いや、それは…」

鈴

「…何か理由があつたんでしょ？」

一夏

「あ、ああ…その、訳は言いたくないんだけど…」

鈴

「ならそれでいいわよ。軽く話しただけでもあの二人、相手を陥れる様な事しそうに無い。」

第049話：簪の闇

（簪 Side）

私はあれからずっと考えていた：

セシリアは言わなければ分からないと言った：だから、何時でも相談して良いと言つてくれた：

永遠は私が言うまで待つてくれると言った：その時は、何時でも力になると言つてくれた：

二人は本当に優しかった：家にいるより二人の傍にいる方が安心できると思つた：でも：永遠はそんな私の考えに気付いて突き放した：

その通りだ：二人は私の悩みを解決する手伝いをすると言つたけど：私の居場所に：逃げ場所になるとは言つていなかつた：

簪

「：逃げ場所か：：：私は永遠とセシリアと出会つて二人の所に逃げようとしていたのかな：」

本音

「…かんちゃん…」

簪

「…本音…私…どうしたらいいのかな？」

本音

「私には分かんない…かんちゃんはどうしたいの？」

簪

「……………」

どうしたいか？

本音

「ホントは分かってるんだよね？」

簪

「!?……………うん…二人に全部話せばいいんだ…」

本音

「なら、言お！言つて楽になつちやお！」

簪

「…でも、話して二人に呆れられたら…下らないって言われたら…」

本音

「かんちゃん!!」

簪

「!?」

本音

「かんちゃん! ひののんもセツシーもそんな事言う人じゃないよ!」

簪

「ほ、本音!」

本音

「二人ならかんちゃんの話我真面目に聞いてくれるし、下らないなんて言わないよ! かんちゃんと一緒に悩んでくれる! 二人はそんな人だよ!! なのに何でそんな事言うの!!」

本音がこんなに声を荒げて私を叱るなんて初めてだった…

私を叱る本音の眼にはうつすらと涙が浮かんでいた…

本音はそれだけ二人を信頼していたんだ…だから私の言った事に怒ったんだ…

簪

「…ごめん…本音…私が馬鹿だった…」

本音

「かんちゃん…」

簪

「……………決めたよ！…本音、明日の放課後二人に会いたって伝えてくれる？」

本音

「じゃあ！」

簪

「うん！全部話す！だから…」

本音

「分かったよ♪任せておいて♪」

簪

「…ありがとう…本音…」

く簪 Side outく

く永遠 Sideく

朝、教室に來ると本音が話しかけてきた…

本音

「ひののん、セッシー、今日の放課後だけど少しいいかな？」

永遠

「ワシは構わんぞ。」

セシリア

「わたくしも大丈夫ですわ。」

本音

「ホント！よかつた〜♪」

永遠

「……………簪か？」

本音

「!?…うん…かんちゃん全部話すつて…」

永遠

「分かった。どこに行けばいい？」

本音

「整備室…そこで話すつて。」

セシリア

「分かりましたわ。」

鈴

「一夏あああああああ——————つ!!!」

永遠

「な、何じゃ!？」

本音と話しとるといきなり鈴が怒鳴り声を上げて入ってきた

一夏

「な、何だよ鈴!昨日の続きか!」

鈴

「アレとは別よ!それと、昨日の事はまだ許してないからね!」

昨日の事…ワシが帰った後に何かあったんか?

永遠

「セシリア、本音…アイツまた何かしたんか?」

セシリア

「さあ…そういうえば昨日の夜、織斑さんの部屋の方が騒がしかった気が…いつもの事で
すので気にもしませんでした…」

本音

「そういうえばそうだったね。」

永遠

「…そんな時に何かあったな…:…:…じゃが、鈴の用件は違うようじゃの?」

一体何しに来たんじゃ？

一夏

「じゃあ何だよ…こんな朝っぱらから！」

鈴

「アンタがホモって聞いたからよ!!」

一夏

「違あああああああ————うっ!!」

何じゃその事か…

セシリア

「そういえば、鈴さんは昨日学園に来られたんですね。でしたら知らないのも無理ありませんわね。」

本音

「そう言えばそうだね〜♪」

永遠

「ワシ等にとっては今更じゃからなく。」

セシリア&本音

「はい(うん)。」

永遠

「あつちは放つとけばいい…本音、今日の放課後に整備室に行くと言え、簪に伝えておいてくれ。」

本音

「うん！分かった♪」

で、あちらはと言うと…

鈴

「いつから男に走つたのよ!!」

一夏

「だから俺はホモじゃ無いんだって!!」

…まだやっとな

この後、織斑先生が来て二人を出席簿でシバくまで続けておった…

く永遠 Side outく

く簪 Sideく

簪

「そろそろ来る頃かな…」

私は整備室で永遠とセシリアが来るのを待っていた

本音から二人が来てくれると連絡があったときは嬉しいと思ったけど同時に怖かった

私の過去と、今していることを話してもそれでも手を貸してくれるのか不安で仕方なかった

簪

「…【打鉄式】…」

それは、私の目の前にある造りかけのISが原因でもあった…

簪

「……………」

永遠

「待たせたかの？」

簪

「!?…永遠！セシリア！」

永遠

「何を驚いとるんじゃ？ワシらを呼んだのはお主じゃろ？」

簪

「う、うん……ごめん……ちよつとボーつとしてたから……」

セシリア

「大丈夫ですか？」

永遠

「日を改めてもいいんじゃないぞ？」

……本当に優しいな……でも、それに甘えちゃ……いけないんだよね！

簪

「……大丈夫！来てくれてありがとう……」

永遠

「気にせんでいい……さて、早速聞かせてもらうかの……お主の悩みを？」

簪

「……う、うん……実はね……」

そして私は自分の事を話し始めた……

幼い頃から家の者達から優秀で明朗な姉と内気で臆病な自分を比較され続けて心が

塞ぎ込んでしまった事……

姉に対して強いコンプレックスを抱いており、自分を卑下していた事……

それを払拭しようとして勉学に励んでいたが、姉が家を継ぐと『無能のままにいる』と言

われた事……

代表候補生である、自分の専用機を倉持技研が開発を進めていたけど、織斑一夏の登場によって彼のデータ収集・解析を行う為に開発された【白式】に全ての技術者を取られてしまった事……

姉が自分の専用機を一人で作った事を知って、倉持から未完成で放置されていた【打鉄式】を譲り受け自分一人で現在制作していき詰っている事……

話せる事は全て話した……

簪

「……私の事情はこんな所……」

私が話している間、二人は真剣な表情を崩さずにとずっと聞いていてくれた……

それだけで……とても嬉しかった……

永遠

「なるほどのお……簪、幾つか聞いてもいいかの？」

簪

「……うん……」

永遠

「まず、お主は織斑をどう思ってる？」

簪

「…織斑一夏を？」

永遠

「そうじゃ。政府の命令とはいえ、あやつの【白式】が原因でお主の【打鉄式】は放出されたからの。織斑自身は関係無いとはいえ何か思う所はあるのかと思うてな。」

簪

「……………少し前まではね、恨んでたんだ…でも、今は何とも思っていないよ。」

セシリア

「何故ですか？」

簪

「…この間の永遠の試合を見たから…あの時、永遠に手も足も出せずに追い詰められて…お説教をされても何一つ言い返せない…そんな彼の姿が凄く小さく見えたの…そう思ったら、彼に対して色々考えていた自分が酷く馬鹿馬鹿しく思えたの…そんな人の専用機が私のより優先されたと思うと、自分が情けなく感じたんだ…だから、彼に対して私はもう何も感じてないんだよ。」

永遠

「…そうか…あの時の試合がな…何と言えれば良いのか…」

簪

「…私は感謝してるよ。お陰でつまらない拘りが無くなったから。…だから…ありがとう。」

永遠

「素直に受けていいのか微妙じゃな…」

本音

「いいんじゃないかな♪素直に受け取れば♪」

永遠

「あのな…」

簪

「…他に聞きたい事は？」

永遠

「そうじゃな……………」

永遠はそう言つて私の後ろにある【打鉄式式】を見ていた

永遠

「簪…お主はこの機体を何故一人で造つておるんじや？」

簪

「え?」

永遠

「聞けば、本音や整備課の者が手伝おうとしても全て断つとるそうじゃな。何故そうまでして一人に拘るんじゃ? 一人でいることが好きなんか?」

簪

「…ち、違う!」

永遠

「では何故じゃ?…姉が一人で造ったからか?」

簪

「……………うん…」

永遠

「じゃがな…お主が周りの協力を断り続けた結果、コイツは未だに完成しとらんのだぞ。」

簪

「うっ!」

永遠

「簪…何故周りを頼らん? 本音達を頼ろうとせんのじゃ?」

本音

「ひののん…」

永遠

「本音達はお主のやつとる事を邪魔しておるんか？嘲笑っておるんか？」

簪

「違う！本音も皆もそんな事する人達じゃない！！」

本音

「かんちゃん…」

永遠

「なら何故頼ろうとせん！頼る事がそんなに恥ずかしい事か！カツコ悪い事か！」

簪

「…それは…で、でも…お姉ちゃんが…」

永遠

「それがどうした！お主の姉は一人で造った！ただそれだけの事じゃろ！妹のお主まで同じ事をする必要がどこにある！！」

簪

「と、永遠…」

永遠

「…簪…お主はお主のやり方でやればいいんじゃない。姉が一人で造ったなら、お主は皆で造れば良いんじゃない。それは決して恥ずかしい事では無い。皆の力で最高の機体を造ればいいんじゃないよ。」

簪

「…皆で…最高の…」

…永遠は私の頭を優しく撫でながら、さつきまでの力強い口調から優しい声音に変えながら、話し始めた…

永遠

「そうじゃ。いいか、簪…例え無能と言われようがそんなもん放っておけ。言いたい奴には言わせておけばいい。簪には簪の良い所が沢山ある。そうじゃろ、本音?」

本音

「うん♪かんちゃんには良い所がた〜くさんあるよ♪」

セシリア

「そうですね!むしろそれに気づかない方がおかしいのですわ!」

簪

「…永遠…本音…セシリア…う、ううっ…」

第050話：家にご招待

～永遠 Side～

簪

「…ヒック…グスツ…：…ゴメン…永遠…」

アレから暫くして漸く簪は泣き止んだんじや

永遠

「…もぅいいんか？」

簪

「…うん…思いつきり泣いてスッキリした！」

永遠

「そうか、それは良かったの。」

本音

「エへへ♪こんなかんちゃん初めて見たよ♪」

簪

「ほ、本音…」／／／

セシリア

「フフツ♪それで簪さんこれからどうなさるのですか？」

簪

「…うん…皆に協力して貰う！…まずは、今まで断つてきた事を謝って、改めて私の方から頼んでみる！」

永遠

「それでいい！ならワシも協力しよう！…と言ってもワシに手伝える事は…」

考えてみるとワシは専門的な事は分らないな…

永遠

「…スマン…力仕事位しか出来ん…」

簪

「い、いいよそんなに気にしなくて！手伝ってくれただけで凄く嬉しい！」
／／／
ん？…簪の顔が赤いような？…気のせいかな？

永遠

「しかし何か出来る事が…」

セシリア

「わたくしもお手伝いしますわ！「ブルー・ティアーズ」のデータが役に立つかもしれま

せんし。」

簪

「…いいの？」

セシリア

「構いませんわ♪」

簪

「…ありがとう…セシリア！」

本音

「良かったね〜かんちゃん♪」

永遠

「…う〜う〜むっ……………あ!？」

そうじゃ!あの人に協力して貰おう!

本音

「ひののん、どしたの？」

永遠

「スマンが少し外すぞ…」

ワシは整備室を出て目的の人物に電話をかけると、事情を説明したんじや

協力して貰うのは難かしいと思ったんじやが簡単にOKしてくれた

永遠

「…待たせたの！」

セシリア

「永遠さん、何をしてらしたんですか？」

永遠

「知り合いに電話しておったんじやよ。…簪、土日と言うか今から空いとるか？」

簪

「え？…うん、空いてるよ。」

永遠

「よし！…簪、今から織斑先生の所に行くぞ！」

簪

「な、何で？」

永遠

「外出許可…では無いな…外泊許可を貰いに行くんじやよ！」

簪

「外泊って…何処に行くの？」

永遠

「うむ、あの人じゃよ！」

簪

「セシリアは知ってるの？」

セシリア

「は、はい…ですがあの人が手を貸してくれるんですか？」

永遠

「ワシも難しいと思ったんじやがアツサリと了承してくれたぞい。」

セシリア

「確かにあの人でしたら簪さんの機体を完成させる位は簡単に出来ますが…」

簪

「え！…簡単に！」

永遠

「あくまで相談するだけじゃ。【打鉄二式】を完成させる為のヒントを貰うだけじゃよ。

向こうにもそう言っている。」

セシリア

「そういう事ですか。」

簪

「ね、ねえ！誰なのその人！そんなに凄い人なの！」

セシリア

「ええ、会えば驚きますわ。」

本音

「そんなに凄い人なんだ？」

永遠

「うむ！ほれ早く許可を貰いに行くぞ！」

簪

「あ、うん……」

セシリア

「ま、待って下さい！……わたくしもお供させて下さい！」

永遠

「ん？なら一緒に行くかの。」

セシリア

「ありがとうございます♪」／／／

永遠

「本音、お主は？」

本音

「私もいいの？」

永遠

「構わんぞ。」

本音

「じゃあ行く〜♪」

まあ、連れて行く為には、まずあの先生の許可を取らんな...

〜永遠 Side out〜

〜簪 Side〜

永遠の家に行く為に私達は織斑先生を探していた

その途中で...

永遠

「ん...鈴？」

セシリア

「鈴さん？」

ベンチで泣いている生徒がいた

永遠とセシリアの知り合いみたいだけど…

セシリア

「鈴さん、どうされたんですか？」

鈴

「あつ永遠、セシリア…何でもないよ…」

セシリア

「どう見ても何かあったのでしょう？」

永遠

「もしかせんでも、また織斑か？」

鈴

「…うん…アイツね…覚えてなかったんだ…」

永遠

「覚えてない？」

何の事だろう？

鈴

「…うん…私ね1年前に中国に帰ったのよ。その時なんだけど………」

それから、鈴っていう人は恥ずかしがりながら話し始めた

なんでも、引越す時に織斑一夏に『毎日お味噌汁作ってあげる』のお味噌汁を酢豚に変えて告白したらしい

だけど、再会してその事を聞いたら『毎日奢ってくれる』と言って来たそうだし、しかもそれで怒った彼女に対して謝る気が無いらしい

話が終わると永遠とセシリアは頭を抱えていた

永遠

「…あの男は…よもやそこまで馬鹿じゃったとは…」

セシリア

「…あれほど言葉には気を付ける様に言いましたのに…」

簪

「…幾ら何でも酷すぎる！まだ覚えてないって言った方がマシ！」

本音

「そうだね…これは酷いよ！」

鈴

「…アイツ…私がどれだけ真剣に想いを伝えたと思ってるのよ！」

永遠

「ハア〜…これは救い様が無いなああの馬鹿は…一度死なんと分からんかもしれんな…」

鈴

「多分無理よ…アイツの鈍感さは死んでも治らないわよ…」

セシリア

「そうですわね〜…」

鈴

「そうよ！………所でアンタ達は？」

私と本音を見ながら聞いて来た

そう言えば初対面だった

簪

「私は4組の更識簪。日本の代表候補生。」

本音

「1組の布仏本音だよ。」

鈴

「簪に本音ね。…私は凰鈴音。中国の代表候補生よ。鈴って呼んで。」

簪

「よろしく。」

永遠

「しかし、あの馬鹿どうしてくれようかの？」

簪

「どうしようもないと思う。多分、どう言っても変な解釈をする。」

永遠

「そうじゃな…恐らく、付き合ってくれと言っても買物に付き合うとか言うじやろ
な…」

？

「間違いなくそう言うだろうな！」

永遠

「織斑先生！」

何時からいたのか私達が探していた織斑先生が話に加わって来た

セシリア

「何時からいたんですの？」

千冬

「鈴が昔の話をし始めたあたりからだ。」

…殆ど最初からいたんだ…

永遠

「なら話が早い。あの馬鹿何とかならんかの？」

千冬

「…お前達も言っていただろ。無理だ！アイツの鈍感さはもはや病気だ。それも不治の病レベルのな。それこそ、結婚を前提にとか付け加えなければ分かんたろう。」

セシリア

「そこまで言わなければ無理ですの！」

千冬

「正直それでも分かるか怪しい所だ…」

永遠

「それともやはりホモなのか？」

千冬

「…否定出来なくなっているな…今夜あたりもう一度問いただすか…」

簪

「以前も聞いたんですか？」

千冬

「ああ、一晩中否定していたがな…正直、かなり怪しい…」

永遠

「アイツの耳と脳味噌はどういう作りをしとるんじや？」

千冬

「私にも分かん。だが普通の人間と違うのは確かだな。もしかしたら味噌は味噌でもカニ味噌が詰まっているのかもな。」

…実の弟に言う事かな？

鈴

「…私はどうすれば…」

永遠

「フム…なら今度の対抗戦でその怒りをぶつけい！あの馬鹿には勝ったら土下座をしろとか言ってみたらどうじゃ？」

セシリア

「それはいい方法ですわね！」

鈴

「…そうね…その手があったわね！グウの音も出ない位ボコボコにしてやるんだから！！」

簪

「…頑張ってるね！」

鈴

「…けど、アンタ達、私を応援していいの？ 簪以外はアイツと同じクラスでしょ？」

永遠

「別に構わんよ。ワシは何処が勝とうと興味無いしの。」

セシリア

「わたくしも気にしていませんわ。それに、勝てるかどうかは織斑さん次第ですから。」

本音

「景品は欲しいけど…リンリンを応援する〜♪」

鈴

「リンリンって私の事！ パンダみたいなんだけど…まあいいわ。ありがとう皆！」

千冬

「教師としては自分のクラスに勝って欲しいが、私個人としてはお前を応援しているぞ

！」

鈴

「千冬さん！」

千冬

「頑張れよ！じゃあな…」

アレ？何か忘れてるような…

永遠

「ああ！待ってくれんか！織斑先生に用があるんじや！」

千冬

「ん？用件は？」

永遠

「セシリアと簪、本音の外泊許可を欲しいんじやよ。」

千冬

「外泊？何処に行く気だ？」

永遠

「ワシの家じや。」

千冬

「お前の家だと！何を考えてるんだ！」

簪

「あの！それは私が説明します…」

私は織斑先生に私の専用機の話をした…

千冬

「なるほど、アイツに助言を求めめるのか…確かにいい方法だな。アイツならヒントだけでも的確なアドバイスが出来るしな。」

簪

「先生も誰か知ってるんですか?」

千冬

「ああ、会えば確実に驚くぞ。」

永遠

「それで許可を貰えんかの?」

千冬

「…そうだな…まあ、そういう理由ならいいだろ。許可する。火ノ兄の島に行く事限定でI Sの使用も許可する。ただし、来週の月曜の朝には戻ってくるんだぞ。」

永遠&セシリア&簪&本音

「ありがとうございます!」

セシリア

「では急いで身支度をしませんと!」

簪

「そうだね！」

永遠

「…鈴…お主も来るか？」

鈴

「えー！」

永遠

「向こうでワシが鍛えてやる。」

鈴

「鍛えるってアンタが？」

千冬

「鈴。火ノ兄の実力は本物だ。鍛えて貰え。お前の外泊も許可してやる。」

鈴

「千冬さん…分かりました！」

永遠

「ならワシは校門前で待つとるから準備してくるといい。」

セシリア&簪&本音&鈴

「はい！」

…何を持っていけばいいのかな♪…

…簪 Side out…

…楯無 Side…

楯無

「……………外泊…」

私は自分の耳を疑った…簪ちゃんが男の家を外泊すると言うのだ…

けど、そんな事より…

楯無

「ううっ！私だって…私だって簪ちゃんとお泊りしたいのに！」

…羨ましい！

楯無

「…でも…あんなに楽しそうな簪ちゃんを見たのは久しぶりだな…」

私じゃ簪ちゃんを笑顔に出来ないのかなあ…

…楯無 Side out…

第051話：驚愕の出会い

（永遠 Side）

ワシはセシリア達が来るのを校門の前で待っていると…

一夏

「火ノ兄？」

馬鹿（織斑）が話しかけて来た

永遠

「ん？…何じゃ馬鹿おりむらか…」

一夏

「おい！今何て書いて書いて織斑って言った！」

永遠

「織斑と書いてオリムラと言ったんじゃが。」

一夏

「嘘つけええ！」

永遠

「五月蠅いのお…一体何のようじゃ？」

一夏

「…こんな時間まで学園にいるから気になったんだよ…」

永遠

「知り合いの相談に乗ったただけじゃ。もう帰る。」

一夏

「なら何ですぐ帰らないんだ？」

永遠

「しつこいのお…人を待つとるだけじゃ！」

セシリア

「永遠さくくくんっ♪」

永遠

「来たか…」

織斑の相手をしとるうちにセシリア達がやってきた…

鈴

「げ！馬鹿いちか！」

一夏

「お前も何て書いて一夏って言った！」

鈴

「馬鹿って書いて一夏って言ったのよ！」

一夏

「ハッキリ言うな！」

鈴

「アンタが聞いて来たんでしょ！って言うかなんでアンタがいるのよ！」

永遠

「ワシがココにおつたらやつてきたんじゃよ。」

鈴

「なんだ…じゃあ用は無いんだ。あ、そうだ一夏！今度の対抗戦で勝つたらさっきの事、

土下座して謝って貰うわよ！」

一夏

「いいぜ！なら俺が勝つたら説明して貰うからな！」

鈴

「えっ説明は…その…」

セシリア

「鈴さん！」

鈴

「ええ、いいわよ！私が勝つからね！」

一夏

「今度の対抗戦、絶対負けないからね！」

鈴

「アンタが勝てる訳ないでしょ！私はこれから永遠に訓練して貰うんだから！」

一夏

「な！どういう事だよ！何で2組の鈴の訓練をするんだよ！普通は同じクラスの俺をずるもんだろ！」

ワシに聞いたただしてきたが…さてどうするかな…軽く説教してやるか…

永遠

「織斑…貴様、さつき鈴を泣かせたそうじゃな？」

一夏

「うぐっ！」

永遠

「鈴から事情は聞いた…ハッキリ言つて貴様は男として最低じゃ！それが分からん限り

貴様の肩を持つ様な奴は誰もおらん！無論ワシもじゃ！」

一夏

「そ、そんな！俺が何したっていうんだよ！鈴との約束だつてちゃんと覚えてたぞ！」

永遠

「…織斑先生も言つとつたが貴様は本当に記憶力が無いようじゃな…」

一夏

「え？」

永遠

「間違つとるから鈴は怒つたんじゃ!!鈴が貴様との別れ際にどれ程の覚悟を持って言った言葉じゃと思つとるんじゃ!それを貴様は理解しようとするらずに間違えて記憶しておつて!まだ忘れたと言つた方が遥かにマシじゃ!!貴様は鈴の覚悟を踏み躪つたんじゃぞ!それすら貴様には分からのか!この大馬鹿もんが!!」

一夏

「うっ…」

セシリア

「織斑さん…貴方は何度言えば理解するんですか?考えてから物を言う様にと!それとも理解する頭を持っていないんですか?」

一夏

「ううっ……」

永遠

「今の貴様に手を貸す気なんぞワシには無い！貴様が出来る事は鈴との約束を思い出すか、土下座の練習をする事だけじゃ！どれだけ鈍いんじや貴様は！」

一夏

「……分かった……鈴……俺もう一度思い出してみろ……」

織斑はそう言って校舎に戻って行った

鈴

「……一夏……」

永遠

「あやつもああ言っておる。少しは期待したらどうじゃ？」

鈴

「……うん♪」

鈴はワシの言葉に笑顔で頷いた

永遠

「全くあの馬鹿には勿体ないくらいの娘じゃな。お主なら良い嫁になれるじやろ。」

鈴

「よよよ嫁!」／／／

永遠

「告白したんじやからいずれはそうなりたいんじやろ?」

鈴

「そ、そうだけど…改めて言われると…その……」／／／

永遠

「カカカツト愛い奴じやな!…じやがな鈴…あの馬鹿が思い出す事が出来たら、お主も今度こそちゃんとその想いを伝えるんじやぞ。恐らくあの馬鹿は思い出すだけで、意味なんぞ考えてはおらんじやろ。奴にはそこまでの期待は出来ん。お主の方からいかんと全てが無駄になつてしまふじやろう。」

鈴

「…うん…分かつたわ!」

セシリア

「ですがその前に恋敵に勝たないといけませんわよ?」

永遠

「…篠ノ之か…」

鈴

「大丈夫よ！私は負けないから！」

永遠

「カカカツ！頑張るんじゃぞ！」

セシリア&簪&本音

「フフフツ♪」

ほんにあの馬鹿には勿体ない娘じゃ…

この娘の想いが届けばよいのお…

永遠 Side out

鈴 Side

鈴

「それでどうやって行くの？」

永遠

「さつき織斑先生が言うつつたじやろ。ISで行くんじやよ。」

鈴

「ISでつて…いいの？」

永遠

「ワシは許可を貰つとるからな。毎日ISで登下校しとる。」

鈴

「よく許可が下りたわね……」

セシリア

「鈴さん……その理由は行けば分かりますわ。」

鈴

「そうなの？」

永遠

「まあな……」

簪

「……あの……」

永遠

「ん？どうしたんじや？」

簪

「ISで行くんだよね？私の機体はまだ出来てないし、本音はそもそも持ってないよ。」

永遠

「そうじゃったな。なら簪はこれを使え。」

永遠はそう言つて腰につけていた刀を簪に渡した

鈴

「刀？」

簪

「コレ…【ドットプラスライザー】!？」

永遠

「そうじゃ。それを装着せい。生体ロックは外してあるから簪にも使える筈じゃ。」

鈴

「コレってI Sの待機状態なの？つて言うか何で刀？」

簪

「さあ？」

本音

「ねく私はく？」

永遠

「スマンが本音はそのまままで連れて行く。」

鈴

「ちよつと何考えてるのよ！ISの速度に生身の体が耐えられる訳ないわよ！」

永遠

「【ドウジキリ】を使う。」

セシリア

「【ドウジキリ】ですか？」

永遠

「【ドウジキリ】で本音の周りに風のバリアを張る。その中ならISの速度にも耐えられる筈じゃからな。」

鈴

「…何なの【ドウジキリ】って？」

永遠

「見れば分かる。簪！機体を展開するぞ！」

簪

「は、はい！」

永遠は刀を頭上に掲げて簪は刀を正面に向けて一緒に円を描くと、永遠は炎に包まれて、簪は光に包まれた

炎と光が消えると二人の立っていた場所に、赤い龍と白いロボットの様なISが立つ

ていた

鈴

「な、何よこの機体！全身装甲！フルスキン！こんなIS見た事無いわよ！」

セシリア

「これが永遠さんのIS【戦国龍】と【ドットブラ斯拉イザー】ですわ。」

鈴

「…【戦国龍】…【ドットブラ斯拉イザー】…………アンタISを二つも持つてるの!？」

永遠

「そうじゃ。」

鈴

「…何なのよコレ…」

永遠

「そんな事より…簪、大丈夫か？」

簪

「……………」

永遠

「簪？」

「アンタどうしたのよ？」

永遠

「簪はロボットアニメや特撮ヒーロー物が好きらしいんじゃない？」

鈴

「……………そういう事……」

簪

「……////」

フルスキン
全身装甲だから簪の顔が見えないわね……どんな顔してるんだろ？

あ！そういうえば……

鈴

「ねえ？さっき言ってた【ドウジキリ】って？」

永遠

「そうじゃったな……【ドウジキリ】はこの【戦国龍】の単一仕様【六道剣】の一つじゃ

よ。」

鈴

ワンオフ・アビリティ
「単一仕様!?その機体は使えるの!もしかして二次移行した機体なの!」
セカンドソフト

永遠

「いやしとらんぞ。ワシのI Sは一次の状態ワンオフ・アビリティで単一仕様ワンオフ・アビリティを使えるんじやよ。」
鈴

「…もしかして【ドットブラ斯拉イザー】も？」

簪

「出来るよ!! 【ドットブラ斯拉イザー】の単一仕様ワンオフ・アビリティは本当にカッコよかつたんだよ!!」
また興奮し始めたわね…

永遠

「簪…」

簪

「はい…ごめんなさい…」

永遠

「何時までもこうしとる訳にもいかん。単一仕様ワンオフ・アビリティ起動!」

永遠ワンオフ・アビリティが単一仕様を発動させると6本の色の違う光の柱が現れた
その内の一つ、緑の柱を向いた

永遠

「風を纏いし神速の刃【風翼刀ドウジキリ】!!」

柱の中から現れたのは羽根の装飾が施された一本の剣だった

鈴

「……これが……」

セシリア

「【風翼刀ドウジキリ】：風を司る刀ですわ。」

鈴

「【風翼刀ドウジキリ】……」

簪

「凄い……」

鈴

「アンタも見た事無かったの？」

簪

「うん……」

セシリア

「【六道剣】を全て見た事があるのは1組の方達だけですわ。」

本音

「そ〜だよ〜♪」

永遠

「さて本音、こつちに来い。」

本音

「は〜い♪」

永遠は本音を呼ぶと〔ドウジキリ〕を本音に翳した

本音

「わっ!」

本音を風が包み込んだ

本音

「うわ〜〜何これ〜!」

永遠

「これで大丈夫じゃ。よし準備も出来たそろそろ行くぞい。」

セシリア&簪&本音&鈴

「はい!」

こうして私達は永遠の住む家に向かった

〜鈴 Side out〜

〜簪 Side〜

簪

「~~~~♪~~~~♪」

本音

「かんちゃんご機嫌だね〜♪」

簪

「…うん…あの「ドットブラスライザー」を使ってるんだもん……………」

本音

「?」

確かに私は機嫌が良い、いや、良かった…さつきまでは…

その理由は本音の今の態勢が原因!

本音は今、永遠にお姫様抱っこされているのだ!

それを見た瞬間途端に機嫌が悪くなってしまった…何でだろう?

ちなみにセシリアは最初から不機嫌だった…

セシリア

「む~~~~…」

鈴

「あははは…」

永遠

「…もうすぐ着くぞ！」

簪

「あ！着いたんだ！」

私達は永遠を先頭に島に降りて行った

セシリア

「ココが永遠さんの暮らしている島。」

永遠

「そうじゃ。名を火紋島と言うんじゃ。」

簪

「火紋島…」

地上に降りると永遠は本音を下ろして私達はISを解除した

本音

「ひののん、ありがとう♪」

永遠

「スマンなこげな移動法で…」

本音

「そ、そんな事無いよ〜♪（嬉しかったな〜♪）」／／／
簪

「本音？」

セシリア

「本音さん？」

本音

「な、何でもないよ〜！」

本音……まさか……この子……

永遠

「さてまずは夕飯にするかの。家にいる二人も腹をすかしたるじやろうし。」

簪

「二人？……その人たちが【打鉄二式】を見てくれる人？」

永遠

「そうじゃ。」

セシリア

「お会いするのが随分久しぶりに感じますわ〜♪」

そんな話をしながら私達は永遠について行った

しばらく歩くと一軒の家が見えて来た
鈴

「アレがアンタの家？」

永遠

「そうじゃ。」

永遠はそう言つて玄関の扉を開けた

永遠

「遅くなつてスマン！今帰つたぞい！」

セシリア&簪&本音&鈴

「おじやましま〜す！」

? ? 1

「おかえり〜！もうお腹ペコペコだよ〜！」

? ? 2

「おかえりなさいませ。」

簪&本音&鈴

「え!?!」

私達を出迎えたのは機械のウサ耳を付けた女性と銀髪の少女だった

な、何でココにISの生みの親がいるの!?

く 簪 Side out く

第052話：兎との一夜

♪ 簪 Side ♪

私は、いえ、私達は今ガチガチに緊張している！

その理由は私達の目の前にISの生みの親・篠ノ之束博士がいるからだ
何でそんな凄い人が永遠の家にいるの!!

束

「それにしても久しぶりだね♪セーちゃんとかーくんの試合は見せて貰ったよ♪束さんの予想以上に強くなってたね♪いい試合だったよ♪」

セシリア

「ありがとうございます♪束さんにそう言って頂けるなんて光栄ですわ♪」
何でセシリアは普通に話せてるの？

しかも、顔見知りみたいだし…

鈴

「(ちよ、ちよっとセシリア！アンタ篠ノ之博士と知り合いだったの！)」
セシリア

「ええ、わたくしが入学試験を受けに来た時にお会いしましたの。」

鈴

「(声が大きいわよ!)」

東

「ニヤハハハツ♪そんなに緊張しなくていいよ♪そうだね…とーくんの料理が出来るまで自己紹介でもしようか?」

クロエ

「それがいいですね♪」

東

「じゃあまずは東さんからね♪君達も知ってると思うけどISの生みの親、篠ノ之東だよ♪ブイブイ♪」

クロエ

「東様の助手を務めております、クロエ・クロニクルと言います。」

東

「クーちゃん、そこは東さんの娘って言って欲しいな♪」

鈴

「む、娘!?結婚されてるんですか!?!」

東

「違うよ。クーちゃんは養子なんだよ。後、とーくんの義理の妹でもあるんだよ。」

鈴

「そ、そうなんですか…」

東

「それで君たちは？」

鈴

「あ、はい！…えつと…誰から行く…」

簪

「…なら私から。…初めまして、私は更識簪と言います。日本の代表候補生です。」

東

「君か、一人でISを造ってるっていう子は？」

簪

「は、はい！」

東

「とーくんから話は聞いているよ♪後で君の機体を見せて貰うよ。そこから東さんなりのヒントを君に教える。あくまで教えるのはヒントだけだから、それを元に君は機体を

完成させられるように頑張るんだよ。」

簪

「はい!!よろしくお願ひします!!」

…あの篠ノ之博士に私の機体を見て貰えるなんて!

嬉しいけど緊張するなあ…

鈴

「では次は私が、凰鈴音です。中国の代表候補生をしています。後、一夏とは幼馴染です。」

束

「へ〜♪いっくんに篝ちゃん以外の女の子の幼馴染がいるなんて知らなかったよ。…君もいっくんの事が好きなの?」

鈴

「は、はい…今は喧嘩中なんですけど…」 // // //

束

「喧嘩中?…またいっくんが何かしたの?」

鈴

「…はい…実は……………」

鈴はさっすきの事を簡単に説明すると博士は呆れた顔をしていた

東

「…いっくん…相変わらず鈍感だね…」

鈴

「そうなんですよ！ホント腹立つ！」

東

「そういう事なら東さんも君を応援するよ♪この休みの間にとーくんにタツプリ鍛えて貰うといいよ♪」

鈴

「はい！ありがとうございます！」

本音

「最後は私だね♪初めまして♪布仏本音です♪本音でものほほんでも好きに呼んで下さい♪かんちゃん…じゃなくて、簪ちゃんのメイドをやってみよう♪」

鈴

「アンタメイドだったの!?!…とてもそうは見えないんだけど…」

東

「ホントだね…」

簪

「全然それっぽく見えないけど…本当なんです…」

本音

「皆酷いよ〜!」

東

「アハハハッ♪君面白いね♪気に入ったよ♪」

本音

「何か納得いかないよ〜!」

全員

「アハハハハ………ツ♪」

それから私達は雑談をしながら時間を過ごした

永遠

「楽しそうじゃな?」

東

「あ!とーくん、待ってたよ〜♪」

永遠

「スマンかったの、いつもの倍作らんといかんかったんでな。」

セシリア

「すみませんいきなり押しかけて…」

永遠

「連れて来たのはワシじゃ。お主らは気にせんでいい。」

東

「そろそろ♪気にしなくていいよ♪き、早く食べよ♪」

簪

「はい♪」

永遠

「では、いただきます。」

全員

「いただきます♪」

私達は永遠が用意してくれた夕飯を食べた

食事をしながらもいろんな話をしながら楽しんでいた

…こんなに楽しいご飯を食べたの何時以来だろ…

まあ、そんな事はどうでもいつか…これからもこんな食事がしたいなく…

全員

「い、ちそうさまでした♪」

永遠

「さて、ワシは洗いもんをしとるから皆は風呂に入つてきんさい。東さん、クロエ、案内を頼んでもいいかの？」

東

「いいよ♪皆、着替えを持ってついてきて♪」

セシリア&簪&本音&鈴

「は、はい。」

私達は着替えを持って博士に着いて行つただけど…

鈴

「あ、あの…篠ノ之博士…なんで森の中を歩いてるんですか？」

そう、今私達は永遠の家を出て森の中を歩いている

東

「すぐに分かるよ♪…あ、ついたよ！」

セシリア&簪&本音&鈴

「え？」

森を抜けると私達が見た物は…

鈴

「……これ……温泉!!」

クロエ

「そうです。この温泉は美肌効果もあるんですよ。」

セシリア

「本当ですか!!」

本音

「早速入ろ〜♪」

束

「その前に一つ注意事項があるから聞いて。」

簪

「は、はい!」

束

「この温泉には島の動物達も入りに来るから間違えて攻撃しないようにね!」

鈴

「動物ですか?どんなのがいるんですか?」

クロエ

「狸や狐、熊に狼です。」

へ?…熊…狼…

鈴

「くくく熊ーっ!!」

セシリア

「狼ですか!？」

東

「大丈夫だよ♪この島の動物達はみんな仲がよくて、大人しいんだよ。特にこの温泉では借りてきた猫みたいに大人しいんだよ♪」

クロエ

「事実、私達はこの島で1年以上暮らしてますが熊や狼に襲われた事は1度もありません。東様に至っては熊と一緒に酒盛りまでしています。」

セシリア&簪&本音&鈴

「ええええええええーっ!!」

東

「あの子と飲むお酒は美味しいんだよね♪」

クロエ

「そういう訳ですから安心して入ってください。」

セシリア&簪&本音&鈴

「は、はい……」

少し怖かったけど私達は温泉に入ったんだ……

確かにすごく気持ちいいんだけど……

簪

「………」

本音

「気持ちい〜ね〜♪……かんちゃんどつたの？」

簪

「……別に……」

ううっ……篠ノ之博士……大きすぎる……本音が大きいのは知ってたけど……セシリアも負

けてない……

鈴

「………」

……鈴は自分のと比べて落ち込んでる……

クロエ

「……鈴様……」

鈴

「…クロエ…」

鈴&クロエ

「……………」

ガシッ！

二人は何も言わずただ頷くとガシリと手を組んだ…なんとなく分かる気がする…

セシリア

「何をしてるんでしよう？」

東&本音

「さあ〜？」

この3人には分からない悩みでしょうね…

簪

「……………鈴、クロエさん…」

鈴

「…アンタはある方よ！」

クロエ

「…そうです！」

簪

「ううっ…私はどっちにも入れないの…」

く簪 Side outく

くセシリア Sideく

セシリア

「いいお湯でしたわね〜♪」

本音

「そ〜だね〜♪」

束

「フフン♪この島自慢の温泉だからね！」

簪&鈴&クロエ

「……………」

セシリア

「どうしましたの？」

簪

「何でも無いよ…気持ちよかったね…」

鈴

「そうね…」

クロエ

「はい…」

…何故あんなに落ち込んでるんでしょうか？

わたくし達はそんな会話をしながら永遠さんの自宅に戻りました

全員

「ただいま〜♪」

あら？…返事がありませんわね？

セシリア

「…永遠さん？」

東

「とーくん、今は畑に行ってるみたいだね。」

鈴

「畑ですか？」

セシリア

「そう言えば鈴さんは、永遠さんがI Sで登下校をしている理由を知りませんでした

ね。」

鈴

「うん…何でそんな事してるのアイツ？」

簪

「私も詳しくは知らないけど…」

セシリア

「それはですね……………」

わたくしは鈴さんと簪さんに永遠さんの事情を説明しました…

セシリア

「……………という訳なんです。」

鈴

「そっか…アイツ…一人で生きて来たんだ…」

簪

「…だから毎日こんな風に移動してるんだ。」

束

「…そういう事だよ。…アレが使えればとーくんの移動時間も一気に短縮出来るんだけど、今は束さんが借りてるからね。」

本音

「アレって何ですか？」

セシリア

「…もしかして【ラインバレル】の事ですか？」

簪&本音&鈴

「【ラインバレル】？」

鈴

「セシリア…何なのそれ？」

セシリア

「永遠さんの3体目のISですわ。」

簪

「3体目!?まだ持ってたの！」

セシリア

「はい。永遠さんは全部で3機のISを所持しています。その最後の1機を束さんに貸しているんです。」

鈴

「貸すって…何でそんな事を…」

束

「…悪いけどそれは君達には言えないんだよ。とーくんの許可が必要だからね。」

簪

「そうですか…」

鈴

「…セシリアは知ってるの？」

セシリア

「はい、他には織斑先生と山田先生も知っていますわ。」

簪

「あの人達も知ってるんだ…」

セシリア

「束さん【ラインバレル】を見せて貰ってもよろしいですか？」

簪&本音&鈴

「え!？」

束

「いいよ♪君達も見ろ?」

簪&本音&鈴

「はい！」

わたくし達は東さんに奥の部屋に案内されました…そこにあつたのは…

東

「これが【ラインバレル】だよ！」

セシリア

「…これが…」

鈴

「【ラインバレル】…」

本音

「…白い鬼さんだ…」

そう、白い鬼の様なISでした…

簪

「…【ラインバレル】…カツコイイー…ツ!!」

鈴

「また始まった…簪！」

簪

「…ゴメン…」

束

「どつたの？」

鈴

「簪はロボットやヒーロー物が趣味らしいんです。」

簪

「∴∴∴∴∴∴」

束

「そう言う事か、まあ、とーくんの機体は見た目が完全にロボットだからね。」

永遠

「お主らこんな所で何しとる？」

セシリア

「永遠さん！」

束

「おかえり〜♪畑の方は終わったの？」

永遠

「うむ、一通りな。」

セシリア

「あ！永遠さん、その「ラインバレル」を勝手に……………」

永遠

「見た事なら気にせんでいいぞ。そうじゃ東さん、明日から鈴を鍛えるんじやが【ラインバレル】を使ってもいいかの？」

鈴

「え!?!」

東

「それはいい考えだね♪他の2機と違って【ラインバレル】の戦闘データはまだ無いからね。むしろ東さんにとってもありがたいよ♪」

鈴

「…明日…これと戦うの?…ってI Sで訓練するの!?!生身でやると思ってたんだけど!」

永遠

「I Sの試合なんじやからI Sでやった方がいいじやろ。」

鈴

「確かにそうだけど…でも、何の許可も無しにこんな所で展開なんかしたら…」

東

「それなら大丈夫だよ♪この島の周囲は束さんの特製シールドが張ってあるからね。その中ならどれだけ暴れても外にはバレないんだよ。」

鈴

「そ、そうなんですか…」

永遠

「という訳じゃ。遠慮なくかかって来るといい。」

束

「もし壊れても束さんが直してあげるから大丈夫だよ。」

鈴

「あ、ありがとうございます！」

束

「君の機体も明日見せて貰うけどいいかな？」

簪

「はい!!」

永遠

「なら、明日に備えて今日はもう休むかの。」

セシリア

「そうですわね♪」

永遠

「……………あ!？」

簪

「…どうしたの？」

永遠

「…布団が足りん…」

鈴

「別にいいわよ。アンタの家に押し掛けたんだからその位。」

本音

「そくだよ♪」

永遠

「そういう訳にいくか！女子を床で寝かせられるか！」

セシリア

「と、永遠さん…」

簪 & 本音

「……………」

やっぱり永遠さんは優しいですわね…

永遠

「どうするかの…クロエ、予備はあるか？」

クロエ

「ハイ、あるにはあるんですが…二つしかありません。」

永遠

「…二つか…ワシの使つとるのも合わせて三つ…スマンがセシリア達は布団三つ繋げて
そこで寝て貰ってもいいかの？」

簪

「でもそれじゃ永遠の布団が！」

永遠

「ワシは座布団と襦袢で十分じゃ！」

セシリア

「ですが！」

東

「皆…折角の好意なんだから受け取るといいよ。とーくんがこう言ったら何を言っても聞かないしね。」

永遠

「そういう事じゃよ。ならスマンがクロエ、予備の布団を客間に運んどいてくれんか？
ワシも部屋にあるのを持ってくるからの。」

クロエ

「分かりました。」

セシリア&簪&本音&鈴

「……………」

束

「ほら、君たちも明日から大変なんだからしつかり休むんだよ。」

セシリア&簪&本音&鈴

「…はい…」

…この後、わたくし達は客間に案内されそこで一夜を明かしました

くセシリア Side outく

第053話：簪の勉強・鈴の訓練

～簪 Side～

簪

「ふわ～…よく寝た…アレ…ココは？………」

…何処だっけ？

本音

「かんちゃん寝ぼけてるの～？ひののんの家だよ♪」

簪

「あ！そうだった！昨日、泊まりに来たんだ！」

本音

「他の皆はもう起きてるよ～♪」

簪

「…私が一番寝てたのか…」

本音

「私もさつき起きたばかりだから変わらないよ～♪」

簪

「…うん。」

…こんなに清々しい朝も久しぶりだな…それによく寝たのも…
セシリア

「二人とも起きましたか？朝食が出来てますわよ。」

簪

「…分かった…」

本音

「は〜い♪」

私と本音は着替えて居間に向かった
そこには永遠以外の皆が揃っていた

簪

「…アレ？…永遠は？」

東

「畑仕事に行ったよ。とーくんの朝は早いからね〜。東さん達が起きる前にご飯の用意
をして出かけちゃうんだよ。」

簪

「そうなんですか。」

東

「そういう訳だから朝ご飯を食べよう♪」

全員

「いただきま〜す♪」

私達は朝食を食べながら今日の予定を話し合った

鈴

「永遠は今ほ畑か…」

クロエ

「はい、ですから鈴様の訓練は兄様が帰ってからになります。よろしいですか？」

鈴

「私はいいわよ。」

セシリア

「ではそれまではわたくしとやりますか？」

鈴

「それいいわね！この間の約束、ココでやりましょうか！」

東

「約束って?」

セシリア

「はい、以前鈴さんと勝負をしようとして約束をしまして…」

東

「そういう事か。ならシールドを張つとくから思いつきりやっていいよ♪そのかわり海辺でやってね。森の動物達に迷惑を掛けちゃうからね!」

鈴

「はい!分かりました!」

セシリア

「ありがとうございます♪」

東

「気にしなくていいよ。代わりにこつちもセーちゃんとリーちゃんのデータを取らせてもらうからさ♪」

鈴

「その位でしたらいくらでも…って、リーちゃん!」

東

「そ、君の事だよ、それから、簪ちゃんはかんちゃん、のほほんちゃんはのんちゃん」

て呼ぶからね♪」

本音

「のんちゃんかく♪」

簪

「私は本音と同じですね。」

東

「それと東さんの事は名前がいいからね♪」

簪

「は、はい！」

鈴

「何か…緊張するな…」

本音

「東さん、分かりました♪」

東

「うん♪それでいいよ♪」

鈴

「凄いわねこの子…」

簪

「こういう時、本音の性格は羨ましい…」

本音

「エへへ〜♪」

束

「フツ♪それじゃあこの後、かんちゃんのをI Sを見せて貰うよ♪」

簪

「はい！よろしくお願いします！」

クロエ

「束様、私は町で布団と生活用品の買い出しに行つて来ます。」

束

「お願いね〜♪」

セシリア

「お手数をおかけします…」

クロエ

「気にしないで下さい♪」

簪

「……………いよいよか！」

どんな評価を貰うのかな…

く簪 Side outく

く鈴 Sideく

鈴

「早速始めるわよ！セシリア!!」

セシリア

「望むところですよ！」

私達は島の海岸に来てISを展開していた

鈴

「一夏が言ってたアンタの実力、見させて貰うわよ！」

セシリア

「参ります！」

鈴

「負けないわよーっ！」

セシリアとの模擬戦を始めた！

く鈴 Side outく

く簪 Sideく

私と本音は昨日案内された【ラインバレル】の置いてある部屋に来ていた

東

「それじゃあ、ココに出して。」

簪

「はいー！」

私は言われた場所に【打鉄二式】を展開した

篠ノ之博士はすぐに機体にアクセスして現状の確認を始めた

簪

「…どうでしょうか？」

東

「うくん…ハッキリ言っていない？」

簪

「お願いします!!」

東

「よろしい！なら、これじゃダメだね！」

簪

「…ダメ…ですか…」

束

「うん。ありとあらゆる面で中途半端に造つてあるね。彼方此方に落ちがあるし、本来の出力にも全然届いていないよ。」

簪

「…やっぱり…」

分かつてはいたけど…改めて言われると落ち込むなあ…

束

「でも、誰の助けも借りずにここまで出来た事は十分に凄い事だよ♪」

簪

「…え!?!」

束

「正直に言うとは昨日とーくんから話を聞いた時は碌に出来てない状態だと思つてたんだよ。でもここまで出来てるとは思つてもみなかつたからね。だから胸を張るといいよ

♪」

簪

「…あ、ありがとう…ございます…」

本音

「良かったねかんちゃん♪東さんに褒められたよ♪」

簪

「うん…うん…」

東

「フフツツさて、ここまで出来てるなら東さんなら明日中には完成させられるけど、それは駄目なんだよね？」

簪

「…は、はい…た、東博士には申し訳ないんですが…本音や学園の皆と完成させたいんです！」

東

「そんなに畏まらなくていいよ♪かんちゃんの言いたい事も分かるからね♪…うん…となる…データタの粗や手直しが必要な所をピックアップしておくよ。後、この『山嵐』って言う武装に関しては、今日明日の間、東さんが教えてあげるよ♪それでいいかな？」

簪

「はい！よろしく願います！」

束

「よろしい！それじゃあとーくんが帰ってくるまで勉強しようか？【ラインバレル】の実戦データも取らないといけないからずっとて訳にはいかないからね。」

簪

「はい！…あの、束博士…一つ聞いてもいいですか？」

束

「…何でかんちゃんにここまでするのか、かな？」

簪

「!?…はい…」

束

「実はね…この【打鉄二式】が完成しなかったのは束さんのせいでもあるんだよ。」

簪

「え!？」

束

「いっくんの【白式】はね、倉持の所にあった開発凍結されていた機体を束さんが引き

取って完成させた物なんだよ。【白式】が完成したから送り返したんだけど…まさか、技術者全員が【白式】にかかりつきりになるとは思ってもみなかつたよ。」

簪

「…そうだったんですか…」

東

「だから今回のコレはそのお詫びも兼ねてるんだよ。ホントにごめんね…」

簪

「…いえ…東博士は気にしないで下さい。確かに驚きはしましてけど、そのお陰で私は永遠やセシリアと出会えました。」

東

「そう言つて貰えると東さんも気が楽になるよ。」

簪

「はい♪」

東

「よし！それじゃあ他にも色々教えてあげよう！のんちゃんはどうする？」

本音

「私もいいですか？これでも整備科志望なんです♪」

東

「いんよ♪」

それから私と本音は東博士にISに関する事を徹底的に教え込まれた

学園では学べない様な事まで教えてくれて凄く勉強になった

〔簪 Side out〕

〔鈴 Side〕

鈴

「ハアハア……………」

セシリア

「少し休みますか?」

私はセシリアと模擬戦をしていたけど…この子、本当に強い…

私の攻撃が殆ど当たらない上に…【龍咆】を初弾以外全部躲すなんて思わなかった…

鈴

「…そうさせて…本当に強いよね…一夏の言ってた事って本当だったんだ…」

セシリア

「まだまだですわ。永遠さんはわたくしの何倍も強いですから。」

鈴

「アンタの何倍ってどんだけ強いんだよアイツ！」

セシリア

「生徒で勝てる方はいませんわね。織斑先生でも勝てるかどうか分かりませんわ。」

鈴

「一夏も言ってたけど、そこまでのの？」

セシリア

「ええ、それから鈴さん、先程から気になっていたのですが、衝撃砲を撃つ時に、視線が狙う所を向いていますわよ。」

鈴

「え!? そうだったの!？」

セシリア

「気付いていませんでしたの？」

鈴

「…全然…」

セシリア

「では、視線に気を付ける様にしましょうか。衝撃砲は不可視の砲弾です。それを利用

「して鈴さんの視線を囿にする事も出来ますわ。」

鈴

「それいいわね！」

セシリア

「ですがその為には、狙いを見ないで撃つようにしないとイケませんわね。」

鈴

「ううっ…難しいわね…」

セシリア

「確かにそうですが出来る様になれば強力な武器になりますわ。本当の意味で見えない砲弾になりますから。」

鈴

「そうね！やってやるわよ!!」

セシリア

「フフツ♪その意気ですわ♪」

永遠

「やっとするのお。」

セシリア&鈴

「永遠（さん）！」

休憩していた私達の所にいつの間にか永遠や東さん達がやって来ていた

セシリア

「朝のお仕事は終わりましたの？」

永遠

「うむ、これで夕方まではする事が無いからの。鈴の訓練に来たんじゃ。」

鈴

「なら早速やろう！」

永遠

「慌てるでない。その前に補給をしてからじゃ。」

鈴

「そうだった！」

セシリアとの模擬戦でSEが殆ど残ってなかったんだ

東

「リーちゃんこっちに来て〜♪」

鈴

「はい！」

束さんに呼ばれて私は【甲龍】のSEを補給した

鈴

「ありがとうございます！……よし！永遠勝負よ！」

永遠

「承知した。では行くぞ……【ラインバレル】!!」

永遠はそう言つて腰に下げていた刀を抜いて地面に突き刺した

すると地面から光の柱が現れて永遠を包み込んだ

光が消えると昨日見せて貰つたIS【ラインバレル】が私の目の前に立っていた

鈴

「【ラインバレル】……アンタが纏うと迫力が違うわね！」

永遠

「カカカツ、そうかの？」

鈴

「そうよ！……でも私は負けないわよ！」

永遠

「この模擬戦が【ラインバレル】の初陣じゃ。ワシも負けるつもりは毛頭ないわ！かかって来いやあああああーっ!!」

鈴

「いくわよおおおおおーっ!!!」

〽鈴 Side out〽

〽セシリア Side〽

セシリア

「始まりましたわね…」

束

「そうだね…」

セシリア

「…永遠さんはアレを使うんでしょうか？」

束

「うくん…分からないけど、使ったらアツと言う間に終わるだろうね。」

簪

「あの…アレって何ですか？」

束

「【ラインバレル】の特殊能力だよ。」

簪

「特殊能力ですか？どんなもの何ですか？」

束

「【転送】だよ。」

簪

「【転送】？」

束

「簡単に言えばワープだよ。瞬間移動、空間転移とも言うかな。」

簪&本音

「ええええええええーっ！！」

まあ当然の反応ですわね…

簪

「ワ、ワープ！そんな事出来るんですか!？」

束

「うん♪」

わたくしも見た事ありませんからこの訓練の間に見て見たいものですわね

くセシリア Side outく

永遠

「鈴！大振りのしすぎじゃ！それでは振り終わった後の隙が大きいぞ！」

鈴

「う、うん！」

永遠

「もつと相手をよく見るんじゃ！相手の次の行動を予測しながら動け！」

鈴

「分かってるわよ！」

永遠

「二刀に拘るな！一本で打ち込んでこい！」

鈴

「そっか！」

、永遠に指摘されながら接近戦では勝てないと判断した私は【甲龍】の奥の手【龍咆】を

使った

鈴

「接近戦はこちらが不利ね！ならこれはどう！」

永遠

「ムッ！」

私が永遠に【龍咆】を撃ち込んだ瞬間、目の前にいた【ラインバレル】が突然消えた！

鈴

「消えた!? 何処行つたの!」

永遠

「…見えない大砲とは驚いたのお…」

鈴

「あーいた!」

いつの間にか私の左後ろに移動していた

鈴

「アンタ…何したの!」

永遠

「【ラインバレル】の特殊能力【転送】を使ったんじやよ。」

鈴

「【転送】?…何よそれ!」

永遠

「簡単に言えばワープじゃよ。」

鈴

「なんだワープか……ワープウウウウーッ!!」

永遠

「そうじゃよ。こんな風にな……」

そう言つて永遠は今度は私の目の前に一瞬で現れると、刀を私の首元に当てた

鈴

「!?……いきなり……現れた……ほ、本当にワープしたの!？」

永遠

「そうじゃ。」

鈴

「……無茶苦茶な能力ね!……これじゃあ、間合いの意味が無いじゃない!」

永遠

「確かにそうじゃな。まあこれが「ラインバレル」の能力の一つじゃよ。」

鈴

「……一つつて……まだあるの?」

永遠

「もう一つある。…鈴、避けんからワシに斬りかかって来い。」

鈴

「え？…うん分かった…ハッ！」

私は言われた通り斬りかかった…永遠は本当に避けず、「ラインバレル」の装甲には傷が出来ていた

鈴

「…こんな事して何を…」

永遠

「傷を見ておれ。」

鈴

「は？…………なっ!？」

今私がつけた傷がアツと言う間に直っていった

鈴

「…傷が…一瞬で直った!?!…何よコレ!?!…I Sには自己修復能力があるけど…幾らなんでも早すぎる!?!」

永遠

「これが『ラインバレル』のもう一つ的能力。自己修復を超えた自己再生能力。コイツの

再生速度は通常のISの数十倍から数百倍でな。どれだけバラバラにされようと半日もあれば元通りになるんじゃないよ。」

鈴

「再生!?! しかも数百倍の速さって…」

永遠

「ついでに、SEも自動で回復し続けるオマケつきじゃ。」

鈴

「ハアアアーツ!! 何よそれ! 化け物じゃない! じゃあどうやってアンタを倒すのよ!!」

永遠

「簡単じゃ。【ラインバレル】のSEの回復速度を上回る連続攻撃をすればいいんじゃない。後は織斑の【零落白夜】じゃな。まあこれも何発も当てんといかんが、ワシがあやつのは攻撃を何度も受けると思うか?」

鈴

「思わないわね。アンタの実力は今までの打ち合いで少しは分かった。私じゃ勝てないわ。」

永遠

「さよか。…さて続きを始めるとするかの。さつきはお主の砲撃に驚いて使ってしもう

「ホントだね。」

本音

「あの機体はメンテとかいらないますか？」

東

「うん、いらないうたよこれが。何しろ分子レベルで修復しちゃうからね。」

本音

「ほえ〜！ 凄いな〜！」

簪

「…本当に凄いな！」

…でも、何で永遠は「ラインバレル」を東さんに預けてるんだらう？

…東さんは「ラインバレル」で何をしてるんだらう？

…そして、永遠は他の2機も含めて何処でこんな機体を手に入れたんだらう？

…永遠は…一体何者なんだらう？

…そんな考えが私の中で生まれて来た

〈簪 Side out〉

〈鈴 Side〉

私は永遠との模擬戦を繰り返していた

【ラインバレル】は能力も凄いいけど性能も私の【甲龍】を遥かに上回っている
そして、これだけの機体を使いこなすには相当な技術が必要な筈、それを永遠は完全
に使いこなしている

恐らく生身でも同じ機体を使っても私は勝てないわね…

…一体コイツは何者なの？

鈴

「ゼエゼエ……………」

永遠

「…ふむ、日も落ちてきたようじゃし、今日はここまでにするかの？」

鈴

「…え？…あ！ホントだ！…そうね、今日はここまでにしましょう。」

時間は既に夕方になっていた…昼からずっとやってたから時間なんて分からなかつたわね

永遠

「…どうじゃ、訓練にはなったかの？」

鈴

「うん♪実戦に勝るものは無いっていうし、いい経験になったわ♪」

永遠

「それは良かった。」

鈴

「ハア~~~~疲れた〜…」

セシリア

「お疲れ様ですわ♪…どうぞ。」

鈴

「あ！ありがとう♪喉カラカラよ…」

セシリアから渡された水を飲んで一息ついていた…

東さん達は先に家に帰っていた

永遠

「さて、ワシは畑を見て来るかの…セシリアと鈴は家に帰ってゆっくり休みなさい。」

鈴

「今から！アンタだつて疲れてるんじゃない…」

永遠

「カカカツ！この程度で根を上げる程やわでは無いわい！」

鈴

「どういふ体力してるのよ…」

セシリア

「…永遠さん…わたくしもご一緒していいですか？お手伝いしたいのですが？」

永遠

「それはありがたいのお！その方が早く済むじやろうし、頼んでもいいかの？」

セシリア

「はい♪」

鈴

「じゃあ私は先に戻ってるわよ。東さん達にも伝えとくから。」

永遠

「頼むぞい。」

セシリア

「お願いしますわ。」

二人に頼まれて私は家に戻った

ただ、戻った私からセシリアが永遠に着いて行つたと聞いた簪と本音が不機嫌になつてしまつた

私も東さんとクロエも苦笑いしか出来なかつた
　　＼ 鈴 S i d e o u t ＼

第054話：簪のお願い

〔簪 Side〕

あれからアツと言う間に時間が過ぎ、月曜の朝になった

土日はとても有意義な時間を過ごすことが出来た

今は永遠も一緒に朝ご飯を食べてる

簪

「…永遠…何時頃ココを出るの？」

永遠

「ん？…片道1時間かかるから、7時半には出とるんじやが…お主らは向こうに着いたら準備をせんといかんじやろうから少し早めに出るかの。」

セシリア

「そうですね…制服に着替えないといけませんし…」

本音

「そうだね…」

鈴

「つてそれなら急いで食べないと！遅刻しちゃうわよ！」

簪

「う、うん！」

私達は急いでご飯を食べ終わると、帰る準備を済ませた

永遠

「全員忘れ物は無いな？」

セシリア&簪&本音&鈴

「は〜い♪」

束

「かんちゃん♪これが、束さんがチェックしたデータだよ。これを見ながらやるといい

よ♪」

簪

「何から何までありがとうございます！必ず最高の機体を完成させてみせます!!」

束

「うん♪楽しみにしてるよ♪完成したら一度束さんにも見せてね♪」

簪

「はい♪」

そして私達は学園に飛び立っていった

本音は来る時と同じで永遠に抱き上げられたまま移動していた
それを見て私とセシリアは一気に不機嫌になった

本音

「エへへ〜♪」／／／

セシリア&簪

「ム〜〜〜!」

その後、無事に遅刻する事無く学園に到着できた

〜簪 Side out〜

〜永遠 Side〜

セシリア

「…簪さん…大丈夫でしょうか？」

放課後になりワシとセシリアは簪が気になったから整備室に向かっつつた

永遠

「…本音もおるし…大丈夫だとは思うんじゃないが…」

セシリア

「…ですが…」

永遠

「うむ…今迄散々断つてきとるからなあ…いきなり手伝つてくれと言われて整備課の者達がどう思うかじゃよなあ…」

セシリア

「…そうですね…」

そんな話をしとるうちに整備室に着いた…

簪

「お願いします!!私のI Sを造るのに協力してください!!」

中では簪が整備課の生徒達に専用機制作に手を貸して欲しいと頼んでおるところじゃった

ワシ等はとりあえず物陰から見ることにした

く永遠 Side outく

く簪 Sideく

簪

「身勝手なのは分かってます!!ですが、どうか力を貸してください!!お願いします!!」

本音

「私からもお願いします！」

本音も一緒に頭を下げて頼んでくれた

しばらくして今まで黙っていた整備課の先輩が口を開いた

先輩1

「…一人とも顔を上げて。」

先輩に言われて私達は顔を上げた：

それを確認すると先輩は優しく微笑みながら言った

先輩1

「…やっと私達を頼ってくれたわね。」

簪

「え？」

先輩1

「更識さんが一人で造ってる理由は何となくだけど分かっていたわ。だから、必要以上に手を出さない様にしていたの。」

先輩2

「でもね、もし貴方が協力を頼んで来たらその時は皆で力を貸そうって決めてたのよ。」

簪

「…皆…」

本音

「かんちゃん良かったね♪」

簪

「うん♪」

♪ 簪 Side out ♪

♪ 永遠 Side ♪

セシリア

「良かったですわね♪」

永遠

「ああ！」

千冬

「こっちは何とかなったようだな。」

セシリア

「織斑先生！」

織斑先生がいつの間にかワシ等の後ろに来ておった

永遠

「……………簪の事…以前から知っておったのか？」

千冬

「ああ、一夏の【白式】が関係しているからな…話だけは聞いていた。…政府の命令とはいえ倉持の連中には私も腹が立っていたんだ。まさか、全員が更識の機体を放り出すとは思ってもみなかった。」

やはりそうか…あの時、簪は機体を造るヒントを貰いに行くとは言ったが…未完成の理由は言うところなんからな

永遠

「じゃからワシの家に行く事を許可したんじゃないやな？」

千冬

「そうだ…それで束は何と？」

永遠

「【打鉄二式】のデータを洗い直して直す所をピックアップしたそうじゃ。後、この二日の間は束さんからISについて直々に指導されとったよ。」

千冬

「あの束がそこまでするとはな…何か理由があるのか？」

永遠

「うむ…【白式】は確かに倉持が開発した機体じゃが、実際に完成させたのは束さんなんじゃよ。」

千冬

「何!？」

永遠

「それを倉持に送り返したらああなったらしい。じゃから今回の事はそのお詫びと言うとったよ。」

セシリア

「…束さんも政府と倉持の人達があのような行動をとるとは思わなかったそうです。」

千冬

「…そうだったのか…なら束を責める事は出来んな…」

永遠

「そうじゃな…「あつ!ひののん!」ムッ!」

織斑先生との話に夢中になっていたせいかな本音に見つかってしもうた

く 永遠 Side out く

く簪 Side く

簪

「永遠！セシリア！それに織斑先生まで!？」

本音が隠れていた永遠を見つけたと思ったらセシリアと織斑先生も出て来た

永遠

「…スマン…気になって見に来たんじゃが…」

セシリア

「…入っていいのか微妙な雰囲気でしたので…」

先輩1

「アハハッ…確かにそうだね♪」

先輩2

「織斑先生は？」

千冬

「ん？…私はこいつ等が覗いていたから声をかけたただだ。…それに、私も更識の機体の事は気になっていたのでからな。」

簪

「え？…もしかして…」

永遠

「…全部知つとるらしい…じゃから外泊許可を出したそうじゃよ。」

本音

「そうだったんだ〜！」

先輩1

「…外泊って？」

簪

「はい…実は……………」

私は整備課の皆に土日間の事を話した…もちろん、束博士の事は言わなかったけど

…

先輩2

「なるほど…それなら、まずはその手直しが必要なデータを確認しようか。それから、それ
れぞれが得意な分野に分かれて作業を始めましょう。」

簪

「お願いします！」

セシリア

「わたくしもお手伝いしますわ♪「ブルー・ティアーズ」のデータも使ってください。」

永遠

「ワシも出来る事があれば手伝うぞ。…と言ってもそんなに長くは手伝えんのじゃが

…」

簪

「二人とも…ありがた「一夏の馬鹿あああああーっ!!!」な、何っ!」

永遠

「今の声は…鈴か!」

千冬

「織斑の奴…また何かやらかしたな!」

セシリア

「三日前に永遠さんにお説教されたばかりですのに…」

千冬

「何!? どういう事だ!」

永遠

「…あの後、ワシがセシリア達を待つとつたらあの馬鹿が来おってな…全く反省しとらんから軽く説教したんじやよ。その時、鈴との約束を思い出せと言うといたんじやが

…

千冬

「…さては変な方向に思い出したな…あの馬鹿は…」

セシリア

「…どうします?」

永遠

「放っておくわけにもいかんじやろ。…簪、ワシは鈴の様子を見てくる。スマンが今日は手伝えそうにない。」

簪

「分かった!」

セシリア

「わたくしも行きますわ!」

千冬

「私も行こう。理由によつてはあの馬鹿を成敗せねばならん!」

そう言つて永遠たち3人は鈴を探しに行つた

本当は私も行きたかつたけど、機体を完成させないといけないから我慢した

く簪 Side outく

第055話：織斑一夏…黄昏に死す（笑）

♪鈴 Side♪

鈴

「ぐすっ…ひっく…」

私は蹲りながら泣いていた…

鈴

「…馬鹿…一夏の大馬鹿…何で…何で分かんないのよ…」

一夏は私の約束を思い出した…それは嬉しかった…

でも、アイツはその意味が全く分かって無かった…

私はもうどうすればいいのかわからなくなっていた…

永遠

「鈴！」

鈴

「…永遠…」

私が泣いていると永遠とセシリア、千冬さんがやって来た

鈴

「…何でココに…」

セシリア

「鈴さんの声が聞こえたからですわ。何かあったと思って探しに来たんです。」

鈴

「…私の声…聞こえたの…」

千冬

「あんな大声を出せば誰だって気付く。」

鈴

「…そっか…」

永遠

「で、何があったんじゃ？また織斑じゃろ？」

鈴

「…うん…アイツ…思い出したの…だから告白しようとしたら…アイツ…言葉通りの意味で受け取って…私に…プロポーズみたいって…私がそんな事言う筈無いって…」

永遠

「何じゃと!!」

セシリア

「最っ低ですわね!!」

千冬

「い〜ち〜かあぁあぁーっ!!」

鈴

「…うっ…ううっ…」

セシリア

「…鈴さん…」

鈴

「!?…セ、セシリア?」

セシリアは私を優しく抱きしめてくれた

セシリア

「…鈴さん…今迄良く頑張りましたね…もう我慢しないでいいんですよ…」

千冬

「…そっだぞ…泣きたかったら思いっきり泣けばいい…」

永遠

「…ココにはワシ等しかおらん…気兼ねせず泣いていいんじやよ…」

鈴

「うっ……うううっ……うわああああああああ……うっ!!!」

私は永遠達の優しさで泣いた……夏への悔しさで泣いた……セシリアは泣き続ける私をあやす様に優しく撫でてくれていた

鈴

「うええええええええええ……ん!!!」

永遠

(織斑一夏……殺す!!)

セシリア

(鈴さんを泣かせた罪……思い知らせて差し上げますわ!!)

千冬

(弟とは言え容赦はせん……地獄に叩き落としてやる!!)

私が泣き止むまで3人はずっと傍に居続けてくれた

この3人が何を考えているのかも知らずに……

暫くして泣き止んだ私に永遠達は聞いて来た

永遠

「……鈴……お主はこれからどうしたいんじや?」

鈴

「…私は……………一夏を叩きのめしたい！それに…アイツは私以外にも沢山の女の子達を泣かせてきた！その子達の方もアイツを殴り飛ばしたい!!」

永遠

「どういふ事じゃ?」

私は永遠とセシリアに小中学校時代の一夏に無自覚にフラれた女の子達の事を話した

鈴

「……………こういう訳よ。」

永遠

「…織斑先生…鈴の言つとる事は本当か?」

永遠は私が言った事が信じられないのか、千冬さんに確認した…

千冬

「本当だ…アイツの鈍さのせいでどれだけ多くの子達が泣いて来た事か…」

セシリア

「本当に最低な人ですわね!!」

千冬

「…私も恋愛は個人の自由という事で今迄は黙認してきたが…いい加減止めなければならんな…」

永遠

「そうじゃな…これ以上あの馬鹿の被害者を出す訳にはいかん！鈴には悪いが、泣くのは鈴で最後にせねばならん！」

セシリア

「永遠さんの言う通りです！…それでどうしますか？」

永遠

「…まずは協力者を増やす！」

千冬

「協力者だと？一体誰を……まさか!？」

永遠

「そのまさかじゃ！」

千冬

「しかし、いいのか？」

永遠

「構わん！…それにそろそろ…」 P r r r r 「来たか…」

永遠が電話をスピーカーに変えて出ると…

永遠

「はい！」

東

『話は聞いてたよ！東さんもリーちゃんに協力するよ！』

鈴

「た、東さん!?!」

千冬

「相変わらずの地獄耳だな。だが、お前が手を貸してくれるのはありがたい！」

東

『フフン♪任せてよ！東さんもクーちゃんもさすがに腹が立ったからね！それでとーくん、どうするの?』

永遠

「まずは鈴を徹底的に鍛え上げる！そっちで鈴の訓練用の設備を用意する事は？」

東

『出来るよ♪準備に1日ほどかかるけど。』

永遠

「なら頼みます！次に織斑先生に二つ頼みがある！」

千冬

「聞こう！」

永遠

「二つは鈴を対抗戦まで学園を休ませて欲しい事、二つ目は対抗戦の初戦を鈴とあの馬鹿で組んで欲しい事、この二つじゃ！」

千冬

「フム…どちらも難しいが何とかしよう！まずは学園長に掛け合つて鈴の長期外泊許可を貰うとするか…組み合わせの方は後で何とでもなる…だが、何故初戦なんだ？」

永遠

「鈴はともかく、あの馬鹿が鈴とぶつかるまで勝ち進めるとはワシには思えん！それなら初戦でぶつけた方が確実じゃ！」

千冬

「…確かにそうだな…分かった…そつちもやつておこう！」

鈴

「いいんですか!?!」

千冬

「任せておけ！東、そっちの準備に1日かかると言っていたな。明日のこの時間までには間に合うか？」

東

『大丈夫だよ♪』

千冬

「頼むぞ！鈴、お前は数日泊まれる為の準備を明日までにしておけ！向こうに着いたら訓練の事だけ考えておけばいい！こっちは私や火ノ兄、オルコットで対処しておく！」

鈴

「は、はい！」

東

『それじゃあ、東さんは今から準備に取り掛かるよ！リーちゃん明日来るの待ってるよ！』

鈴

「はい！お願いします！」

永遠が電話を切るとセシリアが思い出したように聞いてきた

セシリア

「そう言えば永遠さん…簪さんと本音さんには伝えないんですか？」

永遠

「簪達には伝えん。事情を話せば手を貸してくれるじやろうが、簪には専用機の完成に集中して欲しいからの！」

セシリア

「そうですね。」

千冬

「確かに更識達にはそっちの方が大事だからな。」

鈴

「うん！私の我侭に簪達まで巻き込む事は出来ないわよ。」

永遠

「その事じゃが…鈴よ、ワシは簪の機体開発の手伝いもするから向こうでお主との訓練は余り出来んかも知れん。構わんかの？」

鈴

「それでいいわよ！簪の力になってあげて！」

永遠

「スマンな…と言っても帰りがいつもより少し遅くなるだけじゃから軽い模擬戦くらいなら出来る筈じゃ。」

鈴

「そこまでしてくれなくていいわよ。アンタには畑仕事とかもあるんだし。何なら私を手伝ってもいいよ。」

永遠

「それはいかん！お主は訓練の事だけ考えておればいいんじゃない！」

鈴

「う、うん…分かった。」

千冬

「学園長には何とか許可を貰っておくから、お前は今から準備だけでもしておけ。」

鈴

「はいー！」

私は準備の為にすぐに自分の部屋に戻って行った

く鈴 Side outく

く千冬 Sideく

千冬

「さて、私は学園長の所に行ってくるかな。」

永遠

「スマンが織斑先生…実は後一つ頼みが…鈴の前では言えんかったんじやが…」

千冬

「ん？何だ？」

永遠

「織斑をアリーナに呼んで欲しい。説教を兼ねてボコる！」

確かに鈴の前では言えないな…

千冬

「…そうだな…鈴との試合の前に少し痛い目にあつて貰うか…」

セシリア

「その方がいいですわね！自分が何をしたのか少しは分からせないといけませんわ！」

今の内に私達の怒りを一夏に叩きつけてやるか…

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

一夏

「……………何で鈴の奴怒ったんだろ？」

俺は言われた通り鈴との約束を思い出しただけなのに…何で怒鳴られないといけないんだ？

一夏

「…何か変な事言ったかな？」

あれから言葉には気を付けてるつもりなんだけど…

一夏

「…ん？…メール？千冬姉か…えつと…『一夏…ISスーツに着替えて第2アリーナに
来い。火ノ兄が模擬戦をしてやるそうさ。』か…丁度いいや。火ノ兄に聞いてみるか。」

この後、俺は自分の身に何が起きるのかも知らずに呑気にそんな事を考えていた…

く一夏 Side out

く千冬 Side

私達は第2アリーナで一夏が来るのを待っている

火ノ兄はすでに【戦国龍】を展開してアリーナの中央にいる

暫くして着替えた一夏がピットにやって来た

千冬

「……………来たか…」

一夏

「待たせたかな？」

千冬

「…火ノ兄がアリーナで待っている。とっとと逝ってこい！」

一夏

「千冬姉？」

呑気に話しかけて来るな…コイツ自分が何をしたのかやはり分かって無いな！

火ノ兄もアリーナからこつちを睨んでいるしな

一夏はそんな事にも気づかず【白式】を展開して飛んで行った

永遠

「……………」

一夏

「丁度よかった！まだ学園にいたんだな。話を聞いてほしいんだ。」

永遠

「……………」

一夏

「…オイ！聞いているのか！」

一夏

「ガハツゴハツグフツ…や、やめ…グエツゲハツンガツ…」

分かつてはいたが初めから一方的な展開だった…火ノ兄の拳と蹴りを一夏は全て喰らい続けていた

永遠

「……………」

一夏

「…な、何で…こんな事…俺が…何したってんだ…よ…」

永遠

「…分からののか!!…貴様、また鈴を泣かせたな!!言葉に気を付けろと何度言えばわかるんじゃ!!」

一夏

「うっ!!…そ、それは…で、でも俺はちゃんと約束を…」

永遠

「黙れ!…貴様、大切な人を守るとかぬかしておいて、貴様がやった事は何じゃ!!」
火ノ兄は一夏の言葉を遮ると腰の刀を抜いて構えた

一夏

「な、何言ってるんだよ…」

コイツは本当に分かって無いのか…

永遠

「貴様の様な無自覚に人の心を傷つける奴の言う事なんぞ聞く耳持たん！何を言っても言い訳にしか聞こえんわ!!」

一夏

「そ、そんな！無自覚ってなんだよ！俺が誰を傷付けたってんだよ！」

永遠

「…貴様と言う奴は…ここまで言っても分からんのかああああーっ!!」

一夏

「ひっ…うっ…うわあああーっ!!」

一夏は叫びながら火ノ兄に斬りかかった…

火ノ兄の気迫に押されてやけくそになったか…

永遠

「【龍巻閃・山嵐】!!」

火ノ兄は一夏の剣を回転しながら避けるとそのまま回転し続け、まるで竜巻の様に一夏と周囲を巻き込みながら切り裂いていった

一夏

「ぐああああああああー……っ!!」

上空に打ち上げられた一夏の両足を掴むと火ノ兄は一夏の頭を下に向けるようになった

セシリア

「何をする気でしよう?」

千冬

「分からん!」

私達の疑問をよそに火ノ兄はさらに自分の両足を一夏のわきに入れ両腕を広げた状態にした

更に尻尾で体を締め上げて動けない状態にした

と言うかあの態勢は…

千冬

「…まさか!」

私の予想通り火ノ兄はそのまま地面に向かって一夏を頭から落としていった

千冬

「パイルドライバーか!!」

セシリア

「いい気味ですわ!」

ちなみにこの後、そのままにする訳にもいかないので一夏を掘り起こして、保健室に放り込んでおいた…後から保険医に聞いたら暫くの間、脈が無かつたらしい

この時の一夏の姿を偶々来ていた新聞部が写真に撮っていたらしく、後日、校内新聞に『織斑一夏の八〇墓村(笑)』と言う見出しで掲載された

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

一夏

『…あれ?ココ何処だ?』

目を覚ました俺がいたのはどこかの河原みたいな場所だった

?

『おおくくくい!一夏く…』

一夏

『ん?…:…:じ、じいちゃん!ばあちゃん!』

俺を呼ぶ声があったからそつちを見ると、川を挟んだ向こう岸に昔死んだじいちゃんと

ばあちゃんが手を振っていた

向こう岸はこつちと違って綺麗な花畑が広がっていた

一夏

『…じいちゃん…ばあちゃん…会いたかったよ～～～！』

俺は嬉しさのあまり川に飛び込もうとしたら…

じいちゃん

『一夏～まだこつちに來るんじゃないぞ～…』

一夏

『何だよ！折角会えたのに！』

ばあちゃん

『ココはまだお前が來るところじゃないんだよ…さ、早くお帰り…』

一夏

『ま、待ってくれよ！もっと話したい事が沢山あるんだよ！じいちゃん！ばあちゃん！』

ばあちゃん

『一夏…アンタのその鈍感な性格を早く治すんだよ…』

ばあちゃんのその言葉を最後に、俺は再び意識を失った…

～一夏 Side out～

第056話：完成！打鉄式

く永遠 Side

織斑はワシがパイルドライバーをかけた次の日には復活したそうじゃ

じゃが、織斑先生から聞いた話によると、目を覚ました時に昔死んだ祖父母に会った
 と言つて来たそうじゃ

織斑先生がソコはどんな場所かと聞いたら大きな川を挟んだ綺麗な花畑の対岸に
 いたらしい

どうやらあの馬鹿は三途の川に行つて来たようじゃ…まさか本当に死にかけるとは
 …

ついでに祖父母に出会つたと言う事以外は何を話したのかも、ワシが技をかけた前後
 の記憶も全て忘れたらしい

まあ、奴が記憶を無くそうが三途の川に行こうがどうでもいいんじゃが…

織斑先生は何とか理事長から許可を貰えたんじゃ…あの人には苦勞をかけてしま
 う
 たな

放課後になり、前日に言っていた通りワシは鈴を島で訓練させる為に連れて行く為、

待っておった

鈴

「永遠くくくっ!」

永遠

「ム!来たか!」

鈴

「お待ちせ!早く行こう!」

永遠

「そうじゃな。」

鈴

「…所でアンタ一夏に何かしたの?今日のアイツ、目に光が無かったんだけど?」

永遠

「大した事はしとらんぞ。…ただ織斑先生から聞いたんじやが…死んだ祖父母に会った
と言うとつたらしい。」

鈴

「え!?!」

永遠

「大方、三途の川にでも行って来たんじゃない。気にする事でもない。」

鈴

「…三途の川って…アンタそれ死にかけてたって事でしょ!!」

永遠

「心配せんでもあの馬鹿は生きとるじゃろ。一発殴れば元に戻るわい。と言うか織斑先生がさつき殴って元に戻しとったぞ。」

鈴

「殴って戻すって…そんな壊れかけのテレビじゃ無いのよ?」

永遠

「そうは言うが、実際直つとったぞ。随分単純な作りをした奴じゃな。」

鈴

「…ホントに治ったんだ…:…:…:ねえ、字が違わなかった?」

永遠

「違わんぞ。ほれいい加減行くぞ。」

鈴

「あ、うん。」

ワシと鈴はISを展開して火紋島に向かって飛んで行った

到着すると、訓練は明日から始めると言う事にして、束さんが用意してくれた訓練用の設備の確認をして今日は早めに休む事にしたんじゃ

次の日から鈴の訓練が始まった…主に束さんが用意した無人ISによる模擬戦をし
とる

ワシはいつも通りに学園に登校した…

〈永遠 Side out〉

〈簪 Side〉

私が整備課の皆に協力を頼んでから数日が立った…

あの日、鈴に何かあったのは分かっていたけど、永遠達は心配すると言うだけで詳しい事は教えてくれなかった

本人に聞こうにも次の日から学園を休んでいるせいで聞く事が出来なくなっていた
どうやら私には専用機を完成させる事に集中させたいようだった

できれば私も鈴に協力したかったけど、確かにこつちを優先しないといけないのは事実だから永遠達の配慮に甘える事にした

……それに、1時間程度でも永遠と一緒に作業が出来るのは嬉しいし…／／

先輩1

「火ノ兄君！そつちのケーブル持ってきて！」

永遠

「あいよー！」

先輩2

「誰か！このテーブル邪魔だから退けといて！」

永遠

「ワシがやっつくー！」

永遠は主に機材を運んだりする力仕事をしてけている

束さんがくれたデータのお陰で本音達と作業を分担して効率よく作業が進んでいた

先輩達も最初にこのデータを見た時は驚いていた…どんな小さく些細な問題点も調べ上げられていたからだ

お陰で先輩達も予定よりも早く完成させられそうだと言っていた

簪

「…永遠、帰らなくていいの？」

いつもならもう帰っている時間なのに今日はいつもより長く手伝ってくれていた

永遠

「今日は週末じゃからな。最後まで手伝うぞい。向こうにも連絡済みじゃよ。（それに

晩飯は鈴に頼んでおいたからの。」

簪

「…ありがとう…／＼／＼」

永遠

「うむ…：時に簪、このペースじゃと後どの位で完成しそうじゃ？」

簪

「あ…：うん、そうだね…：多分、来週の今頃には出来ると思うよ。」

永遠

「そうか…：完成したらワシと手合わせせんか？」

簪

「え…：いいの!？」

永遠

「うむ…：何なら調整の為の模擬戦もするが…：ワシが相手をするのが嫌なら諦めるが

…：」

簪

「そんな事無い! 永遠に相手して貰えるなんて凄く嬉しい!!」

永遠

「そ、そうか…それは良かった。」
簪

「うん…／＼／＼」

セシリア&本音

「ム〜〜〜!!」

セシリアと本音が睨んで来たけど見て見ぬフリをした

整備課

「あははは…」

他の人達からは乾いた笑い声が聞こえた…

………

………

…

それからさらに一週間たった…金曜日の放課後…

簪

「…出来た…」

セシリア

「…完成しましたわね…」

本音

「うん♪」

永遠

「長いようで短い日々じゃったな…」

遂に私の専用機【打鉄式式】が完成した！

東さんから貰った見直しデータ…

セシリアの【ブルー・ティアーズ】の稼働データ…

永遠の【ドットプラスライザー】との模擬戦をしながらの調整…

そして、整備課の先輩達の協力…

そのお陰で、今日、やっと完成させることが出来た！

簪

「…皆…ありがとうございます…ございます…皆のお陰で…完成させる事が出来ました…」

私は涙ながらに皆にお礼を言った

先輩1

「気にしなくていいわよ♪私達もいい経験になったし♪」

先輩2

「専用機をいじれる機会なんてそうそう無いからね♪」

先輩達も笑顔で答えてくれた

黛

「完成祝いに記念撮影しよ！専用機を並べてき！」

いつの間にかいた黛先輩がカメラを構えながら提案してきた

永遠

「そうじゃな。なら簪の【打鉄式式】を中心にせんとな！」

セシリア

「そうですね♪」

簪

「うん♪」

私が【打鉄式式】を纏うと、皆が集まってくれた

永遠とセシリアは私の左右に【ドットブラスライザー】と【ブルー・ティアーズ】を

展開して並んでくれた

黛

「タイマーをセットしてっど！」

カシャッ

黛先輩も急いで並ぶと、カメラからシャッター音が聞こえた

黛

「……………うん♪いい写真が撮れたわ♪じゃあ現像出来たら焼き増しして配るからね♪」
全員

「は~~~~い♪」

∴写真、楽しみだな♪

く簪 Side out く

第057話：ドツキリと説教

（永遠 Side）

写真撮影も終わり、皆が解散し、整備室にはワシとセシリア、簪に本音の4人が残ったんじゃ

ワシ等だけになったから簪に今まで気になっていた事を聞く事にした

永遠

「…簪…聞きたい事があるんじゃが？」

簪

「何？」

永遠

「…お主の姉の事なんじゃが…本当にお主が言うように優秀なんか？ワシにはただの阿呆にしか思えんのじゃが…」

簪

「…へ？…どうしたの急に？」

永遠

「実の妹を無能呼ばわりして突き放しておきながら、その妹にストーカーなんぞしとるもんが優秀なのかと思ってるな？」

簪

「ス、ストーカー!？」

本音

「何の事〜？」

永遠

「……こういう……事じゃ!!」

ワシはそう言うのと床に落ちていたスパナを天井に投げつけた

ガンツ!

?

「キヤツ!」

すると天井から落ちて来たのは簪の姉、更識楯無じやつた…

簪

「…何してるの…」

楯無

「あ、あのね!…えつと…」

永遠

「これが優秀な姉か？」

セシリア

「わたくしにはただの変態ストーカーにしか見えませんが？」

本音

「ただのおマヌケさんだね〜♪」

楯無

「あ、あなた達…言いたい放題言っ…私はただ簪ちゃんか…」

永遠

「簪が何じゃ？」

楯無

「え、えつと…」

永遠

「簪が心配じゃから見守っていたとか言うつもりか？…無能と言っ…切り捨てておいて

…」

楯無

「ギクッ！」

永遠

「…なるほど…以前ワシとセシリアに向けられた視線が何か分かったわい。」

簪

「え？」

永遠

「アレは嫉妬じゃ。」

楯無

「ギクギクツ!!」

簪

「…嫉妬？」

永遠

「要するにじゃ！簪と仲良く食事をしておったワシ等に嫉妬しておったんじゃよ！この生徒会長は！それでワシとセシリアを睨んでたんじゃよ！」

楯無

「ギクギクギクツ!!」

セシリア

「なるほど嫉妬ですか。言われてみるとその様な感じでしたわね。」

楯無

「あ、あああ……」／＼／＼／＼／＼

永遠

「で！お主は結局何がしたいんじや？やつとる事と言つとる事が矛盾しとるぞ！」

楯無

「そ、それは……」

狼狽えまくつとるな……

永遠

「……簪……これがお主の姉の正体じやよ。」

簪

「………私……こんな人を目標にしてたの……自分が凄く情けなく感じるんだけど……」

楯無

「ま、待つて簪ちゃん！そんな呆れた目で見るのだけはやめて！そんな目で見られたら私死んじやう！」

永遠

「阿呆か！」

セシリア

「自業自得ですわ！」

本音

「後でお姉ちゃんに見せよう！」

楯無

「待って本音ちゃん！それもやめて！虚ちゃんに知られたら説教フルコースになるから！」

本音が携帯で動画を撮影しようとしたら会長に止められてしまったが…

永遠

「それはいい事を聞いた…本音、姉を呼べ！」

楯無

「今の聞いてた！私やめてって言ったのよ！」

永遠

「やめて欲しかったら簪をストーリーキングしとった訳を言え。ダメ無生徒会長。」

楯無

「今、ダメ無って言った！ダメ無って言ったよね！私は楯無よ！」

永遠

「いいからとつとつと言え！楯無ストーリー会長。」

楯無

「ストー会長つて何よ！」

永遠

「ストーカーの生徒会長、略してストー会長じゃ。」

楯無

「略さないでよ！て言うかい加減普通に呼んでよ！」

永遠

「呼んで欲しかったらはや言え。それとも本音の姉を呼ぶか？今なら姉繋がりで織斑先生も追加で呼んでもいいんじゃないぞ？」

楯無

「もつとやめてええええええええー！！！！」

永遠

「やめて欲しかったらさっさと訳を言え！」

楯無

「…はい…」

それからストー会長から簪に言った事理由を聞きだした

何でも簪とこのストー会長の家は日本政府直属の対暗部組織と呼ばれる裏の家業を

生業としとる家らしい

そしてこの会長はその家の17代目の当主らしく、【楯無】と言う名前は代々当主が名乗る名前との事じゃった

つまり本名は別にあるという事か…まあ今は別にいいか…

そして、当主となる時、妹の簪を裏の世界には関わらせないと決めたらしく…その為、簪に『無能でいろ』と言ったらしい

今までの話を聞いてワシには一つの結論が出た…それは…

永遠

「…要するにお主が重度のシスコンだと言う事がよく分かった。更シスコン生徒会長。」

楯無

「更シスコンって何よ！私は真面目な話をしたのよ！いい加減普通に名前を呼んでよ！！」

永遠

「更シスコンダメ無ストー会長。」

楯無

「全部繋げて呼ぶなああああーっ！」

〈永遠 Side out〉

〈楯無 Side〉

私の事を未だにちゃんと呼ぼうとしない彼にムキになっていると、今まで黙って話を聞いていた簪ちゃんが…

簪

「……………何で…」

楯無

「…簪ちゃん？」

簪

「…何でそんな事勝手に決めるの？何で私の未来を勝手に決めるの？」

楯無

「ま、待つて簪ちゃん！違うのよ…」

簪

「何が違うの！じゃあ私に家の事に関わらせないようにしたのは何でよ！」

楯無

「それは！……………簪ちゃんには闇の世界で生きて欲しくなかった…光の世界を生きて欲

しかつたのよ……」

簪

「…それが…それが勝手だつて言つてるのよ！私が何時そんな事を頼んだの！私の未来は私が決めるものなのに何でお姉ちゃんが決めるの！何の資格があつてそんな事するの！！」

楯無

「…か、簪ちゃん…私はただ…簪ちゃんの事を思つて…」

簪

「何が私の事を思つてよ！それならそうとハッキリ言つてくれればいいじゃない！あんな言い方して、私を縛り付けて、私を自分の手元に置いておきたいだけじゃない！私はお姉ちゃんの玩具じゃない！人形じゃない！！一人の人間よ！！」

楯無

「!？」

簪

「そんなに自由に生きて欲しいなら…私は家を出る！お姉ちゃんとも家族の縁を切る！！」

楯無

「え？」

今…何て言ったの？…縁を切る？…簪ちゃんが妹じゃなくなる？…ただの他人になる？

楯無

「…い、いやあああああーっ!!! やめて！それだけはやめて!!!」

簪

「…今更何言ってるの！自由に生きろと言ったのは貴方でしょ！だから望み通り、貴方と縁を切って一人で生きていくって言ってるのよ！」

楯無

「あ…ああ…で、でも…一人だなんて…」

簪

「…確かにいきなり一人で暮らすのは無理なのは分かってる！」

楯無

「な、ならやめよ！縁を切るなんてやめよ！」

簪

「…永遠…独り立ち出来るまで永遠の家においてくれない？」

楯無

「え!？」

永遠

「ん?…ワシの家？」

やめて! 答えないで! 頷かないで!

永遠

「…ん?…?…まあ元は一人暮らしじゃし…構わんど。部屋も余つとるし。」

楯無

「……っ!」

私はその瞬間、声にならない叫びをあげた

簪

「ありがとう…じゃあこれからお世話になるね。」

永遠

「構わんが何時頃からじゃ?」

簪

「この後、絶縁状書いて家に送るから2、3日してからかな?」

ぜ、絶縁状…絶縁……縁を…絶つ…

楯無

「……あ……ああ……あああああーっ!!!」

そんなー! やだやだやだ! いやだ!!!

楯無

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!」

簪

「……………」

楯無

「私が悪かったから! 私が間違ってたから! お願いだからやめてよおおおおおーっ!!!」

簪

「……………プツ♪」

楯無

「……え?」

永遠&セシリア&本音

「……………フフツ♪」

楯無

「……何?」

永遠&セシリア&簪&本音

「アハハハハハハハハハハッ♪」

楯無

「…え?…な、何?」

永遠

「見事に引つかかったのお♪」

楯無

「…引つかかった…?」

本音

「ドッキリ大成功〜〜♪」

楯無

「ド、ドッキリイイイイイイーッ!!!」

永遠

「そうじゃ。お主が覗いとるのは気付いとったからな。ドッキリ仕掛けてからかってやろうと思ったんじゃよ。」

楯無

「…何でそんな事…」

永遠

「お主に反省させる為じゃ！」

楯無

「反省……」

永遠

「先に言っておくが簪が言っていたことは縁を切ると言う所までは全て簪の本心じゃ！」

楯無

「!?」

永遠

「簪も言うとしたじゃろ。簪は人間じゃ！お主の人形では無い！いつかはお主や家から離れなければならんのじゃ！」

楯無

「あ!?!」

永遠

「じゃが！お主は遠回しに簪に自由に生きろと言っておいてその言葉で、簪の心を縛り、自由を奪い、手元に置こうとしおった！結局お主は簪の事なんぞ考えておらん！自分の

事しか考えておらんのじゃ!!」

楯無

「そ、そんな事…」

永遠

「なら何故『自由に生きろ』と言わなかった！遠回しに言うより簡単じゃろ！」

楯無

「それは…」

永遠

「ああ言えば簪がお主に対抗心を燃やして傍にいますかと思っただんじやろ！例えお主にそのつもりが無くとも無意識の内にそう思った筈じゃ！でなければあんな言い方普通はせんわい!!」

楯無

「あ…ああ…」

永遠

「どうなんじゃ！答えんかい!!」

楯無

「……………その…通り…です…」

…何も言い返せない…彼に言われて改めて気づかされた…私は…

永遠

「…何故ワシ等がドツキリを仕掛けたと思う？」

楯無

「…理由があるの？」

永遠

「簪がいなくなると思った時どう思った？」

楯無

「…凄く嫌だった…家族がいなくなると思うと凄く寂しかった…」

永遠

「それは簪が抱えておった思いと似た物じゃ！」

楯無

「え？」

永遠

「お主も知つとると思うが、簪は幼い頃から常に家の連中から姉のお主と比較されて生きて来た。」

楯無

「え!？」

永遠

「んっ?……気づいたらなかったのか!?……いいか! 簪は常にお主と比較され続けて家に居場所が無かったんじゃないぞ!! ワシは別にそいつらの事をどうこう言うつもりは無い! そいつらが勝手にやった事じゃからな!! じゃがな!! そいつらのせいで常に陰口を言われ辛い思いをしとつたんじゃぞ!!!」

楯無

「そ、そんな!？」

家の者達が簪ちゃんにそんな事を…

永遠

「更識楯無!! 何故お前が知らんのじゃ!! お前は簪の姉じゃろ!! 何故気付かんかった!! 簪の一番近くにいたのはお前じゃろうが!! 何故お前が簪の居場所になってやらんかった!!! たつた一人の妹を守ろうとせんかった!!!」

楯無

「あ……ああ……」

永遠

「簪はずつと溜め込んでおつたぞ! ワシとセシリアに会うまで弱音すら言う事が出来ず

に耐えてたんじゃぞ！簪をストーキングしておきながら肝心な所を何一つ見取らんかったんか！簪が泣いた事さえ知らなかったのか！！」

楯無

「な、泣いた!?!」

永遠

「そうじゃ！今まで我慢しとつたもんを全部吐き出す為に泣いたんじゃ!!本来ならワシ等では無くお前がすべきことじゃぞ!!」

楯無

「ううっ……」

永遠

「お前は自分にとつて都合の良い所だけ見て、それ以外は何一つ見ようとせんのか！お前にとつて簪はその程度の存在なのか!!それでよく汚れ仕事は自分がやるなどと言えたな!!今まで放つたらかしにしておいて当主になった途端に姉気取りか!!ふざけるな!!お前に簪の姉を名乗る資格なんぞ無い!!」

楯無

「……………」

……………言い返せない…何一つ…言い返す事が…出来ない…

簪

「…永遠…もういいよ…」

永遠

「簪…」

簪

「…ありがとう…永遠…私の為に怒ってくれて…でも…ココからは私がやらないといけない事だよ…だから…」

永遠

「…分かった…セシリア、本音…」

セシリア

「はい。」

本音

「…うん…」

…火ノ兄君はオルコットちゃんと本音ちゃんを連れて整備室を出て行ってしまった
残ったのは私と簪ちゃんの二人だけになった…

榎無 Side out

第058話：姉妹喧嘩の行く末

〽楯無 Side〽

簪

「……………」

楯無

「……………」

簪

「…お姉ちゃん…」

楯無

「!?」ビクッ

…簪ちゃんに呼ばれて体が過敏に反応した…

簪

「…永遠はもういないよ…何か言いたい事はある？」

楯無

「……………」

簪

「…何も言わないって事は永遠の言った事を全部認めるって事だよ？」

楯無

「…ううっ…」

簪

「…お姉ちゃん…これだけは答えて…お姉ちゃんにとって私って何なの？」

楯無

「…大切な…妹よ…」

簪

「…大切な…ね…なら今までの行動は何？」

楯無

「うっ!？」

簪

「…家にいてもお姉ちゃんは私の事を見ようとはしなかったよね…私が苦しんでる事に気付きもしなかったよ…当主になったらあんな分かりにくい言い方をして『自由に生きる』と言って突き放すし…この学園に入れば今度はストーリーカーをしてる…」

楯無

「ううっ…」

簪

「…本当に大切ならそんな事はしないよ？」

楯無

「……………」

簪

「…ねえ…何とか言つてよ？」

楯無

「……………」

簪

「…答えてよ!!更識刀奈!!!」

楯無

「!?…か、簪…」

簪

「貴方は何時だつてそうよ…他人の気持ちを分かってほしいで…自分勝手に好き放題やってばかり…自分に都合が悪くなれば耳を塞いで黙り込んで何も見ようとはしない…それが…それが更識刀奈つて言う人間よ!!それが貴方の本性よ!!!」

楯無

「あつ……ああつ……」

簪

「何が大切な妹よ！何が私を守りたかったよ！結局貴方は自分が大事なだけじゃない！私の事何かなんとも思っていない！貴方の傍に置いてある置物程度にしか思っていないのよ!!」

楯無

「ち、違う!?そんなこと思ってない!!」

簪

「なら今迄の貴方の行動は何なの！私はずっと一人だった……気の許せる相手何て本音くらしいし嫌いじゃなかった……実の姉の貴方から心配された事なんて一度も無かった!!貴方は私の悩みを聞こうとした事があるの!!私にそんな記憶は無い!!」

楯無

「!?」

……そうだ……私は……一度だって簪ちゃんにそんな事をした事が無かった……

簪

「……………私が永遠やセシリアという時……どんな気持ちだったと思う?」

楯無

「……………」

簪

「…凄く楽しかった……………二人といると…笑顔でいられた…」

楯無

「……………」

簪

「…本当は…お姉ちゃんとも…あんな風にしたかった…」

楯無

「…え？」

簪ちゃんの言葉に驚いて顔を上げるとその眼には大粒の涙を流していた

楯無

「…簪…ちゃん…」

簪

「…お姉ちゃんと普通に話して…笑い合って…喧嘩して…そんな当たり前の事がした
かった…」

楯無

「!?」

簪

「…でも…そんな事すら…してくれなかった…」

楯無

「…あー!」

その言葉に私は鈍器で殴られたような衝撃が走った

簪ちゃんと言ったのは何処にでもいる普通の姉妹の日常だったからだ

妹はそんな当たり前な事を望んでいた…なのに姉である私は…それに気付かず…傷つける事しかしてこなかった…

火ノ兄君の言う通り…こんな私に…姉を名乗る資格なんて…ある訳無いじゃない…

簪

「…永遠とセシリアは…私がお姉ちゃんにして欲しかった事を全部してくれた…本当に嬉しかった…楽しかった…」

楯無

「…あ…う…」

簪

「…一度だけでいいから…普通の姉妹として…接してほしかった…」

楯無

「簪ちゃん!!」

私は簪ちゃんを抱きしめていた

楯無

「…ごめんなさい……………貴方にそんな事を言わせて…私が…間違ってた…ごめん…なさい……………」

簪

「…お姉ちゃん…」

楯無

「…私は怖かった…簪ちゃんが私から離れていくのが…火ノ兄君の言う通りよ…私は簪ちゃんを手元に置いておきたかっただけ…」

簪

「……………」

楯無

「…全部…私の自己満足…簪ちゃんの事なんて何も考えてなかった…」

簪

「……………」

楯無

「……めんね……こんな……最低な姉で……」

簪

「……………」

楯無

「……簪ちゃん……改めて言うわ……自由に生きて……」

簪

「……………うん……」

楯無

「……それに……もう決めてるんでしょ……どうしたいか？」

簪

「!?」／／／

楯無

「火ノ兄君……好きなんでしょ？」

簪

「……………うん♪」／／／

楯無

「でもライバルは手強いわよ？オルコツトちゃん…火ノ兄君とは一番付き合いが長いし。」

簪

「そんな事は分かっている！でも、だからと言って身を引くつもりは無い！相手がセシリアでも本音でも負けるつもりは無い!!」

楯無

「そ、そう………え？……本音ちゃん？」

簪

「今この子は何て言ったの？……まさか本音ちゃんまで!？」

「そうだよ。本音も永遠が好きなんだけど……気付いてなかったの?」

楯無

「あの本音ちゃんよ!!気付く訳ないでしょ!!」

簪

「確かにそうだけど……普通は分かると思うけどな……お姉ちゃん……好きな人とかいないの?」

楯無

「な！ななな何言ってるの！…え、えつと…そ、そのくらいいるわよ…」

簪

「…いないんだね…」

楯無

「ギクツ!!そそそそんな事無いわよ！」

簪

「見栄を張ってないでお姉ちゃんも早く見つけた方がいいよ？」

楯無

「グヌヌツ！好きな人がいるからってこの余裕！まだ恋人にもなっていないのに！」

簪

「余裕だよ？だって永遠は私が貰うんだもん!!」

楯無

「簪ちゃん…いつの間にそんなに強くなったの…」

簪

「恋する女の子はアツと言う間に強くなるんだよ！」

楯無

「そ、そうなんだ…」

私は予想以上に心身共に強くなっていた妹に驚き、そう答えるしかなかった
簪

「お姉ちゃんも妹のストーカーなんかする暇があるなら彼氏の一人くらい見つけた方がいいよ?…行き遅れて言われても知らないからね?」

楯無

「うぎぎっ!」

簪ちゃんのその言葉が心にグサリと突き刺さった

く楯無 Side out

く永遠 Side

永遠

「……………そろそろ終わる頃か?」

本音

「何が?」

ワシ等は整備室から出ると近くに合った休憩室で二人の決着がつくのを待っておつた

永遠

「あの二人の姉妹喧嘩じゃよ。」

セシリア

「ですが大丈夫でしょうか？」

永遠

「何とも言えんな。…ワシ等に出来るのは待つ事だけじゃよ。」

セシリア

「…そうですね…」

本音

「…うん…」

？

「本音？」

本音

「あ!？」

ん？この人は…

〈永遠 Side out〉

〈簪 Side〉

お姉ちゃんとか何とか和解も出来たからとりあえず外に行った永遠の所に行く事にした

簪

「…どこにいるのかな？」

楯無

「…ねえ簪ちゃん？」

簪

「何？」

楯無

「火ノ兄君…私が貰っても「お姉ちゃん!!!」ハイッ!？」

簪

「冗談でも言っていない事と悪い事があるよ!」

行き遅れになりたくないからって永遠に手を出すのは許さない!!

楯無

「ごめんなさい…」

簪

「永遠は駄目!…織斑一夏にして…」

楯無

「…いや、彼はちよつと…幾ら私でもホモは…」

簪

「本人は違うって言ってるよ。顔はいいから丁度いいんじゃないの？」

楯無

「あ、そう…なら悪くないかも…：…ねえ簪ちゃん…一つ聞いていい？」

簪

「ん？」

楯無

「…織斑君の事どう思ってるの？」

簪

「何とも思っていないよ。永遠との試合を見てからどうでもよくなったから。」

楯無

「…そう…（本当に興味が無いみたいね…）」

簪

「いた！」

休憩室に3人が揃っていた…アレ？一緒にいるのは…

簪

「虚さん？」

楯無

「う、虚ちゃん！何でココにいるの!？」

虚

「貴方を探していたんですよ。その途中で本音達と会って事情を聞いたので、此方で待たせて貰っていました。」

永遠

「虚さんから聞いたぞい。お主、生徒会の仕事をサボって簪をストーキングしとったらしいな。」

楯無

「ギクツ!!」

永遠

「さっきはああ言ったが結局は説教される事になるの。」

虚

「…それでお嬢様？簪様とはもういいのですか？」

楯無

「うん…もう大丈夫よ！…ごめんね…虚ちゃんにも本音ちゃんにも迷惑をかけて…」

虚

「はあっ…やつと分かりましたか…」

楯無

「…うん…私がどれだけ自分勝手な人間か分かった…」

虚

「でしたら私が言う事はありません。」

楯無

「ホント♪」

お姉ちゃん…虚さんはそんなに甘い人じゃないのは分かってるでしょ…まあいっか

…

虚

「ですが！仕事をサボっていた事は別です！今からタツプリとお説教をしますので覚悟してください！」

楯無

「そんなく〜く〜…」

虚

「その後は溜まった仕事を片付けてください！終わるまで寝る事は出来ませんよ！」
楯無

「ガーーーン!!」

永遠&セシリア&簪&本音

「アハハハハハハッ♪」

楯無

「笑い事じゃないわよ！」

永遠

「ワシ等にとっては笑い事じゃよ！更シスコンダメ無ストー会長。」

楯無

「その呼び方はやめてーーーーっ!!」

虚

「…更シスコンダメ無ストー会長ですか…今のお嬢様にピッタリの呼び方じゃないですか。」

楯無

「虚ちゃんまで！」

虚

「何を今更…貴方は簪お嬢様に対してストーカーをしていた重度のシスコンでは無いで
すか。それに今迄のお嬢様を見ていればダメ人間にしか見えませんが？」

楯無

「そこまで言わなくても…」

虚

「事実です！しかし長い呼び方ですね…」

永遠

「ふむ…なら、まるでダメなお嬢様…略してマダオでどうじゃ？」

虚

「いいですね。ではこれからマダオ嬢様と呼びましょう！」

楯無

「良くないわよ！マダオ嬢様って何よ！」

虚

「貴方の事ですが何か？」

楯無

「そんな呼び方しないでーっっ！！」

虚

「呼ばれたくなければ仕事をして下さい！マダオ嬢様！」

楯無

「する！するから普通に呼んで！お願いよ……」

虚

「全部終われば普通に呼びますよマダオ嬢様。さあ行きますよ！まずはお説教からです

!!」

楯無

「い……や……!!簪ちゃん!!た……す……け……て……!!」

簪

「自業自得……」

それしか言いようがない……

楯無

「薄情者……っ!!」

お姉ちゃんはそのまま虚さんに引きずられて行った……

セシリア

「……あの人大丈夫でしょうか？」

簪

「大丈夫…お姉ちゃんはいつも虚さんからお説教を受けてるから…」

本音

「だから放つといてもいいよ♪」

永遠

「何気に酷いのお主等…」

セシリア

「そうですわね…」

永遠

「まあいいか……向こうはもう置いてよかろう。簪…お主はもういいんか？」

簪

「うん♪もう大丈夫！お姉ちゃんとも仲直り出来た！」

セシリア

「それは良かったですわね♪」

本音

「うん♪」

永遠

「これで簪の問題は終わったのお…後は…」

セシリア

「…鈴さん…ですね…」

永遠

「うむ…」

鈴?…あ!…そう言えば…

簪

「…ねえ、鈴に何かあったの?あの日から学校も休んでるし、鈴に何かあったのか教えて?」

永遠

「……………」

セシリア

「…分かりましたわ。」

永遠

「いいのかセシリア?」

セシリア

「…はい…機体も無事完成しましたし対抗戦は休日を含んで三日後です。お二人にはそろそろ話してもいいと思いますわ。」

永遠

「そうじゃな。…簪、本音、今から話す事は誰にも言うてはならんぞ！他の連中に知られると面倒じゃからな！」

簪&本音

「うん！」

永遠

「よし！実はな、あの日………」

そして私と本音はあの日に何があつたのかを聞いた……

ハッキリ言つて腹が立った……

鈴の覚悟を踏み躪つたあの男の事が……

しかも鈴以外にも大勢の女の子達を無自覚に泣かせてきたと聞いた時は自分の耳を

疑つた……

それを聞いた永遠達は、今度の対抗戦で織斑一夏を鈴が叩きのめす為に動いていたら

しい……

そして今、鈴は永遠の島で東さんの用意した訓練施設で特訓をしているらしい……

こんな話を聞いたら……

簪

「私も鈴の応援をする!!」

本音

「私も!リンリンが可哀想だよ!」

セシリア

「そう言つて頂けると思つてましたわ!」

永遠

「繰り返し言うが誰にも言うでないぞ!鈴だけ休んで特訓しとるなんて知れたら大事じゃ!他に知つとるのは織斑先生だけじゃからな。」

簪

「分かつた!」

本音

「は〜い♪」

まさか鈴がそんな事をしていたなんて…私も何か協力できないかな………そうだ!

簪

「永遠!…これから織斑先生に許可を貰つて来るから火紋島に行つていいかな?」

永遠

「は?」

簪

「私も鈴の為に何かしたいの！…だから、私が鈴の訓練相手になる！」

セシリア

「それはいい考えですわね♪わたくしも協力しますわ！」

本音

「私も行く♪」

簪

「…それに完成した【打鉄二式】を東博士に見せる約束をしてたから。早く見て貰いたい。」

永遠

「…分かった。」

それから私達は織斑先生に許可を貰うと、火紋島に向かった

ちなみに私の機体が完成したから、本音は【ドットブラスライザー】で向かってる

【ドットブラスライザー】を受け取った時の本音は凄く落ち込んでいた

く簪 Side outく

第059話：クラス代表対抗戦【甲龍VS白式】

（簪 Side）

あれから私達は火紋島に到着すると永遠とセシリアは鈴の所に、私と本音は東さんの所に向かった

簪

「東博士！」

東

「おや？かんちゃんにのんちゃん！よく来たね♪」

簪

「はい！お久しぶりです！今日【打鉄二式】が完成したので、博士に見て貰いたくて…それと鈴の模擬戦の相手に来ました。」

東

「そっか♪完成したんだね♪」

簪

「はい♪」

私は早速【打鉄一式】を展開して博士に見て貰った

東

「…フム………かんちゃん達頑張ったね！東さんの想像以上の出来だよ♪」

簪

「ホ、ホントですか！」

東

「こんな事で嘘なんか言わないよ♪のんちゃんもご苦労様♪」

本音

「はい♪」

東

「けど、リーちゃんの手伝いに来たって事はとーくん達から聞いたんだね？」

簪

「はい！…同じ女として…鈴があまりにも可哀想です！私も協力しに来ました！」

本音

「私もです！」

東

「フフツ♪リーちゃんも喜ぶよ♪」

簪

「はい♪」

この後私と本音は鈴が訓練していると云う場所に向かった

♪ 簪 Side out ♪

♪ 鈴 Side ♪

鈴

「…フ~~~~ッ!…もうすぐね…」

私は数日後に迫った対抗戦に思いをはせていた…

永遠

「鈴!」

鈴

「永遠…今日は随分遅かつ…セシリア!」

セシリア

「お久しぶりですね♪鈴さん♪」

鈴

「ホントにね♪…でもどうしてココに?」

セシリア

「対抗戦は休み明けですから、鈴さんの最後の調整として模擬戦の相手に来ましたの。」

鈴

「それはありがたいわね！助かるわ！」

セシリア

「後、簪さんと本音さんも来ていますよ。」

鈴

「え!?あの二人も?…でもないけど?」

永遠

「二人は先に束さんの所に行つとる。簪の機体が完成したから、見せに行つとるんじゃないよ。」

よ。

鈴

「ホント!!遂に完成したのね!!良かった〜♪」

セシリア

「ですから模擬戦の相手は簪さんもお相手しますわ。」

鈴

「フフツ♪簪の専用機がどんなものか楽しみだわ!!」

それから暫く話していると簪と本音がやって来た

私が専用機の完成をおめでとうと言ったら簪も喜んでくれた

その日はもう遅くなっていたから模擬戦は次の日にする事にして私達は永遠の家に戻って行った

次の日からセシリアと簪も交えての訓練を開始した

簪には勝てるけど、やっぱりセシリアは強くて殆ど負けっぱなしだった…何気に凹むわね…

そして対抗戦当日の朝、私達はいつもより早く島を出て学園に戻った

学園の校門前には千冬さんが待っていて、対戦の組み合わせは私と一夏で組んでくれたそうだ

それから一夏は私がいなくなったのを気にしているらしく、それならと試合の時まで会わずに焦らそうという事になった

〈鈴 Side out〉

〈一夏 Side〉

遂にクラス対抗戦の日が来た…

俺の初戦の相手は2組の鈴だったんだけど…

火ノ兄に臨死体験させられた次の日から何故か学園を休んでいた…

一度部屋を尋ねてみたら部屋にもいないらしく学園の外にずっと出ているらしい…
そして俺は今ピットで試合の準備をしている…

箒

「一夏！試合がいきなり不戦勝とはラッキーだったな！」

箒は学園にいない鈴が相手と知って不戦勝になると言って喜んでいた…と言うか…

一夏

「…いや、まだ鈴が出ないって決まった訳じゃないんだけど…所で箒？」

箒

「何だ？」

一夏

「…千冬姉から許可貰ってるのか？勝手に入ってくるとまた反省文書かされるぞ？」

箒

「え!?…だ、大丈夫だ！今回は許可を貰ってから来ている…」

一夏

「…それならいいけど…」

箒

「あ、ああ…（まずい！忘れていた！）」

一夏

「そう言えば千冬姉は何処だ？」

箒

「さ、さあな…（いないのは丁度いいな…このまま試合が終わるまで姿を現さないで欲しいんだが…）」

よく考えてみれば鈴がいなくなつてから千冬姉の態度が変わつた気がするんだよな

…

俺に冷たくなつたような…

火ノ兄やオルコットも俺を見る目が冷めた感じだし…

アナウンス

『織斑選手。アリーナに出てください。』

一夏

「あ…じゃあ箒、行って来る！」

箒

「ああ！行ってこい！どうせすぐに戻ってくるんだしな！」

一夏

「だからまだ不戦勝って決まった訳じゃないだろ！…織斑一夏！【白式】出るぜ!!」

く一夏 Side outく

く鈴 Sideく

鈴

「…出て来たわね…」

私は向かいのピットで【甲龍】シメンロンを展開していつでも出られる用意をしていた

そして私の周りには…

永遠

「遂にこの日が来おったな！」

セシリア

「待ちわびましたわ！」

千冬

「愚か者に制裁を加える時がな！」

簪

「うん！」

本音

「頑張つてね！リンリン！」

永遠、セシリア、簪、本音、千冬さんの5人がいた

鈴

「…皆…改めて御礼を言うわ！私の為に今までありがとう!!」

永遠

「カカカツ！何を言うとする礼を言うにはまだ早いぞ！」

セシリア

「その通りです！その台詞はあの男に勝つてから改めて聞かせて下さい！」

鈴

「でも…千冬さんには特に苦勞をかけたし…」

私の外泊や今日の試合の組み合わせとか…

千冬

「私の事は気にするな！そう思うなら今日の試合で一夏に勝て！私はそれだけで十分だ

！」

鈴

「千冬さん………はい!!」

アナウンス

『風選手。アリーナに出てください。』

鈴

「…行ってくる！」

永遠

「あの馬鹿にお主の想いをぶつけて来い！」

セシリア

「他の女性の分もお願いします！」

千冬

「軽く捻って来い！」

簪

「鈴！ファイトだよ！」

本音

「ガンバレ〜〜〜！」

鈴

「任せておいて!!風鈴音!」
【甲龍^{シエンロン}】行くわよ!!」

く鈴 Side out く

く千冬 Sideく

千冬

「さて、私は管制室に行くが…お前達は どうする？ なんならココで観戦してもいいぞ？」

永遠

「いや、ワシは客席で見るともりじゃ。」

セシリア

「わたくしもですわ。」

簪

「私も。」

本音

「同じく〜♪」

千冬

「そうか…なら急いだ方がいい。もうすぐ試合開始の合図が鳴るぞ。」

永遠

「ム！それはいかんな！急ごう！」

セシリア&簪&本音

「はい（うん）！」

4人は急いで観客席に向かって行ったが…

千冬

「…火ノ兄の奴…気付いているのか？アイツらの想いに…」

うちの弟みたいにならなければいいんだがな…

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

アナウンスで呼ばれたけど…鈴の奴出てくるのかな？

…そう考えていたら…

鈴

「待たせたわね一夏!!」

一夏

「り、鈴!?!お前今迄どこにいたんだ!?!」

鈴

「…私が無処にしようと思手でしょ…それより一夏…アンタ私が怒った理由…分かった

?」

一夏

「え？」

俺が火ノ兄に殺されかけた日の事か：

一夏

「…いや、俺はお前との約束もちゃんと思いついたんだし…お前に怒鳴られる事なんて無い筈なんだけど…むしろあれは勝手にキレたお前の方が悪いんじゃないのか？」

ブチッ!!

俺がそう言った瞬間何かがキレる音がした

く一夏 Side out

く千冬 Side

千冬

「アイツ…救い様が無いな…」

真耶

「…あのくどういう事でしょうか？」

千冬

「……………アイツが底抜けの馬鹿だという事ですよ。」

真耶

『え！ちよつ、何言つてんだよ！墓つて何？俺死ぬの!？』

真耶

「織斑先生何言つてるんですか!？教師の言う事じゃありませんよ!!」

千冬

「いいんですよ。事情は後で教えてあげますから。」

真耶

「……はあ……分かりました……」

く千冬 Side out

く一夏 Side

今千冬姉は何て言つたんだ……墓を建てる?……三途の川?……改心?

どういふ事だよ……

鈴

「……………」

一夏

「り、鈴!?!千冬姉がおかしいぞ!まるで俺に死ねつて言つてるみたいなんだけど!!」

鈴

「……………」

一夏

「鈴？」

鈴

「…千冬さんはおかしくないわよ…」

一夏

「え？ いやだって…どう見てもおかしいだろ！」

鈴

「…おかしいのは……………アンタよおおおおおーっ！！！」

一夏

「ええっ!？」

アナウンス

『試合開始』

鈴

「くたばれ一夏ああああーっ!!!」

鈴は叫びながら両手に持った二振りの青龍刀で斬りかかって来た！

一夏

「うおっ!？」

ガキイイインツ!

俺は何とか【雪片弑型】で受け止めた

一夏

「あ、あぶねえええ……!」

何なんだこの凄まじい殺気と言うか気迫は……一体俺が何したってんだよ!

く一夏 Side out

く鈴 Side

鈴

「今度は私がアンタを三途の川に送ってやるわ!!」

一夏

「え?………くっ!」

私は罅迫り合いをしながら一夏の腹に蹴りを入れた

一夏はその衝撃で後ろに飛ばされた

鈴

「……アンタの辞世の句は聞く気はない……三途の川で反省しろ!!」

一夏

「ちくしよおおおつ！死んでたまるかああああーっ！！」

一夏は死ぬのが嫌なのか叫びながら私に斬りかかって来た

鈴

「遅い！」

一夏

「くっ！」

私は剣を躲すと…

鈴

「…何よその遅い剣は！アンタ今日まで何してたのよ！」

一夏

「ぐっ！ならこれでどうだあああーっ！！」

一夏は【イグニッションブースト瞬時加速】を使って私に接近して大振りで斬りかかって来た

アイツ【イグニッションブースト瞬時加速】は使えるのね…けど…

鈴

「遅いって…言ってるでしょ！！」

一夏

「なっ！…くそっ!!」

全力の一撃を躲されて動揺したみたいだけど、すぐに連続で仕掛けて来たわね…でもね…

一夏

「何で当たらないんだ!?!」

鈴

「当り前よ！アンタの攻撃なんて永遠の攻撃と比べたら止まって見えるのよ！何より、アンタみたいなISに触って一カ月程度のド素人がそれよりも前から必死に訓練してきた専用機持ちに敵う訳ないでしょ!」

一夏

「うっ…」

鈴

「一夏…アンタ、専用機の意味を知ってるの?」

一夏

「え?」

鈴

「専用機って言うのはね…それぞれの国や企業から自分の実力を認めて貰った者だけが

持つ事を許された物なのよ！…専用機を託された者はその国や企業の誇りや未来なんかも一緒に託される…その背負った物の為に日々鍛錬しているのよ！それが専用機を持つって言う意味よ!!」

一夏

「…専用機の…意味…」

鈴

「アンタが専用機を持っているのは男だからと言う理由だけ！何も背負って無いアンタが私に勝てるの？アンタがもし女だったら専用機何て貰えないわよ！」

一夏

「ぐっ！」

鈴

「そして専用機を持つって事は専用機を守る事も義務付けられてるのよ！」

一夏

「…専用機を…守る？」

鈴

「専用機は国や企業の機密の塊…それを奪われることは自分の所属の秘密を奪われる事と同じ意味を持っているのよ！専用機を持つ者は機体を奪われない様にする為に自

分を鍛えている。アンタはそれを理解しているの？」

一夏

「……………」

鈴

「…先に言っておくけど…永遠はアンタとは違うわよ！」

一夏

「え!？」

鈴

「永遠は専用機の意味を正しく理解しているし、守るだけの實力もある。でも、永遠自身にはアンタと同じで背負う物は無いわ!けどね、アイツは自分の手の届くところにあるものは守りたいって言ってた!専用機はその為に使っているのよ!その為に鍛錬に励んでいる!背負う物も守る者も無いアンタとは違う!!」

一夏

「…お、俺にだって…守りたい者くらい…」

鈴

「あるって言うの?今まで無自覚に人の想いを踏み躪って来たアンタが!他人の想いを知ろうともしない奴が!私にはそんな奴に守る者があるなんて思わないけどね!!」

一夏

「!?（それは…火ノ兄に言われた…）」

鈴

「アンタが今まで何をしていたかは知らないけど…こっちはアンタを叩き潰す為に血の滲む様な訓練を重ねて来たのよ!!」

一夏

「お、俺を!?!」

鈴

「そうよ！私はアンタを倒せばそれでいい！それ以外はどうでもいい！アンタのその鈍感な性格のせいで泣いてきた子達の悲しみと苦しみの為にも…私はアンタを倒す!!」

一夏

「り、鈴…」

鈴

「…お喋りは終わりよ…：…一夏…私がアンタと同じで近接武器しか持ってないと思っ
た?」

一夏

「え?」

私は左右の浮遊ユニットに搭載されている【甲龍^{シエンロン}】奥の手【龍咆】を撃った
鈴

「喰らいなさい!!」

一夏

「え?…がつ?!」

見事にと真ん中に命中したわね…ま、初見で躲すのは普通無理だもの…永遠は【ライ
ンバレル】でいきなり躲したけど…

一夏

「…な、何だ!今の衝撃は!」

鈴

「どうかしら? 見えない砲弾【龍咆】の味は?」

一夏

「!?…見えない砲弾だと!」

鈴

「そうよ!これが私の第三世代兵装。空間に圧力を掛けて撃ち出す衝撃砲【龍咆】よ!」

一夏

「しよ、衝撃砲!?…それに第三世代兵装って…オルコットの【ブルー・ティアーズ】と同

じー。」

鈴

「その通りよ。そして私の【龍咆】の特徴は砲身も弾丸も見えないという事。」

一夏

「み、見えない攻撃…」

鈴

「躲せるものなら躲してみろおおおおおーっ!!!」

私は再び【龍咆】による砲撃を始めた

く鈴 Side outく

く一夏 Sideく

一夏

「く、くっそおおおおおーっ!!!」

俺は鈴の撃ってくる衝撃砲を躲すので精一杯だった

砲弾が見えないってのが厄介だ…ハイパーセンサーで何とか捉えられるけど…撃つ
た後に反応してるから完全に躲す事が出来ない…

このままじゃSEが削られていくだけだ！

…何とか鈴の攻撃を躲して懐に潜らないと！

鈴

「……………」

一夏

「ん!？」

…もしかして…

鈴

「……………」

…やっぱり!…アイツは砲撃する時、狙う場所を見ている！
ならその隙をついて…

鈴

「……………（気付いたみたいね。フフツ!）」

一夏

「……………」

…よし、鈴の目線にだけ集中するんだ！

一夏

「……………（今だ!）」

俺は鈴が攻撃した瞬間【瞬間加速^{イグニッション・ブースト}】を使って鈴の後ろに回り込むと【零落白夜】を
発動させてそのまま斬りかかった…

一夏

「貫ったああああーっ!!!」

鈴

「……………バクカ!」

一夏

「え?…ガハッ!」

体にまた衝撃砲で撃たれた衝撃が走った

一夏

「グッ…ウウツ…な、何で…」

鈴

「…言い忘れてたけど【龍咆】は全方位に撃てるのよ。」

一夏

「何?!…で、でも…お前の視線は……………まさか!」

鈴

「そうよ!…私は狙う場所を見ないで撃てる。アンタは私の視線つて言う囧にまんまと

引つかかったのよ。」

一夏

「そ、そんな!?!」

今までの俺の行動は鈴に誘導されていたってのだよ

〜一夏 Side out〜

〜鈴 Side〜

鈴

「…さて…そろそろ私も本気で行かせて貰うわよ!」

一夏

「え!?!」

どうやら私が初めから全力を出していると思っていたみたいね…まあ別にいいけど

鈴

「…いくわよ…」

私は【双天牙月】を連結させると一夏に接近して斬りかかった

一夏

「ぐっ!」

第060話・乱入者【ドットブラ斯拉イザーVSゴーレム

I】

（鈴 Side）

私が一夏にとどめを刺そうとした瞬間、突然何かが入ってきた……って言うかアレは
!?

一夏

「何だ……アイツは……」

鈴

「……………【ゴーレム】……」

そう私が昨日まで模擬戦の相手をして貰っていた束さんが造った無人IS【ゴーレム
II】だった

何でアレがココに？まさか束さんが？

そんな事を考えていると【ゴーレム】が攻撃を仕掛けて来た

一夏

「うおっ!?!いきなり何すんだ！誰だよお前!!」

そう言えばコイツはアレが無人大って知らなかったわね

鈴

「無駄よ！アイツは無人机だから何を言っても返事は来ないわ！」

一夏

「え!?! そうなのか?…てか何でそんな事知ってんだよ!?!」

鈴

「今はそんな事どうでもいいでしょ！」

一夏

「お、おう…」

鈴

「全く! ……あれ?」

よく見ると私の知っている「ゴーレムⅡ」とは細部が違っている

でも、あれが無人机なのは同じみたいね

鈴

「さて、どうしようかな…」

アイツを倒すか、一度ピットに戻るか…まずは千冬さんに意見を聞こうかな…そう考

えていたら

一夏

「鈴…お前は逃げろ！俺が守ってやる！」

鈴

「……………は？…アンタ…自分が何言ってるか分かってんの？」

一夏

「ああ！お前を守るって言ったんだ！」

…私の耳がおかしくなった訳じゃ無いみたいね

鈴

「アンタが？私を？さっきまで私に手も足も出せずにとどめをさされかけてたアンタが

？」

一夏

「ぐっ！」

鈴

「あのさ？一体どの口が言ってるのよ？ハッキリ言っておアンタにそんな事言われても全然信用できないんだけど？下らない事言っている状況じゃないのよ？」

一夏

「なっ！下らないって!？」

鈴

「はあ……とりあえず千冬さんに指示を仰ぐか……」

一夏

「り、鈴！何で……」

私は隣で狼狽している一夏を無視して千冬さんに通信を入れた

＼鈴　Side out　＼

＼千冬　Side　＼

千冬

「何だアレは!？」

フルスキン
全身装甲のISだと！火ノ兄以外にそんな機体があったのか！

真耶

「織斑先生!!」

千冬

「どうした!？」

真耶

「学園のシステムがハッキングされてシステムダウンを起こしています！その上、観客

席の扉も全てロックされていて生徒達が避難する事が出来なくなっています!!」

千冬

「何だと!？」

一体何者の仕業だ!…こんな事が出来るのは…まさか束か!

いや、今のアイツがこんな事するはずが…

真耶

「どうしますか!？」

千冬

「すぐに教員部隊に出動の用意を!それからアリーナにいる二人に通信を繋いで下さい

!」

真耶

「は、はい!」

今、一番の問題は観客席の扉だな…どうするか…

P r r r r r r

千冬

「ん?…電話?こんな時に誰だ!?!…火ノ兄!?!」

く千冬 Side outく

く永遠 Sideく

永遠

「どういう事じゃ!？」

セシリア

「永遠さん!アレは確か!」

簪

「【ゴーレム】!？」

本音

「でも何でココに?」

永遠

「…分からね!…とにかく東さんに確認をせんと!」

ワシはすぐに携帯で東さんに連絡を取った

東

『もしもし東さんだよ♪とーくんどうしたの?リーちゃんの試合は終わったの?』

永遠

「それどころではないんじゃ!その試合に【ゴーレム】が乱入してきたんじゃ!」

束

『へ?…【ゴーレム】が!?!』

永遠

「束さん!そつちにある【ゴーレム】は全部揃っておるんか?」

束

『勿論全部あるよ!……あ!そういえば!』

永遠

「心当たりがあるんか?」

束

『実はとーくんに会う少し前に開発した【ゴーレムⅠ】が盗まれた事があつたんだよ!』

永遠

「【ゴーレムⅠ】じゃとーなら今アリーナにおけるのは!」

束

『多分その盗まれた機体だよ!』

永遠

「そういう事か!束さん!ワシ等の知つとる【ゴーレムⅡ】とアリーナにおける【ゴーレム

Ⅰ】の性能差はどうなつとる!」

東

『【ゴーレムⅡ】とほぼ同じだよ！だからリーちゃん一人でも倒せるだろうけど…あれから一年以上経ってるから…』

永遠

「盗んだ連中が1年間そのまま保管しとる訳もないか！」

何かしらの強化措置をしとるじゃろうな…

東

『そういう事だね…とーくん、可能なら【ゴーレムⅠ】を捕獲してくれないかな？最悪コアさえ無事ならいいんだけど？』

永遠

「…分かった…織斑先生に話してそうするように頼んでおく！いざとなったら手足をぶった斬るだけじゃい！」

東

『それでいいよ…こつちでもできるだけ調べておくよ！』

永遠

「頼むぞい！」

ワシが携帯を切ると…

生徒1

「なんで開かないのよ!？」

生徒2

「じゃああいつが撃ってきたらどうなるのよ!!」

生徒3

「やだあ!?!死にたくなーい!?!」

扉が開かず避難出来ない生徒達がパニックを起こしておつた

セシリア

「永遠さん!...これは...」

永遠

「これもアイツの仕業か?」

ワシ等はアリーナにおける「ゴーレムI」に視線を向けた

簪

「永遠どうするの?」

永遠

「...避難を優先せねばならん!じゃが扉が開かんとすると...破壊して開けるしか...」

本音

「でもそんな事したら！」

永遠

「くっ！…織斑先生に連絡をする！扉を破壊する事を伝えたらすぐに始める！お主等は避難誘導を頼む！」

セシリア

「待って下さい！それでは永遠さんだけが！」

永遠

「今はそんな事を言うところの場合ではない！」

ワシは今度は織斑先生に電話をかけた…繋がってくれればいいが…

く永遠 Side outく

く千冬 Sideく

千冬

「私だ！」

永遠

『織斑先生！観客席の扉が全て開かなくなつとる！そつちで開けられんのか!?!』

千冬

「スマン！ハッキングを受けてシステムダウンしている。こちらから開ける事が出来ない。山田先生達が復旧に当たっているがまだ時間が掛かりそうだ！」

永遠

『くっ！……織斑先生……今は避難を優先すべきじゃろ？じゃから扉を破壊するぞ！』

千冬

「何っ！……いや……それしか手は無いか……分かった！緊急の処置として許可する！」

永遠

『構わんのか？勝手にやるつもりじゃったが？』

千冬

「私でもそうする！……所であの乱入者の事を知っているか？」

永遠

『さつき束さんから確認を取った。アレは束さんが造った無人IS【ゴーレムI】じゃ

！』

千冬

「やはりアイツの………」

永遠

『違う！【ゴーレムI】は1年以上前に束さんの所から盗まれた物らしい。この件に束さ

んは無関係じゃ。今束さんにも調べて貰つとる。』

千冬

「そうか…アイツじゃなかったのか…よかった…」

束が犯人ではないと知って私は心から安堵した…

永遠

『それと束さんからあの機体を捕獲して欲しいとの事じゃ。いざとなったらコアだけでもいいそうじゃ!』

千冬

「分かった!出来るだけそうするように伝えておく!お前はオルコット達と協力して避難活動を頼む!避難が終わるまでは嵐に足止めをさせる!」

永遠

『じゃったら鈴に【ゴーレムI】の事を伝えて欲しい!性能は鈴の訓練相手と同じ程度らしいが、あの機体は強化されておる可能性がある!』

千冬

「盗んでそのままの状態で送り込む訳もない、という事か…分かった!」

永遠

『ではワシ等は避難活動を始める!』

千冬

「頼むぞ！何かあれば連絡しろ！」

とりあえず、観客席の方はアイツらに任せるしかないか…

真耶

「織斑先生！二人に繋がりました！」

千冬

「よし！」

く千冬 Side outく

く鈴 Sideく

千冬

『聞こえるか？織斑、凰？』

鈴

「はい聞こえます！」

一夏

「ああ！」

千冬

『簡潔に言うぞ！学園は現在ハッキングを受けてシステムが落ちている。その上観客席の扉が全てロックされて生徒達が避難出来ない状態だ。』

一夏

「ええ！」

千冬

『今火ノ兄達が扉を破壊して避難させる為に動いている。凰！お前は避難が終わるまで奴が観客席に攻撃しない様に注意を引き付けておいてくれ。』

鈴

「分かりました！」

一夏

「千冬姉、俺は！」

千冬

『織斑先生だ！お前はピットに戻れ！』

一夏

「…ええ？」

千冬

『凰との試合でSEも余り残っていないだろ。足手まといになる前に戻れ。』

一夏

「そんな！鈴を置いて俺だけ逃げるなんて嫌だ！俺も残って戦うぞ！俺が鈴を守るんだ！」

………以前の私なら胸がときめいたでしょうね…

千冬

『…お前本気で言ってるのか？…織斑、いや一夏…あれだけ鈴に一方的にやられていたお前が鈴を守るのか？今は緊急事態だ！寝言は寝てから言え！』

一夏

「そんな!?…何でだよ…何で俺を信じてくれないんだよ！」

千冬

『それ以前の問題だ！エネルギー切れ寸前の奴がいても邪魔なだけだと言ってるんだ！』

一夏

「ぐっ！…で、でも！」

鈴

「…はあくっ…千冬さん、もういいですよ。コイツの面倒は私が見ますから。これ以上は時間の無駄です。」

千冬

『…そうだな…織斑…残ると言うなら鈴の指示に従え！それ以外の行動はするな！』

一夏

「そんな！」

千冬

『嫌なら戻れ！私はそう言ってるが？』

一夏

「うっ！…分かつ…た…」

千冬

『それから可能なら奴を捕獲したい。最悪コアだけでも構わん。』

鈴

「分かりました！」

一夏

「…はい…」

…自分では何もするなんて言われて落ち込んでるわね…まあこつちとしては勝手に動かれると邪魔だからその方がいいんだけど………ん？

千冬

『鈴。プライベートチャンネルで今話している。火ノ兄達からの情報だ。』

鈴

「(はい！永遠達は何て?)」

千冬

『あの機体は1年以上前に束の所から盗まれた【ゴーレムI】と言う機体らしい。性能はお前の訓練相手になっていた機体と同じらしいが、強化された可能性が高い。同じと思つて油断するな!』

鈴

「(分かりました!)」

千冬さんからの通信が終わると一夏に指示を出した

鈴

「一夏！今から言う事をよく聞いて。アンタはアイツの周りを飛び回ってなさい。攻撃はせずに回避に専念するのよ。」

一夏

「な！何でだよ！アイツを倒すんじゃないのか!？」

鈴

「…アンタ話聞いてた？今永遠達が避難活動してるのよ?」

一夏

「そんな事分かってる！」

鈴

「千冬さんも言つてたでしょ。避難が終わるまで注意を引いているって。アイツの攻撃はアリーナのシールドを突き破れるのよ！私達がアイツと戦つてその攻撃が観客席に当たつたらどうするのよ！そんな事も分からないの!？」

一夏

「あ!?!……………スマン……」

鈴

「分かつたら言つた通りにしなさい!いい?付かず離れずに動いてアイツをアリーナの中心から動かさない様にするのよ!もう一度言うけど攻撃するんじゃないわよ!アンタはただでさえガス欠寸前だからね!【零落白夜】なんか使つたら一瞬で終わるわよ!」

一夏

「……分かつた……」

鈴

「あれだけ我儘言つて残つたんだからしつかりやりなさい!今私達がやる事は皆の避難

が終わるまでの時間稼ぎをする事よ！」

一夏

「!?…ああ…」

…はあ…分かり易いほど落ち込んでるわね…まあ今はコイツのプライド何て二の次
だわ

〈鈴 Side out〉

〈永遠 Side〉

ワシ等は早速扉を破壊する為に動き出した

永遠

「セシリアと簪、本音は右回りで扉を開けて行ってくれ！ワシは左回りで行く！」

セシリア

「分かりましたわ！」

簪

「それなら時間も半分で済むね！」

永遠

「そういう事じゃよ！では行くぞ！」

セシリア&簪&本音

「はー！」

ワシは「ドットプラスライザー」を展開して手近な扉に向かった
扉の前はパニック状態の生徒達が押し寄せておった

永遠

「邪魔じゃな…仕方ない、荒療治で行くか！」

へセットアップ プラストマグナム

ワシは「マルチギミックサック」を片手銃にして真上に1発撃った

生徒達

「!？」

永遠

「今から扉を破壊する！どいてくれ！」

ワシがそう言うのと扉の周りにおった生徒達は扉から離れてくれた

へセットアップ プラストソード

永遠

「ハアッ！」

ワシは片手剣に変形させると扉をXの字に切り裂いた

永遠

「…よし…早く行くんじや！慌てず騒がずに避難するんじやぞ！」

生徒1

「うん！」

生徒2

「ありがとう！」

避難が無事に行われているのを確認すると次の扉に向かった

その途中でアリーナを見ると鈴と織斑が「ゴーレム」に自分達に注意を向けさせる為に動いておった

ワシはその後も扉を破壊しながら進み反対側から同じようにしておったセシリア達と合流した

セシリア

「永遠さん！」

永遠

「セシリア、簪、本音…そっちも終わったようじゃな。」

簪

「うん！後は皆が避難し終わるのを待つだけ。」

本音

「疲れたよ〜…」

永遠

「そうじゃなく〜…」

避難が無事に行われておるから安心しておると…

?

「一夏あああああーっ!!!」

永遠&セシリア&簪&本音

「!?!」

ワシ等の真上からデカい声が聞こえた…ってこの声は!

永遠

「篠ノ之!?!」

簪

「男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする!!」

篠ノ之の奴がアリーナの放送室から叫んどるんか

永遠

「何をしとるんじゃアイツは!?!」

（鈴 Side）

鈴

「…今の…永遠…」

箒が放送室で叫んだせいで私達に注意を向けていたのが台無しにされた

【ゴーレム】は箒のいる放送室に攻撃をしようとしたけど、私と一夏がいる位置じゃ止める事が出来なかった

砲撃が命中する瞬間、私が見たのは【ゴーレム】と放送室の間に割り込んだ永遠の
【ドットブラスライザー】の姿だった

鈴

「…永遠……!?!」

煙が晴れるとそこには両手に楯を展開した【ドットブラスライザー】がいた
後ろにある放送室も無事だった

鈴

「よかった…」

（鈴 Side out）

く永遠 Sideく

何とか間に合った…しかしこの女…

箒

「ひ、火ノ兄…助かったぞ！」

コイツ！これだけの事をしておいて…

永遠

「黙れ!!」

箒

「!？」

永遠

「セシリア、箒、本音…このバカ女を拘束しておいてくれ！後で織斑先生に引き渡す！ワ

シは今からあの無人機を始末する！」

セシリア

「分かりました！」

箒

「ま、待て火ノ兄！私は…」

永遠

「黙れと言うとる!! いいか!! セシリア達が来るまでそこを一步も動くな!! 動けば貴様の罪が増えるからな!!」

ワシは篠ノ之の言い訳を聞かずにアリーナに向かった

鈴

「永遠! 大丈夫なの?」

永遠

「危ないところじゃったがな…」

一夏

「…火ノ兄…箒を守ってくれて…ありがとう…」

永遠

「……………篠ノ之はセシリア達に拘束するように頼んだ。後の事は織斑先生に任せればいい。織斑…文句あるか!」

一夏

「…いや…」

永遠

「さよか…避難もほぼ終わったようじゃからコイツを始末するぞい!」

鈴

「ええ！それでどうするの？」

永遠

「奴を動けんようにすればいいからの！手足を破壊すればいいんじゃない！後はワシがやるからお主等は下がっておれ！」

一夏

「ま、待てよ！いくらお前でも一人で何て!？」

永遠

「…織斑…スマンがワシは今、篠ノ之の馬鹿のせいで気が立っておる！巻き込まれたくなかったら鈴と一緒に離れておれ！」

一夏

「!？」

鈴

「まあそうよね…アイツのせいで永遠達だけじゃなくて私達の苦勞も無駄にされたし

…」

一夏

「鈴！」

鈴

「違うって言うの?」

一夏

「……………それは…」

鈴

「ほらー! さつさと下がるわよ!」

鈴は織斑をピットまで引つ張っていった

永遠

「スマンな…鈴……………させて…やるか!」

今【ゴーレム】は攻撃目標をワシに変えて攻撃態勢に入っておった

永遠

「一気に片を付けてくれる!!」

へセツトアツプ ブラストソード

永遠

「必殺ファンクション!」

へアタックファンクション コスモスラッシュ

【マルチギミックサクク】を片手剣に変形させると剣にエネルギーを集中させ、巨大化させるとそのまま振り下ろし【ゴーレム】両腕を切り落とした

明らかに声がイラついとるな…理由はやはりアイツじやろうな

永遠

「…セシリア達は？」

千冬

『オルコット達もソコにいる！それと篠ノ之の馬鹿も渡されたから安心しろ！アイツの処分は後で決める！』

永遠

「さよか…」

とりあえず戻るかの…

く永遠 Side outく

第061話：報告と制裁

く千冬 Side

千冬

「……………」

今、取調室には私と山田先生、オルコット、更識、布仏、凰、一夏の他にオルコット達に拘束された篠ノ之がいる

火ノ兄はまだ来てはいないが始めるか…

千冬

「火ノ兄はまだだが取り調べを始める！まず全員に確認するが、織斑と凰の試合中にアリーナのシールドを破壊し謎のISが乱入。避難勧告を出した直後、学園のシステムがハッキングを受けシステムダウンを起こし、客席の扉がロックされ生徒達が避難出来なと言う状態になった。…これに間違いはないな？」

私が聞くと篠ノ之以外は頷いた

千冬

「では、生徒達の避難を行っていたオルコット、更識、布仏の報告を聞こう。」

セシリア

「はい。わたくし達は織斑先生の許可を貰い、永遠さんと一緒に開かなくなった扉を破壊する事で生徒の方達の避難経路を確保しておりました。」

簪

「その際、私達3人と永遠で左右に二手に分かれました。そうする事で時間を短縮して避難を早める為です。」

本音

「全部の扉を壊してひの、火ノ兄君と合流したのは放送室の真下辺りでした。」

セシリア

「以上がわたくし達の行った避難活動の内容です。」

千冬

「よろしい！次にアリーナの乱入者と戦闘を行っていた風、報告を頼む。」

一夏

「え？俺は？」

鈴

「アンタがちゃんとした報告出来るの？」

一夏

「…出来ません…」

鈴

「なら黙ってなさい！…私は乱入者が現れた時、まず織斑先生に指示を仰ぎました。セシリア達が避難活動をしているという事で、一夏と共に時間を稼ぐ為に私達に注意を向けさせ、乱入者が観客席に攻撃を行わない様にしていました。なお一夏のISはエネルギー切れ寸前という事もあって攻撃はさせず、回避に専念させていました。以上です。」

千冬

「分かった…織斑、今の風の報告に間違いはあるか？」

一夏

「ありません…」

千冬

「よろしい…最後に私からの報告だが…まあ分かっていると思うがあの乱入者は火ノ兄が手足を破壊して機能を停止させた。」

私の報告を聞いてオルコット達は安心してると…

コンコン…

千冬

「入れ！」

永遠

「失礼するぞい。」

遅れていた火ノ兄が入って来た

千冬

「火ノ兄、ご苦労だった。」

永遠

「気にせんでいい。それで、どの程度終わったんじゃ？」

千冬

「全員の報告が終わった所だ。後は軽く注意をして解散と行くところなんだが…お前達が報告にはあえて出さなかった奴の話聞く所だ。」

私がそう言うと全員の視線が拘束されたそいつに向けられた

箒

「……………」

千冬

「…篠ノ之…避難指示はお前も聞いていた筈だ…何故あんな事をした…」

箒

「……………」

千冬

「お前には自殺願望でもあるのか？」

箒

「…いえ…」

千冬

「ならあの行動の理由は何だ？」

箒

「…わ、私はただ…一夏に喝を入れようと…ただだけで…」

一夏

「え？」

千冬

「…喝を入れる…か…馬鹿かお前は！」

箒

「!？」

千冬

「それに何の意味がある？そんな事をして力が出るのは空想の世界だけだ！お前は現実と空想の区別もつかんのか！」

箒

「い、いえ…」

千冬

「あの時お前がした事がどれだけ多くの者達を危険に晒したと思ってるんだ！」

箒

「…え？」

千冬

「…分かってないのか!!なら聞かせてやる!まずは火ノ兄、避難活動をしていたお前が代表して言え!!」

永遠

「ん!…ワシ等は扉を破壊し終わると生徒達が無事に避難しとるかを遠目で確認しとつてな、順調に進んどるようなんで安心したんじやが…ワシ等のいた場所の真上から馬鹿デカイ声が聞こえたんじやよ。篠ノ之…お前じや!」

箒

「ぐっ!」

永遠

「ワシ等がおった場所は放送室の真下、つまり一番避難の済んどらん場所じや!そんな

所であんな大声出しおつて！乱入者に攻撃して下さいと言つとるようなもんじゃ！」

箒

「…ぐううっ！」

千冬

「次にオルコツト！篠ノ之を拘束しに行った時の事を頼む！」

セシリア

「はい。…わたくし達3人は篠ノ之さんを拘束しに放送室に向かいました。ですが放送室への通路と室内には気を失った数人の生徒が倒れていました。あの状況から考えて篠ノ之さんが放送室に向かうのを止めようとして気絶させられたと思われます。」

千冬

「…どうなんだ篠ノ之？」

箒

「ち、違います！私はそんな事…」

千冬

「していないか…言っておくがその気絶した生徒達から事情を聞けば誰にやられたかすぐに分かる事だぞ。」

箒

「!?」

千冬

「最後に凰!」

鈴

「分かりました! さつきも言ったように私と一夏は避難が終わるまでの時間を稼ぐ為、乱入者の眼を私達に向けさせていました。ですが、箒が放送室で叫んだせいで放送室に向けて攻撃される事になり、私達の苦勞が水の泡にされました!」

箒

「なっ!」

千冬

「これで分かったか! お前一人の勝手な行動のせいで多くの生徒達が危険に晒されたんだ!」

箒

「……………」

一夏

「ま、待ってくれよ! 確かに攻撃はされたけど火ノ兄が防いでくれたお陰でケガ人も出なかつたんだから……」

永遠

「馬鹿か貴様は!!」

一夏

「!?」

永遠

「貴様が言うとするんは結果論にすぎん!あの時は偶然ワシがおつて、奴の砲撃にワシがギリギリ間に合つて防げただけじゃ!そもそもこの馬鹿女があんな事せんかつたら攻撃自体されんかつたわ!それは奴を引き付けておつた貴様が良く分かつとるじやろうが!!」

一夏

「うっ……」

永遠

「織斑!ワシも貴様も一人の被害者も出さん様にする為に動いておつたんじやぞ!それをコイツは邪魔した上に自分勝手な事をして他の生徒達を危険に晒したんじや!セシリアが言うておつた気絶させられた生徒達がそうじや!!」

一夏

「……………」

永遠

「いいか！今回ケガ人が出なかったのは本当に運がよかつただけじゃ!!今回無事だからと言つて次も上手くいくとは限らんのじゃぞ!!それとも何か!!貴様は自分がおれば誰もケガ人を出さんのか!!その根拠は一体何処にある!!あるなら教えんか!!」

一夏

「そ、そんな物…ある訳…」

永遠

「じゃつたら黙つとれ!!そもそもコイツを庇う必要がどこにある!!コイツは処罰されても褒められる事は一つしとらんのじゃぞ!!」

箒

「…き、貴様?!」

一夏

「オイ!それは言い過ぎだぞ!箒は俺を応援する為に…」

永遠

「時と場所を考えろと言うとるんじゃ!あの時コイツがすべき事は他の生徒達と一緒に避難する事じゃ!応援する事では無いわ!!」

一夏

「そ、それは…」

バンツ!!

千冬

「全員落ち着け!!」

全員

「……………」

私が机を殴って怒鳴ると部屋の中が静かになった

千冬

「…織斑…お前が篠ノ之を庇うのは勝手だ。だがなコイツのした事は決して許される事では無い。既に篠ノ之を処罰する事は学園の方で決定している。」

箒

「うっ…」

千冬

「今から篠ノ之の処罰の内容を言う所だが…その前にお前に一つ確認したい事がある。」

箒

「え?」

千冬

「…お前…試合前何処にいた？」

箒

「!?」

千冬

「織斑のピットにいたな？誰が許可したんだ？」

一夏

「え？ちふ「織斑先生だ！」…織斑先生から許可は貰ってるって言ってたけど…」

箒

「い、一夏!？」

千冬

「私はそんな許可を出していない！」

一夏

「え！それじゃあ…」

千冬

「お前また勝手に入って来たな…前回の事で懲りてないのか？それとも忘れていたのか？」

箒

「……………」

コイツの事だから恐らく後者、忘れていたんだろうな…

千冬

「お前にはそれも加えた処分を下す！懲罰房に謹慎1週間、その後自室謹慎1週間、その間に反省文250枚の提出だ！前回と同じ様に軽くするつもりは無い！」

箒

「……………はい…」

千冬

「さて、お前達はもういいぞ、対抗戦は中止になったから今日はもう帰って休め。篠ノ之、お前は今から私が懲罰房に連れて行く！」

箒

「……………はい……………」

一夏

「……………箒……………」

鈴

「一夏。」

一夏

「何だ？」

鈴

「話があるから少し付き合って。」

一夏

「え？…ああ、分かった…」

永遠&セシリア&簪&本音&千冬

「……………」

…一夏とケリを付けるみたいだな…

く千冬 Side outく

第062話：鈴の決意

一夏 Side

俺は話があると言う鈴の後を着いて歩いてた

一体俺に何の用だろう？

そう言えば、鈴も千冬姉達みたいに俺に冷たくなつた気がするな…

鈴の話が終わつたら聞いてみるか…

鈴

「……………ココでいいか…」

一夏

「え？」

俺が考え事をしながら歩いていると、気付いたら俺達は学園の屋上に来ていた

一夏

「なあ鈴、話ってなんだ？」

鈴

「……………」

鈴は俺に背中を向けたまま何も言わなかった

鈴が話さないなら俺の聞きたい事を先に聞こうと思った時…

鈴

「…一夏…」

鈴が口を開いた

「一夏 Side out」

「永遠 Side」

ワシ等は鈴の事が気になり後をつけておった

二人は屋上の上って行ったところでワシ等は後をつけるのはやめる事にしたんじや

セシリア

「鈴さん…」

本音

「リンリン…大丈夫かな…」

永遠

「…さてな…鈴が何を考えておるのかは大体分かるが…」

簪

「あの最低男にそれが伝わるかだよね？」

永遠

「確かにそうじゃが…最低男は言い過ぎな気が…」

簪

「どこが？」

セシリア

「彼は最低ですわよ？」

本音

「うんうん！」

永遠

「……………そうじゃな…」

く永遠 Side outく

く一夏 Sideく

鈴

「…一夏…」

一夏

「何だ？」

鈴

「…アンタさ…なんで私が怒ったのか…ホントに分からないの？」

一夏

「え？……ああ、俺、あれから言葉には気を付けているつもりなんだけど、お前を怒らせる様な事を言った覚えが無いんだけど…」

鈴の話ってその事だったのか？

鈴

「…そっか…分からないんだ…」

一夏

「鈴？」

鈴

「なら教えてあげるよ。…あの時、アンタ約束を思い出したからって私に確認しに来たよね？もう一度その約束言ってくれない？」

一夏

「え？……ああ…『料理が上達したら毎日私の酢豚を食べてくれる？』…だよな？」

「これで間違い無い筈だけど…」

鈴

「それで合ってるよ。」

良かった！間違ってた！でもそれなら何を怒ってるんだ？

鈴

「あれね…私の告白だったんだよ。」

一夏

「……え？」

…今なんて言った…告白？

鈴

「日本にはさ…『毎日お味噌汁を食べて欲しい』って言うプロポーズがあるんだよね？私、中国生まれだからそれを中国風にしてあの日アンタに伝えただよ。」

一夏

「…え…え？」

…ちよつと待て！…なら俺があの時、鈴に言った事って…

俺は火ノ兄に臨死体験させられた日に鈴に言った言葉を思い出した

一夏

『それにしても、まるでプロポーズ『みたい』な約束だけ…まあ、鈴が『そんな事』を

言うわけないか♪』

だ、だから火ノ兄は…

あんなに怒って…俺を半殺しにしたのか…

一夏

「あ…ああ…お、俺…」

鈴

「あの時は私なりに勇気を振り絞って言った言葉なんだけど…アンタには告白として聞いても貰えなかったのね…」

一夏

「!?…俺…鈴に…」

…なんて事を…言っただ…」

鈴

「…一夏…私ね…アンタが好きだったんだよ…でも…もう無理…」

一夏

「え!?!」

鈴

「…アンタには愛想が尽きた…」

一夏

「!?……………り、鈴?」

鈴

「…だから、アンタはもうただの幼馴染…ただの友達でしかない……………そう言う訳だからこれからは友達としてよろしくね。」

一夏

「う…ああ…スマナイ鈴!!」

俺は地面に頭を擦りつけて土下座をした…頭より先に体が反応していた…

一夏

「…俺が…俺が悪かった!!」

鈴

「……………」

一夏

「お前の言う通りだ!…悪いのは全部俺の方だった!…火ノ兄達に言われた事を俺は何一つ分かって無かった!」

今の俺には謝る事しか出来なかった…

鈴

鈴

「今更過ぎた事をとやかく言うつもりは無いわ…でもね、アンタは自分に想いを寄せていた子達を悲しませてきた…傷付けてきた…それだけは…絶対に忘れないで!!」

一夏

「……………」

鈴

「私の話は終わりよ…じゃあね…」

鈴はそう言つて俺の方に歩いてきた

そして、未だに土下座をしている俺の横を通り過ぎる時…

鈴

「…サヨナラ…一夏…」

一夏

「!?!」

その一言に振り向いた時には鈴は屋上を後にしていた…

この時、俺は気づいた…鈴は、一度も俺と顔を合わせようとはしていなかった…

俺はそのまま力なく項垂れて…

一夏

「……………俺は…最低だ…」

込み上げてくる罪悪感に苛まれて、その場を動く事が出来なかつた…

「一夏 Side out」

「永遠 Side」

鈴

「……………」

屋上から降りてきた鈴は近くにおけるワシ等にも気づかず、下に降りて行った

ワシはセシリア達に目配せすると全員分かつつたのか、頷くと鈴を追いかけて行つた

残つたワシはどうしようか考えとると…

千冬

「…終わったのか？」

織斑先生がやって来た

永遠

「そのようじゃ…篠ノ之は懲罰房に放り込んだんか？」

千冬

「ああ、反省するかは微妙だがな……」

永遠

「じゃろうな……あやつは謝るといふ事を知らんようじゃしな……」

千冬

「確かにな……：オルコツト達は？」

永遠

「鈴を追いかけて貰った……今は一人にした方がいいかもしれんが……」

千冬

「そうだな……アイツらにも世話をかけるな……：それにお前にも……」

永遠

「ワシが勝手にやっただけじゃよ。」

千冬

「本当にスマンな……お前達には弟の事でも迷惑をかける……」

永遠

「じゃな……まあ、鈴との一件であの馬鹿も少しは分かったじやろ……」

千冬

「だといいがな……」

永遠

「そう言われると不安じゃな…織斑先生…奴はまだ上におるから…少し覗いてみんか？」

千冬

「ふむ…そうだな…一度見ておくか。」

ワシの提案に織斑先生も乗ってくれた

そのままワシ等は屋上への階段を昇って行つた

く永遠 Side out

く鈴 Side

一夏と別れて私はいつの間にか学園の海岸に来ていた…

セシリア

「…鈴さん…」

鈴

「セシリア、簪、それに本音も…聞いてたの？」

簪

「…ううん…聞いてないよ…でも何を話してたのかは分かる。」

本音

「…リンリン…その…」

セシリア

「…もういいのですか？」

鈴

「…うん…言いたい事は全部言っただけ…」

セシリア

「…そうですか…」

鈴

「あ!？」

セシリアはあの時と同じように優しく抱きしめてくれた

鈴

「セシリア…?!？」

すると簪と本音も私を抱きしめた

セシリア

「いいんですよ…泣いても…」

簪

く千冬 Sideく

一夏

「あああああああああー……っ!!」

どうやら鈴に思いつきりフラれたようだな…

これでアイツも自分の鈍感さでどれだけの人達を傷つけて来たか分かるだろう…

鈴には本当に悪い事をしてしまったな…私の方からも謝っておくか…

永遠

「……………」クイツ

火ノ兄が指で下を指した…戻ろうという事か…

ガタツ

だが私が頷いた時、物音を立ててしまった

千冬

(しまった!?)

一夏

「鈴か？鈴なのか？」

アイツ…鈴が戻って来たと思ったのか？

仕方ない気付かれた以上出て行くか…

私が火ノ兄に目配せをすると火ノ兄も頷いた…どうやら同じ事を考えたらしい
私達は屋上に出て行つた

く千冬 Side out く

く一夏 Side く

俺は屋上の扉から物音がしたのに気付いた…

もしかしたら鈴が戻つて来たのかもしれない…

そんな考えをしていると…出て来たのは…

一夏

「りっ…千冬姉…火ノ兄…：…鈴じゃ…ない…」

千冬姉と火ノ兄の二人だった

千冬

「残念だったな鈴じゃなくて…しかし、随分と女々しい奴だな？」

一夏

「…どういう事だよ？」

千冬

「鈴が戻つて来るとでも思っていたのか？」

一夏

「!?…な、何の事だよ！」

千冬

「鈴にフラれたか？」

一夏

「何でそれを！…まさか覗いてやがったのか!？」

永遠

「んな事しとらんわ！じゃがな、今の貴様を見れば鈴が何を言ったのかは分かるわい！」

一夏

「ぐっ!？」

千冬

「大方、鈴に『これからはただの友達』とでも言われたんだろ？」

一夏

「うぐっ!？」

永遠

「どうじゃ織斑？一方的にフラれた気分は？」

一夏

「何だと!？」

永遠

「貴様が今までやって来た事じゃ！」

一夏

「うっ!？」

それを言われたら何も言えなかった…けど…

一夏

「…お前は…鈴の気持ちを知ってたのか？」

永遠

「当たり前じゃ。あんなに分かり易いんじゃないからな。気付かんかったのは貴様だけじゃ。」

一夏

「そんな！」

永遠

「それだけ貴様が鈍いという事じゃ！ワシはな…鈴の応援をしとった。」

一夏

「え？」

永遠

「鈴は貴様の事が本当に好きだったんじゃないな…わざわざこの学園に転入までしてきたんじゃないから…」

一夏

「…え？…そ、それって…」

永遠

「馬鹿の貴様でも分かったか！鈴はな、貴様に会う為にこの学園に来たんじゃ！」

一夏

「お、俺に…会う為…」

永遠

「じゃからワシは鈴の応援をしようと思った。じゃが、この学園に来た鈴に対して貴様がした事は何じゃ？言った言葉は何じゃ？」

一夏

「……………」

永遠

「また忘れたか？それとも自分の都合のいいように脳内変換したんか？」

一夏

「…ちゃんと…覚えてる…」

永遠

「ほおく…驚いたのお…鈴の告白も間違えて覚えておる様な奴が覚えておったのか？」

一夏

「ぐっ！」

永遠

「約束を思い出してもそんな訳無いと本人の前で笑いながら否定しておった奴がお…」

一夏

「ぐぐっ！」

永遠

「まあ、ワシは別に貴様の事なんぞどうでもいい…それに、鈴には悪いが貴様の事を諦めたのは良かったと思つとるからな。」

一夏

「な、何だと!？」

永遠

「何故貴様が怒る？鈴の事を何とも思つたらんのじゃろ？じゃからあげな事を平然と口に出来たんじゃろ？」

一夏

「ぐっうっ…」

永遠

「この際じゃ、ハッキリ言つてやる！貴様に鈴は相応しくない!!」

一夏

「なっ!？」

永遠

「鈴にはもつと相応しい者がおる！貴様の様な最低なクズには勿体なさ過ぎる娘じゃ

!!」

一夏

「ク、クズ…」

永遠

「そうじゃ！貴様はクズじゃ！男としても人としても最低なクズじゃ！」

一夏

「あ…ああ…」

永遠

「自分に向けられる好意にも気づかず、平然とその想いを踏み躪る様な奴が、クズ以外の

何だと言うんじゃ!! 貴様は『大切な人を守る』とほざいておきながらやつとる事は何じゃ!! 貴様は自分の言動と行動が矛盾しとる事に気づかんのか!!!」

一夏

「うっ……………そ、れは…」

……………火ノ兄の…言う通りだ…

千冬

「一夏…お前が誰を好きになろうと勝手だ。だがな…相手の想いをまた踏み躪る様な事をした時は…その時は、例えば実の弟だろうと私は許さんからな!!」

一夏

「……………はい…」

永遠

「本当に分かつとるのか?」

一夏

「…いくら俺でも…もう分かつてる…」

永遠

「…まあ、また懲りずにやればその時はまた臨死体験をさせるだけじゃ。」

千冬

「そうだな…その時は頼むぞ。」

永遠

「任せときんしやい!!次はパワーボムで行こうかの?」

一夏

「…やる事が決まってるのかよ…」

永遠

「貴様ならまた鈴の様な者を出しかねん!信用出来る分けなかるお!」

千冬

「確かに信用出来んな!」

一夏

「…そこまで信用無いのかよ…」

永遠

「当り前じゃ!むしろ何処を信用しろと言うんじゃ!!ワシのパワーボムを喰らいたくなかったらその鈍感でお気楽な性格を直すんじゃな!分かったか『マダオ』!!」

一夏

「マ、マダオ?何だよそれ!」

永遠

「『まるでダメな織斑一夏』：略してマダオじゃ！」

一夏

「そんな呼び方するな!!」

千冬

「今のお前にはピッタリの呼び方だが？」

一夏

「ち、千冬姉まで……」

永遠

「それとも『クズでダメな織斑千冬の弟』：『クダオ』と呼んだ方がいいかの？」

一夏

「止めてくれ!？」

俺の名前すら入って無いあだ名じゃないかよ！

千冬

「呼ばれたくなければ二度とこんな事を起こすな!!お前が今までしてきたことはクダオと呼ばれても仕方のない事なんだからな!!」

一夏

「うっ………はい……」

永遠

「今日一日は鈴に言われた事を反省しとれ！…反省した所で鈴はもう貴様に振り向く事は無いがな…鈴なら貴様の良い嫁になれたじやろうに、見限られるとはとんだ大馬鹿もんじゃない！」

一夏

「!?…うつ…うつ…」

千冬

「火ノ兄の言う通り今日は反省している！」

永遠

「ではな…マダオ。」

一夏

「…マダオって言うなよ…」

二人はそう言い残して屋上から出て行った…

俺は弱々しくそう言い返す事しか出来なかった…

一夏

「……………マダオ、か……………鈴……………」

く一夏 Side outく

く千冬 Sideく

屋上を後にした私は火ノ兄に一夏の今後を聞いてみた…

千冬

「火ノ兄…」

永遠

「ん？何じゃ？」

千冬

「…一夏は大丈夫だと思うか？」

永遠

「さあのお…奴は前科がありまくるから何とも言えんよ。」

千冬

「はあ…そうだな…」

その通りだから何も言えんな…

永遠

「…それに、奴にはああ言ったがワシも最低な男じゃからな…」

千冬

「何？」

…そうか…コイツ…

千冬

「……………気付いていたのか…」

永遠

「セシリア、簪、本音…自分に向けられとる好意くらいは分かるわい。」

千冬

「分かっているなら何故お前が最低何だ？」

永遠

「ワシはあの3人に甘えとるんじやよ。…今はまだ、クラスメイト、友人として接していたいんじや…」

千冬

「…火ノ兄…」

永遠

「無論、ワシもいつかは答えを出さねばならん…その時、あの3人の誰かを選ぶのか、それとも他の誰かを選ぶのか…それはまだ分からん…じゃが今は…」

千冬

「フツ…いや、お前は最低な人間では無いぞ。アイツらの事をちゃんと考えているだろ？あのマダオとは違うよ。」

永遠

「…そう言つて貰うと気が楽になるのお…」

千冬

「全くお前の爪の垢をあの馬鹿に飲ませてやりたいな。」

永遠

「飲んでも奴には効かんじやろ？」

千冬

「…そうだな…」

そんなものであの馬鹿の鈍さが治るなら苦勞はしないか…

永遠

「織斑先生…話は変わるがワシの事を簪と本音、鈴に話そうと思うんじやが…」

千冬

「あの3人にか？…まあお前がいいなら私は構わんぞ。アイツ等はお前家にも行つた事があるから束とも面識があるしな。」

永遠

「スマンな…」

千冬

「それにアイツ等なら誰かに話すなんて事はしないだろうしな。」

永遠

「そうじゃな。」

千冬

「それで何時頃話すんだ？」

永遠

「今度の週末にワシの家に呼んで話そうと思つとる。学園の中じゃと誰が聞いとるか分からんからな。」

千冬

「分かった。アイツ等とオルコットの外泊許可は取っておいてやる。」

永遠

「何から何までスマンな…」

千冬

「気にするな。お前には一夏の件で迷惑をかけているからな。これでお相子だ。」

永遠

「ならそれに甘えさせてもらうかの。」

千冬

「それでいい!」

全く一夏もこのくらい心配りが出来ればいいんだがな…

く千冬 Side out く

第064話：暴露③

〔簪 Side〕

対抗戦の次の日、私と本音、セシリアに鈴の4人は永遠に屋上に呼び出された

簪

「永遠、何の用なの？」

永遠

「ウム、実はな今度の週末じゃがワシの島に来てほしいんじや。」

鈴

「え？何で？」

永遠

「セシリアが知つとる事をお主等にも話そうと思うてな。」

セシリア

「よろしいのですか!？」

永遠

「ウム、東さんと織斑先生にも相談してある。二人は構わんそうじゃ。」

セシリア

「そうですか。」

永遠

「それに簪達なら誰かに話したりせんじやろうしな。」

セシリア

「そうですね。」

鈴

「ねえ！アンタ達だけで納得しないでよ！セシリアが知ってる事って何？」

セシリア

「…ココでは詳しく言えませんが永遠さんの秘密です。」

簪&本音&鈴

「えっ!？」

簪

「永遠の秘密って！」

セシリア

「皆さんも気にはなっていたのでしよう？」

鈴

「それは…確かにそうね…アンタのISの事とか気になってたし…」

本音

「うんうん！」

永遠

「それも含めて話すんじゃよ。」

簪

「でも、何で私達に？」

永遠

「お主ら3人はワシの島にも来た事があるし、束さんの事も3体目の事も知っとるからな。何よりお主等を信用しとるからじゃよ。」

簪&本音

「…// // // //」

鈴

「クサイ台詞ね〜♪」

永遠

「カカカツ♪そうじゃな！自分で言つてて恥ずかしいわい！じゃがお主等を信用しとる

のは本当じゃよ。」

セシリア

「フフツ♪それでどうします？話を聞きたいですか？」

そんな事決まってる！

簪

「私は聞きたい！」

セシリアだけが知ってる秘密何て…知っておかないと差がつけられちゃう！

本音

「私も〜♪」

鈴

「私もよ。ずっと気になってたし。」

永遠

「ならスマンが週末は予定を開けといてくれ。織斑先生にはすでに許可を貰っとる。」

簪&本音&鈴

「はい！」

永遠の秘密か…一体なんだろ…

く簪 Side outく

楯無 Side

楯無

「…いいなあ…」

火ノ兄君の家にお泊り…しかも今回は火ノ兄君の秘密を教えて貰う為に行くのか…

彼に何かあるのは知ってるけど私には教えてくれないんだよね…調べても何も出ないし…

楯無

「…いつその事、後をつけようかな」「そんな事を許すとも?」「え?」

私の言葉を遮って来た声を聞いて私は壊れたロボットみたいにギギギツと音を立てる様に後ろを向いた…そこにいたのは…

楯無

「…う、虚ちゃん…何でココに…」

虚

「貴方が仕事を放つたらかきにしていなくなつたからです!仕事も終わってないのに何してるんですか?」

楯無

「…あ、あのね…これは、その…」

虚

「言い訳は後で聞きます！行きますよマダ才嬢様！」

楯無

「ま、待つて虚ちゃん！その呼び方はやめて!!」

虚

「仕事が終わるまではこの呼び方をすると聞いた筈ですよ。マダ才嬢様。」

楯無

「うわ~~~~~ん!!」

く楯無 Side outく

く一夏 Sideく

一夏

「……………」

鈴にフラれた日から俺の周りは変わった…

その理由はその鈴だ…

鈴の俺に対する態度は今までとまるで変わって無かった…

今だって一緒に昼食を食べてるし、最初はそう思っていた…
でも2, 3日するとその変化に気付いた…鈴は俺に対して深く関わらなくなっていた

…

今までの鈴なら俺が何かすると必ず反応していたのに今はそれが無くなっていた…
この時になって俺はようやく火ノ兄が言っていた言葉を理解した…

永遠

『鈴はもう貴様に振り向く事は無い』

あれは…こういう事だったんだ…

鈴

「一夏、どうしたの？早く食べないと時間が無くなるわよ？」

一夏

「え!?!…あ、そうだな…スマナイ…」

鈴

「変なの？」

一夏

「……………な、なあ鈴？今度の休みに家に帰ろうと思うんだけど…」

鈴

「ふくん……で？」

一夏

「……え、ああ……それで久しぶりに弾達に会いに行こうと思ってるんだ。だからお前も一緒にどうかなって……」

鈴

「弾達か……久しぶりに会いたいわね……」

一夏

「な、なら行かないか？」

鈴

「悪いけど私はパス。その日は予定が入ってるのよ。だからアンタ一人で行ってきて。今度別の日に誘ってよ。」

一夏

「そ、そうか……それじゃあ仕方ないか……」

鈴のこんな態度も最初は冷たくなったんだと思っただも違っただも……
本当に俺の事をただの友達にしか思っていないんだ……

それ以上の人間として見てないんだ……

これが、俺が今まで無自覚に人を傷つけて来た事への代償か……

一夏

「…本当に馬鹿だな…俺…」

〜一夏 Side out〜

〜簪 Side〜

永遠が秘密を話してくれると言ってから数日、待ちに待った週末になった
私達はいつも通りI Sで火紋島に向かった

束

「いらつしや〜い♪みんなよく来たね♪」

クロエ

「お待ちしております♪」

到着した私達を束さん達が出迎えてくれた

セシリア

「よろしくお願ひします♪」

私達は居間に来ると永遠が話を切り出した

永遠

「…さて、早速話すのでしょうか。お主等も早く知りたいじやろ？」

簪

「うん！」

永遠

「話す前に言っておくがワシが今から言う事は本当じや。信じるかどうかはお主等に任せるが、誰にも言うてはならん。よいかの？」

簪

「うん！」

鈴

「分かったわ。」

本音

「は〜い♪」

永遠

「よろしい…実はな……………」

そして永遠は自分の正体を話してくれた

詳しい内容は【第00話：プロローグ】を呼んで

全てを話し終わった永遠に、私達は…

本音&鈴

セシリア

「はい…」

クロエ

「皆さん必ず最初に笑いますからね…」

ちなみにセシリアと東さん、クロエさんの3人は永遠が話を始めると耳栓をしていた
最初は何でそんな事をしたのか分からなかったけど、話を聞いて笑わない為だったん
だ…

簪

「ううっ…知ってたなら教えてくれても…」

私は涙目になって頭をさすっていた

セシリア

「ですが耳栓をしたら話が聞けませんわよ？」

鈴

「確かにそうだけども…」

本音

「酷いよ…」

東

「ごめんね♪流石に東さんもーくんの拳骨はまた喰らいたくないんだよ♪」
クロエ

「兄様の拳骨って効くんですよね〜…」

それから暫くして頭の痛みがやつと引いて来た…

簪

「痛かった…でも永遠が別の世界からの生まれ変わりなんて…」

鈴

「流石にいきなりは…」

本音

「うん…信じられないね〜…」

永遠

「まあそれが普通の反応じゃよ。いきなり信じろと言う方が無理があるからの。」

簪

「…でもセシリアや東さん達は信じてるんですよ？」

セシリア

「はい♪」

東

「モチロンだよ♪それにとーくんのISSがその証拠だからね。」

鈴

「…神様が造ったISSか…だからあんな無茶苦茶な能力を持ったのね…」

本音

「【ラインバレル】がそうだもんね。」

クロエ

「その通りです。」

永遠

「さて、ワシとワシの機体の事は話した。もう一度言うが誰にも話すでないぞ？」

簪

「うん、分かってる！」

鈴

「大丈夫よ！」

本音

「誰にも言わないよ♪」

永遠

「よろしい！ならこれから改めてよろしゅう頼むぞ。」

簪

「うん♪」

これでセシリアに少しは追いつけたかな…

永遠

「それで、何か聞きたい事はあるかの？」

簪

「あ！それなら…どうして『ラインバレル』だけ東さんに預けてるの？ずっと気になってただけど…」

鈴

「それ私も気になってた！」

本音

「私もう♪」

永遠

「ソレか…東さん、言ってもいいかの？」

東

「いいよ♪それは東さんが教えてあげる。新型開発の為に使わせて貰ってるんだよ♪」

鈴

「新型ですか？」

それから私達は東さんから「ラインバレル」を預かっている理由を聞いた

ISを宇宙に還す…ISで宇宙に行く…その為に搭乗者の生存率を上げる為に「ラインバレル」を研究していた

東さんの目的を聞いて私はとても感動した…だから…

簪

「東さん！私にも手伝わせて下さい！」

鈴

「私もです！協力させて下さい」

本音

「お手伝いします♪」

束

「ありがとう♪じゃあこれからよろしくね♪」

簪&本音&鈴

「はい♪」

セシリア

「よかったですわね♪」

永遠

「そうじゃな。」

クロエ

「はい♪」

その後も永遠と束さんに色々な事を聞いた

束さんが開発している第5世代の事…

永遠のISが実は第6や第7世代だった事…

今日は本当に驚きの連続だった…

♪ 簪 Side out ♪

♪ 一夏 Side ♪

? 1

「馬つ鹿野郎おおおおおおおおおおおつ!!!」

バキッ!

一夏

「ぐっ!!」

俺を殴ったのは昔馴染みの親友・五反田弾…

俺は休みを利用して弾の祖父が経営している五反田食堂に来ていた

俺は鈴にフラれた事、それまで自分が鈴にしてきた事を弾に話すと力一杯殴り飛ばされた

? 2

「ちよつとお兄!?!何してんの!一夏さんを殴るなんて、いくらお兄でも許さないわよ!?!」
騒ぎを聞きつけてやって来たのは弾の妹・五反田蘭だった…

弾

「どけ蘭!!コイツはやっちゃならねえ事をやったんだ!!今のコイツはお前が庇う様な奴じゃねえっ!!」

蘭

「何言ってるのよ!」

一夏

「…いいんだ蘭…弾の言う通りだ…」

蘭

「え?」

弾

「…いいか蘭…コイツはな…コイツは…鈴にフラれたんだよ!!!」

蘭

「フ、フラれたって!…一夏さんが!?!鈴さんに!?!」

弾

「その理由も全部コイツが原因だ!鈴を傷つけて、泣かせ続けて、愛想をつかされたんだ!!」

蘭

「そんな!?!…嘘ですよね?」

一夏

「……………」

蘭

「本当…何ですか?」

一夏

「…ああ…」

蘭

「そんな!?!」

弾

「……………それで、お前これから鈴とどう付き合っていくんだ?」

蘭が仲裁に入った事で落ち着いたのか弾は聞いて来た

一夏

「…分からない…鈴は…俺の事をただの友達、ただの幼馴染だって…言ってる…」

蘭

「…鈴さんがそんな事を言うなんて…」

弾

「そうか…：…鈴に感謝しろよ！本当だったらお前は赤の他人だって言われてもおかしくないんだからな！まだ友達扱いしてくれるだけありがたいと思え!!」

一夏

「………ああ……」

赤の他人…：…そうだな…：…そう呼ばれても仕方のない事をしてきたんだもんな…

一夏

「…俺…：…本当に馬鹿だよな…：…鈴みたいな子をどれだけ…泣かせてきたんだろうな…」

弾

「両手の指じや数えられねえよ！」

一夏

「…そんなにいるのか…俺…：…どれだけ鈍いんだよ…」

弾

「お前の鈍さは病気レベルだ！それも一生治らない程のな!!」

一夏

「…そこまでか…………千冬姉に言われたよ…また鈴みたいに泣かせる様な事したら弟だろうと許さないって…火ノ兄は俺にパワーボムを喰らわせるって言ってたよ…」

弾&蘭

「火ノ兄?」

一夏

「…火ノ兄永遠…俺と同じ男のIS操縦者だ…」

蘭

「もう一人いたんですか!？」

一夏

「…ああ…アイツさ…鈴の恋を応援してたんだ…でも、俺が鈴を傷つけるとその度に説教と制裁を喰らわせてさ…一度パイルドライバーをかけられて三途の川に送られたよ…」

弾

「三途の川って…お前死にかけたのかよ?…それでもその鈍さが治らなかつたのか…」

一夏

「……ああ……」

弾

「……はあ……一夏……一つ答えろ。お前反省してるのか？」

一夏

「も、勿論だ！……でも鈴は……もう……」

弾

「当たり前だ！反省した所で鈴はもうお前を見る事はねえよ!!」

一夏

「……火ノ兄も同じ事を言ってたよ……鈴はもう俺に振り向く事は無いって……」

弾

「俺の言いたい事は全部そいつが言ってるのか。なら俺が言う事はねえよ。………蘭、昼飯の用意をしてくれ。」

蘭

「え？」

弾

「一夏……今日はうちで食ってけ。」

一夏

「弾……」

弾

「お前が鈴にした事は俺も許せねえ！ 本当なら家から追い出してやるところだが、これ以上追い打ちをかける様な事は俺もしたくねえんだ。千冬さんやその火ノ兄って奴にタツプリ説教されたみたいだしな。」

一夏

「……………」

弾

「お前も反省してるみたいだから、飯食って元気出せって言ってるんだよ。」

一夏

「……弾……スマナイ……」

弾の気遣いで俺はそれから食堂で昼食をとった……

く一夏 Side outく

第065話：フランスの金、ドイツの銀

（永遠 Side）

ワシが自分の素性を簪・本音・鈴の3人にバラしてからさらに1週間が経ったあの試合から2週間たったので謹慎しておった篠ノ之も登校してきおった

2週間ぶりに会っていきなりワシを睨んできおったが無視した

関わる的確な事になりそうに無いからのお

ちなみに篠ノ之は謹慎が解けると同時に部屋の移動が通達されたらしい

何でも篠ノ之が移動できる部屋の準備が終わったそうじゃ

まあ元々男の織斑と一緒に住んどる事の方がおかしい訳じゃから当然の事なんじゃがな

さらに学園ではもうじき学年別個人トーナメントとか言う催しがあるそうじゃ面倒じゃから出たくなかったんじゃが全員強制参加の行事らしいから早々に諦めたついでにワシの方でも問題と言うほどでも無いんじゃが：数日前からクロエがおらんくなった

何でも束さんが以前使っておったラボで独自に研究をしとるらしい

内容は分からんが毎日定期的に連絡をくれておるから安心しておる
そして今日のワシはハッキリ言つて焦つておる！

理由は簡単、寝坊したんじゃ！

どういう訳か今日はいつもの時間に起きる事が出来んかった！

ワシは大急ぎで束さんの朝食を用意して畑仕事を済ませるとI Sを展開して学園に
飛んで行つた

く永遠 Side outく

く一夏 Sideく

あれから俺はどうしようかずっと悩んでいた…

この学園に来てからの俺は何もかもが空回りばかりしていた…

しかもその全てが俺自身の言葉と行動が原因で失敗している…

だから誰かを責めるといふ事も出来なかつた…

火ノ兄とオルコツトに喧嘩を売つた時も俺自身の傲慢さが原因だつた…

クラス代表を決める試合に向けて勉強も訓練も何もしていなかった…

鈴の気持ちに気付かず傷付ける事しかなかったのも俺だ…

今迄の自分を思い起こすと本当にどうしようもない奴だと思つた…

これじゃあ火ノ兄の言う通りクズって言われても仕方ないと思った：

何とかして今の自分を変えないといけない：

そう思ってもどうすればいいのか分からなかった：

そんなある日の朝：

生徒1

「やっぱりハツキ社製がいいなあ。」

生徒2

「ハツキってデザインだけじゃないの？」

生徒1

「そのデザインがいいのよ！」

生徒3

「性能的にミューレイのいいなあ、スムーズモデル。」

生徒2

「物は良いけどさあ、高いじゃん。」

俺が教室に来るとクラスメイトの何人かがカタログを見ながら話し合っていた

どうもISSスーツのカタログ雑誌みたいだ

その中の一人が俺に気付くと聞いて来た

生徒3

「織斑君のI Sスーツってどこのなの？見た事の無い型だけど。」

一夏

「あく何でも特注品らしい。どつかのラボで作ったそうなんだ。イングリッド社のストリートアームモデルって聞いたな。」

生徒1

「へ〜そうなんだ〜。」

真耶

「I Sスーツは肌表面の微弱な電位差を検知して操縦者の動きを各部位に伝達、それを受けてI Sは必要な動きを行います。」

スーツの解説をしながら山田先生が教室に入って来た

真耶

「また、スーツは耐久性にも優れているので小口径拳銃の銃弾なら完全に受け止めます。ちなみに衝撃は消せませんのであしからず。」

生徒2

「山ちゃん詳しい！」

真耶

「先生ですから……って山ちゃん？」

生徒3

「山ピー見直した。」

真耶

「今日がスーツの申し込み開始日ですからね。予習してあります。……って山ピー？」

山田先生って色んなあだ名がつけられてるんだよな……俺が知るだけでも8つはあるぞ

真耶

「あの……教師をあだ名で呼ぶのはちよつと……」

生徒1

「あ……そう言えばまーやん！火ノ兄君はスーツがいらなけれど何でなの？」

真耶

「まーやんって……はあく……ええつと火ノ兄君ですね？彼の場合はあの2機のISにスーツと同じ機能が組み込まれているので必要無いんですよ。」

生徒2

「そうだったんだ。」

生徒3

「少し羨ましいいな〜…着替える必要ないんだもんね〜…」

真耶

「それは私も同意見です。正直私も着替えるのが面倒ですからね。織斑先生も同じ事を言っていましたよ。」

生徒1

「そうなんですか!?!」

「そう言えば代表を決める試合の時そんな事言ってたな…」

千冬

「諸君おはよう。」

生徒達

「おはようございます!」

千冬姉が来ると一瞬で空気が変わった

千冬

「さて、今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機だがISを使用するから気を引き締めて行うように。各自のスーツが届くまでは学校指定の物を使って貰うが、それを忘れたら水着で受けて貰う。それも無いようなら下着でも構わんだろう。」

千冬姉…このクラスには男が二人いるんだぞ

「……………」

教室のドアを開けて入って来た二人の生徒を見て俺を含めたクラスの全員が固まった

真耶

「転校生のシャルル・デュノア君とラウラ・ボーデヴィツヒさんです。」

一夏

「え？」

何故なら挨拶をしながら入って来た生徒の服装は…俺と同じ男物の制服だったからだ

く一夏 Side out

く千冬 Side

今このクラスは全員が固まっている…その理由は…

真耶

「それではお二人とも。自己紹介をお願いします。」

シャルル

「はい。シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不馴れな事も多

いのですが皆さんよろしくお願いします。」

二人の転校生の内の一人が男だからだ

あのオルコットでさえ驚いて固まっている

生徒1

「お、男……」

シャルル

「はい、この学園には僕と同じ境遇の人がいると聞き、本国から転入して……」

千冬

「……」

シャルル・デュノアか……礼儀正しい立ち居振る舞い、整った顔立ち、髪は金髪で背中まで伸び、後ろで束ねている

一夏や火ノ兄と比べたら細い手足、全体の印象は貴公子と言ったところか

だが、何だこの違和感は？

まさかコイツ……

生徒達

「きゃ……」

シャルル

「はい?」

千冬

「まずい!」

私は急いで耳を塞いだ

生徒達

「きゃあああああああああ——————っ!!!」

ええい! 相変わらずだなコイツら!

生徒1

「男子! 新しい男子!」

生徒2

「しかもうちのクラス!」

生徒3

「さらに美形! 織斑君達と違った守ってあげたくなる系!」

生徒4

「地球に生まれて良かった~!!」

千冬

「騒ぐな貴様等! 静かにしろ!」

真耶

「み、皆さん！まだもう一人の自己紹介が終わってませんよ！」

私と山田先生が注意するとやっと静かになった

だが…もう一人の転校生がまさかコイツだったとは…

ラウラ

「……………」

視線を正面から私に変えたか…私が言うのを待ってるのか？

千冬

「…挨拶をしろ…ラウラ。」

ラウラ

「はい、教官。」

千冬

「ココでは先生と呼べ。今の私はお前の教官じゃない、この学園の教師だ。」

ラウラ

「了解！」

…絶対分かってないな…

ラウラ

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

生徒達

「……………」

真耶

「あ、あの…以上ですか？」

ラウラ

「以上だ。」

…はあ…コイツにデユノアみたいな挨拶を求めるのはやはり無理か…

私はため息をついたせいでラウラの行動に気付くのに遅れてしまった…

ラウラはいつの間にか一夏の前に移動していた

ラウラ

「貴様が!!」

バチン!!

私が気付いた時にはラウラは一夏を殴っていた…

一夏

「いきなり何しやがる!？」

ラウラ

「私は認めない!! 貴様があの人の弟など!! 認めてたまるか!!!」

一夏

「…え?」

ザワザワ…

…本当に変わってないなコイツ…

永遠

「何じゃ? やけに騒がしいのお?」

千冬

「ん? 遅刻だぞ!」

ガンツ!

とりあえず遅刻した事に対して一発殴っておいた

永遠

「グツ! スマン! 寝坊してしもうた…申し訳ない!」

シャルル

「え!」

ラウラ

「何!」

遅れて来た火ノ兄を見て驚いているな…：どうやらコイツ等の所にもまだ火ノ兄の事は伝わって無い様だ…：大方、束が情報操作でもしたんだろうな…：鈴も知らなかったからな…：

シャルル

「な、何で!?!男の操縦者は織斑一夏一人の筈じゃ!?!二人目がいるなんて…」

ラウラ

「どういう事だ?こんな奴の情報は聞いてないぞ!?!」

永遠

「誰じゃお主等?」

千冬

「このクラスに転入してきた二人だ。金髪がシャルル・デュノア、銀髪がラウラ・ボーデヴィッツヒだ。」

永遠

「さよか、ワシは火ノ兄永遠じゃ。一応二人目の操縦者となつとる。よろしゅうな。」

シャルル

「あ、はい…：シャルル・デュノアです。こちらこそよろしく…」

ラウラ

「…フンツ！」

永遠

「ん？お主は…」

ラウラ

「何だ？」

ラウラを見て何を唸ってるんだ？

永遠

「いや、知り合いに似てると思っただけじゃよ。スマンかったな。」

ラウラ

「そうか…」

知り合いだと？この学園以外で火ノ兄の知り合いと言ったら束ぐらいしかない筈だが…

…まあいいか…その辺はプライベートに引つかかるしな

千冬

「そろそろHRを終わる。各自はすぐに着替えて第二グランウンドに集合するように！今日は2組と合同でISの模擬戦を行う。以上解散！」

私は手を叩きながらHRを終わらせた…

千冬

「織斑、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男だろ。」

シャルル

「よろしくね織斑君。僕の事はシャルルでいいよ。」

一夏

「ああ、俺も一夏でいい。…て言うか何で俺だけ？火ノ兄は？」

千冬

「アイツの場合は1日の半分は学園にいないからな。いつもいるお前が面倒を見る。」

一夏

「あ…そういう事…分かった…」

シャルル

「あの…どういう事ですか？」

一夏

「その話は後にしてくれ！今は移動が先だ！男子は空いているアリーナの更衣室を使う。実習ごとに結構の移動があるから早めに慣れてくれよ！」

シャルル

「そ、そうなんだ!?!…あれ？火ノ兄君は？」

千冬

「アイツならさつきそこの窓から出て行ったぞ。」

シャルル

「窓からって……ここ3階ですよ!？」

千冬

「あの程度の高さはアイツには無い様なものだ。」

「アイツは色々と規格外の存在だからな……」

シャルル

「は、はあ……」

一夏

「ほら急ぐぞ!今日は第二アリーナの更衣室だ!」

シャルル

「あ、うん……」

「……しかし、アイツら遅刻せずにアリーナに来ればいいんだが……」

生徒5

「ああっ!転校生発見!」

生徒6

「織斑くんと手を繋いでる！」

生徒7

「織斑くんと転校生くんの薄い本……ぐふふふ。」

生徒8

「いた！こつちよ！」

生徒9

「者共〜！出会え〜い！出会え〜い！」

私は廊下で騒いでるやつらの事を無視してアリーナに向かった…
聞こえてくる会話の幾つかがかなり危ない気がしたが無視した…

……

……

…

千冬

「……………」

一夏

「遅くなりました！」

シャルル

「すみません！」

千冬

「遅い!!」

ガンツ!

案の定遅刻しおって…

一夏

「な、何で俺だけ…」

千冬

「デュノアは転校初日だから大目に見ただけだ…次からは容赦はせん！」

シャルル

「は、はい! 気を付けます!!」

ちなみに火ノ兄は私よりも先にアリーナに来ていた

く千冬 Side outく

第066話：妹襲来！

「シャルル Side」

皆さん初めまして

僕の名前はシャルル・デュノア、今日この学園に転入してきたフランスの代表候補生です

ちなみに僕は…その、男です…

それで色々あつてこの学園に来ただけ…

まさか男性操縦者に二人目がいたなんて思わなかった

事前に貰った情報では織斑一夏君一人しかいないって聞いていたんだけど…

二人目に関する情報は何一つ無いからどうしよう…

とりあえず今は彼に対しては暫く様子を見よう…

彼に接触するのはどういう人間か調べてからでも遅くないわけだし…

そんな事を考えながら今は2組との合同授業でアリーナにいます

千冬

「本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する！」

シャルル

「……………ねえ一夏、何で火ノ兄君は制服のままなの？」

一夏や他の皆はISスーツに着替えてるのに彼だけ着替えてないんだよね…

一夏

「アイツの機体はISスーツが必要無いんだよ。」

シャルル

「え！そんな機体があるの!?!」

一夏

「ああ、と言うかアイツの機体は見た目から普通じゃないからな…」

シャルル

「え？それってどういう…」

千冬

「お前達…無駄話とはいい度胸だな！」

一夏

「げっ!!」

ガンッガンッ!!

シャルル

「うう…痛い…」

こ、今度は僕にも出席簿が…

千冬

「今日はまず専用機持ちによる模範演技をして貰う。…オルコット、嵐、織斑、前に出る！」

セシリア&鈴

「はい。」

一夏

「…はい…」

専用機持ちが3人…どんな対戦形式なんだろう？

鈴

「…私達3人で模範演技つて…バトルロイヤルみたいにやるんですか？それなら結果が見えてますよ？」

千冬

「ほお？…嵐、どのような結果になるんだ？」

鈴

「セシリア、私、一夏の順で決まりですよ。」

千冬

「確かにお前の言う通りになるだろうな。お前はオルコットに必ず勝てるという訳ではないし、織斑はまだ雑魚だからな。」

一夏

「ぐはっ!」

一夏…雑魚呼ばわりされてダメージを受けてる…

千冬

「だが、生憎とバトルロイヤルでは無い。」

鈴

「ならどうやるんですか?」

千冬

「慌てるな。まだ役者は揃って『どいてくださ〜〜〜い!!』むっ!」

上空から叫び声が聞こえて来たけど…アレって!

一夏

「山田先生!?!」

【ラファール】を纏った山田先生が落ちて来た!

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!

シャルル

「一夏!？」

山田先生…一夏に突っ込んで行っちゃった…

一夏

「…【白式】の展開が間に合ったな…一体何が…」

真耶

「あ…あのう織斑君…その…困ります…こんな場所で…その…」

ムニユツ

あ!…山田先生の胸を…

一夏

「え?…あつ!」

一夏つて…ラツキースケべなんだね…

鈴

「アンタいつまで乗っかってんのよ?」

一夏

「ちちち違う!俺はそんなつもり…」

鈴

「何焦ってるの？授業が進められないから早くどきなさいって言うてるのよ。」

一夏

「!?…そつか。……………すみません、山田先生…」

真耶

「いえ、私も悪かったですから。」

…何だろ？

…一夏の様子が少しおかしかったような……………気のせいかな？

千冬

「……………まず先に言っておくが山田先生はこれでも元代表候補生だ。実力も一部の者を除いてお前達より遥かに上だ。」

真耶

「昔の事です。それに候補生止まりでしたし…」

千冬

「模範演技には山田先生も加わって貰う。」

…一部って誰だろ？

セシリア

「これで4人…では2対2のタッグ戦ですか？」

「専用機持ち3人と元代表候補生1人を同時に相手にするなんて!!」

一夏

「そ、そうだよ千冬姉! 流石にそれは…」

千冬

「織斑先生だ! …オルコット、凰、お前達もそう思うのか?」

セシリア

「いいえ…永遠さんが使うのが『ドットプラスライザー』でしたら、ほんの僅かですがわたくし達が勝てる見込みがある程度ですわね…」

鈴

「私も同意見です。【戦国龍】が相手なら100%勝てません。」

真耶

「私もそうです。火ノ兄君がどちらの機体を使っても勝てる自信はありません。」

現役の代表候補生二人と今は教師をしているとはいえ代表候補生だった人が揃って勝てないなんて言うなんて

織斑先生が言っていた一部の人がって火ノ兄君の事なんだ

鈴

「て言うか一夏、アンタまでそんな事言うなんて思わなかったけど?」

一夏

「え？」

鈴

「永遠の強さはアンタも知ってるでしょ？ コイツが4人がかりだからって後れを取るよ
うな奴だと思ってるの？」

一夏

「…それは…そうだけど………けど…お前とオルコットの二人が組めば…」

鈴

「あのね、私達が組んだぐらいで勝てるなら苦労しないわよ。そうでしょセシリア？」

セシリア

「はい！……織斑さん…忘れてませんか？ 永遠さんに勝てるなら織斑先生にも勝てると言
う事を？」

一夏

「あ！そうだった！」

え？……今何て言ったの…

ラウラ

「オイ！ 貴様今何て言った!？」

セシリア

「はい？永遠さんに勝てるなら織斑先生にも勝てると言ったのですが？」
やっぱり聞き間違いじゃ無かった…

ラウラ

「何だとい？そんな事があつて堪るか！コイツが教官より強いなど!!」

ボーデヴィツヒさん凄い顔で火ノ兄君を睨んでるな…

ココは本人に聞くのが一番早いかな…

シャルル

「あの…織斑先生…オルコットさんが言つた事つて…」

千冬

「そう言えばお前とボーデヴィツヒはまだ知らなかつたな。火ノ兄に勝てれば私に勝つ事も出来るぞ。コイツはそれだけ強いからな。」

ラウラ

「きよ、教官?!…そんな…そんな事があつて堪るか！私は認めないぞ!!」

一夏

「……………」

鈴

「どうしたの？」

一夏

「いや、俺も入学した日に千冬姉から火ノ兄の方が強いって聞かされた時、アイツみたい
に反論して最後は喧嘩を売ったんだ。」

鈴

「それでどうなったの？……って聞くまでも無いか……」

一夏

「ああ、説教されて半殺しにされた……」

鈴

「でしようね。」

……半殺しって……一体何があったの……

千冬

「さて、そろそろ始めるぞ。」

永遠

「織斑先生……ワシはどっちを使えば………ん？」

千冬

「どうした？」

落ちて来たのは人参型の物体…

いや、これはロケットか…

こんな物持っているのは…束か!?

そう思った時、ハッチが開くと…

?

「に〜い〜さ〜ま〜〜〜♪」

中から出て来たのは束じゃ無く、銀髪の少女だった…

く千冬 Side out

「義妹だと!？」

永遠

「そうじゃ…（この娘は東さんの助手じゃ。）」

千冬

「(何?!…だから束のロケットを使ったのか!…しかしこの娘…ボーデヴィツヒにそっくりだな…さつきお前が言っていた知り合いと言うのはコイツの事か?)」

永遠

「(そういう事じゃ。)…で、何故にお主がココに?」

クロエ

「はい!兄様にプレゼントとお届け物を持ってきました♪」

永遠

「プレゼント?届け物?」

クロエ

「はい♪まずはコレをお渡ししますね。」

そう言つて火ノ兄に一振りの刀を渡した

永遠

「ぬ!『ラインバレル』!もういいんか?」

持つてるって言うの!？」

セシリア

「そうですわ。永遠さんは全部で3機のI Sを所有してますの。」

ラウラ

「一人で…3機だと!？」

鈴

「その最後の機体が【ラインバレル】よ。」

一夏

「お前達知ってたのか!？」

セシリア

「ええ。他には本音さんと4組の更識簪さんも知ってますわ。」

鈴

「つまり学園にいる人間で3体目の事を知ってたのは私達6人だけよ。と言っても、私と本音と簪が【ラインバレル】の事を知ったのは1カ月ほど前だけだね。それ以前に生徒で知ってたのはセシリアだけよ。」

一夏

「そ、そうなんだ…」

「まあ普通は驚くだろうな…：ISを2機持っているだけでも驚く事なのにそれが3機となればな…」

その上、ISは467個のコアの数までしか無い…：コイツ等はその内の3つを所持していると思っっているだろうからな…」

だが、実際は火ノ兄の機体のコアは神が造った物だからその中には入らないのだが…私や東、オルコット達、一部の火ノ兄の正体を知る者達しか知らない事だからな…何も知らんコイツ等からすれば信じられない事なんだろう…言うつもりは無いが…

く千冬 Side outく

くセシリア Sideく

遂に「ラインバレル」が永遠さんの手に戻ってきましたか…

しかし、クロエさんのプレゼントと言うのは何でしょうか？

永遠

「それでプレゼントとは何じゃ？」

クロエ

「はい♪こちらが私の本命！永遠兄様の為に作り上げた【戦国龍】専用の射撃武器！その名も【種子島】でくす!!!」

クロエさんがそう言うのとロケットのハッチが開いて中から1丁の銃、いえ、ライフルが出てきました

永遠

「…【種子島】…確かに火縄銃みたいな銃じやな…」

セシリア

「…これは…両手銃ですわね？」

クロエ

「はい♪」

箒

「ふざけるな!!」

永遠

「ん？」

突然篠ノ之さんが怒鳴り声を上げましたが…ふざけるなって、クロエさんはふざける様な事は何もしていませんが…

箒

「射撃武器だと！【戦国龍】にそんなもの必要無い!!今すぐ持って帰れ!!」

鈴

「アンタ何言ってるの？」

千冬

「篠ノ之…何故お前がそんな事を言う？【戦国龍】は火ノ兄の専用機だ。どんな武装を積もうと火ノ兄の自由だ。」

箒

「そ、それは…」

千冬

「何故お前の許可を貰う必要がある？お前が何を考えてるのは知らんが【種子島】はクロニクルがわざわざわざ火ノ兄の為に造った物だ。それをお前の訳の分からない妄言で貶すな！お前は黙っている！また懲罰房に行きたいのか？」

箒

「ぐぐつ…」

千冬

「スマンなクロニクル…その馬鹿は無視してくれ。」

クロエ

「いえ気にしてません。」

セシリア

「永遠さん…織斑先生…」

永遠

「大方【戦国籠】に銃は相応しくないとでも思つとるんじやろ。」

千冬

「ああ、自分の物と決めつけているなアイツ。」

永遠

「…傍迷惑な奴じゃ…」

セシリア&千冬

「(本当ですわ(だな)…)」

クロエ

「兄様どうかなさいましたか？」

永遠

「いや、何でもない…クロエ、これはどういった武器何じや？」

クロエ

「はい♪この【種子島】はビームと実弾の2種類の射撃が出来ます。実弾の方は6連装のシリンドラーになっています。弾丸は通常のISと同じ物を使えますが、私特製の徹甲弾も装填出来ますよ♪」

シャルル

「ビーム!!」

鈴

「徹甲弾ですって!!」

一夏

「ど、どうしたんだよ!?!」

真耶

「いいですか?…今、世界のどの国でもレーザーやレールガンの開発が精一杯なんです。ビーム兵器はその上を行く武装ですが、未だに開発の目途すら立っていないんです。そして、徹甲弾は戦艦の装甲すら貫通する危険な弾丸です。それを搭載しているんですから驚いて当然です。」

一夏

「な!?!そんなもん使っているのか!?!」

千冬

「…確かにそうだな…ビームはともかく徹甲弾はマズイな………クロニクル、スマンが弾丸の方は持って帰って貰えるか?流石に危険すぎる。」

クロエ

「…そうですか…分かりました…」

永遠

「…………織斑先生、この徹甲弾、1発だけ持つといてもいいかの？折角作ってくれたもんじゃからな、1発でも持つときたいんじやよ。」

クロエ

「に、兄様！」

千冬

「…そうだな…1発位ならいいだろう。…ついでに火ノ兄、【戦国龍】を展開しろ。【種子島】の試し撃ちと徹甲弾の威力を見ておきたい。」

永遠

「分かった。」

返事をするに永遠さんは【戦国龍】を展開しました

〈オオオオオオーンッ!!!〉

その姿を見てデュノアさんとボーデヴィツヒさんの二人はまた驚いていますわね

シャルル

「な、何この機体!?!」

ラウラ

「全身装甲のドラツヘだと!？」

真耶

「これが火ノ兄君のI Sの一つ【戦国龍】です。」

シャルル

「【戦国龍】…」

真耶

「ちなみに火ノ兄君のI Sは全て全身装甲フルスキンですよ。」

シャルル

「全てって…3機全部ですか!？」

千冬

「そうだ。…火ノ兄、まずはビームの方を撃ってみろ。」

永遠

「あいよ!」

永遠さんは【種子島】を構えると上空に向けて撃ちました

ドギユウーンツ!!

セシリア

「…これがビーム兵器ですか。わたくしの【スターライト】のレーザーより遥かに高い威

力ですわね。」

永遠

「…これでも威力を7割に抑えたんじやぞ。」

シャルル

「これで7割!!」

ラウラ

「チツ!!」

千冬

「次は徹甲弾だ。」

永遠

「うむ!」

ドンツ!!

永遠さんは先程と同じように上空に向けて撃ったのですが…

バリエイインツ!!

永遠

「あ!?!」

千冬

セシリア

「…何でもその方がいいらしいですわ。永遠さんもそれでいいそうですからわたくし達も気にしないようにしてますの。」

鈴

「はい。」

本音

「そうで〜す♪」

千冬

「何を考えてるんだコイツ等は…」

まあ永遠さん達ですからね…

永遠

「……………ところでクロエ…さっきから気になつとる事があるんじゃないか？」

クロエ

「何ですか？」

永遠

「お主…何日寝とらん？…眼の下のクマが凄い事になつとるぞ…」

そう言えばわたくしも気になってましたわね…

千冬

「…てつきりこんな顔だと思ったが？」

セシリア

「そんな訳無いでしょう!？」

クロエ

「大体一週間くらいですね。でもこの程度平気ですよ♪」

鈴

「アンタどう見ても平気じゃないでしょ!？」

本音

「性格変わってるよ…」

千冬

「そうなのか？」

セシリア

「はい…ココに来てからのクロエさん…テンションが異常に高いんです…」

永遠

「普段のこやつはもっと大人しいからの…」

千冬

「……………なるほど…七徹もすると、こんな風になるのか…」

永遠

「全く、あれだけ睡眠は取れと言うといたのに…説教と言いたいが今は寝かせる方が先じゃな…クロエ、お主もう帰って寝とれ!!」

クロエ

「え〜〜〜! い〜や〜で〜す〜! 久しぶりに会えたのに〜〜〜!」

やっぱり性格変わってますわね…

永遠

「いいから寝とれ!!」

ゴンツ!

クロエ

「アタツ…きゅ〜…」

一夏

「お、おい…いくら何でも殴って気絶させる事無いだろ!」

千冬

「いや、こうでもしないとコイツは帰らないし眠りもしないだろうからな。」

永遠

「そういう事じゃ。セシリア、鈴、本音、スマンがクロエを見といてくれ。目を覚ましたらもう1発殴っても構わん！」

セシリア&本音&鈴

「は〜い！」

永遠さんはわたくし達にクロエさんを預けるとロケットの中に入っていきました
暫くすると出て来たのですが：

気絶したクロエさんを連れて中に戻って行きました

再び出てくると、ハッチを閉めました

するとロケットは動き出してそのまま飛んで行ってしまいました

永遠

「これで良し!!」

セシリア

「何処に飛んで行ったんですか？」

永遠

「ワシの島に飛んで行くように設定しといたわい！」

千冬

「そうか…（束には連絡したのか?）」

永遠

「(うむ、ロケットの中でな…着いたらクロエを寝かせておく様に頼んである。)」

セシリア

「よかったですわ。)」

鈴

「(あのままじゃマジでやばそうだったしね…)」

本音

「(うんうん!)」

一夏

「何ヒソヒソ話してるんだ?」

千冬

「何でも無い!」

他の人達に聞かれると面倒ですからね…

くセシリア Side out く

く一夏 Side く

火ノ兄の妹がやって来るっていうハプニングがあつたけど…

「織斑先生それだけはやめて下さい！【ラインバレル】が相手だと心が折れます!!」

セシリア

「そうです！絶対勝てません!!」

真耶

「あのく私も【ラインバレル】が相手と言うのはく…」

山田先生までそんな事言うなんて…

一夏

「な、何なんだよ！オルコットや山田先生まで…【ラインバレル】って何なんだよ!？」

千冬

「お前達の気持ちも分かるが【ラインバレル】のデータを取る為だ。悪いが犠牲になってくれ。」

セシリア&鈴&真耶

「いやああああああああー……っ!!!」

鈴

「生贄なら一夏だけにして下さい!」

一夏

「オイこらどういう意味だ!」

永遠

「生贄ってなんじゃ！いくらなんでも印象が悪すぎるぞい！！」

セシリア

「いえ…あながち間違つて無い気が…」

鈴

「あの見た目ならね…」

真耶

「そんなに怖い姿なんですか？」

セシリア

「そこまで怖いという訳ではないんですが…」

鈴

「見た目の印象に生贄って言葉がピッタリなんですよ…」

永遠

「やめんかお主等！大体織斑なんぞが生贄になる訳無かるう！」

一夏

「お前もどういいう意味だ！！」

永遠

「生贄には若い女子と相場が決まっとうろ。マダオなんぞ要らんと言うとるんじや！
のし付けて返すわい！」

一夏

「マダオって呼ぶなああああああ————っ!!」

シャルル

「何なのマダオって？」

一夏

「知らなくていいから！聞かないでくれ！」

シャルル

「う、うん…分かったよ…」

千冬

「お前達、コントもそのくらいにしておけ。」

千冬姉…いくら何でもコントは無いだろ…

千冬

「さて火ノ兄、『ラインバレル』を展開して貰おうか！」

永遠

「あいよ…」

火ノ兄は刀を地面に突き刺すとその場で1回転して他の2機の様に地面に円を描いた

そして、今迄と同じように光が火ノ兄を包み込んだ

光の中から現れたのは「ドットブラ斯拉イザー」と同じ白い全身装甲フルスキのISだったけど、この見た目って…

ザワザワ…

一夏

「お、鬼!?!」

千冬

「…これが「ラインバレル」か……二本の角、牙の様な口に、左三つ巴…なるほど鬼の様な姿だな…」

セシリア

「はい…」

シャルル

「…白い…鬼…」

真耶

「確かに鬼と生贄って合いますね…」

鈴

「でしょ…」

永遠

「確かに【ラインバレル】は見た目は鬼じゃが…生贄は酷いぞい！」

千冬

「その話はもういい！いい加減模範演技を始めるぞ！」

セシリア&鈴&一夏&山田

「はい！」

永遠

「織斑先生、始める前に他の者達と観客席に移動してくれんか？」

千冬

「…分かった。ついでにバリアの強度も上げておく。」

そう言えばバリアって強化したんだっけ…今迄は強化前の状態だったのか

千冬姉は火ノ兄の頼みを聞いて皆と観客席に移動していった

全員の移動が終わると…

千冬

「よし…それでは…始め!!」

ドンツ!!!!

千冬姉が試合開始の合図を上げると同時に全員が飛び上がった

一夏

「……え？」

俺以外…

千冬

「何をボケツとしている！初めろと言ったぞ!!」

一夏

「あ……ま、待ってくれ！」

俺は急いで上空に飛び上がった…

鈴達は遅れた俺を呆れた顔をして待っていた…

………恥ずかしい…／／／

く一夏 Side out く

第068話・模範演技【ラインバレルVS蒼い雫&甲龍&白式&疾風の再誕】

く라우ラ Sideく

私は라우ラ・ボーデヴィツヒ…ドイツの代表候補生だ

ドイツのIS特殊部隊【シユヴァルツェ・ハーゼ】の隊長で階級は少佐だ

私は軍の命令でこの学園に転入してきたのだが、その命令は私にとっては渡りに船だった

この学園には私が尊敬する織斑教官がいる

教官に再び我がドイツ軍に来て頂けるように説得する事が出来る

そしてもう一つ…教官の輝かしい功績に泥を塗った男…織斑一夏…奴をこの手で潰す事が出来る

だが、学園に来てみれば驚きの連続だった…

織斑一夏以外のもう一人の男の操縦者…火ノ兄永遠…

こんな奴の情報は私は聞いていない…我がドイツ軍の情報網にもかからないコイツは一体何者なんだ？

そしてそいつはあろう事かISを3機も所有しているとの事だった

その上、教官はそいつの方が自分よりも強いと仰った

私は認めない！織斑一夏と共に私の手で叩き潰し必ずや教官の目を覚まさせてやる

!!

ㄱラウラ Side outㄱ

ㄱ三人称 Sideㄱ

《アリーナ》

真耶

「…オルコットさん、凰さん…「ラインバレル」の武装は何ですか？」

真耶はまずセシリアと鈴に「ラインバレル」の武装について聞いてきた

セシリア

「…両腕に装備された2本の刀だけですわ。」

一夏

「何だそれだけか！」

鈴

「私達が知ってるのはね。」

一夏

「…え？」

セシリア

「永遠さんはわたくし達との訓練ではその2本の刀しか使った事ありません。他の武装に関してはあるのかさえ分かりません。」

鈴

「けど、最低でも後一つはあるわね！それも強力なのが！」

セシリア

「わたくしも同意見です。」

セシリアと鈴は「ラインバレル」に隠された武装があると読んでいた

一夏

「な、ならどうするんだ？」

真耶

「【ラインバレル】と戦った事があるお二人はどんな作戦を考えていますか？」

鈴

「…作戦って言うほどじゃないけど…二つだけ分かっている事があるわ！」

セシリア

「一つは…【ラインバレル】相手に長期戦はこちらが不利!!」

鈴

「二つ目は…アイツにアレを使われたら間合いは意味が無い事よ!!」

一夏

「どういう意味だよ？アレってなんだよ！」

鈴

「言った通りの意味よ！」

セシリア

「わたくし達の作戦はただ一つ!!」

鈴

「一斉攻撃による速攻よ!!」

そう叫ぶとセシリアと鈴は永遠に向かって突っ込んでいった

真耶も少し遅れて二人の後に続いた

一夏

「お、おい！それが作戦？そんなんでいいのか!？」

置いて行かれた一夏もとりあえず永遠に向かって行った

「わっ!？」

鈴は突きを紙一重で躲すと、彼女の後ろからセシリアが【スターライトmkII】を撃ってきた

永遠

「くっ!」

永遠はその射撃をバック転の要領で躲すとそのまま回転し二本の太刀で鈴を下から斬り裂いた

鈴

「かはっ!!」

セシリア

「鈴さん!?:...くっ!」

セシリアは追撃でレーザーを撃つが永遠は距離を取りながら躲していった

真耶

「!？」

永遠の移動した先に先回りした真耶はアサルトカノン【ガラム】アサルトライフル【ヴェント】をそれぞれ展開し攻撃を仕掛けた

永遠

「はっ!」

永遠は真耶の攻撃に対し、左の太刀を高速で回転させ弾丸の全てを弾き飛ばした

真耶

「そんなのありですか〜!?」

真耶が驚きながら攻撃をし続けている時、セシリアは斬られた鈴の所に向かった

セシリア

「鈴さん大丈夫ですか?」

鈴

「このくらい平気よ!」

セシリア

「そうですか…しかし、流石は永遠さんですわね。…わたくしの射撃を躲すと同時に鈴

さんに攻撃までするなんて…」

鈴

「ホントよ…一夏!ボケつとしてないでアンタも仕掛けなさい!!」

一夏

「お、おう!?!」

永遠達の戦闘に入り込めず手をこまねいていた一夏に鈴が怒鳴りつけた

セシリアは「スターライトmkIII」を砲身側に持ち直すと…
セシリア

「行きますわよ!」

鈴

「ええ!」

一夏

「お、おう!」

真耶の攻撃を防いでいる永遠に今度は3人で仕掛けた

永遠

「むっ!」

永遠は3人が接近してくるのに気が付くと、攻撃を防ぎながら真耶に一気に接近して
右の太刀で彼女が持っていた武器を切り裂いた

真耶

「しまった!?!?!がはっ!」

永遠はそのまま真耶の脇腹に蹴りを放った

真耶を蹴り飛ばすと永遠はすぐにセシリア達に向かって行った

セシリア&鈴

「はあああああーっ!!」

永遠が向かって来るとセシリアはライフルで殴りかかり、鈴は青龍刀で斬りかかったが…

ガキンツガキンツ!!

セシリア&鈴

「くっ!?!」

永遠は右の太刀でセシリア、左の太刀で鈴の攻撃をそれぞれ受け止めていた

一夏

「貫ったあああああーっ!!」

そこに、両腕が塞がった永遠に一夏が後ろから斬りかかった

永遠

「……………ふんっ!」

ガンツ!

一夏

「何っ!?!」

永遠は一夏の剣を右足で受け止めていた

永遠

「…とりやあああああーっ!!」

永遠はそのままの態勢で回転しセシリア達を弾き飛ばした
全員が離れると永遠は再び距離を取った
セシリア達も一度全員が合流した

鈴

「ホントに強いわねアイツ！」

真耶

「これが火ノ兄君の実力と『ラインバレル』の性能ですか！」

一夏

「…性能か…」

鈴

「一夏…言つとくけど永遠の強さは機体の性能だけじゃないわよ。」

一夏

「え？」

鈴

「確かに『ラインバレル』の性能は無茶苦茶高いわよ。でもね、性能が高いって事はそれだけ扱うのに高い技術と実力が必要って事なのよ。だけど永遠は『ラインバレル』の性

能を完全に引き出してやるわ。つまりアイツは十分な技術と実力を持つてるって事なのよ。」

一夏

「……………そんな奴に勝てるのかよ……」

鈴

「……さあね……ただ【ラインバレル】の倒し方は以前永遠から聞いた事があるわ。」

一夏

「え!?ほ、本当か?」

一夏はまさか自分の機体の倒し方を本人が教えているとは思わなかった

セシリア

「はい。……と言ってもやる事は先程までと同じですが……」

一夏

「へ?」

鈴

「【ラインバレル】の倒し方は反撃の隙も与えないくらいの連続攻撃よ!……後はアンタよ

!」

一夏

「…俺？」

鈴

「アンタの【零落白夜】でSEを一気に削りきるしかないのよ。それでも一撃では無理よ。何発も当てないといけないけど…」

一夏

「なら俺に…」

鈴

「…アンタが永遠に連続で攻撃を当てられる訳無いし、結局は【零落白夜】も加えた全員の連続攻撃しかないのよ！」

一夏

「!?…そう…か…」

一夏は任せろと言おうとしたが、鈴から勝てないとハッキリ言われて落ち込んでいたセシリア

「…わたくし達の作戦は短期決戦！これだけですわ！」

真耶

「分かりました！」

《観客席》

千冬

「…短期決戦か…」

ラウラ

「教官。アイツ等は何を考えてるんですか？数の上では圧倒的に有利にも拘らず、突貫をするとは愚か者の考えとしか思えませんか？」

ラウラはセシリア達の作戦が理解出来ずにいた

千冬

「本当にそう思うのか？」

ラウラ

「違うのですか？」

千冬

「少なくとも織斑以外の3人が何も考えないと言う事は無い。特にオルコットと山田先生はな。」

何気に姉からの評価が低い一夏…

ラウラ

「ですが実際…」

千冬

「お前はさつき数の上では有利と言ったが、あの程度の数は火ノ兄には無意味だ。アイツは1対1の戦いは元より1体多の戦いも得意だ。数で潰すならこの学園の教師と生徒が全員でかからなければいけないだろうな。」

ラウラ

「な!？」

千冬

「それに私でもオルコットと嵐の二人と同じ事をするだろう。火ノ兄の『ラインバレル』に勝つとしたらそれしか方法が無いからな。」

シャルル

「それはどういう意味ですか？」

千冬

「オルコットと嵐が言っていた通りだ。理由は戦いを見ていれば分かる。だが、お前達が理解出来るかどうかは別だ。」

シャルル

「はっ?」

千冬

「先に一つ教えておいてやる。火ノ兄のISは3機全てが今迄の常識が通用しない機体ばかりだ。その中でも「ラインバレル」が持つ能力は正真正銘の化け物とも言うべきものだ。」

シャルル

「ば、化け物って…そんな大げさな…」

本音

「ホントの事だよ♪」

シャルル

「え？」

千冬

「布仏か、そう言えばお前は「ラインバレル」の能力を知っていたな。お前から見てあの機体はどう思う？」

本音

「整備課泣かせの機体で〜す♪」

千冬

「フツ、整備課志望のお前らしい感想だな。だが私は話だけしか聞いていないのだが本当の事なのか？」

本音

「はい♪多分ひののんもこの試合で使うと思いますけど、ビックリしますよ♪」

千冬

「なら私も楽しみにさせて貰うか。」

ラウラ&シャルル&生徒達

「……………」

楽しそうに話す本音と千冬の会話の意味を誰も理解する事は出来なかった

《アリーナ》

セシリア達が「ラインバレル」攻略について話し合っている時…

永遠

「…さて…そろそろコイツのお披露目と行くかの……………のう…「ラインバレル」…」

永遠は「ラインバレル」の持つもう一つの武装を使用する事を決めた

……………

……………

…

セシリア

「行きますわよ!!」

真耶

「!?…待って下さい!…アレは…」

セシリア達が一齐攻撃を仕掛けようとした時、永遠は両手に持った太刀を腕の鞘に納めていた

鈴

「刀を仕舞った?何のつもり?」

一夏

「降参!…何てこと無いよな…」

セシリア

「当り前です!…でも、永遠さんは一体何を…」

永遠の行動の理由が分からずにいるセシリア達は次の瞬間驚きの表情に変わった

セシリア&鈴&一夏&真耶

「!?」

【ラインバレル】の腰の【テールスタビライザー】が開くと中からアームが飛び出し、その先端には武器と思われる装備が取り付けられていた

これこそが【ラインバレル】のもう一つの武器【エグゼキューター】だった

永遠はアームから「エグゼキューター」を取り外すと右手で構えた
一夏

「な、何だアレ？」

鈴

「…多分アレが…」

セシリア

「【ラインバレル】の…隠された武装…」

真耶

「お二人の予想通りでしたね！…本当にあつたなんて！」

鈴

「でも…アレって一体何なの？」

セシリア

「あの形では近接武器か遠距離武器かの区別も難しいですわね！」

セシリア達が「エグゼキューター」の使用方法について考えていると…

ジャキン！

セシリア&鈴&一夏&真耶

「!?」

右手に持っていた「エグゼキューター」の先端部が開き、そこから高出力のエネルギーが溢れ出した

永遠はそのまま両手で持つと大きく振りかぶった

永遠

「うおおおおおおおーっ！！！！」

セシリア

「これはまさか!?!」

そのまま振り下ろすと、そのエネルギーは大出力の斬撃となってセシリア達に向かって来た

セシリア&鈴&一夏&真耶

「!!」

4人は斬撃をギリギリ躲す事が出来たが…

鈴

「くっ！…何よ今の!?!…!!?!…SEが!?!」

その余波で4人のSEはかなり削られていた

真耶

「攻撃の余波だけでこれだけ削られるなんて!?!それにアリーナのバリアまで!?!」

真耶の言う通り永遠の放った斬撃はセシリア達を通り過ぎそのままアリーナのバリアを消滅寸前の状態にまで斬り裂いていた

一夏

「何だよ今の攻撃!!」

セシリア

「アレは…ビーム兵器ですわ!!」

一夏

「ビーム兵器って!?火ノ兄の妹が持ってきたライフルと同じ!」

鈴

「そうよ!でもまさか…「ラインバレル」に既に搭載されていたなんて…」

真耶

「しかも、あの【種子島】と言うライフルよりも遥かに強力ですね…強化されたバリアがあそこまで破壊されるなんて…」

真耶の言葉に全員が「エグゼキューター」で斬り裂かれたバリアの場所を見つめていた

アリーナのバリアは前回のクラス対抗戦から強化されており強度は倍近くになっていた

当然その事は学生全員にも伝えられている

永遠

「どうじゃ？【エグゼキューター】の威力は？一応威力は半分以下に抑えたんじゃないかな。」

一夏

「あれで半分以下かよ!？」

セシリア

「【エグゼキューター】…それがその武器の名前ですか!」

真耶

「…【執行者】…ですか…」

一夏

「執行者って?」

真耶

「【エグゼキューター】の意味です。法律・命令・裁判・裁判・処分と言った事を実行する人の事です。…この場合は死刑執行人と言った所でしようか…」

鈴

「…随分物騒な意味ね…ホントに出来そうだから余計に怖いわ…」

セシリア

「…はい…」

一夏

「つまり俺達は今から処刑されるって事かよ!？」

鈴

「…アンタならされてもおかしくないけどね…」

一夏

「どういう意味だよ!？」

セシリア

「ご自分の胸に手を当てて考えてみればいいですわ。」

一夏

「うぐっ…はい…」

自分が今まで無自覚にしてきた事を突かれて言い返せない一夏だった

《観客席》

千冬

「…【エグゼキューター】…あんな物を隠し持っていたのか!？」

ラウラ

シャルル

「ちよつと待つて下さい！いくらなんでもそれはやり過ぎですよ!」

千冬

「やり過ぎなものか！強度を2倍に上げてこの有様だぞ!」

本音

「そうそう♪」

千冬

「(こうなったら東に強化して貰うしかないかもしれんな…今度相談してみるか…)」

ラウラ

「教官?」

千冬

「何でも無い!……だが、アレを使う前にビーム兵器を出してくるとは…アレと同時に使用したら本当に手が付けられんぞ!」

本音

「ホントですよ…」

シャルル

「…あの…さつきから言っているアレって何ですか?」

千冬

「【ラインバレル】の持つ特殊能力の事だ。口で説明するのは簡単だが実際に見た方がいいだろうな。」

本音

「それに〜言っても信じられないだろうからね〜♪」

千冬

「そうだな。」

シャルル

「は、はあ〜…」

《アリーナ》

セシリア&鈴&一夏&真耶

「……………」

4人は永遠の「エグゼキューター」を見て次にどう動くのか考えていた

その間に永遠は「エグゼキューター」を左手に持ち替え、左腕の太刀を抜いた

鈴

「…実体剣とビーム兵器の二刀流！」

永遠の構えを見て鈴は二刀流と考えたが…

永遠

「……………」

永遠は左手の「エグゼキューター」の先端をセシリア達に向けると射撃攻撃を始めた
セシリア&鈴&一夏&真耶

「!?」

4人は突然の永遠からの意外な攻撃に驚きながら躲していた
セシリア

「……くっ……」
「エグゼキューター」は射撃も出来るのですか!?

永遠

「それは違うのお。」

セシリア&鈴&一夏&山田

「えっ!?!」

4人は永遠の言った言葉が理解出来なかった

何が違うのか分からないからだ

鈴

「何が違うって言うのよ!」

永遠

「【エグゼキューター】は射撃武器じゃ！これが本来の使い方なんじゃよ!!」

真耶

「それ射撃武器なんですか!？」

セシリア

「違うってそういう事ですの…」

セシリア達は「【エグゼキューター】は射撃も出来る近接武器と思っていたが、実際は近接戦が出来る射撃武器だったのだ

永遠

「さて、「【エグゼキューター】のお披露目はこのくらいでいいかの。」

そう言うと「【テールスタビライザー】からアームを出し「【エグゼキューター】を収納すると、右腕の太刀を抜いた

セシリア

「…【エグゼキューター】を収納した?…でしたら永遠さんの次の行動は…:…:」

セシリアが永遠の行動を考えようとした瞬間…

…目の前にいた「【ラインバレル】が消えた…

…:…:そして次の瞬間

一夏

「ぐあああああつ!!」

セシリア達は突然聞こえた悲鳴の方を向くと…

…後ろから【ラインバレル】に斬られた一夏がいた

鈴

「一夏!? アイツ! アレを使ったわね!」

鈴は即座に【龍咆】で永遠のいる場所に砲撃を行ったが【ラインバレル】は命中する前に再び消えてしまった

鈴

「くっ!…何処にいるの!」

永遠

「い(い)じ(じ)や(よ)。」

鈴

「え?」

今度は鈴の目の前に現れ両手の太刀で×の字に斬り裂いた

鈴

「ぎゃあああああーっ!!!」

セシリア

「鈴さん!?!…【ティアーズ】!!」

セシリアは「ブルー・ティアーズ」を四方に飛ばし永遠の動きに対応しようとしたが

∴

ザンツザンツザンツザンツ

セシリア

「え?」

ドドドドオオオオーンツ

4基の「ブルー・ティアーズ」は一瞬の内に斬り裂かれ破壊されてしまった

セシリア

「そんな!?!…はっ!?!」

永遠は「ブルー・ティアーズ」を破壊され動揺した隙を突き、今度はセシリアの前に

現れ横一文字に斬り裂いた

セシリア

「きゃあああああーっ!!」

真耶

「オルコットさん!」

永遠は最後に真耶の右隣に移動すると二本の太刀による連続突きを与えた
真耶

「うあああああああああーっ！！」

全員に通り攻撃を加えると永遠は一端距離を取った

《観客席》

生徒達

「……………」

一方、観客席の千冬達も本音以外は「ラインバレル」の動きを理解出来ずいた

千冬

「……これが【ラインバレル】の能力……………まさかこれ程とは……」

シャルル

「あのお……織斑先生……僕の気のせいならいいんですけど……さつきから【ラインバレル】がまるで瞬間移動してるみたいに動いてるんですけど……」

生徒達

「……………」コクコク

シャルルの言葉に全員が頷いていた

シャルル

「……………」

ラウラ

「教官…先ほど教官は【ラインバレル】の能力の一つと仰りましたが…まさかあの機体には他にも何かあるんですか？」

千冬

「そうだ、【ラインバレル】には二つの特殊能力がある。さつき布仏が言った整備課泣かせと言う意味はもう一つの能力から来た言葉だ。」

ラウラ

「!?…まだあるのか…」

《アリーナ》

一夏

「ぐっ…ううっ…一体何が起きたんだ…いきなり後ろから斬られたぞ…」

鈴

「っ…。アレが【ラインバレル】の能力の一つ【転送】よ。瞬間移動って言えばアンタでも分かるでしょ。」

一夏

「しゅ、瞬間移動!? そんな馬鹿な!？」

鈴

「なら今の私達の状態はどういう訳？」

一夏

「そ、それは…」

一夏は否定したかったが、自分達の今の状況が全てを物語っていた

真耶

「話には聞いていましたが、これ程厄介な能力なんて思いませんでしたよ…」

セシリア

「そして『ラインバレル』にはもう一つ能力がありますからね。」

一夏

「まだあるのかよ!？」

セシリア

「そうですね。…こちらでも直接見た方が早いですわね。永遠さん!!構いませんか？」

永遠

「構わんぞ!来い!!」

セシリア

「それでは鈴さんお願いします。」

鈴

「うおりやああああーっ!!!」

鈴は連結させた【双天牙月】を投げつけた

ガキンツ!

一夏

「え!?!」

永遠は避けずにその攻撃を受けた

一夏

「な、何で避けなかったんだ?」

鈴

「今の攻撃で出来た傷を見ていなさい!」

一夏

「え?.....何?!」

一夏は言われた通り、鈴が付けた傷を見てみると、一夏達の目の前で【ラインバレル】の傷があつと言う間に修復されていったのだ

一夏

「き、傷が治った!? 何で!？」

セシリア

「アレが【ラインバレル】のもう一つの特特殊能力【自己再生能力】ですわ。」

一夏

「【自己再生】!？」

真耶

「そうですね! 全てのISには元から自己修復能力が備わっているんですが…」

鈴

「【ラインバレル】の修復速度は通常のISの数百倍。永遠が言うには例えバラバラに破壊されても半日もあれば完全に修復されるらしいわ。」

一夏

「そ、そんな!？」

セシリア

「更にあの能力にはSEの自動回復能力も備わってます。先程の鈴さんの攻撃で受けたダメージもすでに回復していますわ。」

一夏

「な!? S Eまで!!」

真耶

「そうです! しかも【ラインバレル】のあの能力はダメージを受けると同時に瞬時に発動します! その上、織斑君の【零落白夜】のようなデメリットが一切無いんです!」

一夏

「そんな奴どうやって倒すんだよ!？」

鈴

「だから最初に言ったでしょ! 【ラインバレル】に勝つには速攻で仕留めるしかないって!」

一夏

「だ、だから長期戦は不利って言ったのか!？」

一夏はこの時になってようやくセシリアと鈴が最初に行っていた言葉の意味を理解した

【ラインバレル】を相手に間合いは意味をなさず、戦闘時間が長くなるほど自分達が不利になっていくのだ

《観客席》

生徒達

「……………」

此方も再び言葉を失っていた

ラウラ

「…な、何だあの能力は…何なんだあの機体は!？」

シャルル

「ビーム兵器にワープ機能、さらに自己再生!?!…整備課泣かせてこういう意味だったの!？」

千冬

「そういう事だ。」

本音

「うん♪【ラインバレル】にはメンテが必要ないんだよく♪分子レベルで修復しちゃうらしいからね♪」

シャルル

「分子レベル!？」

千冬

「しかも、まだ単一仕様が残っているからな。」

ワンオフ・アビリティ

ラウラ

「ワンオフ・アビリティ単一仕様!?アレはセカンドシフト二次移行した機体だったのですか!!」

千冬

「違う。火ノ兄のISは全て一次の状態でワンオフ・アビリティ単一仕様を使用出来る。「ラインバレル」のワンオフ・アビリティ単一仕様に関しては私も聞いてはいないがな。布仏、お前は聞いているか?」

本音

「私もそれは聞いてないですよ?」

千冬

「なら後で聞いておくか…【戦国龍】みたいな能力だったら対策を用意せんといかんからな。」

本音

「そうした方がいいですね〜♪」

千冬

「さて、もう十分なデータも取れた事だし終わらせるか。それに…これ以上はあの4人の精神がもたん。」

千冬はこれ以上続けるとセシリア達4人がただでは済まないだろうと判断し模擬戦の終了を決めた

千冬

「そこまでだ!!これ以上続けると後の授業に響く!!降りて来い!!」

千冬の終了宣言と共に5人は地上に降りて来た

千冬

「全員アリーナに戻るぞ。」

生徒達

「はい!」

千冬達はアリーナへ移動して言った

《アリーナ》

一夏

「つ、疲れた〜〜〜」

鈴

「結局一発も当てられなかった…」

セシリア

「ホントですわ…って鈴さんは一度当てたではないですか!」

鈴

「アレは永遠がワザと当たったからノーカンよ!!」

永遠

「皆大丈夫かの？」

真耶

「大丈夫じゃないですよ……」

それから千冬達が来るまでの間、4人は疲れを取る為休んでいた

〜三人称 Side out〜

第069話：剣刃（つるぎ）

く라우ラ Sideく

アリーナに着いた私はすでにISを解除していた二人目の男を見ていた

라우ラ

「…【ライン…バレル】…」

私はさっきまで目の前で行われていた模擬戦が信じられなかった

私の【シユヴァルツェア・レーゲン】はドイツの技術の粋を集めて開発された機体だ

だが、あの【ラインバレル】とか言う全身装甲フルスキムのISは明らかに私の機体を遥かに上

回る性能を持っていた

あれほど高出力のビーム兵器を搭載している上に、あの二つの特殊能力…ワープと自

己再生だと…そんな事が可能なISが存在していたなんて…

라우ラ

「くっ…何なんだアレは?」

く라우ラ Side outく

く千冬 Sideく

千冬

「……………」

一夏達にISのエネルギー補給をさせている間私はかつての教え子の事を考えていた

ラウラの奴…「ラインバレル」の力に動揺していたが…

問題を起こさなければいいんだが……………多分無理だな…

火ノ兄の奴、ラウラに完全に目をつけられたみたいだからな…

とりあえず授業の続きをするか…

アイツが火ノ兄に何かしても返り討ちに会うのが目に見えてるしな…

千冬

「『ラインバレル』の能力も大体分かったな…さて次は専用機持ちをリーダーにしたグループで実習を行う。全員別れる。」

私がそう言った途端、一夏、火ノ兄、デュノアの所に人だけが出来た

生徒達

「第一印象から決めてました！よろしくお願いします！」

千冬

「この馬鹿共が！出席番号順に別れる!!」

私が怒鳴りつけるとそれぞれの前に移動し始めた

千冬

「全く、最初からそうし「ひののーん!!」…ん?」

ひののん?…確か布仏が火ノ兄を呼ぶ時のあだ名だったな…何かあったのか?
よく見ると火ノ兄の班だけ整列せずにいるな

セシリア

「どいて下さい!!本音さんどうしたんですか!」

本音

「セツシー…ひののんが…ひののんがいきなり倒れた…」

何だと!?

セシリア

「そんな!?永遠さん?…永遠さんしっかりしてください!」

本音

「ひののん…起きてよ…」

千冬

「落ち着け!!布仏、火ノ兄が倒れる時どんな状態だった!」

本音

「え?…えつと…:…あ!そう言えば欠伸してた…」

千冬

「欠伸だと?…まさか?」

私は火ノ兄の口元に耳を近づけると…小さいが寝息が聞こえて来た

千冬

「これは…寝てるのかコイツ!」

セシリア&本音

「え?」

鈴

「寝てるんですか?」

一夏

「何だ脅かしやがって!」

シャルル

「そんなに眠かったのかな?」

ラウラ

「フン!」

真耶

「何言ってるんですか！明らかにおかしいですよ！何の前触れも無く寝るなんて!!」
その通りだ…もしかして…

千冬

「オルコツト、風、確かお前達は「ラインバレル」を使った火ノ兄と訓練をしたと言っていたな？その時もコイツはこんな風になったのか？」

セシリア

「いえ、このような状態になった事はありません！」

鈴

「はい！何時間も「ラインバレル」で訓練した後、そのまま畑に向かったくらいです！」
シャルル

「…畑？」

千冬

「【ラインバレル】が原因で無いなら何が原因なんだ？」

セシリア

「…そう言えば永遠さん…今日は遅刻しましたわね。」

鈴

「え!?! そうなの?」

千冬

「そう言えばそうだったな…確か寝坊したと…寝坊?…そして今のコイツは眠っている?…共通するのは寝るといふ事…夢でも見てるのか?」

セシリア

「夢……!?!」

鈴

「セシリア? どうしたの?」

セシリア

「あ、いえ……鈴さん、本音さん、織斑先生、後、山田先生もちよつと…
オルコツトが呼んだメンバー…火ノ兄の事を知っている者達だな…」

千冬

「(何だ?)」

セシリア

「(多分ですけど…暫くすれば目を覚ますと思います。)」

本音

「ホント!?!」

鈴

「本音！シツ！」

千冬

「（どういう事だ？）」

セシリア

「（実は、以前永遠さんをこの世界に送った神様が夢に出て来たっていう話を聞いた事があるんです。）」

千冬

「（何？）」

真耶

「（本当ですか！）」

セシリア

「（はい。その時は追加データを貰ったと言っていたので…）」

鈴

「（今回もそうだって言いたいの？）」

セシリア

「（…はい…）」

千冬

「なるほど…その話が本当ならコイツがいきなり眠った理由も分かるな。」

真耶

「(です…ね)」

千冬

「(なら暫く様子を見るか。)」

セシリア&鈴&本音&真耶

「(はい！)」

一夏

「な、なあ…何ヒソヒソ話してるんだ？」

千冬

「何でも無い。暫く様子を見て目を覚まさないようなら病院に連れて行くと話していただけだ。」

一夏

「あ…そう…」

出来れば早めに目を覚まして欲しいが…このままでは本当に病院に送る事になるな

…

く千冬 Side outく

く永遠 Sideく

永遠

『ん？……ここは……またか……とつとと出てこんか！』

天照大神

『あら分かってたの？』

永遠

『分らないでか!!前回と全く同じじやろ!!』

天照大神

『あはは……そうね〜今度は趣向を変えるわ♪』

永遠

『やめんか!と言うか人の夢にもう出てくるでないわ!!』

天照大神

『あら酷い!折角あなたに新しい力を与えようと思ったのに!』

永遠

『んなもんいらん!!』

天照大神

『そんな事言わずに♪』

永遠

『いらんつちゆうとろうが!!』

天照大神

『残念だけどここに私が来た時点で追加されてまゝす♪』

永遠

『ふざけんなーっ!!』

前回はガンダムのデータじゃったが…今度は何をしたんじや!

天照大神

『それじゃあ貴方の新しい力、存分に使ってね〜♪』

永遠

『誰が使うかーっ!!』

天照大神

『そうそう追加されたのは【戦国龍】だからね♪』

永遠

『人の話を聞けーっ!!』

天照大神

『それとこの能力は少し扱いが難しいから一度レクチャーするわね♪目を覚ましたら実行する様にしてあるからね♪じゃ！まったね♪』

永遠

『二度と来るなーっ！！』

ワシは叫ぶと同時に意識を失った…

く永遠 Side out く

くセシリア Side く

セシリア

「…永遠さん…」

わたくしは目の前で眠り続ける永遠さんを心配していました…

恐らく永遠さんが眠っているのは以前教えて頂いた神様が永遠さんに会いに来ていると考えました…

以前それでデータが追加されたと聞かされましたから…

だから目を覚ますと思うのですが……………!?

セシリア

「と、永遠さん？」

永遠さんが薄っすらとですが目をあげましたわ！

千冬

「火ノ兄！目を覚ましたか！」

本音

「ひののん…よかった…」

鈴

「ホントよ！」

セシリア

「…永遠さん？」

何かおかしいですわね？

目を覚ましたかと思っただけゆっくりと立ち上がって…

もしかして寝ぼけてるのでしょうか？

千冬

「お、おい！ホントに大丈夫か？」

織斑先生も心配してますが……!!?

鈴

「ちよ、ちよつと永遠！アンタ何する気!？」

永遠さんは腰の刀を抜いて【戦国龍】を展開しました

セシリア

「【戦国龍】!?永遠さん!いきなりどうされたんですか?」

永遠

「……………」

永遠さんは【戦国龍】の腰の刀を抜いてそれを左手に持ち帰ると【戦国龍】の周囲が光り出しました

千冬

「今度は何だ!?!……………何っ!」

光が収まるとそこには水の入った石の水槽、金属の台、そして右手にはハンマーを握っていました

セシリア

「何ですのこれは?」

千冬

「これは…まさか!?!」

セシリア

永遠

「うむ、意識はハッキリしとったんじやが、目を覚ましてから体が勝手に動いとったんじやよ。」

千冬

「何だそれは？もしかしてさっきまでお前がやっていた作業が原因か？」

永遠

「恐らくそうじやろ。全く、妙な能力が追加されたもんじや！まあお陰でどんなものかは良く分かったわい…まさか【剣刃】を造る能力とは…」

火ノ兄はそう愚痴りながら出来たばかりの剣を地面に突き刺すと【戦国龍】を解除した

セシリア&本音

「永遠さ〜〜ん（ひのの〜〜ん）!!」

永遠

「ぬお!?」

オルコットと布仏が火ノ兄に抱き着いたか…それも仕方ないか…ここに更識がいても同じことをしただろうしな

千冬

「お前が倒れてからずっと心配していたんだ。そのくらいは許してやれ。」

永遠

「…そうじゃな…心配をかけたようじゃな…セシリア、本音…ワシは大丈夫じゃよ！」

セシリア

「本当ですか？何処も悪い所は無いですか？」

本音

「うゝゝゝ心配したんだよゝ!!」

永遠

「…ほんにスマンかったの…」

鈴

「オホン！アンタたち何時までやってんのよ！」

セシリア

「あ！ススススミマセン！」／／／

本音

「えへへゝ…つい…」／／／

鈴

「まあ分からなくはないから仕方ないけど…所で永遠？この刀って結局何なの？」

鈴がそう言いながら火ノ兄が造った刀を指さした
 全体的に青みがかった刀身と蒼い柄、そして刀身に巻き付くように複数の龍の装飾が
 施されている

一目でかなりの業物だと分かる出来だな：

永遠

「【大俱梨伽羅】…」

鈴

「え？」

永遠

「この刀の名前じゃよ。【大俱梨伽羅】と言うんじゃ。」

鈴

「【大俱梨伽羅】…（これを造るのが神様から貰った力なの？）」

永遠

「ん？…（気付いとったか。）」

どうやらオルコットの予想は的中したようだな

千冬

「（火ノ兄…実際はどうなんだ？やはり神とやらの仕業か？）」

永遠

「(うむ…【戦国龍】に刀を造る能力を追加したそうじゃ。しかも、コイツの造り方を体に覚えさせる為にワシの体を勝手に動かしたんじゃない?)」

セシリア

「(そんな事が出来るんですか!?)」

永遠

「(そうらしい! いい迷惑じゃ!!)」

セシリア&千冬

「(本当ですね(だな…))」

詳しい話は後で聞くとして今はこの刀を調べるか

千冬

「…織斑…倉庫に行つて【打鉄】の近接ブレードを2, 3本持つて来い。」

一夏

「え? 何で?」

千冬

「この【大倶梨伽羅】おおくりからと言う刀の切れ味を試す。」

一夏

「何で俺が行くの？」

千冬

「お前が目に入ったからだ！いいからさっさと持って来い！」

一夏

「理不尽だー！ー！ー！！」

一夏は叫びながらも倉庫に向かって行った

第070話：二振りの青の剣刃（つるぎ）

く千冬 Sideく

一夏

「も、持ってきました…」

千冬

「ぐ」苦勞！」

一夏は私の指示した通り、ブレードを数本持ってきた

私は地面に突き刺してある「大倶梨伽羅おおくりから」とブレードを交互に見てどうするか考えていた

千冬

「……山田先生、ブレードでこの刀を斬り付けてください。」

真耶

「えー！いいんですか!？」

千冬

「一番手っ取り早い方法です。火ノ兄構わんよな?」

永遠

「構わんぞ。」

真耶

「でも何で私がやるんですか？造った火ノ兄君がやれば…」

千冬

「火ノ兄では力が強すぎて破壊する可能性がある。それに専用機より量産型の「ラファール」の方が分かり易いからな。」

真耶

「な、なるほど…分かりました。………では、行きます!!」

山田先生はブレードを構えると、横薙ぎに斬りかかった
ガキイイイン!…ピシッ!

真耶

「え?」

バキイイン!

千冬&真耶

「あ!?!」

ブレードが…折れた!?

千冬

「聞こう。」

永遠

「今からもう1本造るがそれは後で返してほしい。賞品用の刀は許可が下りた時に改めて造る。どうじゃ?」

千冬

「…いいだろう!お前の言う事ももつともだ。その条件を飲もう。」

真耶

「ところで今から造るのとあの刀、結局どうするんですか?」

永遠

「そうじゃなく…ワシには必要無いから誰かにやるかの。」

千冬

「やるって…まあお前が造った物だから好きにすればいいが…。誰にやるつもりだ?」

永遠

「うくん…そうさの…織斑!!」

一夏

「え?…俺?」

一夏だと!?

永遠

「お主以外に織斑何ちゆう名字の生徒がおるんか?」

一夏

「いえ、いません…」

永遠

「この【大倶梨伽羅】はお前にやる。」

一夏

「お、俺に!?!いいのか!?!」

永遠

「勘違いするでない!善意でやる訳ではない!貴様のその根性と性格を叩き直す為にコイツをやるんじゃない!」

一夏

「…え?」

永遠

「先に言うておくが、今のお主にはこの刀は使いこなせん!せいぜい5割程度じゃろう。」

一夏

「はい、5割!」

永遠

「織斑先生もこれを賞品に考えておるなら覚えとくんじゃぞ。ワシが造る刀は【六道剣】りくどうけんの様な能力付きの剣じゃ。故に完全に使いこなすのは難しいぞい。」

千冬

「【六道剣】りくどうけん って…あんな物を造れる様になったのか…」

永遠

「まあ、あの6本に比べると能力は劣ってしまうようじゃが。」

千冬

「当り前だ!あんな自然災害を起こすような刀、そう何本も造られて堪るか!!」

生徒達

「ウンウン!!」

【六道剣】りくどうけん を知っている一組の連中は私の言葉に激しく同意してるな

物凄い勢いで首を縦に振っている

と言つても今日転校してきたデュノアとボーデヴィツヒの二人は分かつて無い顔をしているが

セシリア

「ですが永遠さんはその【六道剣】りくどうけんを全て使いこなしておりますわよ?」

「そう言えばコイツはあの6本の刀の力を全て使えていたな」

永遠

「ワシが使いこなせるんはここに来る前から【戦国龍】で鍛練に励んどったからじゃ。」

鈴

「そういう事か…」

永遠

「話が逸れたの。つまりじゃ織斑、コイツを使いこなせる様になればその鈍感で無神経な性格も多少はマシになるじゃろうと言うとるんじゃ!」

一夏

「うぐつ…な、何で…」

永遠

「ワシの刀を使いこなすには体だけでは無い。心と技も鍛えんといかん。それが出来ん限りコイツは只のナマクラにしかすぎん!」

千冬

「そういう事か。確かに今の織斑には使いこなせんな。そして使える様になれば心身共

に鍛え上げられコイツの性根もマシになっているという事だな。」

永遠

「さよう。…で、どうする織斑？この【大倶梨伽羅】…受け取るんか？いらんのなら別の者に渡すが？」

一夏

「……………それを使いこなせば…守れる男になれるのか？」

永遠

「知らん。それはお主次第じゃ。何でも人に聞くな！自分の事じやろうが！」

一夏

「!?…そう、だな…」

…鈴の事をまだ引き摺ってるのかコイツは？

一夏

「俺次第か…分かった！その刀…【大倶梨伽羅】を俺に譲ってくれ！頼む！」

永遠

「よかろう。今からコイツはお主の刀じゃ。それと、最後に言うておくぞ。コイツを名刀にするかナマクラにするか…それは今後の貴様の成長次第じゃ。それを肝に銘じておけ!!」

一夏

「はい!!」

名刀になるかナマクラになるかは自分次第か…その通りだな…

鈴

「…アレ? そう言えば【白式】って拡張領域パススロットに空きが無いんじゃない?」

一夏

「あ!」

永遠

「んなもん倉庫に置いとけばよからう。」

一夏

「でももし盗まれたりしたら…」

永遠

「【白式】の武装として登録しとれば他のISでは使えん。登録するだけなら問題なからう。」

千冬

「そうだな。織斑、その刀は後で登録しておけよ。その後はキチンと管理しておけ。」

一夏

「は、はい！」

永遠

「では早速もう一本造るかの。…時に授業はどうすればいいかの？」

そう言えばそうだったな…

千冬

「お前はやらなくていい。今からするのはISの歩行練習だ。グループリーダーが一人減った所で問題ない。」

永遠

「分かった…後、材料として織斑の持ってきたブレードを一本使わせて貰うぞい。」

千冬

「ああ、好きに使え。」

永遠

「んむ…さて…行くぞ【戦国龍】！」

火ノ兄は【戦国龍】を展開してさっきと同じ道具を出して作業を始めた

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…

一夏

「……………え〜つと…それじゃあ次の子…」

生徒

「……………」

今俺達は I S の乗り降りと歩行訓練をしてるんだけど…

カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…

一夏

「あ〜…」

生徒

「…あつ〜ご、ごめん私の番だね!」

一夏

「あ、うん…気になるのは分かるけど……………」

火ノ兄の作業が気になってみんな集中できてないんだよね…

他の班も同じ感じだし…

かく言う俺も火ノ兄が次はどんな物を造るのが気になってるんだよね…

千冬

「お前達!!授業に集中しろ!!全員補習にするぞ!!!」

生徒達

「は、はい!!!」

とうとう千冬姉がキレたか…

けど、そう言われてもな…

カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…

この音がどうしても気になるんだよな…

カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…カンツ…

一夏

「…はあ…次の人……って箒か。」

箒

「……………」

一夏

「箒…オイ箒!!」

箒

「!?!」

一夏

「次はお前だぞ。早くしろ。」

箒

「あ、ああ…すまない…:…:…ん?」

一夏

「どうし…あつ!」

【打鉄】が立ったままになつて…

前の子が立ったまま解除したのか…

箒

「どうするんだ?」

一夏

「…仕方ない…:…:…捕まってる。」

箒

「え?きやつ!!」

俺は箒を抱きかかえて【打鉄】まで運ぶ事にした

箒

「…:…:…」
／／／

一夏

「着いたぞ。乗り移って起動。次に歩行だ。」

箒

「あ、ああ…分かった。……………なあ一夏、今日の昼食…一緒に取らないか？」

一夏

「おお、いいぞ。」

箒

「なら屋上で食べよう！いいな！後購買で何も買って来るんじゃないぞ！」

一夏

「あ、ああ分かった。」

何をそんなに必死になってるんだ？

千冬

「お前達…授業中に昼食の話か？随分と余裕だな？」

一夏

「あ!?!す、すみません!!」

箒

「あ、あの…これは…」

千冬

永遠

「ふうくくく…出来たぞい！」

そう言う永遠さん右手には先程と同じ様に一振りの刀が握られています

セシリア

「あら？…あの形は…」

鈴

「刀と言うより剣ね？」

千冬

「そうだな。」

他の方達も同じ意見の様ですわね

千冬

「火ノ兄、それが新しい刀？…か…」

疑問形になってますわね…まああの形ですから仕方ないですわね…

永遠

「うむ…それと、ワシの造った物はこれから【つるぎ剣刃】と呼んでくれ。」

セシリア

「【つるぎ剣刃】ですか？」

千冬

「呼び方を統一する訳か。分かった。これからはそう呼ぼう。∴それで、それが新しく出来た【剣刃】か？」

永遠

「そうじゃ！名を【蒼海の大剣メイルシュトロム】じゃ!!」

永遠さんは名前を言うと剣を地面に刺して【戦国龍】を解除しました

わたくし達は永遠さんが造った剣【蒼海の大剣メイルシュトロム】を見つめていました

【大倶梨伽羅】と同じ、青を基調としたその剣の刀身には渦巻きのような螺旋の模様があり、柄の先には黒い鎖が繋がれており、その鎖の先には銀色の錨の様な物がついていました

セシリア

【蒼海の大剣メイルシュトロム】∴

鈴

【大倶梨伽羅】より大きいわね。」

シャルル

「大剣って名前の通りだね。」

セシリア

「そうですわね。」

永遠

「コイツは【大倶梨伽羅】と同じ青の【剣刃】じゃ！」

千冬

「青？…もしかして、お前が造った【剣刃】は【六道剣】と同じ属性を持っているのか？」

永遠

「そうじゃ。」

セシリア

「青と言う事は…【水覇刀ジユズマル】ですわね。」

一夏

「あの水害を起こす奴か…」

シャルル

「あの…さつきから言ってる【六道剣】って何なの？それに自然災害とか水害とかどうい

う事なの？」

一夏

「ああ、それはな…あの【戦国龍】の単一仕様が【六道剣】って言う6本の刀を呼ぶ能

力何だけど…それ全部が自然災害を起こせるんだよ。」

シャルル

「え？」

真耶

「その中の一本【水覇刀ジユズマル】は水を操れるんですけど…火ノ兄君が言うには津波や渦を作り出せるんですよ。」

シャルル

「…津波？…渦？…ええええええーっ！！！！」

やはり驚きますわよね…

シャルル

「じゃ、じゃあコレもそんな事が出来るの!？」

永遠

「出来んぞ。」

全員

「え？」

永遠

「さっきも言うたじやろ？ワシが造った【つるぎ剣刃】は【りくどうけん六道剣】より劣ると。【メールシユ

トロムも【大倶梨伽羅】おおくりからもそこまでの力は無いわい。」

シャルル

「そ、そつか…よかった…」

永遠

「さて織斑先生、注文通り一本造ったぞい。後で返すんじやぞ。」

千冬

「ああ、分かっている。…所でコレは誰に渡すつもりだ？」

全員

「……………」

皆さんそれが気なっていますわね…

専用機が手に入る様なものですからね…

永遠

「セシリア。」

一体誰に渡すんでしょう？

永遠

「セシリア！」

セシリア

「ひゃい!?…え?…わたくし?」

永遠

「そうじゃ! さつきから呼んどるじゃろ?」

セシリア

「すみません…」

永遠

「この【蒼海の大剣メイルシュトロム】はお主に託す!」

セシリア

「わ、わたくしに…」

永遠

「うむ! お主の近接武器は短剣1本だけじゃからな、ライフルで殴るよりこつちの方がやり易かろう。それに【メイルシュトロム】ならお主の【ブルー・ティアーズ】とも色が合うからピツタリじゃよ。」

セシリア

「永遠さん………ありがとうございます! 大切にに使わせていただきますわ!」

永遠

「ああ、お主なら織斑と違ってすぐに使いこなせるじゃろ。」

鈴

「いいな〜…セシリア…」

永遠

「ん？何ならお主のも造ろうか？」

鈴

「ホント!？」

永遠

「うむ、簪の分と一緒に造ろうと考えておったからな。」

鈴

「サンキュー♪」

永遠

「ただ、造るのは今度にして貰うぞ。さすがに今日はもう疲れたんでな。」

鈴

「造ってくれるなら私はいつでもいいわよ♪」

千冬

「火ノ兄、そう簡単に安請け合いで造っていいのか？」

永遠

「心配せんでも造るんは鈴と簪の二人の分だけじゃよ。それが出来れば当分は賞品用の分以外は頼まれても造らんわい。」

箒

「!?」

千冬

「ならいい。」

キーン！コーン！カーン！コーン！

千冬

「ちょうど終わったか。全員使用したISを片付けてから休憩に入る様に！以上!!」

全員

「ありがとうございます!!」

千冬

「それからオルコット、【メールシュトロム】を登録したらスマンが整備室に運んでおいてくれ。教師達の確認が終わったら返す。」

セシリア

「分かりました。」

【蒼海の大剣メールシュトロム】…永遠さんがわたくしの為に造って下さった【剣刃】つるぎ

…

永遠さんの期待に応える為にも必ず使いこなして見せますわ！

箒

「……………」

くセシリア Side outく

く箒 Sideく

箒

「……………クソ!!」

何故オルコットなんかに造ったんだ！

剣なら私にこそ相応しいと言うのに、なぜ私の分を造らないんだ！

しかも、鈴と4組の奴の分を造ったら当分造らないだと！

箒

「……………こうなれば、今度のトーナメント…是が非でも優勝しなければ!!」

いざとなつたら無理矢理造らせてやる！

く箒 Side outく

第071話：第二回織斑家家族会議

「一夏 Side」

「……うん……オカシイ……」

シャルルは何であんなに一緒に着替えるのを嫌がるんだ？

一夏

「分かん……よし！後で火ノ兄に相談しよう！」

これならアイツも怒らないだろ

とりあえず箒に誘われているから屋上に行くか

一夏

「あーそくだシャルルも誘って行くか。」

俺は着替えの終わったシャルルを連れて屋上に向かった

けど……後から来た箒はシャルルという俺を見て露骨に嫌な顔をしていた

もしかして箒の奴……

……だとしたら俺……やっちまったのか!?

箒

「…どうした！急に顔が青くなっているぞ！」

箒の声：明らかに不機嫌になってる…こんな所をアイツ等に見られたら

マ、マズイ…パワーボムが来る…

一夏

「い、いや…な、何でもない…」

シャルル&箒

「？」

俺は屋上を見渡したけどアイツ等はいなかった

た、助かった…

けど俺は恐怖心からその時の箒の気持ちについてすっかり忘れてしまっていた

〜一夏 Side out〜

〜箒 Side〜

私は昼食を永遠達と食べようと思って食堂で待っていた

本音

「かんちゃん♪」

箒

「本音、皆も♪」

本音を先頭に永遠とセシリア、鈴がやって来た

本音

「アレ？まだ食べてないの？」

簪

「うん！みんなと一緒に食べたかったから♪」

永遠

「そうじゃったか。スマンな待たせてしもうて。」

簪

「ううん♪気にしないで。」

それから私達は昼食を取り始めたんだけど、鈴が午前中の合同授業で起きた事を話し

始めた

簪

「【戦国龍】の新しい能力？」

鈴

「そうよ！【つるぎ剣刃】って言うのを造る事が出来るのよ。」

簪

「【剣刃】？」

セシリア

「【六道剣】の様な物です。あの刀の様な属性を持つ剣と思ってください。」

本音

「でも、【六道剣】よりは能力が落ちてるんだよね♪」

鈴

「それでも十分強力な武器よ。山田先生は専用機を持つ事と同じだって言ってたわ。」

簪

「そんなに!？」

永遠

「うむ！とりあえずレクチャー用に最初に造らされた奴は織斑にやった。」

簪

「あげちゃったの!？」

永遠

「ワシには必要無いからのお。」

セシリア

「ただ、それを知った織斑先生が今度のトーナメントの賞品にしようと考えて、永遠さん

にもう一振り造る様に言つたんですわ。」

簪

「賞品つて…そんな事していいの？」

鈴

「その話は永遠の造つた【剣刃】^{つるぎ}を他の先生達や学園長に見せて話し合うそうよ。許可が下りれば賞品用の分を造るんですつて。」

簪

「そうなんだ…それで、もう一つの【剣刃】^{つるぎ}はどうなるの？」

本音

「セツシーにあげたよ♪」

簪

「え!？」

セシリア

「頂きはしましたが先生方の話し合いが終わるまでは手元にありませんわ。」

永遠の造つた武器…

簪

「…いいなあ…」

鈴

「フフン♪安心しなさい！永遠が私とアンタの分も造ってくれるそうよ♪」

簪

「ホント!？」

永遠

「ああ、ただし、今日はもう疲れたんで後日になるかの。」

簪

「それでいいよ！」

私にも造ってくれるんだ…よかった…

永遠

「二人の分はトーナメントまでには造っておくからの。」

鈴

「楽しみにしてるわよ♪」

簪

「一体どんなのだろ〜♪」

凄い楽しみだな〜♪

〜簪 Side out〜

く永遠 Sideく

昼食、午後の授業が終わり、放課後になったからセシリア達に挨拶して帰ろうとしたら……

一夏

「火ノ兄ーっ！」

永遠

「ん？」

織斑がやって来た

永遠

「何じゃ？ワシはもう帰るんじゃが？」

一夏

「悪い！ちよつと相談に乗って欲しいんだ。」

永遠

「相談？……また誰か泣かしたんか！」

一夏

「ち、違う!?何でいきなりそうなるんだよ！」

永遠

「自分の胸に手を当ててみい!!」

一夏

「…すみません…」

永遠

「で?相談とは何じゃ?」

一夏

「あ、ああ…シャルルの事なんだ。」

永遠

「デュノア?何があったんじゃ?」

一夏

「実はさ……………」

そしてコイツはデュノアの事を話し始めた…

何でもコイツはデュノアに裸の付き合いをしようとして着替えに誘ったらしい

それを断られて理由が分からずワシに相談したそうじゃ

それを聞いてワシは…

永遠

「……………」

ザツ！

ワシとセシリア達は一瞬で織斑から距離を取った

一夏

「お、おい…どうしたんだよ？」

永遠

「織斑…ワシの半径3m以内に入って来るな！」

一夏

「どういう意味だ!!」

セシリア

「貴方やはりそつちの方でしたのね！」

鈴

「噂は本当だったわけね！」

簪

「永遠に近づかないで！」

本音

「ひののんはノーマルなんだから！」

永遠

「んな事も分からののか貴様は!!」

一夏

「す、すみません…」

永遠

「男同士で一緒に着替えようなんて言う奴はホモ以外いる訳無いじやろうが!!!」

一夏

「そ、そんな…」

永遠

「分かったらワシに近づくな!!ホモ斑!!」

一夏

「ホ、ホモ斑!?!何だよそれ!!」

永遠

「お前の事じゃ!!」

一夏

「俺はホモじゃなああああああ————いつ!!!」

?

「ほお〜…その話、私も詳しく聞かせて貰いたいな…」

一夏

「!?……………ち、千冬姉…」

いつの間にか織斑の後ろに姉が来ておった…

一夏

「い、何時からそこに…」

千冬

「お前がデュノアの事で相談した辺りからだ。」

殆ど最初からじゃな…

千冬

「織斑…」

一夏

「は、はい!!」

千冬

「今夜9時に私の部屋に来い…家族会議だ!!」

一夏

「いやだあああああああ——————つ!!!!」

永遠

「自業自得じゃな。」

セシリア&簪&本音&鈴

「ウンウン！」

永遠

「さて、ホモは放っておいてそろそろ「あの！」ん？」

今度は何じゃ？

く永遠 Side out

くシャルル Side

永遠

「デュノアか…何用じゃ？」

シャルル

「う、うん…火ノ兄君、これから空いてるなら一緒に訓練をと思っただけ…」
彼については何の情報も無い…

だから、少しでも一緒に行動して彼の事を知らない…

そう考えて訓練に誘っただけ…

永遠

「スマンがワシはもう帰るんでな。訓練は出来んのじゃ。」

シャルル

「帰るって…寮の部屋に？」

永遠

「いや、家にじゃ。」

シャルル

「え!? な、なんで…この学園は全寮制の筈だよ！」

永遠

「ワシは事情があつて許可を貰つて自宅通学をしとる。放課後になれば家に帰るんじや

よ。」

シャルル

「自宅通学って…あ！今朝、織斑先生が言つてた1日の半分はいないっていうのは…」

永遠

「夕方から朝まで学園におらんという事じゃよ。」

シャルル

「そ、そうだったんだ…」

まずいな…学園にいないんじや一緒に行動する事も出来ない…

つまり彼の事を知るには授業の間か、人伝に聞くしかないのか…

いきなり出ばなをくじかれちやつたな…どうしよ…

永遠

「まあそう言う訳でワシは訓練は出来ん。じゃが週末じゃつたら多少は出来る。その時にでもまた誘ってくれ。」

シャルル

「う、うん！その時はお願いするよ。」

永遠

「ん！では、ワシはもう帰る。皆、また明日な。」

セシリア

「はい♪また明日♪」

簪

「さよなら♪」

本音

「バイバイ♪」

鈴

「じゃあね〜。」

火ノ兄君はオルコットさん達に挨拶をすると帰って行った

一夏

「千冬姉ええええーっ!!」

セシリア

「まだやってますわね。」

シャルル

「…何があつたの？」

鈴

「アンタは知らなくていい事よ…」

シャルル

「そ、そう…」

深く聞かない方がいいみたいだな…

〜シャルル Side out〜

〜千冬 Side〜

今は夜9時…私の前には前回と同じ様に一夏が正座している

千冬

「さて、第二回家族会議を始めよう…」

一夏

「……………」

千冬

「一夏……………」

一夏

「……………はい…」

千冬

「やはりホモだったのかあああああーっ！！！！」

一夏

「違あああああああーっ！！！！」

私達の家族会議は今回も朝まで続いた…

く千冬 Side outく

第072話：放課後の訓練

く永遠 Sideく

ワシが家に帰ると東さんが出迎えてくれたんじやが、クロエの事を聞いたらやはり無理をひとつたらしくずつと眠つとるらしい

流石の東さんも起きたら注意しとくと言うひとつた

後、【剣刃^{つるぎ}】の事を話したら驚かれた…試しに1本造つてほしいと言われたんじやが、今日は疲れとるから明日にして欲しいと頼んで我慢して貰つた…

約束通り、次の日学園から戻ると一振り造つた

今回は【深淵の巨剣アビス・アポカリプス】を造つたんじやが、それを見た東さんは興奮し【剣刃^{つるぎ}】を研究したいと言うたから【アビス・アポカリプス】は東さんに渡した

く永遠 Side outく

くシャルル Sideく

転校してからの数日、その間に彼の戦闘記録を見せて貰つた

彼の使う3機のうち残り2機のデータを見たけど、どちらも僕の想像以上の性能だつ

た

ハッキリ言つて僕なんかより彼は遥かに強い：そう思った

そして、今日は週末、以前言つていたように火ノ兄君を訓練に誘つてみた

彼もその時の事を覚えてくれていたからすんなり了承してくれた

他にはセシリア、鈴、簪、箒に一夏も一緒に訓練している

最初に彼に軽い手合わせをお願いしたけど一撃も当てられず負けちゃった：

それで今は一夏の訓練をしている

ちなみに、鳳さんと更識さんは互いの意見を出し合いながら話し合つていた

火ノ兄君とオルコットさんは少し前に織斑先生に呼ばれて今はいない

シャルル

「ええとね：一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てない：と言うか一撃も当てられないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ。」

一夏

「うぐつ…：そう、なのか？一応分かつてるつもりなんだけど…」

シャルル

「一応知識としては知つてゐるって感じだね。僕と戦つても全然距離を詰められなかったでしょ？」

一夏

「…確かに、イクニツション・ブーレスト 瞬時加速も読まれてたしな。」

シャルル

「二夏は接近戦だけだからより深く武器の特性を把握しないと行けないんだよ。イクニツション・ブーレスト 瞬時加速も直線的で軌道予測はしやすいんだよ。」

一夏

「直線的…か…」

シャルル

「だからってイクニツション・ブーレスト 瞬時加速中に軌道を変えようなんて考えない方がいいよ。体に無理な負荷が掛かるからね。」

ちなみに一夏は今おおくりからは【雪片式型】じゃなくて火ノ兄君から貰った【大倶梨伽羅】を使っている

一夏

「なるほど…にしても、シャルルの説明は分かり易いな…今迄はなく…」

箒

「今迄が何だ？一夏？」

一夏

「何でもないです！」

確か篠ノ之さんに訓練して貰っていたんだよね…時々オルコットさんや嵐さんもしてたらしいけど…一体どんな訓練してたんだろ？

いくら何でも彼…弱すぎる気がするんだよね…まあいいや…

シャルル

「嵐さんが言ってたけど…一夏の機体は後付^{イコライザ}武装が無いんだよね？」

一夏

「ああ…拡張領域^{バサスロット}に空きが無いらしい。だから「大倶利伽羅」を量子変換出来ないんだ。」

シャルル

「きつと単一^{ワンオフ・アビリティ}仕様の^{フーストシフト}方に容量を使ってるからだよ。…普通は二次^{セカンドシフト}移行した後に発現するものなんだけど…一次^{フーストシフト}移行から使えて、織斑先生の使ってたISと同じ能力なのも異常なんだよね。」

一夏

「姉弟だからとかじゃないのか？」

シャルル

「血縁者でも同じ能力が出る理由にはならないよ。操縦者と機体の相性が重要だからね。再現しようとしても出来ないんだ。」

一夏

「そうなのか…」

シャルル

「異常って言えば火ノ兄君の機体もそうなんだけどね。」

【白式】と違って拡張領域パススロットも空いてるみたいだし、特殊能力も単一仕様ワンオフ・アビリティも凄すぎるし

…

一夏

「アイツのはああいう物だっと思うしかないんじゃないか？」

シャルル

「そ、そうだね……次は射撃の練習を試してみようか。」

一夏は開き直ってるね…多分他の皆もそうなんだろうな…

気を取り直して僕は一夏にアサルトアイフルを貸して射撃の体感を覚えさせる事にした

暫く一夏に撃たせていると…

永遠

「どうじゃ？そっちの方は？」

火ノ兄君とオルコットさんが戻って来た

簪

「永遠、セシリア！」

更識さんと凰さんが話を中断してこつちに向かつて来た

鈴

「千冬さん何だつて？」

セシリア

「【メールシュトロム】を返す為に呼ばれましたわ。」

簪

「じゃあ、話し合いは終わったの？」

永遠

「ああ、じゃからワシも呼ばれた。」

シャルル

「それでどうなったの？」

永遠

「織斑先生の話は通った。賞品用の【つるぎ剣刃】を造る事になったわい。」

鈴

「へえ、それでどんなのを造るの？」

永遠

「暫く考える。先にお主等の造ってからじゃ。」

簪

「よかった♪」

永遠

「休みの間に二人の分を造っておく。週明けには渡せるじやろ。」

鈴

「楽しみにしてるわよ。」

二人はトーナメントに関係無く手に入れられるんだ…少し羨ましいな…

セシリア

「それではわたくしも訓練に入りますわね。【メールシュトロム】を早く使いこなせる様にならなくては!」

オルコツトさんはそう言って専用機を展開し拡張領域パススロットから【メールシュトロム】を出した

簪

「これが【蒼海の大剣メールシュトロム】…本当に大きな剣だね。」

鈴

「簪は見た事無かつたわね。一夏に渡した【大お倶く梨り伽か羅ら】より一回り大きいもんね。」

「うん。」

それからオルコツトさんは火ノ兄君や凰さんに指導されながら練習を始めた
僕が彼等の練習を見ていると…

一夏

「シャルル…撃ち終わったぞ。」

射撃訓練をさせていた一夏が弾倉を空にしてやってきた

シャルル

「あーうん、どうだった？」

一夏

「やっぱり刀とは感覚が違ってたな…」

シャルル

「そこは練習あるのみだよ。」

一夏

「…そうだな…また練習を頼めるか？」

シャルル

「僕でいいならね。」

箒

「……………」

…何だろ？…妙な視線を感じたけど…気のせいかな？

一夏

「そう言えば気になってたんだけど…シャルルのISSって「ラファール・リヴァイヴ」だよな？山田先生が使っていたのと随分違う気が…」

シャルル

「僕のは専用機だからかなりいいじつであつて、正式名は「ラファール・リヴァイヴ・カスラムII」だよ。基本装備をいくらか外して拡張領域パススロットを倍にしてあるんだ。量子変換してある装備だけでも20はあるよ。」

一夏

「倍!?しかも20つて…まるで武器庫だな。」

シャルル

「そうだね。」

ザワザワ…

一夏

「ん？なんだ？」

何か騒がしいな…

シヤルル Side out

一夏 Side

生徒1

「ねえ、あれって…」

生徒2

「うそ、ドイツの新型？」

生徒3

「まだトリアル段階だって…」

騒がしいと思ったら黒いISを纏ったボーデヴィツヒがやって来たのか
ラウラ

「織斑一夏、私と戦え!!」

いきなり何言ってるんだ？

一夏

「嫌だ、理由が無い。」

ラウラ

「貴様に無くても私にある！貴様がいなければ…教官が大会二連覇の偉業をなし遂げていたのは明白だ！だから、私は貴様を認めない!!」

…コイツ…やっぱり…

だからって俺がコイツと戦う理由にはならない…

一夏

「…また今度な。トーナメントの時にでもしてくれ。」

ラウラ

「ならば戦わざるを得ないようにしてやる!!」

言うと同時に左肩の大砲を俺に向けて撃とうとした…けど…

ガキイイン!

ラウラ

「何?!」

砲身に何か当たって別の場所に砲弾が飛んで行った

ラウラ

「何者だ!?!」

永遠

「こげな所で、んなもんぶつ放したら他の者も危険じゃろうが！少しは考えんか！」

一夏

「ひ、火ノ兄!？」

砲身の向きを変えたのは火の兄だったのか！

上から鞆が落ちてきたって事は、アイツ、刀の鞆を投げつけて向きを変えたのか？

ラウラ

「貴様！何のつもりだ!？」

永遠

「言った通りの意味じゃ。訓練の邪魔じゃからドンパチはするなと言うとるんじゃ!」

ラウラ

「フンツ！丁度いい！貴様にも用があつたんだ!」

永遠

「ワシには無いが?」

火ノ兄の言う通りだ…ボーデヴィツヒには火ノ兄との接点は無い筈だが…

ラウラ

「教官は貴様の方が御自分より強いと言った！私は認めない！あの方より強い者がいるなど…認めてたまるか!!」

永遠

「いやちよつと待て！言つとくかそれはワシが言つた訳ではないぞ！向こうが勝手にそう言つとるだけじゃ！ワシは一度だって自分の方が強いなどと言つた事は無いぞ！」

ラウラ

「黙れ!!言い訳など見苦しいぞ!!」

永遠

「本当の事なんじゃが…」

ラウラ

「貴様は私が倒す！そして、教官の目を覚まさせてやる!!」

永遠

「…こやつ…人の話を聞いとらん…」

今にも火ノ兄に襲いかかろうとした時…

先生

『その生徒！何をしている！学年とクラス、名前を言いなさい!』

いいタイミングで先生からの放送が入ってくれたな…

ラウラ

「ちっ！…邪魔が入ったか…」

踵を返すとボーデヴィツヒはアリーナから出て行った
セシリア

「永遠さん大丈夫でしたか!？」

簪

「怪我とか無い!？」

永遠

「平気じゃよ♪」

鈴

「ところでアンタ、鞆をぶつけるなんて無茶するわね？」

永遠

「ん? そうかの。じゃが、ワシの場合これくらい出来んといかんからな。」

セシリア&簪&鈴&一夏&シャルル

「え?」

永遠

「ワシは織斑と違って後ろ盾が無いからの。自分の身は自分で守らねばならんのじゃ。

これはその自衛手段の一つじゃよ。」

何言ってるんだ?

一夏

「後ろ盾って…俺にそんなもの無いぞ!？」

セシリア

「…本気で仰ってますの？」

一夏

「え？」

鈴

「一夏…アンタの姉は誰？」

一夏

「誰って千冬姉だけど？」

簪

「そう、貴方は世界最強の弟。それだけで大概の人は手を出さない。」

一夏

「あ!？」

永遠

「そして、その世界最強の友人は誰じゃ？」

一夏

「…た、東さん…」

永遠

「左様。これで分かったか？お主の後ろには世界最強の姉とI Sの生みの親がおる。その二人を敵に回してまでちよっかいをかける物好きはそうはおらん。」

セシリア

「それに対して永遠さんにはそういった人がいません。」

簪

（実際はその東さんが後ろにいるけど…）

鈴

（知ってるのは私達だけだもんね…）

一夏

「……………」

永遠

「その上、ワシは他の生徒と違い、自宅通学しとる。お主よりも狙われる可能性が高い。

一応I Sの使用は許可されとるが四六時中展開しっぱなしという訳にもいかん。」

シャルル

「だから、自衛の為にああいう事を出来る様になったの？」

永遠

「そう言う事じゃ。まあ、此処に来る前から鍛練はしとったから、急いで出来る様になつたという訳では無いがの。」

…皆の言う通りだ…俺には千冬姉と東さんがついてる…けど火ノ兄には…

一夏

「…その、俺…」

永遠

「別にお主が悪いと言う訳では無い。周り環境が違つたというだけじゃ。」

一夏

「…環境…」

その言葉は以前のほほんさんに言っていた言葉だつたよな…

あの時とは意味が違うと思うけどやっぱりいろいろと考えちまうな…

永遠

「しかしあのチビツ子は何故にあそこまでワシや織斑に敵意を剥き出しにしとるんじゃ？」

ボーデヴィツヒの事を変えたか…

アイツが俺に敵意を向けてるのは…

一夏

「……………それは…スマン…俺に関しては…その、聞かないでくれ…」

永遠

「さよか。じゃがワシに対しては何故じゃ？織斑先生より強いと言われただけで何故あそこまで睨まれんといかんのかのお？」

一夏

「…多分アイツは、千冬姉がドイツで教官をしていた時の教え子だ。」

永遠

「そう言えば織斑先生を教官と呼んでおったな。」

一夏

「…千冬姉はある理由で1年程、ドイツでISの訓練教官をしていたんだ。」

永遠

「あのチビツ子はその時の生徒の一人じゃと？」

一夏

「ああ、だからアイツは千冬姉を慕ってるんだ…それで、千冬姉が自分より強いと言ったお前に対して敵意を持つてるんだと思う。」

永遠

「何じゃそれは？面倒臭い奴じゃのおく…お主と同じではないか。」

一夏

「うぐつ…あの時は…その、すまなかった…千冬姉の言う事が信じられなくて…」

永遠

「全く！チビツ子と言い、お主と言い、何故、本人が言う事を信じんで織斑先生の言う事の方を信じるんじゃ。」

一夏

「…確かにそうだけど…でも実際お前の方が千冬姉より強いじゃないか！」

永遠

「勝手に決めるな!!言つとくがワシは織斑先生とやり合った事は一度も無いぞ!どっちが強いかなんぞ分かつてはおらんのじゃ!!」

セシリア&簪&鈴&一夏&シャルル

「え?」

鈴

「そうだったの!?!」

簪

「てつきり負けたからそう言ってるのかと…」

セシリア

「思っていましたわ…」

永遠

「じゃから向こうが勝手にそう言つとるだけじゃと言つとるじやろ!!」

セシリア&簪&鈴&一夏&シャルル

「すみません…」

シャルル

「けど、そういう事なら本当に一度戦つたらどうかかな?このままじゃ噂が一人歩きし続けるよ?」

永遠

「それも面倒なんじゃよな…」

鈴

「何で?」

永遠

「この話は結構伝わつとるからな…どっちが勝つても面倒事が起きそうでなく…」

セシリア

「そうですね…永遠さんが勝てば、敵討ちとでも言つて襲われそうですし…」

簪

「織斑先生が勝てば、永遠は色々言われそう…」

シャルル

「…どつちが勝つても火ノ兄君に被害が来そうだね…」

皆の言う通りになりそうだな…

鈴

「確かに面倒ね…どうするの？」

永遠

「……………ほとぼりが冷めるまで待つしかあるまい。…織斑先生には後でもう言うなど注意しておくわい。」

セシリア

「今はそれくらいしか出来ませんわね…」

…けど、このままじゃ、俺やボーデヴィツヒみたいなのが今後でも現れるかもしれないだよな

…一夏 Side out

…永遠 Side

永遠

「…まあこの話はもういいわい！ワシもそろそろ帰らんといかんが…お主等はどうする？」

セシリア

「わたくしはもう暫く続けますわ。【メイシルシウトロム】を早く使える様になりたいですから。」

永遠

「うむ！お主なら使いこなせる！頑張るんじやぞ！」

セシリア

「ありがとうございます♪」／／／

永遠

「さて、ワシはもう行くぞ。また来週会おう。簪、鈴、お主等の【剣刃^{つるぎ}】も持ってくるから。」

セシリア

「はい♪」

簪

「待ってる♪」

鈴

「楽しみにしてるからね♪」

ワシはそう言おうと【ラインバレル】の【転送】を使って島に帰った

く永遠 Side out く

第073話：剣刃（つるぎ）の意思、白の光剣と紫の霊剣

（永遠 Side）

ワシは休みの間に簪と鈴の【剣刃】つるぎをそれぞれ造ったんじや
で、授業も全部終わったんで二人に渡そうと思うたら…

千冬

「火ノ兄、すまないが職員室に来てくれ。話がある。」

織斑先生に呼ばれた

永遠

「ぬ！…分かったが、ちと待ってくれ。…セシリア、本音、スマンが簪と鈴に渡すのが少し遅れると伝えといてくれんか？」

セシリア

「分かりましたわ。では、わたくしは鈴さんに伝えておきます。」

本音

「私はんちゃんに言っておくね〜♪」

永遠

「スマンが頼む。…待たせたの。」

千冬

「いや、あの二人の分が出来たのか。どんな物だ？」

永遠

「それは言えんの。初めに見せるのは簪と鈴じゃからな。」

千冬

「フツ、そうだな。」

永遠

「それで用件は？」

千冬

「今度のトーナメントの事だ。詳しくは職員室で話す。」

ワシはその言葉に頷くと織斑先生について行った

く永遠 Side out く

くセシリア Side く

わたくしは永遠さんからの伝言を伝える為に2組を訪ねたのですが、鈴さんは既にアリーナに行ってしまったそうなのでそちらに向かいました

アリーナに着くとISを展開した鈴さんがいました

セシリア

「鈴さん！」

鈴

「ん？…セシリア、どうしたの？」

セシリア

「永遠さんから言伝を預かってきました。鈴さんの【つるぎ剣刃】は持ってきているそうです
が、織斑先生に呼ばれたので渡すのが少し遅れると。」

鈴

「そっか…早く見たかったけど千冬さんに呼ばれたんじゃしょうがないわね…」

セシリア

「そうですわね。鈴さん、これから訓練をされるならわたくしと模擬戦をして下さいま
せんか？」

鈴

「いいけど…どうしたの急に？」

セシリア

「…実は最近【ブルー・ティアーズ】に違和感を感じる様になっていまして…」

鈴

「違和感？」

セシリア

「はい…それが何かを確かめたいんです。」

鈴

「ふ〜ん…そういう事ならいいわよ。」

セシリア

「ありがとうございます！ではすぐに準備してきますので！」

わたくしは急いで着替えるとアリーナに戻り、「ブルー・ティアーズ」を展開しました

セシリア

「お待たせしました。」

鈴

「そんなに待つてないわよ。…そういえば、セシリアはあの噂って聞いてる？」

セシリア

「噂ですか？…もしかして今度のトーナメントで優勝すれば織斑さんと付き合えるという話ですか？」

鈴

「そうよ。」

実は数日前からトーナメントに優勝すれば織斑さんと付き合えると言う噂が広まっているのです

セシリア

「鈴さんはどうされるんですか？もし優勝出来たら？」

鈴

「私？私は付き合わないわよ。アイツにはもう恋愛感情何て無いんだもん。」

セシリア

「…そうですか…」

…本気で言ってますわね…鈴さん程の女性に愛想をつかさされるなんて…馬鹿な方ですわね

セシリア

「ですが、何故その話をわたくしに？」

わたくしが織斑さんに興味が無いのは鈴さんは知っていますし…

鈴

「別に大した理由じゃないわよ。誰が噂の出所になったのかなって思っただけよ。」

セシリア

「そういう事ですか。それなら…恐らく篠ノ之さんではないですか？」

鈴

「箒か…確かにそうかもね。」

セシリア

「織斑さんに優勝したら付き合つて欲しいと言つた所を他の生徒の方達が聞いていて、今の様な噂になつたと思いますわ。」

鈴

「多分そうでしょうね。……さて、無駄話をしたわね。始めましょうか！」

セシリア

「はい！」

鈴さんとの試合を始めようとした瞬間…

ドウウウンツ

セシリア&鈴

「!？」

わたくし達の間を砲弾が通り過ぎました

鈴

「な、なに!？」

セシリア

「誰ですよ！いきなり攻撃するなんて！」

わたくし達が砲撃してきた方向を向くと、そこにいたのは…

鈴

「アンタ…」

セシリア&鈴

「ラウラ・ボーデヴィツヒ!!」

鈴

「いきなり何のつもり！」

ラウラ

「…4人がかりで一人に負ける人間が代表候補生か…余程人材不足の様だな。数と古い

だけの国は。」

セシリア

「何を言ってますの？永遠さん相手に4人で勝てる方がおかしいのですわ！」

鈴

「そうよ！アンタこそ代表候補生のくせして相手の実力も分からないの？」

セシリア

「織斑先生が言っていると思っただけですか？」

ラウラ

「!?…ああ、確かに教官は言っていた!…だが! 奴が強いのは機体のせいだ! 奴自身が強い訳では無い!!」

セシリア

「…今の言葉は聞き捨てなりませんわね…永遠さんの強さが機体のお陰ですって!」

鈴

「アイツがどれだけ自分を鍛えて手にした力かも知らないで…よくそんな事言えるわね!」

ラウラ

「なら、二人がかりでかかって来い。貴様達の言う事が本当の事か証明してみせろ。」

セシリア&鈴

「!?」

鈴

「上等っ!!」

くセシリア Side outく

く永遠 Sideく

織斑先生の話が終わって職員室を出ると簪と本音がおった

永遠

「二人ともどうしたんじゃ？」

簪

「本音から話を聞いて早く私の【剣刃】つるぎを見たくてここで待ってた。」

永遠

「さよか。じゃったらアリーナに行くかの。鈴もそこにおるじやろ。」

簪&本音

「うん♪」

ワシ等は鈴を探しにアリーナに向かおうとした時…

生徒

「ねえ聞いた？今、第3アリーナで代表候補生3人が模擬戦してるんだって！」

模擬戦の話が聞こえてきた

永遠

「3人？」

簪

「セシリアと鈴かな？」

本音

「でも後一人は誰だろ？」

永遠

「嫌な予感がするのお…行くぞ！」

簪&本音

「うん！」

何事も無ければいいんじゃないが…

く永遠 Side out く

く簪 Side く

第3アリーナに着いた私達が見た物は…

永遠

「セシリア！鈴！」

ボーデヴィツヒさんに倒されている二人だった…でも、あのセシリアが負けるなんて

…

一夏

「止めろラウラ！止めるんだ！」

織斑一夏達も来てたんだ…

永遠

「アイツ…ワザと痛めつけとるな！」

簪&本音

「え!？」

そんな…だとしたらヒドイ！

一夏

「来い！【白式】!!」

【白式】を展開した！まさか！

一夏

【零落白夜】!!」ガキンツ「何っ!!」

バリアに弾かれた!？」

まさか、今のアリーナのバリアは強化された状態になってるの！

これじゃあ中に入れない！

簪

「永遠どうするの!?!このままじゃ二人が！」

永遠

「分かつとる！【ラインバレル】!!」

永遠は【ラインバレル】を展開した

簪

「そうか！【ラインバレル】なら中に入れる！」

永遠

「簪、本音、掴まれ！」

永遠にそう言われ私と本音は【ラインバレル】の腕を掴んだ

永遠

「しっかり掴まっておれ！行くぞ！」

一夏

「!?…待ってくれ俺も…」

織斑一夏が何か言おうとしたけど永遠は【転送】を使って私達ごとバリアの中に転移した

く簪 Side outく

く鈴 Sideく

ラウラ

「やはりこの程度か。」

私はともかく、セシリアがやられるなんて…

機体の相性のせいかもしれないけど…

セシリアの動き…まさか!?

ラウラ

「止めだ!」

セシリア&鈴

「クッ!」

永遠

「そこまでじゃ!」

ラウラ

「!?!」

セシリア&鈴

「永遠(さん)!?!」

現れたのは「ラインバレル」を纏った永遠だった

一緒に簪と本音もいた

ラウラ

「どうやって入って来た！…そうか「ラインバレル」の能力か!？」

簪

「セシリア！鈴！」

本音

「大丈夫…」

二人が声をかけてくれたけど…正直 I S の破損もひどくて、無事じゃあ無いのよね…

鈴

「…簪…本音…」

セシリア

「無様な所を…お見せしましたわね…」

私達の I S が強制解除されたか…当然と言えば当然よね…

ラウラ

「貴様が来たのは驚いたが、ここで貴様も始末してやる！」

永遠

「……………」

永遠はラウラの言葉を完全に無視して、私達の方に歩いて来た

ラウラ

「!?…何とか言ったらどうなんだ!!」

無視されたのが気に食わなかったのか永遠の後ろから右手首の手刀で斬りかかった
セシリア&簪&本音&鈴

「永遠（さん）!!」

ガキイイイン!

ラウラ

「何っ!？」

永遠は後ろ手でいつの間にか持っていた2本の剣でラウラの攻撃を防いでいた…
でも、この剣って…まさか!?

ラウラ

「何だそれは!？」

簪

「…永遠…それってもしかして!？」

永遠

「左様!…これが簪と鈴の【剣刃】つるぎじゃ。」

やっぱり!私と簪の【剣刃】つるぎ!

永遠

「簪の【天空の光剣クラウン・ソーラー】と、鈴には【紫電の霊剣ライトニング・シオン】じゃー！」

鈴

「…【紫電の霊剣ライトニング・シオン】…」

私の【剣刃】は金色の柄と二匹の蛇がとぐるを巻いた刀身に綺麗な刃が両側に付けられた剣だった

簪

「…【天空の光剣クラウン・ソーラー】…」

そして簪の【剣刃】は白い刀身に、白い光を放つ剣だった

ラウラ

「それがそいつらの【剣刃】か！丁度いい、そいつを寄越せ！そんな雑魚なんかより私の方が使いこなせるぞー！」

永遠

「…断る…」

ラウラ

「何！！」

永遠

「断ると言つたんじゃ。この二本は簪と鈴の為に造つた物、この二人でしか使えん様になつとる。無論、セシリアに渡した「マイルシュトロム」もそうじゃ。」

セシリア&簪&鈴

「え!?!」

永遠は二本の【つるぎ剣刃】を地面に刺すと【ラインバレル】を解除した

永遠

「例え力づくで奪つても【つるぎ剣刃】は貴様を主とは認めん!諦めるんじやな。」

ラウラ

「主と認めないだと!たかが武器の分際で偉そうに!武器は武器だ!より優れた人間が使つてこそ価値があるんだ!」

永遠

「なら試してみるか?」

ラウラ

「何?」

永遠

「今この二本は地面に突き刺さつとる。これを抜いてみる。抜ければ貴様にくれてや

る。」

簪&鈴

「永遠!?!」

ラウラ

「いいだろう! その言葉、後悔するなよ!」

永遠

「やるなら早よせい!」

ラウラ

「!?…よく見ている!」

まずは私の「ライトニング・シオン」に手をかけた…

ガシッ!…バリッ!バリリリリリリリリッ!!

ラウラ

「ぐああああああつ!!」

「ライトニング・シオン」が突然放電し始めた…まるで、ラウラを拒んでるみたい…

鈴

「ライトニング・シオン」…」

ラウラ

「くっ！ならこっちだ！」

今度は「クラウン・ソーラー」を掴んだけど…

ガシッ…バシユウウウウウウウーーンッ！！

「クラウン・ソーラー」から衝撃波が発生して吹き飛ばされた

ラウラ

「うわあああああーっ！！」

簪

「クラウン・ソーラー」…」

永遠の言う通り…この【つるぎ剣刃】はラウラを認めていないんだ…

ラウラ

「…ふざけるな…ふざけるなあああああーっ！！…!?」

【クラウン・ソーラー】に吹き飛ばされたラウラの隣にセシリアの【メイルシュトロム】

が落ちていた

【メイルシュトロム】を手にとろうとした瞬間…

ドボオオオオオオオオオオンッ！！

【メイルシュトロム】から水柱が立ち上り水圧でラウラを再び吹き飛ばした

ラウラ

「うわああああああああ……っ!!」

セシリア

「【メイルシュトロム】…貴方まで…」

ラウラ

「グッ…：バカな…：こんな事が…」

永遠

「これで分かったか？【メイルシュトロム】も含めてこの3本は貴様を拒絶した。貴様にはこの【剣刃】達の主になる資格は無いという事じゃ。」

パチンッ！

永遠は突然指を鳴らすと…

カッ！

「【メイルシュトロム】【クラウン・ソーラー】【ライトニング・シオン】の3本が光り始

めた

永遠

「行け！お前達の主の手に…」

3本の【剣刃】は手の平サイズの光になると私とセシリア、簪の前に飛んできた

セシリア&簪&鈴

「!?」

私達が手を出すと手の平の上に乗れり、光が消えるとそこにはあの3本の【つるぎ剣刃】を小さくしたような短剣があつた

セシリア

「これは!?!」

永遠

「【つるぎ剣刃】の待機状態の様なもんじゃ。その方が持ち運びもしやすいじゃろ。」

鈴

「こんな事も出来たんだ…」

永遠

「さて【つるぎ剣刃】も渡した事じゃし、簪、本音、二人を医務室に連れて行くぞい。」

簪

「あ…うん!」

本音

「分かつた〜!」

簪はセシリアに、本音は私に肩を貸してくれた…

ラウラ

「許さん…許さんぞ貴様!!よくも恥をかかせてくれたな!!」

永遠

「…何を言うとする?ワシは無理じやと言うたのに【剣刃】^{つるぎ}に手を出して拒絶されたのはそつちじやる?自分で恥をかいといて人のせいにするでない。」

永遠の言う通りよ…永遠は使えないって言ったのに私達の【剣刃】^{つるぎ}に拒まれて吹っ飛ばされたのは自分のせいじゃない…これじや完全に逆恨みよ…

ラウラ

「黙れ!…火ノ兄永遠!私と戦え!」

永遠

「……………よかろう。」

セシリア&簪&本音&鈴

「永遠(さん)!!」

永遠

「…ワシも貴様がセシリアと鈴にやった事は許せん!叩き潰してくれ!!」

ラウラ

「それはこちらの台詞だ!貴様の化けの皮を?がしてやる!!」

永遠はそのままラウラに向かって歩いていくと【戦国龍】の刀を抜いて構えた

ラウラ

「…何のつもりだ？…その刀は確か【戦国龍】の待機状態だったな？何故展開しない？」

永遠

「必要無い。」

ラウラ

「何だと!？」

永遠

「お前如きにI Sは必要無い。このまま相手をしてやる。」

セシリア

「と、永遠さん！いくら何でもそれは無茶です!!」

簪

「いくら永遠でも生身で何て!？」

私達が心配すると…

永遠

「安心せい。ワシは負けんよ。」

私達に笑って答えてくれた

永遠

第074話：怒りの奥義！九頭龍閃（このつがしらのりゆうのひらめき）

〈箒 Side〉

一夏

「アイツ…何考えてんだ…」

一夏の言う通りだ…生身でISと戦うとは正気か？

シャルル

「い、一夏！火ノ兄君つて生身でISに勝てるの？」

一夏

「アイツは確かに強いけど…いくら何でも無茶だ…」

シャルル

「なら急いで止めないと！」

一夏

「分かってる！でもここからじゃ中に入れない！」

シャルル

「そうなる管制室でバリアを解除するか、下から回り込むしかないね!バリアを解除すると観客席の皆が危険だから…」

一夏

「下から行くしかない!急ごう!」

箒

「一夏!」

一夏

「箒!お前はここにいろ!専用機を持たないお前じゃ危険だ!」

箒

「!?…専用機…」

シャルル

「一夏、早く!!」

一夏

「ああ!」

一夏はデュノアと行ってしまった…

箒

「……………」

：私はまた見ているしか出来ないのか
私にも専用機があれば：

～箒 Side out～

～三人称 Side～

《アリーナ》

アリーナで相對する永遠とラウラ：だが、その表情は互いに違っていた
ラウラを睨みつける永遠に對して、ラウラは余裕の笑みを浮かべていた
ラウラ

「貴様など：この一発で終わらせてやる!!」

ラウラは肩の大型レールカノンを永遠に向けた

鈴

「アンタ！生身の人間を本気で撃つ気!?!」

ラウラ

「当然だ!」

鈴の非難の声もラウラには届かなかつた

ラウラ

「くたばれえええーっ!!」

ラウラがレールカノンを撃とうとした時…

永遠

「飛天御劍流 飛龍閃!!」

永遠は右腰の「ラインバレル」の太刀に手を置くと、体を大きくひねりながら、鞘に納めた太刀の鍔を親指で弾いて飛ばした

ラウラ

「何っ!?!」

飛ばした太刀はレールカノンの砲身の中に入ると…

ドガアアアアーンツ!!

誘爆を起こし爆発した

ラウラ

「何だと!?!」

爆煙の中から「ラインバレル」の太刀が飛び出てくると永遠はそれを手に取り鞘に納めた

ラウラ

「ば、馬鹿な!?!」

永遠がレールカノンを破壊した事にラウラはもとより、後ろにいたセシリア達も信じられなかった

簪

「…う、嘘…」

鈴

「レール砲を…破壊した…」

セシリア

「何ですの…今の技は…」

本音

「…刀を飛ばしたよ…」

ラウラはレールカノンを破壊された事で先程までの余裕の表情が一変、険しい顔をして

いた

ラウラ

「貴様！…よくもやってくれたな!!」

永遠

「どうしたんじや？一発で終わらせるのではなかったんか？」

ラウラ

「!?…ならばこれでどうだ!!」

両肩とリアアーマーに装備された6機のワイヤーブレードを全て打ち出した
自分に向かって来るワイヤーブレードに対して永遠は…

永遠

「飛天御剣流 龍巢閃!」

ドドドドドドオオオオーンッ

高速乱撃によってワイヤーの先端のブレードを全て叩き落とし、破壊してしまった

ラウラ

「なっ!?!」

レールカノンに続いてワイヤーブレードまで全て破壊されてしまい、ラウラには遠距離から仕掛ける武器が無くなってしまった

永遠

「さて、次は何じゃ?」

ラウラ

「くっ…くっそっ!?!」

永遠

「お主…レール砲にワイヤー…さつきから相手から距離を取って使う武器ばかりを使っ

とるな…あれだけ偉そうな事を言っておいて、生身の人間に近づく事も出来ん腰抜けか？」

ラウラ

「何だとおおーっ!?!」

永遠の挑発に乗せられたラウラは両腕のプラズマ手刀で接近戦を仕掛けてた

《観客席》

箒

「…ば、馬鹿な…」

箒は今アリーナで行われている戦いの光景が信じられなかった

それは彼女以外の生徒達も同じだった

生身の人間が刀だけで第三世代の新型を圧倒しているからだ

楯無&虚

「……………」

別の場所で二人の戦いを見ていた楯無と虚もまた言葉を失っていたが…

楯無

「……………何て子なの…生身でISと戦えるなんて…」

虚

「…何ですか…あの技は…」

楯無

「…簪ちゃん…本音ちゃん…貴方達…何て男に惚れたのよ…」

虚

「お嬢様、それは今関係無いと思いますけど？」

楯無

「え、でも…虚ちゃんも自分の妹が…」

虚

「私は別に気にしてませんよ。本音はアレでも人を見る目はあります。あの子が選んだ相手なら認めるつもりです。簪お嬢様と同じ人を好きになるとは思いませんでしたけど…」

楯無

「そ、そう…」

話がドンドン脱線していつている二人だった…

《通路》

一夏&シャルル

「ハアハア…」

一方、アリーナに向かっていた一夏とシャルルは、アリーナの出口まで来ていたが、そこにはいたのは…

一夏

「千冬姉!!」

シャルル

「何でココに!?!」

出口にはISの近接ブレードを持った千冬がいた

千冬

「…お前達こそ何しに来たんだ?」

一夏

「何しに…ラウラを止める為だ!このままじゃ火ノ兄がアイツに殺されちゃうぞ!」

シャルル

「そうです!織斑先生こそ僕達より先に来ていたなら何で止めに入らないんですか!ブレードまで持ってきているのに!」

千冬

「ああ、それはな…私も最初はお前達の言う通り止めようと思ったんだが……………」

一夏&シヤルル

「？」

言葉を濁す千冬に二人は首を傾げた

千冬

「…説明するより実際に見た方が早い。アリーナを覗いてみる。」

一夏&シヤルル

「え？」

千冬に言われた通り二人はアリーナの中を見ると…

一夏&シヤルル

「な!？」

二人が見た物は肩に装備されたレールカノンが破壊され、6本のワイヤーを引き摺っているラウラの姿だった

一夏

「な、何があつたんだ!？」

千冬

「見ての通りだ。ボーデヴィツヒは火ノ兄によつてレール砲とワイヤーを破壊されてい
る。」

一夏

「う、嘘だろ…」

シャルル

「そんな事…出来る訳が…」

千冬

「ならアレはどう説明する？」

シャルル

「そ、それは…」

千冬

「あの通り、今は火ノ兄が優勢だ。止めに入ろうにも入りづらくてな…もう暫く様子を見ようと思つてここにいた。」

一夏&シャルル

「……………」

《アリーナ》

ラウラ

「死ねえええええーっ!」

永遠はラウラの手刀を全て受け止めず受け流す様に捌いていた

ラウラ

「くそっ!!」

永遠

「何じゃ?この雑な攻撃は?これが代表候補生の実力か?」

ラウラ

「き、貴様!」

永遠に攻撃を捌かれた瞬間、ラウラの両腕が広げた状態となり、それを永遠が見逃す筈も無く、一瞬で懐に潜り込んだ

ラウラ

「!?」

永遠

「【龍巢閃】!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドツ
!!!!

今度は本来の【龍巢閃】の使い方による高速乱撃をラウラにみまった

ラウラ

「ぐああああああああー……っ!!」

【龍巢閃】を受けラウラは一端距離を取ると…乱れた呼吸を落ち着かせた

ラウラ

「ハアゝツ…ハアゝツ…（落ち着け…落ち着くん…奴は生身…一撃当たれば終わりだ…ならば!）」

ラウラは残った武装で永遠を倒す方法を考えた結果【シユヴァルツエア・レーゲン】に搭載されている特殊機能を使う事にした

ラウラ

「調子に乗るのはここまでだ!」

ラウラは永遠に向けて手を翳した

それを見た瞬間セシリアと鈴はラウラが何をしようとしているのかに気付いた

セシリア

「永遠さん! A I Cです!」

鈴

「それを受けると動けなくなるわ!」

二人が叫ぶと同時に…

永遠

「!?…【土龍閃】!!」

永遠は刀を地面に叩きつけ土石をラウラに向かって放った

ラウラ

「何?!」

そして、永遠を止めようとしたA I Cは向かって来た土石を止めてしまっていた

永遠

「ほお…これがA I Cか?本当に止めとるのお…じゃが、一方向にしか使えんようじゃの…」

ラウラ

「し、しまった?!」

永遠の放った【土龍閃】の土石によってラウラのA I Cの効果範囲が浮き彫りになっていた

永遠

「しかも、手を翳さんと使えんようじゃし、かなりの集中力がある様じゃの。お主の手にさえ気を付けとけばいい訳じゃな。」

ラウラ

「!?」

永遠の言う通りだった：A I Cは発動するには相当な集中力が必要であり、一方向にしか発生させる事が出来ないのだ

それを見抜かれてしまった以上永遠にはもうA I Cが通用しない事になる

永遠の動きならばラウラの手の動きで即座に範囲外に出る事もでき、また、先ほどと同じように【土龍閃】で止めると言う方法があるからだ

しかも今のラウラには遠距離武器が無い為、A I Cを囷にして攻撃する事も出来なくなっていた

ラウラ

「くっ……くっ……」

ラウラには武装はプラズマ手刀しか残っておらず、それはつまり格闘戦しか戦う方法が無いという事になっていた

《通路》

シャルル

「ほ、本当に押してる……」

一夏

「…【飛天御剣流】…俺が喰らった技の他にもあんな技があったのか…」

千冬

「まさかここまでの強さとはな…」

千冬でさえ永遠の圧倒的な強さに恐れを抱いていた

《アリーナ》

永遠

「さて、そろそろ終わらせようかの？」

刀を逆手に持つとラウラに向かってそう言い放った

ラウラ

「終わらせるだと…終わるのは…貴様だあーっ!!」

永遠にプラズマ手刀で斬りかかると、永遠もまたラウラに向かって行った

永遠

「【飛天御剣流 龍鳴閃】!!」

永遠はラウラの頭上をすれ違う様にジャンプすると、ラウラと交錯する瞬間、刀を鞘に納刀した

ラウラ

「フンッ！何だそれは？ただ刀を鞘にしまったただけではな…!?」
ガシャンッ!!

ラウラは言いながら振り向くと突然倒れてしまった

全員

「!?」

そして、何故倒れたのか？それはラウラ自身にもアリーナにいる者の誰にも分からなかった

ラウラ

「き、貴様…何をした!」

立ち上がろうとしたが上手くバランスが取れずラウラは中々立てなかった

永遠

【飛天御剣流 納刀術 龍鳴閃】：ISを纏った相手に効くかどうかは分からなかったが、どうやら効果は十分だったようじゃな。」

ラウラ

「納刀術…だと!」

永遠

「納刀言うんは刀を鞘に納める事じゃ。【龍鳴閃】は高速で刀を鞘に納める事で鞘と鍔の

ぶつかり合いで発生する高周波を相手の鼓膜に叩き込む技じゃ。コイツを喰らったもんは一時的に聴覚は破壊され、三半規管もマヒ状態に出来るんじゃないよ。」

ラウラ

「ば、馬鹿な…そんな事が!？」

永遠

「ワシの声が聞こえるという事は、どうやら、聴覚より三半規管の方がダメージが大きいようじゃな。ほれ、待つといてやるから早よ立て。」

ラウラ

「ぐっ…くそっ!」

永遠に施されラウラは何とか立ち上がったが、まだ完全には回復していなかった

永遠

「立ったか…ではこの一撃で…終わりじゃ!!」

永遠は正眼の構えを取ると全身から凄まじい気迫を発した

ラウラ

「!？」

永遠

「飛天御剣流 奥義】!!」

「……………」

首元に刀を当てられ無言で睨みつける永遠にラウラは恐怖し、遂に意識を失ってしまつた

ラウラ

「……………」

永遠は白目を？いて気絶しているラウラを一瞥するとアリーナの入り口の一つに視線を移し…

永遠

「チビツ子はそつちで頼む。」

刀を鞘に納めながらそう言うと、永遠はセシリア達の方に歩いて行つた

永遠

「待たせたの。医務室に行くぞ。」

鈴

「あ、うん…」

永遠

「どうしたんじゃ？」

簪

「…あの…永遠が強いのは知ってたけど…」

セシリア

「…ここまで強いなんて…」

本音

「…思わなかったよ…」

永遠

「カカカツ♪何の事は無い、修行の賜物じゃよ！修行すれば誰でも出来るわい。」

セシリア&簪&本音&鈴

「出来るか!!!」

鈴

「……………アンタ、ホントにさつきラウラをぶっ飛ばした永遠なの？…さつきと雰囲気
まるで違うんだけど…」

永遠

「そうかの？自分では分からんのお？」

鈴

「…どつちが本当のアンタなのよ？」

永遠

「ワシはワシじゃよ。お主等が知る永遠じゃよ。」

セシリア

「フフツ♪そうですね。永遠さんは永遠さんですわね♪」

簪

「そうだね♪」

本音

「うん♪」

鈴

「……まあ、アンタ達がそう言うならいいけど……」

永遠

「さー…いい加減行くぞ!」

永遠はそう言うとき「ラインバレル」を再び展開した

セシリア&鈴

「【ラインバレル】!?!」

簪

「大丈夫! 【ラインバレル】の【転送】で行くだけだから。」

永遠

「そういう事じゃ。飛ぶぞ。」

永遠はセシリア達4人と【転送】を使い、医務室へと転移した

アリーナには気絶したラウラ一人が残された

永遠達が消えると入り口から千冬と一夏、シャルルの3人がアリーナに入って来た

千冬

「……………」

一夏

「…【飛天御剣流】…何て剣術だよ…」

シャルル

「…ISSに勝てる剣術があるなんて…」

千冬

「…お前達…ボーデヴィツヒを医務室に連れて行くぞ。」

一夏&シャルル

「は、はい！」

千冬

「それと…今後、学年別トーナメントまで、一切の私闘を禁止とする!!!」

千冬はアリーナにいた全生徒に聞こえる様に宣言すると、3人は気絶したラウラを連

れてアリーナを出て行った

観客席にはまだ二人の戦いに驚き動けない者が大勢残っていた
三人称 Side out

第075話：御剣の理と二大奥義

（永遠 Side）

ワシはセシリア達と医務室の前に転移すると「ラインバレル」を解除した

永遠

「ワシはココで待つとるから、スマンが治療が終わったら呼んでくれ。」

簪

「分かった。」

4人が医務室に入って暫くすると…

一夏

「火ノ兄！」

永遠

「ん？」

織斑姉弟とデュノア、それに織斑に背負われたチビツ子がやって来た

一夏

「何してんだこんな所で？」

永遠

「治療待ちじゃ。」

一夏

「そうか。」

織斑の奴、医務室の扉に手をかけよつた

永遠

「オイ！何処行く気じゃ？」

一夏

「何処ってラウラを医務室に……」

千冬

「織斑、何故火ノ兄が廊下にいると思ってるんだ……」

一夏

「え？」

永遠

「中でセシリアと鈴の治療をしとるんじゃぞ！男のお前が入っていいと思つとるんか

！」

一夏

「…あ!？」

永遠

「貴様と言う奴は…気遣い所かデリカシーすら無いんか…」

一夏

「…すみません…:…じゃあ、シャルル頼む。」

シャルル

「あ、うん。」

ホントに何考えとるんじゃ?

デュノアもチビツ子を受け取ろうとしとるし…

永遠

「オイコラ!お前も男じゃろ!」

シャルル

「え?あ!そ、そうだったね!?(一夏の馬鹿!!)」

一夏

「(わ、悪い!)ち、千冬姉頼む。」

千冬

「ああ…全く、まさかデリカシーすら無い奴だったとはな…」

一夏

「…本当にすみません…」

そう言つて織斑先生はチビツ子を背負つて中に入つて行つた

残つたのはワシら男3人だけになつた訳じやが…

一夏

「はあゝゝゝ…またやつちまつた…」

永遠

「…織斑…何故デユノアにチビツ子を渡そうとした？」

シャルル

「うっ!？」

一夏

「い、いやちよつと間違えて…」

永遠

「ワシが男は入るなど言つた直後にか？女の織斑先生がおつたのに、男のデユノアに間違えたのか？」

一夏

「あ、ああ…その、つい勢いで…」

永遠

「デュノアも疑問も持たずにチビツ子を受け取ろうとしたが？」

シャルル

「ぼ、僕もその場の勢いで……」

一夏

「そ、それよりさっきの戦いで使った【飛天御剣流】の奥義の事を教えてくれよ！」

永遠

「露骨に話題を反らしたの。まあいいじゃろ。じゃが、織斑先生には通じんぞ。今の内に言い訳を考えておくんじやな。」

一夏&シャルル

「う!?!」

永遠

「それからデュノア：お主の目的は知らんがワシの大事なもんを傷つけるようならチビツ子の様に潰すからな！」

シャルル

「は、はい!!」

まあ、軽く殺気交じりに脅しといたから下手な事はせんじやろ

永遠

「…さて、奥義の事じゃったな。【飛天御剣流】には二つの奥義がある。その一つがさつき使った【九頭龍閃】じゃ。」

シャルル

「随分長い名前だね？」

永遠

「フム、なら【九頭龍閃】と呼べばいい。」

一夏

「あ、そつちの方が言い易いな。…つて！二つの奥義つて…もう一つあるのかよ!？」

永遠

「もう一つの奥義の名は【天翔龍閃】…こつちは【天翔龍閃】とでも呼べ。これは

超神速の抜刀術じゃよ。」

一夏

「抜刀術つて…居合の事だよな？超神速つて何だ？」

永遠

「神速を超えた神速…肉眼では捉える事が出来んスピードと覚えておけばいい。まあI Sを使えば見えるかもしれんがな。つて聞きたいのは【九頭龍閃】の方じゃった

な。アレは説明が面倒じゃからなく…」

一夏

「そうなのか？」

永遠

【天 翔 龍 閃】は簡単に言えばただの抜刀術じゃからな…【九 頭 龍 閃】は簡単に

言えば突き技じゃ。」

一夏

「突きって…物凄い速さだったぞ?! 全く見えなかったし、しかも絶対防御を超えてISを吹っ飛ばすほどの威力だったぞ?!」

永遠

「同時に9か所も突けば吹き飛びもするわい。」

一夏

「へ?…きゅ、9か所?! 同時に?!」

永遠

「そうじゃ。（このつがしらのりゅうのひらめき）【九 頭 龍 閃】は神速の速さで9方向の斬撃を同時に繰り出す乱撃と突進を組み合わせた複合奥義じゃ。」

一夏

「乱撃って…【龍巢閃】って技と同じじゃ…」

永遠

「【龍巢閃】は急所を滅多打ちにする技じゃ。じゃが【九頭龍閃】ここのつがしらのりゆうのひらめきは人体の9つの急所に一撃必殺の斬撃を同時に打ち込む奥義。いわば必殺技を9発同時に打ち込む様なもんじゃ。」

一夏

「ひ、必殺技を9発…」

永遠

「そうじゃ。これが【飛天御剣流】の奥義じゃ。」

一夏&シヤルル

「……………」

織斑と隣で黙って聞いてったデュノアの二人は言葉を失つとるようじゃの

千冬

「お前達、二人の治療が終わったぞ。」

医務室から出て来た織斑先生が治療が終わったのを教えに来てくれた

永遠

「もう入っても構わんのか？」

千冬

「ああ、いいぞ。」

永遠

「では失礼するぞい。」

一応確認を取ってからワシも中に入った

く永遠 Side out く

く一夏 Side く

火ノ兄が中に入るとシャルルも続いて入って行った

俺も入ろうとしたら…

千冬

「待て一夏。少し話がある。」

千冬姉に呼び止められた

一夏

「話って?」

千冬

「奥義の話はドア越しに私も聞いていた。…お前…火ノ兄に【飛天御剣流】を教えて貰お

うなんて考えてないだろうな。」

一夏

「え!? ダ、ダメなのか?」

千冬

「やはりそう考えていたか…言っておくがあれは殺人剣術だ。生兵法で覚えれば取り返しがつかなくなるぞ。」

一夏

「さ、殺人剣!? 【飛天御剣流】が!」

千冬

「そうだ。お前も知ってると思うが、剣術と言うのは今は形骸化し道場剣法、つまり剣道になっている。私やお前が習っていた【篠ノ之流剣術】も実戦を想定したと言われているがそれでも剣道の領域内での話だ。それは分かるな?」

一夏

「う、うん…」

千冬

「だが、火ノ兄の【飛天御剣流】は形骸化する前の完全な実戦剣術、人を斬る為の剣だ。それも1対1ではなく1体多を念頭に置いているものだ。」

一夏

「…実戦剣術……だ、だったら火ノ兄は!？」

千冬

「アイツがそんな事をする奴だと思ってるのか？」

一夏

「い、いや……」

【飛天御剣流】が……人を斬る為の剣……アイツ……そんな技を使ってたのか……

千冬

「……『御剣の剣、即ち、時代時代の苦難から弱き人々を守ること』……」

一夏

「え?」

千冬

【飛天御剣流】の理だ。以前火ノ兄に教えて貰ったんだが、この意味が分かるか？」

一夏

「い、いや……」

千冬

「なら、先にそつちを考えろ。火ノ兄は自分なりの答えを出して剣を振るっている。理

の意味を正しく理解しなければお前は人の道を踏み外す事になるぞ。」

一夏

「……………」

千冬

「私の話は以上だ。」

千冬姉はそう言っ行ってしまった

一夏

「…理か…」

…難しいな…

俺は千冬姉に言われた【飛天御剣流】の理を思い返しながら医務室に入っ行って行った…

く一夏 Side out く

第076話：トーナメントの内容

（永遠 Side）

ワシが医務室に入ると、ベットの上には包帯を巻いたセシリアと鈴がおった別のベットにはチビツ子がまだ気絶したまま寝かされとった

永遠

「二人共、怪我は大丈夫かの？」

セシリア

「はい、何とか…」

鈴

「平気よ。」

うゝむ…：痩せ我慢しとるのか微妙じやな…

簪

「…けど、二人がこんなにやられるなんて…」

鈴

「言い訳のしようもない…って言いたいけど…私はともかくセシリアは違うわ。」

永遠&セシリア&簪&本音

「え？」

セシリア

「どういう事ですか？」

鈴

「アンタさつき【ブルー・ティアーズ】に違和感を感じるって言ったわよね。」

セシリア

「え？はい…言いましたけど…」

鈴

「ラウラと戦っている時にその理由が分かったわ。…私も信じられないけど間違いないわ…セシリアの動きに【ブルー・ティアーズ】が着いて行けなくなってるのよ。…そうじゃなきゃいくら機体の相性が悪くてもアンタがラウラに負ける訳無いわ。」

セシリア

「そんな!?!…【ブルー・ティアーズ】が…」

シャルル

「ちよつと待つてよ！いくら何でもI Sが人間の動きに着いて行けなくなるなんて…」

簪

「別におかしな事じゃない。」

シャルル

「え？」

本音

「ひののんでも他の機体を使えばそうなるよ〜…」

シャルル

「そ、そんな…」

鈴

「本当よ。永遠があのおの3機以外を使えばセシリア以上に機体が着いて行かないわ。アンタもさっきの永遠の戦い見てたんでしょ？生身であんな動きが出来る奴に量産機が着いて行けると思ってるの？」

シャルル

「…た、確かに…」

簪

「でも、セシリアまでそうなるなんて思わなかった…」

鈴

「ええ、それも量産機じゃない第3世代の専用機だよ。」

セシリア

「……………わたくしはどうすれば…」

永遠&簪&本音&鈴&シヤルル

「……………」

確かに機体が着いて行けないなんて状態、普通は無いからのお…

一夏

「どうかしたのか？」

織斑が遅れてやってきおったか…

今迄何しとつたんじゃ？

まあいいか…仕方ない説明しとくか…

一夏

「……………え？…ISが着いて行かなくなった？」

永遠

「そうじゃ。」

一夏

「そんな馬鹿な…」

鈴

「それだけセシリアは努力してきたって事よ。アンタもそのくらい頑張って貰いたいわね。」

一夏

「うっ……はい……」

永遠

「セシリア、今は鈴と一緒に怪我を治す事に専念するんじや。『ブルー・ティアーズ』に關しては今は何とも言えん。機体の方も損傷が激しいんじや。修理が終わってから考えればよい。」

セシリア

「……はい……」

……帰ったら束さんに一度相談してみるかの？

ワシがそんな事を考えておると……

ドドドドドドドドドツツ!!!

永遠

「ん?」

簪

「何だろこの音?」

まるで地鳴りみたいな音が聞こえてきた

バンツ!!!

派手に扉が開かれると、大勢の生徒達が医務室の中に雪崩れ込んできおった

生徒1

「織斑君!!」

生徒2

「デュノア君!!」

生徒3

「火ノ兄君!!」

生徒達

「私とペアを組んでください!!!」

一夏&シャルル

「へ?」

…あ!そういう事か!

一夏

「ペア?何の事だ?」

永遠

「今度のトーナメントは、二人一組のタッグ戦に変更されたんじやよ。」

一夏

「お前知ってたのか？」

永遠

「うむ、さつき織斑先生に呼ばれたのはそれが理由じゃ。タッグ戦じゃから賞品の【剣】を二つ造ってくれと頼まれたんじやよ。」

一夏

「そうなんだ……」

生徒1

「私と組もう！織斑君！」

生徒2

「私と組んで！デユノア君！」

生徒3

「火ノ兄君！私と組んで！」

うゝゝゝむ……どうするかのお……

一夏

「悪い！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

シャルル

「一夏……」

生徒1

「まあ、そう言う事なら……」

生徒2

「他の娘と組まれるよりはいいか……」

生徒3

「男同士も絵になるし……」

ふむ、織斑はデュノアと組むか………ん？て事は……

生徒1

「じゃあ、火ノ兄君！私と組んでください！」

生徒2

「火ノ兄君となら優勝間違いなし！」

生徒3

「二人で賞品ゲットだよ！」

セシリア&簪&本音

「な!?!」

まあ、そうなるわな……仕方ない……

永遠

「…ワシは誰とも組まんよ。確かペアがおらん場合、当日に抽選で決める筈じゃ。ワシはそうするわい。」

生徒1

「…まあそれなら…」

生徒2

「…運に任せるか…」

生徒3

「…他の子と組まれるよりは…」

ワシの答えに納得したのか全員医務室から出て行ってくれたか…

〈永遠 Side out〉

〈シャルル Side〉

簪

「永遠…ホントに誰とも組まないの?」

永遠

「そうせんと五月蠅いからのお…」

セシリア

「出来ればわたくしが組みたかったのですが…」

本音

「でも仕方ないよ…」

簪

「そうだね…」

本当はこの3人が一番組みたかったんだらうな…

真耶

「どちらにしてもオルコットさんは無理ですよ。」

一夏

「山田先生!」

今度はいれ違いで山田先生がやって来た

真耶

「お二人のISはダメージレベルがCを超えています。まずは修復に専念させないと、重大な欠陥が生まれますよ。ISの為に参加の許可は出せません。」

鈴

「やっぱり…」

セシリア

「あそこまでやられては仕方ありませんわね…」

一夏

「?…随分あっさりしてるな？」

シャルル

「一夏、ISは起動している時間に比例して強くなるんだよ。」

一夏

「え？」

シャルル

「…ISは戦闘経験をを含むすべての経験を蓄積する事で、より進化した状態へと自らを移行させるんだ。その蓄積経験には損傷時も含まれてるんだよ。損傷が大きい時に無理に起動させると、不完全な状態を補う為に特殊なエネルギーバイパスを構築するんだ。それが今度は平常時に悪影響を及ぼすことがあるんだよ。」

一夏

「そうか…人間も怪我した状態で無理すると体に変な癖がつくっていうしな…」

真耶

「そういう事です。肝心な所でチャンスを失うのは残念な事です。貴方達にはそうなつてほしくありません。」

鈴

「分かってます。」

セシリア

「はい。」

真耶

「分かってくれていてよかったです♪では私はこれで。」

山田先生は二人の機体の状態を教えると出て行ってしまった

シャルル

「…一夏…さつきはありがとう。」

一夏

「何がだ？」

シャルル

「ペアを組んでくれた事だよ。」

一夏

「ま、まあ同じ男同士で組んだ方がやりやすいだろ…」

シャルル

「それでもありがとう。僕も一夏との方が気が楽だから…」

一夏

「シャルル…」

永遠&セシリア&簪&本音&鈴

「……………」

…やっぱり一夏は優しいな…

永遠

「…やはり織斑はホモじやったか…」

セシリア&簪&本音&鈴

「ウンウン！」

いきなり何言いだすのこの人!!

一夏

「オイ!!何で俺がホモなんだよ!!」

永遠

「男同士で見つめ合っつて何言うてる!」

セシリア&簪&本音&鈴

「？」

…何だろ？…また一夏の表情が暗くなったな…

…凰さんと何かあったのかな？

永遠

「……………。ワシはそろそろ帰る。セシリア、鈴、二人は養生するんじやぞ。」

セシリア

「はい♪ありがとうございます♪」

簪

「また明日♪」

本音

「サヨナラ♪」

鈴

「ええ！」

永遠

「簪と本音もな。織斑、デユノア、そう言う事は部屋でするんじやぞ。」

一夏

「だから違あああああーっ！！」

永遠

「ではな。」

一夏

「人の話を聞けーーーーっ!!!」

あうく…火ノ兄君の中で僕までホモって認識されちゃった…どうしよおく…
くシャルル Side out く

第077話：蒼い雫の行く末

（東 Side）

家に帰ってきたとーくんが相談したい事があるって言われたんだけど…

正直東さんでも信じられない話だった

東

「…ISがセーちゃんに着いて行けなくなるなんてね…」

クロエ

「兄様以外にそんな状態になる人がいるなんて思いませんでしたね…」

東

「ちーちゃんならとーくんと同じ人外だからそうなってもおかしくは無いんだけど…ま

さかセーちゃんまで…」

永遠

「本人に言うぞ！」

東

「ごめんなさいそれだけは勘弁して下さい！」

ちーちゃんの耳に入ったら絶対アイアンクロードよ！

永遠

「冗談じゃ。…それでどうすればいいかの？」

束

「うーん…とりあえず、セーちゃんの機体を一度見てみない事には何とも言えないね。とーくん、明日セーちゃんを連れて来て貰っていいかな？」

永遠

「分かった。それから束さんに一つ調べて欲しい事があるんじゃない？」

束

「何かな？」

永遠

「シャルル・デュノアについてじゃ。」

クロエ

「確かフランスから来た3人目の男性操縦者でしたよね？3人目がいるなんて私達も知りませんでしたけど…」

永遠

「そりゃそうじゃろ。あやつは女じゃからな。」

東

「女?…なるほど、その目的を知りたいんだね。」

永遠

「うむ、まあ、ある程度予想は付くんじやが…」

東

「予想って?」

永遠

「わざわざ性別を偽ってまで学園に来たという事は目的は織斑に接触する事じやろ。ワシの事は知らなかったからターゲットにはなってはおらんみたいじやが。」

東

「なるほどね…いっくんのデータ…つまり【白式】のデータを盗むのが目的って事だね。」

永遠

「うむ…じやが予想通りだとして、何故そんな事をするのかが分からん。」

東

「その裏付けが欲しい訳だね。分かったよ。」

永遠

「面倒ごとを増やしてしもうてスマン！」

束

「気にしなくていいよ♪いっくんを狙ってるなら束さんも黙ってはおけないからね！」

永遠

「頼む！」

クロエ

「兄様、申し訳ありませんが、私は明日から家を空けますね。」

永遠

「どうしたんじゃ？」

クロエ

「【ラインバレル】の研究成果がもうじき完成しそうですね。」

永遠

「【ラインバレル】の？と言う事は再生能力の事か？」

クロエ

「はい。その仕上げをさせていただきます。」

永遠

「……………」

クロエ

「どうされました？」

永遠

「……………ちゃんと睡眠は取るんじゃないぞ。」

クロエ

「分かってますよ!!」

東

「あははは……」

あの後、目を覚ましたクーちゃんを東さんととーくんの二人でタップリ説教したから
ね……

く東 Side outく

く永遠 Sideく

学園に來るとワシは朝一でセシリアに…

永遠

「セシリア、スマンが今日はワシの家に来てくれんか？」

セシリア

「え!? どうされたんですか？」

永遠

「実は昨日お主の機体の事をあの人に相談したら一度見て見たいと言われてな。それでお主を連れて来て欲しいと頼まれたんじゃないよ。」

セシリア

「そういう事ですか。…分かりましたわ。」

永遠

「…という訳で織斑先生、外泊許可を貰えんかの?」

千冬

「……………」

千冬、織斑先生が教室に来たからそのまま頼むことにした

千冬

「まあいいだろ。オルコットの機体の事は聞いていたからな。アイツに一度見て貰った方がいいだろう。ついでに、後二人も一緒に許可しておいてやる。」

セシリア

「…分かります?」

千冬

「分らないでか!お前達はいつも一緒にいるからな。お前だけ行かせたら絶対にごねる

だろ！」

本音

「えへへ〜…」／／／

千冬

「褒めてないぞ！」

…まあ、後二人と言えば本音と簪の事じゃよな…

千冬

「その代わり後で報告しろよ。」

永遠

「あいよ。」

千冬

「よし！それではHRを始める！織斑、号令!!」

後で簪にも話をしとかんとな…

〜永遠 Side out〜

〜セシリア Side〜

わたくしは簪さんと本音さんと一緒に、いつも集合場所に行っている校門前に向かって

いました

「簪さんを誘うと二つ返事で行くと答えてくれました

セシリア

「永遠さ〜〜ん♪」

永遠

「ん？来たか。」

簪

「お待ちせよ♪」

永遠

「そんなに待つとらんよ。では行くかの。」

永遠さんはそう言いながら「ラインバレル」を展開しましたわ

永遠

「さて、今回は【転送】を使って一気に行くぞ。」

セシリア

「わたくし達も連れてあの距離を飛べるのですか？」

永遠

「問題ない。」

簪

「よかった♪」

本音

「じゃあ早速行くろう♪」

永遠

「行くぞ！」

永遠さんはわたくし達を掴むと転移しました

………

………

………

永遠

「着いたぞ。」

本音

「あつと言う間だね♪」

永遠

「そうじゃな。…さて、家に入るぞ。東さんも待つとるからな。」

セシリア&簪&本音

「は〜い♪」

東

「いらつしや〜い♪待ってたよ〜♪」

セシリア&簪&本音

「お邪魔しま〜す♪」

家に入ってきたわたくし達を東さんが出迎えて下さいました

東

「早速だけどセーちゃんのI Sを見せて〜♪」

セシリア

「はい〜!」

わたくしは家の奥にある永遠さんの機体が保管してある部屋に行くと「ブルー・ティ
アーズ」を展開しました

東

「うわ〜…話には聞いてたけど随分派手に壊されたね〜…」

「ブルー・ティアーズ」の損傷具合を見て、東さんは驚いていました

セシリア

「申し訳ありません…わたくしが未熟なばかりに…」

東

「セーちゃんのせいじゃないよ♪…さて、早速調べてみるかな。」

東さんは「ブルー・ティアーズ」にアクセスして調べて下さいました
それから暫くすると…

東

「…リーちゃんの言う通りだね。この子の性能じゃセーちゃんに追いつけなくなってるよ。」

永遠

「やはりそうじゃったか…」

本音

「そんなく…」

簪

「じゃあ、このまま【ブルー・ティアーズ】を修理しても…」

東

「うん。セーちゃんにとっては足枷にしかないね。」

セシリア

「……………【ブルー・ティアーズ】…」

…わたくしはどうすればいいのでしょうか…

東

「……………セーちゃん…この子を預けて貰っていいかな?」

セシリア

「え?」

東

「このまま直してもまた同じような事になる。だから、東さんがこの子を強化するよ。」

セシリア

「よろしいのですか!?!」

東

「いいよ〜♪」

簪

「待って下さい!?!」

永遠

「どした簪?」

簪

「セシリア忘れたの? 代表候補生の機体を勝手に改造する事は出来ないんだよ!」

セシリア

「そうでしたわ!？」

東

「え？何それ？そんな決まりがあるの？面倒臭いな〜…」

セシリア

「すみません…」

東さんからすれば確かにそのような決まりは面倒な事ですわね…

永遠

「ふむ…セシリア、簪…それはつまり許可があれば改造しても構わんという事かの？」

簪

「え？うん、そうだけど…」

永遠

「じゃったら許可を貰えばいいじゃろ。」

セシリア

「ですがどうやって許可を貰うんですか？」

永遠

「んなもん東さんが改造すると言えばくれるじゃろ？」

セシリア&簪&本音

「え？」

東

「なるほど〜♪それはいい方法だね♪」

簪

「で、でも！そんな事したら東さんがココにいる事がバレちゃう?!」

永遠

「別に何処にいるかは言う必要無かろう。イギリスの開発した専用機をISの生みの親、篠ノ之束が直々に改造する。それだけでもイギリス政府の連中は納得するはずじゃ。向こうが信じんようなら直接束さんが話せばいいだけじゃし。」

東

「そ〜そ〜♪と言う訳でセーちゃん連絡してみて♪」

セシリア

「は、はい!!」

わたくしは言われた通りイギリスで訓練をしていた時の教官に連絡しました

教官

『…はい。』

セシリア

「お久しぶりです。セシリア・オルコットです。」

教官

『オルコットか！久しぶりね。どうしたのこんな時間に？』

セシリア

「実は「ブルー・ティアーズ」の改造許可を頂きたいのです。」

教官

『えー改造？いきなりどうしたの？「ブルー・ティアーズ」に何かあったの？』

セシリア

「はい、実は……………」

わたくしは機体が着いて行かなくなった事を話すと、教官は驚いていました…

教官

『…確かにあなたの成長速度はココにいた時から凄まじかったけど…まさか着いて行かなくなるなんて…』

セシリア

「…それで許可を頂けませんか？」

教官

『ん〜…改造するって貴方がするの？整備関係に関しては一般程度の知識だったわよね？』

セシリア

「その通りです。ですから改造するのはわたくしではありません。」

教官

『じゃあ誰がするの？イギリスの機密の塊でもある貴方の機体を改造するって事はその相手にバラすって事になるのよ？そんな事も分からない貴方じゃ無いでしょ？』

セシリア

「改造するのは篠ノ之束博士です。」

教官

『……………今なんて言ったの？』

セシリア

「【ブルー・ティアーズ】を篠ノ之博士が強化・改造してくれると言ったのです。」

教官

『し、篠ノ之博士が!?! 貴方博士と接点があったの？』

セシリア

「はい、色々ありました…それでどうでしょう？許可を頂けませんか？」

教官

『ちよ、ちよつと待つてて!?!今政府に確認するから!?!』

教官は大慌てで政府に連絡に行ったみたいですよ

暫く待つてっていると、電話の向こうから数人の声がしてきました

教官

『待たせたわね!政府の方に連絡したら直接確認したいって言つて来たのよ!』

セシリア

「いえ、大丈夫です。」

教官に変わつて政府の役人らしい男性が話してきました

役人

『話は聞いた。本当に篠ノ之博士が君の機体を手がけてくれるのか?噂ではあの博士は

大の人間嫌いで有名だが?』

セシリア

「わたくしが試験を受けに行った時にお会いしました。それ以上はプライバシーに関わ

るので申せませんが。」

役人

『何故会つた事だけでも報告しなかつた?』

セシリア

「織斑千冬先生に口止めされてしまったので報告する事が出来ませんでした。その件に
関しては申し訳ありません。」

役人

『むう…ブリュンヒルデにか…それなら仕方ないか…』

セシリア

「納得していただけて良かったのですが、こちらの申請はどうなるのでしょうか？」

役人

『…本当に篠ノ之博士なのか？』

セシリア

「信じられないのでしたら代わりましょうか？」

役人

『そこにいるのか!？』

セシリア

「いますけど、少々お待ちを…東さんお願いします。」

東

「はいは〜い♪もすもすひねもす〜♪皆のアイドル♪篠ノ之東だよ〜♪」

役人

『ほ、本当に篠ノ之博士だったんですか!?!』

東

「そだよ♪それでどうするの？東さんとしては君達の許可が無いといじれないなんて決まりは迷惑でしかないんだけどさ。」

役人

『は、はい！その件に関してはIS委員会の方で決まった事なので私達にはどうしようもないのですが…』

東

「別にそんな事どうでもいいよ。東さんが聞きたいのはセーちゃんの機体をいじつていいのか、いけないのかだけだよ。」

役人

『も、申し訳ありません！勿論許可は出します！博士に手を加えて頂けるとは光栄です！』

東

「最初からそう言えばいいんだよ！それからセーちゃんの機体を改造する条件をいくつか出すからね。」

役人

『はい！何でしょうか？』

東

「まず、セーちゃんから東さんの事を尋問しない事。もしすればイギリスのコアを全て使用不能にするからね。」

役人

『わ、分かりました！』

東

「次に、改造した機体はコアも含めてセーちゃんの所有物にする事。代わりに新しく造ったコアを1個あげるよ。」

役人

『は、はい!!すぐに「ブルー・ティアーズ」と使用されているコアをセシリア・オルコック個人に譲渡するように手配します。後日、彼女にその書類を送ります。』

東

「それでいいよ。じゃあ新しいコアはそうだね…セーちゃんがそつちに戻る時にでも持たせておくよ。」

役人

『はい！よろしくお願いします！』

東

「最後に、もしセーちゃんから機体を奪おうとしたり、許可無く調べようとしたら…どうなるか分かってるよね？」

役員

『も、勿論です!!』

東

「よろしい、じゃあね！」

役員

『はい！失礼します！』

東さんが出ると本当にアツサリ話が済みましたわね…ですが…

セシリア

「東さん…よろしかったのですか？その、新しいコアの事…」

東

「別にいいよ。一つ増えた所で大して変わらないしね。『ゴーレム』用に造った予備の分を一つ渡すだけだよ。」

セシリア

「何から何までありがとうございます！」

東

「うん♪」

永遠

「良かったのおセシリア。」

セシリア

「はい♪」

これも永遠さんや東さん、皆さんのお陰ですわ♪

♪セシリア Side out♪

♪簪 Side♪

永遠

「さて【ブルー・ティアーズ】の対処も決まった事じゃし、夕食にするかの？」

東

「そうだね♪」

セシリア&簪&本音

「はい♪」

永遠はそう言つて夕食の準備に向かった

そう言えば今になって気づいた事があつた…

簪

「あの、クロエさんがいませんけど、どうしたんですか？」

そう、クロエさんがいなかったんだ

東

「クーちゃんは今、東さんが以前使つてたラボの一つに行つてるんだよ。『ラインバレル』の再生能力の研究がもうすぐ完成しそうだからその仕上げに行つてるんだよ。」

セシリア

「それは良かったですわ！東さんの夢に一步近づいたと言う事ですわね！」

東

「フフツ♪そうだね♪ありがとう♪」

永遠

「出来たぞい！」

本音

「わ〜い♪待ってました〜♪」

永遠

「では、いただきます。」

セシリア&簪&本音&束

「いただきます♪」

それから私達は他愛無い話をしていたんだけど…

束

「そうそうとーくん！調査が済んだよ！」

永遠

「一晩で終わるとは流石は束さんじゃな！」

束

「フフン♪当然だよ♪」

…調査って何の事だろ？

セシリア

「あの…何の事ですか？」

永遠

「デュノアの事を調べて貰ったんじゃよ。」

簪

「デュノアって…シャルル・デュノアの事？何かあったの？」

永遠

「デュノアは女じゃ。」

セシリア&簪&本音

「ええっ!？」

東

「本当だよ。本名はシャルロット・デュノア。デュノア社の現社長の娘だよ。」

簪

「何でそんな子が男のフリをしてIS学園に？」

永遠

「その理由を調べて貰ったんじゃ。あの娘が学園に来た目的はおおよそ分かるが理由が分からなかったんじゃ。」

本音

「目的って？」

永遠

「恐らく織斑に接触して【白式】のデータを手に入れるつもりなんじゃろう。」

簪

「それってデータを盗むって事!？」

東

「そうだよ。そしてその行動の理由はデュノア社の経済状況が原因だね。今あの会社は経済危機に陥ってるからね。そこからのし上がる為に世界で唯一の男の操縦者のいっくんのデータを手に入れようとしたんだね。後は広告塔として使う為だね。」

セシリア

「その為に自分の娘を男装させて送り込んだんですか!？」

それはいくら何でも酷すぎる…

東

「あの子は愛人の子だよ。」

永遠&セシリア&簪&本音

「え?」

東

「シャルロット・デュノアの母親は父親の妾なんだよ。それにすでに死んでるね。母親の死後、父親が引き取ったけど、今のデュノア社を取り仕切っているのは社長の妻、つまり本妻の方なんだよ。彼女を送り込んだのはその本妻の方だよ。」

永遠

「デュノアはその事を知つとるんか?」

束

「多分知らないね。自分を送り込んだのは父親だと思ってるよ。」

永遠&セシリア&簪&本音

「……………」

簪

「…永遠…どうするの？」

永遠

「…一つ分かっとるのは、織斑はデュノアの正体に気付いとる。…いや、アイツは知つてるんじゃない。」

セシリア&簪&本音&束

「え!？」

永遠

「実は昨日の事じゃが……………」

永遠は昨日の医務室前の事を話してくれた…

詳しくは【第075話：御剣の理と二大奥義】を読んで！

永遠

「……………という事じゃ。」

束

「確かにいつくんは知ってるね。いくらいつくんでもとーくに注意された直後に男女の区別がつかないなんて事は無いだろうからね。」

簪

「…でも何を考えてるんだろう？自分を騙して近づいてきた相手を庇う様な事をしてるみたいだけど…」

永遠

「これ以上は明日にでも本人に問い質すしかないのお。」

セシリア

「本人と言うのは織斑さんですか？デュノアさんですか？」

永遠

「どちらもじゃ。織斑が何を考えておるのかも、デュノアがどうしたいのかも本人に答えさせる。いざとなったら織斑先生にも協力を頼む。そうすればあやつらも喋るじやろう！」

束

「そうだね♪こういう時のちーちゃんはホントに役に立つからね♪」

永遠

「何か言い方がおかしい気がするが……まあいいか。」

デュノアさんの話を終わらせると夕食を食べ始めた

その後、温泉に入ると突然東さんが……

東

「所で皆！実は見て欲しい物があるんだ！」

永遠

「見て欲しい物？」

東

「うん！実はね、遂に今日、第5世代型の1号機が完成したんだよ!!」

セシリア

「本当ですか!？」

簪

「遂に完成したんですね!？」

本音

「おめでとうございます♪」

永遠

「良かったのお〜！」

東

「皆ありがとう♪」

永遠

「……………あれ? ……ところでその機体…何処にあるんじや? ……家の中にそれらしい物は無いんじやが?」

セシリア&簪&本音

「え?」

永遠

「よくよく考えてみると、ワシは第5世代を造つてるところ見た事無いんじやよな?」

セシリア&簪&本音

「ええ!」

東

「あく…それはね…」

東さんはバツが悪そうにしなから下を指さした

永遠

「下? ……まさか…穴掘つてその中に研究施設造つてたんか!」

東

「…テハツ♪」

テハツて…

永遠

「…はあく…何時の間にそんなもん造ってたんじゃ…」

束

「実は…とーくんからデータを貰ってすぐに…畑仕事に行ってる間に…パパッと…」

永遠

「そんな前から…地面を掘るなら一言言ってからしてくれんか？」

束

「…ごめんなさい…」

永遠

「まあ、もう造ってしまったもんを今更どうこう言うつもりは無いが、なら新型はそこにある訳じゃな？」

束

「うん♪皆庭に出て♪」

私達は言われた通り庭に出ると…

束

「さあご覧あれ!!」

東さんがそう言うのと地面が音を立てながら開いて行った
そして下からせり上がって出てきた物は…

永遠&セシリア&簪&本音

「!？」

それは、巨大な白いドラゴンの様な機体だった

東

「これが東さん作、第5世代1号機！その名も「ワイバーン・ガイア」だよ♪」
な、何コレ…!？」

く簪 Side outく

第078話：起動！ワイバーン・ガイア!!

（永遠 Side）

ワシ等は今、驚きのあまり固まってしまっておる

束

「…お〜い皆〜いい加減こっちの世界に戻って来てよ〜!」

永遠

「はっ!?!…アンタ何ちゆうもん造ったんじや!?!」

いち早く正気に戻ったワシは目の前のバカデカい機体を見て思わずツッコんでしまった

束

「エッヘン♪」

簪

「…あの博士…コレ本当にIS何ですか?」

束

「モチロン♪」

セシリア

「幾ら何でも大きすぎる気が…」

東

「いや、自分でも大きすぎたな〜って思ったんだけどね。」

永遠

「そもそも何で最初にコレを選んだんじゃ!」

東

「それはさ、まず造るなら【ドットブラスライザー】のデータから選ばうって決めたんだよ。次にどれを造るかで悩んでたら【ワイバーン・ガイア】が目についたんだ。機体も大きかったから、まずは大きいのから造って後から小さくしていこうって事にしたんだよ。」

永遠

「それで出来上がったんがコレか…」

東

「そゆ事〜♪」

永遠

「…まさかコレを最初に選ぶとは思わなかったのお…」

よ。」

セシリア

「…それで皆さん納得するでしょうか？」

東

「別に嘘じゃないよ。データが欲しいのは本当だし。のんちゃんなら第5世代だからつて悪用とかしないだろうからね。」

永遠

「それは確かに…」

簪

「うん…本音だから…」

セシリア

「それで納得してしまうんですよね…わたくし達…」

永遠

「うむ…」

東

「で、のんちゃんは どうする？ コレ欲しい？」

本音

「欲しいです♪」

東

「一応理由を聞いていい?」

本音

「うん♪私がコレを動かせば博士の夢に近づくんだよね♪なら私は喜んでコレに乗るよ♪モチロン悪い奴からコレを守るよ♪」

東

「…のんちゃん…気に入った!今からこの「ワイバーン・ガイア」は君のだよ!」

本音

「ありがとうございませう♪」

東

「それじゃ早速、この子をのんちゃん用に設定するね。その後は操作法を教えるよ。」

本音

「わかりました♪」

本音は返事をする早速「ワイバーン・ガイア」の中に入って初期化フォーマットと最適化フィッティングを始めた

その後、東さんから機体の動かし方や、装備されとる武装の事など徹底的に教えられ

たのじゃが、なんとこの機体、ISスーツは手足のみで動かせるらしい

「ワシの機体の様に全く着替える必要が無いという訳では無いが、一々着替える必要が無いので本音は喜んでおった

話を聞き終えた後、ワシはその間に【ワイバーン・ガイア】用の【つるぎ剣刃】を造っておった

そして気付いた時には夜が明けとつた

永遠

「むーいつの間にかもう朝じゃな…束さん、後どの位かかりそうじゃ?」

束

「うーん…のんちゃん物覚えがいいから順調なんだけど…それでも後2、3時間はかかるね。」

永遠

「なら織斑先生に今日は遅れると連絡しとくぞ。理由は戻った時に説明すると言えはいじやろ。」

束

「お願いね〜♪」

ワシはそう言つて織斑先生に連絡した

案の定遅れる理由を聞かれたが戻った時に説明すると言って何とか納得して貰ったんじや

で、連絡も済んだワシは朝飯の用意を始めたんじや

セシリアと簪も手伝ったお陰で思ったより早く作業が終わり、ワシ等は朝食を食べる性陣はそのあと軽くひとつ風呂浴びる為に温泉に行つたんじや

それからしばらくして皆が帰つて来たから学園に戻ろうとしたら東さんが全員「ワイバーン・ガイア」に乗って行けと言つて来たんじや

どういう事か分からなかったが、何でもこの機体はデカ過ぎる為、中に何も無いスペースがあるらしく、大人4、5人は入れるらしい

そこで東さんはそこを所謂居住スペースにして、外から入れるハッチも取り付けて他の人間も入れるようにしたらいいんじや

しかも、この機体を自動操縦にして操縦者の本音もすぐに来れる様にしてあるらしいもはや完全に巨大ロボットになつとるなコレ：

東

「それじゃあ皆またね〜♪」

永遠

「と言つてもワシは夕方帰ってくるがな♪」

東

「ニヤハハッ♪そうだったね♪のんちゃん、この子をよろしくね♪」

本音

「は〜い♪」

セシリア

「東さん…【ブルー・ティアーズ】の事…よろしくお願いします。」

東

「まっかせなさい！セーちゃん用にパワーアップしておくから楽しみにしてるといいよ

♪」

セシリア

「はい♪」

簪

「では博士また…」

東

「うんじゃあね〜♪」

そしてワシ等は本音が操縦する【ワイバーン・ガイア】に乗って学園に戻って行った
んじゃ

〈永遠 Side out〉

〈東 Side〉

東

「…さて、それじゃあクーちゃんに戻ってきたらセーちゃんの機体に取り掛かるかな。」

私はそう言って次に造ろうと思っていた機体の設計データを開いた

東

「…でも丁度よかったな。セーちゃんならこの機体を使いこなせるだろうし、何より今のこの子じゃセーちゃんに着いて行けないからね♪」

私は待機状態の「ブルー・ティアーズ」と「ハルファス・ベース」と書かれた機体のデータを交互に見ながら微笑んでいた

〈東 Side out〉

第079話：翼竜強襲？

く千冬 Sideく

千冬

「授業を始めるぞ！」

一夏

「……あの……織斑先生……」

私が授業を始めようとしたら一夏が質問してきた……予想はつくが……

千冬

「ん？……火ノ兄達の事か？」

一夏

「え！……あ、はい……まだ来てないんですけど？」

千冬

「アイツ等なら今朝火ノ兄から連絡が来た。4組の更識と一緒に今日は遅れるそうだから理由を聞いたが戻った時に分かると言われた。」

一夏

「…はあ…」

千冬

「そういう訳であの4人はまだ学園にいない。理由によっては説教しておくから安心しろ。」

一夏

「…はい…」

それからしばらく授業をしていたんだが…

ヴイーーーーーッ！ヴイーーーーーッ！ヴイーーーーーッ！

千冬

「警報!？」

P r r r r r r

千冬

「織班です！何事ですか!？」

教員

『先ほど学園のリーダーに反応があり未確認機がこちらに向かっています!』

千冬

「未確認機!?火ノ兄達では無いんですか?」

教員

『違います！方角は同じですが数は1機です！それに機体がISにしては大きすぎるんです！』

千冬

「…大型の未確認機…分かりました！教員部隊の準備を、それと専用機持ちと代表候補達にも召集をお願いします！」

教員

『分かりました！』

ガチャ！

真耶

「…織斑先生…」

千冬

「…授業は中止だ！山田先生は管制室へ！それから、織斑、デユノア、ボーデヴィツヒは着いて来い！他の者はココで待機だ！」

生徒達

「は、はい！」

真耶

「わ、分かりました！」

ラウラ

「教官！未確認機とは一体？」

千冬

「説明は後だ！行くぞ！」

一夏&シャルル&ラウラ

「はい！！」

箒

「……………」

私は廊下を歩きながら現状で一番必要な奴の顔が思い浮かんでいたが…

千冬

「……………火ノ兄がいないのは痛いな…」

ラウラ

「!？」

何で肝心な時にいないんだアイツは！

鈴

「一夏！」

一夏

「鈴！お前も呼ばれたのか？」

鈴

「当たり前よ！私も代表候補なんだから！」

シャルル

「でも君の機体は……」

鈴

「誰かさんのせいで使えないわ！けど訓練機は使えるからね。」

ラウラ

「……………チツ！」

千冬

「貴様ら、無駄話しないで早くいくぞ！」

一夏&鈴&シャルル

「は、はい！」

く千冬 Side outく

く永遠 Sideく

永遠

「意外に乗り心地がいいのお。」

セシリア

「本当ですわね♪」

簪

「これからはこれで行き来できる。」

本音

「そっだね〜♪」

ワシ等は雑談しながら学園に向かつとる

機体は自動操縦にしとるから本音もこつちにいても大丈夫になつとる

簪

「次に私達が向こうに行く時、必要な物をこれに積み込める。」

セシリア

「何を持っていきましようか？」

本音

「う〜〜ん？」

簪

「…後でゆっくり考えればいいよ…」

セシリア

「そうですね。」

永遠

「…あそこはワシの家なんじゃが…まあいいか…」

そんな話をしとるとアラームが鳴った

永遠

「もうすぐの様じゃな…本音、コックピットに戻りんさい。」

本音

「は〜い♪」

簪

「所でコレの事どう説明するの？」

セシリア

「そう言えばそうですね？」

永遠

「どうするも正直に束さんが造ったと言うしかあるまい。」

セシリア

「よろしいのでしょうか？」

簪

「でも、それしか言いようがない……」

永遠

「まあ、織斑先生と山田先生、それに鈴も事情を知つとるからあの3人にも弁護して貰えばいいじやろ。東さんもこれを学園に持つていけばワシ等との関係がバレる事くらいは分かつとる筈じやよ。」

セシリア&簪

「そうですね（だね）。」

本音

『みんなく到着するよ〜！』

さて、どうなるかのお……

く永遠 Side outく

く千冬 Sideく

私は教員部隊、専用機持ち、代表候補生たち全員を校庭に集め事情を説明した
私も【打鉄】を纏い、他の者達もそれぞれがISを装着している

千冬

「現在この学園に未確認機が接近しているとの事だ！レーダーで確認した所かなりの大型との事らしい！」

ザワザワ…

楯無

「…織斑先生、未確認機に通信はしたんですか？」

千冬

「ああ、だが応答は無かった！」

ラウラ

「教官！ではその未確認機は攻撃してもいいんですね？」

千冬

「落ち着け！まだ相手の目的も分からないんだ！向こうが攻撃してこない限りこちらから手を出すな！勝手に攻撃した場合は処罰するぞ！」

ラウラ

「…分かりました…」

楯無

「織斑先生…火ノ兄君はどこにいるんですか？彼がいないのは戦力的にかなりの痛手に

なるんですけど。」

千冬

「アイツはまだ学園に来ていない。オルコット、布仏、お前の妹と一緒に遅れると今朝連絡があった。」

ラウラ

「あんな奴の手を借りる必要はありません！未確認機は私一人で倒して見せます！」

楯無

「そうは言ってもね……彼は間違いなくこの学園最強よ？現に貴方は生身の彼に刀一本で負けたじゃない。一昨日の事もう忘れたの？」

ラウラ

「!?…あれは少し油断しただけだ！」

楯無

「確か貴方の機体はドイツの最新鋭機よね？隙をついただけで貴方のISの武器を破壊して、強制解除するまでのダメージを与えるなんて事が生身の人間に出来るのかしら？」

ラウラ

「グッ！」

楯無

「そう言えば貴方軍人だったわね。その事は本国に報告したのかしら？まあ、出来る訳無いわよね。生身の人間に負けたなんて恥以外の何者でも無いものね。」

ラウラ

「き、貴様！」

楯無

「何かしら？全部ホントの事でしょ？自分が国を馬鹿にされる様な事をしておいてよく他の国を馬鹿に出来たわね。感心するわ。」

ラウラ

「…死にたい様だな貴様!!」

楯無

「アハツ♪相手が火ノ兄君なら殺されるでしょうけど、貴方程度の相手に殺されるほど私は弱くないわよ。」

ラウラ

「…なら貴様を殺して証明してやる！」

千冬

「貴様らしい加減にしろ！今は緊急事態だ！そんな事も分からのか!!」

楯無

「…すみません…調子に乗って言い過ぎました…ごめんねボーデヴィツヒさん…私が言い過ぎたわ…」

ラウラ

「……………」

千冬

「ボーデヴィツヒ!!」

ラウラ

「…申し訳…ありません…」

千冬

「喧嘩だったら後で好きなだけさせてやる!それとも殺し合いがしたいのか!なら今すぐ学園から出て行け!今は『織斑先生!』ムッ!」

管制室にいる山田先生から連絡が来た

真耶

『未確認機がもうすぐココに来ます!そちらでも視認できる頃です!』

千冬

「了解した!全員注目!もうじき未確認機が視認できる距離まで来る!今一度通信を試

みる！返答が無かった場合、もしくは返答の内容によつては攻撃を許可する！」

全員

「了解！」

一夏

「…ん？………な、何だあれ!？」

一夏が空を指さして叫んだ…奴が見える位置まで来たのか…一体どんな奴…

千冬

「何!？」

ザワザワ…

全員が動揺している…それもそうだ…未確認機の姿は…

鈴

「人じゃ…無い?」

シャルル

「アレは…ドラゴン!!」

ラウラ

「何だあの大きさは!？」

楯無

「【戦国龍】とは違う……」

そう、所謂ドラゴンの姿をしているのだ！しかも同じドラゴンでも火ノ兄の【戦国龍】を遥かに上回る巨体！あれでは完全に怪獣ロボットだ！

千冬

「あれが……未確認機……」

楯無

「……先生！通信を！」

千冬

「!?……その大型機！……こちらはI S学園教師、織斑千冬だ！何が目的でココに来た！返答しだいではこちらには迎撃の用意がある！」

返信は来ない……聞こえてないのか?……それとも無視しているのか?

ラウラ

「教官！攻撃許可を！」

………くっ、やむをえん！

千冬

「………仕方がない！……っ『もしも……ん?』」

な、何だ今の間の抜けた声は?と言うかこの声はどこかで?

？

『やつと通じた〜♪織斑先生〜攻撃しないでね〜♪』

楯無

「この声!?!…まさか貴方…本音ちゃん!?!」

本音

『あつ! たつちゃんさん♪そだよ〜布仏本音だよ〜♪』

全員

「ええええええええええー!?!?!?!」

千冬

「本当に布仏なのか?…なら火ノ兄達は!?!」

本音

『みんなココにいるよ〜♪』

楯無

「ココについて…そのドラゴンの中に全員いるってこと!?!」

本音

『そだよ〜♪それで着陸したいんだけど何処に降りればいいのかなく?』

千冬

一夏

「デツケエエエー………」

鈴

「あんた何時まで腰抜かしてんのよ？」

一夏

「あ／＼／＼」

何やってるんだか………ん？

ガシヤツ…ズウウウウウー…ンツ！

千冬

「何だ!？」

突然、背中の翼を片方、地面に水平に突き刺した

バシユツ！

背中のハツチの様な所が開くと、そこから…

永遠

「やっと着いたのお…」

セシリア

「そうですわね…」

簪

「いい旅立った…」

永遠達3人が出てきた

千冬

「お前達！」

3人はそのまま地面に刺さっている翼を通って降りてきた…あの翼は橋代わりだったわけね…

…っであれ？

鈴

「ねえ本音は？」

永遠

「まだあの中じゃ。」

千冬

「…何故アイツだけ残って…ちよつと待て！」

一夏

「千冬姉？」

千冬

「織斑先生だ！…そう言えばさっきの通信…布仏しか話してこなかったな…」

楯無

「言われてみれば…」

もしかして!?

千冬

「火ノ兄！アレを動かしていたのは布仏なのか!？」

永遠

「そうじゃよ。」

全員

「ええええええええええーっ！っ!!」

やっぱり本音が操縦してたんだ！でも、何で本音が？

カッ！

目の前の巨大ドラゴンが突然光り出し、光が消えるとそこにはドラゴンがいなくなる
代わりに本音が立っていた

これってまるで…まさかこの機体!?

楯無

「本音ちゃん!？」

一夏

「ど、どういう事だよ!?俺と千冬姉と箒以外は石ころ程度にしか思わないあの束さんが、何で火ノ兄の家に住んでるんだよ!!」

千冬

「そのままの意味だ。私も最初は驚いたが、アイツも変わって来てるという事だ。」

一夏

「あの束さんが…」

千冬

「聞いた話だが、アイツもお前同様火ノ兄に説教されたらしくてな、徹底的に凹まされてそれから考えを改めたらしい。」

一夏

「束さんにまで説教したのかよアイツ…」

シャルル

「篠ノ之博士が…火ノ兄君の家に…」

千冬

「…言っておくが火ノ兄の住んでいる島はコイツ個人の所有地だ。法律上、所有者の許可なく勝手に入れば不法侵入として捕まるからな。例え外国国籍の者でも例外ではな

い。」

全員

「……………」

何人かが悔しそうな顔してるわね…大方、永遠の家に乗り込もうって考えてたんでしようね…

千冬

「捕まってもいいなら好きにしろ。まあ、そんな事をすれば火ノ兄に半殺しにされるのがオチだな。」

全員

「……………」

確かにそうなる姿が目に見えわね…

永遠

「ワシって織斑先生にはどんな風に映つとるんじや？」

セシリア&簪&本音

「さあ…」

一夏

「火ノ兄！」

永遠

「ん？何じゃ？」

一夏

「何で東さんがお前の家に住んでる事を言わなかったんだよ！」

永遠

「聞かれなかったからな。それに言わなかったのは東さんを守る為じゃ。そんな事も分からんのか？」

一夏

「え？」

鈴

「アンタ本当に分からないの？東さんは世界中から狙われてるの忘れたの？」

一夏

「あ!？」

鈴

「実際、この場にいる何人かは今すぐにも永遠の家に乗れ込んで東さんを確保しようと考えてる筈よ。」

全員

「!？」

私の言葉に反応したって事は凶星だったわけね…

鈴

「だから永遠は極一部の人間にしか言わなかったのよ。」

一夏

「…その極一部の中にお前も入ってるのか？」

鈴

「ええ、後は山田先生もよ。」

一夏

「山田先生も…」

千冬

「東の所在を知っていたのは私と山田先生、オルコツト、更識、布仏、凰の6人だけだ。」

一夏

「…何で…何で千冬姉には教えて俺には教えなかったんだ！それに箒にも！」

永遠

「単純に信用出来んからじゃ。」

一夏

「な!?信用…出来ないだど!」

永遠

「言い方が悪かったな。信用出来ん言うのはお主も篠ノ之も口が軽そうと言う意味じゃ。」

一夏

「ぐっ!…で、でも俺は束さんの…」

永遠

「束さんとお主の関係なんぞワシは知らんし関係ない。それに会ってどうするんじゃ?世間話でもする気か?それなら電話で十分じゃろ?」

一夏

「…それは…」

永遠

「篠ノ之にも言わんかったのはあの娘が束さんを毛嫌いしとるからじゃ。居場所を教えなくても意味は無かろう。」

一夏

「ううっ…」

永遠

「逆にセシリアや織斑先生達は口も堅く信用出来た。じゃから教えたんじゃ。それ以外に理由は無い。」

本当は永遠の家に行った時に、一緒に住んでる事を知っただけなんだけど…

一夏

「……………」

千冬

「束の事はもういい。それにアイツは火ノ兄の家にはもういないだろう。所在がバレた時点でまた雲隠れするだろうからな。」

永遠

「そうじゃな。…寂しくなるのお…」

全員

「……………」

千冬

「お前達、改めて聞くんがああ馬鹿デカイ機体は束が造った物で間違いいな？」

永遠

「そうじゃー！」

セシリア

「アレこそ東さんが開発した新型！」

簪

「第5世代型試作1号機！」

本音

「【ワイワイ】だよ♪」

ズコッ！

何よその名前…

永遠

「違うじゃろ！」

あ！やっぱり違うんだ…

簪

「第5世代型IS【ワイバーン・ガイア】…それがあの機体の名前！」

全員

「ええええええええーっ！っ！！」

ラウラ

「だ、第5世代だど!?!」

シャルル

「あのドラゴンが!」

千冬

「ワイバーン・ガイア」：見た目通りの名前だな。」

鈴

「確かにそうですね。」

楯無

「まず名前ですか! 第5世代って所は気にならないんですか!? って言うか何で織斑先生と風さんはそんなに冷静なのよ!」

千冬

「ん?…私と風、山田先生は東が第5世代を造っているのは聞いていたからな…それが完成したと言うだけだ。」

鈴

「まさかあんなドデカい機体だなんて思わなかったけどね。」

シャルル

「それでも第5世代ですよ! 何で驚かないんですか!」

ラウラ

「教官も知ってる筈です! 今は第3世代の開発に取り掛かった所なんですよ!」

楯無

「それを、第4を飛ばして第5を造るなんてありえませんか！」

千冬

「東ならそのくらい出来るだろ。」

ラウラ&シャルル&楯無

「……………」

その一言で納得出来るのが東さんの凄い所よね…

と言つても実際は永遠の機体のデータを使ったんだろうけど…それでも造れたのは東さんだからとしか言えないわね…

一夏

「……………そんなに凄い事なのか？」

鈴

「アンタちゃんと勉強してんの？誰だつて驚く事よ？私達だつて最初に聞いた時は驚いたんだから。」

一夏

「えーあ、いや…」

千冬

「…織斑……………」

一夏

「は、はい!？」

千冬

「…後で詳しく聞かせて貰うぞ…」

一夏

「…はい…」

コイツもしかして勉強してないんじゃないの？

♪鈴 Side out♪

♪千冬 Side♪

ラウラ

「オイ！」

本音

「な〜に〜?」

ラウラ

「何故お前ごときが第5世代の機体を手に入れたんだ！答えろ！」

本音

「東さんがくれたんだよ〜♪」

ラウラ

「くれた、だと！」

セシリア

「そうですね。東さんが完成した第5世代の実働データを取るのを条件に本音さんに差しあげましたの。」

簪

「東さんが本音を気に入ったのも理由だけど…」

ラウラ

「……………」

永遠

「何じゃチビツ子？羨ましいんか？」

ラウラ

「そんな訳あるか!？」

永遠

「それはすまん。そう見えたんじやよ。」

ラウラ

「ぐぬぬ………フンツ！」

シャルル

「怒らせたら駄目だよ……」

鈴

「ほつときなさいよ！………アレ？セシリア……アンタ「ブルー・ティアーズ」は？」

そう言えば、オルコットの耳についている待機状態のISが無いな

セシリア

「「ブルー・ティアーズ」は博士に預けてきましたわ。東さんに相談したら強化と改造をしてくれると仰つてくれましたので。」

鈴

「何よそれー!? いいなく！」

シャルル

「そうじゃないでしょ！いいのセシリア！勝手に改造なんかして！」

一夏

「え？どういう事だ？」

シャルル

「国家に属しているI Sは国の許可無しに勝手に改造とかをしてはいけない事になってるんだよ。修理するのはいいんだけど。」

鈴

「そう言えばそうだった！」

セシリア

「許可なら貰ってますわよ。東さんが改造をしてくれるなら好きな様に弄ってくれて構わないと二つ返事で許可してくれましたわ。」

シャルル

「あ…：そうなんだ…」

鈴

「いゝいゝなゝゝゝ!!」

セシリア

「…ですが…戻ってくる時は、元の原形は留めていないでしょうね…」

千冬

「それは間違いないな…あの東が改造するんだ…改造では無く魔改造されて戻ってくるぞー！」

セシリア

「織斑先生もそう思いますか？」

千冬

「賭けてもいいぞ?」

セシリア

「あははは…やっぱりですか？」

千冬

「…さて、いつまでもココで話している訳にもいかんな。火ノ兄、お前達が今日遅れたのは布仏の機体が理由か？」

永遠

「そうじゃよ。昨日の夜から徹夜で作業しておつてな、終わったのが朝の9時頃何じやよ。」

千冬

「それならそうと連絡した時に説明しろ。」

永遠

「驚かそうと思うてな！」

千冬

「やり過ぎだ！お陰で授業を中止する羽目になったんだぞ！」

永遠

「あくそれは〜…」

永遠&セシリア&簪&本音

「ごめんなさい！」

千冬

「全く！…布仏、お前の機体を調査したい。すまんがこちらに預けてくれ。」

本音

「は〜い♪」

千冬

「すまんな。」

3つの勾玉がついた首飾り、これが「ワイバーン・ガイア」の待機状態か…

永遠

「織斑先生、一応言っとくが「ワイバーン・ガイア」は本音しか使えんように調整される。東さんか本音自身でなければ機体にアクセスする事も出来んからな。」

これは私に対して言ったものでは無いな…他の奴…別の国の連中に対して言ったな

…

千冬

「…分かった。」

火ノ兄の言葉に何人が反応したな…まあいい…今は泳がせておくか…

千冬

「火ノ兄、オルコット、更識、布仏はこの後、詳しい話を聞くから私について来い。他の者は其々の教室に戻って授業を再開するように！以上解散！」

全員

「はい！」

第5世代機…束め、遂に完成させたか…

しかし…何か忘れてる気がするな…

永遠

「どうかしたんか？」

千冬

「いや、何か忘れてる気がするな…まあ思い出せないなら大した事では無いのだから…」

永遠

「さよか…」

く千冬 Side outく

く箒 Sideく

箒「……………」

第5世代…何故姉さんはあんな奴に新型を与えたんだ？

まあいい…姉さんに造って貰わなくても私には相応しい機体がある…

あんな凶体だけのデカ物は私には必要ないからな…

私には…【戦国龍】があるのだからな!?

く箒 Side outく

第080話：制限時間

く千冬 Side

火ノ兄達と「ワイバーン・ガイア」を調べる為に整備室に向かっていると…

永遠

「織斑先生…ちといいかの？」

千冬

「何だ？」

永遠

「デユノアの事じゃ。」

火ノ兄が話しかけてきたが、内容はデユノアの事か…という事は

千冬

「…奴が女だという事か？」

永遠

「気付いとしたか。流石じゃな。」

千冬

「当然だ！それに一夏もその事を知っているな？」

永遠

「うむ。一昨日の件で確信したわい。」

千冬

「私もだ。」

アイツが馬鹿なお陰ですぐに分かった

永遠

「それで東さんに調べて貰ったんじやが、あの娘の本当の名はシャルロット・デュノア。デュノア社の現社長と愛人の娘じや。」

千冬

「愛人？…余り気持ちのいい言葉ではないな。」

永遠

「あやつのは織斑の【白式】のデータじや。」

千冬

「そういう事か…その為にわざわざ男装してくるとはご苦労な事だな。…だが、何故そんな事をした？」

永遠

「デュノア社は今経営危機に陥つとる。そこからの巻き返しの為じやろう。」

千冬

「その為に自分の娘にあんな事をさせているのか！」

チツ！胸糞悪い話だ！

永遠

「いや、デュノアをココに送り込んだのは社長の本妻の方らしい。」

千冬

「何!?!」

永遠

「あの会社は今、本妻が取り仕切つとる。父親である社長は飾り物扱いじゃ。」

千冬

「…娘はその事を知っているのか？」

永遠

「恐らく知らん。自分を送り出したのは父親じゃと思うとる筈じゃ。」

千冬

「そうか…どうするつもりだ？」

永遠

「デュノアが今後何をしたいのか、織斑が何を考えておるのかを問い質すつもりじゃ。」

千冬

「…確かにそうした方がいいな。」

永遠

「恐らく今日にでもデュノアはワシに接触する筈じゃ。東さんとの関係がバレたからな。その時に織斑と一緒に放課後の屋上に呼び出すつもりじゃ。それで織斑先生にもその場に来てほしいんじゃよ。」

千冬

「私もか？」

永遠

「織斑先生がおればあの二人も誤魔化そうとはせん筈じゃ。」

千冬

「私は自白剤か？…だがいいだろう。それで会うのはお前一人か？」

永遠

「そのつもりじゃ。わざわざセシリア達を連れて行く必要は無いからのお。」

千冬

「そうだな。」

それから私達は整備室で山田先生と合流し布仏に「ワイバーン・ガイア」にアクセスして貰った

だが…

真耶

「な、何ですかこのスペックは?!」

「ワイバーン・ガイア」は第5世代と言うだけあつて機体性能が現在のどのISをも遙かに上回っていた

武装だけでも、両腕に装備された連射型のレーザー砲【アーム・カノン】
口にも高出力レーザー砲【レーザー・ブレス】

近接武装として翼そのものがブレードになっている【ウイング・ブレード】

尻尾の先端にも大型ブレード【テール・ブレード】

背中には12連装のミサイル発射管が左右に取り付けられている

その上火ノ兄の造った【剣刃^{つるぎ}】を既に装備している…

【夢幻の天剣トワイライト・ファンタジア】…全体が金色で鰐の部分^{つるぎ}が赤い宝玉とその周りを小さな青い宝玉が回っている様な形をした【剣刃^{つるぎ}】か…

しかもこの機体は水中潜行が出来る上に、【ウイング・ブレード】を回転させる事でドリルの様にして地面に潜る事まで可能にしている

千冬

「束の奴…とんでもない物を造ったな！」

真耶

「本当ですよ〜〜〜…」

千冬

「見た目から頑丈そうだとは思ったんだが…いくら第5世代とはいえ、この巨体で第3世代以上の機動性を持つているとはな…その上火ノ兄の機体と同じとまでは行かないがISスーツは手足だけでいいとは…」

真耶

「着替えが楽ですね〜…」

千冬

「全くだ…」

真耶

「…………でも、これが篠ノ之博士の夢の第一歩なんですね…」

千冬

「…………そうだな…少々やり過ぎな気がするが…」

真耶

「あはは…」

永遠

「まあ心配せんでも次に造る奴はもっと小さくなつとるはずじゃ。本人も最初にデカいのを造つてそれから小さくしていくと言うとつたしな。」

千冬

「そうあつて欲しいな…こんなサイズの機体はコイツだけで十分だ。……………次？」

本音

「どうしたんですか？」

次の機体…アイツまさか!?

私はある考えが浮かびオルコットを見た

セシリア

「?…わたくしに何か？」

簪

「織斑先生？」

千冬

「…オルコット…確かお前の機体は今東が持つてるんだよな？」

セシリア

「え？…はい、そうですね…それが何か？」

永遠

「あ〜〜〜…そういう事か…」

火ノ兄も気づいたな…

簪

「永遠もどうしたの？」

永遠

「さつき魔改造すると言ったじゃろ？束さん…『ブルー・ティアーズ』を第5世代に魔改造する気じゃ。」

セシリア&簪&本音&真耶

「ええっ!？」

千冬

「『ブルー・ティアーズ』はオルコットに着いて行かなくなっている。生半可な強化ではオルコットはすぐに追いついてしまう。そうならない様にするには第5世代にするのが一番手っ取り早いからな。」

セシリア

「そんなまさか…」

千冬

「東がお前の機体を持ってくれば分かる事だ…」

セシリア&簪&本音&真耶

「……………」

取り合えず「ワイバーン・ガイア」の調査を続けた…

アイツ今度はどんな物を造る気だ…

く千冬 Side outく

くシャルル Sideく

…第五世代型「ワイバーン・ガイア」……………あの機体のデータが手に入れば…

でも、火ノ兄君はあの機体にアクセス出来るのは篠ノ之博士か布仏さんしか出来無

いって言った…

…ここは火ノ兄君に篠ノ之博士の事を聞こう

多分僕以外にも聞かれてるだろうから怪しまれないだろうし…

シャルル

「…ひ、火ノ兄君…ちよつといいかな？」

…そう思っていたら…

永遠

「…何用じゃ？………シャルロット・デュノア？」

シャルル

「!?」

な、何で…僕の名前を!?

永遠

「こつちもお主に用があつた。放課後に織斑と屋上に来い。そこで話を聞いてやるわい。」

シャルル

「わ、分かつた…」

永遠

「ではな。」

シャルル

「……………」

…火ノ兄君にバレた…しかも一夏も連れて来いつて事は、一夏が僕の正体を知っている事にも気づいてる…どうしよう…

……………

…
…

放課後になると僕は一夏と屋上に向かっていた…

その途中で僕の事がバレた事も一夏が知っている事も話した…

一夏

「…火ノ兄の奴、いつ気付いたんだ？」

シャルル

「…分からない…でも僕の本当の名前を知ってる時点で僕にはこの呼び出しを拒否する事は出来ないよ…」

一夏

「シャルル…だ、大丈夫だ！アイツが何かしてきたら俺が守ってやるから！」

シャルル

「…一夏…その言葉は嬉しいけど彼に勝てるの？」

一夏

「うぐっ!？」

火ノ兄君は生身で I S に勝てる人間…しかも彼自身も I S を持つてる…たった二人じゃ勝てる訳ないよ…

そんな話をしてるうちに屋上に着いた

屋上にはすでに火ノ兄君が来ていた

千冬

「これで全員だな。」

一夏&シャルル

「!?」

後ろを振り向くと屋上の入り口に織斑先生がいた

一夏

「ち、千冬姉！何でココに!？」

千冬

「織斑先生だ！と言いたいが今はいい。お前達の事を火ノ兄から聞いてな、私がいれば正直に話すだろうという事で呼ばれた。」

シャルル

「……………」

織斑先生まで呼んでいたなんて…これじゃあ誤魔化す事も出来ない…

千冬

「やはり女だったか。」

一夏

「……………いつ…気付いたんだよ…シャルルが女だって…」

千冬

「初めて会った時から違和感を感じていた。確証を持ったのは一昨日の医務室の前での一件だ。」

シャルル

「あ、あの時!？」

千冬

「そうだ。一夏、お前は私がいたのにデュノアにボーデヴィツヒを渡そうとした。火ノ兄から男は入るなと言われた直後にだ!」

一夏

「うっ!」

永遠

「あの状況で間違えたとすればお主は男女の区別も出来ん程の大馬鹿という事になる。じゃが、デュノアが女だと知っていたなら話は別じゃ。」

千冬

「そしてデュノアも疑問も持たずにボーデヴィツヒを受け取ろうとした。それでお前が

女だと確信出来た。」

最初から警戒されてたんだ…それをあの時の一件で完全にバレてしまったんだ…

永遠

「さて、シャルロット・デュノア…お主が男装してまでココに来た目的は織斑の…【白式】のデータを盗む為じゃな？」

シャルル

「…そこまで分かってるんだ…」

永遠

「男装してまで織斑と接触しようとするなら理由はそんな所じゃろ。もっともお主の本名は束さんに調べて貰ったがな。」

篠ノ之博士か…確かにあの人ならその位調べるなんて簡単だろうね…

シャルル

「…そうだよ。僕の目的は一夏のデータを盗む事、そうするように父から命令されたんだよ。」

千冬

「父から…か…」

一夏

「待つてくれ!!シャルルは父親に命令されて嫌々ここに来たんだ!それにここにいれば3年は手出し出来ないんだ!その間に解決策を考えれば…」

千冬

「驚いたな!お前がそれに気付いていたとは…:どうやら少しは勉強しているようだな。」

一夏

「俺ってどんな風に見られてるんだよ…」

千冬

「頭で考えるより先に無責任な事を口走る鈍感男だが。」

一夏

「……………すみません…」

一夏って織斑先生からそんな風に見られてたんだ…:しかも否定しないって事は自覚があるんだ…:

永遠

「デュノア…:お主が今言った言葉には一つ間違いがあるぞ。」

シャルル

「?」

永遠

「お主を送り込んだのは父ではない。本妻の方じゃ。」

シャルル

「……………え？」

僕を送り込んだのが…本妻の方？

シャルル

「そんな！僕は確かに父からI S学園に入って一夏のデータを盗む様に言われたんだよ！」

永遠

「東さんの調査によるとデユノア社を實際取り仕切つとるのはその本妻の方じゃ。お主の父はただの飾り物になつとるらしい。」

シャルル

「父が…飾り物!？」

永遠

「そんな人間に発言権があると思うとるんか？」

シャルル

「じゃ、じゃあ…あの時、僕に出した命令は…」

永遠

「父親の口を通して本妻から出された命令という事じゃ。」

シャルル

「そんな…」

永遠

「まあ、お主の父親が何を考えておるかとは分からんがな。もしかしたら別の思惑があるかもしれんし、本妻と同じ考えかもしれん。それは本人に聞くしかないのお。」

シャルル

「……………」

一夏

「シャルル…」

永遠

「お主の間違いを一つ正した訳じゃが、デユノア、これからお主はどうしたいんじゃ？」
シャルル

「ぼ、僕は…僕はここにいたい…でも…どうすればいいのか…」

永遠

「さよか。それが聞ければワシは何も言わん。まあ織斑が言った通り3年以内に何とかするんじやな。今のままじゃと国に戻ればお主は任務失敗で消されるじやろうから

な。」

シャルル

「!?…消される…」

永遠

「まあ、方法が無い訳では無いがな…余りお勧めは出来んが…」

一夏

「本当か!?どんな方法だよ!?!」

永遠

「国を捨てればいい。」

シャルル

「く、国を…捨てる!?!」

千冬

「つまりどこかの国に亡命しろと言う事か。確かにそうすれば狙われる事は無くなるな。」

シャルル

「でも…その方法は…」

永遠

「二度と故郷の土は踏めんじやろうな。お主の母の墓参りも出来んから事前に墓を移さねばならんのお。じゃからお勧めはせんと言うたじやろ?…それは最後の手段と言つてもいいからのお。」

シャルル

「最後の…」

永遠

「まあ、亡命するの、それとも別の方法を取るのかはお主の自由じゃ。じゃが、一度は父親と話す事を勧めるぞ。本妻のおらん所ぞな。」

シャルル

「…父さんと…」

永遠

「後は織斑と相談するんじやな。それからデュノア、お主の用件とは東さんの事じやろ?悪いがワシは何も言わんぞ。」

シャルル

「!?…う、うん…分かった…」

…それも分かつてるんだ…

…僕が…これからどうしたいか…か…

くシャルル Side outく

く一夏 Sideく

永遠

「次に織斑、お主は何を考えとるんじや？」

一夏

「お、俺!？」

永遠

「そうじや。デュノアの正体も目的も知つてなお庇う様な事をしとるのは何故じや?…
また考え無しに俺に任せろとでも言つたんか？」

一夏

「そ、そんな事無い! さつきも言つただろ3年もあるんだ! その間に解決策を考えれば
いいんだって!」

永遠

「結局は後回しにしたらだけじやろ? それを考え無しと言うんじや。」

一夏

「ぐっ…」

永遠

「それにさつきから3年3年と言うが本当にデュノアを3年間も今の状態にしとくつもりか？」

一夏

「え？」

永遠

「本当にデュノアの事を思うなら一日でも早く解決策を考えてやるもんじゃろ？お前の言っとる事はデュノアを無駄に長く悩ませとるだけじゃぞ。」

一夏

「うっ!？」

永遠

「それにその規則には大きな穴があるんじゃぞ。」

一夏&シャルル

「穴？」

永遠

「確かにその規則通りならデュノアに手出しは出来ん。じゃが、それはあくまで別の国や組織に対してだけじゃ。」

一夏&シャルル

「え?」

永遠

「デュノア：お主はフランス国籍の人間じゃ。故に国からの帰還命令の類が出れば拒否する事は出来ん。ましてや代表候補生の立場ともなれば余計にな。そう言った物に對してその規則は何の役にも立たん。」

シャルル

「あ!?!」

永遠

「織斑：…どうする気じゃ?」

一夏

「どうするつて：…どうすればいいんだよ!」

永遠

「知らん!デュノアを助けると言ったのはお前じゃろ?お前が何とかしろ!!」

一夏

「そんな言い方しなくていいだろ!」

千冬

「一夏……お前は何時もそうだったな？……誰か困っている人がいれば俺に任せろ、俺が何とかする……そう言っていたな？」

一夏

「千冬姉……それがいけないのかよ！」

千冬

「別に悪いとは言わん。だが、今までお前はそう言っただけで自分で解決した事があつたのか？」

一夏

「!？」

千冬

「お前の困っている人を助けたいと言う気持ちは分かる。だがな、そうやってお前は相手に無駄な期待をさせては碌に何もしていないだろ。何時も見かねた私や東が解決していったんだぞ。」

一夏

「……………」

千冬

「今回のデュノアの件もそうだな？お前は任せろと言いながら時間が3年あるからと

言って何も解決策を考えていない。デュノアの事情を昨日知ったばかりの火ノ兄でさえ最終手段とは言え亡命と言う方法を考えてぞ。だが、それ以前から知っていたお前は何か考えていたのか？」

一夏

「……………」

千冬

「いいか一夏!!自分で対処出来ないなら初めから任せろ等と口にするな!!相手にも周りにも迷惑だ!!」

一夏

「!?……………ううっ……」

……千冬姉の言う通りだ……俺は任せろって言って……何もしてない……何も考えてない

今まで解決してきたのは千冬姉と束さんの二人だ……それを俺は……自分が解決したみたい……

永遠

「……織斑……一つ聞く……何故他の者に頼まなかった？」

一夏

「え？」

永遠

「出来もせんに相手を助けようとしとるなら、何故出来る者に事情を話し協力を頼まなかったと聞いとるんじや。お前の周りなら織斑先生じやな。」

一夏

「そ、それは…」

永遠

「答えられんか？それならそれで構わん。大よその見当は付くから答えんでいいわい。」

一夏

「え？」

見当が付くってどういう事だよ…

永遠

「まあ、それはいい…それからお前、時間は3年『も』あると言うておるが、実際は3年『しか』ないんじやぞ。」

一夏

「え？…3年しか…」

永遠

「はあ…まさかとは思うが気づいとらんのか？そもそも、デュノアの事だけを考えれば

3年は十分な時間じゃ。だけならな。じゃがそれ以外にもやらねばならん事が沢山あるじゃろ！お前が日々しなければならん事の中でデュノアに割ける時間がどの程度あると思うとるんじゃ！」

一夏

「あ?！」

そうだ…火ノ兄の言う通りだ…シャルルの事だけなら時間は十分ある…

でも、他にもする事は沢山あるんだ…全部やれば3年なんてすぐに…

永遠

「それに…3年言うんはデュノアだけの制限時間ではないんじゃぞ?」

一夏

「シャルルだけじゃないって…他に誰がいるんだよ!」

千冬

「…お前の事だ!」

一夏

「お、俺?」

永遠

「お主がこの学園に入れられたのはココが治外法権だからじゃ。ココにおればテロリス

ト以外はおいそれと手出しは出来ん。お主は日本人じゃが、男の操縦者という事もあるからデユノアと違って日本政府ですらココにおれば手が出せん。じゃがココから出ればお主をモルモットにしようとする世界中の国や組織から狙われる事になる。」

一夏

「そ、そんな…」

永遠

「はあ…呆れたのお…織斑先生がこの学園に入れたのはお主を3年とはいえ守る為じゃ。少し考えれば分かる事じゃろうに、んな事も気づいとらんかったんか？」

一夏

「俺の…為に……………そんな…」

千冬

「2年前の事件の事を忘れたのか？あんな事が起きた時の為に、この3年の間にお前には自衛手段を身に付けて貰おうと思っていたんだがな…」

一夏

「あの時の!？」

千冬

「お前…あの時みたいに私が必ず助けに来てくれると思ってるのか？」

一夏

「!?……それは……」

千冬

「お前は私に死ぬまで守って貰うつもりか? そんな事が出来るとでも思ってるのか? だとしたらお前はとんだ甘えん坊だな。」

一夏

「……………」

千冬姉の言う通りだ……

俺は……知らずに千冬姉に甘えてたんだ……

あの時みたいに千冬姉が助けてくれる……守ってくれて……思い込んでたんだ……

それは俺が自立も出来ない甘ったれって事じゃないかよ……

実際はそんな事……出来る筈なのに……

千冬

「私は言った筈だぞ? 自分で自分を守るくらいに強くなれと? お前は私の言った事の意味を理解していなかったのか?」

一夏

「……………」

あの時言った言葉はこういう意味でもあったんだ…

千冬

「デュノアの事を気にかけるのは別に構わん。だが、お前自身にも時間が無いという事を理解しておけ。3年と言う限られた時間の中でお前が何をすべきかを考えろ。」

一夏

「……………はい…」

3年…それが俺に残された時間……………って!?

一夏

「ちよつと待ってくれ!?なら火ノ兄は!アイツだつて俺と同じじゃないか!」

永遠

「ワシを自分と重ねるな。お主と違ってそんな連中は全員返り討ちにしてやるわい。」

千冬

「そうだな。火ノ兄にはそれだけの力がある。だが一夏、お前にはそれが出来るのか?」

一夏

「うっ……………出来ない…」

「そうだ…火ノ兄は生身でISに勝てるくらい強いんだ…その為の努力をずっと続けてきたんだ…しかもアイツの専用機はどれも化け物じみた物ばかりで、それを完全に使

いこなしてる…俺とは違って狙われても返り討ちに出来る…

それに引き換え俺は…俺には襲ってきた奴を返り討ちにする力はない…する為の努力もしてない…【白式】も全く使いこなせてない…俺は何処まで馬鹿なんだ…そんな事も分らないなんて…

一夏

「……………」

永遠

「どうするかは自分で決めるんじゃない。まあ、まずはデユノアの件を片付ける事じゃ。自分で手を貸すと言ったんじゃない。最後まで責任を取るんじゃない。」

千冬

「デユノアに任せると言ったのはお前だ。相談や調べもの程度なら手を貸してやるが、今回は最後までお前が自分で片付けろ！私も束もお前の尻拭いはせんぞ!!」

一夏

「!?……………分かった…」

永遠

「それから最後に言うておくがデユノアに残されとる時間は実際には3年も無い。よくて2カ月と言った所じゃ。」

一夏

「な、何でだよ!？」

永遠

「お前…ワシと違って学校行つとつたんじやろ?」

一夏

「当り前だろ!!」

永遠

「なら7月になったら何がある?」

一夏

「え?…7月?…夏休み…か?」

永遠

「そうじゃ。デュノア…お主、夏休みの間この学園にずっとおるつもりか?代表候補生が長期の休みに国に帰らんでいいのか?」

シャルル

「……………帰らないなんて…出来ないよ…」

一夏

「そんな!？」

永遠

「そう言う事じゃ。…さて、ワシの用件は終わりじゃ。わざわざ呼びつけてスマンかったな。織斑先生も申し訳なかった。」

千冬

「何、気にするな。」

火ノ兄はそう言つて屋上を後にしていった

千冬姉も続いて屋上から出ようとした時：

千冬

「一夏…いい加減姉離れしろ！」

一夏

「!?!」

シャルル

「…一夏…」

本当のタイムリミットは2カ月…その間に何とかしないといけないのかよ…

それに…姉離れか…その通りじゃねえか…

どうすればいいんだ…

シャルル

「……………」

「一夏 Side out」

「千冬 Side」

千冬

「…火ノ兄…さつき一夏が私に相談しなかった理由に見当がつくと言っていたがそれは何だ？」

私はさつき火ノ兄が言っていた事が気になっていた

一夏が私に相談しない理由を聞かれた時アイツは答えなかった…

火ノ兄はそれだけで分かったみたいだが、私には分からなかった…

だから聞いてみたんだが…

永遠

「……………大方、自分で言った手前お主に頼るのはカッコ悪い、迷惑をかけたくないとか、そんな理由じゃろ？」

それは予想以上に情けない理由だった…

千冬

「何だそれは？つまりアイツは自分のプライドを優先させたと言うのか？」

永遠

「恐らく無意識の内にその考えが浮かんだんじゃない。じゃからお主に相談せんかった。それしかワシには思い当たる節が無いんじゃないよ。奴の本心かは分からんがな。」

千冬

「いや、お前の予想は当たっているだろう。アイツは変な所で無駄にプライドが高いからな。」

永遠

「まあ、流石にデュノアの前では言わんほうがいいと思うて黙つといたんじゃないが…」

千冬

「確かに…自分のプライドを優先させていたなんて知ればデュノアはさらに追い込まれる…全くアイツにもお前ぐらいの気遣いが出来ればいいんだが…」

アイツは…気遣いは出来ない…考えるより先に口が出る…無責任な事は言う…その上、鈍感…

この3年の間にどれか一つでも治ればいいんだが…

永遠

「そうじゃな…まあ、ワシはこれ以上デュノアの件に関わらんよ。あの娘がココにいたいと言うなら何も言わん。どうやって残るかは織斑の脳味噌、もとい頑張り次第じゃが」

な。」

千冬

「そうだな…デユノアには悪いが…あれだけ追い詰めればアイツも現実の厳しさが分かるだろ…」

念の為、東に調査だけでもやっておいてもらうか…

その後、私達は別れたんだが…そう言えばアイツに言っておく事があつたな

く千冬 Side out く

第081話：未練

（永遠 Side）

永遠

「…さて帰るかの。」

ワシは織斑とデュノアを問い質した後、セシリア達に挨拶を済ませ、帰ろうと校門前に来ると…

？

「待ちなさい！」

永遠

「ん？」

数人の生徒に呼び止められた

永遠

「何用じゃ？」

生徒1

「アンタの家に連れて行きなさい!!」

永遠

「は? 何で?」

生徒2

「篠ノ之博士がアンタの家にいる話は聞いたわ!」

永遠

「もうおらんぞ。」

生徒1

「いなくても博士の研究資料とかがあるはずよ!それを私達に寄越しなさい!」

永遠

「何でそんな事をせんといかんのじゃ?」

生徒2

「口答えするんじゃないわよ!これは命令よ!!」

コイツ等、女尊男卑主義か……………あ!

永遠

「……………言うつとるぞ?」

生徒1 & 2

「え?」

ワシがそう言うと女尊男卑の連中は後ろを振り向いた…

そこにいたのは…さつき別れた織斑先生じやった

生徒1

「お、織斑先生!?!」

生徒2

「な、何でココに!?!」

千冬

「火ノ兄に用があつてな…お前達こそココで何をしている?」

生徒1

「い、いえ…わ、私達は…」

千冬

「随分偉そうに命令していたが…お前達はそんなに偉い立場の人間だったか?」

生徒2

「そ、それは…」

千冬

「そもそもお前達は外泊許可を貰ってるのか?」

生徒1

「うっ！」

千冬

「…今回は見逃してやる…次に見かけたらそれ相応の処罰をする！とつとと失せろ!!!」

生徒1&2

「は、はいいいいいいいいーっ!!!」

…逃げる様に行つてしもうたの…

永遠

「助かったぞい…」

千冬

「お前なら力づくで黙らせる事も出来るだろ？」

永遠

「…余力づくと言うのは好きではないんじやよ………まあ、あのままじやつたら睨んで黙らすつもりじやつたよ。」

千冬

「フツ…お前ならそれで十分だな。」

永遠

「それで何か用かの？」

千冬

「ああ、まあ分かつてるとは思うが念の為に言っておこうと思つてな。：暫くは帰る時は「ラインバレル」の「転送」を使え。今の奴等みたいなのが後をつけるかもしれんからな。」

永遠

「分かつとるよ。わざわざスマンな。」

千冬

「気にするな。気を付けて帰れよ。」

織斑先生はそう言つて校舎に戻つて行つた

それからワシは「ラインバレル」を展開して歸つた

誰もいなくなつた家に入ると：

束

「おかえり〜♪」

何故か東さんがまだおつた：

く 永遠 Side out く

く一夏 Sideく

一夏

「…はあ…どうすればいいんだ………」

俺は部屋に戻ると今日言われた事を思い返していた…

シャルルの事を考えるなら一日でも早く対策を考えろと言われた…

その通りじゃねえか…

俺の考えた時間稼ぎも実際は2カ月しかなかった…

しかも学園の規則も実際は殆ど役に立たなかった…

シャルルは何時呼び戻されてもおかしくない状況だったんだ…

俺はどれだけ甘い考えをしていたんだ…

シャルル

「どうしたの一夏？」

一夏

「…俺…本当に馬鹿だなんて思ってた……どれだけ甘い考えをしていたのかが思い知

らされたんだ…」

シャルル

「それは僕も同じだよ…」

一夏

「どうすれば……どうすればいいんだよ……」

あれからずっと考えてるけどいい方法なんて思いつかない…

火ノ兄の言った亡命くらいしか出てこない…

シャルル

「………一夏……」

千冬姉と火ノ兄にあそこまで言われた以上途中で投げ出す事も出来ないし…

シャルル

「…ねえ一夏…僕は火ノ兄君が言ってたように、まず父さんと話をしようと思うんだ…」

一夏

「え？」

シャルル

「まずは父さんの本心が知りたい…考えるのはそれからでもいいんじゃないかな？」

一夏

「そ、そうか…」

確かにシャルルの言う通り、まずはそれを知ってから考えるべきか…

俺…何の役にも立ってないな…父親と話すって言うのも火ノ兄の意見だし…

シャルル

「…でも、本妻に知られずに父さんと話すにはどうすればいいのか…」

一夏

「シャルル…」

確かにそうだな…せめて父親と本妻の行動が分かれば…

そうだ!…そう言えばさつき千冬姉が!?

千冬

『…相談や調べもの程度なら手を貸してやる…』

千冬姉なら…束さんに頼んで調べて貰えるかも…

………けど…千冬姉達に頼るのは…

シャルル

「一夏?」

いや!今はシャルルの方が大事だ!

一夏

「…少し待っててくれないか?あてがあるんだ。」

シャルル

「え?うん、分かった…」

とりあえず明日の放課後にでも千冬姉に頼んで調べて貰おう…

それにしても俺って本当にどうしようもない奴だな…

一夏

「…シャルル…俺ってさ、どれだけ世間を知らなかったんだろうな…千冬姉達に守られてきたんだろうな…」

シャルル

「……………」

一夏

「火ノ兄の言う通りこのままじゃ、ココを卒業しても捕まってモルモットになるか…暗殺されるか…そんな未来しかないんだろうな…」

シャルル

「そ、そんな事…」

一夏

「シャルルだって似たような意味でココに来ただろ？」

シャルル

「は、は、めん…」

一夏

「ち、違う！違うんだ!?責めるつもりは無いんだ!…スマナイ…言い方が悪かった…」
シャルル

「そんなに謝る事無いよ。本当の事だし…」

一夏

「本当にスマナイ!!」

…どうして俺はこんな風に人を傷付ける事を平然と言えるんだ…

…鈴の事だつて…俺が気付いていれば…アイツをあんなに傷付ける事もなかったのに…

〜一夏 Side out〜

〜シャルル Side〜

シャルル

「…ねえ一夏…一つ聞いていい?」

一夏

「何だ?」

シャルル

「…鈴と…何かあったの?鈴と話すとき雰囲気が変わってたから気になったんだけど…」

一夏

「!?」

シャルル

「あー…聞かない方が良かった?」

一夏

「…:…:俺、鈴にフラれたんだ…」

シャルル

「え…」

一夏

「…鈴は、俺の事が好きだったらしいんだ…」

シャルル

「え?ちよ、ちよつと待ってよ!鈴が一夏を好きだったのに、鈴が一夏をフツたの?それ
どういう事?じゃあ一夏は鈴の事をどう思ってたの?」

一夏

「…分からない…分からないんだ…俺…」

シャルル

「一夏…」

一夏

「俺、ココで再会した鈴をずっと傷付けてきたんだ……」

それから一夏は鈴との間に起きた事を話してくれた……

事の発端は一夏が鈴との約束を間違えて覚えていた事から始まった

話の中で一夏が鈴に対して言った言葉の中には同じ女としても許せるような言葉
じゃなかった

けど、その度に火ノ兄君に説教と制裁を受けていたらしいけど……

しかも一度、三途の川に送られて死にかけたなんて……

それから鈴はクラス代表戦に向けて火ノ兄君の島で特訓していたらしい……

恐らく篠ノ之博士も鈴に協力していたんだと思う……

そしてクラス代表戦の戦いが終わると……

一夏

「……………それから俺は鈴に屋上に呼び出されて……約束の意味を教えられて……フラれたんだ……愛想が尽きたって言われたよ……当然だよな……そう言われても仕方のない事ばかりしてきたんだ……」

シャルル

「……一夏……」

一夏

「鈴にフラれてから…俺はアイツをどう思ってたのか分からなくなっただんだ。好きだったのか…ただの友達としか思ってたのだったのか…」

シャルル

「…ねえ、本当に鈴は一夏に未練が無いの？」

一夏

「………分からない…でも、今迄の鈴の言葉から俺に対して何とも思ってた無感覚だった…」

…言われてみれば鈴の一夏に対する言葉は淡々としてたな…

一夏

「…むしろ未練を持つてるのは俺の方だよ…鈴が好きなのかも分からないのに…鈴にフラれた事を未だに引きずってるんだから…」

シャルル

「…一夏…」

…鈴は今、一夏の事をどう思ってるのかな…

………よしっ!!

シャルル Side out

（鈴 Side）

鈴

「……………はあ〜…」

一晩明けて学園の中は永遠と本音の話題で持ちきりだった

東さんが永遠の家にした事…

その東さんから本音が第5世代の機体を貰った事…

その事ばかりで、学園中が五月蠅いったらありやしない…

訓練しようにも【甲龍】は修理中で使えないから、部屋で寝ようかと思つたら…

シャルル

「…鈴！」

鈴

「ん？…何か用？」

シャルル

「うん、ちよつといいかな？」

鈴

「暇だから別にいいけど。」

シャルルに呼ばれて、屋上にやって来たただけ……

私に何の用だろ？

シャルル

「……あのさ鈴……実は一夏から君達の間で起きた事を聞いたんだ……」

鈴

「なんだその事か……それで？」

シャルル

「……鈴は一夏の事を今はどう思ってるの？……まだ……好きなの？」

鈴

「は？……アンタ一夏から話を聞いたんでしょ？……だったら分かるでしょ。私はアイツに恋愛感情なんてもう無いわよ。」

シャルル

「ほ、本当に……」

鈴

「しつこいわね……本当よ！今のアイツはただの友達で、ただの幼馴染！それ以上でもそれ以下でもないの！」

シャルル

「…そこまで言わなくても…」

鈴

「アンタが聞いてきたんでしょ。一夏をどう思ってるかって。私はそれに答えただけよ。」

シャルル

「確かにそうだけど…」

鈴

「私からも聞くけど、アンタ…一夏に言われてここに来たの？自分の意思で来たの？」

シャルル

「え？…僕の意思だよ。僕が鈴に話を聞きに行ってる事を一夏は知らないよ。」

鈴

「それならいいわ。」

シャルル

「…どうい事…」

鈴

「アイツ…私に未練があるんじゃない？」

シャルル

「!？」

鈴

「二々私の言う事に反応しては、落ち込みまくってたからね。アンタに話したのは私がアイツをどう思ってるのかを聞きに行かせる為かもと思ったんだけど違うようね。」

シャルル

「……………鈴……」

鈴

「自分で聞く勇気が無いからって、他の人に聞いて貰う様な奴なら、私はアイツの事を軽蔑するところだったわ。」

シャルル

「……………」

鈴

「シャルル…悪いけどアイツに言つといてくれない？いつまでも女々しく私の事を引き摺るな。今のままじゃアンタは前に進めないわよって。」

シャルル

「…分かったよ……………鈴は…前に進んでるの？」

鈴

「さあね？けどアイツへの想いは私にとつてもう過去の事よ。忘れはしないけど、それに縛られて前に進めないなんて事は無いわね。」

…そう…一夏はもうただの友達…大切な人じゃないのよ…

…私にとつてアイツへの想いはもうただの思い出…それだけなのよ…

く鈴 Side out く

く一夏 Side く

俺は放課後になると千冬姉を探していた

一夏

「いた！ちふ、じゃなくて織斑先生!!」

千冬

「ん？何だ？」

一夏

「……………あの、ちよつと頼みが…」

千冬

「用件は？」

一夏

「……………それは……………」

千冬

「…はあ…デュノアの父と本妻の行動スケジュールか？」

一夏

「え!? な、何で…」

何で俺の用件が分かったんだ!

千冬

「お前の用件などそのくらいだろ? ……だが、火ノ兄の言う通りだったようだな。」

一夏

「な、何の事だよ!？」

千冬

「昨日お前は火ノ兄の問いに答えなかっただろ？」

一夏

「あの時の質問…」

俺が答えなかったら、それだけで見当が付くって言ってたけど…

千冬

「実は私も分からなくてな、あの後、火ノ兄から理由を聞いたんだが、今のお前の態度で

それが正解だと分かった。」

一夏

「え？」

千冬

「私に頼るのがそんなにカッコ悪い事か？」

一夏

「!？」

千冬

「お前……デュノアの事より自分のプライドを優先させたな？だから誰にも相談しなかった。デュノアや相談した相手にカッコ悪いと思われたくなかったからだな？」

一夏

「それは……」

千冬

「違うのか？」

一夏

「……………」

……言い返せない……言い返すことが出来ない……

千冬

「お前は私の前まで来ておいて用件を言い淀んでいた。つまりお前は最後までプライドに拘っていたという事だ。……まあいい、束には連絡しておく。数日中には調べがつくだろう。調査が終わったら知らせに行くと、デュノアにもそう伝えておけ。お前がどんな風に伝えるのかは知らんがな。」

一夏

「……ううっ……」

千冬

「……」まで来てプライド優先か。デュノアを助けたいと言う気持ちも所詮その程度のものか。」

一夏

「!？」

千冬姉はそう言って行ってしまった

あの時、火ノ兄が言ったのはこういう事だったのか……

俺は……プライド何てものの為に……

く一夏 Side out く

く千冬 Sideく

永遠

「織斑先生。」

一夏と別れた後、今度は火ノ兄に話しかけられた

千冬

「何だ？」

永遠

「(東さんの事じゃが…)」

千冬

「(アイツがどうかしたのか?)」

永遠

「(…まだワシの家におる。)」

千冬

「……………は？」

…まだ…いるだと？

千冬

「(何を考えてるんだアイツは!!自分の居場所がバレてるんだぞ!!)」

永遠

「(ワシもそう思つて聞いたら……………)」

東

『逆転の発想だよ♪まさか居場所のバレた場所にそのままいるとは思わないでしょ♪』

永遠

「(…と云うてなあ…しかも…)」

東

『それに…この島住み心地がいい…離れずらかつたんだ♪』

永遠

「(…とか言う始末じゃ…)」

千冬

「(…あの馬鹿…確かに逆転の発想だが…住み心地がいいって…それだけの理由で…)」

永遠

「(とりあえず東さんがまだおるといふ事だけ伝えとくぞ。セシリア達にも後で言うとかが他の連中に気付かれんように頼む。)」

千冬

「(分かつた。それとデユノアの父と本妻のスケジュールを調べて貰う様に頼んでおい

てくれ。一夏がさつき頼んで来た。」

永遠

「ん？あやつが頼みに来たんか？」

千冬

「ああ、と言つても、自分の口では言わなかった。私が言つたら頷いただけだ。」

永遠

「(ここまで来てか？どれだけ自尊心が高いんじや？まあ分かつたわい。)」

千冬

「(スマンな……)」

永遠&千冬

「……はあああああ……」

火ノ兄にはまた苦勞を掛けるな……

今度何か奢つてやるか……

く千冬 Side out く

くシャルル Side く

一夏

「…シャルル…」

シャルル

「!?…な、何!?!」

僕が一夏に今日鈴が言った事を言うべきか悩んでいると一夏が話しかけてきた

一夏

「…昨日言ってた事だけど、千冬姉と束さんに頼んでスケジュールを今調べて貰って
る。」

シャルル

「篠ノ之博士に!?!」

一夏…そこまでしてくれたんだ…

一夏

「数日の内に連絡してくれらって…その、スマナイ…」

シャルル

「ど、どうしたの急に?」

一夏

「…あれだけ偉そうな事を言っておいて…俺は…何の役にも立ってない…父親と話すつ
て言うのは火ノ兄の考えだし、調べてくれてるのは束さんだ。俺はただの役立たずだ

…

シャルル

「そんな事…」

一夏

「…それに、俺はシャルルの事より…自分のプライドを…優先させた…」

シャルル

「…プライド?」

一夏

「…俺は自分じゃ何も出来ない…でも、誰かに頼るって言うのがカッコ悪いって思ってた…誰にも相談しなかったんだ!!…あれだけ偉そうな事を言っておいて何も出来ない役立たずなんだ!!…さつき千冬姉に頼む時も、プライドに拘って用件を言う事が出来なかった!!…俺の言いたい事を察した千冬姉が代わりに言っただ!!…俺はそれにただ領いただけなんだ!!」

シャルル

「…一夏…そんなに自分を追い詰めなくていいよ。プライドに拘るのは別に悪い事じゃないよ。」

一夏

「けど俺は…そのせいで何も出来ない…」

今の一夏…まるで止まってるみたいだ…

止まる……よし！

シャルル

「……一夏…実は今日…鈴に会って来たんだよ…」

言うかどうか迷ったけど鈴からの伝言もある…

それを伝えないと…多分一夏はこのままだ…

一夏

「……え？」

シャルル

「…鈴が今…一夏をどう思ってるのかを聞いて来たんだ…」

一夏

「……」

シャルル

「ゴメン!!勝手な事して…」

一夏

「…鈴は…何て？」

シャルル

「…言ってもいいの？」

一夏

「頼む…」

シャルル

「…分かった…鈴は…一夏にはもう恋愛感情は無いって…言ってた…」

一夏

「…そっか…そうだよな…」

シャルル

「…後…鈴からの伝言…『いつまでも女々しく私の事を引き摺るな。今のままじゃアンタは前に進めない』って…」

一夏

「…バレてたのか…鈴の言う通り…女々しい奴だな…俺…」

シャルル

「…一夏…」

一夏

「前に進めない…か…そうだよな…俺、全く進んでないな…このままじゃ3年なんて

あつという間に過ぎちまうな…」

シャルル

「……………」

一夏

「…ありがとな…シャルル…」

シャルル

「…うん…」

一夏はお礼を言ったけど…僕は感謝される様な事をしたのかな…

かえって一夏の心に傷をつけてしまったのかもしれない…

でも、これで一夏が少しでも前に進めれば…

シャルル Side out

第082話：タツグトーナメント開催

く永遠 Sideく

トーナメントの始まる数日前、ワシと本音は織斑先生に呼び出された

永遠

「織斑先生…ワシ等に何か用かの？」

千冬

「実は今度のトーナメントでお前達二人にハンデをつける事が決定したんだ。」

本音

「ハンデですか？」

千冬

「うむ。まず布仏は「ワイバーン・ガイア」の使用が禁止された。性能差もそうだがあの
デカさだからな…」

本音

「あららく……」

まあ、確かにあれはデカいからな……踏み潰すだけで試合が終わるからのお……

千冬

「次に火ノ兄だが……お前の機体は正体がバレてないから使える。ただし、あの3機のをどれを使ってもいいんだが、単一仕様の使用は禁止された。それと【ラインバレル】は特殊能力も使うなどの事だ。」

永遠

「それは構わんが……【ラインバレル】に関しては【転送】はともかく【再生能力】の方は自動で機能するから止められんぞ？」

千冬

「何……そうだったのか……仕方ない。火ノ兄、悪いんだが……」

永遠

「【ラインバレル】は使わんよ。」

千冬

「スマンな……お前の【ラインバレル】は実戦ならともかく試合では反則と言われてもおかしく無い厄介な能力だからな。」

永遠

「別に反則しとる訳では無いんじやが…」

千冬

「物の例えだ！本気にするな！…それからお前達が対戦する場合は制限無しでいいぞ。」

本音

「は〜い♪」

本音と戦う時だけか…

千冬

「後、賞品の方はどうなっている？」

永遠

「それなんじやが…初めから賞品を造っておくのと…優勝者に合わせた【つるぎ剣刃】を造るのと…どちらがいいかのお？」

千冬

「む…それは悩むな…」

永遠

「先に造っておく場合は幾つか候補を挙げとるんじやが…」

本音

「どんな物なの〜？」

永遠

「これじゃ。【大旋斧ゲイル・アックス】【星銃フォーマルハウト】【星王剣アルフェツカ】
【天聖弓セイクリッド・ボウ】…この4つの内の2つにしようと思うとる。」

ワシはそう言いながら端末を取り出すと本音と織斑先生に4つの【剣刃】のデータを
見せた

千冬

「…オイ！この【アルフェツカ】と言う【剣刃】以外は形状が刀剣じゃないぞ!!」

本音

「ホントですね〜？斧に弓、銃の形をしてる〜？」

永遠

「これでも【剣刃】何じゃよ。…まあ【剣刃】の大半は刀剣類なんじゃが…他にも槍や杖、
それ以外も少しあるんじゃないよ。」

千冬

「他の種類の武器もあるのか!？」

永遠

「うむ。どうせなら、近接と射撃の二つがいいかと思ったんじゃないが…」

千冬

「それはありがたいな…となると……よしっ！近接武器は【アルフェツカ】…射撃武器は…【フォーマルハウト】にしよう。」

本音

「何でですか〜？」

千冬

「弓や斧よりココは基本装備でもある剣と銃がいいだろう。」

永遠

「分かった…が、先に造る方でいいんか？」

千冬

「ああ、構わん。お前も相手の注文を日々聞くのは面倒だろ？」

永遠

「…まあ確かに…」

千冬

「では頼むぞ。…それから布仏、賞品の内容は誰にも言うなよ！」

本音

「は〜い♪」

【星銃フォーマルハウト】と【星王剣アルフェツカ】に決まったか…帰ったら早速造る

かの…

く永遠 Side outく

くシャルル Sideく

一夏

「……嘘だろ……」

シャルル

「……そんな……」

僕達は今日から始まる学年別トーナメントの対戦表を見た瞬間そう溢していた

何故ならその対戦相手というのが…

『1回戦 第1試合 織斑一夏&シャルル・デュノアVS火ノ兄永遠&ラウラ・ボーデ
ヴィツヒ』

あの火ノ兄君とボーデヴィツヒさんの二人だからだ…

確か、火ノ兄君はペアを組まずに当日の抽選任せにするって言ってたけど…

まさかこの二人の組み合わせになるなんて…

シャルル

「…一夏…どうしよ…」

一夏

「よりもよつて火ノ兄とラウラが相手かよ……やる前から詰んでないか？」

シャルル

「言わないでよ……でも……あの二人つて連携とか出来るのかな？」

一夏

「……あの二人じゃ絶対無理だろ？特にラウラは……アイツは生身の火ノ兄にポコポコにされてるんだぜ？そんな奴と連携なんて出来る訳無いだろ？」

シャルル

「だよね。……でも、そこをつく事が出来れば……」

一夏

「ああ、ラウラは倒せるかもしれない……けど火ノ兄は……」

そう、ボーデヴィツヒさんに対してはこの間、火ノ兄君と戦った時に色々分かった事があるから対処出来る……

ハッキリ言つて彼女は二人がかりで挑めば倒せるんだ

けど、火ノ兄君の場合は……

シャルル

「彼がどの機体を使うかも問題だよね……」

一夏

「…そうだな…」

とは言っても…【戦国龍】【ドットブラスライザー】そして【ラインバレル】…どれが相手でも勝てる気がしない

以前、オルコットさんとの試合映像を見たけど、よく彼女は【ドットブラスライザー】を相手にあそこまで戦えたと思った…

今まで火ノ兄君が戦った映像は全部見たけど彼が単一仕様まで使って本気で戦ったのは、後にも先にもオルコットさんとの試合だけだ…

勝てないまでも僕達に火ノ兄君を本気を出させる事なんて出来るのかな…

シャルル Side out

ラウラ Side

まさかこのような組み合わせになるとは…

だが、これはいい…手間が省けた…

ラウラ

「織斑一夏…奴を始末するいい機会だ…だが!!」

よりにもよって私と組む相手が奴になるとは…

ラウラ

「…火ノ兄…永遠!!」

私はあの日の事を思い出した…

私は教官の目を覚まさせようと奴に戦いを挑んだ

だが、あの男は私を相手に I S を使わず生身で相手をしてきた

そんな奴は、すぐにケリが着くと思っていたのに…

結果は私の負け…奴に掠り傷一つつける事が出来なかった…

報復しようにも奴との実力差を見せつけられた今となつては…

ラウラ

「いや…そんな事関係ない!どんな手を使ってでも奴を倒す!!」

まずは織斑一夏だ!!

奴を始末し教官の汚点を消す!!

次に火ノ兄だ!!

私自身の汚点を消し去ってやる!!

ラウラ Side out

一夏 Side

一夏

「…はあ…負けるの確定の試合か…」

シャルル

「一夏…初めから諦めたらダメだよ！さつき説明されたでしょ。火ノ兄君と布仏さんはハンデが与えられるって。」

そう、さつき全員にトーナメントのルールと一緒に千冬姉から説明されたんだよな…その内容が火ノ兄とのほほんさんはハンデを付けられた事だった

一夏

「…ああ…のほほんさんは「ワイバーン・ガイア」が使えないんだよな…しかも理由がデカ過ぎるからだもんな…」

シャルル

「うん！それに火ノ兄君は単一仕様と「ラインバレル」が使えない様になってるんだよ！「ラインバレル」が相手にならないだけでもありがたい事だよ！」

一夏

「そうだな…」

シャルル

「一夏…ほらやる気出して！このトーナメントは学園の生徒以外の人も見に来てるんだ

よ！その人達の前で恥をかきたいの？」

一夏

「え!? そうなのか…でもどんな人が来てるんだ？」

シャルル

「知らないの？ 各国の企業や偉い人とかが来るんだよ。自分たちの国の生徒の成長を確認したり、3年の人達を見極めてスカウトしたりするんだ。」

一夏

「そんな人たちが来るのか!!…でも1年の俺達には余り関係無いんじゃない？」

シャルル

「一夏！ 君は世界で二人しかない男性操縦者だよ！ 例え1年でも注目されてるんだよ!!」

一夏

「そ、そうか!?!…て事は火ノ兄もか…」

シャルル

「…そうだけど…彼の場合は注目する以前に驚くだろうね…」

一夏

「何でだ？」

シャルル

「彼については何の情報も無いからだよ。僕はここに来るまで二人目がいる事なんて知らなかったんだ。ボーデヴィツヒさんも初日に火ノ兄君を見て驚いてたしね。多分、この学園の外には火ノ兄君の情報が流れてないんじゃないかな？」

一夏

「そう言えば中国から来た鈴も火ノ兄の事を知らなかった…」

それに弾と蘭もだ…

二人目の事を知らなかった…

シャルル

「僕も最初は彼の情報が一つも無いのはおかしいと思ったんだけど、多分篠ノ之博士が情報操作をしてたんじゃないかな？」

一夏

「束さんが!？」

確かに束さんならそのくらい簡単に出来る筈だ…

束さんは火ノ兄の家で暮らしてたんだからそのくらいやつてもおかしくない…

シャルル

「だから僕達の試合は特に注目されてると思うよ。男性操縦者二人に代表候補生二人。

しかも全員専用機持ちだからね。」

一夏

「なるほど…でも専用機って事なら火ノ兄の機体が一番目立つよな…」

シャルル

「そうだね。全身装甲の機体なんてどこの国も使って無いだろうからね。しかも彼の機体は凄く目立つ姿だからね。」

一夏

「ああ、【戦国龍】は目立つよな…でも、そうか…そんなに偉い人達が見てるのか…なら無様な姿だけはしない様にならないと…」

シャルル

「その意気だよ一夏!!」

一夏

「せめてラウラだけでも倒して派手に散ってやるぜ!!」

シャルル

「派手について…負けるの決まってるんだね…」

一夏

「オウ!!」

単一仕様が使えない事なんてアイツにはハンデにもならないだろうからな…
でもアイツ…【戦国龍】と【ドットブラスライザー】…どっちを使うんだろ？

【戦国龍】は嫌だな…軽くトラウマが…

〜一夏 Side out〜

〜永遠 Side〜

さて、いよいよ試合じゃな…

ワシは今チビツ子とカタパルトの前におる

永遠

「おー織斑とデュノアが出て来たの。では、ワシ等も行くかの？」

ラウラ

「……………」

返事ぐらいしてくれてもいいと思うのじゃが…まあいいか…

チビツ子も出た事じゃしワシも行くか

今回は…【戦国龍】で行くかの

永遠

「出陣するぞ…【戦国龍】!!」

ラウラ

「黙れ！私は私の好きな様にやる!!」

永遠

「さよか。ならワシも勝手にやるかの。」

「まずはこの二人がどう動くかじゃよな…」

アナウンス

『それではこれより、1回戦 第1試合 織斑一夏&シャルル・デュノアVS火ノ兄永遠
&ラウラ・ボーデヴィツヒの試合を始めます。』

ラウラ

「1戦目で当たるとは待つ手間が省けた…」

一夏

「そうかよ…」

アナウンス

『試合開始!』

一夏&ラウラ

「いくぞ!!!」

ワシはどう動くかの…

〈永遠

S
i
d
eo
u
t
〉

第083話：三つ巴のタッグバトル【戦国龍VS黒い雨VS白式&疾風の再誕改式】

～三人称 Side～

《観客席》

ココには機体が無い為、試合に出れないセシリアと鈴、自分達の試合が後日になって
いるペアを組んだ簪と本音の4人が一緒に観戦していた

セシリア

「始まりましたわね。」

鈴

「結果は見えてるけどね。」

本音

「そ〜だね〜♪」

簪

「でも、油断は出来ないと思う…ラウラ・ボーデヴィツヒが何をするか分からない…」

セシリア&本音&鈴

「……………」

鈴

「…そうね…アイツ…もしかしたら…」

セシリア

「流石にそれはしないのでは？この大会は各国の来賓も見ていますよ？そんな事をすれば自分だけでなく祖国も辱めますのよ？」

鈴

「…でも…今のアイツにそんな事を考える事が出来るのかな？」

セシリア&簪&本音

「……………」

簪

「…何事も無ければいいんだけど…」

4人は試合が無事に終わる事を願っていた…

《アリーナ》

一夏

「うおおおおおおおおー……っ!!!」

一夏はラウラに斬りかかったが…

ガキンツ!

一夏&ラウラ

「何っ!?!」

横から永遠が槍の石突の部分を持った状態で槍の穂先で一夏の剣を受け止めていた

ラウラ

「貴様何のつもりだ!!」

永遠

「試合をしとるんじやが?言ったじやろ?こつちも勝手にやらせてもらおうと?」

ラウラ

「くっ!」

シャルル

(やつぱり、あの二人で連携は無理だ。)

シャルルは後ろから対戦相手の二人には連携と言う物が無いと改めて認識した

永遠

「ぬん!」

永遠はそのまま槍で一夏をシャルルのいる方まで押し返すと、刀を抜いて二人に向かつて行った

シャルル

「一夏!!:(…一夏の剣を片手で、しかもあんな槍の持ち方で受け止めた上に、そのまま押し返すなんて…)」

一夏

「来るぞ!!」

永遠

「はっ!!」

ガキインツ!

永遠の剣を一夏は受け止めるが…

一夏

「ぐううううっ!!」

永遠

「懐がガラ空きじゃ。」

永遠は左手に持っていた槍で一夏の腹部に突きを放った

一夏

「ぐあああああああーっ！！」

シャルル

「一夏！！（くっ！計算が狂った！火ノ兄君が先に仕掛けて来るなんて！）」

シャルルは今迄の会話や行動からラウラが一夏に仕掛けて、永遠は暫くは傍観すると考えていた

先にラウラを倒そうと考えていた二人にとって永遠のこの行動は予想外の事だった

シャルル

「一夏大丈夫？」

一夏

「…何とかな……………シャルル、どうする？火ノ兄が前に出てるんじやラウラを倒せないぞ？」

シャルル

「うん…こうなったら何とか火ノ兄君を抜かないと…」

永遠

「お喋りをしとる場合か！！」

一夏&シャルル

「!？」

永遠は持つていた槍を二人の間に投げつけてきた

槍を躲した事で二人は左右に分断されてしまい、永遠はシャルルに向かって斬りかかった

シャルル

「ええっ!!」

ガキンツ!

シャルルは近接ブレード【ブレットド・スライサー】を展開し、永遠の攻撃を受け止めた

シャルル

「ぐぐっ…(何てパワー…これが【戦国龍】!?)」

一夏

「シャルル!!」

一夏はシャルルの救援に向かう為、永遠の右側から斬りかかったが…

永遠

「そっちは外れじゃ…」

シャルル

「え?」

永遠は左手で腰に装備されているクロエから貰ったライフル【種子島】を固定されたまま引き金を引いた

ドギユンツ！

一夏

「ぐあああああーっ！！」

永遠に向かって突っ込んでいた一夏は躲すことが出来ず直撃した
シャルル

「一夏!?…はっ！」

永遠は一夏を撃つと【種子島】を外して銃口をシャルルに向けて至近距離で再び引き金を引いた

ドギユンツ！

シャルル

「うわあああああーっ！！」

【種子島】の直撃を受けた二人は後ろに吹き飛ばされていた

倒れている二人に対して永遠は何もせず二人が立ち上がるのを待っていた

そして、そんな永遠を後ろからラウラが見つけていた

ラウラ

(…くっ！…このままでは試合が終わってしまう！…織斑一夏は私が始末しなければならぬんだ!!)

このまま試合が進めば一夏は永遠に倒されてしまう

そうなってしまうては自分の手で一夏を倒し、千冬の汚名を消し去ろうと考えている
ラウラの目的は達成できなくなってしまう

その焦りから、ラウラは本来はあつてはならない考えに至っていた

ラウラ

(……………そうだ…今のアイツは私に背を向けている……………この場で奴もまとめて始末すればいいんだ!!)

その考えに至ると同時にラウラは肩のレールカノンの照準を永遠に合わせた

ラウラ

「喰らえ!!!」

ドンッ!

永遠

「!?」

永遠は咄嗟に【戦国龍】の鎧の羽で砲弾を防いだ

ザワザワ…

ラウラの突然の行動に観客席にも動揺が走っていた

永遠

「…何のつもりじゃチビツ子…今のは織斑達を狙ったんか？…それとも…ワシを狙ったんか？」

ラウラ

「…決まっている…狙ったのは貴様だ!!」

そう叫ぶと「プラズマ手刀」を展開し永遠に襲い掛かった

《観客席》

鈴

「アイツやっぱり!？」

セシリア

「…もはや冷静な判断が出来なくなってますわね…」

簪

「仮にも味方に攻撃するなんて…あんな事してたら自分がどうなるか分かってるのかな？」

本音

「分かって無いと思うよ〜?」

セシリア達は自分達の予想通りの行動に出してしまったラウラに呆れ果てていた

《管制室》

千冬

「何をしてるんだアイツは！味方を後ろから撃つとは！」

真耶

「どうします?」

千冬

「…普通なら試合を止める所だが…今のアイツが言う事を聞くとおもんねんし………仕方ない…」

千冬はやむを得ず永遠に通信を送った…

《アリーナ》

ラウラ

「くたばれええええええーっ!!」

永遠はラウラの「プラズマ手刀」を受け止め、どうするか悩んでいると…

千冬から通信が入った

千冬

『火ノ兄…聞こえるか？…単刀直入に言うぞ。試合を中止したいからボーデヴィツヒを倒せ。今のアイツは私の言う事も聞かん。』

永遠

「…いや、このまま続ける。」

千冬

『何？』

永遠

「対戦相手二人を倒せば試合は終わりじゃ。それまではこのチビツ子は軽く流しとくわ
い。」

千冬

『……………はあ…普通なら馬鹿な事をと言う所だが、お前ならそれが出来るだろうな…分
かった、好きにしろ。ボーデヴィツヒは倒しても咎めはせん。』

永遠

「スマンな…」

千冬との通信が終わるとほぼ同時に倒れていた一夏とシャルルが起き上がった

一夏

「どうなってるんだこの状況は!？」

シャルル

「何でボーデヴィツヒさんと火ノ兄君が戦ってるの!？」

永遠はラウラの攻撃を捌きながら起き上がった二人に視線を向けた

永遠

「ん? やつと起きたか…さて、続きを始めるかの。」

一夏

「何言ってるんだよ! こんな状況で試合を続ける気かよ!？」

永遠

「そのつもりじゃ。織斑先生からも好きにせいと許可を貰ってるぞ。」

一夏

「千冬姉が!？」

永遠

「じゃからほれ、構わんからかかってこんかい。」

永遠はそう言うと同時に目の前のラウラを蹴り飛ばした

ラウラ

「ぐっー！」

永遠はそのまま後方に下がると、一夏とシャルルを分断する際に投げた槍を拾った
永遠

「…さて…改めて試合を始めようかのお…」

永遠は刀と槍を構えて3人に挑発をした

ラウラ

「舐めるなああああーっ！！！」

冷静な判断が出来なくなり始めているラウラが真つ先に突っ込んでいった

そして、対戦相手の二人は…

シャルル

「どうするのー一夏？」

一夏

「…分からない…けど、今ならラウラを倒す事も出来るはずだ。」

シャルル

「じゃあ…」

一夏

「最初の予定通りラウラを倒す!!そして…派手に負けてやるぜ!!」

ラウラを倒す為二人も永遠のいる場所に向かっていった

《管制室》

真耶

「…何ですかコレ？」

千冬

「見ての通りだが？」

真耶

「確か今、タッグ戦をしてるんですよね？」

真耶の言う通りこの試合は本来は2対2のタッグ戦…だが…

現在アリーナで行われている試合は1対1対2の三つ巴のバトルロイヤルと化していた

千冬

「こうなつては戦いが終わるまでどうしようもない。試合が終わった後、ボーデヴィツヒにはキツイ説教をしてやる。」

真耶

「そうですか…」

《アリーナ》

アリーナはすでにタッグバトルではなく三つ巴の混戦となっていた
ラウラ

「うおおおおおおおーっ!!!」

ラウラは永遠を中心に攻撃を仕掛け…

一夏&シャルル

「はあああああああーっ!!!」

一夏とシャルルの二人はラウラに攻撃を集中し…

永遠

「……………」

永遠はラウラの攻撃を捌きながら一夏とシャルルを攻撃している
ガキイイインツ!!

4人が同時に衝突し、その反動で一端距離を取った

一夏&シャルル

「はあくはあく…」

ラウラ

「ふうく……ふうく……」

永遠

「……………」

一夏とシャルル、ラウラは肩で息をしていたが、永遠は息一つ乱してはいなかった
ラウラ

(クソツッ!あれだけ攻めてもまるで効いていない!……………SEも半分を切ったか…)

シャルル

「(…一夏…SEの残りは?)」

一夏

「(…残り3分の1だ…【零落白夜】も使えて後1回だ!シャルルは?)」

シャルル

「(僕も半分を切ったよ……………でも【戦国龍】は…)」

一夏

「(ああ、全くダメージを受けてない!)」

シャルル

「(うん!躲すかあの鎧の羽で全部防いでる!あの羽、盾の役割も持ってたんだ。)」

一方永遠はラウラが邪魔で二人を倒せずにいる事に僅かではあるが苛立ちを覚えて

「ぐわあああああああああー………っ!!!」

永遠の【龍巢閃】で全身を滅多切りにされた一夏の【白式】は一瞬でSEが0になっ
てしまった

シャルル

「一夏!!…クッ!!」

シャルルは【ヴェント】と【ガラム】で永遠を狙おうとしたが…

永遠

「【土龍閃】！」

それよりも先に永遠がシャルルに向かって【土龍閃】を放った

シャルル

「つづてが多すぎるー！」

シャルルは【土龍閃】の土石の迎撃を諦め右に躲したが…

シャルル

「はっ!?!」

そこにはすでに永遠が先回りしていた

永遠はシャルルが右に避ける様にする為、左側に向けて【土龍閃】を放っていた

永遠

「龍巻閃」！

シャルル

「うわあああああーっ!!」

【龍巻閃】で斬りつられたシャルルは吹き飛ばされた

永遠はそのまま刀を鞘に納めると…

永遠

「飛龍閃」！

腰を捻り、刀の鐔を指で弾いて鞘から撃ち出した

ドゴンツ！

シャルル

「うあああああああーっ!!」

【飛龍閃】で撃ち出された刀はシャルルの腹部に命中し、そのまま壁に叩きつけられた

そして、今の一撃でシャルルの「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」のSEも0

になってしまった

対戦相手二人のSEが0になったので試合終了のブザーが鳴り響いた

アナウンス

『【白式】「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」シールド・エネルギー0、勝者、火ノ

兄永遠&ラウラ・ボーデヴィツヒ！』

永遠

「さて終わったのお…」

永遠は試合が終わったのでピットに戻ろうとしたが…

永遠

「…聞こえなかったか？ 試合は終わりじゃ。」

ラウラが永遠に対して敵意を剥き出しにしていた

ラウラ

「まだだ…まだ終わってはいない!!」

永遠

「……………さっきまでは試合という事で主の攻撃も軽く流しておったが…これ以上やるな

らワシも主を潰さねばならんぞ？」

ラウラ

「望む所だああああーっ!!!」

永遠

（ほんに面倒な奴じゃなあ……………が、丁度いい…このチビツ子で試すか…）

自分に向かって来るラウラに対し永遠は持っていた槍を地面に突き刺した

そして両腕を前に突き出すと…

永遠

「来い…【星銃フォーマルハウト】!!【星王剣アルフェツカ】!!」

ラウラ

「何っ!!」

永遠は拡張領域から2つの武器を取り出した

左手には銃口が魚の様になっている青と白の銃

右手には刀身と柄が金色で柄の先端に王冠の様な飾りがついた大剣が握られていた

ラウラ

「何だそれは!？」

永遠

「主も知つとるじやろ?この大会の優勝賞品を？」

ラウラ

「まさかそれが!？」

永遠

「左様。…このタッグトーナメントの優勝ペアに送られる2つの【剣刃^{つるぎ}】…【星銃フォーマルハウト】と【星王剣アルフェツカ】じゃ。」

ザワザワ：

会場中も永遠が持つ二つの【剣刃】に騒めいていた

本音以外は賞品の話は聞いていたが、それがどのようなものかは知らなかったからだ
しかもその一つは【剣刃】と言いながら剣では無いからだ

ラウラ

「その銃が【剣刃】だと!？」

永遠

「そうじゃ。【剣刃】は確かに刀剣が一番多いがそれ以外の武器もあるんじゃないよ。」

ラウラ

「くっ…屁理屈を!!」

永遠

「チビツ子! お前にはこの二つの【剣刃】のテストの相手になって貰う! 試合中は流石に使えんかったんでな…お前で試させて貰うぞ!!」

ラウラ

「ならば貴様を倒しその二つを手に入れてやる!!」

永遠

「カカカツ! 笑わせてくれる! 出来る物ならやってみるんじゃないか?」

ラウラ

「!?…くたばれええええーっ!!」

永遠の挑発を受け、ラウラは再び永遠に向かって行った

《観客席》

一方観客席では、ラウラの奇行にセシリア達はさらに呆れ果てていた

鈴

「アイツ…本気で永遠に勝てると思ってるのかしら?」

簪

「思ってるからあんな行動してるんだと思う。」

本音

「そうかもね…」

セシリア

「生身の永遠さんにも勝てなかったのですか? しかも今の永遠さんはISを、それも

【戦国龍】を纏っているのですよ?」

簪

「それが分かってないんだと思う。」

鈴

「アイツ…まさかココまで馬鹿だったなんて…一夏といい勝負かも…」

セシリア

「そうですね〜…彼も相当ですからね〜…」

簪 & 本音

「うんうん！」

一夏の考え無しの行動と今のラウラの行動が被って見えた4人だった

そして、4人は永遠が持つ2つの【剣刃】^{つるぎ}に話題を変えた

セシリア

「それにしても…あれが優勝商品の【剣刃】^{つるぎ}ですか…」

鈴

「【剣刃】^{つるぎ}って刀剣以外の武器もあったんだ…」

本音

「そっだよ〜♪」

簪

「本音知ってたの!?!」

本音

「うん♪織斑先生からひののんと一緒にハンデの事を言われた時に候補を見せて貰ったんだ♪」

鈴

「候補って？」

本音

「ひののんは賞品用に造る【剣刃^{つるぎ}】を4つまで絞ってたんだよ♪」

セシリア

「その4つの中から選ばれたのがあの2つの【剣刃^{つるぎ}】…【フォーマルハウト】と【アルフェツカ】…」

簪

「じゃあ、外されたのはどんな【剣刃^{つるぎ}】だったの？」

本音

「斧と弓だったよ♪」

鈴

「斧と弓ですって！そんな物まであるの!？」

本音

「他にも槍や杖、色々あるって言ってたよ♪」

鈴

「……………今度永遠に頼んで【つるぎ剣刃】のリスト見せて貰おうかな…」

簪

「それ私も見たい!!他にどんな物があるのか興味がある!」

本音

「私も〜♪」

セシリア

「わたくしもですわ。…ですが、今はあの2つの力を見ておきましょう!」

セシリアの言葉に簪達は頷くと、アリーナに視線を戻した

《アリーナ》

向かって来るラウラに対して永遠は「フォーマルハウト」を構え引き金を引いた

ドギユウン!

ラウラ

「くっ!?!」

【フォーマルハウト】から放たれた光弾をラウラは躲すが、その威力に驚いていた

ラウラ

「…対した威力だな…だが！当たらなければどうという事はない!!」

永遠

「確かにな…なら、これはどうじゃ?」

ドギユウン!

永遠はそう言つて「フォーマルハウト」を真上に向かつて撃つた

ラウラ

「フンツ!どこに向かつて撃っている!!………ん?」

真上に撃たれた「フォーマルハウト」の光弾は上空で弾けると無数の光弾となってラウラに向かつて降り注いだ

ラウラ

「何っ!!……くっ?!?……ぐああああああ………っ!!」

ラウラは上空から降り注ぐ光弾を躲そうとするが全て躲す事が出来ず、半分近く命中した

ラウラ

「な、何だあの銃は…これが【つるぎ剣刃】の力………!?!」

ドギユウン!

永遠は再びラウラに向かつて「フォーマルハウト」を撃つた

真横に向かって撃たれた光弾は先程と同じように無数に分裂し、ラウラに向かって行った

ラウラ

「!?…うわああああーっ!!」

永遠

「…ふむ…『フォーマルハウト』の試し撃ちはこんなもんか…」

「フォーマルハウト」の拡散弾を受けたラウラは肩のレールカノンが破壊されていたラウラに無数の弾丸を撃ち込んだ後、永遠は「フォーマルハウト」の能力を確認すると拡張領域に格納した

そして今度は右手に持っていた「アルフェツカ」を構えた

ラウラ

「ぐっ…ぐうう…」

永遠

「ほれ早よ立て。でなければ試し斬りが出来んではないか？」

ラウラ

「試し斬りだと…貴様…戦う気があるのか!!」

永遠

「ある訳無かるう？戦うかどうかを決めるのはワシの勝手じゃ。そもそもこれは試合でもない：お前が勝手に襲い掛かって来たんじゃからな：じゃからワシも勝手にしとるんじゃ。」

ラウラ

「き、き、貴様ああああーっ!!!」

永遠の言葉にラウラは完全にキレてしまった

自分は戦う気であるのに肝心の永遠はまるで戦う気が無いのだ

しかも自分への攻撃は、全て今使っている「つるぎ剣刃」のテストだと言ったからだ

ラウラ

「死ねええええええええーっ!!!」

ラウラは永遠に向かって「プラズマ手刀」で突撃した

対する永遠もラウラに向かって行った

キキイーンッ!

二人が交錯すると：

ラウラ

「う…ぐあああああーっ!!!」

ラウラの「シユヴァルツェア・レーゲン」は全身が斬り刻まれていた

「シユヴァルツエア・レーゲン」は機体の各所から放電し、傍目にも戦闘不能の状態にされていた

永遠

「…中々の切れ味じゃな…まあこんなもんでいいか…さて帰るか。」

永遠はそう言つて「アルフェツカ」も拡張領域にしまった

そして、そのままラウラに振り替える事もせずピットに向かつて歩き出した

ラウラは歩いて行く永遠の背中を薄れゆく意識の中、見つめていると…

?

『力が欲しいか?』

謎の声がラウラに囁きかけて来た

ラウラ

「ああ…寄越せ!!」

ラウラはその声に応えた

?

『何者にも負けない力を求めるか?』

ラウラ

「比類無き最強の力を…奴を倒す力を…寄越せええええええーっ!!!」

？

『ならば受け取れ…絶対なる力を!!』

ラウラ

「うっ…ぐっうっ…うあああああああああ——————————っ!!!」

永遠

「ん?…何じゃいきなり?」

ラウラの突然の絶叫に永遠は振り返ると「シユヴァルツエア・レーゲン」が放電し泥状に溶け始めた所だった

そして、そのままラウラを包み込み、形状を変えた

その姿は嘗て「モンド・グロツソ」で優勝した織斑千冬の愛機…

【暮桜】だった…

く三人称 Side outく

第084話：戦国龍、墜つ【戦国龍VS偽暮桜】

く千冬 Sideく

千冬

【暮桜】だと!？」

真耶

「織斑先生!ボーデヴィツヒさんのあの変化ってまさか!？」

千冬

【ヴァルキリー・トレース・システム】だ!!」

ドイツ軍め…あのシステムをボーデヴィツヒの機体に組み込んでいたのか!

真耶

「やっぱり!?!ですがアレは危険過ぎるシステムの為、どの国も企業も使用する事は禁止されている筈です!」

千冬

「その通りだ!!」

【Valkyrie Trace System】…通称【VTシステム】…

過去の【モンド・グロツソ】優勝者…つまり私の戦闘パターンをデータ化し、そのまま使用者に再現・実行させるシステム

だが、搭乗者に『能力以上のスペック』を要求する為、肉体に莫大な負荷が掛かり、場合によっては生命の危険すらある

現在は山田先生の言う通り条約によつて使用はおろか研究すら禁止されている代物だ

それをドイツの研究者どもめ！

千冬

「アイツ等!? 私の教え子になんて物を!!」

私が怒りに震えていると…

セシリア

「織斑先生!!」

オルコット達4人が管制室に入つて来た

千冬

「お前達! 勝手に入つて来るな! 今は緊急事態だぞ!!」

セシリア

「処罰は後で受けます！ですが今は…」

コイツ等、それを覚悟で来たのか…

どっかの馬鹿に聞かせてやりたい台詞だな…

つて今はそんな事はどうでもいいな

簪

「織斑先生…アレはもしかして【VTシステム】じゃ？」

千冬

「…そうだ…しかも使われているのは【モンド・グロツソ】で優勝した時の私のデータだ

！」

鈴

「【モンド・グロツソ】の時の千冬さんって…【ブリュンヒルデ】になった時のですか!？」

千冬

「ああ…」

本音

「どうするんですか〜？」

千冬

「幸いと言っているのかは分かんが、奴の目の前には火ノ兄がいる。アイツならあん

な紛い物には負けはしないだろう。」

セシリア&簪&本音&鈴

「はい♪」

真耶

「織斑先生！その火ノ兄君から通信です！アレは何だと聞いてきてます！」

千冬

「分かった！私が説明する！」

く千冬 Side outく

く永遠 Sideく

永遠

「何じゃこれは？」

ワシは今、目の前における異形の物体となったチビツ子を見とる

これが何か全く分からんから先生方に連絡して教えて貰おうと思うたんじやが…

千冬

『火ノ兄！私だ！』

織斑先生が通信に出て来た

千冬

『簡単に言うぞ。ボーデヴィツヒの機体には「VTシステム」と呼ばれるものが搭載されている。このシステムは過去の実力者、今回は私のデータを使って私自身の力を再現している。』

永遠

「お主の再現?…何となく分かったがそげなシステムを使ってチビツ子の体は大丈夫なんか?」

千冬

『大丈夫な訳がない!「VTシステム」は使用者の能力以上のスペックを要求するシステムだ!使えば体に膨大な負担がかかる上に最悪使用者が死んでしまうものだ!』

永遠

「何でそげな物騒なもんをチビツ子が?」

千冬

『あのシステムは条約で使用、開発、研究の全てが禁止されている!それをドイツの研究者の馬鹿共が取り付けていたんだろう!』

永遠

「そいつ等にとってチビツ子は実験動物とでも言うつもりか?胸糞悪いシステムじゃ

永遠

「何しとるんじやお前は？」

流星に生身ではヤバそうじゃから、織斑の首根つ子を掴み上げて問い質したんじやが

：

一夏

「離せ火ノ兄!! アイツは…アイツは千冬姉の!!」

永遠

「姿と動きを真似とるのお…」

一夏

「そうだ!! アレは千冬姉の剣だ!! それを…」

永遠

「…許せんのは分かるが、生身で挑むつもりか？」

一夏

「ぐっ!…な、ならすぐに【白式】の補給をしてくるから、それまで…」

永遠

「馬鹿か貴様？」

一夏

「!?」

永遠

「自分が倒すからそれまで待つてろても言うつもりか？ふざけとんのか貴様？」

一夏

「で、でもアイツは…」

永遠

「貴様を待つとる間にチビツ子が死んでもいいのか？」

一夏

「…え？」

永遠

「あのままの状態では中のチビツ子は死ぬと言うとるんじや!!じやから一刻も早くあの中から引きずり出さんといかん…それを貴様は何て言おうとした!!」

一夏

「……………そ、それは…」

永遠

「貴様の我儘と人一人の命…どちらが大切だと思うとるんじや!!」

一夏

「!?」

永遠

「分かったら引つ込んで!!」

ワシはそう言うのと織斑をデュノアの方に放り投げた

一夏

「グッ!」

シャルル

「一夏、大丈夫!」

一夏

「…ひ、火ノ兄…」

永遠

「…単一仕様能力起動!!」
ワンオフ・アピリテイ

一夏&シャルル

「!?」

永遠

「来たれ!」
【六道剣】
りくどうけん!!」

ワシの周りに現れた6色の光の柱、その内の一つ、赤い柱に向かって手を差し伸べる

と、中に封印されておる劍の名を呼んだ

永遠

「燃え上れ！猛き炎の劍【炎龍刀オニマル】!!」

ワシの声に反応する様に赤い柱から一振りの劍が出てくるとワシはそれを掴み構えた

く永遠 Side out

く一夏 Side

シャルル

「い、一夏…何なのあの劍!?!」

そう言えばシャルルはまだ見た事無かつたな…

一夏

「…アレが【戦国龍】ワシオフ・アピリテイーの単一仕様…【六道劍】りくどうけんだ…」

シャルル

「【六道劍】りくどうけん!?!…アレが!?!」

一夏

「…【六道劍】りくどうけんはその名前の通り全部で6本ある刀の総称なんだ…その内の一本があの

【炎龍刀オニマル】だ…

シャルル

「…【炎龍刀オニマル】…」

…シャルルは【オニマル】に驚いてるけど…俺はそれどころじゃなかった…
さつき火ノ兄が言った言葉が頭にこびり付いていた…

永遠

『貴様の我儘と人一人の命…どちらが大切だと思うとるんじゃ!!』

そんなの決まってる…ラウラの命の方が大事だ…

俺は…いくら知らなかったからって…何て事を言おうとしたんだ…

く一夏 Side outく

く三人称 Sideく

《管制室》

セシリア

「【炎龍刀オニマル】…赤の剣ですか…」

簪

「…そう言えば…【戦国龍】の【六道剣】りくどうけんも【剣刃】つるぎに入るのかな？」

鈴

「…多分入るんじゃない。…あの6本は永遠が今まで造った【剣刃】を遥かに上回るって
言ってたし…」

千冬

「そうだな…恐らくあの6本が【剣刃】の頂点に立つんだろう。」

本音

「ならアレを使えばひののんは負けないね♪」

セシリア

「そうですね♪」

簪

「本音の言う通り♪」

セシリア達は【オニマル】を使う永遠が負ける筈無いと確信していた

《アリーナ》

アリーナでは【オニマル】を構えた永遠が【偽暮桜】と向かい合っていた

永遠

「(チビツ子の体がどこまで持つか分からん…速攻で片づけんといかん！)ならば!!…

行った

永遠

「はあああつ!!」

ガキインツ!

永遠の【オニマル】と【偽暮桜】の刀がぶつかった

そのまま鏢迫り合いになるが、力は【戦国龍】の方が上だった

永遠

「ぬんっ!」

そのまま【偽暮桜】の刀を払いあげ、刀を持っている右手を槍で突き刺した

永遠

「今じゃい!!」

永遠はガラ空きになった懐に【オニマル】で表面を斬り裂いた

斬り込みの入った胴体に槍を手放し、左手を突っ込むと…

永遠

「出て…(ン)ー…い!!」

中のラウラを力づくで引きずり出した

ラウラを助け出した永遠はラウラを抱え直すと【偽暮桜】から離れた

永遠はすぐにラウラの安否を確認すると…

ラウラ

「う…う…う…」

無事だったので、永遠は肩から力を抜いたのだが…

ドシユツ！

何かを突き刺す音が永遠の耳に聞こえてきた

永遠が自分の胸元を見ると自分の体を貫いた血に濡れた剣が目映った

永遠

「…な…に…」

しかも体を貫いている剣が淡く光っていた

永遠

「コレは…まさか【零落白夜】…」

それは一夏の【白式】と同じ【零落白夜】の光だった

そのまま後ろを振り向くと、搭乗者のラウラがいない筈の【偽暮桜】が永遠を後ろか

ら突き刺していた

永遠

「ぐっ…織斑…！デユノア…！」

永遠の叫び声と共に二人はラウラを連れて避難した

それとほぼ同時に【偽暮桜】は永遠の体から刀を抜いた

永遠

「ぐううっ……はあああああー……っ!!」

永遠は痛みにも耐えながら【オニマル】で斬りかかったが……

ガキーン!

永遠

「何っ!?!」

【偽暮桜】はいつの間にか持っていたもう一本の刀で永遠の攻撃を受け止めていた

ザシユウツ!!

そして【偽暮桜】は空いていた刀で永遠を斬り裂いた

永遠

「!?!…あ…ああ…」

斬り裂かれた【戦国龍】の斬り口から鮮血が飛び散った

永遠はそのまま仰向けに倒れ……【戦国龍】の目から光が消えた……

三人称 Side out

第085話：進化の時！我が名は戦国龍皇！！

（永遠 Side）

永遠

「…此処は？」

気付いたらワシは周囲が真っ赤な空間におった

確かワシは、チビツ子を助け出したらいきなり後ろから刺されて…振り向いたらあのモドキがまだ動いとつたんじゃよな…でそのまま…斬られたの…

永遠

「ん？…という事はワシは死んだんか？…また死んでもうたか…弱ったのお、セシリア達にお別れが言えんかったな…」

？

「相変わらず呑気な人ね。」

永遠

「誰じゃ？」

?

「フフツ♪初めまして…かしらね？」

ワシの目の前に長い赤い髪に白い翼と鎧を身に着けた少女が現れおつた

永遠

「何じゃお迎えか？…あれ？なんかどつかで見た事が…」

この娘、どこかで見た記憶があるんじゃないやよな…どこじやつたかな？

永遠

「うくんっ…あああーっ!? 思い出した！髪の色が違うが、お主は【剣聖姫ツル】!？」

そうじゃー！こやつは【バトスピ】の【剣聖姫ツル】と瓜二つなんじゃ！

剣聖姫ツル？

「フフツ♪そうね。この姿はそれを元になっているからね♪」

永遠

「?…お主何もんじゃない？」

剣聖姫ツル？

「何もんとは失礼ね！いつも一緒にいたでしよ！」

永遠

「ん？いつも一緒？…まさか…お前【戦国龍】か!？」

戦国龍

「ピンポ〜ン♪大正解♪私はあなたのIS【戦国龍】の深層意識よ♪」

永遠

「マジか！」

戦国龍

「マジよ♪…でも私は【戦国龍】だけど、【ドットブラ斯拉イザー】と【ラインバレル】でもあるのよ。」

戦国龍がそう言うのと後ろにIS状態の【戦国龍】【ドットブラ斯拉イザー】【ラインバレル】が現れた

永遠

「…どういう事じゃ？」

戦国龍

「私はね、他のISの子達と少し違うのよ。他の子はコア一つに人格が一人いるんだけど、私は3機のそれぞれのコアを一括りにした人格なのよ。」

永遠

「何じゃと！ならお主は！」

戦国龍

「そよ【戦国龍】でもあり【ドットブラスライザー】でもあり【ラインバレル】でもあるのよ♪」

永遠

「…なら何と呼べばいいんじゃない？」

戦国龍

「そうね…ならこの姿からとって【ツル】と呼んで頂戴♪」

永遠

「分かった。しかしノリの軽い奴じゃのお…」

ツル

「まあね♪…で、話を戻すけど…ぶっちゃけあなた死にかけてるわ！」

永遠

「ん？死んどらんのか？」

ツル

「このままだと死ぬわ！…でも私の力で留めているの…すぐに治療すれば助かるわ。」

永遠

「…そうか…じゃがそう簡単にはいかんのじゃろ？」

ツル

「…ええ、あなたの意識が戻っても目の前にあのモドキがいるわ。」

永遠

「やはりそうか…なら奴を始末せん事にはワシは手当ても出来んのか…」

ツル

「そうね。そして奴を倒せるのは貴方だけよ。貴方が下がったらあのモドキは学園の人間を殺し始めるでしょうね。」

永遠

「ならどうすればいい？」

ツル

「…貴方が奴を倒すしかない…でも今のままじゃ負けるわ。」

永遠

「【戦国龍】でも勝てんのか？」

ツル

「いいえ、貴方が万全の状態なら楽に勝てるわ。でも今の貴方は瀕死の状態、その上【戦国龍】も大破している。他の2機じゃ貴方の体がもたない。」

永遠

「ちよつと待て！それでは手詰まりではないか！」

ツル

「…一っだけ方法があるわ…」

永遠

「その方法は？」

ツル

「…私を…【戦国龍】を二次移行させるのよ。」

永遠

「何じゃと!？」

ツル

「二次移行した【戦国龍】の力なら短時間で勝てるわ!あなたの体は【ドットプラスライザー】と【ラインバレル】の力で一時的に動かせる様になる。ただし3分間が限界よ。」

永遠

「つまりワシは二次移行した【戦国龍】で3分以内にモドキを始末せにやならんという事か?」

ツル

「そういう事!それでやる?このままモドキがどこかに行くのを待つ事も出来るけど?」

永遠

「何を言うとする！それではセシリア達に危険が及ぶではないか！！」

ツル

「なら？」

永遠

「やるぞツル！力を貸してくれ！」

ツル

「フフッ♪それでこそ私の主様♪…私の力、存分にお使いください！」

永遠

「ああ、頼む！」

ツル

「…では…呼んで下さい！…私の名を…新しい名を…」

永遠

「……………お主の名は！！」

〈永遠 Side out〉

〈千冬 Side〉

今アリーナでは信じられない光景が広がっていた

火ノ兄が…あの火ノ兄が…後ろから刺されて…斬られただと…

はっ！いかん！！

セシリア

「…許しません…絶対に許しません！！」

簪

「よくも永遠を！！」

本音

「ひののんの仇だあああーっ！！」

オルコット、更識、布仏の3人が暴れ始めた！

鈴

「アンタ達落ち着きなさい！！」

千冬

「待てお前達！今出て行くのは危険だ！オルコット！お前のISは今手元に無いだろ

！」

鈴と一緒に抑えているが…

こいつら…特にオルコットは戦えないと言うのに！

セシリア

「離してください！」

簪

「早く永遠の所に行かないと！」

本音

「仇を取るんだーっ！」

涙を流しながら火ノ兄の所に行こうとするとは…こいつら、そんなにアイツの事を…

セシリア

「このままでは永遠さんが！永遠さんがあああーっ！！」

簪

「永遠あああああーっ！！」

本音

「ひのの…ううっ…永遠あああーっ！！」

鈴

「ア、アンタ達…」

カツ！！

千冬

「何だ!?!」

突然アリーナから強い光が起きた

セシリア&簪&本音

「…永遠(さん)!?!」

千冬

「何だと!?!」

私達はアリーナを見ると光は【戦国龍】が倒れている場所から出ていた

千冬

「…何が起きている!?!」

光が収まると、次の瞬間【戦国龍】を炎が包み込み、炎の龍となって上空に昇っていった

炎の龍はそのまま炎の球体になった…いや、あれはまるで…

鈴

「…太陽?」

鈴の言う通り、太陽の様な球体は巨大化していくと中に【戦国龍】がいた!

そして最後は内側から炎を弾き飛ばして【戦国龍】が出て来た

…いや違う!…あれは…【戦国龍】じゃない!?

第086話・戦場を駆ける駿馬!その名は轟焰!!【戦国龍皇VS偽暮桜】

く千冬 Sideく

千冬

【戦国…龍皇】だと…」

私の目の前で再び信じられない事が起こった

あのモドキに【戦国龍】が倒されたと思ったら、進化して復活するとは…

セシリア

「アレが永遠さんの…」

簪

【戦国龍】が二次移行した姿…」

鈴

「…凄い…」

本音

「カッコいいいいい〜…」

千冬

「真耶!!すぐに【戦国龍皇】のデータを取る準備を!!」

真耶

「は、はい!?!」

だが…火ノ兄の奴大丈夫なのか?

あのモドキに刺された上に斬られている…

普通なら生きているだけでも不思議なんだが…

く千冬 Side out

く束 Side

クロエ

「束様!?!」

束

「…分かつてるよ…あんな不細工なシステムまで使つて、とーくんを傷付けたドイツの馬鹿共には後で報復してやるよ!?!…でも、今はそれよりも…」

クロエ

「はい!遂に【戦国龍】が進化したんですね!」

束

「そうだね!……でもとーくん大丈夫なのかな?あの偽物に思いつき刺されて斬られていたけど……」

クロエ

「そうですね……兄様……」

束

「……クーちゃん……心配なら今からとーくんの所に行つていいよ。【戦国龍皇】のデータは束さんが取つておくから。」

クロエ

「……いえ……私は束様の助手です。……それに……兄様があんな偽物に負ける筈ありませんから!!」

束

「うん……そうだね♪」

とーくん……無事でいてね……

く束 Side out く

く一夏 Side く

俺達はラウラを連れて避難したけど、火ノ兄が斬られて倒されたのを知った俺は【白式】の補給をして奴と戦おうとした

だけど…

一夏

「…何だよアレ…」

シャルル

「…セカンドシフト一次移行…」

一夏

「セカンドシフト二次移行!?!…アレが…」

シャルル

「うん! 【戦国龍】の…第二形態だよ!」

一夏

「…第二形態… 【戦国龍皇】…」

アイツはあんな状態でも戦うって言うのかよ…

一夏 Side out

三人称 Side

《アリーナ》

アリーナでは二次移行した【戦国龍皇】を纏った永遠が【偽暮桜】に対して二本の槍を構えていた

永遠

「…体は問題なく動く…これならイケるのお!」

永遠は二本の槍を連結させ一本の槍にすると【偽暮桜】に向かって行った
向かって来る永遠に対して【偽暮桜】はその姿をさらに変化させた
体から更に刀を持った腕が二本生えてきた

その姿は原形を留めておらず、もはや異形と言つてもいい姿だった

永遠

「化けもんめ!!」

槍で攻撃する永遠に対して、【偽暮桜】は4本の刀で全て受け止め、永遠を押し返していた

その理由は永遠は元々槍ではなく刀を用いた戦いの方が得意だからだった

永遠

「チィ…槍では戦いづらいのお……ならば!!」

永遠は槍を【偽暮桜】に槍を投げつけると…

永遠

「…来たれ…【六道剣】!!」

【六道剣】を呼び出した

永遠の周りに現れる6色の光の柱

しかし、呼び出された【六道剣】は今迄とは違っていた

永遠

「…全ての封印を解き放て!!【六道剣】!!!」

永遠のその言葉と同時に6本の光の柱の中から全ての【六道剣】が出て来た

今迄の【六道剣】は6本の刀の内の1本しか呼び出せ無い制限がかかっていた

だが、進化した【戦国龍皇】によってその制限が無くなっていた

永遠

「来い!【炎龍刀オニマル】【妖刀ムラサメ】!!」

永遠の呼びかけに応える様に二本の刀…【炎龍刀オニマル】と【妖刀ムラサメ】が永遠の元に飛んできた

永遠は右手に【炎龍刀オニマル】を、左手に【妖刀ムラサメ】を手に取り構えた

そして残りの4本の刀は【戦国龍皇】の鎧の羽にそれぞれ二本ずつ格納された

永遠

「行くぞ!!」

《管制室》

全員

「……………」

管制室にいたセシリア達は【六道剣】りくどうけんを全て呼び出した永遠の姿に言葉を失っていた
セシリア

「……これは一体……」

最初に声を出したのはセシリアだった

千冬

「……まさか、進化した事で【六道剣】りくどうけんの制限が解除されたのか!？」

鈴

「制限の解除って……あの天変地異を起こす刀を全て同時に使える様になっただって事!？」

簪

「……コレが【戦国龍皇】の単一仕様……」

ワンオフ・アビリティ

真耶

「……………ち、違います!？」

簪の言葉を真耶が慌てて否定した

千冬

「何が違うんだ!？」

真耶

ワンオフ・アビリティ

「アレは単一仕様ではありません!!ただ刀を呼び出しただけです!!」

千冬

「何だと!？」

セシリア

「では今の【六道剣】りくどうけんはただの武器になっていると言うんですか!？」

真耶

「そうなります…」

鈴

「嘘でしょ…」

簪

「あれだけ強力な武器が…ワンオフ・アビリティ単一仕様ですら無くなったの…」

千冬

「…使用本数の制限だけでなく…ワンオフ・アビリティ単一仕様としての制約まで無くなったと言うのか

「……………なら【戦国龍皇】の単一仕様は一体何なんだ!!!」
ワンオフ・アピリテイ

真耶

「…分かりません…火ノ兄君が使ってくれば分かるんですけど…」

千冬

「…そうか…【戦国龍皇】…一体どんな力を秘めているんだ…」

《観客席》

一方観客席では、生徒たち全員が【戦国龍皇】の姿に驚き言葉を無くしていた
観客席から見ていた楯無もまた、同じ状態だった

楯無

「……………【戦国龍皇】…まさか【戦国龍】が進化するなんて…それに…あの【六道剣】りくどうけんの制限まで無くなってる…」

【六道剣】りくどうけんの力を知る楯無は【戦国龍皇】に恐れを抱いていた

楯無

「…これはいよいよヤバいわね…世界中の国から完全に目を付けられる…」

楯無はこの一件から世界の国や企業は永遠に目を付けてしまったと考えていた

実際それは正解だった…

貴賓室にいる賓客達は永遠と永遠のISである【戦国龍皇】を手に入れようと色々と画策し始めていた

ただし、彼らには知らない事があつた：

それは永遠の後ろにあの篠ノ束がいるという事：

何より、仮に力づくで手に入れようとしても、ISを生身で倒せる永遠自身に振り返りに会うのが目に見えていた：

箒

「フツ…フフフツ…」

一方、楯無とは別の場所でアリーナを見ていた箒は二次移行した【戦国龍皇】の姿に笑いが込み上げていた

箒

「…感謝するぞ火ノ兄…私の為に進化させてくれて…」

箒は【戦国龍皇】を完全に自分の物と決め込んでいた

さらに、今まで我慢していた【戦国龍】を手に入れようと言う欲求を押さえきれなくなっていた

…その結果自分がどんな目に合うのかも知らずに…

《アリーナ》

永遠

「(時間も無い…はよせんと…) はあああーっ!!」

【オニマル】と【ムラサメ】を手に【偽暮桜】に斬りかかって行く永遠…
対する【偽暮桜】も四本の刀で迎え撃つ…

ガキガキガキン!

二本と四本の刀のぶつかり合い…

その戦いは常人では追いつけない速度だった

そんな剣戟を繰り返す中、永遠は【偽暮桜】の隙を伺っていた…

………そして…

永遠

「そこじゃ!!」

【偽暮桜】に出来た僅かな隙について、そこに【ムラサメ】を突き刺した

永遠

「よしっ!!」

【ムラサメ】を刺すと同時に永遠は後ろに飛びのき距離を取った

飛びのくと同時に永遠は【ムラサメ】の能力を発動させた

永遠

「奴の力を食い尽くせ!!【ムラサメ】!!!」

永遠の声に呼応するように【ムラサメ】は紫の光を放つと【偽暮桜】のエネルギーを吸収し始めた

【ムラサメ】によってエネルギーを奪われた【偽暮桜】は次第に形を保てなくなったのか4本の腕の内の二本の腕が崩れ落ちた

その姿に観客席が再び騒めきだした

【妖刀ムラサメ】が持つ能力…無尽蔵のエネルギー吸収能力に恐れおののいていたのだ

永遠

「流石は【ムラサメ】…こげな僅かな時間でココまで弱体化するとはのお…」

永遠がそう言った瞬間、頭の中にツルの声が響いて来た

ツル

『主…残り1分を切りました!早く!!』

ツルからの警告を聞くと永遠は決着をつける為…

永遠

「分かった…一気に終わらせる!!ワンオフ・アビリティ単一仕様能力…起動!!!」

《管制室》

管制室でも【轟焰】の姿に戦慄が走っていた
ただし…

千冬

「馬だと!？」

真耶

「織斑先生!!あれが【戦国龍皇】の単ワンオフ・アビリティ一仕様です!!」

千冬

「あれが単ワンオフ・アビリティ一仕様!?:馬型の支援機だと言うのか!？」

それはあくまで教師二人だけ…

セシリア、簪、本音の3人は…

セシリア

「炎の蠶の白馬…」
／／／

簪

「綺麗…」
／／／

本音

「ふわああ〜…」／／／

鈴

「あく…駄目だこりや…コイツ等…完全にのぼせてるわ…」

【轟焰】に跨る永遠の姿が3人には『白馬の王子』の様に見えていた
鈴はそんな3人を呆れ気味に見ていた

《アリーナ》

【轟焰】に跨り【偽暮桜】に駆けて行く永遠…

その姿は正に戦場を駆ける戦国武将そのものだった

永遠

「はっ!!」

再び【偽暮桜】を剣を交える永遠…

だが、先ほどと違い【ムラサメ】によって弱体化し、【轟焰】が永遠の動きをサポートしているので永遠が有利に立っていた

数度の打ち合いの後【轟焰】の後ろ蹴りを喰らい、【偽暮桜】は後方に吹き飛ばされた体勢を立て直した永遠に再びツルの声が響いて来た

ツル

『主！残り20秒です!!』

永遠

「承知!!」

〈ヒヒイイイイイーンツツ!!〉

カキキイーン!!

永遠がそう答えると、【轟焰】は嘶くと同時に前足を持ち上げた

そのまま蹄を鳴らすと、左右に炎の壁が生まれ永遠と【偽暮桜】を結ぶ一直線の道が出来た

それと同時に、永遠の持つ【オニマル】の刀身が2倍近い大きさになった

永遠

【轟焰】!!

永遠の呼び声と共に【轟焰】は腰に装備されているブースターを点火して【偽暮桜】に走って行った

一瞬で【偽暮桜】の懐まで来ると永遠は【オニマル】を振り下ろし【偽暮桜】を両断し、そのまま駆け抜けて行った

真つ二つにされた【偽暮桜】は爆発四散し、粉々に破壊された

〈ヒヒイイイイイーンツツ!!〉

第087話：自分のルール

く千冬 Sideく

千冬

「真耶!!すぐに医療班を向かわせろ!!!」

真耶

「は、はい!!」

アイツ…やはり無理をしていたのか…

一体どうやってあの傷であんな動きが出来ていたんだ…

鈴

「…あの…千冬さん…」

千冬

「何だ?」

鈴

「セシリア達がアリーナに行っちゃったんですけど…」

千冬

「……………放っておけ…」

鈴

「いいんですか？」

千冬

「構わん。戦いも終わった事だし、こんな状況では次の試合なんか出来はしない。
……………ああ、それから鈴。」

鈴

「何ですか？」

千冬

「悪いがオルコット達に伝言を頼む。」

鈴

「伝言？」

千冬

「火ノ兄の持つI Sを誰にも渡すな！とな。」

鈴

「え？」

千冬

「この戦いで火ノ兄は世界中から目を付けられただろう。…そしてアイツのI S…特に【戦国龍皇】は狙われる可能性が高い。私はこの後色々対応をしないといけないから、それが終わるまでアイツ等が持っていた方が安全だ。後で受け取りに行く伝えてくれ。」

鈴

「そう言う事ですか…分かりました!!」

…アイツ等の事は鈴に任せるとして…問題は…

真耶

「織斑先生！賓客の方達が火ノ兄君の情報を求めてきてます!!」

やはりそうなるか…

束が今まで火ノ兄の情報を遮断してきたからな…

千冬

「火ノ兄に関しては必要最低限の情報だけでいい！【ドットプラスライザー】と【ラインバレル】それに束との関係は絶対に言うな!!【戦国龍皇】に関してはまだ何も分かかっていないと伝えておけ!!」

真耶

「わ、分かりました!!」

…これで大人しくなればいいが…無理だろうな…

…ドイツの馬鹿共があんな物使わなければここまでの騒ぎにはならなかったと言うのに

く千冬 Side outく

くセシリア Sideく

セシリア

「ハア…ハア………永遠さん!!」

アリーナに着いたわたくし達が見たものは血塗れで倒れた永遠さんでした

セシリア

「永遠さん！永遠さん!!」

簪

「永遠!!」

本音

「永遠く!!」

わたくし達の呼びかけにも反応しません…

医療班

「皆さんどいてください!!」

担架を持った医療班の方達がやって来ると、永遠さんを担架に乗せて移動している途中で…

鈴

「…よかつた間に合った!!」

鈴さんがやってきました

簪

「どうしたの鈴?」

鈴

「ちよつと待つてくださいい!」

鈴さんは医療班の方達を引き留めると担架に乗せてあつた永遠さんの待機状態の本の刀をとりました

医療班

「君!何のつもりだ!」

鈴

「織斑先生からの指示です。永遠のISを確保しておけと。後で確認しても構いません。」

医療班

「織斑先生が?…分かった…」

医療班の方達はそう言つて永遠さんを連れていきました

セシリア

「鈴さん…どういう事ですか?」

鈴

「そのままの意味よ。永遠の機体…特に【戦国龍皇】を狙う奴がいるだろうから私達で確保しておけですつて。」

簪

「永遠の機体を!?!」

鈴

「そ…だからこれはあんた達が持つてて。」

鈴さんはそう言うのと…

わたくしに【戦国龍皇】を…

簪さんに【ラインバレル】…

本音さんに【ドットブラスライザー】を渡してくれました

鈴

「多分永遠は暫く動けないわ…だからその間はこの3機はあんた達が守るのよ！…特にセシリア…あんたに渡した【戦国龍皇】が一番狙われるわよ！」

セシリア

「分かってます!!これはわたくしの命にかけて守って見せます!!」

鈴

「その意気込みなら大丈夫ね♪…まあ、暫くすれば千冬さんが受け取りに来る筈だからそれまでの間よ。」

セシリア&簪&本音

「はい(うん)!!」

それでも…その時までこれは誰にも渡しません!

セシリア Side out

セシリア Side

簪

「チツ…鈴に先を越されたか…」

火ノ兄が動けなくなった今の内に【戦国龍皇】を手に入れようと思ったんだが…鈴の奴…余計な事を!!

問題の【戦国龍皇】はオルコットが持っているのか…

今のアイツはISを持っていないから力づくで奪う事も出来るが…アイツはいつも更識と布仏の二人と一緒にだから…いくら私でも専用機持ち二人を生身で相手にする事は出来ない…

まあ焦る必要はない…鈴が言っていた通り、今のアイツは当分動けないだろうから…
…機会はいくらでもある…

箒

「クククツ…待っている…【戦国龍】…いや…【戦国龍皇】!!」

…箒 Side out…

…千冬 Side…

さて…こいつ等をどう捌くかな…

賓客1

「織斑女史！彼は何者ですか!？」

賓客2

「男性操縦者がもう一人いるなど聞いた事が無いぞ!!」

賓客3

「あの二次移行した全身装甲のI Sは何なんだね?!」

喧しい連中だ…

千冬

「彼に関しては先程の説明以上の事は申せません。あの機体に関しては私達もまだ調査をしていませんのでココでは何も言う事は出来ません。」

賓客1

「あんな説明で納得出来る訳無いだろ!!」

賓客2

「分からないと言うなら我が国で調査する!彼とあの機体を預けてくれ!!」

賓客3

「貴様何を言っている!!それなら我が国でやった方がより詳しく分かる!!」

チツ!…こいつ等遂に本性を現したか…火ノ兄と【戦国龍皇】を自分達の国の戦力にしようという本音がダダ漏れだ…

しかも、私の前と言う事を忘れて言い合いを始めるとは…

このまま放っておいてもいいが、それはそれで問題だからな…

千冬

「申し訳ありませんがそう言った話は学園の外でやって下さい!!」

賓客達

「!?」

私が殺気交じりにそう言うのと一気に静まり返った

千冬

「二人目の事ですが彼はどこかの国が使った違法システムのせいで重傷です!! そう言った話は彼が話せるようになってから言って下さい!!」

賓客達

「……………」

賓客達の視線がドイツのお偉方に向いたか：

これでこいつ等の標的がドイツの馬鹿共に切り替わるだろ：

念の為、もう一押ししておくか

千冬

「それから、あの違法システムを積んだ機体はこちらで調査をした後、IS委員会と各国に報告します。操縦者は別としてあのシステムを積んだ連中にはそれ相応の責任を取って貰うのでそのつもりでいるように!!」

恐らくアイツ等はラウラに全ての責任を押し付けるつもりだろうがそうはさせん!

アイツがあんな物を望んで積んだとも思えんから、勝手に取り付けていたんだろう：

そいつ等に報いを受けさせてやる!

それに今頃は東が動いている筈…逃げる事も出来ない筈だ

千冬

「話は以上です!後は外でやって下さい!それでは、まだ仕事が残っていますので失礼します。」

言いたい事も言った事だし、とりあえずラウラの様子を見てくるか…

そろそろ目を覚ましているだろうしな…

火ノ兄はまだ手術中だろうから後でいいか…

その前にラウラの機体の調査結果を聞いてから行くか…

く千冬 Side outく

くラウラ Sideく

ラウラ

「…ううっ…」

…白い…天井…

ラウラ

「…ココは…何処だ?」

千冬

「目を覚ましたか？」

ラウラ

「きよ、教官…一体…何が？…ぐっ!?」

何だ？…体が…

千冬

「お前の体は全身に無理な負荷がかかった事で筋肉疲労と打撲がある。暫くはじつとしている。」

ラウラ

「何が…起きたのですか？」

私は激痛の走る体を見捨てて無理矢理上半身を起こした

千冬

「…一応…重要案件で機密事項何だが…お前は知ってもいいだろう…」

教官はゆっくりと話し始めた

千冬

「【VTシステム】は知ってるな？」

ラウラ

「はい、【ヴァルキリー・トレース・システム】…過去のIS操縦者の動きをトレースするシステムですよね？」

千冬

「そうだ、IS条約で研究、開発、使用の全てが禁止されているシステムだ。それがお前のISに積まれていた。」

ラウラ

「!?」

…私は言葉が出なかった…

そんな違法システムが私の機体に積まれていたなんて…

千冬

「調べたら巧妙に隠されていてな。機体のダメージ、操縦者の精神状態、願望等の条件が揃うと発動するようになっていた。」

それはつまり…

ラウラ

「あの時…私が望んだから…発動したんですね…」

千冬

「そう言う事だ…ただお前の機体の【VTシステム】は通常の物とは違っていたようだが

な……」

ラウラ

「え？……どういう事ですか？」

千冬

「お前を助け出す事は火ノ兄がやってくれた……だが問題はその後だ……」

火ノ兄！……アイツが私を助けてくれたのか!?

だが、その後と言うのは？

千冬

「お前を引きずり出した後、抜け殻になったお前の機体が勝手に動き出してな……」

ラウラ

「え……」

教官はその後の事も話してくれた……

暴走を始めた私の機体が火ノ兄を後ろから突き刺し切り裂いた事……

倒されたと思った火ノ兄が復活し、セカンドシフト二次移行した【戦国龍】で今度こそ私の機体を倒

した事……

千冬

「………と言う事だ……その後火ノ兄は力尽きて倒れてな、今は手術中だ。」

ラウラ

「…何故…アイツはそこまでしてくれたんだ…私はアイツを後ろから撃ちまでしたのに…そんな私を何故助けてくれたんだ…」

思い返してみれば、試合の間の火ノ兄は私に対して攻撃はしてこなかった…全て受け流すか防ぐだけだった…精々蹴り飛ばす程度しかしていない…

千冬

「……………『御剣の剣、即ち、時代時代の苦難から弱き人々を守ること』…」

ラウラ

「え？」

千冬

「ラウラ…お前がこの間、火ノ兄に負けた時にアイツが使った剣技…『飛天御剣流』の理だ。」

ラウラ

「理…」

千冬

「火ノ兄はその理から自分なりの答えを出し、それを自分の理…自分のルールにしている。それは自分の手の届く所にある者、大切な者を守る為に剣を振るうと言っていた。」

ラウラ

「…自分の…ルール…」

千冬

「あの時、お前は火ノ兄の手の届く場所にいた。だからアイツは自分のルールに従ってお前を命がけで助けたんだ。」

ラウラ

「……………」

千冬

「ラウラ・ボーデヴィツヒ!!!」

ラウラ

「はっはい!」

千冬

「お前は誰だ?」

ラウラ

「わ、私…私は…」

千冬

「誰でもないのなら、お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになれ!」

…私になれ…教官はそう言っておられるのか…
千冬

「それから、お前は私にはなれないぞ。」

最後にそう言つて教官は去つて行つた…

残された私は…

ラウラ

「…私は教官になれないか…そうだな…その通りだ…」

そんな当たり前の事に今更気づくなんて…

ラウラ

「…誰かになろうとしていた私が…自分自身であり続けたアイツに勝てる訳ないか…」

完敗だな…

だが…私は憑き物が落ちた様に清々しい気分だった

ラウラ

「…力も…心も…私の負けだ…フフツ…アハハハハハッ!!」

…私もアイツみたいに自分のルールを見つけられるだろうか…だが…

ラウラ

「…まずは…アイツに謝罪と感謝を伝えるか!!」

それが私が最初にする事だな!!

ラウラ

「……………だが…あの3人が何と言うかだよな…」

私は火ノ兄といつも一緒にいる3人の顔を思い浮かべていた…

ラウラ

「…覚悟して行くか…」

くラウラ Side outく

第088話：廃棄品と完成品

シヤルル Side

一夏

「トーナメント…中止になっちゃったな…」

シヤルル

「そうだね…でも、生徒のデータを取りたいから1回戦は全部やるらしいよ。」

僕は今、一夏と一緒に食堂で休憩している

あの後、トーナメントは中止になってしまった…

理由は勿論、第一試合の戦いが原因だった…

あの戦いで火ノ兄君は瀕死の重傷を負って今は手術中…

先生達はその対応と後始末に追われている…

シヤルル

「…それにしても…」

一夏

「ん？どうかしたのか？」

シャルル

「…うん…火ノ兄君…大丈夫かなって…」

一夏

「…相当な深手だからな…あんな傷でどうやって戦えたんだろうな…」

シャルル

「本当にね…アレ…普通は死んでる傷だよ…」

一夏

「そうだな…まあ、今はオルコット達がついているから…何かあればアイツ等が騒ぐだろう？」

シャルル

「確かにね。…ところで一夏…」

一夏

「何だ？」

シャルル

「…今夜…父に連絡を取ろうと思うんだ…その時、一緒にいてくれないかな？」

トーナメントが始まる数日前、織斑先生が父と本妻のスケジュールを教えてくださいました…それを確認したら、今夜は本妻の方は国外に出ている、父は一人で本社にいる事が分

かった…

今日を逃すと父と二人で連絡を取る時間は他に無かったんだ…

一夏

「分かった!」

シャルル

「…ありがとう…」

…父の本心を知る事が出来る最初で最後の機会…

…必ず、聞き出してみせる!!

僕がそう意気込んでいると…

真耶

「織斑君、デュノア君、朗報ですよ〜♪」

山田先生がやって来た…

シャルル

「あれ?今忙しいんじゃないんですか?」

真耶

「少し落ち着いてきたんですよ。」

シャルル

「そうなんですか…それで何が朗報なんですか？」

真耶

「あ、はい…実はですね、男子の大浴場の使用が今日から解禁になりましたよ♪」

一夏

「なっ何だってー！ーっ!?!」

大浴場が使えるって…僕は女だよ!?

って山田先生は知らなかったんだ!

とりあえずココは誤魔化しておこう!

シャルル

「あ、ありがとうございます。後で使わせて貰いますね。」

真耶

「はい♪では私はこれで…まだ仕事が残ってますので。」

一夏

「…あの!山田先生!」

真耶

「はい?」

一夏

「…火ノ兄の容体は…」

ザワ…

一夏の質問に周りにいた他の生徒達も反応した…
皆も気になってたんだ…

真耶

「…手術は終わりました…ですが…まだ目を覚ましてはいません…執刀医の先生は生き
ているのがおかしいと言ってました…今はオルコットさん達が看てくれます…」

一夏

「…そう…ですか…」

真耶

「…ではこれで…」

山田先生が去った後の食堂は静まり返っていた…

一夏

「…やっぱりアイツの傷は深かったんだな…」

シャルル

「…うん…先生まであんな事言う程の傷だったんだね…」

本当にあの時どうやって動いてたんだろ…

…でも、僕には今は父との連絡の方が大事だな…

〜シャルル Side out〜

〜セシリア Side〜

セシリア

「……………永遠さん…」

わたくしは簪さんと本音さんと一緒に永遠さんの病室にいました…

永遠さんの手術は終わったのですが…その傷は深く…まだ目を覚ましません…

簪

「……………」

本音

「このまま目を覚まさなかつたら…」

セシリア&簪

「本音(さん)!!」

本音

「(い)、(い)めん?!」

セシリア

「いえ…わたくしもしもいきなり怒鳴ってすみませんでした…」
簪

「…私もごめん…でも本音…」

本音

「…うん…それは言ったらダメだよね…」

それから、わたくし達は永遠さんの看病を…と言つても、ただ横にいる事しか出来ないのですが…続けていました…

暫く時間が経ちますと…

コンコン…

扉を叩くが聞こえてきました

セシリア

「…どうぞで。」

千冬

「失礼するぞで。」

入ってきたのは織斑先生でした…ですがその後ろには…

ラウラ

「…失礼する…」

セシリア&簪&本音

「ラウラ・ボーデヴィツヒ!!」

ラウラ

「……………」

永遠さんをこの様な状態にしたそもそもの原因：ラウラ・ボーデヴィツヒがいました

!

セシリア

「…何しに来ましたの?」

簪

「…永遠への仕返し?」

本音

「…それなら私が相手になるよ!」

わたくしと簪さんは預かっていた永遠さんの刀に手をかけました

そして、本音さんも刀に手をかけたのですが、空いている手で首にかけてある待機状態の「ワイバーン・ガイア」に触れていました

ラウラ

「ま、待ってくれ!!」

千冬

「…落ち着けお前達…こいつがそのつもりなら私が連れてきたりはしない…それに布
仏、お前が機体を展開したら病室が潰れるだろ。」

セシリア&簪&本音

「……………」

セシリア

「…分かりました…」

わたくしはそう言うのと刀から手を放しました…

簪さんと本音さんも同じ様にしていました

簪

「…それで何の用?」

ラウラ

「…火ノ兄に…その…今迄のしや、謝罪と…助けてくれた事への感謝を…伝えに…」

セシリア

「…何ですって?」

簪

「貴方…自分が今まで何をしてきたと思ってるの!!」

ラウラ

「!?」

セシリア

「……いくら織斑先生の言葉が原因とは言え……無関係の永遠さんに勝手に因縁をつけて目の敵にして襲い掛かって……その結果、永遠さんをこのような状態にした貴方が……今さら謝罪ですって!!」

簪

「貴方があんなシステムを動かさなければ永遠はこんな事にはならなかった!」

ラウラ

「……その……通りだ……だから……謝りに来た………すまなかった!!」

セシリア&簪&本音

「……………」

千冬

「……こいつはお前達に非難されるのも覚悟でココに来たんだ……それだけは分かっちゃつてくれ………それから………確かにこいつの行動は私のせいでもあった……スマン……まさかこんな事になるとは思わなかったんだ……」

セシリア&簪&本音

「……………」

千冬

「…本当にスマン…」

本音

「……………分かった…」

セシリア&簪

「本音（さん）!？」

本音

「…でも、謝るのは永遠が目を覚ました時に言って…それで永遠が許したら私も許す…だから…永遠が許すまで私は貴方を許さない!!」

ラウラ

「……………」

千冬

「…そうか…オルコット…更識…お前達は？」

セシリア

「…わたくしもそれでいいですわ…」

簪

「…私もです…」

ラウラ

「…すまない…」

わたくし達の間での話は一先ず落ち着いたのですが…

ドドドドドド…

セシリア&簪&本音&千冬&ラウラ

「ん？」

何かがこちらに向かって来る様な音が聞こえてきました

バタンツ!!

クロエ

「兄様あああああーっ!!!」

セシリア&簪&本音

「クロエさん!?!」

何でココに!?!

クロエ

「【戦国龍皇】のデータ収集が一段落したので急いで飛んできました!!」

千冬

「…やはり束も知っていたか…」

クロエ

「はい！それで千冬様！兄様の容体は!?!」

千冬

「…見ての通りだ…傷の治療は終わったがまだ目を覚まさない…」

クロエ

「…そうですか………ではこれを使ってください!!」

クロエさんは懐から一粒のカプセルを出しました

千冬

「何だこれは？」

クロエ

「これは束様が造った医療用ナノマシン入りのカプセルです！コレを兄様に飲ませればこんな傷すぐに直ります！」

千冬

「…それはありがたいが…どうやって飲ませる気だ？」

クロエ

「……………え？」

セシリア

「クロエさん…今の永遠さん…カプセルなんか飲めませんわよ…」

クロエ

「あ………ちよ、ちよつと待つて下さいね!？」

クロエさんはそう言つて近くにあつた注射器を使って何かをし始めました

クロエ

「…出来ました!注射器にナノマシンを入れたので兄様の体に直接注入出来ます!!」

千冬

「…本当に大丈夫なのか?」

クロエ

「大丈夫です!!」

千冬

「…まあお前がそう言うなら…やってみるか…」

織斑先生はナノマシン入り注射器を受け取ると永遠さんに注射しました

千冬

「終わったぞ。」

クロエ

「これで兄様は大丈夫です!!」

千冬

「そうか…所で東の奴はいつの間にこんな物を造ったんだ?【ラインバレル】の研究の成果か?」

クロエ

「いえ違います。これは【ラインバレル】の研究を始める前に造った物です。【ラインバレル】とこの医療ナノマシンは似ているようで全く違いますから。」

千冬

「…そうなのか…」

クロエ

「はい…それで…兄様をこんな姿にしたのは誰ですか…」

やっぱり聞きますわよね…

くセシリア Side outく

く千冬 Sideく

…うくむ…何と言うべきか…

とりあえず、探してる奴はココにいるんだが…

ラウラ

「…私だ…」

クロエ

「貴方ですか!?!…って貴方は!?!」

ラウラ

「?」

クロエ

「よりもよって貴方が兄様を…」

千冬

「クロニクル…お前コイツを知ってるのか?」

クロエ

「…貴方の名前は?」

ラウラ

「ラ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ…」

クロエ

「やはりそうでしたか…:…:私は貴方です。」

ラウラ

「えっ!？」

クロニクルがラウラだと？

千冬

「どういう事だ？お前がコイツと言うのは？」

ラウラ

「ま、まさか…お前は!？」

ん？ラウラはコイツの言う事が分かるのか？

クロエ

「…そう、私は貴方の失敗作…ラウラ・ボーデヴィツヒになれなかった『廃棄品』です…」

セシリア&簪&本音&千冬

「!？」

千冬

「ラウラの…廃棄品だと!？」

クロエ

「…私達の生まれからすれば貴方は私の妹という事になりますね…」

千冬

「い、妹!？」

クロエ

「千冬様は彼女の出生をご存知ですか？」

千冬

「い、いや…そこまでは知らないが…」

クロエ

「ではお教えしましょう。私と彼女はドイツで生み出された遺伝子強化試験体…簡単に言えば試験管ベビーです。」

セシリア&簪&本音&千冬

「なっ!？」

千冬

「ラウラー！本当なのか!？」

ラウラー

「…はい…」

アイツ等！〔VTシステム〕だけでなく、そんな事にまで手を付けていたのか!？」

クロエ

「ですが、その過程で必要最低限の能力を持たなかった者、体に何かしらの異常があった者は失敗作として廃棄されていたのです。私もその廃棄品の一人として処分されたの

ですが、そんな私を束様が拾ってくださり、『クロエ・クロニクル』と言う名をつけてくださいました。」

セシリア

「そ、そんな!?!」

簪

「酷い!?!」

本音

「でも何で姉妹なの?」

クロエ

「私と彼女は同じ遺伝子情報を元に生み出されたからです。そして私の方が早く作り出されたので私が姉という事になるんです。」

…そうか…だからこの二人はこんなに似ていたのか…

ラウラ

「ね、姉さん?」

クロエ

「先程は貴方を妹と言いましたが、それは皆様に説明する為…私は貴方と姉妹だなんて認めていません。」

ラウラ

「な、何で!？」

クロエ

「貴方は私の成れなかった完成形…貴方と姉妹と認めてしまえば私は『クロエ・クロニクル』では無く、『ラウラ・ボーデヴィツヒの失敗作』になってしまふからですよ。」

ラウラ

「!？」

クロエ

「束様に拾われ名前を付けて貰った事も…永遠兄様が妹にしてくれた事も…全て『クロエ・クロニクル』と言う一人の人間です。私はもう昔の自分に戻りたくないんですよ。貴方の廃棄品と言う負の産物には…貴方の影になるのは…嫌なんですよ!!」

ラウラ

「!?……………貴方が…私の影…」

クロエ

「分かったら二度と私を姉などと呼ばないでください!」

ラウラ

「……………」

?

「……クロエ……そう嫌うでない……」

全員

「!?」

セシリア

「永遠さん!?!」

簪

「目を覚ましたの!?!」

本音

「良かったよ♪」

永遠

「何とかな……」

「……明らかに無理をしているな……いくら束のナノマシンでもあれだけの傷がこんな短時間で塞がると思えん……」

「……クロニクルの為か……」

クロエ

「兄様……」

永遠

「…クロエ…そうチビツ子を拒絶するな…お主を捨てたのはドイツの馬鹿共であつてチビツ子では無かろう?」

クロエ

「で、ですが!?!」

永遠

「折角会えた妹じゃろう?」

クロエ

「違います! 私の家族は束様と兄様だけです! 私は二人がいてくれればそれでいいんです!! 私に妹なんかいません!!」

永遠

「クロエ!!!」

クロエ

「!?!?!に、兄様…」

千冬

「そんな大声を出すな! まだ傷は塞がってないんだぞ…」

永遠

「つはあ……はあ……いいかクロエ……チビツ子はお前の妹じゃ。たった一人の……血の繋がった姉妹……家族なんじゃ……」

ラウラ

「!?」

クロエ

「で、でも……認めてしまったら私は……今まで犠牲になった姉妹達は……」

永遠

「……お前達が仲違いして……犠牲になった姉妹達が喜ぶと思うのか……」

クロエ

「!?」

永遠

「……それにな……ワシにとってクロエはクロエじゃ……チビツ子の失敗作だの影だの知った事では無いわい……お主はワシの妹……クロエ・クロニクルじゃ……それ以外の何者でも無い!!」

クロエ

「……にい……さま………兄様あああああ………!!!」

千冬

千冬

「……これは当分目を覚まさんな………とりあえず……ラウラ、クロニクル……火ノ兄の言つたように屋上にでも行つて話して来い。」

クロエ&ラウラ

「……はい……」

千冬

「それからクロニクル……悪いが帰る時に私の所に来てくれ。預かつて欲しい物がある。」

クロエ

「……分かりました。」

二人は揃つて病室から出て行つたか……

……あの二人……本当の姉妹になればいいんだが……

後は当人達に任せるしかないな……

さて、色々あつたが私がココに来た目的をやるとするか

セシリア

「織斑先生……クロエさんに預ける物と言うのは……」

千冬

「ああ、それは更識と布仏が持つ火ノ兄のISだ。」

簪

「【ラインバレル】と…」

本音

「【ドットブラ斯拉イザー】ですか？」

千冬

「そうだ。鈴から聞いていると思うがコイツは今回の件で世界中から目を付けられた。今迄は東が情報操作していたお陰でコイツの事は外に漏れてはいなかったが、それも完全にバレてしまった。だからお前達にその3機を事前に確保させておいた。」

セシリア

「はい…」

千冬

「あの後、案の定私達の所に火ノ兄の情報を教えろと各国のお偉方がやってきてな。とりあえず必要最低限の事しか教えてはいない。そして秘匿した情報の中にはその2機も含まれている。」

簪

「…何となく分かりました…各国に【ラインバレル】と【ドットブラ斯拉イザー】の存在がバレる前に東さんの所に隠そうと言う事ですね？」

千冬

「そうだ、連中が生徒達から話を聞けばこの2機の存在はすぐにバレる。だからその前にアイツに預けておくのが一番安全と判断した。それに束ならこの2機を悪用する事も無いだろう。」

するつもりならとつくの昔にやっっているからな…

セシリア

「確かにそうですわね…特に「ラインバレル」の能力はある意味「戦国龍皇」以上に危険ですわ…その気になればこの機体だけで世界中の重要施設を破壊する事も可能ですもの…」

簪

「それに「ドットプラスライザー」もだよ。変形や合体は色々と応用も効く機能だし！」

千冬

「そう言う事だ…まあ【転送】に関しては束でさえ解析出来ないみたいだから量産される事は無いだろうが…」

簪

「どちららも奪われたら危険という事ですわね？」

千冬

「その通りだ。そう言う訳で私はその3機を受け取りに来たんだ。クロニクルが来たのは丁度良かったからアイツに預ければいいだろ。」

本音

「あのくそれで【戦国龍皇】はどうするんですか〜?」

千冬

「今からこつちで解析作業を始める。それが終わったら【戦国龍皇】も束に預けるつもりだ。それに、アイツも実物を解析したいだろうしな。」

セシリア&簪&本音

「あははは…」

3人揃って乾いた笑いをしておって…【戦国龍皇】を解析したくてうずうずしている束の姿が目に見えかねたんだらうな…私もそうだが…

出来るだけ早く解析を済ませておきたいな…

『あの馬鹿』が何を仕出かすか分からんからな…

とりあえず、私はオルコット達から3本の刀を預かって病室を後にした

く千冬 Side outく

第089話：クロエとラウラ

ラウラ Side

私は今、自分の姉と呼べる人と共に屋上に来ている…

教官と火ノ兄に言われたように二人だけで話す為だ………だが…

ラウラ

「………」

…一体何を話せばいいんだ…

私が話のキツカケに悩んでいると…

クロエ

「…ラウラ様…」

ラウラ

「!?…は、はい！」

向こうから話しかけてくれた…だが…

『ラウラ様』…か…

クロエ

「まず先に言っておきます。私は貴方が嫌いですが、私の存在理由もそうですが、永遠兄様をあのような目に合わせた貴方を私は許す事が出来ません。」

ラウラ

「……………そう…です…ね…」

この人の言う通りだ…

オルコット達でさえ私を許さないと言ってるんだ…

火ノ兄の妹でもあるこの人が許すわけが無い…

クロエ

「兄様は私に始めて家族と言うものを教えてくれた方です。」

ラウラ

「…家族…」

クロエ

「そうです。その兄様を…よりもにもよつてもう一人の私とも言える存在の貴方が殺そうとするなんて思つても見ませんでした。」

ラウラ

「そ、それは!?!」

クロエ

「最終的には貴方の機体の暴走で兄様は傷付きました。ですが、それ以前から貴方は兄様に敵意を剥き出しにしていましたよね？」

ラウラ

「うっ…その…通りです…」

やっぱり知っていたのか…

クロエ

「兄様が貴方に何かしたんですか？ 貴方に敵意を向けられる様な事をされたんですか？」

ラウラ

「…それは…何も…していません…」

…そうだ…アイツは私に何もしていない…

…私が火ノ兄に敵意を持っていたのは教官が自分より火ノ兄が強いと言っていたからだ…

…私はそれが認められずにアイツに一方的に因縁をつけていたんだ…

クロエ

「でしようね。兄様は人の恨みを買う様な事かもしれませんが意味も無く売る人ではありませんからね。…それにしても…随分迷惑な人ですね…貴方…」

ラウラ

「ううっ……」

クロエ

「まあ、貴方の行動のいくらかは千冬様が原因ですから、貴方だけを責めると言う事は私
はしませんよ。」

ラウラ

「……………」

クロエ

「そう言えば……何故貴方は兄様の病室にいたんですか？寝込みを襲って仕返しをしよう
としたのですか？」

ラウラ

「ち、違います!？」

クロエ

「え？違うんですか？貴方ならそのくらい平気でやると思いましたが？」

…否定出来ない…

ラウラ

「…ただ私は…アイツに謝ろうと…」

クロエ

「謝る？」

ラウラ

「…はい…後…助けてくれたお礼も…」

クロエ

「お礼ですか？」

ラウラ

「は、はい…」

クロエ

「そうですか…セシリア様達は何と？」

ラウラ

「…火ノ兄が許すまで許さないと…火ノ兄が許せば自分達も許すと言いました…」

クロエ

「フツッ♪あの方達らしいですね♪…では私もそうしましょう。」

ラウラ

「え？」

クロエ

「兄様が貴方を許せば私も今回の件は許しましょう。あくまで今回の事です。」

それはつまり…私達の関係に関しては別という事か…

だが…それでも…

ラウラ

「…ありがとうございます…」

クロエ

「お礼を言うなら兄様に先に言ってください。もともと私のせいで何時目を覚ますかまた分からなくなりましたが。」

ラウラ

「……………はい…」

クロエ

「…まあ兄様なら貴方が反省しさえすれば笑って許すとは思いますが…（あの人は基本、超が付くほどお人好しで能天気な人ですからね）…では、兄様の事はこれでいいです。」

……………後は…」

ラウラ

「……………」

クロエ

「…私たち自身の事ですね…」

いよいよか…だが…

………私は…この人とどうなりたいんだ？

く라우ラ Side out

くクロエ Side

さて…どうしましょうか…

兄様はあの時…

クロエ

「…犠牲になった姉妹は喜ばない…ですか…」

라우ラ

「…え？」

クロエ

「そうですね…確かに貴方を拒んだところで皆が帰って来る訳でも無いですし…ドイツの馬鹿共が捕まる訳でもありませんからね…それにあの国に対してはもうどうでもいいですし…」

アレ?…そう考えるとなんだか…

クロエ

「……………貴方を恨んでた自分が阿呆らしくなってきましたね…」

ラウラ

「へ？」

クロエ

「まさか兄様はそれに気付かせる為に？…いえ、アレはただのお説教ですね！うん！そのうに違いありません！」

取り合えず自己完結をする事にして…

ラウラ

「……………」

彼女との関係はどうしましょうか？

ラウラ

「……………あ、あの…」

クロエ

「はい？」

ラウラ

「い、今仰った事は…その、本当なのですか？」

クロエ

「今、と言うのは？」

ラウラ

「だから…私を恨むのが阿呆らしいと言うのは…」

クロエ

「ええ、本当ですよ。何だかどうでもよくなってきました。ああでも貴方が兄様を傷付けた事に関しては許してませんよ。それとこれとは別問題ですから。」

ラウラ

「は、はい…」

クロエ

「ではどうでもよくなったので聞きますが…貴方は私をどうしたいんですか？」

ラウラ

「どうしたいか…」

クロエ

「私と家族になりたいですか？それとも自分の廃棄品を始末しますか？」

ラウラ

「し、始末なんて考えていません!!」

クロエ

「そうですね。」

まあ仮にそのつもりだとしても彼女の實力では私は殺せませんけどね

私も伊達に東様の助手と兄様の妹をやってはいません

この1年の間に兄様に稽古をつけて貰っていますから下手な軍人には負けませんし、東様から頂いたI Sもあります…

そう考えると……

私は…家族に思われているんですね…

東様はI Sを…兄様は戦う術を…私に与えてくれた…

私を…守る為に…

私は…愛されているんですね…

クロエ

「フフツ♪」

そう思うと嬉しくなりますね♪

ラウラ

「?…あ、あの…」

クロエ

「ああすみません…思考がズレました…」

さて、始末する気は無いと言いますが…

クロエ

「では家族になりたいんですか？」

ラウラ

「…それは…分かりません…ですが貴方に危害を加えるつもりはありません！それだけは断言出来ます！」

フム…この眼は本気で言ってますね…

クロエ

「では暫くは現状維持にしましょうか？私もああは言いましたけど行き成り妹が出来たなんて言われてもすぐには受け入れられませんからね。」

兄様はアツサリ受け入れてくれましたけど…

私にはすぐには答えられませんよ…

クロエ

「それに私は貴方の存在自体は知っていましたが貴方がどういう人間かと言われたら…貴方は私の家族を逆恨みで傷つけた傍迷惑な人と認識しています…私達の出生は別にしてもそう簡単に受け入れられませんよ…」

ラウラ

「!?…そう、ですね…私は…そう思われる事をしてきたんですよ…」

クロエ

「はい、それに貴方は私の事を何も知らないでしょう?」

ラウラ

「…はい…」

クロエ

「ですからまずは少しずつお互いを知る事にしましょう。それに家族になるにしても兄様が貴方を許さなければそれも出来ませんからね。貴方にそのつもりがあればの話ですけど、それは別にしてもそのくらいしか今は出来ません。」

ラウラ

「…そうですね…」

クロエ

「では今日はこのくらいにしましょう。」

まあこれが仲直りと言うのかは分かりませんが、蟠りが一つ消えたのは本当ですし、今はこれで良しとしましょう

クロエ

「それでは私はこれで失礼しますね。」

…あ！そう言えば千冬様が預かって欲しい物があると云ってましたね
帰る前に千冬様の所に行かないといけませんね

くクロエ Side outく

くラウラ Sideく

ラウラ

「……………はあ……………」

あの人が帰って一人屋上に残った私は深い溜息を吐いた

それがあの人の蟠りが一つ消えた事への喜びなのか…和解への先が長い事への不安から来たものなのか…私には分からなかった

だが…

ラウラ

「…家族か…羨ましいな…」

あの人と話しをして、そして先程の火ノ兄とあの人のやり取りを見てそう思った…

同じ『ラウラ・ボー・デヴィツヒ』として生まれながら完成品の私には家族はいない…

だが失敗作として廃棄されたあの人には家族がいる…

私の廃棄品として捨てられ篠ノ之の博士が拾ったのは偶然なんだろう

でもあの人はそんな篠ノ之博士から名前を貰って育てて貰った

そして火ノ兄と出会い兄妹になる事で家族を手に入れたんだ

あの人は…人間だ…

私の失敗作なんかじゃない…あの人は…人間なんだ!!

だが…私は…違う!!

今なら分かる…私は…ISを効率よく動かす為のパーツだったんだ!

だから私のISに「VTシステム」が積まれていた

私は所詮…使い捨ての部品だったんだ…

ラウラ

「…教官の言う通りだ…私はISに選ばれたと思つて気取つていただけだ…」

私はいつの間にか自己嫌悪に陥つてしまつていた

私があるままま悩んでいると教官に言われた事を思い出した

ラウラ

「…私になれ、か…もしかして教官は人間になれと言う意味も込めてああ言つてくれたんだらうか?」

もしそうだとしたら…

ラウラ

「私も…なれるだろうか…部品ではない…ただの人間に…」

私はいつの間にか教官に言われた言葉を勝手にそう解釈していた

そしてこれからどうするか、どうなりたいかを考えた結果…

ラウラ

「私は…あの人の…クロエさんの妹になりたい!!」

そう決めた!

その為にもクロエさんにとっての良い妹にならねば!!

ラウラ

「…ん?」

あ、そう言えば…

ラウラ

「そうだ!クロエさんの妹になるという事は火ノ兄の妹にもなる訳だ!!」

そうか!私がクロエさんと姉妹になれば火ノ兄との3兄妹になるんだ!

ラウラ

「よし!!これからは心を入れ替えてあの2人の妹に相応しい人間になろう!!」

…だがそうなる…

ラウラ

「あの2人を何と呼べばいいんだ？クロエさんは火ノ兄を兄様と呼んでいたが同じ呼び方は悪い気がするし……うくん……」

私は2人の呼び方を考えたがいい呼び方が思いつかなかった

なので……

ラウラ

「……仕方無い……アイツに頼るか！」

とりあえず部下の1人に相談する事にした

ラウラ Side out

第090話：父の願い・娘の決意

「シャルル Side」

シャルル

「……………時間だ……」

僕は時計を見ながらそう呟いた……

隣にいる一夏も頷いた

僕はこれから父に連絡しようとしていた

火ノ兄君から父の本心を確かめると言われてどうすればいいか考えていたら一夏が織斑先生を経由して篠ノ之博士に父のスケジュールを調べてくれた

そして今が父が一人でいる時間だった

それを狙って父と話そうとしたんだ……

でも……

シャルル

「……………」

一夏

「…シャルル…」

僕は中々電話を掛けられなかった

父と話して、父も本妻と同じ考えかもしれないと思うと怖くて携帯のボタンを中々押せなかった

シャルル

「ううっ…」

僕は震える指で番号を押していった

そしてあと一つと言う所まで来たけど最後のボタンが押せなかった

その時…

一夏

「大丈夫だ!!」

一夏が僕の肩を叩いて励ましてくれた

一夏

「シャルル…俺は…火ノ兄の言う通り口先だけの男かもしれない…でも…今だけはお前を支える!どんな答えが来ても俺も一緒に受け止めてやる!!」

シャルル

「一夏……」

一夏の励ましを聞いているといつの間にか体の震えが止まっていた
シャルル

「……ありがとう!!」

そして僕は……最後のボタンを押した!

それから少しすると……

ガチャ!

?

「誰だね?」

父に繋がった……

くシャルル Side outく

くデュノア社長 Sideく

デュノア社長

「……………」

久しぶりだな……こんなに落ち着いた時間は……

いつもアイツか、アイツの息のかかった奴の目があったからな……

いや、今も目はあるか…

この社長室には無数の監視カメラと盗聴器が仕掛けられているからな…監視されている事には変わりはないか…

だが…それでも今は周りに誰もいない…

一人でいる事がこんなにも心の休まる瞬間とは皮肉なものだな…

デュノア社長

「…上手くいつているだろうか…」

そして私はIS学園にスパイとして送り込んだ娘の事を考えていた

本当はあの子にこんな事をさせたくなかったがアイツに逆らえない私にはどうしようもなかった

だが、同時にこれはチャンスでもあった

あの子だけでも解放させる僅かなチャンスが…しかし、その為にはシャルロット自身にも動いて貰わなければならぬ…

何とかそれを伝える事が出来れば…

クソツ!!既に下準備は出来ていると言うのに最後の一手が打てないとは…

これほど歯がゆいとは…

そんな事を考えていると…

P r r r r

デュノア社長

「ん？」

突然私の携帯が鳴った

私はどうせアイツからだろうと思ひ、うんざりしながら携帯の画面を見た

デュノア社長

「!？」

だが相手はアイツじゃなかった：

私は必死に声を抑えた

何故なら相手は私が思い続けていた娘：シャルロットからだつた

私はすぐにでも出ようとしたがそれを抑えた

色々と疑問が出て来たからだ：

何故この時間にかけて来た：

定期報告の時間では無い：

しかもアイツがいない一人の時にかけて来た：

まさか：狙つて掛けて来たのか？

そんな疑問が頭の中を駆け巡つた

だが、私はそんな考えをすぐに捨て去った

何故ならこれは絶好の機会だ!!

だが、この電話もあいつ等に盗聴されている筈…下手な事は言えない…

ならば私に出来るのは上手くあの子をあそこに連絡するように誘導する事のみ!

その為なら…あの子が解放される為なら…私は娘に軽蔑されても構わん!!

意を決した私は電話に出た…

デュノア社長

「誰だね?」

スマナイ…シャルロット…

くデュノア社長 Side outく

くシャルル Sideく

デュノア社長

『誰だね?』

…久しぶりに聞いた父の声はとても冷たかった…

シャルル

「シ、シャルロットです…」

デュノア社長

『ああ、『シャルル』か…』

…シャルル…か…

デュノア社長

『こんな時間に何の用だ？定期報告の時間では無いぞ？』

シャルル

「お、お父さんと…少し話したくて…」

デュノア社長

『!?!』

?…何だろ、今の反応？

デュノア社長

『…こちらには無い。それに私は忙しい。下らない事で連絡などしてくるな。私が聞きたいのは【白式】のデータを手に入れたと言う報告だけだ。』

…やっぱり…駄目みたいだな…

シャルル

「…そう…ですか…失礼しました…」

僕はそう言って電話を切ろうとした

でもその時…

デュノア社長

『ああ少し待て。』

あの人が止めた

何だろうか？もう僕には用なんか無い筈だけど…

デュノア社長

『私に話があると云ったな？』

シャルル

「え？あ、はい…」

もしかして話をする気になったのかな？

デュノア社長

『私は今言ったように忙しい。お前の任務について何か分からない事が出来たのなら丁度そつちに私の部下がいるから彼女に聞いて貰え。連絡先は後で送る。彼女が聞いても対処出来ない様なら改めて私に連絡しろ。』

シャルル

「…はい…」

違った…

デュノア社長

『…ではこの後すぐに送る。』

P i !

最後にそう言つて電話を切られた…

そしてすぐにさつき言つてた連絡先のメールが送られてきた

僕は送られてきたメールをぼんやり見ていると…

一夏

「シャルル…大丈夫か？」

シャルル

「大丈夫…とは言えないね…」

一夏

「…だよな…」

僕がこれからどうしようか考え始めると…

一夏

「なあシャルル…今送られてきた連絡先に一度連絡してみないか？」

シャルル

「え？」

一夏があの人から言われた人に連絡しようと言いだした

シャルル

「何で？」

一夏

「ああ、俺の気のせいかもしれないけどお前の親父さん…シャルルをそこに連絡させようとした感じに聞こえたんだよ…」

シャルル

「え…」

そう言われると…そう思えるな…

でも何故？

僕は改めて送られたメールを見て…

シャルル

「…そうだね…一度連絡してみようか？」

連絡する事にした

僕は早速そこに電話をかけてみた

シャルル Side out

く一夏 Sideく

シャルルは俺の提案の乗って親父さんから送られた場所に電話をかけた
そして…

シャルル

「もしもし…」

?

『はい…どちら様ですか?』

繋がるとシャルルはスピーカーに変えて俺にも聞こえる様にしてくれた
そして聞こえて来たのは女性の声だった

シャルル

「あ、あの…僕…シヤ、シャルロット・デュノアと言います…」

女性

『デュノア様ですか!?!』

シャルル

「は、はい…そうです…」

何だ?

シャルルが連絡した事に凄く驚いてるみたいだけど…

女性

『行き成りで失礼ですが何故私に連絡を?』

シャルル

「父から…社長から…相談があるならココに連絡しろと言われて…」

女性

『…社長からココに連絡される様に言われたんですね?』

シャルル

「は、はい!そうです…」

女性

『少々お待ちください。』

?…:妙に社長からつてところを強調してる様な…気のせいかな?

それから暫く待つていると…

女性

『お待たせしました!…お待ちしておりました…『シャルロットお嬢様』!!』

一夏&シャルル

「…え?」

シャルロット…お嬢様!?

く一夏 Side outく

くシャルル Sideく

シャルル

「あ、あの…今なんて…」

女性

『はい、お嬢様と呼びました。』

お嬢様!?

何で僕をそんな風と呼ぶの？

シャルル

「どうして僕を…」

女性

『貴方は社長のたった一人のご息女…それならばお嬢様と呼ぶのは当然ではありませんか。』

シャルル

「で、でもあの人は僕を…僕を…娘だなんて思っていない…」

女性

『…やはりそう思われておられたんですね…』

シャルル

「え？」

女性

『お嬢様…社長は貴方の事を一人の娘として愛しておられます。』

シャルル

「……………え？」

僕を…愛してる？

シャルル

「な、何を言ってるんですか!？」

女性

『そう思われるのは仕方ありません…ですが社長は常に貴方の事を想っています…』

シャルル

「で、でも…」

女性

『社長の貴方への態度の事を言いたいのでしようがアレはワザとです。』

シャルル

「え？」

女性

『落ち着いて聞いて下さい……社長は……』

そして女性は話してくれた……

あの人の……父の本心を……

父は火ノ兄君の言う通りやはり飾り物になっていた

常に監視され、一人でいても監視カメラや盗聴器で行動を監視されていた

つまり僕がさつき電話をした時も本妻達の耳があつたという事……

そんな父も僕と死んだお母さんにだけは本妻達が手を出さないようにしてくれていたそうなんだけど、母が死んだことをきっかけに僕を連れて来てしまった

父は僕と親子として接すれば本妻が僕に何をするか分からないと考え、他人の様に接する事を決めたそうだ

そして僕がIS学園にスパイとして送り込まれる事が決まった際、父は僕だけでも解放しようと考え、それを利用して僕を日本に『亡命』させようとした

父は……火ノ兄君と同じ事を考えていたんだ……

この女性はそんな父の命を受け、日本に転勤と言う形でやって来て、僕の亡命の為に手続きをしてくれていた

しかも父は秘密裏に母のお墓も日本に移していたそうだ

シャルル

「…お、父…さん…」

女性

『お嬢様…社長を父と呼んで下さり…ありがとうございます…』

僕が父と呼んだことを感謝した

そうか…さつき電話した時に僕が『お父さん』と言った時の反応はこういう事だったんだ

女性

『……ではお嬢様…次の休みの日にこちらにお越しください。後はお嬢様のサインを頂ければ全て終わります。』

シャルル

「…はい…分かりました…」

女性

『では、お待ちしております。』

Pii!

電話を切ると…

シャルル

「うっ……ううっ……うわああああああああああああああんっ!!!」

僕は隣にいた一夏の胸に飛び込んで大声で泣いた……

僕を……お母さんを……愛してくれていた事が嬉しくて泣いた

泣き続ける僕を一夏は何も言わずに背中を擦ってくれた

シャルル Side out

一夏 Side

シャルル

「ヒック……グスンツ……」

一夏

「もういいのか?」

シャルル

「グスツ……うん……ありがとう一夏……」

一夏

「気にすんな。」

俺に出来る事って言ったならこれくらいだからな……

それから暫くしてシャルルが落ち着くと…

シャルル

「…ねえ一夏？」

一夏

「ん？」

シャルル

「今日つて大浴場使えたよね？」

一夏

「ああ、山田先生がそう言ってたな…」

いきなりそんな事を言ってきた

気分を変える為に風呂に入りたいのか？

それなら俺に聞く必要は無い筈だが…

シャルル

「じゃあ入ろ♪」

一夏

「ああ…え？」

今なんて言った？

今の言い方だと…

一夏

「なあシャルル？気のせいなら謝るけど、俺の耳には『一緒に入ろう』って聞こえたんだが？」

シャルル

「そう言ったんだよ♪」／／／

一夏

「いやいやいやいや！同年代の女子と風呂に入れる訳無いだろ!!」

いきなり何言いだすんだ！

千冬姉からも入学初日に注意されたんだぞ！

バレたらどうなるか…

シャルル

「お礼に背中を流してあげるよ♪」／／／

一夏

「人の話を聞けえええっ!!」

結局俺はそのままシャルルに大浴場まで引きずられて背中を流して貰ったのだった

…

く
一
夏
S
i
d
e
o
u
t
く

第091話：生まれ変わった淑女と暴走気味の黒兎

く一夏 Side

シャルル：いや、シャルロットが親父さんの真意を知った翌日：

シャルロットは俺よりも先に部屋を出て行ったけど何故か教室には来ていなかった
どうしたのかと思っていると千冬姉と山田先生が来てしまった

けど：

一夏

「…え？」

2人の後ろに続いて教室に入って来たのは：

千冬

「挨拶しろ。」

シャルロット

「シャルロット・デュノアです♪」

全員

「…え？」

女子の制服を着たシャルロットだった

クラスの全員（オルコットとのほほんさん以外）がシャルロットの姿に驚いていた
そりやそうだよな…

今迄男と思っていた奴が女の恰好で現れたらな…

けど…やっぱりオルコットとのほほんさんはシャルロットの正体を知ってたんだな
…

あの2人は4組の更識さんと一緒に火ノ兄の家によく行ってるからな…東さんから聞かされていてもおかしくないか…

俺がそんな事を考えている間…

真耶

「えく…という訳で、デユノア『君』は実はデユノア『さん』でした…」

山田先生の紹介が続いていた

すると…

生徒1

「デユノア君って女だったの!?!」

生徒2

「美少年じゃなくて美少女だったなんて…」

生徒3

「これじゃ折角考えていた『一×シャル』本が描けないよ〜…」

生徒4

「やっぱり織斑君総受けの『永×一』本しかないのね!!」

………なんか一部寒気を感じる台詞が…

俺が悪寒に震えていると…

生徒2

「アレ? そう言えば昨日って大浴場は男子が使ってたよね?」

一夏

「!？」

マズイ!!!

生徒3

「うん、火ノ兄君は大怪我をしたから入れない筈だけど…」

ヤバイヤバイヤバイ!!!

このままじゃ俺が昨日シャルロットと風呂に入ったのがバレちゃう!!

ってシャルロット!?

そんな風に顔を赤くしてモジモジしたら…

「コアが無事だったからな…予備パーツで組み直した。」

一夏

「そ、そうなんだ…え？」

何かコイツ変だぞ？

こんなに素直だったか？

ザワザワ…

他の皆も俺と同じ事を思ったのかざわめきが起きていた

箒

「貴様！何故私の邪魔をした!!」

そんな中、俺を木刀で殴ろうとしていた箒がボーデヴィツヒを睨んでいた

邪魔って…アレが当たってたら俺怪我してただけだな…

ラウラ

「クラスメイトが暴力を振るわれそうになれば助けるのが当然では無いのか？」

全員

「へ…」

今…何て言った？

クラスメイト？

千冬

「オ、オイ、ラ、じゃなくてボーデヴィツヒ!!お前悪い物でも食ったのか?」

マズイマズイ!危うく公私混同しかけた

ラウラ

「いえ、食べてませんが?」

殆ど勢いとはいえかなり失礼な事を聞いたが…普通に答えて来るとは…

千冬

「では何があつた?言い方はアレだが今までのお前と変わり過ぎだぞ?」

ラウラ

「ハッ!実は先日の事で色々と思う所がありまして、これからは『兄上』と『姉上』に相応しい『妹』になろうと思いました!!」

全員

「へ!」

千冬

「兄に姉だと?」

姉と言うのはクロニクルの事だが…兄だど?…つてまさか!?

千冬

生徒1

「でも織斑先生、2人が姉妹なら何であの時何も無かつたんですか？」

そうだな…

ボーデヴィツヒはお姉さんを見ても何も反応してなかつたし、クロニクルさんも相手にしてなかつた…

千冬

「あゝ、それはな…コイツ等には複雑な事情があつてな…ボーデヴィツヒは自分に姉がいる事を知らなかつたらしい…」

生徒3

「え？知らなかつた？」

ラウラ

「…そうだ…私は自分に姉がいた事を知らなかつた…先日、兄上の見舞いに来た姉上と会つて初めてその事を聞かされたんだ…」

生徒2

「それなら何で最初に来た時に名乗らなかつたの？」

ラウラ

「それは…」

何だ？ 答えづらそうな顔になったな？

でもクロニクルさん：何でボーデヴィツヒに姉って名乗らなかつたんだろ？
って：よく思い出してみたら：

一夏

「そう言えばあの人：確かあの時『七徹』してたよな？」

全員

「あ!？」

千冬

「(でかした一夏!) 織斑の言う通りだ：あの時のアイツは徹夜が祟って異常なまでにテーションが上がってたからな：火ノ兄と私くらいしか見えていなかったんだろ：(コレで誤魔化せる筈だ!)」

それなら仕方ないよな：

千冬姉の説明に皆が納得したみたいに頷いた

何だかボーデヴィツヒがホツとしてるけど：

生徒4

「じゃあ火ノ兄君を兄って呼ぶのは：」

千冬

「義理とは言え火ノ兄とクロニクルは兄妹だからな…クロニクルの妹のボーデヴィツヒなら火ノ兄を兄と呼んでもおかしくは無い…だがなボーデヴィツヒ？」

ラウラ

「は、はい！」

千冬

「お前とクロニクルは血の繋がった姉妹だ。だが火ノ兄とクロニクルは『義理』の兄妹でしかない。あいつ等は血の繋がりがや義理なんて物は気にしていないが、だからと言ってあの2人の間にお前も入れる訳では無いぞ？」

ラウラ

「!？」

千冬

「アイツが拒絶してもお前は文句を言えない…それを分かっているのか？」

ラウラ

「…はい…分かっています…兄上と言うのも私が一方的に言っただけと言うのは自覚しています…」

千冬

「そうか…なら私からは何も言う事は無い…（だがあの火ノ兄が拒絶するとは思えん…

普段のアイツは恐ろしい程能天気な奴だからな…私の杞憂で済むだろうが一応は忠告してやらんとな…」

一夏

「……………」

多分、これは千冬姉なりの優しさなんだろうな…火ノ兄はまだ療養中だからここで起きてる事を知らない…

だから、この事を知った時の火ノ兄がボーデヴィツヒを拒絶した時の事も覚悟していろって言ってるんだろうな…

全員

「……………」

クラスの皆もそれが分かってるのか何も言わずに静かにしている…

千冬

「さて…少し暗い話になってしまったが…とところでボーデヴィツヒ？さっきの土下座と兄上、姉上と言う呼び方は何だ？」

今の空気を変えようと千冬姉が話題を変えた

でもそうだよな？

ドイツ人のボーデヴィツヒが土下座やあんな古い呼び方をするのは確かに変だよな

?

ラウラ

「ハッ！実はみんなへの謝罪とお二人の呼び方を部下に相談しました！」

千冬

「部下？…ああ、そう言えばお前はドイツではISの部隊を率いる隊長だったな？」

全員

「ええっ!？」

ISの部隊の隊長!?

ボーデヴィツヒが!?

ラウラ

「その通りです！私の部隊【シユヴァルツェ・ハーゼ】の副隊長『クラリツサ』に相談した所、謝るなら『土下座が一番』！呼び方は『兄上』『姉上』と呼ぶのが相応しいと教えられました!!」

全員

「……………」

自信満々に言うけど…コレって明らかに偏ってるよな？

千冬

「そ、そうか…ところでボーデヴィツヒ…コレは私からの忠告だ…その副隊長にプライベートな事を相談するのは止めておけ…」

ラウラ

「何故ですか？」

千冬

「お前に変な知識を与えそうで怖いからだ…」

あゝ、千冬姉も同じ事考えてたんだな…

何て言うかそのクラリツサって人…聞く限りオタクっぽい感じだもんなく…

ラウラ

「わ、分かりました…」

千冬

「まあ、土下座はこの際置いておくとして…要するにお前はこれまでの事を反省しているから皆に謝りたいという事でいいんだな？」

ラウラ

「はい!!」

千冬

「では土下座では無くお前の言葉でもう一度伝えろ。」

ラウラ

「ハッ！」

千冬姉がそう言うのとボーデヴィツヒは姿勢を正して：

ラウラ

「今まで本当にすまなかつた！これからは良き学友として接して行きたい！よろしく頼む！！」

そう言つて今度は土下座では無く頭を下げた

ボーデヴィツヒの謝罪に：

生徒1

「こちらこそよろしくね♪」

生徒2

「仲良くしようね♪」

クラスの皆は受け入れていた

ラウラ

「あ、ありがとう！…それから…織斑一夏…」

一夏

「え？俺？」

ラウラ

「お前にも本当に迷惑をかけた！今迄すまなかつた…」

更に俺個人に謝つて来た

一夏

「い、いや、俺も皆と同じだ…もう気にしてないから…」

ラウラ

「そうか…じゃあこれからよろしくな！」

一夏

「あ、ああ…それから俺は一夏でいい。」

ラウラ

「なら私も名前がいい。改めてよろしくな一夏♪」

そう言いながらラウラは笑みを浮かべた

コイツ…こんなに可愛く笑えるんだな…

箒

「……………」

一夏

「？」

今、変な視線を感じた気が……気のせいかな？

千冬

「では授業を始めろぞ！」

千冬姉が授業を始めた

箒

「……………」

〈一夏 Side out〉

第092話：盗難事件発生!盗まれた戦国龍皇!?

く真耶 Sideく

私はあの事件の日からずっと先輩から預かった【戦国龍皇】の解析作業を続けていま
した

ですが…

真耶

「…はあ…【戦国龍皇】…私なんかじゃ解析出来ないですよ…」

解析が一向に進まないんですよ…

?

「そう弱音を吐くな。」

真耶

「先輩!」

振り向くとそこには織斑先生がいました

千冬

「…余り進んでないようだな？」

真耶

「すみません…私なんかじゃ分からない事だらけですよ…」

千冬

「まあ、あの束ですら火ノ兄からデータを貰っていなければ【戦国龍】の解析が出来なかったそうだからな。その進化した【戦国龍皇】の解析ともなればやはり無理があったか…」

真耶

「…すみません…」

千冬

「別に責めてる訳じゃ無い。」

真耶

「はい…先輩…やっぱり篠ノ之博士に任せた方がいいですよ。ココではこの機体の解析はこれ以上は無理です。」

千冬

「…そうだな…束に連絡して明日にでもクロニクルに取りに来てもらうか…」

真耶

「そうした方がいいですよ!」

千冬

「ならそうするか…真耶、スマンが今の時点での解析データを纏めておいてくれないか？」

真耶

「博士に渡す為ですね。」

千冬

「そうだ。東には私から連絡しておくからスマナイがそつちを頼む。」

真耶

「分かりました!」

では早速…

千冬

「待て真耶。少し休んでからでいいだろ?」

真耶

「え?ですが…」

千冬

「コーヒーくらいなら私が奢ってやる。少し付き合え。」

真耶

「……………はい♪」

私は先輩の気遣いに感謝し、解析室から出ました

〜真耶 Side out〜

〜? Side〜

ガチャ…

むっ! …… やつと出て行ったか… 千冬さんも一緒とは都合がいい…

あのタッグ戦からあの解析室が無人になるのを毎日見計らっていたが漸くか…

私は解析室に入ると目的の物の前に来た…

?

「……………」

私はすぐにでもそれを手に取りたかった…

だが、すぐに山田先生が戻って来ると考えその気持ちを我慢し物陰に隠れ息を潜めた

それから数分すると山田先生が戻って来た

山田先生は1時間程度作業をすると再び解析室を出て行った

今度は室内の電源を落としたりして出て行った事から今日の作業はこれで終わった

のだろう

?

「…やっと出て行ったか…さてと…」

私は解析室に誰もいなくなるのを確認すると隠れていた場所から出て来た
そして待機状態の目的の物を手に取った

?

「フフフツ…待たせたな…お前の本当の主が迎えに来たぞ!!…【戦国龍皇】!!!」

遂に【戦国龍皇】を手に入れた!

私は込み上げてくる笑いを堪え、すぐに解析室を出て部屋へと戻った

く? Side outく

く千冬 Sideく

千冬

「ふわく…」

朝一番で私が欠伸をしていると…

真耶

「先輩大変ですっ!!!」

血相を変えた真耶が慌ててやって来た

千冬

「ん？どうした真耶？」

真耶

「せ、【戦国龍皇】が!!!」

私はそれだけで真耶が慌てていた理由を察した

千冬

「…盗まれたか？」

真耶

「はい…すみません!!私の管理不足です!!」

千冬

「…そうか…誰かはやると思っていたが…まあ気にするな。」

真耶

「気にするなつて…早く取り返さないと火ノ兄君に何て言えば…」

千冬

「アイツはそんな事を一々気にする奴では無いだろ？それに心配しなくても犯人はすぐにボロを出す。お前忘れたのか？」

真耶

「え？」

千冬

「アイツのISに組み込まれている防衛機能の事だ。」

真耶

「……………あ!?!そう言えばそうでした！」

千冬

「そう言う事だ。今日明日中には犯人の方から名乗り出てくる。」

真耶

「ですが…篠ノ之博士には…」

千冬

「アイツには私から理由を話して受け渡しを遅らせる。」

真耶

「…はい…」

千冬

「それに誰がやったのかは想像出来る。お前も本当は分かってるんだろ？」

真耶

「…やっぱり…あの子なんでしょうか？」

やはり真耶もアイツの顔が浮かんでいたか

千冬

「ああ、アイツが一番【戦国龍】に執着していたからな。むしろアイツしか思い浮かばん。恐らく二次移行セカンドソフトしたのを見て歯止めが効かなくなっただら。」

真耶

「…そうですね…」

千冬

「…真耶…今日のHRで【戦国龍皇】が盗まれた事をクラスの連中に伝えるぞ。そう言え
ばアイツもすぐに動くだろ。」

真耶

「…分かりました！」

私達はそう言うのと教室に向かった

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

うくん？どうしたんだろ？

箒

「~~~~~♪~~~~~♪」

朝から箒がやたら上機嫌なんだよな？

何かあつたのかな？

千冬

「諸君おはよう。」

そんな事を考えてると千冬姉と山田先生がやって来た

千冬

「HRの前に全員に伝えておく事がある。実は昨夜、解析作業中だった火ノ兄の【戦国龍皇】が何者かに盗まれた。」

全員

「!？」

【戦国龍皇】が…盗まれただつて!?

クラスの皆もそれを聞いて騒めいていた

ラウラ

「それはどう言う事ですか!!」

千冬

「そのままの意味だ。今朝、山田先生が解析室に行ったら待機状態の【戦国龍皇】が無く
なっていたそうだ。」

ラウラ

「そ、そんな…兄上の…【戦国龍皇】が…」

シャルロット

「犯人が誰か分かってるんですか!!」

真耶

「まだ何も分かってません…」

ラウラ

「クソツ!!盗んだ奴を見つけ出して叩きのめしてやる!!!」

一夏

「……………アレ?」

クラスの皆が騒いでる中、一番大騒ぎしそうな子たちが静かだな?

一夏

「…オルコット…のほほんさん…何で黙ってるんだ?」

そう、この二人がとても静かだったんだよな…

セシリア

「何も心配してないからですわ。」

一夏

「へ?」

どう言う事だ?

セシリア

「盗んだところで使える訳無いからですわ。【戦国龍皇】は永遠さんのISですもの♪」

本音

「そだよ♪永遠のISは泥棒なんかに使えるような機体じゃないよ♪」

箒

「!？」

千冬

「それに関しては私達も同意見だ。盗むなんて事をする奴に火ノ兄の機体は使いこなせん。そいつが持っていてても宝の持ち腐れだ。」

オルコットとのほほんさんだけじゃなくよく見たら千冬姉達も慌てて無い…

何でそんなに冷静でいられるんだ?

千冬

「とりあえずは【戦国龍皇】が盗まれた事だけは伝えておく。授業を始めるぞ。」

千冬姉はそう言って授業を始めてしまった
一体どう言う事なんだ？

箒

「……………」

く一夏 Side out く

第093話：龍皇の逆鱗

↳ 箒 Side↳

箒

「……………」

今日の授業を全て終えた私は学園近くの砂浜に来ていた

そしてその手には私のIS…【戦国龍皇】があつた

箒

「あいつ等…」

私は今朝のHRでオルコットと布仏が言っていた事を思い出していた

セシリア

『盗んだところで使える訳無いからですわ。【戦国龍皇】は永遠さんのISですもの♪』

本音

『そだよ〜♪永遠のISは泥棒なんかに見えるような機体じゃないよ〜♪』

箒

「私には使えないだど!!盗んだだど!!コレは私のISだ!!私は自分のISを取り返した

ただだ!!【戦国龍皇】は私にこそ相応しいISなんだ!!」

私は鞘から刀を抜くと頭上に掲げた

箒

「今それを証明してやる!!」

私は自分が【戦国龍皇】を纏った姿を想像しながら頭上で円を描いた

そして円から現れた炎が私を包み込んだ

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ゝ箒 Side outゝ

ツ
!!!!!!

ゝセシリア Sideゝ

【戦国龍皇】が盗まれた話はアツと言う間に学園中に知れ渡りました

ですが、わたくしや本音さんと同じ様に簪さんと鈴さんも全く慌ててはいませんでした

た

鈴

「【戦国龍皇】を盗むねゝゝ馬鹿な事をしたわねそいつゝ龍の『逆鱗』に触れるような物

よ?」

セシリア&ラウラ&シャルロット

「逆鱗？」

逆鱗とは何でしょうか？

鈴

「ああ、あんた達は知らなかった？ 『逆鱗』 って言うのは龍の急所の事よ。」

シャルロット

「龍に急所なんてあるの!？」

鈴

「あるわよ。」

簪

「確か…龍の鱗の中に1枚だけ逆向きの鱗があるんだったよね？」

鈴

「そうよ。主に首元にあるって言われてるわ。…逆鱗は龍の急所だから龍は触られるのも嫌がるのよ。だから触るだけで龍は怒り狂うって言われてるのよ。」

ラウラ

「怒り…」

鈴

「だから逆鱗は『人を激しく怒らせる』って言う意味でも使われる言葉なのよ。でさ？

【戦国龍皇】が永遠以外の奴に使われたらどうなると思う？」

本音

「確実に怒り狂うね〜♪」

セシリア

「そうですね。それに、そろそろお馬鹿な盗人が龍の逆鱗に触れる頃でしょうね？」

簪

「うん！ 【戦国龍皇】が怒り出す頃!!」

一夏&ラウラ&シャルロット

【戦国龍皇】が？」

そう言えばこの方たちは知りませんでしたわね

一夏

【戦国龍皇】が怒り出すってどういう事だ？」

セシリア

「実は永遠さんのISには『防衛機能』と呼ばれる物が付いてるんですよ。」

一夏&ラウラ&シャルロット

『防衛機能』？」

ラウラ

「防衛機能とは何の事だ？」

簪

「永遠以外で邪念を持つ人が使ったら発動するシステムの事。」

一夏

「邪念？」

セシリア

「そのままの意味ですわ。邪な考えを持つ人の事です。」

シャルロット

「じゃあ、【戦国龍皇】を盗んだ人は……」

鈴

「間違いなくシステムに……逆鱗に触れるわ。だからそろそろ火災報知器が鳴る頃なんだけど？」

ラウラ

「火災報知器だと？……まさか防衛機能と言うのは!？」

セシリア

「【戦国龍皇】の防衛機能は相手を死なないレベルで燃やすそうです。」

シャルロット

「燃やすって…じゃあ他の2体は？」

セシリア

「ドットブラスライザー」は以前ラウラさんが「クラウンソーラー」を持つとした時と同じように弾かれます。「ラインバレル」の場合は半径10k圏内のどこかに強制転送されますわ。」

一夏&ラウラ&シャルロット

「……………」

わたくしの話した防衛機能の内容に言葉を失ってますわね

それにしても…

セシリア

「警報が鳴りませんわね？」

本音

「もしかして犯人は外にいるのかな？」

確かにそれなら警報はなりませんわね…

簪

「本音の言う通りかも……………あ!？」

鈴

「どうしたの?」

簪

「あれ!」

簪さんが窓の外を指さしました

そこに見えたのは…

ラウラ

「アレは…煙?」

セシリア

「あそこにありますわね。…では行きますか。」

わたくしがそう言うと皆さん頷きました

煙の見えた場所にその場にいた全員で向かう事になりましたわ

くセシリア Side outく

く簪 Sideく

簪

「ぎゃあああああああああああああ——

つ!!!!!!」

私は【戦国龍皇】を展開しようとしてその炎に包まれ燃やされた

箒

「何の事だオルコット!？」

セシリア

「【戦国龍皇】を盗んだ犯人が貴方だと言ったのですわ。」

簪

「予想通りだったね。」

箒

「何だと!？」

シャルロット

「えーもしかして犯人が箒だって分かったの?」

鈴

「【戦国龍皇】を盗んでまで手に入れようとする奴なんてコイツしか思い浮かばないわ

よ。」

一夏

「……………」

俺は目の前の光景が信じられなかった

【戦国龍皇】を盗んだのが箒!？」

けど、信じたくない俺の想いとは裏腹に今の箒は手に待機状態の【戦国龍皇】を持っている

そして、さつきまで話していた防衛機能によつて燃やされたような姿になっていた
物的証拠が全て揃っていた

これが龍の逆鱗に触れた奴の姿って事かよ

しかもオルコット達は犯人が箒だつて気付いていただつて

一夏

「ほ、箒…お前が…盗んだのか…」

箒

「違う!!コレは…コレは私のISだ!!」

お前…何言ってるんだよ?

ラウラ

「お前のISだと!それは兄上のISだ!!お前の物では無い!!!」

鈴

「その通りよ。妄想もそこまで行くと滑稽に見えて来るわね。」

箒

「妄想だと!!」

鈴

【戦国龍皇】がアンタのISですって？なら何でアンタはそんな姿になってるのよ？」

箒

「コレは…」

簪

【戦国龍皇】を纏おうとしてその炎に燃やされたんでしょ？」

箒

「!?…お前達…こうなった理由を知っているのか!？」

鈴

「おかしいわね〜？何でアンタがそれを知らないの？【戦国龍皇】がアンタのISなら

知ってる筈よね〜？」

箒

「ぐっ！」

鈴

「まあ教えてあげるわよ。【戦国龍皇】はね、邪念を持つ奴が使おうとするとそいつを死なないレベルで燃やすのよ。」

箒

「邪念だ?!?ふぎけるな!!私にそんなものがあるものか!!」

セシリア

「ですが実際に燃やされているではないですか? 貴方が否定するのは勝手ですが少なくとも【戦国龍皇】自身は貴方に邪念があると判断して拒絶していますわ。」

箒

「!?…私が…拒まれただ?!?」

セシリア

「そうですね。そもそも他人のISを盗むなんて事をする人に邪念が無いと言うのですか?今の貴方の姿が邪念があると言う何よりの証拠ですわ。」

鈴

「ついでにもう一つ教えてあげるわ。永遠の残りの2機にも同じ機能が組み込まれている。そしてそのうちの一つ【ドットブラスライザー】を簪と本音は使った事があるのよ。」

箒

「何!?!」

鈴

「それがどう言う意味か分かるわよね? 簪と本音は防衛機能に引つかからなかったって

事よ。それは【戦国龍皇】もこの二人は展開出来るって事よ。」

箒

「!?」

この二人は【ドットブラスライザー】を纏った事があるのか!?
確かにこの二人には邪念って言うものがなさそうだけど…

箒

「う、嘘だ…」

箒は鈴の言ってる事を信じようとはしなかった

そうだよな…自分は拒絶されて更識さんとのほんさんは受け入れられたって事だ
もんな…

く一夏 Side outく

く鈴 Sideく

コイツ…私の言った事全然信じてないわね

実際に証明したいところだけど【ドットブラスライザー】も【ラインバレル】も束さ
んの所だからそれが出来ないのよね…

ホントどうしょ…

箒

「…そいつらが受け入れられただと…そんな事…あつて堪るかあああああ——っ
!!!」

コイツ、刀で斬りかかって来た!?

ガキンツ!

全員

「!？」

千冬

「貴様何をしている!!」

一夏

「ち、千冬姉!？」

箒の剣を近接ブレードを持った千冬さんが受け止めていた

箒

「ち、千冬さん…」

千冬

「【戦国龍皇】か…やはり犯人はお前か!」

千冬さんは自分が受け止めている箒の持っている刀を見てそう言った

一夏

「!?…千冬姉も分かってたのか!?」

千冬

「ああ!最初からな!!いや、火ノ兄が【戦国龍】を出したあの日からコイツはやるだろうと思っていた!!」

一夏&箒

「!?」

初めから目を付けられていたなんて知って驚いてるわね

千冬

「そして今日その予感的中した!!出来れば外れて欲しかったが今までのお前の態度と言動からそれは諦めていた!!」

そうよね…コイツ…クロエさんの持ってきたライフルの時も怒鳴ってたし…私でも分かるくらい【戦国龍】を見る眼が露骨だもんね…

千冬

「篠ノ之…今すぐにそれを返せば少しは大目に見てやる!」

箒

「コ、コレは…コレは私のISだ!!私の専用機だ!!」

これだけ言っても分からないのこイツ!?

千冬

「…いいだろう…」

え？千冬さん？

箒

「千冬さんも分かって…」

千冬

「それがお前の物だと言うならこの場で展開しろ！」

箒

「!？」

千冬

「【戦国龍皇】をお前が纏う事が出来ればその所有者をお前と認めてやる。」

箒

「え？」

千冬

「どうした早くしろ！」

箒

「ほ、本当なんですか？ 私がコレを使えば私の物と認めてくれるんですか？」

千冬

「何度も言わせるな！」

千冬さんも無茶言うわね…コイツに纏えないの分かってて言うんだもん

箒

「で、では見ていて下さい！」

そう言つて箒は刀を頭上に掲げた

私にはそれがとても馬鹿馬鹿しく見えていた

多分千冬さんも同じ事考えているでしょうね…

そして…

箒

「ぎゃあああああああああああ——

つ
!!!!!!

案の定また逆鱗に触れて火達磨にされていた…

く鈴 Side outく

くセシリア Sideく

箒

「ぎやああああああああああああああ——つ!!!」

…はあ…コレで5回目ですわね…その諦めの悪さは少しは見直しますけど…いい加減諦めて欲しいものです…

箒

「ま、まだ…だ…」

海で鎮火してまだやるつもりですか…

そう思ったのですが…

ブオオオオオオオオオオツ!!!

全員

「!？」

篠ノ之さんが待機状態の【戦国龍皇】を持つとした瞬間、刀が燃え上がりましたわ

箒

「な、何だ…コレは!？」

?

『いい加減にしてくれない?』

全員

「!？」

何ですのこの声!?

突然聞こえた声は燃え上がった炎の中から聞こえてきました

?

『私は貴方なんかに使って欲しくないのよ!』

そう言うのと炎は人の姿に変わっていききました

そして現れたのは赤い髪と白い翼をはやし鎧を身に着けた少女でした

彼女の腕には待機状態の刀が握られてましたわ

箒

「お、お前は一体…」

?

『私はこの【戦国龍皇】のコア人格よ。』

全員

「何っ!?!」

【戦国龍皇】の…コア人格ですって!?

?

『私の事は『ツル』と呼ばばいいわ。』

千冬

『ツル』だと？何故機体と違う名前を名乗るんだ？」

ツル

『織斑千冬さんですね？理由は簡単、私は【戦国龍皇】であると同時に【ドットブラスライザー】と【ラインバレル】でもあるからです。』

セシリア

「それはどう言う事ですか？」

ツル

『私は他のI-Sと違い【戦国龍皇】【ドットブラスライザー】【ラインバレル】の3つのコアを一括りにした人格なんですよ。』

簪

「一括りって…だからその名前を？」

ツル

『そう言う事です。…さて、私がココに出て来たのは貴方にいい加減諦めて欲しいからよー！』

篠ノ之さんに向かってハッキリ言いましたわね…しかもわたくし達に対しては敬語でしたのに篠ノ之さんにはしてませんわね…

簪

「な、何だと!？」

ツル

『私が貴方の物ですって！私の主は火ノ兄永遠ただ一人よ!!私を盗んでおいてよくそんな事が言えるわね!!』

箒

「ち、違う!!お前の主はこの私だ!!篠ノ之箒だ!!」

ツル

『あのね？ISの人格である私自身がアンタじゃないって言うてるのよ!!いい加減諦めろ!!』

箒

「!？」

完全な拒絶ですわね…IS自身の口から拒絶されるなんて普通はありませんわよ…

ツル

『すぐに諦めると思っていたけど全く諦めないから私が直接出て来て言う事にしたのよ!!』

箒

「……………何で…何で私じゃないんだ!?!あんな田舎者よりもお前の事を使いこなせる箒だ

!!

セシリア&簪&本音

「!？」

永遠さんが…田舎者ですって!？」

ツル

『……そんな事を言う奴に私が心を開くとても思ってるの!!』

簪

「!？」

ツル

『主と私はずっと一緒だった!!主はISの私にも話しかけてくれる人…私にはそれがとても嬉しかった!!そんな主を侮辱したお前になんか使われてたまるか!!!』

簪

「ち、違う…私はそんなつもり…」

また逆鱗に触れましたね…

ツル

『黙れ!今更言い訳なんて見苦しいわよ!!』

千冬

「ツル！もういい！コイツの処分はこっちでやっておく！」

ツル

『分かりました。ですが最後にアンタにいいものを見せてあげるわ！』

箒

「…え？」

ツル

『セシリアさん。』

セシリア

「は、はい？」

ツルさんはいきなりわたくしの名前を呼ぶと炎に姿を変えてわたくしを包み込みました

セシリア

「え？」

そして炎が消えると…

セシリア

「コレは!?!」

箒

「オルコツトが…【戦国龍皇】を…」

そう、わたくしは【戦国龍皇】を纏っていました

鈴

「コレが見せたかったもの…確かに箒にとつてはこの上ない屈辱ね？」

ラウラ

「ああ、自分があればだけやって纏う事を許されなかった【戦国龍皇】が自分の意思でセシリアに纏わせただけだからな。」

箒

「あ…あ…あ…」

わたくしの姿を見て篠ノ之さんは言葉を失ってしまいましたわね

ですが、今はそんな事よりも…

セシリア

「ツルさん…ありがとうございます…わたくしを信じてくれて…」

わたくしは自分を信じてくれたツルさんにお礼を言いました

すると【戦国龍皇】が赤く輝き、再び炎となりました

炎が消えるかわたくしの手には待機状態の【戦国龍皇】が握られています

千冬

「オルコット…悪いんだが…」

セシリア

「はい、お願いしますね。」

わたくしは【戦国龍皇】を織斑先生に渡しました

【戦国龍皇】を織斑先生が受け取る時、何も起きませんでした

恐らくツルさんも織斑先生なら大丈夫と判断されたのですね

〜セシリア Side out〜

〜千冬 Side〜

さて、【戦国龍皇】も無事取り返した事だし…

箒

「……………」

この馬鹿をどうするかだな…

本来ならこのまま懲罰房に放り込む所だがいくら死なないレベルとは言え【戦国龍皇】に散々燃やされたからな…

全身黒焦げの上に少なからず火傷もおっているだろうから治療せんといかんな…

千冬

「篠ノ之…お前はまず医務室で治療を受けろ！」

私がそう言うのと…

ラウラ

「教官！コイツにそんな事する必要ありません!!すぐにでも懲罰房に放り込むべきです!!」

ラウラが文句を言っただけか…

千冬

「お前に言われなくても治療が終わればコイツは懲罰房行きだ。だが、こんな姿で放り込めば後から問題になる可能性もある。それを起こさない為だ。」

ラウラ

「……………分かりました…」

私が説明するとラウラも他の者達も納得した

それから私は篠ノ之を医務室に連れて行き、治療が終わると懲罰房に放り込んだ

その間、篠ノ之には反省文500枚の提出を言い渡し、全てを書き終わるまで外には出られないと言っておいた

尚、【戦国龍皇】はすぐにクロニクルに連絡し取りに来たアイツに渡しておいた

そして【戦国龍皇】を取り返した事を学園の連中に伝えると騒ぎも落ち着いたが犯人

の事は伝えなかつた

まあそれでも私の受け持つ1組の連中は犯人が誰か見当が付いているようだった

それも当然か：【戦国龍皇】を取り返したと同時に篠ノ之がいなくなつたのだから余程の馬鹿でもない限りすぐに分かるか：

私は念の為、1組の奴等に口止めをしておいた

く千冬 Side out く

第094話：復活の永遠

（セシリア Side）

【戦国龍皇】の盗難事件から数日が経過しました

犯人の篠ノ之さんは未だに懲罰房から出て来ていません

まあ当然ですわね…永遠さんのISを盗むんですもの！

反省文500枚でも少ないくらいですわ！

…それにしても永遠さん…何時になれば戻って来るんでしょうか…永遠さんが戻って来る間はわたくしと簪さん、本音さんの3人で永遠さんの畑と田んぼの手入れをしているのでこちらは大丈夫ですけど…早くお話したいですわ…

わたくしがそんな事を考えていると…

千冬

「おはよう！」

織斑先生と山田先生が来ました

セシリア&本音

「!？」

「落ち着かんかアホ共!!!」

ガン!ゴン!

セシリア&本音

「うぐうぐぐぐ…」

織斑先生の拳骨が…

千冬

「火ノ兄はまだ万全ではない!動けるようになったただけだ!!」

セシリア

「そ、それを早く言っってくださいぐぐぐ…」

千冬

「言う前にお前等が飛びついたんだろうが!!!」

仰る通りです…

千冬

「全く!どうしてくれるんだ!!また気絶したじゃないか!!」

セシリア&本音

「あ!?!」

そこには白目を剥いた永遠さんが倒れていました

セシリア&本音

「…すみません…」

わたくし達には謝る事しか出来ませんでした…

〜セシリア Side out〜

〜一夏 Side〜

オルコットとのほほんさんの暴走で久しぶりに来た火ノ兄は挨拶を一言言っただけで意識を失った…

千冬姉は倒れた火ノ兄を席に運ぶと今の状態を話してくれた

千冬

「火ノ兄の傷だがまだ完全には塞がってはいない。」

そりやそうだよな…何しろ刀が体を貫通したんだから…普通なら死んでる傷だぞ…

そんな傷が1, 2週間で治る筈は無いよな…

て言うか治るのが早すぎる気がするんだけどな…

千冬

「その為、復帰はしたが激しい動きは出来ん。当然ISも使えん。分かったな?」

全員

「はい!!!」

アレ? って事は…

一夏

「織斑先生…」

千冬

「何だ?」

一夏

「そんな状態でどうやって家に帰るんですか?」

全員

「あ!?!」

俺の疑問に全員が気付いた

火ノ兄は家から学園まで I S を使って登下校している

I S を使えない体でどうやって行き来するのか分からなかった

千冬

「それか…本当なら I S が使えるようになるまでは学園で療養して貰うのだが…これ以上日を開けると畑や田んぼがどうなるか分からんと言っつてな…」

セシリア

「それでしたらわたくし達がしています！ですから永遠さんにはまだ療養を続けて貰ってください!!」

え？そんな事してたのか？

千冬

「私もさつきそう言ったんだが…これ以上お前達に世話になるのは悪いと言ってな…！Sは無理だが鍬を振るくらいなら平気だと言って聞かんだ…仕方無いから暫く様子を見る事にした…」

アイツもかなり頑固だな…

千冬

「それでさつきの織斑の質問の答えだが…今朝クロニクルに連絡を取っておいた。」

ラウラ

「え!？」

クロニクルさんに？

千冬

「【ラインバレル】を持って来るように頼んだ。」

一夏

「【ラインバレル】を!？」

千冬

「ああ、アレの【転送】能力なら体への負担も少なくて済むと思ってな？」
そうか！火ノ兄にはワープが出来る【ラインバレル】があつたんだ！

千冬

「分かつたか？」

全員

「はい!!!」

俺達が返事をする…

永遠

「むっ!」

火ノ兄が目を覚ました

セシリア&本音

「永遠(さん)!!!」

そんな火ノ兄に2人がまた飛びつこうとしたけど…

千冬

「お前等っ!!!」

セシリア&本音

「はっ!？」

千冬姉が一喝して止めた

千冬

「また同じ事を繰り返す気か!!!」

セシリア&本音

「しゅみましえん…」

2人ともすっかかり縮こまつてるな…

永遠

「何かあったんか?」

火ノ兄の奴…自分に何が起きたのか覚えてないみたいだな…

千冬

「何でもない!それより火ノ兄、折角だから何か言え!」

永遠

「あいよ…」

コイツのこのおかしな喋り方も久しぶりな気がするな…

永遠

「え、取り合えず皆の衆…心配かけてスマンかった!まだ本調子では無いが動けるよ

うにはなつたぞい！」

パチパチパチパチ

火ノ兄の挨拶を聞いて俺も含めて皆が苦笑いしながら拍手していた

皆は火ノ兄が無事だった事を喜んでいた

く一夏 Side outく

くラウラ Sideく

兄上が戻つて来た：

だが何と言つて話しかければいいんだ：

兄上と言うのも私が勝手にそう呼んでいるだけで姉上と違って私はこの人の妹に

なつてない：

私がどう話しかけようか悩んでいると：

永遠

「むっ？チビツ子、無事じゃったか？」

ラウラ

「え？」

兄上の方から話しかけてくれた

ラウラ

「は、はい!!お陰様で…」

永遠

「それは良か♪怪我した甲斐があつたわい。」

アレは怪我なんてレベルでは無いと思うのだが…

いや、そんな事より…

ラウラ

「あ、あの…」

永遠

「ん?何じゃ?」

ラウラ

「た、助けてくれて…ありがとうございませす!!!」

まずは感謝を伝えなくては!

永遠

「気にせんでええわい。…ん?」

よし!次は謝罪だ!

ラウラ

「それから……すみませんでした!!!」

永遠

「……は？」

ラウラ

「貴方を勝手に敵視し、試合の時にはあの様な事までしてしまいました……」

永遠

「……」

ラウラ

「これまで私が貴方にした事……本当にすみませんでした!!!」

永遠

「いや、反省しとるならワシはそれでいいんじやが……」

よかつた……兄上は私の謝罪を受け入れてくれた……

永遠

「……チビツ子……どうしたんじやお主？随分しおらしゆうなつとるが……」

兄上まで教官みたいな事を言うな……

私はそんなに変わったのか？

ラウラ

「それは…反省した結果と思ってください！」

永遠

「ああそう言う事か…しかし何と言うか…今までのピリピリした感じより今の雰囲気の方がワシはいいと思うぞい。」

ラウラ

「!?」

今の方が…いい…

兄上は笑いながらそう言ってくれた…

ラウラ

「あ、兄上…」

永遠

「兄上!?!」

しまった!?

勢いで言ってしまった!?

永遠

「何故に兄上?…ってクロエか?」

ラウラ

「は、はい……」

兄上は察してくれた……

だが……

ラウラ

「その……私は……貴方を……あ、兄と呼んでも……いいでしょうか！」

この人が私を妹と認めてくれるかは別だ……

全員

「……………」

永遠

「……………まあ……構わんぞ？」

ラウラ

「!?……ほ、本当ですか!？」

永遠

「うむ……クロエの妹ならワシの妹のようなもんじゃからのお……それに家族が増えるのは

いい事じゃよ♪」

ラウラ

「家族……」

この人は…こんな私を…家族と言ってくれるのか…
永遠

「ではこれからよろしゅう頼むぞ…ラウラー！」

そう言つて兄上は私の名前を呼んでくれた

ラウラー

「!?…はい!!兄上!!」

私は…兄上の妹になれたんだ!!

パチパチパチパチ

すると私達のやり取りを見守っていたクラスの皆が拍手をしてくれた

教官もだ…教官も喜んでくれたんだ

……そう言えば…兄上は教官達の様なツツコミを入れなかつたな?

まあ姉上も兄上を『兄様』って呼んでるから似たような物だからか…

……

…

…

その後、授業が終わつた後、兄上が復帰した事を知つた4組の簪がやつて来たのだが

…

第095話：炎龍刀・真打!!

く千冬 Sideく

火ノ兄が復帰してからさらに数日が経過した

現在、私達1年の教師達は来週行われる臨海学校の準備に追われていた

そんなある日、私と真耶はいつもの様に「ラインバレル」で登校して来た火ノ兄と出会った

だが火ノ兄をよく見ると…

千冬

「ん?…それは【戦国龍皇】!?!」

火ノ兄の腰に待機状態の【戦国龍皇】があつた

アレを持っていると言う事は…

千冬

「東の調査が終わったのか?」

永遠

「うむ、昨日終わったと言うてクロエが持ってきた。」

千冬

「そうか。」

一応、東は火ノ兄の家から出て行った事になっている以上、誰が聞いてるか分からないからな…下手な事を言つてまだいる事がバレると拙い

千冬

「それで調査結果は？」

永遠

「詳しくは聞いとらん。じゃが性能だけでも恐ろしいほど上がつとるらしい。」

千冬

「恐ろしい程、か…」

あの束がそこまで言うか…

【戦国龍】でも手が付けられなかったと言うのにな…

…龍…龍か…人間如きの力で龍を御する事は出来ないという事なんだろうか…

龍の力を扱えるのは龍が認めた主のみ…それ以外の奴が手を出せば龍の逆鱗に触れる…あの馬鹿の様にな…

もしどこかの国が手を出す事があつたらあの時の事を教えてやるか…

永遠

「それと束さんが山田先生に礼を言っとったぞ。」

真耶

「…え？」

永遠

「山田先生の解析したデータのお陰でいくらか飛ばして出来たそうじゃ。」

真耶

「は、博士が…私に!？」

あの束が人を褒めるとはな…本当に変わったなアイツ…

しかし【戦国龍皇】が戻って来たのは丁度いい

千冬

「火ノ兄、一つ頼みがある。」

永遠

「ん？」

千冬

「今日の実習で【戦国龍皇】を展開してくれないか？」

真耶

「ええっ!？」

永遠

「構わんで。」

火ノ兄は私の頼みを聞いてくれたが、真耶が慌て始めたな…

真耶

「先輩何言ってるんですか!?!火ノ兄君もです!!」

永遠&千冬

「何が（じゃ）（だ）？」

何をそんなに慌ててるんだ？

真耶

「何がって…火ノ兄君の怪我はまだ殆ど治って無いんですよ!!」

ああそう言う事か…

千冬

「お前は知らなかったか…」

真耶

「え？」

千冬

「火ノ兄の怪我は大分治ってるぞ？」

真耶

「大分って…どう言う事ですか!？」

千冬

「あの事件の後クロニクルが来たと言っただろ？その時にアイツが火ノ兄に東の造った治療用ナノマシンを投与して行ったんだ。」

真耶

「ナノマシン!?博士はそんな物まで持ってたんですか!？」

千冬

「そうだ、それで火ノ兄はココまで回復している。」

真耶

「…だからこんなに早く…あの怪我でこんなに早く動けるのはおかしいと思ってましたが…こういう事だったんですね…」

千冬

「そう言う事だ。無論あの怪我だ…東のナノマシンでもまだ完治はしていない。だがISを展開して歩くくらいなら回復していると見たんだが…どうだ？」

永遠

「そのくらいなら出来るぞい。」

私の質問に火ノ兄も大丈夫だと答えた

それを見て真耶も納得した

そして私達は教室に向かった：

く千冬 Side out く

く簪 Side く

今日の I S の実習は 1 年の全クラスの合同授業

4 組の私は合同授業をしても普段は 3 組とやっている

だから今日の実習は楽しみだった♪

1 組の永遠と授業が受けられる♪

と言っても永遠はまだ本調子じゃ無いから見学になるのが少し不満だけど：

そして全員が集まると織斑先生が授業を始めた

全員が並ぶ中、やっぱり永遠は見学に戻るから列から離れていた

千冬

「それでは授業を始める！今日は始めに専用機による模擬戦を行って貰い、その後は各班に分かれて実働練習を行う。」

まずは模擬戦か：誰がやるんだろ？

永遠はまだ怪我が治って無いから無理だし、束さんにISを預けてるセシリアも無理、本音は機体がアレだから微妙だよね…

となると残ってるは私を含めて5人って事になるな…

私がそんな事を考えている間に…

千冬

「凰、更識、お前達だ!」

私と鈴が指名された

簪&鈴

「はい!!」

指名された私達は早速模擬戦を始めたけど…

………

………

…

鈴

「貰ったああつ!!」

簪

「キヤアアアアツ!!」

鈴の青龍刀に斬られて負けちゃった…

もう少し粘れると思っただけどな…

模擬戦を終えた私と鈴がISを解除して列に戻ると…

千冬

「では次は実動訓練に入る。だがその前に…火ノ兄！」

織斑先生が永遠を呼んだ

何をする気だろ？

千冬

「事前に頼んだように【戦国龍皇】を展開してくれ。」

全員

「…え？」

今…何て？

永遠

「あいよ…」

私達が織斑先生の言葉の意味を理解するよりも先に永遠は腰にさしてある刀を抜いた

全員

「え？」

永遠はそのまま頭上に円を描いて炎に包まれた
そして現れたのは…

へオオオオオオオオオオオオ——ンツ!!!

進化した【戦国龍】…【戦国龍皇】だった…

く簪 Side out

くセシリア Side

【戦国龍皇】…以前わたくしもツルさんが纏わせてくださいましたが、やはり本来の使
い手が纏うと迫力が違いますわね…

ですが、何故織斑先生は【戦国龍皇】を？

ザワザワ…

1年の皆さんも【戦国龍皇】を見てざわめいていますわね…

永遠

「コレでいいんか？」

千冬

「ああ…【戦国龍皇】…間近で見ると凄まじい迫力だな…」

織斑先生の感想に皆さん頷いています

わたくしも同じ意見ですわ

一夏

「あの、ち、織斑先生：何で【戦国龍皇】を？それに火ノ兄の体はISを展開する事は…」
永遠さんの体？

…そう言えば皆さん知りませんでしたね

セシリア

「永遠さんの体なら大分回復してますわよ？」

全員

「え？」

わたくしがそう言うのと皆さんこちらを向きました

シャルロット

「どういう事!?!あの怪我はそう簡単には…」

ラウラ

「あ！そう言う事か!?!」

シャルロット

「え？」

ラウラさんも気づきましたか

ラウラ

「前に姉上が見舞いに来た時に兄上に治療用ナノマシンを投与して行ったんだ。」

鈴

「クロエさんが!?!…そうか…だからこんなに早く回復してるのね?」

千冬

「そう言う事だ…それで火ノ兄に【戦国龍皇】を展開させた理由だが…一度間近で見たくてな…」

全員

「へ?」

…それが理由ですか?

千冬

「あの一件で火ノ兄はあんな状態になったからな…ISを展開する程度には回復したから頼んでみたんだ。」

全員

「……………」

そう言われると…分からなくは無いですか…

永遠

「それでもういいんか？」

千冬

「そうだな…【六道剣】は出せるか？」

永遠

「可能じゃ…来い!!」

織斑先生の追加のリクエストに伝えて永遠さんは【六道剣】を呼び出しました

ザザザザザンツ!!!

そして現れたのはあの6本の名刀…【六道剣】…しかし…

簪

「本当に制約が無くなってるんだね…」

簪さんの言う通りですね…

あの【六道剣】がこんな簡単に呼び出せるなんて…本当にただの武器になってしまったんですね…

そう思うと改めて【戦国龍皇】の規格外さを思い知りましたわ…

そして、新しい単一仕様…あの美しい白馬…

いつか永遠さんと一緒にあの白馬で駆けて見たいですわ…／／／

わたくしがそんな妄想をしていると…

永遠

「…グッ！」

セシリア&簪&本音

「永遠（さん）!!!」

永遠さんが胸を抑え始めました!?

もしかして永遠さん!?

千冬

「スマン火ノ兄!!調子に乗って無理をさせ過ぎた!!すぐにISを解除するんだ!!」

やはり無理をしていましたのね!?

永遠

「分かつ…ん?」

…永遠さん?

くセシリア Side outく

く永遠 Sideく

ググッ…【六道剣^{りくどうけん}】を呼び出す程には回復しとらんかったか…

千冬

「すぐにISを解除しろ!!」

織斑先生もああ言つとるしそうするか…【戦国龍皇】のお披露目も十分じゃろうしな

…

ワシはそう思つて解除しようとしたが…

ドクンツ!

永遠

「ん?」

何か…聞こえたような…

ドクンツ!

また聞こえたのお…空耳ではなかったか…

じゃが何の音じゃ?

何かが脈打つ様な音じゃが…

ドクンツ!

ワシはISを解除せず、音の出所を探そうと辺りを見渡した

千冬

「どうしたんだ!早く解除しろ!!お前の体がもたんど!!」

セシリア

「永遠さん!!!」

簪

「聞ってるの!!!」

本音

「早くしてよ〜!!!」

セシリア達もワシを心配しておるが今はこの音じゃ…

どうやらワシにしか聞こえておらんようじゃしな…

ドクンッ!

ワシは眼を閉じ、意識を耳に集中させると…

ドクンッ!

永遠

「!？」

聞こえた方を向いた

じゃが、そこにあつたのは…

永遠

「……………【オニマル】？」

【六道剣^{りくどうけん}】の一振り…【炎龍刀オニマル】じゃった…
永遠

「…あの音はお前が出しとったのか？」

ワシはそう言いながら【オニマル】に近づいた

一夏

「音？音なんて聞こえたか？」

じゃが周りの物はワシの行動や言つとる事が分からず困惑しておつた

そしてワシが【オニマル】の前に立つと…

ボオオオオオオオオオツ!!!

全員

「!？」

【オニマル】が突然燃え出しおつた

千冬

「な、何事だ!？」

セシリア

【オニマル】が!？」

【オニマル】が突然燃え出した事で全員が異変に気付いた

ザワザワ…

周りが慌てる中、ワシは燃え続ける【オニマル】を見て理解した…あの音を出しておいたのは間違いなく【オニマル】じゃ

あの音はワシを呼ぶ為に【オニマル】が出しておったのじゃ…

ワシはそう結論付けると燃え続ける炎の中に腕を突っ込んだ

セシリア&簪&本音

「永遠（さん）!!!」

ガシッ!

ワシは【オニマル】の柄を掴むと…

永遠

「ワシを呼んだ理由、教えて貰うぞ!!!」

そう言っつてワシは地面に刺さっておる【オニマル】を引き抜いた

永遠

「!？」

引き抜くと同時に炎も消え去った…

じゃが、炎の中から現れた【オニマル】は…

全員

「!?」

一夏

「姿が…変わった!?!」

織斑の言う通り【オニマル】は姿を変えておった…

赤い炎の刀身は更に燃え盛る炎のように巨大な刃へと変わっておった…

その姿を見てワシは理解した…

【オニマル】も【戦国龍】同様、進化しようとしておったのじゃ…

永遠

「コレが生まれ変わったお前の姿か…【炎龍刀オニマル・真打】!!!」

全員

「『真打』!?!」

ワシは新しくなった【オニマル】を見つめていたが…

永遠

「グッ!」

限界が来おったか…仕方無い…

ワシは【戦国龍皇】を解除した

それと同時に【オニマル】と他の【六道剣^{りくどうけん}】も消えた

永遠

「ぐっ…ハア…ハア…」

ISを解除したワシはその場で膝をついた

完全回復にはまだ遠いようじやな…

セシリア&簪&本音

「永遠（さん）!!!」

ワシを心配して3人が駆け寄って来た

セシリア

「大丈夫ですか!？」

簪

「苦しくない!？」

本音

「痛いところない!？」

永遠

「ああ、もう平気じゃ…心配をかけてスマン…」

ワシは笑いながらそう言った

これ以上無理をすると3人を泣かせてしまいそうじやからな…それは流石に嫌じや

からな…

千冬

「いや、謝るのは私の方だ…無理をさせてすまなかつた!!」

永遠

「気にせんでいいわい…それに多少無理をしたお陰で収穫もあつたしのお…」

千冬

「…【オニマル】の事か…『真打』と言っていたが…だとすれば以前の【オニマル】を超えたものになっているだろうな…」

永遠

「じゃろうな…」

織斑先生も気づいとおつたか…

セシリア

「あの、真打とは何ですか？」

永遠

「ああ、真打言うんは簡単に言えば一番優れた刀の事じゃ。」

セシリア

「一番優れた？」

千冬

「そうだ、日本刀を造る際、必ず複数造るそうだ。」

シャルロット

「何故そんな事をするんですか？」

千冬

「複数造る事でその中から最も優れた刀を選ぶ為だ。その選ばれた刀を『真打』と呼ぶんだ。」

永遠

「それに対して選ばれなかった劣る刀を『影打』と言うて自分の手元に残したり、誰かに譲ったりするそうじゃよ。」

ラウラ

「『真打』と『影打』…」

千冬

「だからと言って刀を造る際は必ずそうする訳では無いぞ。」

セシリア

「ではどういった時にするんですか？」

千冬

「主に誰かに依頼された場合、後は神社に奉納する刀を造る際とかだな。そういった時に複数造るのが通例になっている。」

一夏

「じゃあ【オニマル】の場合は？」

千冬

「本来の意味とは少し違うが進化と言う形で『真打』になったんだろう。」

永遠

「うむ、恐らく【戦国龍】の進化が【オニマル】にも影響を与えたんじゃないだろう。」

一夏

「でも何で【オニマル】だけなんだ？」

ラウラ

「そうだな…他の5本に変化はなかった…」

永遠

「その辺の理由は【戦国龍】と【オニマル】が同じ炎を司っておるからじゃろうな…」

千冬

「成程…同じ属性だから影響を受けたと？確かにそれなら辻褃は合うな…」

ワシの考えに織斑先生も同意し、他の者達も頷いておった

永遠

「まあ、ワシが全快せん事には当分使う事はあるまいて…」

千冬

「それもそうだな……さて、色々トラブルもあつたが授業を続けるぞ！」

全員

「はい!!!」

その後、授業は再開されたが、ワシは先程の無理がたたつて完全な見学側になってしまった…

く永遠 Side outく

く箒 Sideく

箒

「……………」

私はあの日から反省文500枚を書き続けていた…

本当はこんなもの500枚も書きたくは無いのだが全て書くまで出られないと言われているので仕方なかった…

しかも今度の臨海学校までに書き終わらなければ参加出来ないとまで言われた…

ふざけるな!! 臨海学校のある日は私の誕生日だ!!

それをこんな所で過ごしてたまるか!!

だから私は寝る間も惜しんで書いていた

【戦国龍皇】が手に入らなかつた以上、気は進まないがもはや姉さんに頼むしかない
幸い携帯は取り上げられなかつたから姉さんにはすでに連絡済みだ

恐らく姉さんは私の誕生日に持って来る筈…その為にもここから出なければ!!

そして今日も朝から反省文を書いていた

そんなある時…

警備1

『交代よ。』

警備2

『分かつたわ。』

この懲罰房の監視をしている警備員が交代に来た

本来は必要無いのだが、私が逃げ出すかもしれないと危惧した千冬さんが態々呼びつ
けたらしい

クソツツ!そこまで私を信用してないのか!!

だが、もはや扉の外の事などいつもの事だから気にもしなかつたが…

警備1

『そう言えばさつき聞いたんだけど【戦国龍皇】って言うISの武器が進化したって大騒ぎになってるわよ?』

箒

「!?’

今…何て言った…

警備2

『進化? ISじゃなくて武器が? 何それ?』

警備1

『私も詳しくは知らないけど…何でも【六道剣^{りくどうけん}】って言う刀の一つがパワーアップしたんですって。』

【六道剣^{りくどうけん}】だと!?’

警備2

『それってあの事件の時に出来た6本の刀の事よね? アレが全部進化したの?』

警備1

『いいえ、赤い剣だけだそうよ。』

赤…と言う事は…【オニマル】か!!

警備2

『へく…一度見て見たいわね…』

警備1

『暫くは無理みたいよ？火ノ兄君の体がまだ治って無いから。』

警備2

『それじゃあしようがないか…じゃあ後よろしくね。』

警備1

『ええ、お疲れ様。』

私が聞いている事にも気づかずそいつ等は話を終えて交代して行った

筈

「……………クソツ!!」

【戦国龍皇】め!!!私の物にならなかった事を後悔させてやるからな!!!

く筈 Side outく

第096話：恋の作戦会議

「セシリア Side」

簪

「セシリア、今夜私と本音の部屋に来てくれない？」

セシリア

「はい？」

放課後になると簪さんが突然そんな事を言ってきました

簪

「それとも何か予定がある？」

セシリア

「いえ、ありませんけど…」

簪

「じゃあ来て！どうしても話したい事があるの！」

セシリア

「分かりました…話と言うのはわたくしだけですか？」

簪

「本音も一緒、もう話してある。」

本音さんですか…と言う事は…十中八九永遠さん絡みですわね…多分…

セシリア

「では夕食を終えたら伺いますわね。」

簪

「うん！待ってる！」

さて…簪さんは一体何を話す気なのでしょうね…

くセシリア Side outく

く簪 Sideく

簪

「……………」

セシリア

「……………」

本音

「……………」

夕食が終わるとセシリアが訪ねて来た

そして今、私は本音も交えて3人で向かい合っていた

私達が暫く無言でいると…

セシリア

「…それで簪さん？わたくしに何の話でしょうか？」

セシリアが行き成り本題を聞いて来た

私は1回深呼吸をすると…

簪

「永遠の事…」

内容が永遠の事だと言った

でも…

本音

「やっぱり〜。」

セシリア

「だと思いました。」

2人とも私の用件に気付いていた

それならこつちも遠慮せずに言わせて貰う
簪

「2人に聞くけど…永遠をどう想ってる？」

私の直球の質問に対して2人は…

セシリア

「一人の男性としてお慕いしております!!!」

本音

「大好きだよ〜♪」

迷いなく答えた

セシリア

「簪さんは？」

すると同じ事をセシリアが聞き返してきた

私の答えも決まってる！

簪

「私も永遠が好き!!この気持ちは2人に負けてないつもり!!」

そうはつきり答えた

セシリア

「……………」

簪

「……………」

本音

「……………」

そして私達は再び無言になったけど…

セシリア&簪&本音

「…プツ！」

セシリア

「フフフフフ♪」

簪

「アハハハハ♪」

本音

「ニヤハハハ♪」

揃って笑いだした

セシリア

「やはり…同じですわね♪」

簪 & 本音

「うん♪」

私達は同じ人を好きになった…

でも、だからって相手が憎い訳じゃ無い！

それはセシリアと本音も同じだった

良かった…2人も同じ気持ちでいてくれて…

本音

「でもかんちゃん？本当にどうしたの？行き成りこんな事聞くなんてさく？」

本音の疑問も尤もだね…よし!!

簪

「うん…じ、実はね？…その…前から考えてたんだけど…永遠に…その…こ、『告白』…

しようかなって…」 // //

セシリア & 本音

「え？」

簪

「2人の気持ちも勿論知ってた！そんな2人に抜け駆けするのは気が引けて…」

セシリア

「それでわたくしを呼んだんですね？」

簪

「…うん…」

何て…思うかな？

馬鹿正直すぎるって…笑うかな…

セシリア

「それでこそわたくしの恋のライバルですわ!!」

簪

「え？」

セシリア？

本音

「かんちやくくん？もしかして私達が『馬鹿正直すぎる』って笑うと思っただけ？」

ギクツ!!

バレてる!?

セシリア

「簪さん？わたくし達を舐めないで下さい！そんな事で笑うような心の狭い人間ではありませんわ!!」

本音

「そうだよ!!」

うっ…2人とも少し怒ってる…

簪

「ゴメン…」

私が馬鹿だった…本音は勿論、セシリアがそんなに心の小さい人間じゃ無いって事はとっくに知ってたのに…

セシリア

「まあわたくしもしょうかと考えていましたからね…」

簪

「え?」

本音

「実は私もう♪」

簪

「ええっ!?!」

2人も同じ事を!?

セシリア

「……………あのような事が…ありましたからね…」

簪&本音

「……………」

そう、私が告白しようとした理由もそれが原因…

永遠が…死にかけたから…

ううん、ツルさんが助けなかつたら本当に死んでた…

永遠が復帰した後、何で戦えたのかを聞いたらツルさんが「ドットプラスライザー」と

【ラインバレル】の力で動けるようにしていたらしい…

そして、永遠が死なないように押さえていたとも聞かされた…

それは逆に言えばツルさんが動かなかつたら永遠は死んでいたという事に他ならな

い…

自分の気持ちも伝えられずに永遠を失つたらと思うだけで今でも震えがくる…

だから永遠が無事に戻って来てからこの想いを伝えようって言う気持ちが強くなっ

ていた…

どうやらそれは2人も同じだったらしい…

本音

「それでどうしよつか?」

簪

「え？」

本音

「私達つて、同じ人を好きなんだよ？告白するとしてどうやってするの？」

セシリア&簪

「あ!？」

本音の言う通りだ…抜け駆けしないならどうすればいいんだろ…

本音

「いつその事3人同時にする？」

セシリア&簪

「えっ!？」

3人…同時!？」

セシリア

「本気ですか!？」

本音

「うん！私は本気だよ！それなら抜け駆けにならないし、永遠が誰を選んでも恨みっこ無しって事ならアリだと思っけどなく？」

セシリア&簪

「うっ！」

確かに…それなら一気に解決出来る…

セシリア

「悪くは…無いですね…」

簪

「う、うん…」

私もセシリアも本音の提案に乗り始めた

でも…

簪

「もし…永遠が『選べない』って言ったらどうする？」

セシリア&本音

「あ…」

他に好きな人がいるなら悔しいけど諦める…

私達の中で選んだなら…選ばれなかった時は素直に祝福する…

でも、永遠が選べないって言う可能性もある…

ううん、多分それが一番可能性が高い…

永遠は織斑一夏と違って朴念仁じゃ無いから私達の気持ちに気付いてるかもしれない……

だから選べないって言う答えが来るかもしれない……

セシリア

「ふむ……それでしたら………」

するとセシリアが私達にある提案を出した

それを聞いて……

簪

「……悪くないね？」

本音

「うん！それならみんな幸せになれるよ〜♪」

私と本音も乗り気になった

世間体に反するかもしれないけど……私達はこれがいいと思った！

セシリア

「ではそれで行きましょう！」

簪&本音

「うん！」

そして永遠が選べなかった時の対応を決めた

簪

「じゃあ…何時告白しようか？」

次に私達が何時、何処で告白するか話し始めた

本音

「う〜ん…学園の中ですか？」

簪

「それだと誰かに見られそうで少し嫌だな…」

特にお姉ちゃん辺りに見つかると絶対面倒が起きる…

本音

「そだね〜…」

セシリア

「それでしたら今度の休みに臨海学校で着る水着を買いに行こうと思ってましたの。それに永遠さんも誘って4人で行きませんか？その時にでも…」

どうするか悩んでるとセシリアがそんな提案をしてきた

確かに私も水着を買いに行こうと思ってたし、街中なら人の少ない場所もある筈…

簪

「それいいかも！」

本音

「うん！4人でデートしよう♪」

セシリア

「ではそれで行きましょう♪それに、永遠さんに水着を選んで貰いたいですし♪」

簪&本音

「うん!!」

後は…永遠がどう答えるかただだね…

く簪 Side outく

第097話：休日デート♪（トラブル編）

～永遠 Side～

セシリア

「永遠さん♪」

永遠

「ん？」

金曜の放課後、ワシは帰ろうとしたらセシリアに呼び止められた

永遠

「何じゃ～？」

セシリア

「明日は予定がありますか？」

永遠

「明日か？ん～…コレと言って無いのお？」

やる事と言ったら畑仕事をして軽く体を動かすくらいじゃからな…

まだ完治しとらんから剣の鍛錬は出来んしな〜…

セシリア

「でしたら明日付き合つて下さいませんか？ 簪さんと本音さんと一緒に買い物に行くのですがよければ永遠さんも一緒にしませんか？」

永遠

「買い物か…」

とは言うてもワシは基本は自給自足何じやよな〜…

まあたまにはいいか…

永遠

「構わんぞ。」

セシリア

「ありがとうございます♪」

本音

「わ〜い♪」

ぬお?! 本音、居つたのか… 相手が本音とは言え気付かんとはだいぶ鈍つとるな…

クロエが言うには夏休みが始まる頃に完治すると言うとるし、休みを利用して厳しめに鍛え直すとするかの…

まあ今はそれは置いて…

永遠

「では待ち合わせはどうする？」

セシリア

「そうですね…町中にISで来るのもマズいですので学園にしましょう。朝の…9時頃に校門前に来て下さい。」

永遠

「うむ、分かった。」

折角のお誘いじゃ…ワシも楽しむとするかのお…

♪永遠 Side out♪

♪本音 Side♪

えへへ♪やつとこの日が来たよ♪

一晩しか経ってないけど時間が長く感じたな…

それだけ楽しみて事なかれどね♪

一緒にいるかんちゃんとセツシーも同じみたいだもんな♪
んで、今私達は校門の前で永遠が来るのを待つてるんだ♪

かんちゃんもセツシーも気合を入れておめかししてるんだよね♪私もしてるんだ
けどね♪

そんな訳で暫く待つてると…

ブンッ!

セシリア&簪&本音

「!?」

私達の前に「ラインバレル」が現れた

セシリア&簪&本音

「永遠(さん)♪」

永遠

「待たせてスマン。」

私達に謝ると永遠はISを解除した

永遠

「今日は誘ってくれてありがとな。」

セシリア

「いえ、永遠さんもわたくし達のお誘いを受けて下さりありがとうございます♪」

簪

「うんうん♪」

本音

「ね〜ね〜早く行くようよ〜♪」

永遠

「そうじゃな、では行くかの?」

セシリア&簪&本音

「はい♪」

私達は学園から繋がってるモノレールに乗って町へと向かった

〜本音 Side out〜

〜簪 Side〜

町に到着した私達は折角だから永遠と街を少し散策した

その後、シヨップिंगモールの「レゾナンス」に向かったんだけど…

永遠

「…何しとるんじゃアイツ?」

セシリア&簪&本音

「ヤ〜あ?」

水着売り場にやつて来ると、そこには織斑一夏とシャルロットが先に来ていたんだけど何か揉めてるみたいだった

少し離れた場所から様子を窺っていたけど、どうやら織斑一夏は揉めてる女性の物まですぐに買わされそうになっているみたいだった

永遠

「白昼堂々恐喝紛いな事を平然とやるとは世も末じやの〜…」

セシリア

「同じ女性として恥ずかしい限りですわ…」

簪

「右に同じ…」

本音

「以下同文…」

あんなのと同じだなんて思われたくない！

セシリア

「それでどうします?」

永遠

「ワシ等の目的もあそこじゃからな…流石に顔見知り絡まれとるのを無視して買い物

「なんぞ出来んからのお…」

本音

「じゃあオリム達を助けるんだね…でもどうやって？」

永遠

「そうさの…」

永遠は少し考えた後…

永遠

「よし、本音、その辺に警備員がいる筈じゃから呼んでくるんじや。」

本音

「ほえ？」

永遠

「あの様子ではあの女、今みたいな事を何度もやつとるじやろうし、デパート側も気づいておろう。恐らく事情を話せばすぐに捕まえに動いてくれるじやろう。ワシ等はそれまで奴が逃げんように足止めしとくわい。」

本音

「分かった〜！」

本音は頷くと警備員を探しに走って行った

残った私達は…

永遠

「では行くかの？」

セシリア&簪

「はい（うん）!!」

自然を装ってあの騒動に関わりに向かった

ゝ簪 Side outゝ

ゝ一夏 Sideゝ

女

「早く買えって言ってるのよ!!」

一夏

「くっ…」

何なんだよこの女！行き成りやって来て自分の分も俺が払うって何だよ!!

しかもこの女、俺が断ったら大声で騒ぐって言いやがるし、完全に恐喝じゃねえか!!
その上、店員の人連絡しないように睨んでやがる…これじゃ警備の人を呼べもしね

え…

俺がどうするか悩んでいると…

永遠

「何を騒いどるんじや？」

一夏

「え？…ひ、火ノ兄!？」

シャルロット

「火ノ兄君!？」

火ノ兄が現れた…オルコットと更識さんも一緒にいるけど…アレ？のほほんさんがいない？何でだ？

ってそんな場合じゃねえ…今はコイツをどうにかしねえと

永遠

「他の客に迷惑じやる。何をレジの前で騒いどるんじや。揉め事なら他所でやらんかい。」

一夏

「い、いや、それは分かってるんだけど…」

…コイツに目を付けられて動けねえんだよ…

女

「何よアンタ！」

永遠

「そいつのクラスメイトじゃがお主こそ誰じゃ？織斑の知り合いか？」

一夏

「ち、ちが…!？」

コイツ、息を吸い込んだ…俺が否定したら騒ぐつもりかよ！

クソツ！何とか火ノ兄達にコイツは赤の他人だつて分かつて貰わねえと…こんな女と知り合いだなんて思われたら今度はどんな説教されるか…

永遠

「…で？そやつは誰なんじゃ？」

一夏

「それは…」

ココで俺が理由を言えばこの女は本当に騒ぎを起こして俺と、火ノ兄まで巻き込んで無実の罪を着せちまう

女

「フツ♪」

くっ…この女、俺が何も言えないの分かつてやがる

ムカつく顔しやがって…

一夏

「ぐぐっ…」

俺が何も言えずにいると…

永遠

「ハア〜…」

火ノ兄が行き成り溜息を吐いた

永遠

「…織斑…もう少しシャキツとしたらどうなんじゃ…」

一夏

「え？」

女

「ん？」

永遠

「普段からもっとしつかりしとれば『こんな奴』に目を付けられんわい。」

女

「こんな奴ですって!？」

シャルロット

「火ノ兄君…もしかして君…」

初めから分かつてたのか…いや、火ノ兄ならそのくらい分かるかも…

女

「アンター！男の癖にこの私をこんな奴呼ばわりするなんていい度胸じゃない！私が誰だか分かつてるの！」

永遠

「知らんのお？簪、『日本の代表候補生』のお主はこやつを見知っておるか？」

女

「!?…に、日本の代表候補生ですって!？」

簪

「ううん、競い合った人達の顔は全員覚えてるけどこんな人見た事が無い。」

永遠

「と、言うとするが…お主は何処の誰じゃ？偉そうに命令できるような立場の人間なんか？まさかとは思うが自分が『女』だから偉いとか言う気かのお？何時から『性別の違い』が『身分の違い』になったのかのお？」

女

「ぐっ……ぐうっ……」

あ、言い返さないって事は凶星だな

永遠

「まあこげな所で集りなんぞやつとる奴に身分や立場なんて高尚な物がある筈も無いからのお？」

女

「た、集り!?お、男の分際で……」

!?……コイツまさか!?

女

「誰かああああああああつ!!!」

!? この野郎!?火ノ兄に口じゃ勝てないからって騒ぎを起こして有耶無耶にする気かよ

……アレ?何で騒がれてるのに火ノ兄達は落ち着いてんだ?

永遠

「……うるさい女じゃの……騒がんでももう来とるわい。」

一夏&女

「……え?」

来てるって…何が…

本音

「永遠♪連れて来たよ♪」

え！のほほんさん!?

何で警備員というんだよ!?

永遠

「^ズ苦労さん。」

本音

「えへへ♪」

そうか、のほほんさんだけ居なかったのは警備員を呼びに行ったからなのか…

警備員

「それで、これは何の騒ぎですか？」

女

「コ、コイツ等が私にセクハラしてきたのよ!!」

言うに事欠いてセクハラだと!?

警備員

「セクハラ?…どうなの君達? 本当にそんな事をしたんですか?」

女

「ちよつと！何でそいつ等にも聞くのよ！私の証言だけでいいじゃない!!」

何だコイツ？急に慌てだしたぞ？

永遠

「する訳無かるう？誰が好き好んでこんな『年増』にセクハラなんぞするか！そこまで『悪趣味』では無いわい！」

女

「と、年増!?悪趣味ですって!?!」

うわゝ、いつもの事だけどハッキリ言うなゝゝ

永遠

「大体ワシもこやつも女連れじゃぞ？何でこやつ等の前でこんな厚化粧の年増に態々セクハラなんぞせにやならんのじゃ？セクハラして捕まるならこやつらにするわい！」

セシリア&簪&本音

「……………」

何であの3人顔を赤くしてるんだ？

女

「コ、コイツ!!」

更に厚化粧まで追加されて散々年増呼ばわりされた女が火ノ兄に襲い掛かろうとした…

でも…

警備員

「ハイそこまで！」

その前に警備員が女を捕まえた

女

「何のつもりよ!!」

警備員

「何のつもり? お前こそ『今まで』ココで何をしてきた?」

女

「!?:…な、何の事よ!？」

警備員

「今回の彼の様な事をお前はこのデパート内で何度も繰り返していたな?」

女

「!？」

この女、俺以外にも同じ事を何度もしていたのか!？」

警備員

「今迄は我々が駆けつける前にお前の脅しに屈したり、逃げられていたが、お前はこのデパートの『ブラックリスト』に登録された要注意危険人物になってるんだよ！」

女

「な、何ですって!?!」

ブラックリストに載るってこの女どれだけココで悪さしてきたんだよ…

警備員

「フンツッ！あれだけの事をしておいて目を付けられない訳無いだろ？そう言う訳で現行犯でお前はそのまま警察に突き出す。向こうからもお前を捕まえたらすぐにしょつ引いて来いと言われてるんでね。」

女

「そ、そんな…いい、嫌よ！何で私が!?!」

女は抵抗するけど後からやって来た他の警備員に連行されて行った…あの様子じゃ本当に警察行きだな…

警備員

「ありがとうございます。お陰で奴を捕まえる事が出来ました。あんなのが出没しているとこのデパートの信用にも関わりますから困っていたんですよ。」

本音

「いえいえ。」

警備員

「では私はこれで。」

のほほんさんにお礼を言うと警備員は行ってしまった

一夏

「…はあ…」

どっと疲れたな…

一夏 Side out

第098話：休日デート♪（買い物編）

～一夏 Side～

あ～…やつと解放された…

一夏

「のほほんさん…ありがとう。」

シャルロット

「助かったよ…」

本音

「私は永遠に言われて呼びに行っただけだよ、お礼なら永遠に言っつ～♪」

やつぱり火ノ兄の仕業だったか…

一夏

「火ノ兄、助かった…」

永遠

「気にせんでいい、ワシ等としてもあんなのがおると落ち着いて買い物が出来んからな。」

一夏

「だよな〜…」

永遠

「じゃがな〜…」

一夏

「え?」

火ノ兄のこの雰囲気…ま、まさか…

永遠

「さっきも言うたが…もつとシヤキツとせんか!!」

一夏

「!?!」

や、やっぱり説教が始まった!?

永遠

「今回はあの年増をとつ捕まえるのにお前のその態度が役に立ったが、ああいった奴に目を付けられる様なお前にも問題はああるんじやぞ!!」

一夏

「うぐっ…」

言われてみると…そうだ…

永遠

「今のままじゃとまた今回の様に絡まれるぞ!!もちつと堂々とせい!!」

一夏

「…はい…」

永遠

「店ん中でこれ以上騒ぐ訳にもいかんからこのくらいで済ませるがワシの言った事を少しは考えとけ!!」

一夏

「そうします…」

全員

「……………」

火ノ兄の説教で周りがすっかり静まり返ってしまったな…

はあ…

永遠

「店内で騒いで申し訳ない。」

店員

「い、いえ…お気になさらず…」

火ノ兄は店員に謝るとオルコット達を買い物を始めた

俺も店員に謝るとシャルロットと店を後にした

けど、店を出るとそこには…

千冬

「……………」

一夏

「ちふ、織斑先生!？」

千冬姉と山田先生が立っていた

一夏

「な、何でココに居るんだ!？」

千冬

「私達は見回りだ。羽目を外して騒ぎを起こすバカがいるかもしれないからな。」

騒ぎ…もしかして…

シャルロット

「あ、あの…もしかしてさっきの事…」

真耶

「あはは……はい……見てました……」

や、やっぱり……って事は……

千冬

「……………」

む、無言の千冬姉……恐ろしい迫力だ……

千冬

「……私も説教と言いたいが……まあ、いいだろう……」

一夏

「へ？」

千冬姉も説教するのかと身構えていたんだけど……

千冬

「火ノ兄にあれだけ言われれば十分だろ？」

一夏

「うっ……」

千冬

「私は山田先生と見回りを続ける。今回の事は巻き込まれた側だから目をつぶってやるが次に何か起こせば分かってるな？」

一夏&シャルロット

「はい!!!」

千冬姉はそう言つて山田先生を見回りに戻つて行つた

……

……

…

一夏&シャルロット

「はあ〜……」

デパートから外に出ると俺達は揃つて息を吐いた

一夏

「つ、疲れた……」

シャルロット

「ホントだね……」

一夏

「……ああ……それでシャル、このまま『あそこ』に行くのか？」

『あそこ』に行く前にシャルをリラックスさせようと思つてここに来たけどまさかあんな事になるなんてな……

シャルロット

「あ、うん！僕は行くよ！疲れたなら一夏は先に帰っていていいよ？」

一夏

「馬鹿言うな…ココまで来て帰れるかよ…出来る事は無くても付き合うよ…」

シャルロット

「一夏…ありがとう♪…じゃあ行こっか？」

一夏

「ああ。」

そして俺達はある場所に向かって行った…

く一夏 Side outく

く永遠 Sideく

騒ぎも収まったからワシ等は水着を物色しておった

そして現在、セシリア達3人は自分の選んだ水着を試着する為に試着室に入ってお
た…

セシリア

「永遠さん！これどうですか？」

そう言つて試着室から出てきたセシリアは青いビキニを着ておつた……うゝむ…
永遠

「そうじゃのゝ…やはりセシリアには蒼が一番似合うと思うからいいと思うぞい。」
セシリア

「そ、そうですか♪ウフフツ♥」／／／
喜んでくれるのはいいんじやが…

簪

「と、永遠…私は…どうかな？」

次は簪が出て来たが…黒のビキニか…

永遠

「似合うと思うぞ？」

簪

「ホ、ホント!!…エへへ♪」／／／

目のやり場に少々困るんじやがな…

本音

「ねゝねゝ私は…？」

永遠

「ん？……へ？」

キ、キツネの着ぐるみ…何故に水着売り場にこんなもんが置いてあるんじゃない？だが
まあ…

永遠

「本音らしいと思うぞ？」

本音

「ワ～イ♪（フッフッフ～♪中にはビキニを着てるのだ～♪コレで永遠をメロメロにしてやるのだ～♪）」

ワシが3人の選んだ水着の感想を言うかと納得したのかその水着を買って行った

本音のは果たして水着と呼べるのか怪しいがな…

まあいいか…目的の物も買った事じゃしワシは店を出ようとしたのじゃが…

簪

「アレ？永遠は水着買わないの？」

簪はワシが水着を買わなかった事に首を傾げておった

セシリアと本音も同様じゃった…

永遠

「いや…それは…」

それを聞かれるとな…

本音

「それは〜?」

…はあ…仕方無い…こういう時はハッキリ言うに限るな…

永遠

「金が…無くてな…」

セシリア&簪&本音

「へ?」

永遠

「ワシは基本、自給自足じゃからな…水着のような遊びに使う様な余分な金は無いんじゃないよ…」

セシリア&簪&本音

「あ!?!」

永遠

「そう言う訳じゃからワシは買わんでいいんじゃないよ。」

ワシはそう言って店を出ようとしたんじゃがセシリア達は何かを相談し始めた
すると…

セシリア

「でしたらわたくし達が永遠さんの水着の代金を出しますわ！」

永遠

「へ？」

いきなり何を…

簪

「永遠には色々とお世話になってるし、そのお礼も兼ねて私達が買ってあげる！」

永遠

「いや、それならワシが伏せておった時に畑の手入れをしてくれただけで十分じゃ！

むしろワシの方がお主等に世話になっとるんじゃないぞ？」

本音

「いいからいいから♪」

永遠

「じゃが…」

本音

「それに、永遠が水着持ってないと遊べないもん！だからその為にも買ってあげる」

♪

セシリア&簪

「うんうん!!」

本音がそう言うのと2人も頷いた

そりゃ折角の臨海学校じゃからセシリア達と海で遊びたいとは思うが…

セシリア

「それに永遠さん？人の好意を無碍にするのは失礼ですわよ？」

永遠

「うっ…」

そう言われると…

永遠

「はあ…分かった…」

結局ワシの方が折れてしもうた…

セシリア&簪&本音

「ワ〜イ♪」

それからワシは自分のを探したがいくら3人が払うとは言っても高いのが欲しい訳でも無いからのお…

一番安いのでいいわい

く永遠 Side outく

く簪 Sideく

永遠の分の水着も買い終ると私達は昼食を済ませてそのままモール内を散策して
た

………

………

………

それから時間も経って日が沈み始めた夕暮れ時……

永遠

「そろそろ帰るかの?」

永遠が帰ろうと言って来た

確かにもう夕方……そろそろ帰った方がいい……

でも、まだ帰る訳にはいかない……

永遠を誘った本来の目的が残ってるから!

セシリア

「……永遠さん……最後に行きたい場所があるのですが宜しいですか?」

永遠

「ん？構わんぞ？」

簪

「よし!!」

本音

「じゃあ行く〜!」

永遠の了承を得ると私達は事前に調べておいた場所に向かった…

いよいよだ!!

〜簪 Side out〜

第099話：休日デート♪（告白編）

（永遠 Side）

セシリア達の案内で付いた場所は海に見える小さな公園じゃった…

しかしこの公園、人氣が殆ど無いのお？

居るのもワシら4人だけじゃし、こげな所で何する気じゃ？

ワシがそんな事を考えておると…

セシリア&簪&本音

「永遠（さん）…」

永遠

「ん？」

3人が神妙な顔もちでこつちを見とつた…

この表情…それに人氣の無いこの場所…ああ…そう言う事か…

出来れば…もう暫くは今のままが良かったんじゃがのお…それももう終わりか…

セシリア

「永遠さん…あの…わたくし達…そ、その…」

永遠

「…慌てずともよい…」

セシリア&簪&本音

「…え？」

永遠

「…『覚悟』を決めてココに来たんじゃろ？慌てずともワシは逃げん、落ち着いてしつかりと伝えい…」

簪

「永遠…気付いてたの？」

永遠

「今しがた…お主等を見てな…」

ワシはそう言つて一度深呼吸をした…

永遠

「…ワシもお主等の言葉を受け止める『覚悟』を決めた…」

セシリア&簪&本音

「!？」

すると3人もワシと同じように深呼吸をした

そして…

セシリア

「永遠さん！」

簪

「永遠！」

本音

「永遠〜！」

永遠

「……………」

セシリア&簪&本音

「好きです!!!」

3人は…ワシへの気持ちを伝えた

セシリア

「永遠さん…わたくしは貴方を一人の男性としてお慕いしています…わたくしと…お付き合いたい下さい!!!」

簪

「私は…永遠が好き！この気持ちは誰にも負けてない！だから…私を、彼女にして下さい!!!」

本音

「永遠♪私ね、永遠が大好きなんだ♪一緒にいると凄く楽しいんだ♪だから、これからも一緒にいて下さい!!!」

永遠

「……………」

3人はそれぞれの言葉でワシへの想いを伝えてくれた…よもや3人の女子に同時に告白されるとは思ってもみなかった…

しかし、告白されたからには返事をせんといかんのじゃが…

セシリア&簪&本音

「……………」

ワシは…誰を選べばいいんじやろうか…

3人はワシから目を逸らさずに返事を待つとる…

セシリアも…簪も…本音も…皆とても魅力的な女性じゃ…そんな娘達に思われてワシは男冥利に尽きるわい…ワシなんぞにはもつたない娘達じゃよ…

じゃが、それはそれとして…どう答えるか…

永遠

「……………」

…自分が情けないのお…覚悟を決めたと言うたのに…織斑にもああ言っておいて…この体たらくとは…

仕方ない…ココは素直に今の気持ちを伝えるしかないか…

永遠

「セシリア、簪、本音…お主等の気持ちは本当に嬉しい…ワシなんぞにはもったいないくらいじゃ…」

セシリア&簪&本音

「……………」

永遠

「じゃが…スマン!!今のワシにはお主等の誰か一人を選ぶ事が出来ん!!覚悟を決めたと言うて優柔不断で申し訳ないがワシにはこれしか答えられん!!」

ワシはそう言つて頭を下げた

セシリア&簪&本音

「……………」

3人は何も答えんかった

ワシがそのまま頭を下げたままでいると…

セシリア&簪&本音

「永遠（さん）…」

3人に呼ばれたワシが顔をあげると…

永遠

「…え？」

3人は…笑っておった…何故に笑つとるんじや？

セシリア

「やはりそう答えましたか…」

永遠

「へ？」

簪

「今の永遠ならそう言うかもって思ってた…」

永遠

「なぬ？」

ワシが『選べない』と答えるのが分かつとつたのか？

だが、それならそれで何故に笑顔でいるんじや？

本音

「じゃあかんちゃん、セツシー、打ち合わせ通りでいいね？」

セシリア&簪

「はい（うん）！」

打ち合わせ？…打ち合わせとは何ぞ？

セシリア

「それでは永遠さん！」

永遠

「は、はい!!」

何じゃろ…どえらい事になりそうな予感が…

セシリア&簪&本音

「私達3人を彼女にして下さい♥」

永遠

「…はい？」

今何と言った？

彼女？

3人を？

全員？

ワシの彼女に？

永遠

「えく…スマンが皆さんや…それはどう言う事かの？」

簪

「だから、私とセシリアと本音を永遠の恋人にしてって言ったの！」

聞き間違いではなかったか…じゃが…3人纏めてじゃと？

永遠

「…どう言う事かの？」

セシリア

「実は今日の為に3人で話し合ったのですがその時、永遠さんが答えられないと言う可能性のある事に気付いたんです。」

永遠

「ぐっ…」

その通りじゃから何も言えん…

簪

「それでいつその事、永遠が『選べない』って答えたら3人全員が恋人になろうって結論

が出たんだよ。」

永遠

「いやいや、何故にそういう結論になる？そもそも3人一緒ってお主等本当にそれでいいのか？」

ワシの問いに3人は…

セシリア

「いいですわ♪」

簪

「問題無いよ♪」

本音

「大丈夫だよ♪」

事も無げに答えよった…

永遠

「さ、さよか…」

まさかここまで迷いなく答えるとは…

「世間体や道徳的に色々ヤバいと思うのじゃが…この様子ではその辺も気にしとらん
な…」

本音

「それで……永遠の答えは？」

ぬっ!?!…そうじゃったな………選べぬなら3人一緒に彼女にしてくれ、か…

永遠

「…そうさの…では、ワシもお主等の輪の中に入れて貰えるかの？」

セシリア&簪&本音

「!?!」

態々こんな提案までしてくれたんじゃ…なら、それに応えねば男が廃ると言うもん
じゃな!

簪

「じゃ、じゃあ…」

永遠

「改めてよろしく頼む！」

ワシがそう答えると…

セシリア&簪&本音

「永遠~~~~♪」

永遠

「ぬおっ!？」

3人はワシに抱き着いて来た

驚きはしたがワシは3人をしっかりと受け止めた

セシリア&簪&本音

「これからもよろしくお願いします♪」／／／

永遠

「ワシの方こそな♪」

こうしてわしは一度に3人の恋人が出来てしまった：

じゃが、ワシ等の誰もこの選択に後悔は微塵も無い!!

く永遠 Side outく

第100話：淑女の最後の我儘

（一夏 Side）

一夏

「…ココか？」

シャルロット

「…うん…」

デパートから出た俺達は今、あるビルの前に立っていた

そこはデュノア社の日本支部だった

あの日、シャルの親父さんの事を教えてくれた女性はココに居るらしい

俺達はシャルの亡命の為の書類を書く為にココに来ていた

俺達が意を決して中に入ると：

女性

「お待ちしておりました。」

一人の女性が待っていた

声からしてこの人があの時電話で話した人みたいだった

女性

「改めまして私は『イリス』と言います。以前から社長にはお世話になっていました。」

シャルロット

「よ、よろしくお願いします！」

イリス

「はい……ところで……そちらは織斑一夏さんですよ？何故お嬢様と一緒に？」

2人が挨拶をするとイリスさんが俺が同行している事に首を傾げた

一夏

「あの……俺はただの同行者です。シャルの事情を知っているので一人だと何かと不便か
と思つて……」

イリス

「成程……そう言う事でしたか……お嬢様の為にありがとうございます。」

一夏

「い、いえ……」

俺が同行している理由を話すとイリスさんも納得してくれた

イリス

「立ち話もなんですから事務所にのご案内します。そこでお嬢様にはサインを書いて頂きます。」

シャルロット

「は、はい！」

そして俺達はイリスさんの案内で事務所に来たんだけど……

一夏

「……………」

デュノア社の支部にしては……小さいな？事務所って言ってもビルの一部屋を借りただけみたいだし……

イリス

「事務所が小さくて驚きましたか？」

一夏

「え!? あ……いや……」

俺の思ってる事を当てられた

イリス

「フフツ……本当の事ですからね。ココは日本支部と言ってもその更に下にある部署の一つです。」

一夏

「あ、なるほど……」

それなら納得

そんな話をしているとイリスさんが書類の束を持ってきてくれた

イリス

「……ではこちらが礼の書類になります。電話でも説明しましたが手配は既に終わっております。後はこちらの書類にお嬢様がサインをして頂ければ全ての手続きが終わる事になります。お嬢様も一度目を通してください。」

シャルロット

「分かりました。」

それからシャルは書類を1枚1枚読んでいった

……

……

……

シャルロット

「……………はい、問題無いです。」

それから暫くして書類を全て読み終わると問題無いと答えた

イリス

「ありがとうございます。それではこちらにサインをお願いします。」

これでサインをすればシャルは日本に亡命した事になるんだな
なのに…

シャルロット

「……………」

イリス

「お嬢様？」

一夏

「ん？」

何で…手が止まってるんだ？

く一夏 Side out く

くシャルロット Side く

イリス

「お嬢様？どうかされましたか？」

シャルロット

「い、いえ…」

僕は目の前の書類にサインを書く事が出来なかった
だつて…

一夏

「どうしたんだよ？後はサインを書くだけなんだぞ？」

シャルロット

「…分かつてる…でも…これに名前を書いたら…僕は…もう…お父さんに会えない…」

一夏&イリス

「!？」

だから…書けない…

お父さんの気持ちを知ってしまったら…余計に…

一夏

「シャル…」

僕は…どうしたらいいんだ…

イリス

「お嬢様…お気持ちは分かりますがこれは社長の願いでもあるのです…どうか分かつて
下さい…」

お父さんの…願い…

僕の…自由…

シャルロット

「…お父さん…」

僕は悩んだ…

お父さんは僕の為にこの日本に逃がそうとしている…

でも僕はそんなお父さんとの繋がりを失うのが怖い…

どうすればいいのか悩んでいると…

イリス

「……………それではお嬢様…後一度だけ社長に会われますか？」

シャルロット

「え？」

イリスさんがお父さんに会ったらどうかと提案してくれた

イリス

「何度も言いますが後はサインさえ頂ければ全ての手続きが終わります。ですからその前にもう一度だけお会いに行かれてはどうですか？」

一夏

「そんな事出来るんですか？」

イリス

「ええ、ただ…」

シャルロット

「ただ…何ですか？」

イリス

「会いに行かれても…社長はお嬢様の事を娘としては見ません。『シャルル・デュノア』としてしか接しないと思います。」

シャルロット

「!？」

『シャルロット』じゃなくて…『シャルル』として…

確かにそうだ…お父さんの状況を考えればそういう態度を取るしかない…

下手に僕を娘として接すればお父さんがココまで用意した計画が瓦解するかもしれない…

イリス

「それでもいいですか？」

シャルロット

「……………」

一夏

「シャル…」

シャルロット

「……………はい!!たとえ娘として会ってくれなくても…僕は…もう一だけ、お父さんと会いたいです!!」

イリス

「承知しました。」

シャルロット

「…すみません…我儘を言つて…」

イリス

「いえ、お嬢様のお気持ちも分かりますので…それではいつ頃社長の下に向かわれますか?」

シャルロット

「そう、ですね……………でしたら夏休みの時に…その時なら一度報告に戻る必要があるの…で…」

その時なら会いに行っても本妻達に疑われない筈…

イリス

「分かりました。ではその後……」

シャルロット

「はい!!」

……こうして僕は最後にもう一度だけお父さんに会いに行く事にした……

……

……

……

その後、僕達はイリスさんに挨拶をして事務所を後にした……

シャルロット

「……………」

一夏

「……シャル……」

一夏が僕を心配して声を掛けた

一夏

「その……大丈夫か？」

シャルロット

「うん…何とかね…」

今の僕にはそれくらいしか答えられなかった

一夏

「そうか…」

そんな僕の返事に一夏はそう言うത്それから何も言わなかった

僕も今はそつとしておいて欲しかったから気を使ってくれて助かった…

シャルロット

「……………」

僕は…夏休みに入ったらお父さんに会いに行く…

それが…

僕の…

最後の我儘…

〈シャルロット Side out〉

第101話：これまでとこれから

く東 Sideく

束

「う~~~~ん……」

私は今、この間のタッグトーナメントで起きた事件……

その原因になったドイツのISを調べていた

とーくんがああの不細工な偽物をぶっ壊したけど、ちーちゃんからコアが無事だったって聞いてクーちゃんに「ドットプラスライザー」と「ラインバレル」を持って来る時に一緒にコアも持って来て貰った

でもコアはすぐに返さないといけないらしいからデータだけ写しを取って次の日にはちーちゃんに送り返しておいたよ

まあ「VTシステム」に関するデータは消去しておいたけどね

それで今はその写したデータを見てるんだけど……

束

「…やっぱり弄られてる…」

【VTシステム】のデータが基本の物より性能が上がっていた

コレのせいで乗り手がいないのに勝手に動き出した訳だ…

けど…

東

「誰がこんなプログラム組んだんだろ？ドイツの馬鹿共の中にこんな事が出来る奴がないのは調べが済んでるし…」

そう…あの後、ドイツの連中に責任を取らせようと思ってあの国の不正の証拠を集めてた

それに合わせて誰がコレを積んだのか調べる為に【VTシステム】の研究をしていた連中も全員調べてあげた

でもその中にはこんな強化プログラムを組めるような奴は一人も見当たらなかった

もしかしたら他の部署かもと思って探したけどそれらしい人間は見つからなかった

東

「それに【ゴーレムI】…アレも不明な事がある…」

いつくんとリーちゃんの試合に乱入した【ゴーレムI】…あつちもあの後、とーくん

に運び込んで貰って調べた

その結果、やっぱりあれは束さんの所から盗まれた【ゴーレムI】に間違いなかった
…

それも予想通り僅かだけど性能が上がっていた
つまり盗まれた後誰かが手を加えたって事か…

束

「【ゴーレム】を盗んで送り込んだ奴…【VTシステム】の強化…まさか…裏にいるのは同一の存在？」

だとしたら…

そんな事が出来るのは…

束

「やっぱり…アイツ等なのかな…」

実はこんな事が出来そうな奴等に私は心当たりがあつた…

そいつ等の名は…

束

「…「ファントム・タスク」【亡国機業】…」

あの国際テロ組織が動いた？

でも何の為に？

東

「…これ以上は情報が足りないか…」

直接動いて調べるにも今は忙しいし【亡国機業】ファンタム・ダスクについては後回しにするしかないか

…

東

「取り合えず【VTシステム】の証拠をちーちゃんに送つとこ…委員会を通じて糾弾すればあの国も少しは反省するでしょ。」

それでももしないなら東さんが直接引導を渡してやる！

東

「取り合えずこっちはこれで良し!!後は……………」

私は後ろに視線を向けた

そこにあつたのは完成した2機のIS

『青い全身装甲のIS』と『赤い普通のIS』…

その内の一つ…

『赤いIS』に目を向けると…

東

「…あの子に使いこなせるかな…」

この機体を渡そうと思っっている子が使えるか不安で仕方無かった…

ちーちゃんに無理言っつて資料を送って貰ったけど『アレ』じゃ不安しかないんだよね

…

東

「それに引き換えこっちは大丈夫なんだけどな…」

そしてもう一方の『青い全身装甲フルスキンの I S』の機体に視線を移してそう呟いた

この機体の持ち主には東さんは何の不安も感じないんだよね…あの子はそれだけの努力を重ねたんだもんね…

東

「はあ…まあいいや…あの子に関しては考えてる事もあるし渡した時に言えばいいか…」

赤い機体には色々と細工をしてあるからね…

ま、あの子の性格なら教えたら間違いないく文句を言うけど、これが東さんに出来る最大の譲歩だから諦めてもくらおつと！

そう結論付けると東さんは次の研究に取り掛かった…

東

「さくって！次はどんなの造ろっかな〜♪」

とーくんから貰った大量のデータの中から次はどんなISを造ろうか探し始めた♪

〜東 Side out〜

第102話：海的一幕

（永遠 Side）

全員

「海だ~~~~~♪」

ワシ等は臨海学校で海に来るとる

一応これもISの実習の一環なんじゃが2泊3日の行程という事で初日は自由時間になつておる

その為、学園からバスで到着すると今回お世話になる【花月荘】に荷物を置くと皆、水着に着替えて早速海に遊びに行つてしまつた

ちなみにワシの場合は家からココに来る事も出来たんじゃが織斑先生から：
千冬

『団体行動をしろ!!』

と言われたんで他の者達と一緒にバスに乗つて来た

そして現在…ワシもこの間買った（買って貰つた）水着に着替えて海来ると…

セシリア&簪&本音

「永遠（さん）♪」

セシリア、簪、本音が駆け寄って来た

3人はあの時に買った水着を着ておった

永遠

「おゝ3人とも似合つとるぞ。」

セシリア

「本当ですか〜♪」

簪

「えへへ♪」

本音

「むふふ〜♪」

ワシがそう言うのと皆笑顔で喜んでおった

にしても以前より綺麗に見える様になった気がするんじやよな〜…恋人になったか

ら見方が変わってしもうたのかもしれないな

まあ、それはいい事じゃしよしとしておこう！

？

「あ、あの…」

永遠

「ん？」

セシリア達と話しとると呼ばれたんで振り返ったがそこにおったのは…

永遠&セシリア&簪&本音

「…タオルのミイラ？」

全身をタオルでぐるぐる巻きにした物体が立っておった

と言うかよく見ると頭らしき場所から銀色の髪が左右に出とるし、顔の部分には眼帯が付いとるのお…と言う事はこのミイラは…もしや…

永遠

「お主ラウラか？」

ラウラ

「は、はい…」

やはりラウラじゃったか…しかし何故にミイラ？

簪

「何でミイラになってるの？」

ラウラ

「それは…その…わ、私は今迄こういう格好をした事が無くて…」
セシリア

「あゝ、恥ずかしいんですね？」

ラウラ

「うっ…そ、そう言う事だ…」

まあ確かに話に聞いたことやつの今迄を考えれば当然かのお？

ワシがそんな事を考えておると…

本音

「恥ずかしいのは分かるけどさ…？いつまでもその恰好って訳にもいかないよ…？という訳で…」

ラウラ

「へ？」

本音

「御開帳く!!」

ラウラ

「わあああああゝゝゝっ!!!」

本音がラウラが巻いとるタオルを全部はぎ取つてしもうた

んで、出て来たラウラじゃが…

ラウラ

「ううっ…あ、兄上…ど、どうでしょうか？」

恥ずかしそうにワシに聞いて来た

永遠

「フム、似合っと思うぞ？」

ラウラ

「ほ、本当ですか!!」

永遠

「うむ。」

ラウラ

「えへ、えへへ…兄上に褒められた♪」

こやつ本当に変わったの…いい事だと思うのじゃが変化が激しすぎて着いて行くのが厳しくなつとるのお…

その後、ワシ等は鈴やシャルロット、織斑姉弟達がビーチボールを始めたんでそこに混ざって思う存分遊び倒したわい!

く永遠 Side out く

く千冬 Sideく

私は生徒達と一頻り遊んだ後、ある人物を探していた

そいつは海水浴場にはいなかったのでもう探して探しに出向いていた

別に必ずあそこにいると言う訳では無かったがそいつは目を放すと何をするかわからないからな

そして、浜辺から少し離れた岩場にそいつはいた

箒

「……………」

そう、先日火ノ兄の「戦国龍皇」を盗んだ事で懲罰房に放り込んで反省文500枚を書かせた篠ノ之箒だ…

反省文を全部書くまで外に出られないと言っていたが、この臨海学校の前日にギリギリだが提出して来た

間に合わなかったらそのまま置いて行くつもりだったんだがな…

箒

「……………明日か…」

…やはりそう言う事だったか…

明日はアイツの誕生日：そして、先日の束からの連絡：

妹から連絡が来たと聞いた時、アイツが束に何を要求したのか大よそ見当が付いた：だが、その時に束から要求された『物』：あんな物何に使うつもりだ？と言うか下手をすると個人情報の流出で私が罰せられかねんからさっさと返して欲しいんだがな：

まあ、アイツが管理するなら漏れる事の方があり得んか：どうせ明日になったら現れるだろうからその時に返すように言っておくか：

と、そんな事よりも今考えないといけないのはだ：今のアイツなら妹からの頼みとは言え二つ返事で何でもかんでも了承するとも思えんが一応気を付けておくか：

私はそう考えながらその場を後にした：

あの様子では明日までは大人しくしているだろう：それに懲罰房から出て来た時にまた何かやかかしたらその時は『懲罰房の中』から授業を受けて貰うと脅しといたから下手な事はせんだろう：

だがそれでも、この臨海学校が無事に終わる事を願わずにはいられなかつた：

く千冬 Side out

第103話：剣刃（つるぎ）　　その式

鈴 Side

夕食の時間になったから私達は全員で旅館の大広間で食事を取っていた
永遠の両隣はセシリアと本音が座っていて、簪は正面に座っている
私はその簪の隣に座っていた

鈴

「そう言えば永遠？」

その時、私は前から聞きたかった事を聞こうと思つて永遠に話しかけた

永遠

「んん？」

鈴

「あのタッグ戦の時から聞きたい事があつただけど？いいかな？」

永遠

「何じゃ？」

鈴

「アンタが造る【剣刃】^{つるぎ}だけどき、他にどんなのがあるの?」

永遠

「…他の【剣刃】^{つるぎ}じゃと?」

ザワ!

私の一言に周り…と言うか全員が反応した

全員が箸を止め、話を中断して私達の会話に耳を傾けていた

私は周りを気にせず質問を続けた

鈴

「本音から聞いたけど他にも槍や斧、弓とかもあるんでしょ?どんなものがあるのかな

くって?」

セシリア

「永遠さん! わたくしも知りたいですわ!!」

簪

「私も!!」

本音

「教えてよ♪」

千冬

「私も聞きたいな。よければ教えてくれないか？」

セシリア達だけじゃなく千冬さんまでこっちに來て聞いて來た

永遠

「……………まあ構わんぞで？」

鈴

「ホント!!」

永遠

「しかし【つるぎ剣刃】か…そう言えば説明らしい事をなくんもしとらんかったな…」

千冬

「言われてみるとそうだな…」

…確かに…永遠の造った【つるぎ剣刃】のインパクトが強すぎて細かい説明を聞くの忘れて

たわ…

セシリア

「そう言えば【つるぎ剣刃】の事でこれも聞きたかったのですが…【りくどうけん六道劍】も【つるぎ剣刃】何です

か？」

永遠

「ああ、アレも【つるぎ剣刃】じゃよ。」

簪

「やっぱりそうだったんだ！」

永遠

「さて【つるぎ剣刃】の事じゃな…1組のものには【りくどうけん六道剣】の時に軽く話したがまずアレは赤・白・緑・紫・黄・青の6つの色を属性として分けられとる。コレは分かるな？」

全員

「ウンウン！」

永遠

「そして各色はそれぞれ赤が炎、白が氷、緑が風、紫が闇、黄が光、青が水を司つとる。」

鈴

「つて事は私の【ライトニング・シオン】は紫だから闇を操れるのね？…あれ？でもあの剣…雷を扱えたけど？」

永遠

「中にはそう言うのもある。実際ワシの【りくどうけん六道剣】も【オオテンタ】は大地、【ミカヅキ】は【ライトニング・シオン】同様雷を操れるからな。」

セシリア

「そう言えばそうでしたわね…」

永遠

「次に【つるぎ剣刃】は必ずどれかの色を持つとる、中には2色以上の色を持つとるのもあるがな。」

ラウラ

「そんな物まであるのですか!？」

永遠

「片手で数えられる程度じゃがな。」

シャルロット

「それでも複数の色って事はそれだけ使える力が多彩って事でしょ？」

永遠

「その分使いこなすのはより難しくなるぞい。」

千冬

「まあそうなるか。」

うん、普通に考えて単色と同じレベルで使える訳無いわよね

永遠

「【つるぎ剣刃】の説明はこんな所じゃ。分かったかの？」

全員

「はいー」

説明って言っても属性くらいしか言って無いけどね…

私がそんなツツコミを内心していると…

永遠

「それとな？セシリア、簪、本音、鈴に渡した【剣刃】は上位の物にあたる。」

セシリア&簪&本音&鈴

「え!？」

永遠が行き成り聞き捨てならない事を口にした

上位？ 私達の【剣刃】が？

千冬

「上位とはどういう事だ？」

永遠

「うむ、セシリア達に渡した【剣刃】はあるカテゴリに含まれる物なんじゃよ。」

セシリア&簪&本音&鈴

「カテゴリ？」

永遠

「あの4本の【剣刃】はな？『光の剣』と『闇の剣』と言われる12本の剣の内の4つ何

じゃよ。」

千冬

「光と闇？黄色と紫の事じゃないのか？」

永遠

「色とは違う。その12本はそれぞれ『光の6色の剣』と『闇の6色の剣』に分類されるんじゃ。」

あ、違うんだ…私も千冬さんと同じこと思っただけだな…

簪

「じゃあ私達の【つるみぎ剣刃】は…」

永遠

「セシリアと簪、鈴は光の剣、本音は闇の剣なんじゃよ。」

本音

「何で私だけ闇なの〜!!」

そうよね、何で本音だけ闇の剣にしたんだろ？

永遠

「いや、お主の【ワイバーン・ガイア】に合わせたんじゃが…」

本音

「ほえ？…【ワイワイ】に？」

永遠

「そうじゃ。【トワイライト・ファンタジア】は闇の黄色何じやが、光の黄色の剣じやと合いそうになくてな…」

簪

「どういう事？」

永遠

「あの【ワイバーン・ガイア】にサーベルみたいな剣では合わんじやろ？」

本音

「サーベル？」

永遠

「…口で説明するより実際に見せた方が早いか…」

永遠はそう言うのと端末を出してあるデータを出した

そこには私達が其々持っている4本の【剣刃^{つるぎ}】を含めた12本の剣のデータが表示された

セシリア

「コレが光の剣と闇の剣…」

永遠

「セシリアの【マイルシュトロム】は光の青、簪の【クラウン・ソーラー】は光の白、鈴の【ライトニング・シオン】が光の紫、そして本音の【トワイライト・ファンタジア】は闇の黄色じゃ。」

話を聞きながらデータを見てると本音の【トワイライト・ファンタジア】の隣に黄色いサーベルみたいな剣があった

多分これが光の黄色…でもこの形状って…

簪

「…【光翼の神剣エンジェリックフェザー】…確かにこの光の黄色の剣じゃ本音の【ワイバーン・ガイア】には合わないね…刀身が細すぎるよ…」

簪の言う通りこれをあの【ワイバーン・ガイア】が啜えた所を想像してみたけど…うん！全く合わない！

確かにこれなら闇の方の【トワイライト・ファンタジア】を選んだ理由も納得出来るわ

永遠

「分かってくれたか？」

全員

「うん！」

千冬

「…布仏だけが闇の剣なのは分かったが…となると残りは8本か…」

永遠

「いや、7本じゃ。闇の青…【深淵の巨剣アビス・アポカリプス】は東さんが持つとる。」

千冬

「東だと!？」

え!? 東さんも持ってんの!?

つて、あの人が【剣刃】の事を知って大人しくしてる筈無いか…

永遠

「ワシが【剣刃】を造れると知って1本欲しいとせがまれてな。それで造ったんが…」

千冬

「闇の青と言う事か…では残りは…赤と緑は両方、白と紫は闇、黄色は光がまだ造っていないという事か？」

永遠

「そうなるの。まあ渡してもいい相手がおらんから造つたらんと言うのも理由なんじやが…」

全員

「……………」

永遠の一言に全員が黙り込んだわね

中には悔しそうな顔した子もいるけど…

永遠

「まあ織斑先生なら造つても構わんのじゃが……………こんなのはどうじゃ？」

永遠はそう言つて一振りの【剣刃^{つるぎ}】のデータを出した

それは唾の部分が獅子の顔になった日本刀のような【剣刃^{つるぎ}】だった

千冬

「どれ？……………名前は【獅子王】…色は赤か…フム…悪くないな。」

【獅子王】を見て千冬さんも一目で気に入ったみたいだった

千冬

「欲しいところだが私の機体は凍結封印してるからコイツを手に入れても使えんな。」

永遠

「さよか。」

そう言えば千冬さんの【暮桜】って封印してるんだったわね

ってそうだ！忘れてた！

鈴

「ねえ！他の【剣刃】^{つるぎ}も見せてよ！」

永遠

「そう言えばそうじゃったな…ちと待て…」

永遠はそう言うのと端末を操作し始めた

暫くして【剣刃】^{つるぎ}のデータが表示され、それが広間全体に広がった

永遠

「一部を除いてこれで全部じゃ。皆好きな様に見るといい。」

永遠がそう言うのと私達だけじゃなくその場にいた全員が食事を止めて立ち上がって

思い思いの【剣刃】^{つるぎ}のデータを見始めた

生徒1

「ハンマーまであるよ！」

生徒2

「鞭！…コレで叩かれたらどうなるんだろ…」
／／／

生徒3

「うわ…綺麗な扇…これも【剣刃】^{つるぎ}なんだ…」

生徒4

「このハサミ…剣より怖いよ〜…」

皆が思い思いの事を言ってるわね…

一部変な事を言ってる人がいるけど…

…一部って言えば何で見せてくれないのがあるんだろ？

千冬

「火ノ兄、私達に見せられないのもあるのか？」

千冬さんも私と同じ事を思ってたんだ

永遠

「別に見せたら危険と言う訳では無いんじゃないか…強力過ぎるんじゃないよ…」

セシリア

「強力過ぎると言うのは？」

永遠

「さつき説明の時に言うた複数の色を持つ【つるぎ剣刃】の事じゃ。ああは言ったが実際複数と言つても2色と全色の2本しかないんじゃないよ。」

簪

「え！全色!？」

永遠

「そうじゃ。正直に言うとな全色の方はワシでも使いこなせるか分からん代物じゃからな…」

本音

「永遠でも!？」

コイツでも使えない【剣刃】があるって言うの!？」

ラウラ

「一体どんな【剣刃】何ですか!!」

永遠

「言つとくが全色の【剣刃】はワシは絶対に造らんぞ?」

鈴

「それでも名前くらい教えてよ!」

私がそう言うとな周りの皆も盛大に頷いた

永遠

「…仕方無いのお…」

そう言つて永遠は再び端末を操作しだした

そして出て来たのは1本の剣と槍だった

千冬

「コレが…」

永遠

「まず2色の【剣刃】^{つるぎ}の方は【星海槍アスピディスク】…青と緑の【剣刃】^{つるぎ}じゃ。」

それはエメラルドの様な綺麗な槍だった…

そしてもう一つは…

永遠

「次に【光導星剣ゾディアックソード】…全6色を宿す唯一の【剣刃】^{つるぎ}じゃ。」

【ゾディアックソード】…黄道十二星座の名前の通り唾の装飾に黄道十二星座のマークが描かれた白い剣だった

映像からはマークは6つしか見えないけど多分裏側が残りの星座のマークが掛かれていますね…

く鈴 Side out

く一夏 Side

【剣刃】か…まさかこんなにいろんな種類があつたなんてな…俺の【大倶梨伽羅】^{おおくりから}はそ
の一つでしかなかったのか…

永遠

「ちなみにこれ以上に物騒な【剣刃】^{つるぎ}が一本あるがそれはそもそも造れんからな。」

全員

「へ？」

俺がそんな事を考えていると火ノ兄がおかしな事を言い出した

何言つてんだコイツ？

【剣刃】^{つるぎ}を造れるただ一人の人間が造れない【剣刃】^{つるぎ}があるってどう言う事だ？

それに6色全てを持つ【ゾディアックソード】以上の【剣刃】^{つるぎ}があるって言うのか？

千冬

「それはどう言う事だ？」

永遠

「…その【剣刃】^{つるぎ}は『造る』のではなく『呼び出す』んじやよ。」

セシリア

「呼び出す、ですか？」

永遠

「そうじゃ。そしてそれが可能なのは今の所セシリア、簪、本音、鈴、そして東さんじや。」

セシリア&簪&本音&鈴

「え？」

シャルロット

「待ってよ！今の名前って!？」

今あげた名前に共通するものって言ったら…まさか!？」

簪

「私達の【剣刃】…光と闇の12本の【剣刃】の事なの!？」

永遠

「左様…12の【剣刃】が揃う事で初めて使う事が出来る【剣刃】…それが【裁きの神剣リ・ジエネシス】じゃ。」

セシリア

「【裁きの神剣リ・ジエネシス】…」

簪

「名前だけでも凄く強そう…」

永遠

「じゃろうな、【リ・ジエネシス】自身は赤の属性じゃがアレは12の【剣刃】の集合体…単純に12本を纏めた時よりも遥かに強い。」

全員

「ええっ!？」

鈴

「何よそれ!? 私の【ライトニング・シオン】もかなり強力な武器よ!!」

シャルロット

「と言うより既存のISの武器よりも永遠の造る【つるぎ剣刃】は強力なんだよ!」

セシリア

「それをたつた1本で12本全て揃った時よりも強いなんて!」

オイオイ…:だとしたらその【裁きの神剣リ・ジェネシス】って一体どれだけの力があ
るんだよ!?

永遠

「…その程度で何を驚いとる?」

全員

「その程度!」

永遠

「【裁きの神剣】には一つ上の段階が存在しとるんじゃないよ。」

全員

「え!」

永遠

「…【真・裁きの神剣トウルース・エデン】…【リ・ジェネシス】の力を完全に開放した姿じゃよ。」

全員

「……………」

もう言葉が出ねえよ…

これ以上【裁きの神剣】の事を聞くと気が変になりそうだ…

く一夏 Side outく

く千冬 Sideく

【裁きの神剣リ・ジェネシス】か…話を聞くだけで頭が痛くなる【剣刃^{つるぎ}】だ…

デュノアの言う通りコイツが造った【剣刃^{つるぎ}】はどれもISの通常武器を超える

それどころか第3世代兵装よりも強力だ

各国が新型の武器を造るだけでもどんなに早くて数か月にかかる

だが、コイツの場合は1日どころか1時間程度でそんな物騒な物をポンポン造る事が

出来る

その中でも上位に位置するのがオルコット達が持つ光と闇の剣…

その集合体ともなれば一体どんな力を持つと言うんだ…

私ならそんなとんでもない【剣刃】^{つるぎ}…頼まれても使いたくないぞ!!

永遠

「カテゴリで言えば…後は【惑星神剣】かの？」

全員

「【惑星神剣】？」

千冬

「何だそれは？」

光と闇の剣の他にも上位に位置する【剣刃】^{つるぎ}がまだあるのか？

永遠

「この地球を含めた太陽系の星の名を持つ8本の【剣刃】^{つるぎ}の事じゃ。水星…金星…地球…火星…木星…土星…太陽…月の【剣刃】^{つるぎ}の事じゃ。」

周りが驚く中、火ノ兄は端末を操作し8本の【剣刃】^{つるぎ}のデータを表示した

千冬

「…コレが【惑星神剣】…確かに太陽系の星の名前が付けられてるな…」

真耶

「でも太陽は『恒星』で月は『衛星』ですよ？」

千冬

「真耶…そこはツツコまない方がいいぞ？」

こう言う事はスルーするのが正解だ

真耶

「……………すみません…」

セシリア

「そう言えば永遠さん…太陽系の星と言いますけど天王星と海王星、後は冥王星がありませんけど？」

ああそうか…太陽系にはまだ三つの惑星があつたな

まあ冥王星は準惑星だな

永遠

「それはワシにも分からん。データが無いようじゃから三王星の【剣刃】は存在せんようじゃ。」

火ノ兄がそう言うなら本当に存在しないのだろうな…

それにしても【惑星神剣】か…話を聞く限り【六道剣】や光と闇の剣よりワンランク下みたいだがそれでも他の【剣刃】よりは上みたいだな…

【剣刃】…まさかココまでの物だったとはな…

く千冬 Side outく

鈴 Side

【惑星神剣】で周りが騒ぐ中、私は心を落ち着かせると光と闇の剣のデータに視線を移した

私はまだ見た事が無い残りの剣を見ているとある【剣刃^{つるぎ}】に目が止まった

鈴

「ん？」

それを見て…

鈴

「ねえ一夏。」

近くにいた一夏にコッソリ話しかけた

一夏

「何だ？」

鈴

「この闇の緑の剣はアンタに合いそうよね？」

一夏

「闇の緑？え〜つと…【黒蟲の妖刀ウスバカゲロウ】？」

そう、それが私の目に止まった剣だった
だつてこれ…

一夏

「コレが？」

鈴

「そうよ！『ウスバカゲロウ』…アンタにピッタリじゃない♪」

コイツを現すのにピッタリの『名前』だもん！

一夏

「…何処がだよ？」

鈴

「『ウスバカゲロウ』の『名前』を切る場所を変えて読めば分かるわよ。」

一夏

「名前？切る場所？」

私がそう言う和一夏は考え始めた

すると…

千冬

「フム…なるほど、そう言う事か。確かにこいつにピッタリだな。」

私の話を聞いていた千冬さんがいち早くその理由に気付いた

そして私の言う事に同意した

一夏

「え?…ウスバ…ウス…バカ…ん!?!」

あ! 気付いたわね!

一夏

「…ウス…薄馬鹿…バカ…下ゲロウ…」

鈴

「はい正解♪正にアンタそのものでしょ♪」

一夏

「うぐぐつ…」

鈴

「反論出来る?」

一夏

「…出来ません…」

今迄コイツがしてきた事を考えればこの剣の名前の通りだものね

ま、こんな言い方するのは今回だけにしとこ!

永遠ながが〔ウスバカゲロウ〕を造った時、持ち主が馬鹿にされるかもしれないからね！
く 鈴 Side out く

第104話：女同士の座談会

く千冬 Side s

夕食も終わり、私は自分に用意された部屋で寛いでいた

千冬

「あ〜…そこそこ…そこがいろいろ…」

それで今は一夏にマツサージをして貰っている

コイツは昔からこう言う事は本当に得意だからなく…

ちなみに何故一夏が私の部屋でマツサージなんかしてるかと言うとコイツは私と同

じ部屋だからだ

去年までの臨海学校と違い今回は男の一夏と火ノ兄がいるからいつも通りの部屋割

りが出来なかつた

他の生徒達と同じ部屋にすると何が起きるか分からんからな…下手するとひと夏の

間違ひみたいな事が起きるかもしれん…

かといって男2人を同じ部屋にするのも問題があつた…ガキ共が乱入するかもしれ

んからな…中には一夏か火ノ兄のどちらかを追い出して乗り込んでくる奴がいるかもしれない…と言うか本当にやりそうな奴に心当たりがあるんだよな…

それに火ノ兄の貞操も危険だ…

あの馬鹿…最近は姉の私ですら本当に『ホモ』なのではないかと思う時があるからな…

2人つきりにして間違い起きたら本気でシヤレにならん…そんな事になったらオルコット達がマジギレして一夏を殺しかねん…しかも火ノ兄の怪我はまだ完治してないから一夏に襲われても撃退出来るか不安だしな…

まあそんな訳で一夏は私と同室になっている

そして火ノ兄は真耶の部屋にいる

つと…そんな事よりそろそろ来る頃だな…

千冬

「一夏…もういいぞ…」

一夏

「ん？もういいのか？」

千冬

「ああ…あゝスッキリした…一夏、ホレ！」

一夏

「え？」

私はマツサージを終えた一夏に少し多めに駄賃を渡した

千冬

「マツサージの駄賃だ…それと悪いが少し部屋を出ていてくれ。」

一夏

「え？何で？」

千冬

「これから少し女同士で話をしようと思っただけ…その駄賃で好きなもの買っていいから時間を潰していてくれ。」

一夏

「え、うーん…そう言う事なら仕方ないけど…何時頃戻ってきていいんだ？」

千冬

「そうだな…大体1時間は空けてくれるとありがたいな。」

一夏

「1時間か…分かったよ…」

一夏はそう言っただけ承ると部屋を出て行った

…しかしアイツ…時間を潰せとは言ったがどうやって潰す気だ？

まさか火ノ兄の所に行く気じゃないよな？……ま、まあ大丈夫か…仮に行っても真耶もいるしな…間違いは起きまい…

起きないよな？

信じてるからな…一夏…

く千冬 Side outく

くシャルロット Sideく

シャルロット

「織斑先生何の用だろ？」

ラウラ

「さあな？」

今、僕はラウラと一緒に織斑先生のいる部屋に向かっていた

食事の後に織斑先生から少し話したいから部屋に来てくれて言われたんだけど、その途中でラウラと会って同じ理由だったから一緒に向かっていた

そして…

シャルロット&ラウラ

「あっ!」

セシリア

「あら?」

簪

「2人も呼ばれたの?」

シャルロット

「うん。」

織斑先生の部屋の前でセシリア、簪、本音、鈴の4人と会った

セシリア達も呼ばれてたんだ…そう思っていたら…

簪

「むっ!」

全員

「あっ!」

今度は簪もやって来た

簪

「…お前達も千冬さんに呼ばれたのか?」

鈴

「ええ、そう言うつて事はアンタもみたいね？」

箒

「……………」

【戦国龍皇】を盗んだ一件から皆の箒に対する態度は冷たくなったからなく…

まあ、僕も彼女に対して良い印象は無いんだけど…と言うか今迄彼女の良いところなんて見た事無いんだよな…

けどいつまでもココに居る訳にもいかないし…

シャルロット

「ねえ皆？早く入ろうよ？」

本音

「そ〜だね〜♪」

僕がそう言うつと皆が織斑先生の待つ部屋に入つて行つた…

〜シャルロット Side out〜

〜箒 Side〜

まさかコイツ等も呼ばれていたとは…

チツ…コイツ等の私を軽蔑する目…実に不愉快だ!! 一体私が何をしたと言うのだ!!

ただかI S一つに拒否されただけでこんな態度を取るとは…コイツ等の器が知れる
と言うものだ!!

だが、今は気にしても仕方ないか…

一先ず私はコイツ等と一緒に千冬さんの部屋に入る事にした

全員

「失礼します。」

千冬

「入れ!」

挨拶をしてはいるとそこには缶ビールを飲んでいる千冬さんがいた

だが…一夏がいない?

箒

「あの…一夏は?」

千冬

「ああ、アイツならマッサージの駄賃をやって追い出した。暫くは戻って来るなど言っているから気にしなくていいぞ。」

箒

「は、はあ…」

千冬

「ほら！何時までも入り口で突っ立ってないで中に入れ！」

全員

「はい！」

私達が入って思いつきの場所に座ると千冬さんは冷蔵庫からビニール袋を取り出して私達に渡した

中に入っていたのはジュースだった

千冬

「好きなのを取れ。私のおごりだ。」

全員

「ありがとうございます！」

私達は自分の好きなのを取るとジュースを口にした
すると…

シャルロット

「あの〜織斑先生…さつきマッサージって言っていましたけど一夏ってそんな事するんですか？」

千冬

「ん？ああ、アイツはアレでも家事全般が得意でな、料理、掃除、洗濯、大概の事は出来る。マツサージも中々のものでな、体の疲れがすっかり無くなった。」

シャルロット

「へ〜……」

千冬

「気になるなら後でやって貰え。」

シャルロット

「はい！」

箒

「……………」

コイツ…鈴と同じでやはり一夏を狙っていたか…

私は新しい『敵』が現れたと認識した

そしてデュノアに対して警戒を強めていると…

千冬

「さて、そろそろ本題に入るか…」

千冬さんが私達を集めた理由を話し始めた

千冬

「単刀直入に聞く…お前達の中で一夏に気があるのは誰だ？」

箒&シャルロット

「!？」

千冬

「ふむ、箒とシャルロットか…」

え？私とデュノアの『2人』だと？

箒

「鈴！お前は…」

鈴

「私はもうアイツに興味なんて無いわよ。アイツにはその事はもう伝えてあるし、アンタ達がアイツと付き合いたいって言うんなら好きにすればって言うだけよ。」

箒

「なっ!？」

いつの間に一夏を諦めたんだ!？」

だが、これはいい事を聞いた…私にとつての一番の障害が一夏のセカンド幼馴染と言
う鈴だったからな…鈴に比べればデュノアなど私の相手ではない!!

千冬

「コイツ…鈴が一夏を諦めたと思ってるな？ 実際は諦めたのではなく愛想が尽きたからなんだが…コイツにはそんな事関係無いのだろう…）まあ、確かに一夏は私に出来ない事が出来る男だ。家事も料理も中々だしマッサージも上手い。付き合える女は得だな。但し、超が付くほどの鈍感の大馬鹿だな。」

箒&シャルロット

「そ、それは…」

否定出来ない…千冬さんの言う通りアイツは底抜けの朴念仁だからな…

千冬

「それでも欲しいか？」

箒&シャルロット

「くれるんですか!？」

勿論欲しいに決まってる!!

一夏をくれると言うなら私が喜んで貰う!

千冬

「欲しければ勝手に持っていけ! ただし、あの馬鹿を惚れさせる事が出来たらな。」

ならば問題無い!

一夏の相手に相応しいのはこの私以外ありえんからな!

そう思っていたら…

千冬

「それから箒…お前は駄目だ！」

箒

「!?!…な、何ですか!?!」

どう言うつもりだ!?!

何故私が駄目なんだ!!

千冬

「何でだと?人様の物を自分の物だと言って平然と盗む様な奴に弟をやる姉が何処にいる?泥棒と知っているのに弟の彼女として認める馬鹿がいるのか?」

箒

「!?!」

ど、泥棒!?!

私が…泥棒だと!?!

千冬

「シャルロット…あの馬鹿には根気よく伝えるしかないからまあ頑張れ。」

シャルロット

「は、はい！」

鈴

「アイツの鈍さは病気レベルだから本気で落としたいなら遠慮なんかせずにガンガン押した方がいいわよ。実体験した私が言うんだから間違いないわよ。」

シャルロット

「う、うん…（鈴が言うと言説得力あるな…）」

千冬

「…それから箒…さつきはああ言ったが今後のお前の態度次第では私も考えが変わるだろう。だが『今』のお前では私は絶対に一夏との交際を認めん。その所をよく考えておけ。」

箒

「ぐっ…」

今の私だと!?

一体私に何の問題があると言うんだ!?

く箒 Side out く

く千冬 Side く

コイツ…私の言った事絶対分かって無いな…

自分勝手な我儘を治せと言う意味で言ったんだが…この様子では意味を理解すらしてないか…

はあ…まあいいか…治さないならそれはそれで放っておけばいい…

一夏との交際を認めないだけだからな…

さて、一夏の方はこの位でいいか…

千冬

「…次に火ノ兄に気があるのは…ってお前達3人しかいないか…」

セシリア&簪&本音

「はい♪」

鈴

「もう分かりきってるわよ…でも、アンタ等の誰と付き合うのかしらねアイツ？」
確かに、アイツどうするつもりなんだろうな…

セシリア

「それならもう決まっていますわ♪」

鈴

「え？」

簪

「永遠は…」

本音

「私達3人と付き合ってるんだよ〜♪」

全員

「え?…ええええええええええ——つ!!!」

コイツ等、いつの間にそんな関係になったんだ!?

シャルロット

「3人ってどういう事!?!」

セシリア

「…あのタッグ戦の後…わたくし達3人は話し合ったのです。」

簪

「私達は永遠が好き!その想いは一緒だった!」

本音

「でも、だからって他の二人を蹴落としてまで永遠の隣にいたいとは思わなかったんだ

〜♪」

セシリア

「そんな事をすれば永遠さんの方から離れて行くでしょうし……何よりわたくし達自身もお互いの事が嫌いではありませんでした！」

まあそうだな……コイツ等恋敵ではあったが箒の様に相手を敵視してなかったし、互いの仲が悪い訳では無かったからな

簪

「だから話し合つて決めたの！」

本音

「私達3人で告白して、3人揃つて恋人にして貰おうつて♪」

箒

「お前達それでいいのか!？」

セシリア

「いいですわ!それがわたくし達の誰もが幸せになれる一番の方法ですもの♪」

簪

「そう♪永遠にそう言つたら最初は驚いて混乱してたけど……」

本音

「最後は私達の提案を飲んで……私達3人を受け入れてくれたんだ♪」

そうか……アイツも腹を決めたのか……

鈴

「そうなんだ…おめでどう♪」

セシリア&簪&本音

「ありがとうございます♪」

鈴

「私もアンタ達に負けなくらいのいい男を見つけないとね♪」

セシリア

「鈴さんでしたら素敵な殿方を見つけられますわ♪」

鈴

「そうね! 『あんなの』よりいい男なんてそこら中にいるわよね♪今度こそ男に失敗しないように頑張るわよ!!!」

簪

「あ、あんなのだと!!」

千冬

「……………」

あんなのか…：そうだな…：そうとしか言いようがないか…

自業自得とは言え…：自分に好意を持っていた子にココまで言われるとは憐れな弟だ

…

ラウラ

「では私はこれからお前達の事を『姉上』と呼べばいいんだな!!」

セシリア&簪&本音

「結構です!!」

ラウラ

「む！何故だ？兄の恋人なら私にとっては姉に当たるではないか！」

ラウラの奴…コイツ等に対しても妹キャラで通すつもりなのか…

コイツに関しては恋愛よりも妹ポジションの方が重要みたいだな…

まあそれは置いておいて…

私は時計を見てそのまま視線をそつと廊下への扉へと向けた…

既に1時間経過したからな…

…

…

…

一夏

「…あんなの…鈴…俺の事をあんなのって…ハハハ…あんなのか…そうだよな

…鈴にとつて俺はもうその程度の相手なんだよな…」

…一夏…コレがお前の今までやって来た事の結果だ…

私は戻つて来ていた弟に心の中でそう呟いていた…

く千冬 Side out く

第105話：蒼炎の不死鳥！ハルフアス・ベーゼ！！

く千冬 Side

千冬

「さて…集まったな？」

一夜明け、臨海学校2日目…今日から本格的な実習になる

まずは各グループに分かれてISの新装備のテストから始める

そして私の受け持つ班は専用機持ちのみのグループとなっている

代表候補生5人に一夏と火ノ兄、布仏もいるんだが…

鈴

「…あの…織斑先生？」

やはり来たか…

千冬

「…何だ？」

鈴

「何で箒がいるんですか? ココには『専用機を持つてる人』が集まるんじゃないんですか?」

箒

「……………」

そう…ココには何故か専用機を持たない箒がいる

勿論私は呼んでない

班分けの時もコイツは専用機を持たない一般生徒達の班にしていたし、真耶や他の教師達からも箒の班を変更する様な話は聞いていない

つまりコイツは『また』勝手にここに来たという事だ

だから私は…

千冬

「知らん。コイツが勝手に混じっているだけだ。」

箒

「!?!」

こう言うしかないんだがな

すると…

セシリア&簪&本音&鈴

「またですか？」

ラウラ&シャルロット

「また？」

同じような事をした事を知っている4人が声を揃えてそう言った…まあ言いたくもなるか…コイツが勝手な事をしている場所だと大抵面倒な事になるからな…

シャルロット

「またって…以前も同じような事があったの？」

鈴

「ええ、先生の許可も取らずに試合前の一夏のピットに入り込んでたらしいわ。」

シャルロット

「え!?!それってマズいでしょ？」

簪

「マズいに決まってる。」

その通りなんだがコイツはそれが分かって無いんだよな…はあく…

私が内心溜息を吐いていると…

簪

「私の班はココだ!!」

とか言う始末だ…本当にどうしようもないなコイツ…

こんな風に自分勝手な事ばかりしているから昨日も弟を任せるとは言えなかったんだ…

全員（一夏以外）

「はあ…」

しかも一夏以外は揃って深い溜息を吐いている…私だって本当は溜め息を吐きたい
だがコイツには何を言っても無駄だろうし、追い出すだけでも一苦労だ…

だからココは…

千冬

「もうコイツの事は放っておけ…相手にするだけ時間の無駄だ…」

箒

「なっ!?千冬さん!」

千冬

「織斑先生だ!篠ノ之…この班にいたいなら好きにしろ!だが今日の実習の単位…お前は無いからな?」

箒

「な、何ですか!」

千冬

「当り前だろ？お前のやつてる事はサボりと同じだ。全員の前で堂々とサボる奴に単位をやる教師が何処にいる？単位が欲しいなら『元』の班に戻るんだな。」

コレで戻ればいいんだが…

箒

「私はサボってません!!ココが私の班です!!」

こんな事で聞き分けるような殊勝な奴なら苦労は無いか…もういい…無視だ無視!!!

千冬

「はあ…もういい…そんなにこの班がいいなら好きにしろ…だが、さっきも言ったがお前の今日の単位は無しだ。それからお前達もコイツの相手はする必要無いからな。何か言ってきたても無視して構わん。…では始めるぞ!!」

結局私も溜め息を吐いてしまい、そのままテストを始める事にした

私が言わなくても全員が箒を相手にするつもりが無かったようだな…いや、一夏だけは気にしているようだが何も言わんか…流星のアイツも箒の身勝手さには口を出せんか…

箒

「ぐっ…くうう…」

唸り声をあげる位なら元の班に戻ればいいものを…本当に馬鹿だなコイツ…

千冬

「さて…先ずは…」

箒を無視して始めようとした時…

永遠

「ムッ!!」

火ノ兄が何かに反応した

簪

「どうしたの?」

永遠

「何か来るぞ?」

全員

「え!?!」

何かって…まさか!?

ズドオオオオオオオオオオンツ!!!

私達の近くに何か落ちて来た

煙が晴れるとそこには…

千冬

「…やっぱりアイツか…」

案の定デカいニンジンが突き刺さっていた

やはり今日現れたか…

箒

「姉さん!!!」

箒の奴…束が現れて喜んでるな…

アイツ本当にコイツのISを用意したのか？

だとしたらこの馬鹿もこの班になるんだがなあ…

束

「束さん参上!!!」

そんな事を考えている間に束が出て来た…クロニクルかもと思ったんだが駄目だっ

たか…

千冬

「久しぶりだな…束…」

とりあえず挨拶くらいするか…

束

「そうだね〜♪とーくんとセーちゃんが試験を受けに行った日ぶりだね〜♪」

千冬

「そうだな…あれから数カ月しか経っていないと言うのに随分会って無い気がするな

…」

東

「ニヤハハツ♪そつちじゃトラブルばかりだったもんね〜?」

千冬

「全くだ…軽く2, 3年は経過した感じがする…」

東

「あ〜…ご愁傷様…」

千冬

「お前が相手でもそう言われると気が楽になるな…」

東

「なんか棘のある言い方だね〜!」

千冬

「感謝してると言ってるんだ。」

本心で言ってるぞ?」

千冬

「さて…それで今回は何の用だ？」

気を取り直して用件を聞くか…大体分かってるが…実際、箒の奴は後ろでニヤニヤ笑ってるしな

そう思ってたんだが…

東

「うん！『セーちゃんのIS』が完成したから持ってきたんだよ!!」

箒

「なっ!!」

千冬

「何？」

セシリア

「はい？」

オルコットの機体だと？

そつちを持って来たのか？

東

「という訳で全員頭上に注目!!」

東がそう言うて言うを指差すと釣られて私達は上を見上げた

そして…

ズドオオオオオオオオオオンツ!!!

コンテナが落ちて来た

東

「これがセーちゃんの新しいISS!のんちゃんの「ワイバーン・ガイア」のデータのお陰で完成した第5世代型2号機!!その名も「ハルフアス・ベーゼ」だよ!!!」

東が名前を言った瞬間コンテナが開いた

中から出て来たのは全身装甲フルスキムのISSだった

元になったのが「ブルー・ティアーズ」の為か全体的に青地に白の装飾のされた機体だった

中でも目が向いたのは両肩にある巨大な4枚の翼だった

セシリア

「ハルフアス…ベーゼ」…

千冬

「お前やっぱり第5世代に改造したな!!」

予想通りと言うか何と言うか…

束

「だってくそうでもしないと今のセーちゃんに着いて行ける機体にならないんだもん!!
それにイギリスから許可は貰ってるから第5世代にしても無問題だよ!!」

千冬

「何で最後まで中国語だ!!だが…それを言われたら何も言えんのも事実だしな…」

仕方ないと言えんか…

束

「でしょ?それじゃセーちゃん…この子の説明するね♪」

そしてオルコットを呼ぶと束は説明を始めた

ちなみに箒だが…自分のISが無いショックから放心している…静かでもいいな…暫

くこのままでいて貰おう

く千冬 Side out

く永遠 Side

【ハルファス・ペーゼ】…よもや【ワイバーン・ガイア】に次いで造ったのがコレとは

…

この機体…確か生半可な物では無かった筈じゃ…

あの束さんの事じゃからデータ通りのISに仕上げたじやろうな〜

いや、下手したら更に手を加え取る可能性もあるのお…

ワシがそげな事を考えとる間に束さんの機体説明が始まった

束

「まずはスペックだけど…第5世代だから元になった『ブルー・ティアーズ』の何倍も高いよ。中でも機動性が一番高くしてあるよ。」

千冬

「それは見れば分かるな…こんなデカイ翼が4枚もあればな…」

織斑先生の言葉に全員が頷いとる

「じゃがな先生よ…恐らくこの機体はスペックだけのISでは無いぞ…元になった『ハルファス・ベーゼ』の事を考えるとなあ…」

束

「まあね♪そして次に武装だね。この子の能力を十分に発揮出来る物を積んでるからね♪まず近接武器はビームサーベルとビームサイズが2つつつ装備してあるよ。」

千冬

「サーベルは分かるが…『サイズ』とは何だ?」

束

「鎌の事だよ。」

セシリア

「鎌ですか!?!何だか怖いですね…」

東

「まあそんなに大きくないよ。片手で使える程度の大きさだからね。でも連結して使う事も出来るからそうすれば両手用の大鎌になるよ。次はセーちゃんの得意な射撃武器だけどこっちは4枚の翼に大型ビーム砲「クロス・メガビームキャノン」を積んであるよ!!」

東さんがそう説明すると全員の視線が「ハルフラス・ベーゼ」の最大の特徴とも言うべき巨大な翼に向けられた

東

「そんでもってこの翼にはもう一つ、「ブルー・ティアーズ」のビットと同じ遠隔操作武器…「フェザースクウイズ」が翼1枚につき4基ずつ装備されてるよ。」

セシリア

「…では全部で16基あるという事ですか?」

東

「ピンポーン♪大正解♪更に「ブルー・ティアーズ」のビットは射撃しか出来なかったで

しよ?でもこの「フェザースクウィーズ」はそのまま相手に斬り付けたりも出来る遠近両方に対応した装備なんだよ♪」

セシリア

「…それ程の物を16基…全て操れるか難しいですわね…」

セシリアは全ての「フェザースクウィーズ」を同時操作出来るか自信が無いようじゃのお…セシリアじゃったら大丈夫だと思っくんじゃが…今まで使って来た数が4倍…それも操作方法も増えたともなれば不安になるのも仕方ないかのお…

束

「だ〜いじょ〜ブイ!!そう思って「BTシステム」のデータを改良しておいたから今までよりも楽に操作出来る筈だよ♪」

と思ったら束さんが対処しとったか

流石じゃな!

セシリア

「そうなのですか!?!ありがとうございます!」

束

「うんうん、基本装備はこんなとこだよ。後はセーちゃんの持つてる「メールシユトロム」だね…それと…」

セシリア

「？」

東さんは行き成り懐から一本の短剣を取り出した
つうかアレは…げっ!?

東

「コレをセーちゃんに渡すよ♪」

セシリア

「え？」

永遠

「待ちんさい!!それは【アビス・アポカリプス】ではないか!？」

全員

「【アビス・アポカリプス】!？」

そう、東さんがセシリアに渡そうとしたのはワシが造った【つるぎ剣刃】の一つ【深淵の巨
剣アビス・アポカリプス】じゃった

鈴

「それって確か!？」

簪

「東さんが持つてる『闇の青の剣』!？」

千冬

「東!!お前何考えてるんだ!!いくら何でも【剣刃】^{つるぎ}まで渡すのはやり過ぎだぞ!!」

全員パニックを起こしてしもうたか…

まあ普通なら【剣刃】^{つるぎ}を渡そうなんて考えんわな…

東

「だって折角の【剣刃】^{つるぎ}何だよ?とーくに態々造って貰って悪いけど、東さんが持つても自分の間は研究室で埃を被るだけだと思っただよ。それならセーちゃんに持たせた方がこの剣も喜ぶと思っただよ…」

千冬

「ぬっ…」

ふむ…それも正論じゃな…

本音

「でもく確か【剣刃】^{つるぎ}って持ち主以外は使えないんじゃないか?」

全員

「あ!？」

ん?ああ、それじゃつたら…

永遠

「大丈夫じゃぞ。」

全員

「へ!?!」

ワシがそう言った瞬間全員目が点になってしまった

ラウラ

「兄上!! 大丈夫とはどういう事ですか!?!」【剣刃】は持ち主以外認めないと言ったのは

【剣刃】を造った兄上自身では無いですか!!」

あく確かにそげな事言ったのゝ…

ラウラはその事を身をもって知つとるからのゝ…

永遠

「確かにそう言ったが…そもそもの話…【剣刃】が所有者のみしか使えんと言うのは光と

闇の12本の剣だけの話なんじゃよ。」

全員

「えっ!?!」

永遠

「昨日言ったじゃろ? あの12本は【剣刃】の上位に存在すると? じゃから所有者機能が

あるんじゃない。」

一夏

「え? って事は俺の【大倶梨伽羅】おおくりからは誰でも使えるって事なのか?」

永遠

「そうなるの。じゃから渡した時にすぐにI Sに登録する様に言っただんじやろうが。そもそも全部の【剣刃】つるぎに所有者機能があればタッグトーナメントで賞品になんぞ出来んじやろ? あん時ワシが用意した【剣刃】つるぎをワシ自身が使っておったじやろうが?」

全員

「あ!?!」

ワシがああ試合の時、乱心したラウラを相手に【フォーマルハウト】と【アルフェツカ】を使った時の事を思い出したか…

一夏

「言われてみるとそうだ…じゃあアレはそう言う意味で言ったのか…ちよつと待て! なら【アビス・アポカリプス】はどうなるんだ!?! アレは闇の青の剣なんだろ!! 東さんが所有者ならオルコツトに渡しても使えないぞ!!」

永遠

「いや、実はな…【アビス・アポカリプス】の所有者をセシリアに変える方法はあるんじゃない

よ。」

全員

「ええっ!?!」

ワシがぶつちやけて言う全員が驚きの声をあげてしまった…もつと早めに言っとくべきじゃったかな…まあいいか…

簪

「一体どうやるの!?!」

永遠

「簡単じゃ、渡す側が本心から相手に譲りたいと思って【つるぎ剣刃】自身がそれを認めれば所
有者は変わるんじゃないよ。」

鈴

「本当に簡単じゃない…それじゃあ今回で言えば…」

永遠

「束さんがセシリアに託そうとしておるからの…後は【つるぎアビス・アポカリプス】がセシリアを認めれば…」

千冬

「【つるぎアビス・アポカリプス】はオルコットの【つるぎ剣刃】になると言う事か…」

永遠

「そうなるの…ただし…」

一夏

「ただし…何だよ？」

永遠

「**【剣刃^{つるぎ}】**が認めなかった時は以前のラウラみたいな事になるぞい。」

全員

「!？」

全員がビクリとしおつたな…

あの時の事…ラウラが**【メールシュトロム】**の水圧で吹き飛ばされた姿を思い出しおつたか…

じゃがまあ…

永遠

「今回は大丈夫じゃろお…セシリアじゃつたら**【アビス・アポカリプス】**も拒絶はせん筈じゃ。持ち主の東さんも認めとるしな。」

篠ノ之じやつたら東さんが譲ると言つても**【剣刃^{つるぎ}】**の方が拒んだじやろうな…

ワシは隅でこつちを睨んどる当人を横目に見ながらそげな事を考えとつた

東

「確かにセーちゃんなら大丈夫だね♪それじゃあ改めて…セーちゃん…【アビス・アポカリプス】…受けとつてよ♪」

セシリア

「はい!!!」

セシリアは力強く返事をする。と東さんの差し出した【アビス・アポカリプス】を受け取った

その瞬間…

ペア…

全員

「!?!」

【アビス・アポカリプス】が青色の淡い光を放った

ワシはそれを見て…

永遠

「うむ! 【アビス・アポカリプス】も認めてくれたぞ! セシリア、今からその【深淵の巨剣アビス・アポカリプス】はお主の物じゃ!!」

セシリア

「アビス・アポカリプス」：今日からよろしくお願いしますね♪」

セシリアがそう言うと「アビス・アポカリプス」が再び光った

どうやらセシリアを気に入ったようじやな

周りの者達もその光景を見て微笑んでおった

箒

「……………」

一人を除いての…

く永遠 Side outく

く千冬 Sideく

束

束

「さてと…「アビス・アポカリプス」の受け渡しも無事終わったし「ハルファス・ベーゼ」の説明を続けるよ?」

セシリア

「あーはい!」

束は「アビス・アポカリプス」の事で中断していた機体の説明を再開した

束

「武装に関してはアレで全部だね。次は特殊能力に関してだけど…実はこのISにはとーくんの「ラインバレル」と同じ「自己再生能力」を持たせてあるんだ♪」

全員

「【自己再生】!?!」

何だと!?!

まさかあの「ラインバレル」の厄介極まりないあの能力を再現したのか!?!

だがそうなるかと少し気になる事があるな…

千冬

「だが東…お前どうやってその能力を付けたんだ? 「ラインバレル」の解析が終わった事は聞いているが…それにしても実用化するには早すぎると思うんだが?」

これが私の疑問だった

いくら東が天災でも「ラインバレル」と同じ能力を可能とする機体をこんなに短期間で造り上げる事は不可能な筈だ

私のこの疑問は火ノ兄を始めとした全員が同意した

すると東は…

東

「エへへ…実はそれに関してはちよつと『インチキ』したんだよ♪」

東

「ハルファス・ベーゼ」はとーくんの「ラインバレル」を構成するナノマシンを流用して造った物なんだよ。「ラインバレル」はどんなに壊れてもすぐに再生するでしょ？それも欠損した部分もナノマシンが増殖して補填するから装甲の一部をこつちで保管しても「ラインバレル」自体には何の影響も無いと思っただよ。」

コイツ…信じられん事をするな…

言われてみればそうかもしれんが実際にそれを実行するとは…

永遠

「また無茶な事をしおったのお…確かにその方法ならすぐに実用化出来るかもしれないが…本当に大丈夫なんか？元は「ラインバレル」の物なんじゃろ？」

東

「それは大丈夫!!一度「ラインバレル」に近づけて見たけど東さんが弄ったお陰で反応しなくなってたよ。多分「ラインバレル」は別物と判断したんじゃないかな？」

永遠

「それならいいんじゃないが…」

東

「ただ…やっぱり手を加えたせいで再生速度が「ラインバレル」の半分くらいにまで落ち

ちゃったんだよね〜…」

千冬

「半分でも十分だろ?」

全員

「うんうん!」

私の一言に全員が頷いていた

いや、火ノ兄は頷いてないな…アイツの場合は「ラインバレル」の持ち主だからな…

東

「それは東さんも同意見…って言いたいけどこの能力の事を考えると不満だね。」

一夏&ラウラ&シャルロット

「え?」

そうだった…「ラインバレル」が持つ「自己再生能力」…東はこの能力をISが宇宙で活動する際の生存率上昇に使おうと考えているからな…それを考えると半分の再生速度では満足出来んか…

尤もそれを知らない一夏達は首を傾げているな…コイツ等からすれば十分過ぎる能力だからな

東

「まあそれは今後の課題だけど今はいいよ。それで後はこのI Sにはもう一つ『変形機能』も付いてるよ♪」

全員

「変形!?!」

まだあったのか…束の奴…一体オルコットの機体にどれだけの技術を詰め込んだんだ!?!

束

「【ハルフアス・ベーゼ】は鳥型に変形出来るんだよ。そしてその形態でしか使えないのが…蒼い炎で突撃する必殺技…『バーニングフレア』だよ!!」

セシリア

「蒼い…炎…」

束

「うん! 【ハルフアス・ベーゼ】…二つ名を付けるなら【蒼炎の不死鳥】ってところかな?」

永遠

「不死鳥か…【再生能力】に火の鳥…正にその通りじゃな…」

セシリア

「蒼炎の不死鳥…ハルフアス・ベーゼ」…

うむ…確かにその名が一番相応しいな…

東

「後は単一仕様だけど…そつちは最適化が終わってから話すよ。」
ワンオフ・アビリティ
フィッティング

全員

「単一仕様!?!」
ワンオフ・アビリティ

セシリア

「使えるんですか!?!」

東

「勿論使えるよ♪のんちゃん」の「ワイバーン・ガイア」も使えたでしょ?」

鈴&ラウラ&シャルロット&一夏

「え!?!」

永遠&セシリア&簪&本音&千冬

「あ!?!」

そう言えばそうだったな…「ワイバーン・ガイア」を調べた時に使えると布仏から聞かされていたのを忘れていた

その事を一夏達には教えてなかったな…まあ他人のISの機密をそう簡単に教える

事は出来んから仕方ないか…

本音

「そうでした〜！使う機会が無かったんで忘れてましたよ〜…」

千冬

「まあアレは余程の事が無い限り使う必要の無い物だからな…」

ラウラ

「それ程の物なんですか？」

千冬

「ああ、その内見る機会もあるだろう。」

ラウラ

「はい…」

何しろアレは「ワイバーン・ガイア」最強の攻撃武器だからな…

しかしそうなるとオルコットの「ハルファス・ベーゼ」は一体どんな能力を持っているんだ？

東

「それじゃあセーちゃん、説明もこんな所だし、そろそろ最適化フィッティングを始めるよ。「ブルー・ティアーズ」の時のデータがあるから初期化フォーマットはしなくてもいいね。」

セシリア

「はい!!」

説明を終えた束が【ハルファス・ベーゼ】の最適化フィッティングを始める為にオルコットを呼んだのだが…

箒

「姉さん!!!」

今迄蚊帳の外になっていた箒が口を開いたか…

はあ…このまま静かにしてくれていて欲しかったんだがなあ…

く千冬 Side outく

第106話：第4世代（？）紅椿

く永遠 Sideく

うくむ…今まで静かにしとったから放っておいたがどうやら我慢の限界に来てしまったようじゃのお…

まあ篠ノ之にしてはもった方か…この娘…恐ろしい程短気じゃからなあ…

束

「何篝ちゃん？」

篝

「私のISは!!」

やはり束さんに頼んでおったか…

束

「あくそれね？『一応』造ったけどさく…」

篝

「い、一応!?私のISが一応だと!？」

束

「まあいいや、それじゃあおいで〜…」

東さんが頭上を見上げてそう言うど…

ズドオオオンツ!!

コンテナがもう一つ落ちて来た

じゃが「ハルフアス・ベーゼ」のコンテナより一回り小さいのお…

箒

「コレが…」

東

「そだよ、コレが箒ちゃん専用機…『第4世代型』の「紅椿」だよ。」

コンテナから出て来たのは赤いISじゃった

じゃがこのIS…「ハルフアス・ベーゼ」と違って全身フルスキン装甲では無い『普通のIS』じゃ

な…

それに第4世代と言うとったのお…

箒

「だ、第4世代だど!?!」

東

「そだよ?それがどうかした?」

箒

「何故第5世代じゃないんですか!!」

こやつ…東さんが用意するISを第5世代と思っておったか…

じゃがなあ…

東

「何故って…箒ちゃんが第5世代を扱える訳無いでしょ?」

箒

「なっ!?!」

東さんも分かっておったか…どう考えてもこやつには第5世代を使いこなせるだけの技量があるとは思えんのじゃよなく…

東

「実はね?箒ちゃんが専用機を造ってくれて連絡が来た後にちーちゃんに頼んである物を送って貰ったんだよ。」

箒

「…ある物?」

東

「IS学園での箒ちゃんの成績だよ。」

全員（千冬以外）

「え？」

篠ノ之の成績って…それは個人情報漏洩になるのではないのか？

東

「それを見る限り成績はすこぶる悪いね？特にI S関係の成績は学業も実技も下の下の下…
クラスどころか学年全体で見ても同じだね。」

箒

「うぐっ…」

下の下って…つまり最下位って言っとなるようなものではないか

今迄のこやつを見る限り成績はかなり下じやろうとは思っておったがまさかそこま
でとは思わなかったのお…

東

「そんな成績しか出せない子に最新鋭にして超高性能な第5世代を任せられる訳無いで
しょ？相手が妹だからってそこまでの最良は東さんも流星にしないよ。」

箒

「ぐっ…」

東

「だから箒ちゃん、東さんが箒ちゃんの頼みを聞くのはこれが『最後』だからね。」

箒 「…え？さ、最後!？」

東

「東さんはね？箒ちゃんの何でも屋じゃないんだよ？箒ちゃんの言う事なら何でも聞くイエスマンじゃないんだよ？箒ちゃんの只の姉でしかないんだよ？」

箒

「!？」

確かにそうじゃな…じゃが篠ノ之のあの顔は納得しとらん顔じゃな…東さんは何も間違つた事は言つとらんのじゃが…コイツ相手に正論を言つても無駄か…

東

「それにね？本当ならこの【紅椿】だつて本当は造ろうかずっと悩んだものなんだよ。箒ちゃんには専用機を持つ資格がそもそも無いんだからね？」

箒

「資格が…無い!？」

東

「そっだよ。いっくんは理由が分かるよね？」

一夏

「……………前に…鈴に言われましたから…」

ほお、覚えておったか…コイツなら忘れているかとも思ったんじやが…

東

「うん♪ちゃんと覚えてたね♪それで合ってるよ♪」

箒

「……………」

東

「箒ちゃん…箒ちゃんはさ、セーちゃんやかんちゃん、リーちゃんのようなでしょ?リーちゃんがいつくんに言った事聞いてなかったの?専用機って言うのはね?それぞれの国や企業で自分の実力が認められた人にだけ与えられる物…いわば努力の結晶なんだよ。箒ちゃんは東さんに頼む以前に自分で手に入れるだけの努力をしたの?」

箒

「……………」

東

「してる訳無いよね?そうじゃなきゃあんな成績な訳無いもんね?」

箒

「ぐっ！」

その通りじゃ：コイツのやつとる事はいわばセシリア代表候補生の努力を侮辱する行為：ワシや織斑の様な特殊な場合とも違うし、本音とも違う：

東さんとの血縁関係を利用したいわゆる裏技とも言うべき方法じゃ：じゃがこの方は専用機を持つ者、専用機を与えられなかった者達にとつては許せん方法じゃろうな
：

現に：

生徒1

『篠ノ之博士の言う通りよね！』

生徒2

『何の努力もしないで専用機を手に入れるなんて最低！』

生徒3

『それに篠ノ之さんって博士とは何も関係無いっていつも言ってたわよね？』

生徒4

『それをこんな時だけ頼るなんてそんな事して恥ずかしく無いのかしら？』

こっちのやり取りを見ると他の生徒達の篠ノ之に対する反応は明らかに悪いのお：

まあその通りじゃから弁護のしようが無いのじゃが…

箒

「ぐうっ…(あいつ等!!)」

今の声が聞こえておったようで篠ノ之は更に苦い顔をしとるのお…

ワシがそう思っとつたら…

箒

「…なら…なら布仏はどうなんですか!?アイツは候補生じゃないでしょう!!」

本音

「ほえ?」

本音に眼を付けおったか…確かに本音は束さんから直々にISを貰ったからな…

束

「のんちゃん?確かにのんちゃんは代表でも候補生でも無いね。でものんちゃんの「ワイバーン・ガイア」は第5世代の1号機、そのデータ収集を依頼すると言う事であげただよ。つまりのんちゃんは専用機を持つ代わりに束さんの依頼を受けると言う『等価交換』がされてるんだよ。」

箒

「くっ!」

東

「それに対して箒ちゃんとは違うよね？ただ東さんの妹だからって言う理由だけで専用機を手に入れようとしたでしょ？東さんの妹だから専用機を貰えるのは当たり前でも思っただの？」

箒

「ぐうっ…」

ぐうの音も出ないとはこう言う事を言うんじゃないかなあ…

箒

「…でしたら…布仏の「ワイバーン・ガイア」を私に下さい！私がデータ収集をします!!」

東

「ハア…それは無理だよ…」

コイツそこまでして第5世代が欲しいんか？

東さんまで呆れ始めとるぞ…

箒

「な、何ですか!?!」

東

「何でって箒ちゃんとのんちゃんじゃISの知識も技術も違い過ぎるもん。2人を比べ

たらどつちを「ワイバーン・ガイア」に乗せるか一目瞭然だよ。それにさつきも言ったでしょ？ 箒ちゃんじゃ第5世代を使えないって。乗っても「ワイバーン・ガイア」を歩かせる事も出来ないよ。」

箒

「!?!」

東

「第一「ワイバーン・ガイア」はのんちゃん用に調整されてるんだよ？ もし箒ちゃんに合わせて調整をやり直したら今迄のデータも全部消さないといけないんだよ？ そんな事する訳無いじゃん。」

箒

「ううううっ……」

まあ普通はデータを消してまでそんな事せんわな…

しかし…

生徒1

『今度は布仏さんの機体を寄越せって言ってるわよ!?!』

生徒3

『そうまでして第5世代が欲しいのかしら?』

生徒2

『第4世代が手に入るだけでも凄い事なのにね。』

今ので周りからの心象が更に悪くなったのお：コイツわざとやつとるんと違うか？

束

「いい箒ちゃん？何度も言うようだけど箒ちゃんには第5世代を使うだけの技術は無い。それに専用機を持つ資格も無い。代表でも候補生でも無い箒ちゃんに専用機を渡すのはその人達の努力を侮辱する行為になるけど、それでも箒ちゃんは束さんの大事な妹だからね、最新技術を込めた第5世代と各国で開発中の第3世代の中間にあたる第4世代を用意する事にしたんだよ。そしてこれを最後に束さんは箒ちゃんの我儘を聞くのを止める事にしたんだよ。分かった？」

箒

「ぐっ、くううっ…分かり…ました…」

ここまで言われてようやつと大人しくなり始めたか…

く 永遠 Side out く

く 千冬 Side く

ハア…まさか布仏の「ワイバーン・ガイア」を超越せとまで言うとは思わなかった

昔から短気でよく我儘を言っていたが、あの頃はまだ子供の我儘と言えばまかり通るレベルではあつた

だが今のコイツはその時より明らかに酷くなっている：まるで中身はそのままだけでデカくなつたような状態：いや、子供の持つ幼さや子供心が無くなつた事と自分の立場：『東の妹』という立場が加わつて酷さが増している

その束も昔から我儘だったがアイツの場合をもっと根本的に違っていたからそういう物だと私も周囲も割り切れていた：それに火ノ兄のお陰で今は随分と改竄されているし私から注意する事も無くなつてきているから束に関しては問題無いと見てもいいだろう

だが箒の場合はそうはいかない：コイツの我儘は他の人間と同じタイプのも物だが、その中でもかなり酷い部類に入るものだ：いや、私の知る限り一番酷いと言つてもいいかもしれない：

何でもかんでも自分の思い通りにしないと気がすまない人間になつている：しかも自分のやつてる事が全て正しいと思ひ込んでいるから余計に性質が悪い：こつちが何を言つても口では分かつたと言つても心の底から理解していない：

このままコイツを放置するとそれこそ取り返しつかない事になりかねんぞ？：：つ

てそう思ったらコイツはすでに火ノ兄の「戦国龍皇」を盗むと言う犯罪を犯していた…
既にコイツは危険な状態にまで行っていたんだ

これは後で東と本気で相談する必要があるな…

私がそんな事を考えていると…

東

「それからこの【紅椿】は第4世代ではあるけどリミッターを掛けてあるから今の性能は第2世代後半ぐらいまでしか出ないからね。」

東は【紅椿】の説明を始める前にそんな事を言ってきた

アイツそんな仕掛けをしていたのか…だがこれでは第4世代と言うのは名ばかりの第2世代のISになってしまふな…まあコイツには丁度いいか…コイツ自身は納得していないようだがな…

箒

「な、何でそんな事までするんですか!？」

案の定反発したか…分かり易い奴だ…

東

「当たり前でしょ？今の箒ちゃんじゃ第5世代どころか第4世代に乗っても機体に振り回されるだけだよ。だから今の箒ちゃんの実力から少し上のレベルに設定したんだ

よ。」

箒

「…それが…第2世代後半だって言うんですか!!」

東

「そうだよ。」

私もそのくらいでいいと思うな…

一番いいのはコイツに専用機を与えない事だと思っただが…多分【紅椿】を用意して
いなかったら今度はオルコットの「ハルフアス・ペーゼ」を盗み出しかねんからな…そ
の辺りも考えて東はコレを用意する事にしたんだろうな…

東

「それからちーちゃんにはコレを渡しておくね。」

すると東はポケットから取り出した物を渡してきた

それは手の平サイズのスイッチだった

千冬

「…何だこれ？」

東

「【紅椿】の『強制停止スイッチ』だよ。」

何？【紅椿】の？

箒

「!?…どう言うつもりですか!!リミッターだけでなくそんな物まで用意するなんて!!」

私の手にあるスイッチを見ながら箒が再び怒鳴り声をあげた

束

「…箒ちゃん…とーくんの【戦国龍皇】を盗んだよね？」

箒

「!?」

束

「その【戦国龍皇】…じゃなくて『ツルちゃん』だったね。あの子に拒絶されたから束さんに専用機を造れって言っただけでしょ？【戦国龍皇】が手に入らなかったから？」

箒

「ぐっ！」

やはり束も何故コイツがこのタイミングで専用機を要求したのか分かっていたか

コイツは【戦国龍皇】…いや、ツルに完全に拒絶されたからな…

束

「そんな事する子だから幾つもの予防策をかけておくんだよ。このスイッチとリミッ

ターはその為だよ。」

箒

「……………」

正論だな…コイツに何の制限もなくISを持たせても碌な事にはならん

正直、リミッターよりもこの停止スイッチの方が私としてはありがたいな…

東

「という訳だからそれはちーちゃんが持つててね。そのスイッチを押すと【紅椿】は自動で近くの地上に移動して待機状態に戻る様になってるから。その後は機体が展開出来ないように機能を停止するからね。」

千冬

「分かった。…ところでこのスイッチの効力はどのくらい続くんだ?」

東

「もう一度押さない限りそのままだよ。ただ、機能を止めてすぐに押しても戻らないからね。最低でも1時間は空けないと復旧しないよ。」

千冬

「ああ、分かった。」

東

「それから箒ちゃん？このスイッチは箒ちゃんが押しても機能しないからね。それにスイッチを壊したら【紅椿】は強制停止状態になるからね。壊したら最後、東さんが再起動するまで【紅椿】が動く事は無いからそのつもりでいてね。」

箒

「ぐっ！」

コイツ考えていたな？

しかし東の奴、そこまで手を回していたか…確かにコイツなら私の隙を狙って停止スイッチを盗むなり壊すなりするだろうからな…そんな事させるつもりも無いがな…

東

「じゃあセーちゃんの【ハルファス・ベーゼ】と一緒に調整を…って行きたいけど先に【紅椿】の方をしておこっか。」

千冬

「ん？何故一緒にやらない？お前なら同時に作業が出来るだろ？」

東

「そりややろうと思えば出来るけど作業内容が違い過ぎるからね。【紅椿】なら10分もかからずに終わるけど【ハルファス・ベーゼ】は軽く見ても1, 2時間はかかるよ。」

箒

「!？」

千冬

「そんなに差があるのか？」

束

「そりやそうだよ。のんちゃんのの「ワイバーン・ガイア」だつて初期化フォーマツトと最適化フィットテイングを徹夜でやっただよ？今回の「ハルファス・ペーゼ」に関しては「ブルー・ティアーズ」のデータがあるから最適化フィットテイングだけでいいけどそれでもそのくらいの時間は軽くなるよ。」
なるほど、言われてみると納得出来るな…

千冬

「確かにそれなら別々にやった方が効率がいいか…「紅椿」は初期化フォーマツトもやる必要があるしな…」

束

「そう言う事！じゃあ箒ちゃん、「紅椿」に乗つて。」

箒

「…分かりました…」

箒は渋々と言つた様子で「紅椿」に乗り込んだ

だがあの顔…文句を言いたい顔だな…大方、オルコットのISの方が手間がかかる事

に不満と言った所か……まあ言った所で意味は無いか……

事実だからな……

……

……

……

東

「終わったよ〜♪」

その後……と言うか本当に10分と掛からず東は【紅椿】の調整を終わらせた

東

「じゃあ箒ちゃん、試しに飛んでみて。」

箒

「……………はい……」

それから箒は言われた通り飛び上がり、【紅椿】の武装である二本の刀……【空裂】からわれと【雨月】あまつぎと言う刀を振り回していた

何でもあの武装は刀の形状をしているが中距離武器らしくそれぞれ刀身からエネルギー状の刃やレーザーを撃てるらしい……【ハルフアス・ベース】と違いビーム兵器では無いとの事……まあオルコットならともかくコイツにビーム兵器なんて持たせるのは危

険極まりないからな…

それからこれは束がコツソリ教えてくれたのだが「紅椿」には「展開装甲」と言う武装も内蔵されているらしい…その名の通り装甲を展開させ攻撃、防御、スラストとして使う事の出来る万能兵装なのだそうだが…「ワイバーン・ガイア」や「ハルファス・ベージェ」と比べると霞んで見えるのは私の気のせいかな？

私がそう言うのと束は露骨に目を逸らした

コイツ…自分で造っておきながら同じ事を考えていたな…

それでその「展開装甲」だが、この事は箒には教えないとの事だ

私が理由を聞くと箒にはあの二本の刀だけで十分だし使いこなせないだろうとの事だ…その為「紅椿」のリミッターと連動して封印してあるとの事だ

そしてもう一つ…ワソオフ・アビリテイー単一仕様も一緒に封印してあるそう

【紅椿】の単一仕様…【絢爛舞踏】と言うそうだがこの能力は簡単に言えばエネルギーの増幅能力だそうだ…さらに増幅したエネルギーを他のISに供給する事も出来るらしい…機体の色といい一夏の「白式」と対になっているような機体だな

それも【絢爛舞踏】を使いこなせばほぼ無尽蔵にエネルギー供給が可能と言うとんでもない能力だ

だがこちらでも箒では荷が重いとの事で封印したとの事だ

…封印するくらいなら初めから付けなければいいと思うのだが…

私がそう思っていると箒が地上に降りて来た

それとコレは東が後で話してくれたのだが、この【展開装甲】と単一ワンオフ・アビリティ仕様の2つを

取り外さなかったのは箒が良い方向に変わってくれる事を願ってのものだったらしい

…だから今は封印してあるそうだ

だがその話を聞かされた時、私はその封印が解かれる事は無いだろうと感じていた…

恐らく東自身も…

く千冬 Side outく

第107話：事件発生!?

～東 Side～

箒

「オルコット!! 「アビス・アポカリプス」を渡せ!!」

セシリア

「……………はい?」

地上に降りて来た箒ちゃんはISを解除するといきなりそんな事を言い出した
自分の妹だけどこの子何言ってるの?

箒

「その剣は姉さんの物だ!!ならそれを託されるのは妹の私が当然だろうが!!」

え?何その理屈?

セシリア

「…あの…永遠さん…束さん…こう言ってますけどわたくしはどうすれば…」

流石のセーちゃんでもコレは対処出来ないみたいだから造ったとーくんと前の持ち
主だった束さんに聞くしかないよね…

永遠

「無視しとれ。」

それに対してとーくんは一言で答えた

うん！普通なら東さんもそう答えるよ！でも相手が妹だから流石にその答え方は東さんは出来ないんだよね〜：どうしよ？

東さんがどう答えるか悩んでいると：

千冬

「いい加減にしろっ!!!」

ガンツ!!

箒

「ガッ!?!」

ちーちゃんが箒ちゃんの頭をぶん殴った

うわ〜痛そ〜：比べたくは無いけど、とーくんの拳骨とどつちが痛いんだろうな〜：
箒

「な、何するんですか!!!」

千冬

「お前こそ何をトチ狂った事を言っている!!あの剣は東が自分の意思でオルコットに譲

渡した物だ!!それを横取りしようとするとは何事だ!!!」

箒

「横取りではありません!!あの剣は元々姉さんの物なんですよ!!それを何故他人のオルコットに渡すんですか!!妹の私が受け取るのが普通では無いんですか!!」

千冬

「…お前頭大丈夫か?本当に何を言っている?」

箒

「え?」

千冬

「そもそも『アビス・アポカリプス』は火ノ兄が造った【剣刃^{つるぎ}】だ。それを『束個人』に渡した物なんだぞ。」

箒

「そんな事分かってますよ!だから「だがアレは『篠ノ之家の物』と言う訳では無い。」…え?」

千冬

「『アビス・アポカリプス』がお前と束の家に『代々伝わる剣』だと言うならお前に継承権のようなものがあるかもしれん。だがアレは此処にいる火ノ兄が造った物だ。つま

り造った剣を誰に渡すかは火ノ兄が決める事だ。そして受け取った者が別の者に渡す場合、その決定権は火ノ兄から剣を受け取った本人が決める事になる。そこに血縁関係は意味をなさない!!」

箒

「ぐっ……………」

あゝあ…黙り込んじゃった…

まあちーちゃんの言う通りだから束さんは何も言う気は無いけど…まさかのんちゃんの「ワイバーン・ガイア」だけじゃなくセーちゃんに渡した【剣刃^{つるぎ}】まで寄越せなんて言うなんて…

どうしてこんな子になったんだろ？

やっぱり束さんがISを造ったからかな…

今度ちーちゃんに愚痴を聞いてもらおっかな…

ゝ束 Side outゝ

ゝ一夏 Sideゝ

箒…本当にどうしたんだよお前…

火ノ兄の【戦国龍皇】を盗んだ時もだけど、何でそんな事するんだよ…

…
今度のはほんさんの「ワイバーン・ガイア」やオルコットの「つるぎ剣刃」を寄越せつて

それじゃあまるで『周りの子供が持つている玩具を欲しがる子供』と同じじゃねえか
…何でそんな子供の様な駄々を捏ねてんだよ…

お前そんな奴だったのか…

千冬

「束!!オルコットの機体の調整に入れ!!この馬鹿の事はもう無視しろ!!」

箒

「なっ!?!」

束

「いやちーちゃん…無視しろって言われても実の妹を無視するのは流石の束さんでも出来ないんだけど…」

千冬

「いいから無視しろ!これ以上コイツを相手に時間を無駄には出来ん!無理にでも無視しろ!!」

千冬姉…いくら何でも無茶苦茶だろ?

無理にでも無視しろって…

東

「…でも…」

千冬

「いいから作業を始めてくれ！頼むから！」

東

「分かったよ…ゴメンね箒ちゃん…」

箒

「ぐっ…」

東さんも観念して作業をする事にしたみたいだ…

でも箒はそんな東さんを睨んでる…コレは箒の方が問題だと思っただけだな…

けどオルコツトが「ハルフアス・ベーゼ」に乗り込もうとした時…

真耶

「た、大変で～～～す!!!」

全員

「!?!」

山田先生が旅館から慌ててやって来た

先生はそのまま千冬姉に事情を説明し始めたみたいだ

そして…

千冬

「テストを中止する!!!専用機持ちは全員集合!!それ以外の者はISを片付けた後は旅館の自室で待機!!許可なく外に出た者は問答無用で拘束する!!以上!!!」

いきなり今日の実習が中止になった

何が起きたのか俺には分からなかった…でもこれだけは分かる…

また何かが起きたんだ…

く一夏 Side outく

第108話：緊急作戦会議

（永遠 Side）

今度は何が起きたんじゃ？

「学園から離れてまで面倒事に巻き込まれたくはないぞい…

千冬

「それでは状況を説明する！」

そう思つてもワシ等は無情にも巻き込まれてしもうた…

ワシ等は現在、旅館の奥にある一室に集まつておる

この部屋は色々な機材を持ち込んで作つた即席の指令室となつとる

そんな部屋に織斑先生の指示されたワシ等専用機持ちががいる訳じゃ…じゃがこの中には篠ノ之もおるんじゃよな…『専用機持ち』と言つた以上篠ノ之もその中に入つてしもうたんじゃよな…

また頓珍漢な事口走らなければいいんじゃが…不安しか無いの…

つと、それより話を聞かんと…

千冬

「現在、アメリカとイスラエルが共同で開発した軍用ISシルバリオ・ゴスベル【銀の福音】…取り合えず【福音】と呼ぶが、それが稼働実験中に制御不能となり暴走飛行を始めたとの事だ。」

セシリア

「織斑先生…何故それをわたくし達に話すのですか？それではまるでわたくし達が【福音】の暴走を止める事になるように聞こえるのですが？」

千冬

「まるで何もその通りだ…さつき学園からお前達で止めるように指示が来た…」

全員

「はあ？」

何じゃそりゃ？

永遠

「何故にワシ等がそげな事をせにやならんのじゃ？」

千冬

「それがな…【福音】の進行方向を計算したところこのまま進むと此処から2Km離れた海上を通過する事が分かった。」

ラウラ

「それで我々に指示が来たと？」

千冬

「そう言う事だ。」

永遠

「んなもん無視すればよかろう？ 真上を通ると言うなら話は別じゃが、そんだけ離れとるなら通過するのを持つとればいいじゃろ？ 大体こう言うのは【福音】とやらを造ったアメリカとイスラエルが責任を持って止めるのが筋じゃろうが？ それが何故に只の学生のワシ等が連中の失敗の尻拭いをせにやならんのじゃ？ アメリカとイスラエルは子供に尻拭いさせる恥知らずの国なんか？」

専用機持ち達（箒以外）

「うんうん!!」

他の者達も同じ気持ちの様じゃのお

まあそりやそうか：好き好んでトラブルに首突っ込む物好きはそうはおらん：ましてやそれが国家間の問題ともなれば余計になあ：

千冬

「言うな！ 私だって同じ気持ちだ!! だがその2国が委員会を通じて I S 学園に依頼してきたんだ：：こうなってしまうては私達がやるしかない：：」

永遠

「チツ！ほんに面倒な事を……じゃが織斑先生、ワシ等はあくまで学生じゃ。失敗したか
らと言つてワシ等に責任取れとか言わんよな？」

千冬

「無論だ！私も指令を受けた時に生徒の安全を第一に考えると言つてある。学園の方も
当然として了承した。後でその事を委員会を通じてアメリカとイスラエルに伝えるそ
うだ。失敗しようが成功しようが連中が何か言つて来ても感謝以外の言葉は全部突つ
ばねてやるから安心しろ!!」

真耶

「そもそも火ノ兄君の言う通り学生の皆さんに暴走した軍用ISを止めろと言う向こう
の方が無茶を言つてるんです。失敗したからと言つて文句を言ったら恥の上塗りでし
かありませんよ。」

永遠

「ほお……セシリア、簪、山田先生の言つとる通りか？」

ワシは隣におけるセシリアと簪に聞いた

2人はそれぞれイギリスと日本の代表候補生じゃからな

セシリア

「ええ、そうなると思いますわ。」
簪

「学生の私達にこんな事させてる時点で既に問題…各国に知られたら今の時点でも後ろ指差されると思う…」

永遠

「さよか。」

鈴やラウラ、シャルロットも同意するように頷いておるし、その辺は大丈夫そうじゃな…

永遠

「じゃったら死なん程度にやるしかないのお…メンドイ…」

全員（簪以外）

「はあく…」

ワシ等は揃って溜め息をついた…あく本当に面倒臭い…

く永遠 Side outく

く千冬 Sideく

火ノ兄の言う通り本当に面倒臭い…何で私達がこんな事しないといけないんだ！

アメリカとイスラエルの連中、実験するならもつと考えてからしろよな！

だがそうは言ってもやるしかないか…取り合えず【福音】を止める作戦を考えるとす
るか…

千冬

「それで【福音】についてだが先ずあの機体にはアメリカのテストパイロット…『ナター
シャ・ファイルス』が搭乗している。だが向こうが通信を送つても連絡が付かないら
し
く現在は意識を失っていると思われる。」

先ずは搭乗者の現状を伝えておくか…

それにしても【福音】のパイロットがアイツとはな…

アイツは…今どんな気持ちなんだろうな…アイツは私と話す時もISで空を飛ぶ事
は楽しいと笑顔で語っていたからな…

だからナターシャは自分を空に連れて行つてくれるISを兵器として見てはいな
かった…ISは空を飛ぶ為の翼だと私に言っていた…アイツなら今の束と気が合うか
もな…無事に救出されたら束も誘つて一杯ひっかけられるのも悪くないかもな…

永遠

「意識不明か…そうなると無理な止め方は出来んのお…」

簪

「うん…無茶な止め方をして体に変な負担がかかるかもしれない…」
セシリア

「安全に救出する為にもまずは相手の事をよく知る必要がありますわね…織斑先生、機体のスペックを教えて頂けるのですか？」

おっと、私がナターシャの事を考えている間にコイツ等の方で話が進んでいたか

千冬

「可能だ。だが、仮にも国家機密に相当するから情報が漏洩した場合、全員に査問委員会による裁判と2年以上の監視が付くからな。それを覚えておけ。」

永遠

「自分達のやらかしたへまを押し付けといて機密も何も無いと思うがお？」

全員

「うんうん!!」

千冬

「……………」

私も火ノ兄の言う通りにしか思えん…

取り合えず私は提供された【福音】のデータをモニターに表示した

セシリア

「広域殲滅型の機体ですか？」

響

「セシリアの『ブルー・ティアーズ』が一番近い感じかな？」

シャルロット

「うん、後気になるのはこの特殊武装だね？どんな物か分からないけど曲者っぽいよ？」

ラウラ

「ああ、それにこのデータには『福音』の近接性能が載っていない。接近戦は賭けになるかもしれないな…教官！偵察は可能ですか？」

千冬

「偵察は無理だな…目標は今も超音速飛行を続けている…接触できるのは1回だけだろうな。」

鈴

「1回だけか…なら誰が行くかですね…一番いいのは…」

鈴のその言葉に全員の視線が火ノ兄に集まった

だが…

千冬

「残念だが火ノ兄は無理だ。まだ怪我が治りきっていない。」

鈴

「ですよね…なら…やつぱりセシリアかな？」

セシリア

「ですがわたくしの機体は…」

シヤルロット

「あ！そうだった、まだ最適化フィッティングが終わってなかったね？確か1,2時間かかるって話だけど…」

ラウラ

「教官、【福音】が最接近する場所まで後どのくらいの時間が掛かりますか？」

千冬

「およそ50分後だ。」

簪

「それじゃあセシリアも無理…」

そう、この作戦には最も成功率が高い火ノ兄とオルコットが参加する事が出来ないんだ

火ノ兄は怪我の為に戦闘は無理…オルコットは機体の調整がまだ済んでいない…クソツ！！こんな事になるなら先に【ハルフアス・ペーゼ】の調整をするように東に言えば

よかった…

セシリア

「そうなるとは後は…本音さん？」

本音

「私？」

千冬

「ワイバーン・ガイア」か…恐らくだが布仏では無理だ。」

全員

「え!？」

千冬

「ワイバーン・ガイア」は確かに第5世代だがあの巨体のせいだか機動性が一番低い…お前達の機体よりかは上なのだが、「福音」の速度は恐らく第3世代最速…「ワイバーン・ガイア」では一步遅れていると思う…」

データを見る限り「ワイバーン・ガイア」でも追い付く事は無理だろうな…「ハルファス・ベージェ」なら問題は無いのだが…

くそっ…折角の第5世代が現状では使えないという事か…アメリカとイスラエルめ…面倒な物を造りおつて…

永遠

「うゝむ…そうになると残る手段は織斑に任せるしかないのお…」

やはりその手段しかないか…だが…

一夏

「え！俺!?!」

鈴

「そうよ、アンタの【零落白夜】で【福音】のSEを一気に0にするのよ。」

一夏

「一気に?」

鈴

「そう、一気によ。【白式】のSEを可能な限り【零落白夜】に回して一撃で終わらせるの。でもそうなる…」

ラウラ

「可能な限りエネルギーを温存する必要があるから誰かが一夏を目標地点に運ぶ必要があるな…」

シャルロット

「それを誰がするかね…」

コイツ等もそこに気付いていたか…

そうだ、一夏に任せる場合、【零落白夜】に出来る限りエネルギーを回した一撃を入れる必要がある…だがその為には一夏を輸送する人員が必要だ…だがそれが可能なのは…

千冬

「……………」

私は周囲にいる専用機持ち達を見渡してその人物を探した

まず火ノ兄とオルコットは作戦に参加出来ないから無理だ…

次に鈴とラウラ、デユノア、更識の4人のISではスピードが足りん…

後は布仏だが…【福音】の速度を考えると少し厳しいか？

それと…

箒

「……………」

私はこれまで一切会話に入っていない奴に視線だけ向けた

コイツの【紅椿】は第4世代だが束がリミッターをかけているから性能がかなり下げられている…リミッターを外せばいけるか？…いや駄目だ！そんな事をすれば暴走するのが目に見えている…

しかしどうすれば…最悪の場合、火ノ兄の【ラインバレル】で一夏を【福音】の前にピンポイントで転移させるしかないな…

私が誰に任せるか考えていると…

箒

「私がやる!!!」

全員

「は？」

あろう事かその箒が名乗りを上げた

箒

「私の【紅椿】なら一夏を目的の場所まで運べる！私のISは第4世代だ！凶体だけの第5世代とは違う!!」

全員

「……………」

コイツ、さつきまで自分が何を言っていたのか忘れたのか？

その凶体だけの機体を寄越せと騒いでいたのは何処のどいつだ…この変わりよう…
いっそ清々しくささえ感じるな…

だが…

千冬

「お前のＩＳはリミッターがかけられているだろ？無理だ。」

コイツに任せると更に面倒が起きそうだからな…

箒

「今は緊急事態何でしょう!!でしたらリミッターを外して下さい!!」

千冬

「ぬう…」

悔しいがコイツの言う事にも一理ある…こうなれば仕方無い…

千冬

「…東!!出て来い!!」

私は声を少し大きめにそう言った

すると…

東

「ニヤハハハ…やつぱり分かった？」

天井から東が出て来た

やはりいたか…

千冬

「核心は無かったがな…お前なら聞き耳くらい立てていると思つていた。それで話は聞いていたな？」

東

「聞いてたけど…リミッターを外すの？」

千冬

「今考えているがその前に一つ聞きたい。リミッターを外せば【紅椿】は【白式】の輸送が可能なのか？」

東

「…出来るよ。リミッターを外した【紅椿】はスピードだけは【ワイバーン・ガイア】を超えるからね。尤も【ハルファス・ベージェ】には全ての面で遥かに劣るよ。」

箒

「チッ！」

露骨に舌打ちしたな…そんなに自分の機体がオルコットの機体に劣っている事が気に入らないのか…まあ今はいいか…

さて…どうするか…

東

「リミッターを外すだけならすぐに出来るよ。掛け直す事も同様だよ。それからリミッ

ターを外してもちーちゃんに渡した停止スイッチは問題無く動くよ。」

箒

「チッ！」

また舌打ちか…リミッターと一緒に停止スイッチも機能が停止すると思っていたのか？

全く…コイツがそんな事する訳無いだろうに…

東

「それでどうする？リミッターを外せつて言うなら今回だけ特別に外してあげるよ。その辺の判断はちーちゃんに任せるよ。」

後は私に任せるか…

ええい、やむをえん!!

千冬

「**【紅椿】**リミッターを外してくれ！織斑の運搬は篠ノ之に任せる！」

箒

「千冬さん!!」

千冬

「**【織斑先生だ!!!】**」

ガンツ！

箒

「ぐほっ!？」

取り合えず名前で呼んできたコイツを1発ぶん殴っておいて…

後は…

千冬

「聞いている通りだ！作戦は織斑と篠ノ之の2人で行う！他の者はバックアップに回れ!!」

全員

「了解!!!」

千冬

「……………」

全員が返事をしたが…やはり篠ノ之に任せるといふ事に不安があるようだな…
私も同様だから何とも言えん…

く千冬 Side outく

く一夏 Sideく

箒に運んでもらう事になった俺は束さんに「白式」を再調整して貰った

それと同時に箒の「紅椿」のリミッターも解除された…リミッターの外された瞬間、箒は笑みを浮かべていた…でも、何だろ…不安しか感じないんだよな…

そして俺と箒は今ほ浜辺で出撃準備をしている

その時…

千冬

『一夏、聞こえるか?』

一夏

「え?千冬姉?」

指令室の千冬姉から通信が入った

千冬

『そのまま聞け。これはプライベートチャンネルで話しているから箒には聞こえん。いか、簡単に言うぞ?箒に気を付けておけ。』

千冬姉は態々プライベートチャンネルを使って俺だけに話しかけて来た

内容は箒の事だった…それを聞いて…

一夏

「…千冬姉もそう思うか?」

千冬姉も俺と同じ事を思っていたようだった

千冬

『ああ、正直アイツには不安要素しかない。だから作戦続行が無理と思ったらすぐに引き返してこい。こちらは火ノ兄を待機させておく。』

一夏

「火ノ兄を？でもあいつはまだ…」

千冬

『戦闘は無理だ。だが「ラインバレル」の「転送」なら使える。退却が無理と判断したらすぐに連絡を寄越せ。火ノ兄を回収に向かわせる。』

一夏

「分かった。」

そうか…アイツの「ラインバレル」ならいざと言う時にも離脱出来るな…

そう思うと少し気が楽になった

く一夏 Side out く

く千冬 Side く

千冬

「それでは作戦を決行する!!」

一夏&箒

『了解!!』

私の合図と共に一夏は篠ノ之の背に乗って飛び出していった…私は飛び去ったその姿に不安しか感じなかった…

東

「ちーちゃん…」

千冬

「東…すぐに「ハルフアス・ベーゼ」の最適化ファイティングに取り掛かってくれ。」

この作戦が失敗した場合、「福音」を止められるのはオルコットの「ハルフアス・ベーゼ」だけだからな…保険は掛けておかんとな…

東

「分かったよ…セーちゃん行くよ!」

セシリア

「はい!!」

出来れば…オルコットの出番が無い事を祈るが…

く千冬 Side outく

第109話：白と紅の敗北【白式&紅椿VS銀の福音】

（真耶 Side）

現在、私達は指令室で【福音】の迎撃に向かった織斑君と篠ノ之さんをモニターしています

してるんですけど…失礼ながら凄く不安です…不安しかありません…

それは一緒にいる先輩や他の専用機持ちの皆さんも同じ気持ちの様です…

でもそう感じてても仕方ないんです…何しろこの作戦は織斑君と篠ノ之さんの2人だけで行ってるんです…しかも篠ノ之さんが参加していると言うだけで不安が大きくなってしまうんです…

彼女のIS適正は『B』です…しかも学園での成績はお世辞にも良いとは言えません…下から数えた方が圧倒的に早いです…

そんな彼女が専用機を手に入れたからつてすぐに乗りこなせる筈ありません…

それが分かっているからこそ篠ノ之博士は第5世代ではなく第4世代を用意して、尚且つリミッターをかけたんでしょう…

そうでなければ彼女はすぐに暴走する事が目に見えています…

それにあの子は火ノ兄君の「戦国龍皇」を盗みました…そんな事をする人に本当なら専用機を持つ資格すらありません…

それなのに彼女が専用機を手に出来たのは篠ノ之博士の妹と言うレッテルのお陰です…そんな事で手に入れるなんて必死に努力した人達を馬鹿にする行為ですよ…

つと、話が逸れましたね…まあそんな子にこんな難しい作戦を任せてしまつて大丈夫なのかという訳です…やる事は織斑君を現地まで運ぶだけなんですけど…不安で仕方無いんですよ…

あ！そんな事を考えている内に…

真耶

「先輩！2人が目標ポイントに到着しました！」

千冬

「よし…」

真耶

「あの…大丈夫なんでしょうか？」

千冬

「…大丈夫とは言えんな…何しろあそこには『爆弾』の様な不安要素の塊がいるからな

…

爆弾つて…そこまで言いますか…

千冬

「織斑を運び終わったら戻れと言ってあるが…」

真耶

「そのまま参加すると思いますよ?」

千冬

「私もそう思う…実際に攻撃前にそう言ったら『エネルギー切れになった一夏を誰が連れて帰るんだ!』とか言っていた…火ノ兄がいるから迎えの心配は無いんだがな…」

「ラインバレル」がありますもんね…連れて戻るくらいなら今の火ノ兄君でも出来るでしょうから…

それなのにモニターに映っている篠ノ之さんは戻る素振りを見せていません…どう見てもそのまま参加する気満々ですね…

千冬

「それにアイツが参加する魂胆も容易に想像出来る。」

真耶

「え?」

千冬

「成功したらあいつの事だ…束にその事を理由に『第5世代を寄越せ』とか『リミッターを外したままにしろ』とか言うに決まってる。」

真耶

「あゝ…言いそうですね…それ…」

その時の姿が簡単に想像出来てしまいます…

千冬

「かといって失敗したら『ISが悪い』とか言つて『第5世代にしろ』とか訳の分からん事を言うだろう。」

真耶

「……………」

そつちも容易に想像出来てしまいます…

千冬

「まあ本当にそんな事言つて来たらぶん殴つてやるがな。これ以上アイツの我儘なんぞ聞くに堪えん戯言だ。耳障り以外の何者でも無い。」

真耶

「…ですね…」

私も聞きたくないです…

…あ!?

真耶

「先輩!!【福音】がもうじき2人と接触します!!」

千冬

「いよいよよか…」

無事に成功してくれる事を祈る事しか私には出来ません…

〈真耶 Side out〉

〈三人称 Side〉

箒

「準備はいいな!!」

一夏

「オ、オウ!!」

現在、【福音】との接触ポイントに到着した一夏は何時【福音】と接触してもいい様に
戦闘態勢を取っていた

だが…

一夏

（何で戻らないんだ？）

指令室の千冬達の予想通り箒はこの場に留まっていた

一夏が聞かされた作戦では箒の役目はここまで運ぶだけだった

帰りに関しては永遠の「ラインバレル」を迎えに行かせるからエネルギー切れになっても大丈夫だと説明されていた

にも拘らず何故か箒はこの場に居座っていた

その事を一夏が言っても…

箒

「お前一人では心配だ!!だから私も残る!!大船に乗った気持ちでいろ!!」

とか言う始末だった

ハッキリ言つて箒の力を頼るなど大船どころか泥船に乗る様な物でしかなかった

一夏もそこまでは思つていなくても不安でしかなかった

その為…

一夏

（千冬姉にも言われているし、最初の一撃が躲されたら火ノ兄に撤収を頼むか…）

一夏は作戦通り、最初の一太刀で決めようと気を引き締めた

一夏

(…となる…やっぱり瞬間イグニッション・フースト加速で接近するしか無いな!!)

そして、その為に自分がどう動けばいいかも決めると…

箒

「来たぞ!!」

遂に【福音】が現れた

一夏

「よし!!行くぞおおおっ!!!」

迫りくる【福音】に対して一夏も【雪片】を構え直すと飛び出した

それに続く形で箒も飛び出した

箒

(コイツを倒して…私の力を認めさせてやる!!そして姉さんに私に相応しい第5世代を用意させる!!火ノ兄も剣刃つるぎを造らせてやる!!!)

そんな箒の考えている事はココでも千冬達の予想通りの事だった

一方…

一夏

「…ココだ!!」

一夏はハイパーセンサーで【福音】との距離を計り、イグニッション・ブースト瞬時加速を使うタイミングを狙って使用した

そして…

一夏

「よし!!」

多少のズレは起きたが一夏は【福音】に急接近する事に成功した

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

『La?』

一夏

「貰ったあああああああああああああつ!!!」

一夏はそのままの勢いで【零落白夜】を発動すると【福音】に向かって全力で斬りかかった

だが…

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

『La♪』

ドガガガガガガガガガガガッ!!!

一夏

「グアツ!!」

【福音】の背中に装備されている大型のスラスタから無数のエネルギー弾が撃ち出された

これこそが【銀の福音】に装備された広域殲滅兵装…【銀の鐘】だった

【銀の鐘】によつて一夏の機先は削がれてしまった

一夏

（くっっ！コレが特殊武装かよ!?この弾幕を躲すのはいくら何でも厳しいぞ!!SEの残りは…まだ行けるか…けど最初の一撃を防がれたしな…ココは最初の予定通り撤退した方がいいのか?）

一夏が撤退を考え始めた時…

箒

「うおおおおおおおおつ!!!」

一夏

「ま、待て箒!?!」

横から箒が【福音】に斬りかかった

慌てて一夏が止めようとしたが箒は止まらなかつた

だが…

ドガガガガガガガガガガガガツ!!!
箒

「ぐあああああああつ!!」

突っ込んで来た箒は【銀の鐘】シルバールベルでアツサリ撃ち落とされた

銀の福音
シルバールベル

『La〜♪』

一夏

「箒!!くっ!!」

箒が仕掛けた為、【福音】は更なる追撃を放ってきた

その為、やむを得ず一夏も戦闘を継続する事になってしまった

……

……

……

銀の福音
シルバールベル

『La〜♪』

それから2人は【福音】に挑むが決定打を与えられずにいた

箒

「おのれえええええつ!!!」

さらに箒は【福音】に手も足も出ない事から苛立ち、動きが雑になって行つた

一夏

「待てよ箒!!!」

そんな箒を一夏は落ち着かせようとするが箒は耳を貸そうとはしなかつた

箒は完全に頭に血が上つてしまい【福音】を倒す事しか考えられなくなつていた

一夏

（くっ!!どうすればいいんだ…もう【白式】のSEも残り少ない…【零落白夜】も使えて後数秒しかない…）

一方で一夏は今の状況を冷静に考えていた

一夏

「（これ以上の戦闘はもう無理だ!!千冬姉に連絡を取つて…）ん？」

そして一夏は撤退を決め、指令室の千冬に連絡を取り永遠を迎えに来てもらおうとした

だが、その時一夏は何か気付いた

一夏

「何だ今の?…ええ?」

それが何か分かると目を見開いた

何故ならそれは現在この海域にはあつてはならない物だったからだ

その為：

一夏

「箒!!!『船』だ!!!」

箒

「船だど!?!」

箒に叫んだ

一夏が見つけた物…それは『船』だったのだ

海域封鎖をしているにも拘らず船がいると言う一夏の行き成りの言葉に流石の箒も突撃を止めた

一夏

「そうだ!恐らく密漁船だ!だから…」

一夏は船を逃がす為に移動しようと言おうとした

だが…

箒

「そんな奴等放っておけ!!」

一夏

「…え？箒？」

何と箒は船の乗員を見捨てると言い出した

箒

「奴等は犯罪者だぞ!!そんな奴等に構うことは無い!!」

一夏

「…………お前…何でそんな事言えるんだよ…」

箒

「え？」

一夏

「…犯罪者だからって…見捨ててるなんて…何で…そんな寂しい事言うんだよ…」

箒

「い、一夏？」

一夏

「…お前…『そんな奴』だったのか？」

箒

「!？」

一夏の言葉に箒は動揺し刀を落とした

箒

「ち、違う…わ、私は…ただ…ただ…」

箒は言い訳を言おうとした

だが、その後の言葉が出てこなかった

それもその箒…箒がココに居るのは自分の欲望を満たす為のただの我儘でしかないからだ

密漁船はその自分の目的を邪魔した存在だった

その為、箒は続きの言葉が出てこなかった

続く言葉は自分の欲望を口にする事になるからだった

だが、今は戦闘中…

つまり…

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

『La♪』

ドガガガガガガガガガガッ!!

一夏&箒

「!？」

第110話：第2陣出撃!!

～三人称 Side～

箒

「い、一夏あああああああつ!!!」

【福音】の攻撃から箒と船を守って【銀の鐘】シルバール・ベルを全て受けた一夏は爆発に飲み込まれた

箒

「そ、そんな…」

シルバール・ゴスベル
銀の福音

『La♪』

箒

「!?!」

そして一夏を倒した【福音】は次の狙いを箒に定めた

だが…

ブンッ!

箒

「!?…ひ、火ノ兄!?」

その時、箒の目の前に「ラインバレル」を纏った永遠が現れた

永遠

「……………」

ブンッ!

だが、永遠は何も言わず箒を掴むと「転送」を使い再び転移した
次に現れたのは一夏が守った船の上だった

そして…

ブンッ!

今度は船ごと転移した

その結果…

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

『……………La?』

戦闘海域には【福音】だけが残された…

〈三人称 Side out〉

〈千冬 Side〉

千冬

「…篠ノ之…何か言う事はあるか？」

箒

「……………」

私は今、一夏と箒が出撃した海岸に来ている

そしてそこでは火ノ兄によって戻つて来た箒と対面している訳だ

何故私がそんな事をしていると言うこと…簡単に言えばこの馬鹿の尋問だ！

事前の作戦ではコイツは一夏を目的地に運ぶ事だけが役割だった…だがコイツは一夏を送り届けても戻ろうとはせず勝手に作戦に参加した

一応様子を見ようという事で放置していたが一夏が船を発見した事で状況は一変した

あろう事かこの馬鹿は船が密漁船と言う理由で見捨てたのだ

その結果、船とこの馬鹿を庇つて一夏は「福音」の攻撃を纏めて受けてしまった

幸い準備させていた火ノ兄が被弾直後の一夏を助け出してくれたお陰で九死に一生を得たがそれでも重傷なのに変わりはなく、馬鹿と船も連れて戻つて来た火ノ兄はすぐ待機させていた医療班に一夏を預けた

もし火ノ兄が来るのが僅かでも遅れていたら一夏は更に酷い事になっていたかもし

れんな…

それから密漁船の方は地元の警察に連絡して既に引き渡してあるから大丈夫だ

つまり残る問題がこの馬鹿!!篠ノ之箒だ!!

コイツは私がココに来てから一言も喋っていない…言い訳を言えと言つても何も言わない

私に来る前はギャーギャー騒いでいたのにな?

千冬

「…事前に立てた作戦ではお前の役割は織斑を目的の場所まで送り届ける事だけ…それが終わり次第戻る手筈だったな? 違うか?」

箒

「……………」

千冬

「迎えに關しては火ノ兄に任せると言つた筈だが? お前はこつちの立てた作戦を聞く気が初めから無かつたのか?」

箒

「……………」

千冬

「もう一度聞く…誰が参戦していいと言った？誰の許可を経てあんな事をした？」

箒

「……………」

返答無し、か…当然だな

コイツのやった事は明らかかな命令違反…しかもコイツが勝手に参戦したせいで結果として一夏は重傷を負ったんだからな

全く！本当に碌な事せんなコイツ!!

だが、これ以上コイツの相手をする時間も無い…ココは…

千冬

「ハア…まさか行き成り使う事になるとはな…」

箒

「…え？」

『アレ』を使うしかないか…

私はそう言ってポケットから『ソレ』を取り出した

箒

「そ、それは!?!」

それを見て箒は慌てました

それはそうだろう…何しろコレは…『【紅椿】の強制停止スイッチ】だからな!!
箒

「ま、待って下さい!!!」

箒は止めようとしたが私は構わず…

カチツ!

スイッチを押した

その瞬間、箒の手首に巻かれていた待機状態の【紅椿】が色を失った

金と銀の鈴が付いた赤い紐だったが今は全て灰色になってしまっている

なるほど…止めるとああなるのか…分かり易いな

箒

「【あ、紅椿】?…:オイ!! 【紅椿】!?! 応えろ!!」

箒は【紅椿】を展開しようとするがどれだけ呼び掛けても【紅椿】は何に反応もしな
かった

よし!確かに止まってるな!

さて、後は…

千冬

「篠ノ之!!お前は部屋で謹慎だ!!処罰の内容はこの一件が終わり次第通達する!!それま

で大人しくしている!!!」

箒

「!?」

この馬鹿を隔離しておく

それでもしておかんとコイツの事だ、【紅椿】が使えないならと今度は量産機を勝手に持ち出して【福音】に再戦を挑みかねんからな

そう言う訳で私はコイツを引き摺って旅館に戻ると空き部屋を一つ用意して貰い、そこに放り込んでおいた

勿論教師の1人を見張りに付けた

く千冬 Side outく

く東 Sideく

ハアく…まさかこんな事になるなんて…

ゴメンねいつくん…東さんもこんな結果になるなんて思わなかったよ…

まさか箒ちゃんがここまで酷かったなんて…本当…何であんな子に育つたんだろ？

東さんはそんな事を考えながらメガネつ子と一緒に【福音】の現状を監視していた
すると…

千冬

「東！真耶！【福音】が何処にいるか分かったか!!」
指令室にしている部屋にちーちゃんが戻って来た
でも、戻って来たって事は…

東

「その事より箒ちゃんは？」

千冬

「空き部屋に閉じ込めて見張りを置いて来た!!」

まあそういう事だよね…

東

「やっぱりそうだった？…って事は…」

千冬

「ああ、使わせて貰った!!」

東

「アハハ…やっぱり…」

使ったんだね…スイツチ…

でも仕方ないか…あんな結果じゃ東さんも弁護できないし使うしかないよね…

千冬

「それで【福音】は？」

東

「あ、うん、居場所の特定は済んでるよ。って言うかあれから動いてないよ？」

千冬

「は？動いてない？一夏と戦ったあの場所にまだいると言うのか？」

真耶

「はい。」

千冬

「…何故動かないんだ？」

東

「それだけど…少し調べて見たら今は休眠状態になってるみたいだよ？」

千冬

「休眠？一夏と箒の2人と戦ったくらいでそうなるとは思えんが？」

まあそうだよね…：相手がとーくんやセーちゃんならともかくいつくんと箒ちゃんと戦ったくらいで休むとは思えないし…：となると…

東

「…移動の疲れ、つてところかな？」

千冬

「そんな所か…」

なんだかんだで【福音】は太平洋を横断してこつちに来たもんなく…

千冬

「まあそれはいいとして動いてないなら丁度いい…東、「ハルファス」は？」

お！遂に出番が来たんだね！！

東

「うん！！準備OK♪いつでも行けるよ！！」

千冬

「よし！！ではオルコットに出撃命令を出せ！！」

真耶

「ハイ！！」

千冬

「それと布仏も出撃させろ！！」

真耶

「え？布仏さんもですか？」

のんちゃんも出すの!?

千冬

「ああ、奴が動いていないなら2人に任せられた方が確実だろ?」

東

「ふゝむ…確かにそうだね…」

真耶

「分かりました!では2人に連絡しますね!!」

メガネっ子も返事をするとかセーちゃんとのんちゃんに連絡を入れた…

でも…「ワイバーン・ガイア」と「ハルフラス・ベーゼ」のタツグか…

うわ…自分で造ってにおいて何だけど…完全にオーバークイルだね…ご愁傷様…

私はこの後の展開を予想して「福音」に内心合掌した…

そして…

真耶

「ハルフラス・ベーゼ」!!「ワイバーン・ガイア」!!発進しました!!!

2人が出撃した…

【福音】…南…無…

〜東 Side out〜

第111話・蒼と白の勝利【蒼炎の不死鳥&白き翼竜VS銀の福音】

（三人称 Side）

旅館から飛び立ったセシリアと本音は現在、「福音」のいる海域へと向かっていた

とは言っても2人のISは移動速度が違い過ぎるのでセシリアは「ワイバーン・ガイア」の背に乗る形で移動していた

本音

「セツシー、ぶつつけ本番になったけど大丈夫？」

セシリア

「そうですね…不安が無いとは言えませんが…ですが大丈夫ですわ。」

その道中で本音はいきなり実戦投入する事になった「ハルフアス・ベーゼ」で大丈夫なのかを聞いて来た

セシリアと違い本音は「ワイバーン・ガイア」を受け取ってから永遠や簪、鈴達と訓練を行っていたので機体の扱いにも既に慣れていた

だが、セシリアの場合はISの技量は本音よりも遙かに上ではあるのだが、まだ新型に慣れていない為に不安が残っているのだ

尤も、それは第一陣で出撃した筈にも言えた事なのだが、筈の場合は本人の実力不足とその辺の事を何も考えず自分勝手に突っ走った結果あなつた

……

……

……

それから暫くして……

セシリア

「見つけましたわ!!」

本音

「こつちでも捉えたよ!!」

【福音】が2人のリーダーの索敵範囲内に入った

本音

「それじゃあセツシー!!」

セシリア

「ハイ!先手必勝ですわ!!」

ガキョンツ!!

そう言つてセシリアは両肩の4枚の翼に装備されている大型砲「クロス・メガビームキヤノン」を展開した

セシリア

「…発射!!!」

ドギユウウウウンツ!!!

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

『…L a?』

ドガアアアアアンツ!!!

セシリアの砲撃は「福音」が気付いた時には既に遅く、躲す事も出来ずに直撃を喰らつた

セシリアと本音からは「福音」の位置を正確に捉えていたが、「福音」の方は2人の存在に気付いていなかった

それは「福音」の索敵範囲よりも2人の索敵範囲の方が遥かに広い為、セシリアはまず長距離からの砲撃による先制攻撃を仕掛けたのだつた

そして…

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

「ハアアアアアッ!!!」

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音

『La!?!』

爆煙の中から2本のビームサーベルを抜いたセシリアが飛び出してきた

【福音】はすぐに迎撃しようとしたが…

セシリア

「遅いですわ!!」

ザシュザシュツ!!

一瞬で背後に回り込んだセシリアは【福音】の背中にある大型スラスタを根元から斬り落とした

そして…

セシリア

「これで!!!」

本音

「終わりだよ!!!」

セシリアは【クロス・メガビームキャノン】…本音は【アーム・カノン】と【レーザー・プレス】をそれぞれ撃った

「ええ、戻りましょう♪」

そう言つて2人はナターシャを連れて旅館に戻つて行つた

アメリカとイスラエルが合同で開発した最新鋭の軍事ISと言えども、ISの生みの親、篠ノ之東の造つた第5世代の前では何の抵抗も出来ずに敗れ去つたのだつた

後日、IS学園からこの結果を聞かされた両国は暴走を止めたセシリアと本音に感謝すると同時に2人の機体の凄まじさに恐れおののくのだつた

尚、【福音】を開発した研究者達は自分達が苦勞して開発した【福音】が2人にアツサリ倒されたと知り、そのシヨックで暫くの間立ち直れなかつたとか…

く三人称 Side out く

第112話：歪んだ結論

く千冬 Sideく

千冬&真耶

「……………」

私と真耶はオルコットと布仏の戦いを見て言葉を失っていた

東

「いやく流石は東さんの最新型♪あの程度のIS何て目じゃなかったね♪それにセーちゃんも「ハルフアス・ベーゼ」を完全では無いけど使えていたし、今の所は及第点だね♪」

一方で東は大喜びしていた

それもそうか…：自分の造った機体の活躍を見ればそう言いたくもなるか…

だがな…：

それにしても幾ら2対1とは言えまさかここまで一方的に勝つとは…：乗り手の技量も合わせるとこの結果は当然と言えるのだろうか…：私達の作戦会議って一体何だった

んだって言いたくなるんだが…まあいいか…

しかし、「ワイバーン・ガイア」も「ハルファス・ベーゼ」もその能力の半分も出して
いないな…あの2人…消化不良を起さなければいいんだが…

まあ、そうなったら仕方無い…悪いが火ノ兄を『生贄』にしよう!! うん!!

千冬

「さて、これで【福音】の件も片付いたな…後はナターシャの事だが…真耶?」

真耶

「ハイ!すでに医療班には連絡済みです。2人が戻り次第治療に当たります。」

千冬

「ならば良し!ではナターシャの事は任せるぞ。」

真耶

「任せて下さい!…それで先輩は?」

千冬

「ああ、私は…」

私はさつき空き部屋に放り込んだ馬鹿の顔を浮かべた…

千冬

「理事長とあの馬鹿の処分内容を話し合う!!」

東&真耶

「……………」

千冬

「東、悪いがアイツは学園の生徒としてこちらでキッチリ処罰を下す!!口出しするなよ!!」

東

「…分かったよ…確かに今回の事は東さんも見過ごせないからね…何も言うつもりは無
いよ…」

ホウ…流石の東も文句は言わんか…

東も成長したな…幼馴染としては嬉しい限りだ…以前のままならどんな状況でもあ
の馬鹿の肩を持っていただろうからな…

それに引き換え、アイツは何も成長していないな…

さて、前回が懲罰房で反省文500枚だったが…今度はどんな処分を下す事になるの
かな…あく面倒臭い…後で頭痛薬を買っておこう…確実にこれから頭が痛くなるだろ
うからな…

千冬

「ハア…」

…一度、一夏の様子を見てから行くか…

く千冬 Side out く

く永遠 Side く

ワシは簪や鈴達と海岸に来とる

何でワシ等がこげな所におるかと言うとセシリアと本音の出迎えじや

そんで暫く待つとると…

ズシイイイイイイッ!!!

ワシ等の前に「ワイバーン・ガイア」が降りて来た

その背には「福音」を抱えたセシリアが立っておった

セシリアはワシ等と一緒に待機しておった教師に「福音」の操縦者を渡すと本音と一

緒にISを解除した

セシリア

「ただいま戻りました♪」

本音

「たっただいま♪」

全員

「お帰り♪」

笑顔で挨拶して来たからワシ等も同じように笑って返した

鈴

「それでどうだったセシリア？【ハルフアス・ベーゼ】の使い心地は？」

セシリア

「ハイ♪今迄の違和感が嘘のように無くなって動きやすかったですわ♪ですが…」

シャルロット

「ですが、何？」

セシリア

「いえ、手持ちのライフルが無いと少し落ち着かなくなつて…その内慣れると思うのですが…」

全員

「あ〜…」

そう言えば【ハルフアス・ベーゼ】には大型砲は付いとるがアレは固定武器じゃからな…【ブルー・ティアーズ】の頃の癖と言う奴があるんじゃないかな…

後で東さんに相談しとくか…

簪

「本音の方は？」

本音

「初めての实战で緊張したけど何とか上手くいったよ〜♪」

永遠

「それは良かった♪2人共よう頑張ったのお♪」

ワシは2人を褒めながら頭を撫でてやった

すると…

セシリア&本音

「エへへ〜♪」／／／

2人は嬉しそうに笑っておった

じゃが…

簪

「ム〜…」

簪が不機嫌になってしもうた…

マズいのお…え〜、この場合はどうすればいいんじや？

ワシは鈴達に助言を貰おうと思っただが…

永遠

「…………アレ？」

既にワシら4人以外誰もおらんかった…

あいつら逃げおつたなああああああああああつ

!!!!!!

セシリア&本音

「エへへ〜♪」／／／

簪

「ム〜…」

永遠

「……………」

その後、ワシは簪の機嫌を直すのに四苦八苦するのじやつた…

〜永遠 Side out〜

〜箒 Side〜

教師1

『お疲れ様、交代よ。』

教師2

『分かったわ。…所で今どんな状況?』

教師1

『それならもう大丈夫よ。作戦は無事終了したわ。』

箒

「!?’

終わった、だど!?’では…【福音】は…

私は部屋の外から聞こえてきた会話に耳を傾けていた

教師2

『随分早いわね?』

教師1

『それはそうよ、だって篠ノ之博士の造った2機の第5世代が行ったんだから当然で

しょ?』

2機の第5世代!?’

オルコットと布仏か!?’

教師2

『それもそうね…それで…彼女はどうなるの?』

話題が私の事変わったか…

教師1

『織斑先生が理事長と話し合ってるわ。彼女の処遇に関しては後で織斑先生が直接言いに来るそうだからそれまではこのままだそうよ。』

教師2

『そう、じゃあ後はよろしく。』

教師1

『ええ。』

箒

「……………」

……………

………

…

私は今の状況に齒噛みしていた!!

あの時、密漁船なんか来なければ「福音」を倒して私の力を姉さんや千冬さんに知らしめる事が出来たと言うのに!!!

クソツ!!やはりあんな奴等放っておけばよかつたんだ!!!

それなのに何故私がこんな事になるんだ!!

箒

「……………いや…違う!!」

私は千冬さんによつて機能を止められた「紅椿」を見た

そうだ…コイツのせいだ!!

第4世代如きのISに私の力を引き出せる筈がない!!

やはり私の力を発揮する為には第5世代が必要だ!!

こんなポンコツ…私に相応しくない!!

そうと分かればこんなポンコツは姉さんに突き返して私に相応しいISを用意させ

よう!!

私はそう結論付けると千冬さんが来るのを待つ事にした

く箒 Side out く

第113話：姉の心、妹知らず

（千冬 Side）

千冬

「アイツは反省してらんだろうか……」

東

「……ゴメン……東さんでも分かんない……」

千冬

「……………」

私は東と話しながら空き部屋に放り込んだ箒のいる部屋に向かっていた

何故東もいるのかと言うと【紅椿】のリミッターをかけ直して貰う為だ

それで会話の内容はその箒の事なんだが、見張りの教師から連絡が今の所無いから大人しくしているみたいだが逆にそれが不安だ……普通なら大人しくしているから反省していると思われるんだがアイツの場合は当て嵌まらんからな……

そもそもあの箒が大人しくしていると言うのが私には信じられないからだ……アイツ

の事だから部屋の中で暴れる位は平気ですると思つていたんだがそれも無い様だ：ハツキリ言つて気味が悪い程に不気味だ：

そんな事を考えていると目的の部屋に着いた

千冬

「ご苦労、篠ノ之は？」

私は見張りをしている教師に確認を取つたが：

教師

「今の所は静かにしてますね。」

千冬

「そうか…」

静かにしてるのか…本当に不気味だ：

千冬

「それなら後は私に任せておけ。何かあればまた連絡するがそれまではゆっくりしておいてくれ。」

教師

「分かりました。それでは後は頼みます。」

千冬

「入るぞ篠ノ之。」

一言声をかけてから私と束は部屋の中に入って行った

箒

「……………」

中に入ると正座した箒がこちらを見ていたが…この顔、明らかに不満しかないって言う顔だな…

ハア…大人しくしているからほんの僅かでも反省しているかとも思ったりもしない訳では無かったがやはり無理だったか…この顔は絶対反省してない顔だ…

まあいい、さっさと用件をすませよう…私も束も暇では無いからな

千冬

「さて篠ノ之…今回のお前の無断行動の件によるお前の処罰内容が決まった。」

箒

「……………」

千冬

「ハア…全く…お前は一体何回処罰を受ければ気が済むんだ…毎回毎回こんな事で頭を悩ませるこっちの身にもなれ…」

箒

「くっ…」

こんな事本当なら生徒相手に言うべきでは無いがコイツの場合は別だ！

本当にいい加減にして欲しい！

千冬

「お前は学園に戻り次第懲罰房で反省文200枚の提出と夏休みの前半は学園での奉仕活動だ！」

箒

「奉仕…活動…」

千冬

「それで少しは他人を思いやる心を学べ!!」

箒

「!?!:わ、私が他人を思いやらない人間だって言うんですか!!」

何を今更…

千冬

「これまでの自分を振り返ってみろ！今までお前が学園でやって来た事は全て自分本位の身勝手なものばかりだろうが!!その何処に他人を思いやる行動があったと言うんだ!!」

そう……コイツは今まで自分以外の誰かの為に行動した事は一度も無い

全て自分の欲望のままに行動し、他人の事など一切考えてはいない

箒

「うっ……ぐっ……」

まあ、奉仕活動をさせたからと言ってコイツのこの捻じれに捻じ曲がった性格が治るとも思えんがな……何もしないよりかはいいだろう

それに、もしかしたらという事もあるからな……期待しないで経過を見る事にするかさて、コイツの処罰も下したし、束の方の作業をして貰うとするか

千冬

「それと篠ノ之、【紅椿】を出せ。リミッターをかけ直す。」

箒

「!？」

私がそう言うとき箒は待機状態の【紅椿】に触れた

箒

「……再起動も……してくれませんか？」

千冬

「そつちはしない。そもそもお前はその後謹慎だろうが。再起動する必要が何処にある

「？」

話を聞いてなかったのか？

箒

「……………そうですか…なら…」

千冬

「ん？」

箒はおもむろに立ち上がると【紅椿】を外した

私はこちらに渡すものかと思つたが…

バシッ！

箒

「こんなポンコツいりません!!!」

千冬

「!?!」

【紅椿】を束に投げつけた!?

ぶつけられたのが待機状態だったから束は怪我なんてしなかつたが、箒の突然の行動に私も束も動揺していた

コイツ行き成り何のつもりだ!?

箒

「こんなポンコツI Sを渡されたせいで作戦は失敗したんだ!!一夏が怪我を負ったのもコイツのせいだ!!」

鼻息を荒くしながらコイツは訳の分からない事を言いだした

コイツ：言うに事欠いてI Sのせいにしてきた!?

箒

「…第5世代だ…姉さん!!私の我儘を聞くのが最後だと言うなら第5世代を用意しろ!!!
第4世代なんてガラクタでは私には相応しくない!!!私に相応しい第5世代をください
!!!」

束

「……………」

相応しいI Sを寄越せだと!?

コイツ、あの作戦の失敗をI Sのせいにしたのか!?

千冬

「…篠ノ之…いや、箒…お前…そこまで『落ちぶれた』のか…」

私は目の前にいる知り合いの余りにも酷く情けない姿に心底落胆した

箒

「私は落ちぶれてなどいません!!ただ本当の事を言っているだけです!!!」

何を馬鹿な事を…

自分に相応しいのは第5世代?

作戦に失敗したのはI Sのせい?

コイツには『自分が悪い』と言う考えが完全に抜け落ちている…全て他の人間やI Sのせいになっている…

こんな奴に奉仕活動なんてさせても効果は見込めんな…

まあ、それはもうどうでもいいとして…今のコイツの行動は流石に見過ごせん!!一発ぶん殴ってやるか!!

私はそう思つて拳を振り上げた

だが…

東

「…いいよちーちゃん…」

千冬

「!?…だが東!!コイツのした事は!?」

東本人に止められた

東

「いいよ別に…箒ちゃん…『紅椿』がいらないって言うなら持つて帰るよ。じゃあね。」

東は落ちてゐる【紅椿】を拾うときさつきと部屋から出て行つた

千冬

「オ、オイ東!!」

箒

「姉さん!!今度こそ第5世代を持つて来て下さいよ!!」

そんな東にコイツは未だに自分の欲求を口走つていた

コイツ氣付いてないのか?

東は一度も領いていないんだぞ?

だが、コイツは…

箒

「フッフ…コレで今度こそ第5世代が私の物に…」

第5世代が用意される物だともう思い込んでゐる…まさかココまで馬鹿…いや、『愚者』だったのか…

私はもう今のコイツとはもう関わり合いになりたくなかつた…

だから東には止められたが力一杯一発ぶん殴つた後、コイツの処分内容を改めて通達した後部屋を出て行つた

その後、待機していた教師に再び見張りを頼んだ後、束を急いで追いかけた

……

……

……

千冬

「束!!!」

束

「……………」

良かった!まだいた!

怒ってさっさと帰るかと思っただけからな……

千冬

「束……箒の事だが……」

束

「……………箒ちゃんの気持ちは分かったよ……」

千冬

「……え?」

た、束?

東

「もう怒った!!!!だれが第5世代なんか造ってやるかああああああ!!!」

あ、やっぱり怒ってた…

箒に対して激甘のコイツも流石にキレたか…

おかしい…姉妹仲が悪くなった事は確実なのに…私は今の東を見て安心している…
何故だ？

東

「電話もメールも着拒にしてやる!!!」

千冬

「いや待て待て！流石にそれはやり過ぎだろ!?!」

東

「いいんだよ!!あの子は一度突き放さないと分からないよ!!!」

千冬

「ぬっ…」

そう言われると…確かにそうだが…まさかあの東がそんな事を言うとは…

私が驚いていると…

東

「…ハア…ゴメンね【紅椿】…」

東は箒が投げつけてきた【紅椿】に謝っていた

東

「…あの子の成長を期待して用意したんだけど…アレじゃ無理だね…」

千冬

「…そうだな…」

アイツにI Sは危険すぎる…赤ん坊に銃を持たせる様な物だ…

しかし、東の奴…そんな箒が少しでもまともになる様に思つて【紅椿】を造つたのか

…

だが、あの馬鹿にはそんな姉の想いは届かなかつたか…

さつきまでの怒りが鳴りを潜めてすっかりしおらしくなつてしまつたな…

…よし！丁度日も沈んだ頃だしいい時間だ！

千冬

「東!!今夜は飲もう!!!私の奢りだ!!!今日は一晚お前の愚痴に付き合つてやる!!!」

東

「…ちーちゃん……………うん♪」

私が飲みを誘うと東は笑顔で頷いた

私と束はそのまま夜の居酒屋に直行した！

旅館での後始末は真耶に任せ、仕事が終わればこっちに来るように伝えてあるし、真耶の方も私が奢ってやることで帳消しにして貰おう!!!

く千冬 Side out く

第114話：臨海学校終了

く千冬 Sideく

千冬

「うあく……飲み過ぎた……」

昨日の夜に束と飲みに行つたが……流石に3件ハシゴしたのはやり過ぎたな……

二日酔いで頭が痛い……

千冬

「こつちは気分が悪いと言うのに束の奴！いつの間に帰つたんだ!!」

そう、今朝目を覚ますと一緒に飲んでいた筈の束がいなくなつていた

傍に置かれていた封筒を見ると中に手紙が入つていた

手紙には『先に帰る』と書いてあつた……後、『飲みを誘つてくれてありがとう』ともな

……

千冬

「フツ……まあ、いいか……」

アイツもいい気分転換になつたみたいだしな……

しかし、それは別にしてもこの頭痛はどうにかならないものか…

いや、飲み過ぎた私が悪いから文句を言えんのだが…

私が頭痛に悩まされながら歩いていると…

真耶

「センパ〜〜〜イ!!」

千冬

「ん〜?」

真耶がやって来た…大きな声を出さないでくれ…頭に響く…つて、アレ?

真耶

「先輩大丈夫ですか?」

心配してくれるのは嬉しいが…何か変だぞコイツ?

確か…真耶も昨日は私や束と一緒に浴びるほど飲んでたよな?

真耶の奴…そんなに酒に強かったか?

真耶

「先輩?」

千冬

「真耶…お前何とも無いのか?昨日あれだけ飲んだら?」

私がそう聞くと…

真耶

「え？…先輩…もしかして呑んでないんですか？」

千冬

「飲む？」

飲むって何をだ？酒か？今はもう飲みたくないぞ？

真耶

「博士の『酔い覚まし』ですよ。手紙と一緒に入っていた筈ですけど？」

千冬

「何っ!？」

そんな物があつたのか!?

私は急いで束の手紙が入っていた封筒を見た

すると…

千冬

「…あーあつた…」

本当に薬が入ってた…

私は急いでその薬を呑むと…

千冬

「…あ、頭痛が治まって来た…」

真耶

「凄い効き目ですよね〜？」

千冬

「そうだな…」

いくら何でも効き過ぎだろこの薬…だが、まあ…助かったな…

千冬

「さて…気分もよくなった事だし…真耶、帰りの準備は？」

真耶

「はい、皆さんちゃんとやっていますよ。…ただ、篠ノ之さんですが…」

あく、そうだった…アイツがいたの忘れてた…

と言うか昨日の飲み会はアイツが原因でもあるんだよな…

はあ…このまま忘れてしまいたいな…だが、そうもいかんか…

千冬

「奴には私が付き添おう。私以外ではアイツは言う事を聞かんだろ…」

真耶

「ですね〜…あ、後、織斑君の方ですけど…」

千冬

「アイツは後で病院に搬送する手筈になっていたな…先方に連絡は？」

真耶

「大丈夫です！織斑君の受け入れは極秘に行ってくれるそうです。」

千冬

「よしー！」

一夏と火ノ兄は世界でも2人しかいない男のIS操縦者だからな…入院するだけでも極秘に行く必要がある…

千冬

「なら、一度様子を見ておくか…」

真耶

「そうですね。」

そして私は真耶と一緒に一夏の寝ている部屋に向かったんだが…

………

………

………

これは……どう言う事だ？

一夏

「あ、千冬姉に山田先生。」

真耶

「お、織斑君!？」

病院に入院させるほどの重傷を負っていた一夏が目を覚ましていた

しかも、まるで初めから怪我なんてしていなかったみたいにピンピンしている

どう言う事だ？

束の仕業か？

いや、それなら私に言う筈……一体……一夏に何があつた？

千冬

「一夏……お前大丈夫なのか？」

一夏

「あ、うん、何とも無い……」

確かに見る限り問題なさそうだな……

それから私達は一夏から事情を聞いた

だが、やはり一夏自身も何故自分の怪我が治つたのか分からなかつた

しかし、一つ気になる事を言っていたな：

一夏

「…そう言えば…夢を見た気がする…」

夢か…普通なら気に止めないところだが…

何だ？妙に気になるな…夢の内容を聞いても一夏は覚えていなかったし、気にはなるが夢なんて不確かなもの調べ様も無いからな…せいぜい、後で束に相談するくらいしか出来ないか…

しかしまあ、今は一夏が回復した事を喜ぼう！

あ！後、病院にキャンセルの連絡と謝罪を伝えないと…

く千冬 Side outく

く永遠 Sideく

さて、色々あつたが今日で臨海学校も終わったの…

じゃが、この後は期末テストがあるんじやよな…

生まれ変わってもテストは嫌じゃな…まあええわい！なるようになるだけじゃい

!!

で…ワシはどう帰ればいいのかのう？

ココで皆と分かれて家に直接帰るか…バスで一度学園に戻ってから帰るか…まあ来る時の事を考えればバスの方じゃろうな…別にどっちでも構わんし、「ラインバレル」で先に帰ると言ったら織斑先生にまた怒鳴られるじやろうからな…

そう言えば…織斑と篠ノ之はどうすんじやろ？

織斑は大怪我しとるし、篠ノ之は大ボカかましおつたからな…

永遠

「…ん？」

ワシがそげな事考えとると…

一夏

「よー！」

廊下の向こうから織斑が手を挙げて歩いて来た…

アレ？こやつ重傷者ではなかったか？

シャルロット

「い、「一夏」け、怪我は!？」

こやつが大怪我しとる事を知つとるもんは全員驚いとるな…

足は…有るの…

幽霊ではないか…だとしたら…何故にこやつは昨日の今日でピンピンしとるんじや

?

永遠

「織斑…お主、何故に動ける？」

一夏

「それが俺にもよく分からねえんだ…目を覚ましたら怪我が治ってたんだよ…」

全員

「はあ？」

何じやそりや？

目を覚ましたら全快しとった？んなアホな…

永遠

「お主…ホントに人間か？」

一夏

「俺は人間だ!!!」

永遠

「うゝむ…」

考えても分からん…東さんに相談するしかないか…

一夏

「て言うかお前にだけは人間かどうかなんて言われたくない!!!」

永遠

「なぬ？ワシはれっきとした人間じゃぞ？」

一夏

「あんな…何処の世の中に生身でIS倒す奴がいるんだよ!!!」

永遠

「ココにおるが？」

一夏

「普通はそんな事出来る人間いるか!!!」

永遠

「修行すれば誰でも出来ると思うがの？」

全員

「出来るかあああああああああああああつ!!!」

むう…織斑だけでなく他のもんまで…

永遠

「そうかの〜？」

一夏

「そうだ!!!」

じゃが、ワシはちゃんとした人間じゃぞ?

ワシ等がそんな問答しとると…

千冬

「何を騒いでいる?」

織斑先生がやって来おった…じゃが、その隣には…

全員（一夏以外）

「ゲッ!」

篠ノ之がおった…じゃがその篠ノ之は拘束服の様な物を着せられ両腕が使えんようになつとつた…あんな服どつから持つてきたんじゃ?

箒

「…い、一夏…」

一夏

「箒…」

織斑はそんな恰好の篠ノ之を見るとすぐに目を逸らしてどつかに行つてしもうた

まあ、あやつが大怪我した原因はコイツじゃからな…思う所も色々あるんじやろう

…

箒

「待ってくれ一夏!？」

千冬

「五月蠅いぞ!!」

追いかけようとしたみたいじゃがこん人がさせる訳無いか

織斑先生はそのまま篠ノ之を連れて外に出て行ってしまおうた

荷物も持つとつたし先に篠ノ之をバスに放り込んでくようじゃの

……

……

……

その後、ワシ等は一度全員で集まり、宿の女将に挨拶をするとそれぞれのバスに乗り込んだ

そしてワシら1組のバスには案の定、篠ノ之が先に乗っておった

クラスの皆も拘束服を着た篠ノ之には驚いとつたが何も言わなかった……何を言ってもあの篠ノ之の事じゃからすぐにキレそうじゃからな……

まあ色々あつたがこうして臨海学校は終わつたんじゃ……

なんか余計に疲れた気がするの……

〈永遠

S
i
d
e

o
u
t
〉

第115話：白式・雪羅

（千冬 Side）

臨海学校から戻って数日が経過した

その間に起きた事だが：

まず、学園に戻ると私はそのまま箒を懲罰房にぶち込んだ

臨海学校前までコイツが入っていた時と同じ部屋だ：どうせコイツの事だからまた戻って来るだろうと思つて室内の掃除も簡単に済ませる程度にしていたんだが、まさか本当にすぐに戻る事になるとはな：

次にオルコットの「ハルフアス・ベーゼ」に学園に残っていた生徒と教師が驚きまくつていた

巨大ロボの布仏の「ワイバーン・ガイア」と違って「ハルフアス・ベーゼ」は通常のISと同サイズの第5世代だからな：驚くのも無理ないか：

最後に一夏だが：たった一晩で怪我が完治するなんて非常識な事が起きたから学園に戻るとすぐに精密検査を行った

検査の結果、体に異常は無く、後遺症も無いとの事だ
それは正直良かったと私は安心した：

だが：

今度は別の問題が浮上した：

それは一夏の【白式】が二次移行セカンドシフトしていた事だ！！

一夏が検査を受けている間に【白式】の調査も行ったがまさかISまでこんな事になつていたとは：

本当に：一体一夏に何が起こつたんだああああああつ！！

く千冬 Side out

く一夏 Side

一夏

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！！」

俺は今、放課後の訓練でオルコットと模擬戦をしている

精密検査の結果問題無しと言われたから、鈴やオルコット達の訓練に混ぜて貰つただけど：

何で【白式】がパワーアップしてるんだ？

て言うかいつの間に二次移行セカンドシフトなんてしたんだ？

名前も【白式・雪羅】になってるし、性能も上がったた…

鈴達も新しい【白式】に驚いてたし何でこうなつてんだ？一体何が起きたんだよ？

でも…

ドガアアアアアンツ!!

一夏

「ぐわあああああああああつ!!」

俺はオルコットにアツサリ負けた…

【白式】がパワーアップしたから今度こそ勝てるかもと少しでも思つては見たけど…

やっぱり無理だった…

そりやそうだ…オルコットの方も【ブルー・ティアーズ】が第5世代の【ハルファス・

ベーゼ】になつたんだもんな…

それに新しい【白式】に着いて行けず使いこなせていない俺…【ブルー・ティアーズ】

の方が着いて行けなくなったオルコット…お互いの実力差があり過ぎるもんな…

一夏

「も、もう一回!!」

セシリア

「いえ、織斑さん、貴方はまずその新しいISを知る事から始めた方がよろしいですわ。」

一夏

「え？」

セシリア

「今の戦いを見ると…その機体は性能が上がった分、燃費が更に悪くなっていますわね？その左腕の装備、【零落白夜】と同じでシールドを張るだけでもSEを消費し続けている様に見えましたがどうですか？」

一夏

「うっ…分かるのか？」

一回戦っただけで見抜かれたのか…

セシリア

「ええ、SEが0になって自滅する時間が今まで以上に早かったですからね。【零落白夜】以外でSEを使いそうな装備と言えばそれくらいでしょう？」

一夏

「…仰る通りです…」

オルコットの言う通り、この【白式・雪羅】はどうも【雪片式型】の【零落白夜】の他に左腕の新装備【雪羅】を使う場合でもSEを消費するみたいだった…

その事がまだ分かっていなかった俺は「雪羅」のシールドの強度に調子に乗ってコイツを使いまくって一気にSEを減らしてしまった

そしてSEが残り僅かになったせいで「雪羅」のシールドが張れなくなった所をオルコットにトドメの一撃を喰らって負けたんだよな

…カッコ悪い…

セシリア

「今のままでは戦う以前の問題です。貴方の場合は先ず『自滅』をしない事から始めた方がいいですわ。」

自滅って…その通りだから何も言えないけど改めて言われるとキツイな…

でも、そうか…だからオルコットは先に機体を知る事から始めろって言ったのか…

一夏

「分かったよ。」

そうと分かれば、まずは「白式・雪羅」の事をよく知る事から始めよう!!

あ!でももうすぐ期末テストもあるんだよな…

そつちもあるから大変だなあ…

く一夏 Side out

第116話：一学期の終わり

（永遠 Side）

臨海学校から戻った後も色々あったがそれもアツと言う間に時間が過ぎたのお：

期末テストも終わって今日は一学期の最終日じゃ

ちなみにテストで赤点取った奴は夏休みの半分は補習で消えるのじゃがワシを始めセシリアや本音、クラスのもん達は一人を除いて全員が赤点を回避した

織斑はかなり危なかつたそうじゃがな：

それで1組で赤点を取ったただ一人の生徒と言うのは：まあ言わんでも分かると思うが篠ノ之じゃ：

と言うかあやつ以外取る奴はおらん：織斑は怪しいところじゃったがな：

それから織斑先生から聞いたところあの女、臨海学校の事件の後に束さんに〔紅椿〕を叩き返したそうじゃ

束さんが何も言わなかったから全く気付かんかった：

にしても、あの女、あげな結果を出したんはどう考えてもあの女の自業自得じゃろうにまさかそれをISのせいにするとは：どんだけ馬鹿なんじゃ？

東さんの方は織斑先生と一晩中飲みまくってスッキリしたそうじゃが、やはり心配じゃのおく…

取り合えず暫くは様子を見るしかワシには出来んな…

セシリア

「永遠さん。」

永遠

「ん？」

ワシがそんな事を考えておるとセシリアが話しかけて来た

セシリア

「永遠さんは夏休みのご予定はありますか？」

永遠

「ワシか？まあ島で畑仕事しながらのんびり過ごすつもりじゃよ。」

本音

「永遠らしいね〜♪」

永遠

「…後は…」

簪

「後は？」

永遠

「ちと鍛え直そうと思うと。怪我が治るまで鍛練が出来んかったせいで大分なまつと
るようでああ……」

一夏

「……………」

ん？今、織斑から妙な視線が……気のせいかな？

気のせいじゃよな？

永遠

「と、ところでお主等はどうするんじや？」

ワシは嫌な予感を振り払うように話題を変えた

セシリア

「……わたくしは……国に帰ります。「イグニッションプラン」や他にもやる事がありますか
ら……」

永遠

「「イグニッションプラン」？何じやそれ？」

ラウラ

「欧州の次期主力機を決める計画です。ドイツとイギリスは既に参加が決まっているので代表候補生の私達も行かないといけません。」

永遠

「ヨーロッパの主力機か…一番の候補は…」

シャルロット

「イギリス…つて言いたいけど〔ハルファス・ベーゼ〕は流石に〔イグニツションプラン〕には出せないよね？」

セシリア

「当然です、それに〔ハルファス・ベーゼ〕はコアも含めてわたくし個人の物となっております。国のI Sとしてはそもそも出せません。」

鈴

「え!?!よくそんな話を通ったわね?」

セシリア

「東さんが直談判して下さいました!」

簪

「そう言えばそうだったね。」

あゝ、確かに東さんが新しいコアをやるからって事で話を通したんじやよな…あ!?!

永遠

「セシリア、帰る前にワシの家に一度来てくれ、渡す物があるんじや。」

イカンイカン！ 忘れるところじやった！

セシリア

「渡す物………あ!?!はい！ 分かりました!!」

…セシリアも忘れとったな? まあ思い出したからいいか…

永遠

「簪と本音はどうするんじや?」

簪

「私は…一度は家に帰るつもりだけど…あの家つて余り居心地がよく無いから…多分すぐに学園に戻つて来ると思う…」

全員

「……………」

確かに…家の連中から邪険に扱われておつたと言うなら帰りたくないじやろうな…まあ、その辺はあの『更シスコンダメ無ストー会長』がどうにかするべき問題じやな…
仮にも当主何じやからな

それは別にしても休みの間も学園に居ると言うのはな…

仕方ない…

永遠

「それなら簪、休みの間はワシの島におるか？」

全員

「え!？」

簪

「いい、いいの？」

永遠

「何を驚いとる？今までも何度か泊まつとるじゃろ？」

簪

「そ、それはそうだけど…一カ月以上も一緒って言うのは…初めてだし…」

あ！そう言う事か！

付き合つとるから大丈夫と思うたが…流石に一カ月以上となるとマズイか…

永遠

「スマン！気が利かんかった…今言った事は無かった事に…」

簪

「え!?!ままま待って!!!」

永遠

「ん？」

何じゃ？

簪

「よ、よろしくお願いします…」／／／

永遠

「へ？」

簪

「さ、さつきは驚いたけど…確かに永遠の家は居心地がいいし…も、もし永遠がいいなら…お世話になりたい…」

本音

「私も私も!!」

本音まで…まあ最初に言ったのはワシじゃし…

永遠

「構わんぞ。」

簪&本音

「ヤッタアアアアアアアアアアアッ!!!」

永遠

「……………」

うゝむ…喜んでくれるのは嬉しいんじやが…ちと参ったのお…

セシリア

「ムムムツ…」

一人だけ国に帰るセシリアが不機嫌になってしもうた

どうすればいいのかと他のものに視線を向けたが…

サツ!

揃って目を逸らしおって…クツ! 薄情者共め!!

永遠

「あゝ…セシリアさんや、そっちの用事が済んだらいつでも来んさい。待つとるから。」

セシリア

「…本当ですか…」

永遠

「お主に嘘は言わん!!」

セシリア

「…分かりました! 向こうの用事が終わりましたらすぐにそちらに向かいます!!」

永遠

「ああ、待つとるよ。」

セシリア

「ハイ♪」

ふゝ…何とか機嫌を直してくれたか…

………

………

…

それから鈴やシャルロットの予定も聞いてこの話は終わりとなった…

じゃが…

一夏

「………」

やはり…織斑から妙な視線を感じる…

ワシ…大丈夫かのお…

そんな感じで一学期が終わったんじゃ…

く永遠 Side out く

夏休み

第117話：夏休み突入！一夏の弟子入り志願!?

（永遠 Side）

夏休みに入るとワシは早速なまった体を叩き直す為に鍛練を始めた

それと帰国前にセシリアが立ち寄ったんじや

セシリアが今回来た理由は東さんからISのコアを1つ受け取る為じや

セシリアのIS〔ブルー・ティアーズ〕を東さんが改造する為に東さんはイギリス政府に対して幾つかの条件を出した：

その1つが使用されているコアも含めた〔ブルー・ティアーズ〕の全てをセシリア個人に移譲する代わりに新しいコアを1つ渡すと言うものじやった

東さんとの約束通り、あの後イギリス政府からその書類が届き、東さんも交えて精査したが問題は無かった

まあ、東さん相手に後で難癖付けるような内容の書類は用意せんじやろうし、書類そのものにも小細工はせんじやろう：一応調べたしの：

そう言う訳でセシリアは新しいコアを受け取って帰国したんじや：本人は用事が済

んだらすぐ戻ると言うておつたな…

次に簪と本音じやが…2人は一度それぞれの家に帰ると3日もせんうちにワシんところに来おつた

気持ちには分かるがもう少し居てやつてもいいと思うんじやが…あのシスコンの姉…泣いとらんといいんじやが…

まあええわい…

それよりもワシは今、少し…いや、かなり困る事態に巻き込まれとる…

それは…

一夏

「頼む火ノ兄!!俺を…俺を『弟子』にしてくれ!!!」

何をトチ狂つたのか織斑が弟子にしてくれと言つて押し掛けて来おつた…

これには一緒にいる簪と本音も驚いておるが、恐らく東さんも驚いておるんじやろうな…

と、イカン…逃避しておつた…

永遠

「織斑…お主、自分が何を言つとるか分かつとるんか?」

一夏

「ああ!!弟子になりたいって言ったんだ!!」

うくむ…聞き間違いではないか…

この眼、本気で言つとるな…

最近感じ取つたこやつ視線はこう言う事じゃつたか…

永遠

「…何故にワシじゃ?教えを乞うなら姉に頼めば良からう?」

一夏

「千冬姉は仕事が忙しくて無理つて断られたんだ…」

ムウ…そうか…社会人に頼むのは難しいか…

一夏

「それに…」

永遠

「ん?」

一夏

「俺なりに色々考えた結果なんだ…お前に教わりたいつて言うのは…だから頼む!!!」

織斑は頭を下げて頼んで来た

永遠

「…………駄目じゃ…」

それに対するワシの答えは拒否じゃ

こちらにも色々理由があるからのお…

一夏

「!?」

永遠

「ワシの使う剣術…【飛天御剣流】は殺人剣術じゃ…おいそれと人に教えるような技ではない…」

一夏

「それは…千冬姉が教えてくれた…」

永遠

「ホオ…」

確かにあん人なら【飛天御剣流】が元はどう言う剣か気付いてもおかしくは無いか…
永遠

「じゃったら分かるじゃろ?好き好んで人殺しの技を教える奴はおらん…それにな…」

一夏

「え?」

永遠

「ワシの方も忙しいんじやよ…休み前にも言うたが普段の畑仕事の他にも今は体を鍛え直しとる最中なんじや…」

一夏

「それなら俺も一緒に…」

永遠

「止めとけ…自分では良く分からんが恐らくワシのやつとるのは生半可なもんで無いと思うぞ? I Sを生身でも倒せるくらいになる修行を急ピッチでやつとるようなもんじや。正直、お主に構つとる余裕が無いんじやよ…」

一夏

「……………」

永遠

「分かったら諦めて帰るんじや…いいな?」

一夏

「……………」

永遠

「それから1つ言っておくが…」

一夏

「え？」

永遠

「そこから先、一步でもこちらに来れば不法侵入として見るからな？ワシの住んどるこの島がどういふ場所かは織斑先生から聞いてとるじやろ？」

一夏

「!？」

そう、この島はワシ個人の私有地：ワシの許可の無いもんが入ればそれは不法侵入となるんじや

ワシはそう釘を刺すと簪と本音を連れて家に戻った：

一夏

「……………」

さて、少し言い過ぎたかもしれんが：コレで織斑がどうするかじやな：

く永遠 Side out く

く簪 Side く

簪

「…ねえ永遠? 何であんな言い方したの?」

本音

「ほえ? どしたのかんちゃん?」

私はさっきのやり取りを見て少し疑問を持っていた

畑仕事や鍛練が忙しい…だから相手が出来ない…言ってる事は納得出来る…

でも、それなら…

簪

「何であれ以上入るなって言ったの? 訓練をする気が無いなら島から追い出せばいいでしょ?」

本音

「あつ!」

コレが私の抱いた疑問…

この島は永遠の私有地…不法侵入と言うなら織斑一夏はこの島に上陸した時点でそうなってる

だから永遠が出て行けと言えば彼は出て行くしかない…でも、永遠は『帰れ』とは言ったけど、その後『これ以上島に入るな』と付け足した…それはつまり、あの場所なら居てもいいって聞いて取れる…

織斑一夏がその事に気付くかは分からないけど何で永遠があんな言い方をしたのか
分からないから聞いたんだけど……

永遠

「……のう2人共……確か今日は夕方から『雨』じゃったよな？」

簪 & 本音

「え!？」

すると永遠はいきなり天気のことを言いだした

確かに予報ではこの後、雨が降る筈だけど……

永遠

「あやつは……雨の中でもあの場に留まり続けられるかの？」

簪 & 本音

「!？」

ま、まさか永遠は!？」

簪

「織斑一夏の……『覚悟』を試す為に!？」

永遠

「……………さあのお？」

永遠はとぼけているけど私は分かった…

私の言った通りの答えなんだ…

永遠は織斑一夏の『強くなりたい』って言う気持ちかどれだけのものか試そうとしてるんだ…だからあんな言い方を…

確かに、『帰れ』と言われて素直に帰る様なら永遠に鍛えて欲しいって言う気持ちもその程度って事になる…

永遠

「…ワシも…意地が悪いのお…」

簪&本音

「…永遠…」

そっか…永遠は本当は訓練を付けてあげようと思ってたんだでも、その前に彼のやる気を試そうとしたんだ…彼に恨まれるのも覚悟の上で…

永遠

「…幻滅したか？」

永遠はそう聞くけど…

簪

「そんな事無い!!!」／／／

本音

「惚れ直したよ♪」／／／

永遠

「そ、そうかの？」

私は…うん、私達はそんな事で永遠を嫌いになつたりしないよ♪

セシリアだつてきつとそう言う！

だから織斑一夏…私達の大好きな永遠の気持ち…裏切らないで頑張つてね！

〈 簪 Side out 〉

第118話：弟子入り成功!

〔永遠 Side〕

織斑の弟子入りを断つたワシは家に帰ると少し身構えた：

東

「……………」

うちには東さんがおるからのお：織斑を追い返したと知って色々と言われると思う
たんじやが：

東

「いっくん…明日もいるといいね？」

簪と本音同様、東さんもワシの意図に気づいとつた

ワシが驚いたのを見て小さく笑つた

東

「なんだかんだでとーくんとは一緒に暮らしてきたんだもん！何を考えてあんな事言つたのかは大体察しがつくよ♪」

永遠

「スマンな…」

やはり…: こん人には敵わんのお…

それから日が沈み始めた頃…

簪

「降って来たね?」

予報通り雨が降って来た…: と言ってもどしや降りではなく少し強めの小雨と言った

所じやな…

永遠

「織斑…: お主の覚悟…: 見せてみい!!!」

く永遠 Side outく

く一夏 Sideく

一夏

「ブエックションツ!!!」

うく! さみい!!

真夏とは言え一晩中雨の中にいるのは堪えるな…

でも、俺は諦めねえぞ!!

絶対にアイツの弟子にして貰うんだ!!

雨になんか負けて堪るかよ!!!

さて、朝飯にするか…こんな事もあるうかと思つて数日分の食料は持つて来てあるからな!

俺が荷物から食い物を出そうとした時…

永遠

「まだおつたか?」

一夏

「!?!」

火ノ兄がやって来た

永遠

「中々頑張るのお?」

一夏

「当たり前だ!!俺だつて軽い気持ちでココに来たんじゃない!!!」

俺が自分の覚悟を言うとは…

永遠

「さよよか…」

「よろしく願います『師匠』!!!」

永遠

「ドアホ!! 師匠と呼ぶ出ない!!」

一夏

「え? でも…」

修行を付けて貰うんだから師匠だろ?

永遠

「同じ年の奴にそげな呼ばれ方されとう無いわい!! ほれ! 早よ行くぞ!!」

師匠はそう言つて歩き出した

一夏

「ああ、待ってくれ!!!」

俺は慌てて荷物を背負うと後を追いかけて行つた

……

……

……

師匠の家にやってきた俺はいきなり驚いた

何故なら……

東

「いらっしや〜い♪」

東さんがいたからだ

確かに東さんがココに住んでたつて千冬姉から聞いたけど居場所がバレたから出て行ったみたいな事を言つてたのに…本当はまだいたんだ!?

その後、この島に温泉があるからそこに入つて来いつて言われた時は驚いた…まさか温泉があるなんて思わなかつたからな…

それで俺は師匠に案内されてワクワクしながら温泉に向かつたんだけど…

何とその途中で熊と出くわした!!!

何で熊まで居るんだよこの島!?

そう思いつつも俺は咄嗟に『死んだ振り』をしてやる過ごそうとした…でも熊はそんな俺に目もくれず温泉に入つて行つた

え?熊も温泉に入るの?

それを見て呆然とする俺に師匠が島の動物達は大人しいから大丈夫と言われた

だから攻撃するなど注意をされて俺も温泉に入ったんだ

一緒に入つてる熊は怖いけど…温泉…凄い気持ちよかつた…

ただ…

第119話：幸先の悪い始まり!?

く永遠 Sideく

あく、面白かった…

こやつが行き成り死んだフリなんぞした時は必死に笑いを堪えて撮影した甲斐があつたわい!

まああの本人は…

一夏

「うあく…」／／／

恥ずかしさから顔を真っ赤にして悶えとるがな…

後でセシリアや織斑先生、鈴にも見せてやらねば!!

さて、織斑をからかうのもこんくらいにして…

永遠

「何時までやっとするんじゃ! 飯にすつぞ!!」

ガン!

一夏

「イテッ!？」

軽く小突いて正気に戻した

その後、織斑も加えて朝食を始めた

その最中…

東

「そう言えばいつくん?ちーちゃんにココに行くって言ってるの?」

一夏

「え?」

確かにそうじゃな…

織斑先生が保護者役らしいし、長期の外泊ともなれば言っておく必要があるのお…

一夏

「え〜つと…一応特訓して来るって『書置き』を残して出て来たんだけど…」

全員

「は?」

今、なんつった?

簪

「…それだけ？」

クロエ

「何処に行くとか書いてないんですか？」

一夏

「…え〜つと…書いて…無いな…」

本音

「どのくらい家を空けるとかは？」

一夏

「…それも…書いてない…」

全員

「……………」

ワシ等は全員言葉を失った

そして…

永遠

「こ、この大馬鹿もんがあああああああつ!!!」

一夏

「ヒイヒイヒイツ!!」

ワシは怒鳴り声をあげた

永遠

「このドアホ!! それでは『家出』の書置きと同じではないか!!!」

一夏

「い、家出!?! 俺はそんなつもり…」

永遠

「黙れボケナス!! あんな書置き残しといて何ぬかしとんじや!! 今頃織斑先生が…」

ブルルルル…

全員

「!?!」

『心配しとる』…そう言おうとした時、東さんの携帯が鳴りおつた

あ〜…コレはまず間違いなく…

東

「も、もしもし?…」

全員の視線が集まる中、東さんが電話に出た…

すると…

千冬

『東!!一夏が何処に行ったか調べてくれ!!』

スピーカーにもしたらんに織斑先生の叫び声が聞こえた

東

「あ、あく……ちーちゃん落ち着いて……いっくんなら……その……ココに居るよ?」

それから東さんはこのアホが家にいる理由を説明した

そして……

東

「とーくん……ちーちゃんが変わって……」

織斑ではなくワシに携帯を渡してきた

永遠

「……はい……」

千冬

『スマン火ノ兄!!愚弟が迷惑をかけてしまった!!』

愚弟って……まあ言いたくもなるか……

それから少し話した後、ワシは携帯を切った

そして織斑を見ると……

一夏

「……………」

ウム！青い顔して固まっとるな！

永遠

「織斑、主の姉からの伝言じゃ。『時間が出来たらココに来るから覚悟している!!』…だそうじゃ。」

一夏

「……………」

顔色が青を通り越して真っ白になったのお…

永遠

「それからココで特訓するのはいいと…って…」

一夏

「……………」

もはや聞こえとらんな…

魂が抜けて灰になつとる…

ほんにこいつは抜けとるのお…

自業自得じゃ…

〈永遠 Side out〉

第120話：修行開始！永遠の薪割り特訓！！

（簪 Side）

永遠

「では始めるかのお…」

一夏

「……………はい…」

朝食を済ませた私達は早速訓練を始める事にした

でも、魂の戻った織斑一夏の顔色は優れない…それも当然！あんな書置き残して織斑先生を心配させたんだからこうなつたは必然と言ってもいい！

今迄の彼を見ているとなんだか、将来は『天然ボケの芸人』か何かになりそうな気がして来た

まあ、それはいいとして今は織斑先生が来るまで頑張つて特訓する事だね…特訓の成果が認められればお説教の時間が少しは減るかもしれないからね？

永遠

「もう一度言うとかくがワシは畑仕事と自分の修行がある。ゆえにお主に付きつきりで訓

練は出来ん。それは分かるな？」

一夏

「…はい…分かつてます…」

…いい加減立ち直った方がいいよ？

でないと…

永遠

「…シャキッとせんか!!それ以上腑抜けた面しとるなら追い出すぞ!!!」

一夏

「ス、スイマセン!!!」

永遠がキレルんだよね…

永遠

「全く!!姉が来るまでに腕を磨いて驚かせてやろうとは思わんのか己は!!!」

永遠も同じ事考えてたんだ…嬉しいな…以心伝心みたいで…// //

一夏

「そ、そうか!?!確かにその通りだな!!お願いします師匠!!!」

永遠

「師匠呼びは止めい!!それで特訓の内容じゃが…まずは『薪割り』をせい!!」

一夏

「……え？……薪……割り？……薪割りってあの斧で木を割る……アレの事か？」

永遠

「そうじゃ。薪割り用の木と斧はそこに用意してあるからアレを使え。」

永遠がそう言つて指差した所には山積みにされた丸太が置いてあつた

でも、薪割りか……

一夏

「確かに薪割りって言つたら修行の定番だよな!!分かつたぜ!!」

訓練内容を聞いて頷いてるけど……フツ……あの永遠がそんな定番だけの訓練をさ

せる訳無いよ!

永遠

「但し……I・S……でやるんじゃ!!」

一夏

「……え？……【白式】で？」

永遠

「うむ……まあ物は試しじゃ。まずはワシが実演するでしょう。」

そう言うとう永遠は「ドットプラスライザー」を展開すると薪用に切り出しておいた木

を一本、台の上に垂直に立てた

次に斧を持つと軽く振って斧の刃を木に少し食い込ませた

そして、最後に斧を振り上げると食い込んだ木ごと持ち上げてそのまま振り下ろした
カンッ!

すると、木は綺麗に真つ二つに割れた

永遠

「今の手順をISでやってみたい。念を押すが木は2回目に切るんじゃないぞ。それとISは部分展開ではなく全展開でやるんじゃない。…ではやってみたい!」

一夏

「オ、オス!!」

織斑一夏は早速【白式】を展開すると永遠から斧を受け取った

そして、永遠は畑仕事に行くと言ってISを解除して行ってしまった

私も彼の邪魔をしない様に本音と一緒にこの場を離れた…私達も自分達の訓練があるからね…

それから織斑一夏…言っておくけどこの薪割り特訓…私もやった事があるんだけど、これって簡単そうに見えて…すつごく…難しいんだよ?

く簪 Side out く

く一夏 Sideく

薪割りか…修行の定番の一つだな!!

まっ!薪割りくらいすぐに終わらせて次の修行に移ろう!!

一夏

「え〜つと…先ずは木を立ててつと…」

俺は余裕の気持ちで木を立てようとした

でも…

コト…

一夏

「アレ?」

コト…

一夏

「グツ…」

コト…

一夏

「グヌヌツ…」

コト…

一夏

「ダアアアツ!!」

コト…

ぜ、全然立たない!!

何でだあああああつ!!!

コト…

あ!また!?

一夏

「こ、今度こそ…」

そ…つと…そ…つと…

ピタッ!

一夏

「…やつ…やった…立ったぞ!!」

ISで木を立てるだけなのに、それがこんなに難しいなんて…

それで次は…え…つと…斧を木に食い込ませるんだよな…

木を立てさえすれば後は簡単簡単♪

一夏

「よっ!」

カンツ!

一夏

「…………アレ?」

斧を食い込ませるだけの筈なのに…何で真つ二つに…そんなに力を入れて無いんだ
けど…

と、とにかくもう一度だ!!

2回目に割れって言われたからこれは失敗だ!

あ!また木を立てる所から…

……………

……………

…

永遠

「織斑…昼飯じゃぞ?」

一夏

「え!?!」

もうそんな時間!?

永遠

「どうじゃ〜? 何本切れた〜?」

一夏

「そ、それがその…0…です…」

始めてからもう2、3時間は経った…でも俺は師匠に言われた手順で1本も切れていなかった…

永遠

「さよか…どうじゃ? 難しいじゃろ?」

一夏

「ハ、ハイ…難しいです…」

本当に難しい…師匠は簡単にやってたから楽勝だと思ってたけど全然違った

ISを使った薪割りがこんなに難易度が高いなんて思ってもみなかった…

でも、この修行って…

一夏

「あの師匠…薪割りが難しいのは分かったんですけど…コレってどんな意味があるんですか?」

永遠

「師匠は止めいと……まあ今はいいか……薪割りの意味じゃったな？簡単に言えば『精密操作』と『力加減』の訓練じゃよ。」

一夏

「精密操作と力加減……」

永遠

「そうじゃ、まず精密操作言うんは指先の細かな動きの事を言う。コレを鍛えるのが木を立てる作業に繋がる。当然の事じゃが薪用に切り出した木は全て形が違うから一つ一つ立てる度に置き方が変わる。つまりは毎回指先の操作が変わるんじゃ。」

一夏

「な、なるほど!？」

永遠

「次に斧で木を切る作業が力加減の訓練になる。2回に分ける訳じゃから力の入れ具合を変えねばならんじゃろ？それに何でもかんでも毎回全力を出せばいい訳ではなからろ？そげな事しとつたら無駄に体力を使うだけじゃい。」

一夏

「……………」

…その通りだ…

この薪割り…ちゃんと精密操作と力加減の訓練になつてる…

永遠

「それにの…この薪割りじゃが…ワシが思うにお主に一番必要な訓練じゃと考えると。」

一夏

「え?俺に?」

永遠

「うむ…その【白式】の【零落白夜】の事を考えてみい、そいつは加減を間違えると本当に人を斬つてしまう代物じゃ。それを考えるとお主には刀を振る力加減と刀をより細かく使う為の精密操作が必要となろう。そう考えるとこの修行はお主に丁度いいんじゃないよ。」

一夏

「……………確…かに…」

加減を間違えると本当に斬る…言われてみるとその通りだ…

この修行は…俺にこそ必要な修行だ!!!

永遠

「どうやら分かったようじゃな?」

一夏

「ハイ!!!」

永遠

「よか! じゃがまだ初日じゃ、行き成り出来るようになれとは言わん。無理せず少しずつ体に覚えさせていきんさい。」

一夏

「師匠…ハイ!!!」

永遠

「じゃから師匠は止めいと言うとるじゃろうが!! 全く…ホレ! 飯じゃ! 皆も待つとるし早よ戻るぞ!!」

一夏

「あ、ハイ!!」

よし!! 飯を食つたら早速続きだ!!

休みが終わるまでに薪割りを完璧に出来るようになるぞ!!!

く一夏 Side out

第121話：永遠の危機!? 忍び寄る魔（ホモ）の手!?

～永遠 Side～

永遠

「んじゃ、皆は風呂に入ってきたきんさい。ワシは晩飯作つとくからの。」

女性陣

「ハ～イ♪」

昼飯からあつと言う間に夜になり、夕食前に家における女性陣は温泉に入りに行った

その間にワシは夕食の用意を済ませた後、家にある風呂を沸かした

うちの風呂は薪で沸かす奴じゃから手間がかかるんじゃよな…

まあワシは薪で沸かした風呂が好きじゃから気にせんし…今は修行がてら織斑に薪割りさせ取るから少し楽になつとるからの…

その織斑じゃが慣れん薪割りで戻つてすぐにくたばつてしまつておる…ちなみにノルマは結局0だそうじゃ

そげな事を考えながら準備を済ませたんじゃ…

………

…

…

その後、夕食を済ませるとワシは先に沸かしておいた風呂にゆつくり浸かっておった

…

じゃが…

一夏

「師匠!!お背中流します!!」

永遠

「ンゲツ!」

狭い風呂場に織斑の馬鹿が入ってきおった!?

コイツは…

永遠

「出て行け!!!」

ガンツ!

一夏

「アダツ!」

ワシは咄嗟に風呂桶を馬鹿に投げつけた

風呂桶が頭に命中した馬鹿は目を回して気絶しておった
すると…

簪

「永遠!? どうしたの!!…キヤツ!!」／／／

騒ぎを聞きつけて簪達がやって来た

ワシは咄嗟に風呂釜に入ったが気絶しとる馬鹿の姿を見て全員顔を背けた

そりゃそうじゃろ…何せこの馬鹿…素っ裸じゃからな…

こやつ、ワシの恋人に汚いもん見せおって!!後でぶん殴っちゃるわい!!

一先ず、簪達には風呂場から出て貰ってワシは風呂から上がると未だに伸びとる馬鹿
を取り合えず簪巻きにしておいた

く永遠 Side outく

く簪 Sideく

永遠

「……………という訳でコイツが行き成り入って来たんじゃよ…」

お風呂から上がった永遠に事情を聞いた私達はそのまま簪巻きにされて転がされて
いる織斑一夏を見た

まさか永遠と一緒にお風呂に入ろうとしたなんて…

なんて羨ましい!! 私だってそこまでしてないのに!!!

って違う違う! いや、違うないけど…いつか私も永遠と…

本音

「かんちゃん?」

簪

「はっ!?!」

いけない! 現実に戻らないと!!

本音

「かんちゃん…何考えてたの?」

簪

「ギクツ! な、何も考えて無いよ!」

本音

「ホントに?」

簪

「うぐぐつ…」

ま、まさか…

本音

「かんちゃんの…ス・ケ・ベ〜♪」

簪

「なああああああつ!!!」

やっぱりバレてたあああああつ!!!

永遠

「…何を騒いどんのじゃ?」

東&クロエ

「さあ〜?」

あー!いけない!!

簪

「本音!その話はまた後にして!!」

本音

「ホイホ〜イ♪誤魔化したね〜?」

簪

「誤魔化してない!!!」

この事は後でじっくり話すとして…今はこの『変態男』の事!!!

取り合えず、この後目を覚ました織斑一夏に皆でお説教しておいた
一応初犯だし、未遂って事でこの程度に済ませただけど…

………

………

…

一夏

「師匠！お背中流します!!」

永遠

「いらん!!!」

次の日、また同じ事をしていた…

その次の日も…

一夏

「師匠！お背中…」

永遠

「失せい!!!」

そのまた次の日も…

一夏

「師匠!」

永遠

「寄るな変態!!!」

私達がいくら注意してもやめなかつた

だから私達は永遠がお風呂に入る前に織斑一夏を気絶させて簀巻きにして外の木に吊るす事にした

でも、このままじゃ何も解決しない:

何とかしないと:

取り合えずイギリスに帰ったセシリアも交えて一度相談しよう!!!

〈簀 Side out〉

第122話：永遠を守れ！織斑一夏（ホモ）対策会議!!

（東 Side）

いっくんを簀巻きにするようにしてから更に何日か経った…

その間もいっくんは…

一夏

「俺はただ師匠の背中を流したいだけだ!!」

…と言ってとーくんのお風呂に乱入するのを止めようとしなんだよ…あれだけ嫌がってるのに…

こりゃ、とーくんの言う通りいっくんって本当にホモかも知れないね…東さんでもそう思えて来たよ…

いっくんの趣味をとやかく言う気は無いけど流石にホモって言うのはね…しかも相手がとーくんともなると東さんも黙って見ている訳には…

と言うか…

クロエ

「…簪様や本音様ならともかく…これ以上兄様を不快にさせると言うなら…ケケケツ!!」

クーちゃんがヤバい事になりそうなんだよ…

クロエ

「…こうなつたら…『アレ』で…」

東

「えっ!?!ちよつと待ってクーちゃん!!『アレ』は駄目!!使つたらいつくん死んじやう!!完全にオーバーキルだから!!」

クロエ

「ケケケケケケツ!!!」

『アレ』使つたら下手したら骨一つ残らないよ!?

て言うかクーちゃん何であんな物造つたの!?

好きなもの造つていいって言ったけどアレはやり過ぎだよ!?

クロエ

「ゲッゲッゲッゲッ!!!」

マズイ!?!本気でヤバくなってきた!?

笑い方が更に怖くなってる!?

このままじゃ本気でいっくんを消しかねない!?
こうなったら!!

東

「ゴメンクーちゃん!!」

コキッ!

クロエ

「うっ!」

ふゝ…締め落として意識を飛ばしたけど…ホントどうしよゝ…

東

「一番いい方法は…やっぱりちーちゃんを呼ぶしか無いのかなゝ…」

時間が出来たら来るって言ってたけどそんな時間も無さそうだな…

このままじゃとーくんの貞操が本気で危ないよ…

東

「よし!!ちーちゃんに事情を話しとこう!!」

そうと決まったら早速連絡だよ!!

ゝ東 Side outゝ

く簪 Sideく

簪

「……………つて事が起きてる…」

セシリア

『……………』

私と本音は織斑一夏の事をセシリアに話した
すると…

セシリア

『…イギリスから日本まで「ハルファス」のスピードなら…』

なんか小声で呟きだした…

つて!?!もしかしてこっちに来る気!?

簪

「落ち着いてセシリア!!」

本音

「そうだよ!!そっちだって忙しいのに!?!」

セシリアは今、「ハルファス・ベーゼ」や新しいコア、『イグニッションプラン』の事
で大変な状況になってる

そんな時にこっちに戻って来たら下手をすれば外交問題になりかねない!?
セシリア

『こちらの事より永遠さんです!!わたくし達の恋人の危機に大人しくしていられる訳無いでしょう!!』

簪&本音

「うっ?」

確かにその通り…だから連絡したんだけど…今の状況でセシリアが国を抜けるのはマズい!!

セシリア

『そう言う訳ですので今からそちらに向かいます!!織斑一夏を蜂の巣にして鮫の餌にしてやりますわ!!』

あ、これ本気だ…本気で殺る気だ…

簪

「待ってセシリア!!気持ち良く分かるけど落ち着いて!!」

セシリア

『……………では何か手立てがあるのですか?』

簪

「う、うん…一応考えてる事はあるよ。今回連絡したのもそれをやっていいのか聞きためだから…」

よかった…何とか話を聞く気になってくれた…

後は本音と考えたあの方法をセシリアが許してくれるかだけ…

セシリア

『それでその方法とは?』

本音

「うん!それはね〜……………」

私達は考えた作戦をセシリアに話した

簪

「……………つて言う方法なんだけど…」

セシリア

『……………』

私達の作戦を聞いてセシリアは黙ったままだった

暫くすると…

セシリア

『…確かにそれならあのホモも手出しが出来ませんわね…分かりました…それでお願い

します。』

良かった…セシリアは許可をくれた…

つて言うか織斑一夏の呼び方が『ホモ』になってる…

まあ、それは本当の事だから別にいいとして…

簪

「…本当にいいの？」

セシリア

『よくないですわ！ですがわたくしは同じ殿方を愛する者としてお二人を信じています。ですからお二人が抜け駆けするつもりが無いと信じております!!』

簪

「セシリア…」

本音

「セツシー…」

そこまで言われたら抜け駆けなんて出来ないよ…

セシリア

『永遠さんの事…守って下さいね?』

簪&本音

「うん!!!」

大丈夫!! 永遠は私達が守る!!!

く 簪 Side out く

く 千冬 Side く

千冬

「……………」

東

『…って事だからちーちゃん! そっちも忙しいだろうけど早く来て!! 本気でシヤレにならなくなるんだよ!!!』

千冬

「…分かった…任せろ…」

ピッ!

私はそう答えて電話を切った…

千冬

「い〜ち〜か〜〜〜〜!!!」

待っている!!!

その性癖！私が叩き直してやるからな!!!
く千冬 Side out く

第123話：第3回織斑家家族会議

～永遠 Side～

あ～：日が沈む～：

晩飯の用意をせんといかんな～：

風呂にも入らにやならんの～：

……

……

……

また懲りずに来るんじやろうな～：

永遠

「はあ～……」

ワシは最近この時間になるととても憂鬱になる～：

その理由はあるの『ホモ』じゃ～：

本人は違うと言うとるがやつは絶対ホモじゃ!!

なんせあのホモ、ワシ等がいくら注意しても風呂場に乱入しようとしよる!!

このままじゃとワシの貞操も何時まで守れるか不安じゃなく…
永遠

「はあ〜…」

溜め息が何度もあるの〜…

………

………

…

そして今日も晩飯を食い終ると…

一夏

「師匠!! 今日こそお背中を流させてください!!」

懲りずにホモが同じ事を言っけおった

永遠

「じゃからいらんと………あ!?!」

ワシは振り返りながら拒絶したんじゃが振り返るとホモの後ろに見知った人間が

おった

一夏

「え?」

織斑もワシの反応に気付いて後ろを振り返ったが、その瞬間固まりおった
何せそこにおったのは…

一夏

「ち、千冬姉?!」

千冬

「……………」

ホモの姉…織斑先生じゃった!!

腕を組んで仁王立ちしながら織斑を睨みつける織斑先生の姿がワシには女神の様に
見えてしまうた…傍から見れば女神ではなく鬼に見えるじやろうがの…

千冬

「…一夏…貴様…今、何をしようとした?」

一夏

「い、いや、俺はただ師匠の背中を流そうと…」

千冬

「ほお?火ノ兄は嫌がっているようだが?」

一夏

「そ、それは…その…」

千冬

「以前、デュノアの事で火ノ兄に説教されたのをもう忘れたのか？肌を見られたくない奴もいると言われたよな？」

一夏

「あ……うつ……」

うゝむ……正論じゃからホモは何も言い返せんのお……頑張ってください……

千冬

「火ノ兄、この馬鹿は私が見ておくから風呂に入つて来い。」

永遠

「スマンのお……」

ワシは織斑先生に礼を言うつと風呂場に向かおうとした

じゃが……

ガシガシツ!!

永遠

「……へ？」

ワシの両腕を簪と本音がガツシリと掴んでおつた

永遠

「…お一方…どうかありませんでしたかのお？」

何か知らんが嫌な予感がする…

なんせこの二人…さつきからずっとニコニコしとって逆に怖い…

簪

「ソフフ♪大丈夫だよ♪今日から永遠は…」

本音

「私達が背中を流してあげるから♪」

全員

「……………へ？」

何を言うとなんのじゃ？

千冬

「オイ！更識！布仏！いくら何でもそれは教師として見過ごせんぞ!!」

ウム！そうじゃよな!!

本音

「大丈夫です!!一緒に入ると言っても『水着着用』です!!」

簪

「ですからやましい事は起きません!!」

永遠

「いや、ちよい待ち…」

水着着ればいいという訳では…

千冬

「ふむ…他人の家で口煩くする訳にもいかんし…それなら…」

永遠

「オイコラ!!!」

千冬

「そうだな…ならお前達の着る水着は『IS学園の指定水着』でやれ!!それが私の出来る最大限の譲歩だ!!」

簪

「分かりました!!」

永遠

「え!?まさか…持って来とるんか!?!」

本音

「そだよ〜♪」

永遠

「ちよつと待てい!! I S 学園の指定水着って言ったら…」

本音

「これだよ♪」

やっぱり『旧スク水』じゃった!!!

何でそんなもん持って来とるんじゃ!!!

千冬

「随分用意がいいな…：それなら問題無い。」

永遠

「待たんかい!!!」

納得するな!! もちつと粘らんかい!!!

簪

「さあ永遠♪」

本音

「行く♪」

永遠

「待たんかお主等!! そげな事セシリアに知られたら…」

何が起くるか分からん!!

そう思っておったのに…

簪

「大丈夫!!!」

本音

「セツシーには話を通してあるよ〜♪」

永遠

「何ですと!?!」

既にそこまで手を回しておったのか!?

しかし、これでは…

簪

「という訳でお風呂入ろ♪」／／／

本音

「3人だから温泉の方だよ〜♪」／／／

逃げ道を塞がれたワシはそのまま2人に引きずられて行ってしもうた…

〜永遠 Side out〜

〜千冬 Side〜

千冬

「…さて一夏…コレで火ノ兄の背を流す必要は無くなったな？」

一夏

「…はい…」

取り合えずコレで火ノ兄は大丈夫だ…

まさかアイツ等がこんな手を撃つて来るとは思わなかったが考えてもみれば恋人同志なら問題は無いな

となると、後はこの『ホモの弟』だな…

千冬

「束…コイツと二人で話せる場所はあるか？」

束

「それなら離れの部屋があるよ。いっくんはそこで寝泊まりしてるからそこを使うとい
いよ。」

千冬

「分かった…一夏、そこに案内しろ!!!」

一夏

「…はい…」

私は一夏に案内され、その離れの部屋に向かった

……

……

……

千冬

「まさか3回もする事になるとはな…『第三回家族会議』を始めるぞ!!!」

一夏

「……………」

離れに着いた私は早速家族会議を始めた

一夏は正座して私の前にいる…

千冬

「一夏……………」

一夏

「……………はい…」

千冬

「いい加減認めろおおおおおおおおおおおおおつ
!!!!!!」

一夏

「認めてたまるかあああああああああつ！！！！」
私達の家族会議は休みを挟んで丸一日続いた……眠い……
く千冬 Side out く

第124話：一夏の今後

く千冬 Sideく

私は丸一日かけてホモとなっていた一夏にタツプリ説教した後、コイツがココでどんな訓練をしているのかを見せて貰っていた

一夏

「そ〜つと…そ〜つと…あつ!？」

私の前にはISを纏った一夏が斧を片手に薪を立てようと悪戦苦闘していた

ISを使った薪割りか…火ノ兄も面白い事を考えるな

確かにこの訓練は色々と理に適っているように見える

後で私もやってみるか…束なら予備のISの1つや2つ持ってるだろうからそれを貸して貰えばいいな

一夏

「…良し!!立ったぞ…今度こそ…ああつ!？」

むっ!また1回目で割ったか

まだまだ力の入れ過ぎだな…う〜む…ココはアドバイスする方がいいのかもしれない

が自分で一度やった後の方がいいか……アドバイスをして失敗したらいくら私でも
恥ずかしいからな……

まあ、それはそれとしてコイツが修行して来ると書置きを残して姿をくらませた時は
焦ったが真面目にやっているようで何よりだ

本物のホモになっていたのはシャレにならんがな……こっちは本気で恥ずかしい……
姉として何とかしなければ……

……

……

……

千冬

「束、少しいいか?」

束

「およ?どつたのちーちゃん?」

私は一通り一夏の訓練を見た後、束が勝手に造ったと言う地下の研究室に来ていた
そこには開発中らしきISが幾つか並んでいた

千冬

「ああ、お前に聞きたい事があってな。」

束

「聞きたい事？ちーちゃんの質問ならなんでも答えてあげるよ♪って言いたいけど内容にもよるね。」

コイツ本当に変わったな…

以前のコイツなら私の言う事ならどんな内容でも聞いてくれていたんだが…それがココまで変わるとはな…

フツ…幼馴染として嬉しい限りだよ

千冬

「それでいい、聞きたい事と言うのは一夏についてだ。」

束

「いっくん？」

千冬

「ああ、お前から見て今のアイツはどう見える？」

束

「そうだね…『性癖』に関してはかなりヤバいとしか言えないけどそれ以外は頑張ってるね。」

千冬

「そ、そうか…：そうだよな…：」

やはり東もあれは危険と見ていたか…

東

「申し訳ないけどアレでホモじゃないって言われても信じられないよ…：百人に聞いたたら百人とも彼はホモだって答える位だよ。」

千冬

「だよな…：百人どころか千人に聞いても同じだろうな…：」

下手したら一万人に聞いても同じかも…

東

「それでそんなホモないつくんがどうかしたの？もしかしてホモを治す方法を聞きに来たの？」

千冬

「あるのか？」

東

「あるって言えばあるけど…：おすすめは出来ないよ？」

千冬

「お前がそう言うって事は相当危ないな…：ちなみにどんな方法だ？」

東

「薬で人格を書き換え」出来るかあああああああああつ!!!」……だからおすす
めないって言ったじゃん……」

薬物投与なんて方法出来るか!?

いくら何でも人道に反するだろうが!!

東

「まあ、あれ以上酷くなるようなら本気で薬物投与も考えてただけだね……いっくんがアレなせいで最近はずーちゃんの方もヤバくなってたんだよ……あのまま放置するといっくんが『消されかねないから』……」

千冬

「……………」

け、消す!?!クロニクルの奴そこまで危険な状態になっていたのか!?

東に言われて急いで来て良かった………ん?

千冬

「つて違う違う!!ホモを治す事じゃない!!」

イカンイカン!!脱線していた!!

いや、そっちも問題だが今回は違う!!

束

「それじゃあ何を聞きたいの？」

千冬

「うむ、単刀直入に聞くぞ。一夏の第五世代を造る事を考えているか？」

コレが本題だ

束の事だから第五世代を用意しかねないからな…

今のコイツなら無条件で用意するなんて事はしないだろうがアイツの成長次第では可能性があるから一度確認しておこうと思った

束

「…考えてはいるよ。…って言うか設計自体はもう出来てるよ。」

千冬

「何だと!？」

既にそこまで進めていたのか!？」

束

「こんな感じの機体を考えてるんだ。」

そう言つて束はモニターに新型のISの設計データを表示した

それを見て…

千冬

「…凄まじいな…」セカンドシフト二次移行した今の【白式・雪羅】の何倍も高い性能だ…」

その性能の高さに目を見開いた

東

「でも今の時点ではいつくんにコレを扱う事は出来ないね。渡すにしても今後の成長次第になるよ。」

千冬

「そうだな。」

これほどのISだ…オルコットの様にISの方が使い手に着いて行かなくなるなんて事にでもならない限り簡単には渡せんな…

まあオルコットほどとは言わんがせめて鈴や更識妹くらいの実力をつけて貰わないと無理だろうな…

東

「セーちゃんほどとは言わないけど、かんちゃんやリーちゃんくらいの実力は必要だね。」

東も同じ考えか…

東

「……………」

いつの間にか東の表情が消えていた

そのまま携帯の着信画面を一瞥すると部屋の隅に放り投げてしまった

千冬

「オ、オイ!？」

東が何故そんな事をしたのか分からずにいると携帯が留守電に切り替わった

そこから聞こえたのは…

箒

『姉さん!!!早く私のI Sを造って下さい!!!分かりましたね!!!』

P i i ! !

学園で奉仕活動をしている箒だった

箒は言いたい事だけ言うとすぐに電話を切った

だが、この時間はまだ活動時間の筈…電話をかける様な時間は無い筈だ…アイツまさかサボってるのか!？

後で問い質す必要があるな…

だが、今はそれよりも…

東

第125話：紅椿の利用方法

く東 Side

東

「う〜ん…」

私はある事に悩んでいた

それは目の前にあるIS…【紅椿】についてだ…

箒ちゃんにいらないうって言われて突き返されたコレをどうしようか悩んでいた

解体ならすぐに来る…コアは既に取り外してあるし第5世代の開発をしている東

さんにはこれを残しておく理由が無い…

それでもこの子は東さんが造ったISには違いは無い

だから簡単には廃棄する事が出来なくて困ってるんだよね〜…

東

「せめてこの子が派手にぶっ壊れてたり、ボロボロになるまで使われてたら気兼ねせず
に済むんだけど…」

生憎とこの子はまだ一度しか出撃してない…それも大した戦闘をしてないから新品
そのものなんだよね…

束

「何かいい使い道ないかな…」

このままじゃ研究室を圧迫するだけの粗大ゴミになっちゃうよ…

【紅椿】の利用方法を考えていると…

簪

「失礼します。束さん、少し見て貰いたい物があるんですが…」

かんちゃんがやって来た

簪

「あ、お取込み中でしたか？」

束

「ううん、気にしないで♪」

これ以上考えてもいい案は思い付かないだろうし、丁度いいから気分転換しよ〜と

！

それでかんちゃんが独自に組んだOSを見ながらアドバイスをしていた

そんな時にふと思った…

東

「かんちゃん…」

簪

「はい？」

東

「第5世代…欲しい？」

簪

「え…」

東さんの行き成りの質問に目を見開いた

すると…

簪

「…手に入るなら…欲しいです…でも…私には第5世代を手にする理由がありません

…」

東

「あ…」

かんちゃんは正直に答えてくれた

でも、そっか…かんちゃんはセーちゃんの様にISが着いて行かなくなった訳じゃな

い…かと言つてのんちゃんみたいに1号機のデータ取りの爲つて理由も無いんだ…

何の理由も無く、ただかんちゃんを気に入ったから上げるなんて、箒ちゃんに言つた事を自分で否定する事になつちやう…

それにかんちゃんは仮に今の理由で渡そうとしても絶対に受け取らない…

ISを皆と協力して作り上げたかんちゃんだからこそ受け取らないんだ…

束

「…そうだね…ゴメン…変な事聞いて…」

簪

「いえ、気にしてません。」

でも束さんから見てかんちゃん…後はリーちゃんもだね…2人なら第5世代を渡しても問題無いと思うんだよね…

何か渡してもいいような理由があればな…

う…ん…理由が無いなら作ればいいんだけど…かんちゃんが納得しないとイケないしな…はあ…そんな都合よく理由になりそうなネタは…

束

「ん？」

諦めようとした時、私はかんちゃんの持つてきたデータの一つに目が止まった

それは拡張領域パススロットを使った新しい戦術だった

「ブルー・ティアーズ」や「ハルファス・ベーゼ」の様な遠隔操作武器から拡張領域パススロットに格納した武器を取り出して使用する…

普通ならそんな事をしてあまり役に立たない…ビットから剣を出してもビットは剣を持ってない…銃を出してもビットは基本射撃武器だからこつちも意味が無い…

それでも例外はある…例えばかんちゃんの「打鉄式式」に装備されている「山嵐」だ…

本体から離れたビットからあの大型ポッドを出せば攻撃範囲が一気に広がるし、意表を突ける…

多分かんちゃんはそのからコレを考えたんだろう…

簪

「どうかしました?」

束

「うん、この拡張領域パススロットのデータ、面白いと思ってね。」

簪

「これですか? 思い付きで考えたんですけど私には無理な方法なんですよね…」

束

「何で？」

簪

「私はセシリアと違って『BT適正』がありませんから…」

束

「あ!？」

そうだった…アレってISの適正とは違う適性が必要だった…

でもなく…このビットと拡張領域バーストロットの組み合わせって凄く面白そうなんだよなく…

何て言うか…新しいアイデアが生まれそうで…

生まれ…

生まれ…

ハッ!?

束

「生まれたあああああああああああああああつ!!!」

簪

「ひゃっ!？」

天啓が下りて来た!!!

簪

「ど、どうしたんですか!？」

東

「良い事思い付いた!!!」

簪

「え?」

私は思い付いたアイディアを早速かんちゃんに説明した

すると…

簪

「確かに…それは凄くいいアイディアです!! 実現できれば同時に複数の救援を行う事も
出来ます!!!」

東

「そうそう!!」

東さんの説明を聞いてかんちゃんはすぐに理解してくれた
それにこの方法は他にも応用が利くかもしれない
こりゃ早速作ってみるべきだね!!

簪

「ですが…そうなるとセシリアの協力が必要ですね…」

東

「あ!?!」

そうだった!?

このシステムは『BT適正』は必要不可欠だった!?

でも特定の人間しか使えないってのもなく…よしっ!!

東

「それならかんちゃんでも使える物にしよう!!!」

簪

「え?」

適性が無くても訓練次第で使えるプログラムを組めばいい!!

それにセーちゃんだって初めからBTシステムを使いこなせた訳じゃないもんね!!

簪

「そんな事できるんですか?アレってかなり特殊なシステムですよ?」

東

「だから挑戦するんでしょ!!それにこれが完成すれば東さんの夢にまた一步近づくんだけ

よ!!」

簪

「東さん…そうですね!! 私も協力します!!」

東

「モチのロンだよ!! て言うかこのアイディアはかんちゃんが考えたんだからしつかり手
伝って貰うよ!!」

簪

「ア、アハハハ…そうでした…」

東

「てな訳で理論が出来たらかんちゃんにテストして貰うからね?」

簪

「…え?…それってつまり…」

東

「【打鉄式式】…第5世代に改造させて貰うよ!!」

簪

「な、何言ってるんですか!?! さつき第5世代を手にする理由は無いって…」

確かにそうだけどね…

東

「それはさつきまでの話でしょ? でも今は違うよね? 新型システムのテスターになって

欲しいんだよ。」

簪

「そ、それならBT適正の高いセシリアに…」

かなりテンパってるね…

そもそも理由を忘れちゃってる…

東

「適性の無い人が使える様にするんだから元々適性のあるセーちゃんじゃ意味無いでしょ？それにこれの発案はかんちゃんだからかんちゃんがやるべきなんだよ!!!」

簪

「うっ…」

フフフ…ぐうの音も出なくなったね!!

コレでかんちゃんの第5世代を用意する大義名分が出来上がったよ!!!

ハアッハッハッハッ!!!

ハッ!?

東

「そうだ!!!」

更にいい事思い付いた!!

簪

「こ、今度は何ですか!？」

束

「かんちゃんの新型を造る前にプロトタイプを造ろう!!」

簪

「プロトタイプ?…試作機ですか?それなら別に私のISでも…」

束

「違う違う!そういう意味の試作機じゃ無くて別のISを実験用の使い捨てに使おうって話。」

フッフフ…丁度いい物があったんだ♪

簪

「使い捨てするようなIS何てありましたっけ?」

束

「あるよ♪ア・レ・♪」

私がそう言っ指差したのは…

簪

「アレって…【紅椿】!？」

束

「その通り!!アレなら丁度いいでしょ?」

簪

「いいんですか?アレって妹さんの…」

束

「いいのいいの♪突き返されて処分に困ってたから丁度いいんだよ♪」

簪

「ハ、ハア…(本当にいいのかな?)」

束

「じゃあ早速始めるよ!!!」

簪

「あっ!ハイ!!!」

コレで【紅椿】の処理出来たし一石二鳥だよ!!

でも…

……

……

……

その翌日、皆で朝食を取りながらテレビを見てみると：

T V

『本日、ヨーロッパ各国の合同で行われていた「イグニッションプラン」が何者かに襲撃されると言う事件が発生しました。怪我人、死傷者の数は現在では不明ですがイギリスで開発された最新鋭機「サイレント・ゼファイルス」が奪われたとの事です。』

全員

「何いっ!?!」

イギリスの I S が盗まれた!?

セーちゃん!?

く束 Side out く

第126話：不死鳥の帰国

～三人称 Side～

【イグニツションプラン】の事件発生から時間を遡って夏休みに入ってから数日後…
束から新しいコアを受け取ったセシリアは飛行機でイギリスへと帰国していた…

～三人称 Side out～

～セシリア Side～

フ…：やつと着きましたか…

【ハルフアス】で飛べばもつと早く着いていたのですが仕方ありませんわね…

さて、空港に迎えが来ている筈ですが…

？

「お嬢様～!!」

そう思つて周りを見渡していると見覚えのあるメイドがやつて来ました

セシリア

『チエルシー』♪お久しぶりですわね♪」

チエルシー

「ハイ！お嬢様もお変わりの無い様で安心いたしました♪」

彼女は『チエルシー』：わたくしが幼い頃からオルコット家に仕えてくれていたメイドでわたくしの良き理解者でもあります

ですが：フフフ：確かに見た目は変わっていないのかもしれませんが色々変わりましたのよ？

何しろ恋人が出来たのです!!!

後でその事を教えたらどんな顔をするのか今から楽しみですわ♪

チエルシー

「お嬢様、それではお屋敷へ戻りましょう。」

セシリア

「そうですわね。」

わたくしはチエルシーの用意していた車に乗って懐かしの我が家への帰路につきま
した…

……

……

…

それからわたくしは屋敷へ到着したのですが…

黒服

「……………」

屋敷の前に怪しげな黒服の集団が待ち構えていました
わたくしが車から降りると…

黒服

「セシリア・オルコットさんですね？」

セシリア

「そうですね…」

黒服の一人が話しかけてきました

どうやらわたくしを待っていたようですね

という事はこの人達は…

黒服

「お帰りをお待ちしておりました。私達はイギリス政府からの使いの者です。貴方を政府へ案内するよう指示を受けました。いきなりで申し訳ありませんがご足労をお願いします。」

やはり政府の人達でしたか…

しかし本当にいきなりですわね…

理由も分かりませんが帰つて来た日くらいゆっくりさせて欲しいですわね…

ですが仕方ありませんわね…東さんが手がけたわたくしの新型「ハルファス・ペーゼ」…それに新しく提供されたＩＳコア…

それらが早く見たいのでしよう…尤も「ハルファス」はわたくし個人の物となつていきますから取り上げる事は出来ませんけどね…

それに、「ハルファス」をわたくしに譲渡する代わりに新しいコアが用意されたのですから文句の言いようがありませんけどね…

ですが、それはそれとして…

セシリア

「すみませんが少しお時間を頂けませんか？荷物も置きたいですし、父と母に挨拶をしたいと思います。」

政府の気持ちも分かりますがせめてそのくらいはさせて貰いませんか…

黒服

「あ…そ、そうですね…こちらの都合ばかり言つてすみません…勿論構いません。準備が終わるまで私共は待たせて貰いますので。」

セシリア

「ありがとうございます。」

彼等の許可を貰うとわたくしはチエルシーと屋敷に戻りました

そして、荷物を置くと両親が眠る墓所へと向かいました

ちなみに黒服の方達も着いて来ています…逃げたりしませんのに…

……

……

…

セシリア

「お父様…お母様…セシリアは無事帰ってきました。」

わたくしは父と母のお墓の前で帰って来た事を報告しています

セシリア

「向こうでは色々な事があったのですがまず一つご報告します。」

わたくしは一息つくと…

セシリア

「恋人が出来ました!!!」

永遠さんの事を話しました

すると…

チエルシー

「……………え？」

フフ…案の定チエルシーも驚いてますわね♪

チエルシー

「お、お嬢様？恋人と言うのはもしかして…」

セシリア

「もちろん、以前お話しした永遠さんの事ですわ♪告白したら受けて下さいましたの♪」

3人一緒でしたが…今はコレは言わなくてもいいですわね…

チエルシー

「そ、そうですか…それは良かったですね♪」

セシリア

「はい♪」

チエルシーも喜んでくれてよかったですわ

きつと…お父様とお母様も…喜んで下さいますよね？

……………

……………

∴

セシリア

「それではお父様、お母様、今日はこのくらいで失礼します。∴それから∴何時か永遠さ
んも連れていきますね。」

永遠さんだけでなく簪さんと本音さんにも会って下さいね∴

セシリア

「それではまた来ますね。」

わたくしはそう言つてチエルシーと墓所を後にしました

そして、墓所を出ると∴

セシリア

「お待たせして申し訳ありません。」

黒服

「いえ、お気になさらず。」

墓所の前で待機していた使いの人達と合流しました

両親に会いに来たわたくしに気を使ってここで待つてくれました

そして、わたくしはチエルシーを先に帰すと彼等の車に乗つて政府へと赴きました∴

∴セシリア Side out∴

第127話：不死鳥の力

くセシリア Sideく

教官

「久しぶりねオルコット！」

セシリア

「ハイ♪教官もお元気そうで安心しましたわ♪」

わたくしが連れて来られたのは政府棟の方ではなく何故かわたくしが代表候補生になる為に訓練に明け暮れた演習場でした

てつきり政府棟の方に行くと思っていたのですが…そこにはわたくしがお世話になった教官や、他の教員達、そしてスーツ姿の役人らしき方が何人かいました

それはさておき、わたくしが教官と挨拶を済ませると…

役人

「よろしいですか？」

セシリア

「あ、ハイ！」

役人の一人が話しかけてきました

役人

「早速で申し訳ないのですが篠ノ之博士から預かった物を見せて貰ってもよろしいですか？」

セシリア

「ハイ…コレです。」

わたくしは東さんから預かったコアを取り出し皆さんに見せました

役人

「コレは確かにI S コア…半信半疑でしたが本当に用意してくれたのか…」

…疑ってたんですね…

役人

「オルコット嬢…このコアは本当に我がイギリスが所有してもいいんですね？」

セシリア

「ハイ、それが条件ですから…その代わり、そちらも東さんの出した条件を守って下さるんですよね？」

役人

「無論です!!既にその為の書類は君に送つてあります!!あの書類の通り君のISはコアを含めて未来永劫セシリア・オルコット個人の物となっております!!もし、これを破れば政府の方で嚴重に処罰する事が決定しています!!それに私達は篠ノ之博士を敵に回す事を望んではいません!!」

フム…どうやら大丈夫みたいですわね…

束さんを敵に回せばラウラさんのISに〔VTシステム〕を積んでいた事を暴露されたドイツの様にどんな秘密をばらされるか分かったものではありませんからね

そのせいでドイツは各国から非難を浴びて研究所を自分達で潰して関係者を一人残らず捕まえる事でなんとか治めたそうです…アレもあつて余計な事を考える輩はそう簡単には現れないでしょう…

それにこう言つては何ですが束さんの出した3つの条件…実はイギリスにはこれと言つたデメリットが無いんですよ…

〔ハルファス〕その物とコアはわたくし個人の物になつてはいますがわたくし自身はイギリスの人間ですから普通に大会などに〔ハルファス〕を使って出ても問題は無いんです…

しいて言うなら…今度行われる〔イグニッションプラン〕に〔ハルファス〕をイギリスのISとして出せないくらいでしょうが…それは些細な事ですわね…

それに聞いた話では「ブルー・ティアーズ」の後継機が完成しているそうですからそちらを出せば済む話ですもの…

という訳で問題も無い様ですし…

セシリア

「それではこれをどうぞ。」

わたくしはコアを差し出すと役人の方がシツカリと受け取りました

役人

「確かに!!感謝します!!」

受け取ると役人の方が他の方達と一緒に誠に頭を下げてきました

少し驚きましたわ

役人

「それで…」

セシリア

「ハイ？」

顔を上げると皆さん何か言いたそうな表情をしていました

一体どうしたんでしょうか？

わたくしが首を傾げていると…

教官

「オルコット…皆さんお前の『新型』が見たいんだ。」

セシリア

「【ハルフアス】を？」

教官が答えてくれました

教官

「【ハルフアス】と言うのか…確か『悪魔』の名前にあつたな…後は『鳥』の名前だったか？」

セシリア

「どちらも当て嵌まりますわ。正式名称は【ハルフアス・ベーゼ】と言います。わたくしは縮めて【ハルフアス】と呼んでいます。後、東さんから【蒼炎の不死鳥】の二つ名を頂いております。」

教官

「蒼炎の不死鳥…ハルフアス・ベーゼ」か…それを見せてくれないか？」

…何故【ハルフアス】を見るだけでこんなに畏まっているのでしょうか…？つてそう言えば東さんの条件の一つに【ハルフアス】に手を出さないようにとありましたわね
ですからこんなに言いつらそんな顔をされてましたのね…東さんとの約束を破るか

もしれないから…ですが…

セシリア

「そのくらいでしたらいいですよ？」

全員

「本当か!？」

見せたくらいで減る様なものでもありませんもの…

セシリア

「ハイ、ですが束さんとの約束通り「ハルフアス」は渡せませんし、解析も出来ません。よろしいでしょうか？」

役人

「もちろんです!!!!では早速お願いします!!!」

セシリア

「ハイ…」

あ!だからここに来たんですね…「ハルフアス」を出してもいい様にする為だったんですね

セシリア

「それでは…」

教官

「ん？オルコット…ISスーツに着替えないのか？」

教官は慌ててますが…そう言えばわたくしは私服ですし下にISスーツを着ていませんからね…この服なら上からでも着ているかどうか分かりますから

ですが…

セシリア

「必要ありません。このISはスーツは手足のみで稼働させる事が出来ます。」

教官

「て、手足だけでいいだど!？」

もうあのスーツに着替える必要は無いんです…

さて…

セシリア

「お出でなさい!!【ハルファス・ベーゼ】!!!」

カッ!!

わたくしは【ハルファス】を展開しました

全員

「!？」

「ハルフアス」の姿に皆さん言葉を失っていました

教官

「…コレが…噂の第5世代…【蒼炎の不死鳥ハルフアス・ベーゼ】!?」

ザワザワ…

…段々と騒がしくなってきましたわね…

役人

「オルコット嬢…その…よければ模擬戦をお願いできませんか？」

すると次の要求が来ました

まあ、模擬戦くらいなら…

セシリア

「構いませんが…相手はどなたですか？」

わたくしが対戦相手を聞くと…

教官

「私が相手だ!!!」

教官が名乗りを上げました…

確か教官は国家代表でこそありませんがイギリスの代表と最後まで争った人…ですから今はこうして教官職についているのですが…その教官が相手ですか…

セシリア

「分かりました！それではよろしくお願いします!!」

教官

「ウム!!」

わたくしは一端ISを解除すると訓練用のアリーナに移動しました…

………

………

…

それで教官の準備が終わったそうなのでアリーナに出たのですが…

セシリア

「え〜つと…コレはどう言う事でしょうか？」

私の目の前には「ラファール」を纏った教官がいます

それはいいのです…

ですが…

教官

「相手は第5世代が!!私1人では勝負にならないらる?」

そう、わたくしの前には教官以外にもISを纏った人達がありました…

全員で10人はいます…

コレはつまり…

セシリア

「だからと言って1対10はやり過ぎな気が…」

この人数を1人で相手にしろという事ですわよね…

教官

「今のお前なら大丈夫だ!!!」

何を言っても無駄ですわね…

セシリア

「ハア…分かりました…」

仕方なくわたくしは「ハルファス」を展開しました

そして…

セシリア

「セシリア・オルコット!!」「ハルファス・ベーゼ!!参ります!!!」

「ハルファス」と共に飛び立ちました…

………

………

…

アナウンス

『し、試合終了…勝者…セシリア・オルコット…』

10人相手に勝ってしまいました

それどころか…

教官

「クツ…まさか1発も掠らせる事も出来んとは…」

教官の言う通りわたくしは1撃も貰わずに勝ってしまったのです

まさかここまで圧勝するなんて…自分でも驚いています…

そして改めて第5世代としての「ハルファス・ベーゼ」の力を思い知りました…

………

………

…

その後、「ハルファス」の力を目の当たりにした他の方達も驚きのあまり固まっています
ですが今は正気に戻っています

ですが…ISの研究者の方達の目が少し怖かったですのですがまあ大丈夫でしょう

「ハルファス」に手を出せば東さんを敵に回す事になりますし政府の目もありますか

らね…

わたくしはそう結論付けると用件も全て終わりましたから挨拶をして帰りました…
くセシリア Side out く

第128話：イグニッションプラン開幕

くラウラ Sideく

ラウラ

「遂にこの日が来たか…」

今日は欧州の次期主力機を決める一大イベント…「イグニッションプラン」開幕の日だ

私は自分の部隊【黒兎隊】の者達と参加していた

参加と言っても半分は警護も兼ねているがな…

？

「隊長、全員配置に着きました！」

ラウラ

「ぐ」苦勞！

私にそう報告して来たのは【黒兎隊】の副隊長の『クラリツサ』だ

この「イグニッションプラン」は次期主力機を選定する発表会…我がドイツが出すI

Sは私の「シユヴァアルツェア・レーゲン」だ

だから私達は警護と同時に参加者でもあった

クラリツサ

「ところで隊長、今回一番の注目されているのは何処の国だと思われませんか？」

ラウラ

「ん？」

クラリツサの問いに私は…

ラウラ

「我がドイツだ!!!」

クラリツサ

「あの隊長…気を使われるのは分かりますが、私は隊長の正直な意見が聞きたいのです
が…」

うくむ…バレたか…

まあ、冗談半分に答えてやったから分かるか…

しかし、正直な意見か…

それはやはり…

ラウラ

「イギリスだろうな…」

兄上の恋人の一人でもあるセシリアのいる国だ

流石に第5世代の「ハルファス・ベーゼ」は出せないがそれでも注目を集める事は出来る

それに聞いた話ではイギリスの出すISは改造前のセシリアの「ブルー・ティアーズ」の2号機だそうだ

恐らく性能も「ブルー・ティアーズ」以上だろう…

尤も、乗り手がセシリアでなければ私の敵では無いだろう…

私が正直に答えると…

クラリツサ

「私も同意見です。噂ではイギリスが一番人気だとか。」

ラウラ

「だろうな…」

我がドイツも少し前は1、2を争う人気を誇っていたが研究所の馬鹿共が私のISに【VTシステム】を組み込んでいた事が篠ノ之博士の手で暴露されたせいで各国から非難を浴びまくったからな…

まあ、私としてはあんなシステムを積んだ連中が捕まって清々してるからいい気味だ

としか思わないけどな

クラリツサ

「それに噂の第5世代を見に来た者もかなりの数いるそうですよ？」

ラウラ

「セシリアが来るとは限らんど？」

クラリツサ

「それでも気にはなりますよ。」

確かにそうだな…

クラリツサ

「それで隊長はIS学園で第5世代を目にしているんですよね？どんなISでしたか？」

ラウラ

「ん？【ハルフアス・ベーゼ】の事か？それとも本音の【ワイバーン・ガイア】の方か？」

クラリツサ

「どちらもです。隊長のISと比べてどう感じましたか？」

クラリツサのその質問に周りにいた他の隊員達やスタッフたちも興味津々な様子で聞き耳を立てているな…

だが、そうだな…

ラウラ

「…『シユヴァルツェア・レーゲン』が『玩具』にしか見えなかったよ…」

全員

「玩具!？」

私の答えにクラリツサだけでなく全員が驚きの声を上げた

それもそうか…自分達の技術の粋を込めて開発したISを私が玩具呼ばわりしたんだからな…

だがな…

ラウラ

「驚くのも無理ないが…それしか言いようが無くてな…」

クラリツサ

「た、隊長がそこまで言うなんて…」

ラウラ

「こんな事で嘘は言わん…」

全員

「……………」

そう、嘘を言う必要が無い…

いや、言う気になれない…

あの力を目の当たりにすれば誰だって本当の事を言うしか無いからな…

………

………

…

それから暫くして「イグニッションプラン」が開幕した

我がドイツは「VTシステム」の件で人気が下がったが、それでもイギリス程では無いが注目されているように見学者はそれなりの数が来ていた

私は隊員達とローテーションを回しながら警備とプレゼンを行っていた

そして…

クラリツサ

「隊長、交代です。暫くは私達で回しておきますので休憩がてら他の国を見て回ってはどうですか？」

ラウラ

「そうだな…ではお言葉に甘えさせて貰うとするか…」

クラリツサの言う通り時間が出来た事だし他の国のブースを覗いてみるか…

突然会場内を爆発音が鳴り響いた…
く
ラウラ Side out く

第129話：奪われたサイレント・ゼファイルス

くらウララ Side

ラウラ

「今の爆発は何だ!？」

私は突然の爆発音に周囲を見渡すと周りにいる人々もいきなりの事で混乱していたのだが、私はすぐに気を取り直すと自分の国のブースへと走り出した
爆発の方角は違っていたがアレが囿の可能性もあるからだ

そして、私が到着すると：

クラリツサ

「隊長!！」

ラウラ

「クラリツサ!!全員無事か!!」

隊員達やスタッフの安否を確認した

クラリツサ

「ハッ!! 全員無事です!! 休んでいた者も含め全員集まっています!!」

よし! なら…

ラウラ

「…何が起きたか分かるか?」

クラリツサ

「いえ、私達もいきなりの事で…ですが爆発が起きたのはどうやら『イギリス』のブース近くの様です!!」

ラウラ

「イギリスだと!?!」

まさか…「ハルファス・ベーゼ」を狙って起きたテロか!?

いや、仮にテロリストが相手だとしてもあのセシリアから簡単に奪えるとは思えん…それに聞いた話だとセシリアはココにはまだ来ていないと客の誰かが言っていた…

セシリアがいない事を知らずにテロを起こしたのか…それとも別の狙いが…

ええい! ココで考えていても仕方ない!!

ラウラ

「クラリツサ!! ココでの指揮はお前に任せる!! スタッフとI S、機材の防衛と退避を頼む!!!」

クラリツサ

「了解しました!!それで隊長は？」

ラウラ

「私は爆発の起きた場所を調べてくる!!何が起きたのか確認する必要がある!!」

クラリツサ

「承知しました!!」

ラウラ

「何か分かればすぐに連絡しろ!!」

私はクラリツサに後を任せるとISを展開して飛び出した

……

……

……

それから私は爆発の起きた場所に到着したが、そこはやはりイギリスの出版エリアだった

私は辺りを見渡していると……

ラウラ

「!?……オイ!!しっかりしろ!!」

爆発跡の近くに倒れていた人を1人発見した

服装からしてイギリスのスタッフの1人の様だ…

スタッフ

「うっ…うっ…」

私がスタッフを抱き起こすと呻き声を上げた

どうやら怪我は負っているようだが命に別状は無い様だな…良かった…

だが…

スタッフ

「…【サ、サイレント…ゼフィルス】が…」

ラウラ

「何っ!?!」

【サイレント・ゼフィルス】と言えばイギリスが「イグニッションプラン」に出展した
と言う【ブルー・ティアーズ】の2号機…

まさか…本当の狙いは!?

私はすぐに周囲をもう一度見渡したが【サイレント・ゼフィルス】らしきISは見当た
らなかつた

その時…

ラウラ

「!?」

私は咄嗟に倒れているスタッフを抱えてその場を飛び退いた
すると…

ドンツ!!

そこに攻撃が撃ち込まれた

ラウラ

「何者だ!!!」

私はすぐに攻撃の来た方角を見た

するとそこには…

ラウラ

「!?…そのISは!?」

蝶のような羽を持つ青いISが私にライフルを向けていた

あのISは…

スタッフ

「【サイレント…ゼフィルス】…」

スタッフがISの名を口にした…

やはりアレが【サイレント・ゼフィルス】か!?

乗り手は…クソツ!! バイザーで隠れていて顔が見えない!!

?

「ラウラ・ボーデヴィツヒ…ドイツの代表候補生か…お前がココにいたのは調べがっていたがまさかこんなに早く現れるとは思わなかったな…」

ラウラ

「私の事を知っているようだな…」

?

「ああ、曲がりなりにも専用機を持っているからな…本当はセシリア・オルコットが来る前に任務を終えたかったがやはりすんなりとはいかないか…」

ラウラ

「セシリアだど!? 貴様! アイツがいないタイミングを狙ったのか!?!」

という事は狙いはセシリアの【ハルフアス・ベーゼ】ではなく始めから【サイレント・ゼフィルス】の方だったのか!!

?

「ああ、こちらも出来る事なら噂の第5世代を手に入れたかったが流石に相手が悪すぎる…だからこちらを狙ったんだよ。」

確かにな…セシリアは私の知る限り兄上が唯一本気で戦った相手だ…

そのセシリアから「ハルファス・ベーゼ」を奪い取るには「ハルファス・ベーゼ」を操るセシリアを倒さなければならぬ…そんな事は第3世代のISでは東になってもほぼ不可能だろう…

だからこつちと言う訳か!!

?

「まあ、目的の物も手に入れた訳だし追手が第5世代の使い手じゃないだけマシだな…」

マシ…だと…

コイツ…私の事を舐めているな…

だが、相手の力は未知数…私1人で勝てるかは分からない…

それなら…

ラウラ

「オイ…セシリアは今どこにいる?」

確実に勝利する為の方法を取るだけだ!!

だから、私は倒れているスタッフにセシリアの所在を聞いたんだが…

スタッフ

「オ、オルコットさんは…明日来る予定です…今日は政府と打ち合わせをしている筈で

す……」

ラウラ

「(そうか……)」

セシリアが来るのは明日だったか……連絡が行けばすぐに飛んでくるだろうが、この状況ではまともな連絡が出来るようになるのに少し時間が掛かりそうだな……

そこまで計算してこのタイミングを狙った訳か……正体は分からないがコイツは「ハルファス・ベーゼ」を相当警戒しているようだな……

?

「さて、何時までもお喋りをしている暇も無いんでな……奴が来る前に離脱させて貰おう。」

ラウラ

「行かせると思おうか?」

?

「……………」

コイツは「イグニッションプラン」を潰した!!

各国が威信をかけた一世一代の舞台を汚したんだ!!

ラウラ

「他国で起きた事とは言えこんな事をされて見逃すと思うな!!」
そうだ!!

決して…許せるものか!!!

く라우ラ Side outく

第130話：襲撃者の実力【黒い雨VS無音の蝶】

三人称 Side

ラウラ

「オオオオオオオオオオオオオツ!!!」

ラウラはプラズマ手刀を構え襲撃者に仕掛けた

しかし…

襲撃者

「フーン！」

ドン！ドン！ドン！

襲撃者は【サイレント・ゼファイルス】の大型ライフル【星を砕く物】スターブレイカーで迎え撃ってきた

た

ラウラ

「チッ！」

ラウラはAICで防ぐが…

襲撃者

「フツ…」

バシユツ!

襲撃者は今度は【サイレント・ゼフィルス】から小型の物体を射出した

それは…

ラウラ

『『B T兵器』だと!』

【ブルー・ティアーズ】と同じB T兵器だった

コレが使えるという事は…

ラウラ

(奴はB T適正があるという事か!?)

ラウラの考えの通り目の前の襲撃者はB T適正が高い事を意味していた

しかも、襲撃者が【サイレント・ゼフィルス】から射出したビットの数は全部で『6

基』

それはつまり…

襲撃者

「ほお? 流石は最新型…1号機の欠陥が直されているな?」

1号機「ブルー・ティアーズ」の欠点…それはビットを使用している間は他の動作が出来ないと言う欠点が修正された事を意味していた

尤も、セシリアはこの欠点を特訓で克服していたのだが、「サイレント・ゼフィルス」はBT適正がある者ならビットとの同時行動が誰でも出来る機体に仕上がっていた

襲撃者

「行けっ!!!」

ラウラ

「クッ!?!」

ラウラは舌打ちをしながら向かって来るビットに悪戦苦闘していた

「シユヴァルツェア・レーゲン」に搭載されているAICは一方向にしか展開出来ない為、多方向からの攻撃に対しては相性が悪かった

ラウラ

（「ハルフアス・ベーゼ」と比べれば性能もビットの数も向こうが圧倒的に下だが、それでもキツイ!!クソツツ!?!あの時、私がセシリアに勝てたのはやはり偶然だったか!!）

ラウラはビットを躲しながら以前セシリアと鈴に喧嘩を売った時の事を思い出していた

あの時、ラウラがビットを使うセシリアに鈴共々勝利出来たのはセシリアの動きに機

体が追いついて行かなくなった為、偶然勝てただけでしかなかった

改めてBT兵器の厄介さを思い知ったラウラは防戦一方となっていた

襲撃者

「どうした？代表候補生の実力とはこの程度か？折角の専用機が泣いているぞ？」

ラウラ

「だ、黙れ!!!」

襲撃者の言葉を否定するラウラだが…

ラウラ

(悔しいがコイツの実力は私以上だ…どうする!?)

自分との実力差をハッキリと感じていた

このままでは自分に勝ち目は薄い事を痛感していた

ラウラ

(…せめてクラリツサ達が来てくれれば…)

自分1人では捕縛は無理と判断していた

その為、ラウラはラウラは戦いながらクラリツサ達【黒兎隊】に避難が終わり次第援

護に来るように要請を出していた

ラウラ

「そのI Sは…アメリカから強奪された【アラクネ】!？」

目の前のI Sに見覚えがあった

それはアメリカから盗まれ、行方不明となっていた第2世代型の【アラクネ】だった
そして、これこそがラウラの失念していた事だった

ラウラは襲撃者が目の前の1人だけしかいないとは考えていなかったが他にもI S
がいる事を考えていなかったのだ

？

「何手間取ってんだ？ 目的のブツを手に入れたんならとつとて行くぞー！」

襲撃者

「分かってる。」

ラウラ

「ま、待て!!」

2人に増えた襲撃者を相手にラウラは援軍が到着するまで足止めしようとしたが…
？

「あん？ うぜえんだよ!!」

ドガアアアンツ!!

ラウラ

そして…

ラウラ

「うっ…ぐっ…」

【シュヴァルツェア・レーゲン】はSEが尽きており、ラウラも意識を失っていた
ラウラが倒れたのを確認すると…

?

「さて、邪魔者は片づけた事だし…行くぞ…『エム』…」

エム

「分かった…『オータム』…」

襲撃犯の2人は互いの名前を呼び合うと会場を後にした

その数分後、避難活動を終えたクラリツサ達【黒兎隊】が倒れているラウラを発見するのだった…

〈三人称 Side out〉

り押さえようとしたのが返り討ちに会ってしまったそうです

その為、わたくしは許可を貰うとすぐにラウラさんの安否の確認に向かって急いでいるのです！

ですが…

セシリア

「もどかしいですわね!!」

この姿の「ハルファス」のスピードでも目的の場所まではまだ少し掛かりますわね…
普通のISと比べれば何倍も速いのですがすぐに行けない事がこれほどもどかしい
なんて…

永遠さんの「ラインバレル」なら文字通り一瞬で行けますのに…ええい!! 無い物をね
だっても仕方ありませんわ!!

セシリア

「とにかく1秒でも早く向かわなければ!!!」

くセシリア Side outく

くラウラ Sideく

ラウラ

「うっ…」

…白い天井…何処だココは…

何故私はこんな所にいる…

たしか…

ラウラ

「!?」

そうだ…思い出した!?

私は直前の記憶を思い出すと飛び起きた

クラリツサ

「隊長!?!目を覚ましたんですね!?!」

すると、副隊長のクラリツサが慌てて駆け寄って来た

ラウラ

「クラリツサ!!【イグニッションプラン】はどうなった!?!襲撃犯は何処だ!?!【サイレント・

ゼファイルス】は!?!」

私はクラリツサにあの後どうなったのかを聞いた…

だが…

クラリツサ

「隊長…残念ながら【イグニッションプラン】は中止になりました…襲撃犯については捜索隊が出されたそうですが犯人も【サイレント・ゼフィールズ】も見つからなかったそうです…」

ラウラ

「そんな…」

クラリツサから返ってきた答えは最悪なものだった

私が…犯人を取り押さえていれば…こんな事には…

ラウラ

「クツ…ウウツ…」

クラリツサ

「隊長…ご自分を責めないで下さい！隊長は自分に出来る事をしただけです!!誰も隊長を責めたりなどしません!!イギリスも隊長に感謝しています!!」

クラリツサはそう言うが…

私は…自分の不甲斐無さが情けない!!

最初は乗り手がセシリアでなければ【サイレント・ゼフィールズ】に負ける事は無いと自負していた…だが、現実とは違った…コレは、私が思い上がった結果だ…

クソツ!!

結局私は何も反省していなかったのではないか!!

私が自分の不甲斐無さに悔しがっていると…

バンツ!!

セシリア

「ラウラさん!!!」

ラウラ

「え?…セ、セシリア!?!」

部屋にセシリアが駆け込んで来た

何故ココにセシリアがいるんだ!?!

セシリア

「お怪我の調子はどうですか!?!何処か気分が悪くはないですか!?!」

やってきたセシリアは真っ先に私の心配をしてくれた…

だが…

ラウラ

「…スマナイ…」

セシリア

「はい?」

「サイレント・ゼフィルス」を目の前で奪われ、返り討ちに合った私には心配される筋合いはない…

それなのに…

セシリア

「何故ラウラさんが謝るのですか？ラウラさんはイギリスの為に戦って下さったんですよ？」

ラウラ

「だが私は結局何も出来なかった…『サイレント・ゼフィルス』を奪われ…犯人を取り逃がしてしまった…感謝の言葉も心配される資格も無い…」

セシリア

「何を仰ってるのですか!!ラウラさんはイギリスの恩人です!!わたくしは恩人を心配しない恥知らずではありませんわ!!!」

ラウラ

「恩人?…私が?」

セシリア

「ハイ♪」

セシリアは私を責めるような事は一切しなかった

逆に感謝の言葉しか口にしなかった
だが、それでも…

ラウラ

「……………」

私は…力の無い自分が許せない!!!

以前、兄上に倒された時とは違う…ただ強いだけの力を求めた時とは違う…力の無い
自分が…情けない…

もつと…もつと…強くなりたい…

セシリア

「……………」

くラウラ Side outく

第132話：最期の会話

（三人称 Side）

【イグニツションプラン】の事件が起こる数日前…

セシリアがイギリスに帰国した時と同じ頃…

シャルロット

「…着いた…か…」

シャルロットもフランスへと帰国していた

だが、シャルロットの場合はセシリアと違い誰かが迎えに来ている訳では無かった
更に言えば、セシリアと違いテンションまで低かった

シャルロット

「…コレが…最後になるのか…」

その理由はこれがシャルロットにとって『最後の帰郷』になるからだった

シャルロット

「…しっかりとこの景色を目に焼き付けよう…」

そう呟くとシャルロットはゆっくりと歩きだした…

～三人称 Side out～

～シャルロット Side～

シャルロット

「…あつと言う間に着いちゃったな…」

僕はデュノア社の前に来ていた…

これから報告と言う名の最期のお別れを言う…

いや、もしかしたら父さんとは会えずに終わるかもしれない…

それでも…僕は最期にお父さんに会いたい!!

僕は意を決して会社へと入って行った

………

………

………

デュノア社長

「報告を聞こう。」

シャルロット

「……………」

意気込んで来た割りにアツサリとお父さんの前に通されちゃった…

とは言っても二人きりじゃない…お父さんの隣には本妻もいるし、その取り巻きもいる…

それでもこんなに簡単に会えるなんて…

僕が今の状況に追い付いていないと…

デュノア社長

「聞こえてるのか!!」

シャルロット

「!?!」

お父さんが怒鳴った

いけない…コレは僕が悪い…ちゃんと報告はしないと

シャルロット

「す、すみません!!では報告します!!」

デュノア社長

「うむ…」

それから僕は学園での活動を報告して行つた

一夏に正体がバレている事とかは流星に言えないから嘘を混ぜて報告していった
シャルロット

「……………以上で終わります。」

デュノア社長

「ふ〜む…織斑一夏…思ったよりガードが堅い様だな…」

シャルロット

「ハ、ハイ…」

どうやらお父さんは僕の報告を信じてくれたみたいだ

すると…

デュノア社長

「ではもう一人については？」

火ノ兄君の事を聞いて来た

でも…

シャルロット

「すみません…彼に関しては織斑一夏以上に何も分かっていません…接触の機会が極端に少ないので…」

デュノア社長

「…どう言う意味だ？」

彼についてはデータを盗む以前の問題なんだよね…

シャルロット

「実は…彼は他の生徒と違い自宅通学をしています。その為、放課後から翌朝までは学園にいません。」

デュノア社長

「何？あそこは全寮制の筈だぞ？」

シャルロット

「家庭の事情らしく、理事長に特別に許可を貰っているそうです。」

デュノア社長

「…では何故彼の家の調査に行かなかった？」

シャルロット

「無理言わないで下さい…彼の住んでいる場所はISを使う程離れてるんです。ですから彼はISを使って登下校をしてるんです。後を付けるにはこつちもISを使わないといけません。許可なくISで外に出る事なんて出来ません。」

デュノア社長

「そ、そうか…確かにそれでは無理か…」

シャルロット

「それに彼が住んでいる場所は私有地だそうです。勝手に入り込んだら捕まってしまう。」

デュノア社長

「ぬ〜…」

僕から火ノ兄君について聞いたお父さんは顔を顰めていた

それは傍にいる本妻や取り巻き達も一緒だった

捕まるのを覚悟で行って本当に捕まったら国際問題になりかねないからね…

流石にそこまでのリスクは負う事は出来ないか…

デュノア社長

「分かった…報告…苦勞…」

シャルロット

「ハ、ハイ…あの…それで「イグニッションプラン」への参加は…」

デュノア社長

「無理だな…データが足りん…今回は諦めるしかないな…」

シャルロット

「…そうですか…」

「そうだよね…そもそも僕がデータを持ってきたとしても数日で新型を造るなんて出来ないよね…」

「お父さん達もそれは分かっていたみたいで悔しそうにはしてるけど割と簡単に受け入れているみたいだ…」

デュノア社長

「…もう下がっていいぞ。」

シャルロット

「ハイ…あ、あの…」

デュノア社長

「何だ？」

シャルロット

「い、いえ…失礼…します…」

駄目だ…本妻達の前で迂闊な事は言えない…

でも…一目でももう一度会えた…言葉を交わす事が出来た…それで良しとしよう…

僕が自分でそう結論付けて部屋を出ようとした時…

デュノア社長

「少し待て。」

シャルロット

「ハイ？」

お父さんに呼び止められた

何だろ？何か問題があったのかな？

デュノア社長

「社を出る前に『開発部』に寄って行け。」

シャルロット

「開発部ですか？」

デュノア社長

「そこにお前のISを預けてから帰れ。」

シャルロット

「ハイ…分かりました…いつ取りに来れば？」

デュノア社長

「二度、データの洗い直しとぼらして総メンテを行う予定だから1週間以上はかかる。後で学園に送っておくからこのまま日本に戻れ。」

シャルロット

「……………」

ISを置いて日本に行け？

それって…

デュノア社長

「…頑張るんだぞ…シャルロット…」

シャルロット

「!?」

小さな声で…でもハッキリ聞こえた…

だから僕はそれ以上何も言えなかった

シャルロット

「…失礼します…」

デュノア社長

「……………」

僕は込み上げて来る物を必死に我慢して部屋を出た

そして、急いで「ラファール」を開発部に預けるとそのまま会社を飛び出した

……………

……………

…

それから僕は走り続けて会社から十分に離れると…

シャルロット

「うっ…うっ…お父…さん…お父さ…くん!!」

僕は泣いた

お父さんの気持ちが伝わったから…

ISを預けさせたのは僕が日本に亡命した時に余計な問題を起こさせない為だ…「ラファール」が原因で国際問題を起こさない単にお父さんはISを置いて行くように言った…

何よりも…あの最後の言葉…

…頑張るんだぞ…シャルロット…

本妻達に聞かれるかもしれないのに…

僕に…頑張れって…シャルロットって…言ってくれた…

シャルロット

「うっ…うわああああああああああああああんっ!!!」

だから僕は泣き続けた…

涙が枯れるまで…

人目も気にせず…

泣き続けた
シヤルロツト

S
i
d
e

o
u
t
}

第133話：クロエの決意

（永遠 Side）

「イグニツションプラン」の事件をニュースで知ったワシ等は参加しているであろうセシリアとラウラの心配をしとった

事件の事を知ってすぐに連絡をしたんじやが向こうも混乱しておる様子で連絡が付かんかった

仕方なく今は束さんが情報を集め終わるのを待つとる状態じやが全員が気が気でなかつた：

織斑も訓練に集中出来とらん：かく言うワシもじや：畑はともかく鍛練に身が入らん：

他のもんも同様じや：

織斑先生も学園には戻らず束さんの調査を待つとる：学園よりも束さんの方が速くて正確な情報が手に入るからのお：

皆が心配しとる中：

クロエ

「……………」

一番心配しとるのはクロエの様じゃの？

心ここにあらずと言った所かの？

ワシがそう思うととる…

東

「皆!!向こうの様子が分かったよ!!!」

全員

「!?!」

東さんが居間に駆け込んで来た

千冬

「それで状況は!?!」

東

「うん…簡単に言う…最悪と言っていい状況だね…」

千冬

「最悪だ?!?!」

どうやら向こうはこちらの想像以上に酷い有様の様じゃの…

東

「イギリスの『サイレント・ゼフィルス』が奪われたのは皆ニュースで知ってるよね？その『サイレント・ゼフィルス』の追跡部隊が出されたそうだけどまだ見つかってないらしいよ。」

千冬

「そうか…だが…犯人はどうやってI Sを盗んだんだ？よりにもよってオルコットのいるイギリスを狙うとは…」

確かにの…セシリアじゃったら襲撃犯なんぞ返り討ちに出来る筈じゃ…にも拘らずI Sを奪えたとなると…

永遠

「…犯人はセシリアがおらんタイミングを狙ったと言う事じゃな？」

千冬

「何!？」

東

「うん…事件が起きた時、セーちゃんはイギリス政府で打ち合わせをしてたらしいよ。」

千冬

「それではどうしようもないか…」

現場におらんのではさしものセシリアでも何も出来んか…

しかし…

永遠

「…そうなるのと犯人はセシリアの行動を知っておった可能性があるのお…」

全員

「!?」

簪

「どう言う事!？」

永遠

「犯人にとって一番の障害は第5世代を持つセシリアじゃ…【サイレント・ゼフィールズ】に限らず【イグニッションプラン】に出されておるISを狙うのならセシリアの行動を把握する必要がある筈じゃ…」

千冬

「言われてみるとそうだが……まさか!？」

東

「セーちゃんの行動をリークした奴がいるかもしれないって事?」

永遠

「あくまで可能性の話じゃ…じゃがそうでも考えねばあそこ迄手際よく行くとも思えん…」

千冬

「確かに火ノ兄の言う事にも一理あるな…東、そいつが居たと仮定して探す事は出来るか？」

東

「難しいね…電話やメールならともかく手紙や口頭で連絡を取り合ってたら流石の東さんでもお手上げだよ…」

千冬

「そうか…」

「そうじゃよな…手紙の内容なんぞ開ける時まで分からんし、イギリスにいる人間全ての会話を調べる事なんぞ誰にも出来ん…」

東

「一応後でとーくんが言った事をセーちゃんには伝えておくよ。そうすれば向こうの方で怪しい動きをしていた奴を見つけられるかもしれないからね。」

永遠

「既に手遅れかもしれないが…」

全員

「……………」

【サイレント・ゼフィルス】を奪う事に成功した以上リークした奴が何時までもおろとは限らん…いや、下手をすれば口を封じられておる可能性もあるのお…

東

「それとね皆…その…」

ん？他にも話す事があるみたいじゃが…随分言いにくそうな顔をしとるの？

東さんにしては珍しい…何かクロエをちらちら見とるが…

ん？クロエ？

という事は…

永遠

「…ラウラに何かあったのか？」

クロエ

「!？」

東

「…うん…その子、『イグニツションプラン』に参加してね…襲撃犯を捕まえようとして振り返りにあったそうなんだよ…」

千冬

「何だと!？」

やはりラウラの事じゃったか…

クロエとラウラの関係は束さんも知つとるからな…

クロエ

「……………」

じゃが肝心のクロエは複雑な表情をしとるの…

吹っ切れたとはいえクロエ自身もラウラとどう接すればいいのかまだ決めかね取るからのお…

束

「怪我はしたけどラウラって子は無事だよ…」

千冬

「そうか…良かった…」

織斑先生は安心しとるの…

さて…

クロエ

「……………」

問題はクロエじゃな…

仕方が無い…いい機会じゃ…クロエがラウラとどうなりたいか聞くとするか…
ラウラの方は既に決めとるしな…と言うか外堀から埋めに来とるし…

永遠

「クロエよ…主もいい加減決めたらどうなんじゃ?」

クロエ

「に、兄様!」

永遠

「正直に言って今の主は見てられんぞい?」

今迄は当人達の問題じゃからと思うて口出しせんかったが…ココまで悶々としとると流石に放っておけんわい…

永遠

「ラウラが心配なら会ってきんさい…どうでもいいならそげな顔するでない…」

クロエ

「うっ…」

ワシがそう言うのと黙り込んでしもうた

じゃが…

一夏

「なあ？今のどういう事だ？ラウラとクロニクルさんって仲悪かったのか？」

この中で二人の関係を知らん織斑が口を挟んできおった

千冬

「そう言えばお前は知らなかったか…」

一夏

「え？何が？」

千冬

「うゝむ…クロニクル…コイツに教えてもいいか？」

クロエ

「…はい…」

織斑先生がクロエに許可をとったか…

じゃが、ワシの言った事を考えておるのかから返事じゃな…

その間に織斑は姉からクロエとラウラの素性を説明されとった

千冬

「……………という訳だ。」

一夏

「…ラウラとクロニクルさんにそんな事情が…」

千冬

「分かっているとかが言いふらすなよ？」

一夏

「分かっている!!誰にも言わねえよ!!!」

ふむ…あの様子では大丈夫じゃろう…

さて…となると…

クロエ

「……………」

いよいよクロエの事なんじゃよな…

未だにワシの言った事を考えとるみたいじゃし…

どうするべきかな…

と思つとると…

クロエ

「東様…兄様…」

クロエが顔を上げてワシと東さんの名を呼んだ

永遠

「何じゃ?」

東

「なぐに?」

クロエ

「…私は…今でもあのドイツと言う国が許せません…吹っ切れた今でもそれは変わりません…」

全員

「……………」

まあ、そうじゃよな…

【VTシステム】の事と言い…クロエやラウラの生まれの事と言い…あの国はほんに碌な事をせんのお…

クロエ

「ですが…あの子自身には…もう何も蟠りはありません…」

永遠

「ではどうしたい?」

クロエ

「まだ分かりません…ですが…今はあの子に会って…安否を直接確認したいです!!!」

永遠

「よく言った!!!」

東

「行つてきなよ!!!」

クロエ

「ハイ!!!」

ワシと東さんが最後の一押しをするとクロエは力強く頷いた

そんなクロエを簪や本音、織斑姉弟も微笑んでおった

そして…

クロエ

「では行きますよ!! 【裂空丸】!!!」

クロエは自分の専用機の名を呼んだ

く永遠 Side out く

のんちゃん「ワイバーン・ガイア」程じゃないけど従来のISのおよそ3倍はある
大きさがあつた…

コレがクーちゃんが自分の専用機として作り上げたIS…【裂空丸】

一夏

「な、な、な、何だコレはああああああああつ!!」

千冬

「巨大な…鳥だと!?!」

簪

「綺麗…」

あららく…ちーちゃん達驚いてる…

やつぱ驚くかく…東さんでさえ完成したこれを見た時は驚いたもんなく…

東

「コレがクーちゃんの第5世代【裂空丸】だよ。」

千冬

「【裂空丸】…」

本音

「【ワイワイ】程じゃないけどこれもおつきいね〜…」

そうなんだよね〜…しかもコレって「ワイバーン・ガイア」と同じで中に乗り込んで
操縦する仕様になってるんだよね…

千冬

「東…お前デカ物は布仏の「ワイバーン・ガイア」だけじゃなかったのか?」

東

「そうだよ?」

千冬

「ならこれは何だ?」

東

「【裂空丸】はクーちゃんが自分用に作ったISだから東さんは何も知らないよ。」

千冬

「クロニクルが?」

東

「うん!!」

でもほんと驚いたよ…

【黒鍵】をこんな姿に変えちゃうなんてさ…

けど…クーちゃんの『アレ』の事を考えるとこっちの方がいいのかもしれないだよ

ね…

………

………

…

クロエ

「これでよし!!!」

東さん達が【裂空丸】について話している間にクーちゃんはコンテナを用意していたアレって確か…

クロエ

「では皆さん!!行つて参ります!!!」

そんな事を考えてる間に準備を終えたクーちゃんは【裂空丸】に乗り込んだ

永遠

「気いつけるんじゃぞ!」

一夏

「ラウラに元気出せつて言つておいて下さい!」

千冬

「先に言われたか…ゴホン!なら…クロニクル、向こうに着いても油断するなよ!!ラウ

永遠

「そのままの意味じゃよ…クロエは初めからラウラに会うつもりでいたんじゃよ。」

一夏

「え？」

東

「そそ！でなきや束さん達に隠れて『あんな物』用意しないよ。」

全員

「あんな物？」

更識と布仏も知らないみたいだな…

簪

「…あ!?!もしかして一緒に持ってたコンテナの事？」

そう言えばそんな物があつたな…【裂空丸】の足で掴んで持って行つたが…

千冬

「お前達アレの中身を知ってるのか？」

永遠

「うむ…アレは『ラウラの第5世代』じゃよ。」

全員

「へ?.....何いいいいいいいいいいいい!!」

ラウラの：第5世代だど!?

千冬

「一体いつから...」

あの二人の間には大きな溝がある：ちよつとやそつとじや埋まる様な溝じやない：

それほどまでにあの二人の関係は複雑だ：

現にラウラは火ノ兄とは何とか良好な関係を築けてはいたが肝心のクロニクルとは

何も進展してはいなかった

それを：まさかクロニクルの方から：

束

「クーちゃんはね：本当はとつくにラウラって子を許してたんだよ：でも：その事に対して中々素直になれずにいたんだよねく：」

永遠

「ウム!じゃから隠れて『アレ』を作っておった。いつか腹を割って話す時が来た時に渡そうとしておったんじやろうな：ま!ワシと束さんにはバレバレじやつたがな!!カカカカツ!!」

束

「ニヤハハハハハッ!! その通り! こちとら伊達にクーちゃんのを家族をやつてなくいよ♪」
全員

「……………」

全くこの二人は…

クロニクル…いい家族を持ったな…

く千冬 Side outく

第135話：巨鳥襲来!?

くらウラ Sideく

ラウラ

「ハア…ハア…次だ!!」

クラリツサ

「隊長!! いい加減休んでください!!」

そう言つて私を窘めるのは副隊長のクラリツサだ

私はあの「イグニツションプラン」の事件の後、本国に戻るとすぐに訓練を始めた

あの時…私がつと強ければ犯人を逃がすような事は無かつた…

そう思うと自分の不甲斐無さに腹が立つ!!

だから私は毎日訓練に明け暮れていたのだが、クラリツサや他の隊員達はそんな私に

休む様に言つて来ていた

クラリツサ

「このままでは本当に倒れてしまいますよ!?! 少しは休む事も必要です!!」

ラウラ

「だが私は…少しでも強くなりたいんだ!!」

クラリツサ

「それは分かりますがやり過ぎです!!ものには限度があります!!」

ラウラ

「ぐっ…しかし…」

クラリツサ

「……………」

クラリツサの無言の圧力に気圧された

今日はクラリツサも引くつもりが無い様だな…

ラウラ

「…分かった…今日はもう休む…」

クラリツサ

「ホッ…」

ココまで心配されては折れる他無い…

私は訓練を終わらせて部屋に戻ろうとしたのだが…

ヴィ—— ツ!!ヴィ—— ツ!!ヴィ—— ツ!!

ラウラ&クラリツサ

「警報!？」

基地内に緊急警報が鳴り響いた

ラウラ

「何事だ!？」

通信兵

『当基地に接近中の未確認機の存在を確認!!総員警戒態勢に入れ!!繰り返す総員…』

ラウラ

「未確認機だと!？」

クラリツサ

「隊長!？」

ラウラ

「休もうと思ったが仕方がない!!クラリツサ!指令室に行くぞ!!」

クラリツサ

「了解!!」

私は現状確認の為、クラリツサと指令室に向かった…

………

…

…

ラウラ

「司令!!」

司令官

「ボーデヴィツヒか!」

私達が指令室に到着すると室内は慌ただしく動く隊員達がいた

どうやら未確認機とやらはかなり面倒な相手の様だな…

ラウラ

「ココに接近している者がいるとの事ですが?」

司令官

「その通りだ。監視衛星で偶然発見出来たものでな…下手をすれば気付かない可能性が

あった…」

ラウラ

「それはどう言う事ですか?向かって来ているのはISなのでしょう?」

司令官

「ISかどうか判断がつかんのだ…口で説明するよりもお前達も見て見ろ…監視衛星か

ら送られた映像がコイツだ!」

そう言って司令はモニターの1つに監視衛星からの映像を映した

そこに映っていたのは：

クラリツサ

「コレは…」

ラウラ

「…鳥?」

緑色の鳥だった…

目標の速度が速いせいかな画像はかなりぼやけているが全体の形状は把握出来た…

コレは鳥だ…

だが、この鳥は衛星から確認出来るほどのサイズの上に鳥の速度にしては速すぎる…

だから監視の目に止まったんだろう

司令官

「こんな巨大な鳥など見た事も聞いた事も無い…しかも、この鳥は真っ直ぐこの基地に向かって来ている。故に警戒態勢を取ったという訳だ。」

ラウラ

「成程…それで私達はどうしましょう?迎撃に出ますか?」

司令官

「うむ、【黒兎隊】は直ちに出击してくれ。目標が敵対行動を取った場合は即座に排除しろ!!」

ラウラ&クラリツサ

「了解!!!」

私は司令に敬礼をするとクラリツサと共に指令室を後にしようとした

だが…

クラリツサ

「お待ちください隊長!!」

ラウラ

「ん?」

クラリツサが呼び止めた

何だ?

クラリツサ

「隊は私が率います。隊長は先にISの整備を行って下さい!」

ラウラ

「…ええ?」

何を言ってるんだ？

クラリツサ

「連日の訓練でISがボロボロじゃないですか!!補給もしなければなりません隊長は先に整備室に向かって下さい!!」

ラウラ

「あ…」

そうだった…

「ここ最近の訓練漬けでISの整備も必要最低限のものしかしてなかった…それにさつきまで訓練をしてたからSEも空だ…」

クラリツサ

「分かりましたね?」

ラウラ

「…はい…」

クラリツサ

「司令、そう言う訳ですので隊は私が率いて出撃します。」

司令官

「そう言う事なら仕方が無いか…ボーデヴィツヒの訓練については私もやり過ぎだと

思っていたが暫くは大丈夫だと思って好きにさせていたがこのタイミングで緊急出撃になるとは……」

ラウラ

「申し訳ありません……」

司令官

「タイミングが悪かったただけだ。気にするな。それよりも早く整備に向かえ。」

ラウラ

「……は……」

私は隊の事をクラリツサに任せ整備室へと向かった……

……

……

……

ラウラ

「クソツ……まさか訓練が原因で出撃出来ないとは……クラリツサ達の言う通り適度に休んでおけばよかった!!」

私は整備室に向かいながら自分自身に悪態を吐いていた

今の自分が本当に情けない……部下だけを戦わせて何も出来ない自分が本当に腹が立

っ!!

だが、今はそんな事を愚痴っている暇はない!!

急いで「レーゲン」の整備をして貰わなければ…

ラウラ

「…終わるまで何事も無ければいいが…」

私は謎の鳥の迎撃に向いたクラリツサ達を心配していた

だが、その時…

?

「…ラウラ…」

ラウラ

「!?」

私の名を呼ばれた

顔を上げた私の前に一つの人影が立っていた

ラウラ

「何者だ!!」

コイツが私を呼んだのか…しかし…今の声…どこかで聞いた事が…

私が声の主が誰かを思い出しながら目の前の影を警戒していると影はこちらに近づ

いて来た

ラウラ

「……………」

私は警戒を強めていった

だが、影が近づくとその顔が見えて来た…

それは…

ラウラ

「!?…あ、貴方は!?」

そう、そこにいたのは…

ラウラ

『『姉上』!?』

くラウラ Side out く

第136話：再会する姉妹

「ラウラ Side」

ラウラ

「…あ、姉上…何故貴方がココに…」

私は混乱していた…

謎の巨大な鳥が接近しているという事で基地内は混乱にみまわれていた

そんな中、すぐに出撃出来ない私はISを急いで整備しようと整備室に向かっていたのだが、まさか姉上が現れるなんて…いや、それ以前に姉上はどうやってココに来たんだ？

この基地はドイツでもトップクラスのセキュリティを誇っているのに…

クロエ

「…『姉上』…ですか？」

ラウラ

「!？」

そ、そうだった!?

姉上と言う呼び方は私が勝手にそう呼んでいるだけだった
兄上と違って姉上には許しを貰っていなかった

ラウラ

「す、すみません!!クロニクルさん、でしたね…」

クロエ

「……………」

ラウラ

「……………」

クロエ

「……………まあいいですよ?」

ラウラ

「…え?」

クロエ

「私をそう呼びたいなら構いませんよ?」

今…この人はなんて言ったんだ?

私が…この人を『姉』と呼んでいいと言ったのか?

ラウラ

「ほ、本当に……いいんですか？私が貴方にそう呼べば……貴方は……」

この人は私の『影』に戻ってしまう

そうだ……初めから分かっていた事だった……私のこの想いは矛盾していた……

この人は『クロエ・クロニクル』と言う人間……

私の姉になれば私の『失敗作』と言うレットルを再び張る事になってしまう……この人に……そんな思いをもう一度させる訳にはいかないのに……

私はこの人の妹になりたいと……我儘を言ってしまったんだ

クロエ

「貴方の失敗作になるって言いたいんですか？それがどうかしたんですか？」

ラウラ

「……え？」

クロエ

「確かに私は貴方の失敗作です。ですがそれは私が気にしていた事です。気にしなくなればどうでもいい事なんですよ。」

ラウラ

「…………」

クロエ

「私はもう吹っ切れました。貴方を私の『妹』として認める事にしたんです。」

ラウラ

「!?…い、妹？私が…貴方の妹…」

クロエ

「ハイ♪ですから貴方のお姉ちゃんとして来ました♪【イグニツションプラン】での事は聞き及んでいます。怪我はもういいんですか？」

ラウラ

「あ…あ…ハイ!!!」

私を妹と認めてくれただけでなく…心配まで…

私は込み上げてくるものを必死に我慢した

クロエ

「…さて、行き成りですみませんが少し付き合ってください。」

ラウラ

「…え？あ、ハイ…」

私が落ち着くと姉上は歩き出した

一緒に来るように言われた私はそのまま着いて行つた…

……

……

…

ラウラ

「ココは…」

姉上に連れられた場所は私達がI Sの訓練を行っている訓練場の1つだった

部下達が出撃している時に本当はこんな所に来ている暇は無いんだが…姉上に言われては断れなかった

だが…

ラウラ

「あの…姉上…折角会いに来てくれたのは本当に嬉しいのですが、実は現在緊急警戒態勢に入ってます…この基地に向かっている謎の未確認物体の迎撃に私も出向かなければならないんです…」

クロエ

「…謎の未確認物体ですか？それはもしかして『コレ』の事では無いですか？」

ラウラ

「え？」

パチンツ!

姉上が指を鳴らすと：

ブウウウウウウウン!!

ラウラ

「!?!?!コ、コイツは?!」

目の前に突然現れたのは：『あの鳥』だった!?

く　ラウラ　S i d e　o u t　く

第137話：兄からの贈り物 緑の双刃と妖刀

くらウラ Side

光学迷彩でも使っていたのか目の前に現れたのはこの基地に接近中のあの巨大な鳥だった…

クロエ

「この子は【裂空丸】…私の第5世代ISですよ。」

【裂空丸】…まさか…姉上のISだったなんて…

考えてもみれば第5世代と言うならあの外見とサイズも納得出来る…本音の【ワイバーン・ガイア】だってこの鳥以上のサイズだった

でも、あれ？

らウラ

「それなら…基地に向かって来ているあの鳥は!？」

クロエ

「アレはこの子の『分身』ですよ。」

ラウラ

「え？ぶ、分身!？」

パチンツ!

姉上が再び指を鳴らすと空中にモニターが映し出された

そこに映っていたのは…

ラウラ

「クラリツサ…皆…」

巨大な鳥…いや、【裂空丸】に挑む【黒兎隊】の皆だった

クロエ

「いい部下を持っていますね？」

ラウラ

「え？」

クロエ

「自動操縦でオリジナルの5分の1の力しか持たない分身とはいえ【裂空丸】を追い詰めているんですからね。」

ラウラ

「ア、アレで5分の1!？」

私は姉上の言葉が信じられなかった

【黒兎隊】が全員でかかって何とか優勢だと言うのに……あの分身は本体の5分の1の力しか持たないだろ!?

それなら、私の目の前にあるオリジナルの【裂空丸】は一体どれだけの力を持つてるんだ!?

クロエ

「この【裂空丸】の特殊能力は周囲のエネルギーを用いて『分身体』を作り出す能力です。分身体は集めたエネルギーを固定化しますので実体がありますし、特殊なシステムを使っているのでレーダーの類も本物と認識します。」

ラウラ

「……………」

信じられない事だが姉上の言う通りなら納得出来る……

実体を持つ分身……だからこちらの監視レーダーに引っかかったのか……

そして本体は姿を隠してこの基地に侵入した……そう言う事だったのか……

まるで日本の『忍者』のようなISだ……

だが、そうなる……

ラウラ

「姉上…何故そこまでしてこの基地に？私に会いに来るだけならココまでする必要が無いと思うのですが…」

そう、姉上の行動が今一分からないんだ

現にこの基地の戦力は私の【黒兎隊】だけでなく他の兵士達も【裂空丸】の分身の迎撃に出動している

分身を囷にしてまで基地をここまで手薄にしたのは何故だ？

クロエ

「会いに来るだけならココまではしませんよ。この基地の兵士達に出払って貰ったのは訳があるんですよ。」

ラウラ

「訳？」

クロエ

「ええ、まず私はこの国が心底嫌いです。こんな国滅んでしまえばいいとさえ思っています。」

ラウラ

「……………」

クロエ

「別に何も関係の無い一般人まで死んでほしいなんて思っはけませんよ？私が嫌いなのは『ドイツ』と言う国と私みたいな人間を作った上層部のゴミ共だけです。だから私は貴方以外のドイツの人間とは会いたくないんですよ。例えそれが…同じ『鉄の子宮』から生まれた人であっても…このドイツと言う国では会いたくないんです。他の国でしたら別にいいんですけどね。」

ラウラ

「……………」

姉上はそこまでこの国を嫌っているのか…

いや、もしかしたら私も同じ考えを持つ事になっていたかもしれないんだ…

そう思うと何も言えなかった…

クロエ

「次の理由ですが…事前に調べたところ、貴方はここ最近訓練漬けでISの整備も必要最低限しかしてないそうですね？」

ラウラ

「うっ…ハ、ハイ…」

姉上は知ってるのか…

クロエ

「だからあのタイミングで分身をこの基地に近づければ貴方以外の隊員は分身の迎撃に出向き、貴方は整備の為に残ると思っただんですよ。」

この状況は全て計算の上だったのか

クロエ

「お陰で今この基地には私の邪魔が出来そうな人は一握りしかいません。ですが分身もあの様子ではいつまで持つか分かりませんね…用件をさっさと済ませましょう。」

ラウラ

「……………」

一体…用件とは何なんだ…

私とその事を考えていると…

ドンツ！

ラウラ

「!？」

【裂空丸】が足に掴んでいたコンテナを私の前に置いた

ラウラ

「あの…コレは?？」

クロエ

「貴方の『第5世代』です。」

ラウラ

「なっ!？」

第5世代!？」

私の!？」

クロエ

「今の貴方には必要だと思えます。東様が造った物では無いので恐縮ですが受け取って

下さい。」

ラウラ

「え…博士じゃ無いって…ではこれは…姉上が!？」

クロエ

「そうです。ではご覧下さい。」

そう言うところコンテナが開いた

すると…

クロエ&ラウラ

「え!？」

私だけでなく姉上も驚いていた

何故ならコンテナから出て来たのは…

ラウラ

「これは…」

一方は長い柄とその両端に緑色の羽根の様な刃が取り付けられた双剣…

もう一方は刀身が昆虫の羽のような透き通った模様が刻まれた異質な刀…

この二本は以前どこかで…

クロエ

「疾風の双刃カムイ・ハヤテ」と「黒蟲の妖刀ウスバカゲロウ」!？」

そうだ!?! 思い出した!?! コレは臨海学校の時に兄上に教えて貰った【つるぎ剣刃】の二つ…そ

れも上位に位置する光と闇の緑の【つるぎ剣刃】だ!?!

クロエ

「な、何故コレが入ってるんですか!?!」

どう言う事だ? 姉上が入れてたんじやないのか?

私達が驚いていると…

永遠

『あ…クロエや? 聞こえるかの?』

クロエ

「兄様!？」

兄上の声が流れ始めた

まさかコンテナの中に【剣刃^{つるぎ}】を仕込んだのは兄上の仕業なのか？

いや、兄上しかないか…【剣刃^{つるぎ}】は兄上にしか作れないんだからな…

永遠

『クロエよ、これを聞いとると言う事は恐らく隣にラウラがおるじやろ?』

クロエ&ラウラ

「!？」

永遠

『お主がこのISをラウラに渡すという事は主等の仲違いも終わったという事じやろ。この二本の【剣刃^{つるぎ}】はそんなお主等へのワシからの餞別じや。』

クロエ&ラウラ

「……………」

兄上は…姉上の気持ちに既に気付いておられたのか…

クロエ

「…兄…様……………束…様…」

姉上…泣いておられる…

そうか：兄上一人でこんな手の込んだ仕掛けが出来る筈が無い：篠ノ之博士も協力しているのか：

だから姉上はお二人の気持ちが好きくて：

永遠

『さて、お主等にも余り時間は無いじやろうから手短に済ませるぞい。』

少して兄上の声が再び流れ始めた

確かに時間は余りない：姉上の侵入が何時までもバレない訳では無い：もし他の連中に見つかったら私は姉上を最悪拘束しなければならぬからな…

それでも兄上はこれを聞いて姉上が泣かれる事も考えて少し間を開けておいてくれたんだろうな：

永遠

『お主ら二人に用意した【剣刃】^{つるぎ}は「疾風の双刃カムイ・ハヤテ」と「黒蟲の妖刀ウスバカゲロウ」の二振りじゃ。以前話したと思うがこの二本は緑属性の光と闇の【剣刃】^{つるぎ}じゃ。所有者に関してじゃが、それはお主ら二人で話し合つて決めんさい。どっちがどの【剣刃】^{つるぎ}を選ぶのかは自由じゃ。選んだ方を持つてばそのままその【剣刃】^{つるぎ}は所有者として登録する様にしてある。一応忠告しておくが一人一本じゃぞ。欲張つて二本とも取ろうとせん事を望むぞい。ではこれにてワシからのメッセージは終わりじゃ。クロ

エよ、土産話を楽しみにしとるぞ♪』

最後にそう締めくくって兄上からのメッセージは終わった…

クロエ

「…兄様…楽しみにしててくださいね♪」

ラウラ

「姉上…」

姉上は笑っていた…

兄上の想いが本当に嬉しいんだろう…私も嬉しい…兄上は私達の仲が良くなる事を望んでいてくれたのだから…

クロエ

「ラウラ…」

ラウラ

「ハイ!!!」

クロエ

「貴方は【カムイ・ハヤテ】でいいですか？」

ラウラ

「…え？」

姉上はいきなり何を…

【カムイ・ハヤテ】は…『光』の【つるぎ剣刃】!?

クロエ

「私には『闇』が合っています。貴方はそちらを使って下さい。」

ラウラ

!?

姉上はそう言つて【ウスバカゲロウ】に手を伸ばした

だ、だが…

ラウラ

「だ…駄目です!!!」

クロエ

「え!?!」

私は姉上を押しのとそのまま【ウスバカゲロウ】を掴んだ

クロエ

「何をしてるんですか!?!」

私の突然の行動に姉上は驚いていた…

だが…姉上に【ウスバカゲロウ】を持たせる訳にはいかないんだ!!

ラウラ

「姉上は『闇』ではありません!!」

クロエ

「!？」

ラウラ

「姉上はこれまで私の影として苦しんできました…ですが、姉上も仰ったでは無いのですか!!私の影である事などもう気にしないと!!」

クロエ

「確かにそう言いましたが…」

ラウラ

「姉上はもう『影』でも『闇』でも無いんです!![。]これからは『光』の中を生きて下さい!!」

クロエ

「…だからと言って貴方が『ウスバカゲロウ』を選ばなくても…」

ラウラ

「いいえ!!姉上には『光』の【^{つるぎ}剣刃】を持っていて欲しいんです!!」

そうだ…姉上はこれまで十分苦しんだ…犠牲になった姉妹達の分も一緒になつて…

そんな姉上がやっと光のある場所を歩いて行けるんだ…例えば【^{つるぎ}剣刃】の事でもこれ以

上姉上に『闇』を近づけさせてはいけないんだ!!

クロエ

「…ラウラ…」

ラウラ

「それに私はもう【ウスバカゲロウ】を手にしました！もう所有者を変える事も出来ませんよ？」

本当はあるんだが姉上が知っているとも限らないし…それに知っていても私は絶対に渡すつもりは無いからな!!

クロエ

「……………ハア…分かりました…」

姉上も観念してくれたようだな!!

クロエ

「では【カムイ・ハヤテ】は私が使わせて貰います。本当に良いんですね？」

ラウラ

「ハイ!!」

そう言つて姉上は残った【カムイ・ハヤテ】を手に取つた

すると…

ペア…

クロエ&ラウラ

「!？」

【カムイ・ハヤテ】と【ウスバカゲロウ】が緑色の光を放った

次の瞬間には2本ともナイフ位のサイズに縮んでいた

コレは以前見たな…セシリア達の【剣刃^{つるぎ}】も同じように小さくなつて待機状態になつたがアレと同じか…

兄上…【黒蟲の妖刀ウスバカゲロウ】…大切に使わせていただきます!!!

ラウラ Side out

第138話：姉妹の絆！ファントム・グルゼオン！！

くクロエ Side

兄様からの突然のサプライズには本当に驚きました

ですが、私がココに来た本来の目的をまだ果たしてませんからそろそろ本題に入りましょう

クロエ

「では気を取り直して…貴方のI Sを見せましょう。」

ラウラ

「ハ、ハイ!!」

私がそう言うと視線をコンテナに向けました

そこには翼をマントの様にして覆っている漆黒のI Sがありました

クロエ

「コレが貴方の第5世代…『ファントム・グルゼオン』です。」

ラウラ

「ファントム…グルゼオン」…」

このISは兄様から提供して貰った「ドットブラ斯拉イザー」の中にあつた「グルゼオン」と「ファントム」と言うLBXを元に開発しました

ぶっちゃけて言えば「グルゼオン」に「ファントム」の翼を取り付けて名前も繋げただけなんですけど…これが中々様になってるんですよ…

それに「グルゼオン」の頭つて『黒い兎』に見えるんですよ…

ラウラ

「…これ程の性能とは…」

渡した「ファントム・グルゼオン」のデータを見てその性能に驚いてますね…

自分で造つておいて何ですが…私自身も出来上がったこの機体の性能に驚いてるんですよ…この2体のLBX…相性が良すぎますよ…

クロエ

「このISに貴方のISのコアを移植します。よろしいですか？」

ラウラ

「…それはありがたいのですが…本当によろしいのですか？私はドイツの軍人です。この機体の事を隠しておく事は出来ませんよ？」

クロエ

「構いません。教えた所でこの国に出来る事など何もありませんからね。」

ラウラ

「え？」

ラウラの疑問も尤もですけど…そんな事初めから想定内なのですよ!!

クロエ

「この子にはセシリア様の『ハルファス・ベーゼ』と同じ『自己再生能力』を持たせています。」

ラウラ

「『ハルファス・ベーゼ』と同じ?」

クロエ

「と言つても他の機能を優先させた為に再生速度は『ハルファス・ベーゼ』の更に半分しか持ちません。それでもこの機体は『ラインバレル』や『ハルファス・ベーゼ』と同じく『メンテを必要としない』機体に仕上がっています。」

ラウラ

「…メンテを…必要としない?」

コレが私の対策!!メンテが必要無いなら整備マニュアルも必要無いんですよ!!

クロエ

「そうです。それにこの機体は本音様の「ワイバーン・ガイア」と違って私と東様しかアクセス出来ないように嚴重にロックがかけられています。無理にこじ開けようとすればデータは全部消えて、機体もコア諸共自壊するようにしてあります。勿論そうなっても東様から新しいコアが用意される事はありません。その事を伝えておけば彼らも下手な事はしないでしよう。」

ラウラ

「確かに…」

クロエ

「それに機体の解析が出来なければ整備と称してバラす事なんて出来ないでしょう？もし力づくでバラそうとしてもこの子は自身の能力で瞬時に再生します。つまり分解自体出来ないんですよ。」

私が笑顔でそう言うとなラウラは目が点になっていました

コレでドイツは「ファントム・グルゼオン」に手出しが出来なくなります

私と東様しかアクセス出来ず、無理に調べようとすればコア諸共消滅、更に構造を調べようとばらしても即座に再生…

そんなリスクと無駄な事をこの国がする筈ありません…

現状ではイギリスしか持っていない第5世代を世界でも一二を争う強欲で傲慢な国

であるドイツがやる筈ありませんよ……

クロエ

「以上の事からこの国は第5世代を『ただ持っているだけ』になります。イギリスと違って束様が交渉した訳でもありませんし予備のコアを渡してもいけませんから優遇される訳でも無いんですよ。あくまでラウラ・ボーデヴィツヒがいたのがたまたまこの国だったと言うだけなんです。もし、「フアントム・グルゼオン」で各国に圧力をかけたら今言った事を教えてあげますよ。そうすればこの国は恥をかくだけですからね。」

ラウラ

「……………」

それに束様が簪様の「打鉄式式」を第5世代に改造する研究を行っていますし、他にも目をかけている方はいます

ドイツが偉そうに出来る時間は僅かしかないですよ……

まあ、イギリスの手前そんなに大っぴらには出来ないでしょうけどね……

イギリスが「ハルファス・ベーゼ」で各国に圧力をかけたりすればドイツも同じ事が出来るでしょうけど生憎とイギリスはドイツと違って恥知らずではありませんし、そう言った事は絶対にしない誇り高い国です

結果的にセシリア様のいるイギリスが最初に第5世代を持った国で安心しましたよ

…本音様は日本人ですが国家代表でも候補生でも無いので関係無いですからね
クロエ

「では作業を始めたいと思います。貴方のI Sを貸して貰えますか？」

ラウラ

「あ、ハイ!!」

私がそう言うとなラウラは慌てて自分のI S「シユヴァルツエア・レーゲン」を展開しました

私はすぐに「シユヴァルツエア・レーゲン」にアクセスするとコアの切り離しに取り掛かりました

クロエ

「…一応ロックは掛けてあるみたいですね？」

まあ、この程度のセキュリティなど私や束様にとっては子供だましですね

そんな事を考えている間にロックはアツサリ解除出来ました

ラウラ

「…こんなに早く…流石姉上です!!」

妹に褒められるのは思いのほか嬉しいですね…

もしかしたら兄様も同じ気持ちを感じたのかもしれない…帰ったらその辺

りも聞いてみましょう

クロエ

「よしつと…後はこれを「グルゼオン」に移すだけですわね。」

私は取り外したコアをそのまま「ファントム・グルゼオン」に移植しました

クロエ

「ラウラ…「グルゼオン」に乗って下さい。フオーマツト初期化と最適化フイツテイングを行います。」

ラウラ

「分かりました!!」

私の指示に従いラウラが「グルゼオン」に触れると「グルゼオン」は輝き、ラウラの身体に纏わりました

そして、私は初期化フオーマツトと最適化フイツテイングの作業を始めました

「ハルファス・ベーゼ」の時は「ブルー・ティアーズ」を直接改造した物でしたから初期化は必要無かったのですが「グルゼオン」の場合はコアを移し替えましたから最適化だけでなく初期化も行う必要があるんですよ…

まあ、そうなるだろうと思って特性のソフトを用意してますから予定より早く終わるんですけどね…

〈クロエ Side out〉

くラウラ Side

姉上は私の第5世代の調整をあつと言う間に終わらせてしまった…正直、横で見ている私は姉上が何をしていたのか全く分からなかった

クロエ

「後はコアが馴染むのを待つだけです。」

ラウラ

「どの程度で終わりますか？」

クロエ

「そうですね…今日中には終わると思いますよ?」

私の質問に姉上は少し考えた後、答えてくれた

今日1日…たった1日で終わるのか…

ラウラ

「姉上…私のI Sの事…本当にありがとうございます!!大切にに使わせて貰います!!」

クロエ

「そう言って貰えると造った甲斐がありましたよ。ただ申し訳ないんですが…」

ラウラ

「はい？」

クロエ

「実はコレ…まだ『未完成』なんですよ…」

ラウラ

「……………え？」

今、姉上は何て言った？

ラウラ

「コ、コレが…未完成!？」

クロエ

「未完成と言っても機体本体は完成しています。」

ラウラ

「へ？」

あく良かった…機体の方は出来上がっていたのか…

これ以上性能が上がるようなら私では使いこなせるか分からなかったからな…

しかし…

ラウラ

「では未完成と言うのは？」

クロエ

「武装です。これに搭載する装備の1つがある理由で完成してないんです。今は束様がその研究をしていますから完成次第「グルゼオン」にも搭載する予定なんですよ。」

「そう言う事か…」

「本体は完成していても武装が全て揃っていない…だから未完成と言ったのか…」

「私からすればすでに完成された物にしか見えないんだがな…」

クロエ

「未完成の物を持って来て申し訳ないのですが急いで渡した方がいいと思いつてきました。本当にすみません…」

ラウラ

「あ、謝らないで下さい!!これ程の物を頂かる私の方が謝らないといけない程です!!」

クロエ

「そう言つて貰えると気が楽になりますね…さて、これで私が出来た事は終わりました。私はそろそろ戻ります。」

ラウラ

「…そうですか…」

「折角和解出来たのだからもつと話をしたかったのだが仕方ないか…」

姉上は今、この基地に不法侵入している形になっている…これ以上長居しては見つかる可能性があるか…

クロエ

「時々IS学園に行きます。あそこなら気兼ねせず会えますよ。」

ラウラ

「!?…ハ、ハイ!!!」

そうだ！IS学園なら何のしがらみも無く姉上与話せるんだ!!

学生になってこんなに嬉しいと思ったのは初めてだ!!!

クロエ

「では私はこれで…おや?分身が敗れたようですね…丁度いいタイミングですね

…」

ラウラ

「え!?!」

【裂空丸】の分身が倒された?つまりクラリッサ達が勝つたのか…

姉上はクラリッサ達の戦況を言うとそのまま【裂空丸】に乗り込んだ

クロエ

「ラウラ…無理はしないで下さいね?」

ラウラ

「うっ……き、気を付けます……」

姉上は最後に私に忠告をする……

クロエ

「では……」

ブウウウウウウウン……

ラウラ

「!？」

【裂空丸】の姿が消えた

そして、一度だけ風が巻き起こったがアレは【裂空丸】が飛び立った時のものだったのだろう……

ラウラ

「……………」

私は暫くその場に立ち尽くしていた

アレはもしかしたら幻だったのかと思ったが私の横には姉上が託してくれた【ファントム・グルゼオン】が確かにある

だからあれは……夢でも幻でも無いんだ!!!

く
ら
う
ら

S
i
d
e

o
u
t

く

第139話：騒動後の大混乱

く라우ラ Sideく

クラリツサ

「隊長!」

ラウラ

「ん?」

姉上が帰って暫くするとクラリツサ達【黒兎隊】が帰投した

ラウラ

「戻ったか…鳥は撃退したそうだな?」

クラリツサ

「あ、はい…それは倒せたんですが…その、妙な相手でした…」

それからクラリツサは戦いの顛末を説明してくれた

【裂空丸】の分身には手こずったそうだが全員で連携して倒す事には成功したそうだが、何故か墜落せずに霧散してしまったらしい

そう言えば分身体はエネルギーを固定して作り出したものだから倒されれば
そうなるか：

クラリツサ

「それで隊長？何故隊長はこんな所にいるんですか？」

ラウラ

「え？」

クラリツサ

「隊長はISの整備の為に残ったんですよね？それが何故アリーナにいるんですか？」

あ…：そうだった…

何も知らないクラリツサ達からすれば私がココにいるのは不自然だった

クラリツサ

「それに「レーゲン」を出しっぱなしにしていますけど…見た所整備が済んでいるようには
見えませんが？」

うゝむ…：クラリツサ達からの疑いの目が更に強くなってきたな…

まあ、初めから隠しておける事でも無いし先に話してしまうか…

ラウラ

「クラリツサ…：以前私の姉が見つかった事を話したのを覚えているか？」

クラリツサ

「……え？……はい……覚えてます……私達が生まれるより前に軍が廃棄処分したと言う方の事ですよ？腹の立つ話です!!」

クラリツサのその言葉に他の隊員達も頷いていた

そうだよな……もしかしたら自分達もそうになっていたかもしれないんだからな……そう思うと他人事には感じられないよな……

ラウラ

「実はな……その姉上が今さっきまでココにいたんだ。」

黒兎隊

「………はい?」

ラウラ

「それとお前達が迎撃したあの鳥も私1人がこの基地に残る為に姉上が仕向けた物だ。」

黒兎隊

「………は?」

私から聞かされた話に全員の目が点になっていた

恐らく私が何を言ってるのか理解が追いつかないんだろうな

クラリツサ

「ちよ、ちよつと待つて下さい!?!隊長の話が本当なのだとしたら何故その人はそんな事をしたんですか!?!隊長に会いに来るだけなら何故私達を遠ざけたんですか!?!」

ラウラ

「理由は二つある…一つは姉上はこの国を心底嫌っている…だから私以外の人間には会いたくなかったそうだ…例え相手が同じ生まれをしたお前達でもだ…」

黒兎隊

「……………」

姉上の身の上を知ればクラリツサ達も何も言えない…篠ノ之博士が拾わなければ姉上も他の姉妹同様死んでいたんだから…

ラウラ

「もう一つの理由だが……………コイツを私に渡す為だ!!」

黒兎隊

「え?」

カツ!!

黒兎隊

「!?!」

私は姉上から託された第5世代…「ファントム・グルゼオン」を展開した

クラリツサ

「コ、コレは…まさか!？」

ラウラ

「コイツの名は『ファントム・グルゼオン』…姉上が私用に開発した『第5世代』だ!!」
黒兎隊

「第5世代!？」

ラウラ

「【イグニッションプラン】での顛末を知って私を心配した姉上が届けてくれたんだ。コイツを渡す為の時間を稼ぐ意味もあつて困を仕向けたんだ。」

黒兎隊

「……………」

姉上が来た事以上に驚いてるな…

まあ、仕方ないか…現状では第5世代は2体しか確認されていないんだ…

それも国家が所有しているのはイギリスの「ハルファス・ベーゼ」の1体だけ…

その第5世代が自分達の目の前に現れたんだからな…

さて、この機体の事を司令達にどう説明するかな…やはり正直に話すしかないか…

……………

…

…

司令官

「ではこれよりボーデヴィツヒと【黒兎隊】の模擬戦を始める!!」

ラウラ

「……………」

どうしてこうなった…

いや、こうなるかとは思ってはいたんだが…

えっと確か…あの後指令室に戻って…鳥の正体が姉上のISだった事と姉上から託された第5世代の事を話したんだよな…

私の話が終わると司令はすぐに政府や軍上層部にこの事を報告すると上の連中が飛んできたんだよな…

それで詰め寄られたから姉上に言われた事を全部話したんだが…姉上の言った通り【ファントム・グルゼオン】の解析は出来なかったんだよな…オマケにばらそうとしたらすぐに修復されるんだからな…まさか姉上の言った通りの行動を取るとは思わなかったが技術者連中は相当悔しがってたな…

念の為、姉上から忠告された【ファントム・グルゼオン】を使つての国際外交は止め

ておくように話しておいたが、それを聞いた途端役人連中が苦い顔をしてたな…多分やる気だったんだろうな…

それで解析も分解も外交も出来ないと知ってせめて性能を知りたいと言って来たんだが、コアが馴染むまで動かせないと説明したら…次の日にこうなった訳だ…

うん…こうなるのは当然だな…

ハア…

クラリツサ

「隊長!!手加減は無用です!!!」

ラウラ

「私を誰だと思ってる!!お前達【黒兎隊】の隊長だ!!!」

バサツ!!

そうやって私は「ファントム・グルゼオン」の翼を広げた

その姿を見て…

クラリツサ

「……………死神……………」

クラリツサはそう呟いた

確かにこの機体…外見が死神みたいに見えるからな…おまけに獲物も【ヘルサイス】

と言う大鎌だしな

ラウラ

「さあ…行くぞ!!!」

私は「ヘルサイス」を構え、クラリツサ達に向かって行った…

＼ Side out 〵

第140話：死神の猛威【ファントム・グルゼオンVS黒兎隊】

～三人称 Side～

ガキイイインツ!!

クラリツサ

「グウツ!?!」

試合が始まると同時にラウラは先頭にいるクラリツサに向かって「ヘルサイス」で斬りかかった

クラリツサの方もブレードで受け止めたのだが…
クラリツサ

（何てパワーだ!?!受け止めただけでココまでの衝撃が来るなんて!?!コレが噂の第5世代の力なのか!?!）

たった一撃で「ファントム・グルゼオン」が従来のISとは一線を画す機体であると理解した

一方のラウラは…

ラウラ

(凄い!?これが「ファントム・グルゼオン」の力なのか!?コレで未完成の武装も実装したらどうなるんだ!?)

ラウラ自身も「ファントム・グルゼオン」のその圧倒的な性能に驚いていた

ラウラ

(これ程の強さ…セシリアや本音を見て分かっていたつもりだったが認識が甘かった…コレは今までのISとは次元が違う…だが、姉上が託してくれたこの力…使いこなしてみせる!!!)

気合を入れ直すと「ファントム・グルゼオン」を使いこなす為の戦いを再開した

……

……

……

ドガアン!ドガアン!ドガアン!

黒兎隊

「ハア…ハア…」

模擬戦が始まってからまだ10分ほどしか経過していないが【黒兎隊】はすでに半数がリタイアしており、残ったメンバーもクラリツサを始めとして肩で息をするほど疲弊

ラウラ

「…発射!!」

ドギユウンツッ!ドギユウンツッ!ドギユウンツッ!

クラリツッサ

「クツ!?!」

この状態の時は翼に内蔵されている6門のビーム砲による砲撃も可能となっていたつまり、「フアントム・グルゼオン」には未だどの国も開発に成功していない『ビーム兵器』も搭載されていたのだ

尤も同じビーム兵器ならセシリアの「ハルファス・ベーゼ」にもあるので造った束やクロエからすればさほど珍しい物でも無かったりする

それはさておき…

ラウラ

「そろそろ終わらせるぞ!!」

黒兎隊

「!?!」

ラウラはこの模擬戦を終わらせる事にした

ラウラがそう言った瞬間…

ブウン…

黒兎隊

「消えた!?!」

目の前にいた筈の「ファントム・グルゼオン」が忽然と姿を消した
しかも…

クラリツサ

「ど、何処だ!?!隊長は何処に消えた!?!」

隊員

「だ、駄目です!?!レーダーにもセンサーにも何の反応もありません!?!」

クラリツサ

「何だと!?!まさか『ステルス機能』まであるのか!?!」

肉眼で見つける事はおろかI Sのあらゆるセンサー類でも感知する事が出来なかつた

これこそが「幻ファントム」の名を持つ由来…超高性能のステルス機能であった…
そして、ラウラが姿を消すと…

ズシャツ!!

隊員

「ガハッ!？」

クラリツサ

「!？」

自分達の後ろから聞こえた声に全員が振り返った

するとそこには一番後ろにいた隊員を「ヘルサイス」で斬り裂いたラウラがいた

当然の事だが斬られた隊員はSEが0になってリタイアとなった

……

……

……

その後……

アナウンス

『し、試合終了……勝者……ラウラ・ボーデヴィツヒ……』

クラリツサ達はラウラを捉える事が出来ずあつと言う間に全滅させられてしまった

この日からラウラは与えられた「ファントム・グルゼオン」を使いこなす為の訓練を

始めるのだった

一方でドイツ上層部は第5世代の「ファントム・グルゼオン」の性能に歓喜するがラ

ウラに言われた事を思い出すと仕方なく自重する事にしたのだった

尚、ラウラが以前使っていた「シユヴァルツエア・レーゲン」はそのままにするのもつたらないので新しいコアを搭載し、副隊長のクラリツサの乗機となつたのだつた

く三人称 Side out く

第141話：淑女の亡命

く一夏 Side

クロエさんがラウラに新型を届けに行ってから10日が経った

ドイツから戻ったクロエさんから師匠の用意していたサプライズプレゼントの事を聞いた時は本当に驚いた…まさかラウラのと合わせて【剣刃^{つるぎ}】を仕込んでいたなんてな

：

でも師匠とクロエさんのお陰でラウラは無事に持ち直したらしいから本当に良かった

千冬姉もそれを聞いて安心してI S 学園に戻って行ったんだけど…

千冬

『…あの馬鹿…人が目を放した際にサボりおつて…説教フルコースの刑だ…』

なんか物騒な事を呟いてたんだよな…箒の奴…大丈夫かな…

で、俺はと言うと修行を中断してある場所に来ていた

そこである人物と待ち合わせをしているんだ

その相手は…

シャルロット

「一夏く♪」

鈴

「あ！いたいた！」

鈴とシャルの二人だ

シャルロット

「待たせたかな？」

一夏

「そんなに待つてねえよ。」

鈴

「それならいいわ。じゃあ早速行きましょ。」

一夏

「そうだな…でもその前に…シャル…本当にいいんだな？」

俺がそう聞くと…

シャルロット

「うん!!お父さんとは…お別れをしてきたよ!!頑張れつて…言ってくれた!!」

ハッキリとそう言った

一夏

「そうか…：なら何も言う事は無いよ…：行こうぜ。」

そして俺達は集合場所になっていたビルへと入って行った

そう、ココは以前シャルの亡命の手続きをしてくれたイリスさんのいる事務所のビルだった

親父さんとの最期の会話をしたシャルが日本に戻って来ると連絡を受けた俺は師匠に事情を話して修行をいったん中断させて貰った

これまで付き合ったから最後まで付き合いたいと頼んだら師匠の方もそれならいいと言ってくれたから俺はココに来ていた

それから何故鈴もいるのかと言うと偶然シャルと空港で会って一緒に来たらしいまあ、鈴もシャルの事情はある程度知ってるみたいだからいいだろう

一夏 Side out

鈴 Side

イリス

「お久しぶりですお嬢様。」

シャルロット

「あ、ハイ!!」

事務所に入った私達を出迎えてくれたこの人がシャルロットの亡命の手続きをして
くれていたイリスさんか…

イリス

「それと…織斑一夏さんに…貴方は?」

鈴

「凰鈴音と言います。中国の代表候補生ですが今回はシャルロットの友人として付き添
いで来ました。」

イリス

「そうですか…織斑さんと同じくお嬢様を心配して下さいありがとうございます!」

鈴

「ハイ♪」

この人…普通に良い人みたいね…

………

………

………

それからイリスさんはシャルロットの亡命の為の書類を持って来てくれた
渡された書類をシャルロットは全部確認し始めた

夏休みの前に一度目を通したそうだけどこう言うのは時間を開けたらもう一度見て
おく方がいいのよね

シャルロット

「ハイ…全て大丈夫です。」

イリス

「ではサインをお願いします。」

シャルロット

「…ハイ…」

確認を終えたシャルロットは書類にサインをした

これで…

イリス

「ありがとうございます。これで全ての手続きが終了しました。」

シャルロットの亡命は成立した

もうデュノア社も手が出せなくなった訳だけど…

シャルロット

「……………」

やっぱり複雑な気持ちみたいね…

イリス

「…では、こちらが用意したお嬢様の新しい戸籍になります。ココに書かれた住所が今後のお住まいになります。奥様のお墓もこの町に移してあります。」

シャルロット

「…分かりました…」

新しい住所か…一体何処だろ？

って…

鈴

「コ、ココは!？」

シャルロット&イリス

「?」

よりもよつてこの町だなんて…

一夏

「どうしたんだよ鈴?」

鈴

「見れば分かるわ！アンタだってよく知る場所よ!!」

一夏

「え?…ゲツ!?!」

住所を見た瞬間、一夏も私と同じ反応をした

シャルロット

「どうしたの2人とも?ココって知ってる町なの?」

一夏

「知ってるも何も…」

鈴

「ココは永遠の住んでる町よ!!!」

シャルロット

「え?…ええええええええええええええええつ!!!」

そう、シャルロットの新しい住まいは火紋島がある町なのよ!?

イリス

「あの…永遠と言うのはもしかしてもう1人の男性操縦者の…」

鈴

「そうです…火ノ兄永遠の事です!!」

イリス

「彼はこの町に住んでたんですか!？」

この反応…どうやら知らなかったみたいね…

考えても見れば亡命の手続きなんてすぐには出来ない…それこそ何か月も前から準備をしないといけない…

永遠が世間に出て来たのはあのタッグ戦の時…それより前の情報は束さんが規制していたからこの人が知る筈無い…

という事は…

鈴

「ただの偶然?！」

一夏

「そうなんですか!？」

イリス

「ハ、ハイ!! 勿論です!! 彼の居場所を私達が知る筈ありません!! この町を選んだのは本当に偶然なんです!!」

イリスさんは必死に弁明していた…本当に偶然が重なった結果みたいね…

でも…

鈴

「イリスさん…永遠の居場所を本社に伝えるんですか？」

一夏&シャルロット

「!?」

私の言葉に一夏とシャルロットが目を見開いた

そう、コレで永遠の住んでる場所がデユノア社に知られた事になるからだ

そう思ったんだけど…

イリス

「ご安心下さい。本社にこの事を報告するつもりはありません。」

一夏&鈴&シャルロット

「え？」

断言した…何で？

イリス

「お嬢様の手続きが終了すると同時にこの支部を活動を停止します。私達もデユノア社を退職する手筈となっています。」

一夏&鈴&シャルロット

「なっ!?!」

とんでもない事を言つて来た!?
鈴 Side out

第142話：父の真実

「シャルロット Side」

シャルロット

「会社を辞めるって…もしかして僕のせいですか!？」

「僕の亡命と同時に会社を辞めると言うイリスさんに原因は僕自身にあると思ったけど…」

イリス

「それは違います。」

シャルロット

「え?」

イリス

「元々私を含めたこの支部の社員は今の会社に不満を持っているんです。」

シャルロット

「不満?」

イリスさんはハッキリと否定すると理由を話し始めた

イリス

「社長が会社を率いていた頃は不満も無くともやりがいがあったんです…ですが…」

そこまで言えば次に何を言おうとしているのか想像出来てしまった

イリス

「あの女が現れたせいでデュノア社は変わってしまいました…奴に反抗した者は全員クビにされ、真面目な職に就く事すら出来なくされてしまいました…」

シャルロット

「……………」

イリス

「そんな社員を1人でも救おうと社長は不満を持つ者を『左遷』と言う形で逃がしてくれていたんです。クビにされて路頭に迷うよりは最低限の収入が得られる分マシだと言つて…確かにその通りでした…」

シャルロット

「お父さん…」

そんな事までしてたんだ…

子供の僕だけでなく…社員の皆も…守つて来たんだ…

イリス

「その左遷先の1つがこの支部です。ココに集まった我々は社長に多大な恩義を感じています。そんな社長から秘密裏に連絡を受けた私達はお嬢様を逃がす為の準備を進めていました。」

シャルロット

「……………」

イリス

「それが終わると同時に私達は証拠隠滅も兼ねて退社する事になっています。退社後の再就職先は既に社長が手配してくれているので何も問題はありません。」

シャルロット

「…イリスさん…」

イリス

「社長の下で働けなくなるのは残念ですが私達が恩を感じているのは社長個人であつて会社ではありません。ですから今の会社を辞められて清々しています。ですからお嬢様が気に病む必要は無いのです。私達は自分の意思で辞めるんです。」

シャルロット

「そう…ですか…」

イリスさん達が今日までデュノア社に残っていてくれたのは全部お父さんのお陰だったんだ

でも、それも限界が来てしまったのか…

シャルロット

「イリスさん…今までお父さんの為…会社の為に頑張ってくれて…本当に…ありがとう
ございます!!」

僕にはこんな事しか出来ない…

お礼を言うしか出来なかった…

イリス

「…その言葉だけでこれまでの苦勞が報われます…」

シャルロット

「……………」

イリス

「お嬢様…これから一人で生きて行くのは大変でしょうが負けないで下さい。社長は…
お父上は何時でも貴方の事を想っている事を忘れないで下さい。」

シャルロット

「ハイ!!!」

イリスさんからの激励に僕はいつの間にか涙を流していた…

……

……

…

シャルロット

「それじゃあイリスさん…」

イリス

「ハイ…お元気で…」

シャルロット

「お世話になりました。」

僕達はイリスさんに見送られて事務所を後にした…

その途中で…

鈴

「それでどうするの?」

シャルロット

「え?」

鈴が話しかけて来た

鈴

「今からアンタの新しい家に行くのかって事。」

シャルロット

「あ…」

そうだった…そこが僕の新しい家になるんだよね…

まだ実感が沸いてないから思い付かなかった…

シャルロット

「うん…このまま行くよ…」

一夏

「じゃあ俺も一緒に行くぜ。師匠の所に戻るから目的地は一緒だからな。」

鈴

「私も永遠に挨拶するつもりだから一緒に行くわ。」

シャルロット

「うん、ありがとう。」

こうして僕の第2の人生が始まった…

お父さん…僕は頑張ります!!!

シャルロット Side out

第143話：引つ越し挨拶

シヤルロット Side

一夏

「師匠!!ただいま戻りました!!」

永遠

「いい加減その呼び方は止めいと言うところが!! たく…鈴、デユノア、久しいのお。」

鈴

「ええ、久しぶり♪」

シヤルロット

「う、うん…」

僕は今、一夏と鈴の案内で火ノ兄君の暮らしている島に来ている

僕の新しい住まいとお母さんのお墓に行った後、一夏がどうせならって事で僕をこの島に連れて来てくれた

一夏は夏休みの間は火ノ兄君の家に住み込みで弟子入りしているらしく、折角だからと連れて来てくれたんだ

この島は織斑先生が言うには火ノ兄君の所有地だから本人の許可が無いと入れないんだけどそこは一夏と鈴が事情を説明してくれたお陰で火ノ兄君もアツサリ許可してくれた

でも…

本音

「シャルルン元気してた〜♪」

シャルロット

「う、うん…元気だよ…」

まさか簪と本音もいたなんて…

しかも…

束

「リーちゃん久しぶりだね〜♪」

鈴

「お久しぶりです♪」

まさか篠ノ之博士もいるだなんて…

確かに博士が火ノ兄君の家にいた事は聞いていたけど「ワイバーン・ガイア」の一件で出て行っちゃって織斑先生は言ってたのに…本当は残ってたんだ…

東

「それと…君がシャルロット・デュノアだね？」

シャルロット

「ハ、ハイ!!こ、この度、この町で暮らす事になりました!!よろしくお願いします!!!」

東

「その挨拶は東さんじゃなくてとーくんに言うべきでしょ？」

シャルロット

「そ、そうでした!?!」

博士の言う通りだった…

では改めて…

シャルロット

「火ノ兄君、ご近所…て距離じゃないけどこの町で暮らす事になったんだ。よろしくお

願いします。」

永遠

「ウム、よろしゅうな。」

よかつた…火ノ兄君も受け入れてくれた…

………

……

…

簪

「…でも驚いた…まさかシャルロットの引越し先がこの町だったなんて…」

シャルロット

「驚いたのは僕も同じだよ。ココが火ノ兄君の住んでる場所だったなんて思ってもみなかったよ。」

鈴

「そうよね…偶然ってホント怖いわよね…」

それから僕達は他愛無い話を始めた

とは言っても大半が僕の引越し先に関する事だけ…

ちなみにココにいるのは女性陣だけで火ノ兄君は畑仕事、一夏は修行に向かった

後で一夏がどんな修行をしているのか見せて貰おう

火ノ兄君考察らしいからどんなものか気になるんだよね

僕がそんな事を考えながら話していると…

束

「そう言えばリーちゃんは何時までココにいるの？」

鈴

「私ですか？ん〜…」

博士が鈴の今後を聞いて来た

確かにこの中で鈴だけが予定が決まって無いんだよね

鈴

「国にはもう報告に戻ったし…（ヤバ！戻って来るのが早すぎたわ！考えて見るとこつちに戻っても行く場所ってココか学園、後は弾達の店くらいしか無かったわね…でも学園にはまだ箒がいるだろうし…正直アイツとはあんまり関わりたくないのよね…かと言つて弾の店に入り浸る訳にもいかないし…となると…」

なんか凄いい悩んでる

鈴が悩んでいると…

束

「それなら夏休みの残りはココにいない？」

全員

「え？」

博士がそんな事を提案して来た

でも…

東

「リーちゃんはココに泊った事もあるし、いっくんやかんちゃん達もいるから退屈しないですよ?」

鈴

「それはそうですけど…」

家主の火ノ兄君の許可も取らずに決めちゃっていいのかな?

東

「それにさく…」

鈴

「ハイ?」

東

「リーちゃんも箒ちゃんとは会うの嫌でしょ?」

鈴

「いっ!?」

博士の一言に鈴は目を見開いた

もしかして凶星なの?

東

「別に隠さなくてもいいよ。今の箒ちゃんも東さんも会うのが抵抗があるくらいだからね。何であんなに歪んじゃったのかな〜…」

後半は愚痴になってる…

鈴

「実のお姉さんの東さんがそこまで言う程ですか…」

東

「うん…少し前までちーちゃんがいたんだけど…そのちーちゃんもあれは矯正させるのは無理だって言ってたからね…」

鈴

「千冬さんまで…」

篠ノ之さん…実のお姉さんや織斑先生からもサジを投げられたんだ…

でも、確かに【戦国龍皇】を盗んだ件とか臨海学校の時とか誰がどう見ても酷いとか言いようがなかったもんな…

東

「それでどうする？学園に行くって言うなら無理に引き留めないけど？」

鈴

「いえ、ココでお世話になります。」

鈴はアツサリとココで過ごす事を決めてしまった

確かに今学園に戻ってもストレスが溜まるだけだろうからなく…

束

「じゃあ後でとーくんに言っとくね。」

鈴

「ハイ!!!」

鈴も夏休みの間はココにいるのか…

束

「いや〜…丁度良かったよ♪」

鈴

「へ?」

束

「コレで新型のテスターが2人になった!!!」

鈴&シャルロット

「…ハイ?」

…テスターって…何?

〜シャルロット Side out〜

第144話：兎に睨まれた龍

（鈴 Side）

鈴

「テスター？何のですか？」

私が夏休みの残りをココで過ごす事に決めると東さんは大喜びしながらそんな事を言っただけ

東

「実はね？今かんちゃんのをISを第5世代に改造してる真つ最中なんだよ。」

鈴&シャルロット

「へ？」

すると東さんは更にとんでもない事を口にした

1カ月前にセシリアの「ブルー・テイアーズ」を「ハルファス・ベーゼ」に改造したばかりなのに今度は簪の「打鉄式」に取り掛かっているの!?

いくらなんでも開発スピードが早すぎるでしょ!?

シャルロット

「いいんですかそんな事して!？」

束

「だ〜いじよ〜V!!日本政府にも連絡済みだよ♪イギリスと同じ条件でいいってさ♪」
そりやいいでしょうよ…だつて国にはメリットしかない条件なんだから

…あれ？

鈴

「あの…さつき言つてた『テスター』つて…」

嫌な予感がしてきた

束

「いや〜…実はね?これまでのデータから第5世代つて誰でも扱える機体じゃ無いって分かつたんだよ。」

鈴&シャルロット

「……………」

束

「最低でも代表候補生になるくらいの実力と経験が必要なんだ〜…それも専用機が与えられるくらいのさ〜…」

鈴&シャルロット

「……………」

東

「1号機の「ワイバーン・ガイア」を使ってるのんちゃん候補生じゃないけど候補生並みの実力が元からあったから問題無いんだよね〜…」

本音は例外として…専用機が与えられた代表候補生…

それってつまり…

東

「それでさ〜…丁度東さんの目の前に条件を全部満たしてる子がいるんだよね〜♪」

私かあああああああああああつ!!!

東

「リーちゃん！君の【甲龍】シエンロンを東さんに預けてくれない？」

鈴

「ちよ、ちよつと待って下さい!!いきなりそんな事言われても!?!」

シャルロット

「アレ？セシリアのISが改造されてるって知った時『羨ましい』って言ってなかった

？」

鈴

「あ!？」

そう言えば…確かにそんな事言ってたわ!?

東

「そっか…ならいいよね？」

鈴

「うぐつ!？」

これは…もう断れない…

鈴

「…ハイ…ですが先に政府に確認を取らせて下さい…」

大人しく観念するしかない…

東

「それは当然だよ! まあ今までと同じで二つ返事でOKするだろうけどね♪」

鈴

「ですよね…」

その時の返事が手に取る様に分かる…

東

「んじゃ！早速連絡しよつか!!」

鈴

「…ハイ…」

観念した私は中国政府に連絡を入れた

向こうは案の定大喜びしながら二つ返事で了承してくれた

こうして私の「甲龍」^{シエンロン}も第5世代に改造…いや、魔改造される事になった

ちなみに亡命したとはいえ元は私と同じ専用機を与えられた代表候補生のシヤル
ロツトも東さんのテストターになってしまった

一体…私のISはどんな姿になるんだろうか…

く鈴 Side outく

第145話：暴露④

（永遠 Side）

夏休みの間、鈴が家に滞在する事になって数日が経過した

束さんが鈴とデユノアを新型のテスターに引き込んだのは驚いたが、あの人ならやりそうじゃからな…

ちなみにデユノア改めシャルロットもテスターと言う事でよく家に來とる

その鈴とシャルロットは簪と一緒に「打鉄式式」の魔改造機の開発を手伝っておる
簪のが完成すれば次は鈴の「甲龍」^{シエロウ}に取り掛かるそうじゃ

その後でシャルロットのを造るらしい

ただ、シャルロットの場合は専用機を国に返して來たそうじゃから「ワイバーン・ガイア」と同じで一から造る事になるがの

そんなある日…「打鉄式式」の新型完成まであと少しと言う時に…

束

「ね〜ね〜と〜くん。」

永遠

「ん〜？」

東さんが話しかけて来た

永遠

「何かの？」

東

「とーくんの秘密…いっくんとシャーちゃんに言っちゃダメ？」

永遠

「は？」

全員

「…え？」

行き成りとんでもない事を言いだしおった

簪

「た、たたた、東さん!？」

鈴

「行き成り何言いだすんですか!？」

一夏

「…師匠の秘密？」

シャルロット

「やっぱりあるんだ？」

本音

「シャルルン気付いてたの〜？」

シャルロット

「いや、気づいたって言うか普通はそう考えるでしょ？【戦国龍皇】：【ドットブラスライザー】：【ラインバレル】：あんなとんでもない性能のISを3機も持つてる上に生身でISを倒すような人だよ？何か秘密があるって思うけど？」

全員

「あ〜…」

ぬ〜…言われてみるとそうじゃな…

入学の時に【ドットブラスライザー】だけを持ってっておればよかった…そうすりゃあの篠ノ之にも目を付けられんかったろうしなあ…

ミスってしもうたか…

まあ、今更後悔しても遅い事じゃし…

さて…

一夏&シャルロット

「……………」

果たしてこやつらに話していいのか…

何か織斑は期待しとるみたいじゃが…口が軽そうで不安なんじゃよな…

鈴

「東さん…シャルロットはともかく一夏は止めた方がいいと思います…」

一夏

「何で!?!」

鈴

「アンタ口軽そうだから。」

簪&本音&クロエ

「うんうん!!」

一夏

「ガアアアアアアンツ!!!」

他のもんも同じ考えじゃったか…

こやつの場合、うっかり口を滑らせそうで怖いんじやよな…

東

「う〜ん…：そう言われるとそんな気もするな〜…」

一夏

「そんな〜：師匠〜…」

永遠

「気色悪い声を出すな!! 仕方が無い…：話すか…」

全員

「ええっ!?!」

簪

「いいの本当に!?!」

永遠

「言わんとしつこそうじゃからな…：織斑、シャルロット、主等を信じてワシの秘密を話してやるが誰にも他言してはならんぞ!!」

一夏

「ハイ!!!」

シャルロット

「も、勿論だよ!!!」

不安は尽きんがこやつらにワシの事を話す事にした

第146話：規格外

（鈴 Side）

一夏

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

シャルロット

「い、痛い……」

永遠の正体を知った二人は今までの私達を同じで大笑いしたせいで永遠から特大の拳骨を喰らった

特に爆笑していた一夏はシャルロット以上に強烈なのを喰らったせいでのたうち回ってた……音からして違ってたもんね……

もはやお約束の光景になってるわ……

ちなみに私達はこうなるのが分かっていたから予め耳栓をして話を聞かなかった……あの時、東さん達が耳栓をしていた気持ちが良い分かったわ……

一度喰らったから分かるけど永遠の拳骨って体の芯にまで響くから本当に痛いものよ

ね…流石にアレをもう一発喰らう気にはなれないわ…

それから暫くして一夏とシャルロットは頭の痛みが引いたのか復活した

一夏

「ぐうううっ…マジで痛い…」

シャルロット

「まだ痛むよ…」

鈴

「永遠の話聞いた人の通例みたいなものだから我慢するのね。」

全員

「うんうん!!」

皆頷いてる…

確か…クロエさん以外は全員喰らったのよね？

永遠

「濃の拳骨喰らいとう無かったら笑うのを我慢すればよかるう？」

いや、それはそうだけど…

一夏

「あんな話聞いて笑うなって言う方が無理だろ!!」

全員

「うんうん!!」

一夏の言う通りこの話ってツボに入るのよ…

永遠

「む…」

シャルロット

「でも…コレで納得出来たね？」

一夏

「だな…そりや神様が造ったI Sならあの馬鹿気た性能も当然だな。」

永遠

「…幻滅したか？」

一夏

「いや、スッキリしただけっすよ!」

シャルロット

「うん、それにこう言ったら何だけど…火ノ兄君が最初に要求した特典ってどれも大したものじゃないと思うし…」

それは私も思ってたわね…

永遠の貰った特典は『健康な身体』『少しいい頭』『自活出来る土地』の3つ…
生活する上で必要なものばかりだもん…

IS 関連で役に立つものを1つも要求してなかったからね…

永遠

「まあのお…じゃからあのポケ神は追加特典を出すとかない出しおったからな…」

一夏

「それで師匠が頼んだのがあの3機と【飛天御剣流】か…まさか全部アニメやゲームに出てくるキャラや技だったなんてな…」

シャルロット

「そうだね…」

一夏

「…けどさ…」

全員

「ん？」

一夏

「ISや【飛天御剣流】の正体には驚いたけど…改めて師匠が『規格外』って分かったよ。」

永遠

「なぬ？」

どう言う事？

確かにコイツは規格外だけどさ

一夏

「ほら…：師匠の特典つて別に身体能力が上がるとかそう言ったのつて無いだろ？」

簪

「そうだね。」

一夏

「て事はさ？師匠は『自力』で【飛天御剣流】を覚えたつて事だろ？」

全員（永遠以外）

「…あ!？」

一夏

「いくら秘伝書みたいなものがあつても普通は漫画の技を実際にマスターするなんて出来ないだろ？」

全員（永遠以外）

「確かに!!!」

一夏の言う通りだわ

あんなとんでもない剣術を覚えろって言う方が無茶なのよ

そう考えるとそれを習得した永遠は一夏の言う通り『規格外』な奴って事になるわね

永遠

「ぬく…何かワシを人外みたいに言うたらんか？」

全員

「今更？」

永遠

「オイ!!!」

アンタが人外じゃ無かったら何だって言うのよ!!!

く鈴 Side outく

第147話：降臨!打鉄天魔!!

〔簪 Side〕

永遠が自分の正体を話したお陰なのかあの日から私達の親密度は上がったと思う
その証拠に私や永遠は織斑一夏とは互いに名前で呼ぶようになった

それから数日後…

束

「それじゃあかんちゃん!準備はいいい?」

簪

「ハイ!!!」

遂に私の新型が完成した

後は実際に稼働させて動作テストを行うだけ

簪

「…行くよ…」【打鉄天魔】!!!

カッ!!!

私は待機状態の新しい【打鉄】の名前を呼んだ

それは白い戦国武将の鎧の様な姿のIS：

背中には三日月の様な曲刀を2本、光輪のようにして装備されている：

コレが完成した私の第5世代：【打鉄天魔】!!!

本音

「ふわ〜…コレがかんちゃんの新型か〜…」

シャルロット

「強そうだね〜…」

皆も【天魔】に驚いている

コレを完成させるまでにプロトタイプとして酷使した【紅椿】はボロボロになっ

ちやつたけど…ありがとう【紅椿】：貴方のお陰で【天魔】は無事に完成したよ

永遠

「では早速模擬戦で実戦テストと行こうかの？」

簪

「うん!!!」

私も【天魔】の力を早く試してみたい!!

鈴

「それで誰が相手するの?」

永遠

「フム…じゃったら一夏、頼めるかの?」

一夏

「俺!?!」

永遠が指名したのは一夏か…

一夏

「イヤイヤ!!俺はまだ修行中でとても第5世代の相手なんて出来ねえよ!」

永遠

「んな事は分かっつとるわい。その途中経過を見る意味も込めて簪の相手をせいと言ってるんじゃ。」

一夏

「…え?」

永遠

「お主が簪に勝てん事くらい誰もが分かっつとる。じゃが、薪割りばかりしとると戦いの勘が鈍る可能性がある。じゃから時々はこう言った事をした方がいいと言っとるんじゃ。」

一夏

「な、なるほど!？」

それで一夏に相手をしろって言ったのか…

永遠

「それにお主に相手をさせるのにはもう一つ理由がある。」

一夏

「もう一つ?」

永遠

「強くなる為の一番良い経験はな?自分よりも強い相手と戦う事じゃよ。」

一夏

「!？」

永遠

「例え負けても格上と一回戦うだけで十分な経験を与えてくれる。逆に格下とは100回連勝しても得るものなんぞ殆ど無い。あるとすれば精々優越感位なもんじゃ。」

一夏

「……………」

永遠

「尤もコレは一面でしかない。負けるのがどうしても嫌だと言われればワシも何も言えんが…」「そんなの決まってるぜ!!」む?」

一夏

「師匠!!俺は自分より弱い奴に勝って威張る位なら負けた方がマシだ!!負けてそこから立ち上がる!!それが俺を更に強くしてくれる筈だ!!」

永遠の言葉を遮って一夏は迷いなくそう答えた

永遠

「ウム!!よう言うた!!!」

こうして私の相手は一夏に決まった

く 簪 Side out く

第148話：武器封じ！六天連鎖（ラツシユ）！！【打鉄天 魔VS白式・雪羅】

（三人称 Side）

完成した簪の【打鉄天魔】の実戦テストの為。一夏を相手に模擬戦をする事になった
一同は研究室を出て島の海岸に来ていた

束

「2人とも準備はOK？」

一夏

「オウ!!!」

簪

「ハイ!!!」

2人はISを展開すると一夏は【雪片】を構え、簪は背中にある巨大な曲刀を抜いた
そして…

束

「それじゃあ…始め!!」

ガキイイイインツ!!!

東の合図と共に二人は飛び出し互いの剣がぶつかり合った

だが…

一夏

「グツ…クウツ…」

簪

「……………」

鏢迫り合いをする二人だが開始早々一夏は冷や汗を流していた

一夏

（クソツ!!分かつちやいたがとんでもないパワーだ!?進化した【白式】の力を軽く超えてやがる!?)

剣を合わせた瞬間、一夏は自分との力量差を痛感していた

現に一夏は今も全力で押しているが簪の方は全身装甲の為、表情は分からないがまだまだ余裕のある雰囲気だった

簪

「ハアツ!!」

ガキインツ!!

一夏

「クツ!?!」

簪が力を入れて剣を弾くと一夏は後方に弾き飛ばされた

一夏

「なら!!」

ドン! ドン! ドン!

距離が開いた事で一夏は左腕の【雪羅】で荷電粒子砲を撃つて来た

だが…

簪

「……………」

簪は曲刀を手放すと2本の曲刀はビットのように独立して動き出し簪の目の前で円の形になるように並んだ

バシインツ!!

一夏

「何っ!?!」

一夏の撃った砲撃は2本の曲刀の前で弾き飛ばされた

この曲刀は円の形に並ぶ事によって前面にシールドを張っていたのだ

一夏の攻撃はこのシールドで防がれてしまった

更に…

簪

「ハアツ!!」

曲刀の円の中心に向かって簪は拳を突き出した

すると…

ドギユウウウウンツ!!!

中心から巨大なビームが放たれた

一夏

「!?…【雪羅】!!シールドモード!!」

一夏も【雪羅】のシールドで防ごうとしたが…

バリインツ!!

一夏

「何っ!?」

バゴオオオオオオンツ!!!

一夏

「グアアアアアアアアアアッ!!!」

簪の砲撃は【雪羅】では防ぐ事が出来ずシールドを貫通して一夏は直撃を喰らって再び吹っ飛ばされた

一夏

「グッ…何て威力だ…だったら!!」

体勢を立て直した一夏は【大倶梨伽羅おおくりから】を取り出し、【雪片】と二刀流で構えると…

一夏

「一気に勝負を決める!!!」

【零落白夜】を発動させ瞬イグニッション・ブースト時加速で急接近した

だが…

ガキイイイインツ!!!

簪は曲刀を手に取ると一夏の剣を受け止めた

簪

「…使ったね?」

一夏

「…え?」

簪の眩きに一夏は反応した

しかし…

簪

「ハッ!!」

キーンツ!!

簪は何事もなかったかのように一夏を再び弾き飛ばした

一夏

「チイツ!?!…ん?」

弾き飛ばされた一夏が簪を見ると…

一夏

「何だ? 剣を…仕舞った?」

簪は2本の曲刀を何故か背中に戻していた

その行動の理由が分からず訝しげに見ていた一夏だったが…

簪

「…単一仕様…起動!!」

一夏

「ワンオフ・アビリティ単一仕様だ?!? そうか…第5世代は始めから使えるんだった?!?」

簪の言葉に目を見開いた

まさか簪まで単ワンオフ・アベリテイ一仕様を使えるとは思ってもみななかったのだが、束の開発した第5世代は元から初期段階で単ワンオフ・アベリテイ一仕様を使えるという事を一夏は思い出した

現に本音の「ワイバーン・ガイア」とセシリアの「ハルフアス・ベース」も使えるのだから簪の「打鉄天魔」が使えない道理は無かった

簪

「六天連鎖ラッシュ」…発動!!」

ジャラララララララララツ!!!

【天魔】の単ワンオフ・アベリテイ一仕様が発動すると同時に背中中の曲刀から光の鎖が何本も飛び出し、一夏に向かつて行つた

一夏

「何だよこりゃ!」

一夏は向かつて来る鎖を避けるがどれだけ避けても鎖は一夏を追いかけて行つた

そして…

ジャリン!!

一夏

「しまった!」

3本の鎖が【雪片】【大倶梨伽羅おおくりから】【雪羅】にそれぞれ絡みついた

だが…

一夏

「……………あれ？」

鎖は巻き付くとそのまま消えてしまった

一夏

「消えた？何なんだアレ？」

何も起こらず消えてしまった鎖に一夏は首を傾げた

一夏

「まあいいや！もう一度行くぞ!!【零落白夜】発動!!!」

気を取り直すと一夏は再び【零落白夜】を発動させた

しかし…

……………

一夏

「……………あれ？」

何故か【零落白夜】が発動しなかった

一夏

「……………コホンー…【零落白夜】発動!!!」

咳払いして改めて【零落白夜】を発動させる一夏…
 だが…

.....

【零落白夜】は発動せず【雪片】も何も反応しなかった

一夏

「どうなつてんだ!?!仕方ない!!使えないならこのまま…」

何故か使えなくなつてしまった【零落白夜】を使うのを諦め【雪片】と【大俱梨伽羅】
 で斬りかかろうとした

その時…

ビイイイツ!ビイイイツ!ビイイイツ!

一夏

「え!?!な、何だ!?!」

突然ISから警告音が鳴り響いた

それと同時に一夏の目の前にウィンドウが表示された

それを見て…

一夏

「…『使用…不能』…だと!?!」

【雪片】と【大倶梨伽羅】（おおくりから）が使えないと言うものだった

一夏が手にする2本の刀はその表示が出ると同時に量子変換され消えてしまった

一夏

「何でいきなり…まさか…【雪羅】も!?!」

消えてしまった2本の刀を見て一夏は嫌な予感がすると自分の左腕を見た
すると再びウインドウが現れそこには…

一夏

「…『使用不能』…」

【雪羅】までも使用が出来なくなっていた

一夏

「簪…お前何しやがった!!!」

自分の武装が全て使用出来なくなった一夏はこの一連の出来事が簪の放った光の鎖
が原因だと察し問い詰めた

簪

「…コレが【天魔】（ワソオウ・アヒリテイ）の単一仕様…【六天連鎖】（ラッシュ）の力!!!」

一夏

「【六天…連鎖】?」

簪

「〔六天連鎖〕^{ラッシュ}は〔天魔〕のSEと引き換えに相手が一度でも使用した装備や能力を一時的に『封印』する事が出来る。」

一夏

「封印だど!?!」

【打鉄天魔】^{ワンオフ・アビリテア}の単一仕様…【六天連鎖】^{ラッシュ}

その恐るべき力に一夏は戦慄した

つまり簪を相手にする場合、どんな武器も能力も1回しか使えない事を意味していた
1度使えば〔六天連鎖〕^{ラッシュ}によって封印され最後には今の一夏のように丸腰にされてしま
うからだ

一夏

「…ハ…ハハ…コレが4体目の第5世代かよ…シャレになんねえや…」

丸腰になった一夏はもはや笑うしかなかった

簪

「私もそう思うよ…じゃあ、これで終わりにする。」

ジャキン!!!

一夏

「!?」

一夏の言葉に賛同すると【天魔】の背後に6枚の浮遊ユニットが羽根を広げたように展開された

簪

「…行け…」

簪の合図と同時に6枚の羽根は一夏に向かって飛んで行った

それを見て…

一夏

「コイツは…オルコットのビットと同じ【BT兵器】か!?でもアレを使うのには特別な適性が必要な筈じゃ…」

セシリアの姿が浮かんだ

一夏の言う通り【BT兵器】はセシリアのような『BT適正』と呼ばれる特別な適性が高くなければ扱う事が出来ない特殊な装備であった

そんな極端に使い手を選ぶものを簪が使った事に驚いているが元々【打鉄天魔】は『BT適性の無い人間でもビットが扱える』事をコンセプトにして開発された機体であった
その為、セシリアほどの操作性はまだ出来ないが簪でも【BT兵器】を扱う事が出来る様になっていた

第149話：次の題材

〜東 Side〜

一夏

「イテテテ…」

【打鉄天魔】の相手をしてくれたいっくんはかんちゃんの全方位砲火で吹っ飛ばされて暫くして起き上がった

流星にあの集中攻撃には成す術がなかったようだね…と言うか装備が全部使えなくされたら誰だってこうなるか…

東

「いっくん大丈夫〜?」

一夏

「な、なんとか…つうか東さん…何ですかあの能力?いくら何でも反則過ぎるでしょ?」

東

「ニヤハハハ♪でしょ? いや〜…造った東さん自身もそう思っちゃったよ〜♪」

一夏

「笑い事じゃないと思いますよ?」

…誤魔化せないか…

シャルロット

「僕もそう思います。簪のあの機体は試合では確実に制限がかけられてしまいますよ。」
別に違反してる訳じゃ無いんだけどな…

それに私の作る第5世代は試合とかゲームの為にじゃなくて宇宙で活動する事を目的にしたものだからそっちはどうでもいいんだよね

束

「まあ、その時はその時だよ。向こうが何か言つて来たらその時に対処すればいいだけだよ。」

尤も…この束さんに面と向かって物申せるか甚だ疑問だけどね?

と、そんな事よりも…

束

「どうだったかんちゃん? 【天魔】を使って何か問題があった?」

簪

「いえ、何も問題はありません。今まで以上に動きやすかったです。」

束

「それは良かったよ♪新型のビットも大丈夫だった？」

簪

「はい、まだ慣れてないせいで操作は難しいですけど動かす事に問題はありません。」

束

「そっか、なら操作に関してはセーちゃんに教えて貰った方がいいね。」

簪

「そうですね!!」

ビットの扱いにかけてはセーちゃんが一番だからね!

さくて…それじゃ【天魔】の試運転は一先ずOKって事で…

そ、れ、じゃ…

束

「リーちゃん!!早速【甲龍^{シエンロン}】の改造に取り掛かるよ!!!」

鈴

「ハ、ハイ!!!」

次の題材に取り掛かるぜえ〜!!!

〜束 Side out〜

（鈴 Side）

ハア〜…遂にこの時が来てしまった…

私の【甲龍】^{シエンロン}…一体どんな姿になるんだろ…

セシリアの【ハルフアス・ベーゼ】と簪の【打鉄天魔】…どつちも見ると原形を留めないのは確実よね…

どんな機体が出来るのか楽しみ半分怖さ半分って心境ね…
でもここまで来た以上は…

鈴

「腹を括るしかないわね!!!」

私が気合を入れ直すと…

束

「いや、別に乗ったら即自爆する様な物にはしないけど？」

鈴

「……………すみません…」

口に出してしまった…

でもね束さん…私の気持ちも少しは分かって欲しいんですよ…

）
鈴
S
i
d
e
o
u
t
）

第150話・闇夜を照らす月！月光龍（ユエガンロン）咆
哮！！

♪ 鈴 Side ♪

東

「出来た~~~~!!!!」

声を張り上げる東さん…

その前には完成した私の新型があった…

でも…

全員

「……………」

私を含めた全員が言葉を失ってる

だってこれ…

東

「コレがリーちゃんの新型!!その名も【月光龍^{ユエガンロン}】だよ!!!」

私の新型はクロエさんの【裂空丸】クラスのサイズがある真っ白なドラゴンだったからだ

一目でこのISは【ワイバーン・ガイア】や【裂空丸】と同じ中に乗り込んで操縦するタイプだと分かるわ…

鈴

「あの…束さん…大型はもう作らないんじゃないんですか?」

私がそう聞くと…

束

「そのつもりだったんだけどね…次の機体を考えてる内に通常サイズのISじゃ無理って気付いてさ?」

鈴

「それでこのサイズになったと?」

束

「そゆ事〜♪」

束さんがそう言うならそうなんでしようけど…

一体どんな作り方したら通常サイズを上回るISが出来上がるんだろ?

私の機体だから知る必要はあるんだけど…何か知るのが怖いわね…

そんな私の心情などお構いなく東さんは説明を始めた

東

「まずこのI Sの基本装備は頭部と右腕にある3門のレールガンと口にあるプラズマレールキャノンの計4門だね。」

鈴

「え!?それだけなんですか?」

どう言う事?

シエンロン

【甲龍】は元々近接格闘型のI S…

それを遠距離型に変えたの?

東

「フフフ♪大丈夫だよリーちゃん♪言ったでしょ? 『基本装備』だって。」

鈴

「へ?」

確かにそう言ってたけど…

東

「この子の本領は『コレ』と一緒にする事で発揮するのだよ!!!」

東さんがそう言うと隣の部屋の扉が開いた

そこには【月光龍^{ユエガンロン}】とは違う3機のマシンがあつた

鈴

「…何ですかコレ？」

東

「これこそ【月光龍^{ユエガンロン}】の武器にして、手足となる『支援機』だよ!!」

鈴

「支援機？」

支援機と言う3機のメカ：

1 体目は巨大な鎌を持った黒い死神：

2 体目はデカイ槍とこれまたデカイブースターを8基積んだ戦闘機：

3 体目が白いエイ：

コレが【月光龍^{ユエガンロン}】の支援機？

東

「先ずは簡単な説明をするよ。まず1体目の黒い死神みたいなのは【デスヘイズ】：見ての通り鎌を使った近接型だよ。」

コイツは近接型か：

東

「次にデカイ槍を積んでるのが【アーケランサー】…大型ブースターによる加速でヒットアンドアウェイの突撃が得意だね。」

突撃型…とても言えいいのかな？

私的には近接型は【デスヘイズ】より【アーケランサー】の方がやり易い気がする…
東

「最後の白いエイが【ジェットレイ】…ミサイルによる爆撃が主な使い方だね。」

最後のは完全に遠距離型ね…

3機の説明が終わると私は改めて3機の支援機を見た…近接型の【デスヘイズ】…突撃型の【アーケランサー】…爆撃型の【ジェットレイ】…戦法が全く違うわね…

でも…

鈴

「あの東さん…これどうやって使うんですか？」

そもそも使い方が分からない…

東

「あくそれね？この3機はセーちゃんやかんちゃんの使う『ビット』と同じだよ。」

全員

「……………へ？」

同じ?!

コレが?!

【ハルファス】や【天魔】と同じ…

全員

「ビットオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

ビットって言ったらあれよね?

【ブルー・ティアーズ】や【ハルファス】みたいに小さい物よ!?

そりゃ【天魔】のビットはセシリアのに比べて大分大きかったけどさらに大型化したの!?

一夏

「束さん…コレは流石にデカくし過ぎじゃないですか?」

全員

「うんうん!!」

皆同じ考えでよかった…

でも…一夏の言う通り束さん…何でこんなにデカイビットを造ったんだろ?

それも3機とも全く違う設計だし…

私がそう思ってる…

東

「ニヤハハハ…心配しなくても東さんだつて意味もなくこんなに大きくしないよ。」

あ、ちゃんとした理由があるんだ…

東

「この3機は【天魔】のビットの延長線上の物なんだよ。」

簪

「【天魔】の延長？」

シャルロット

「確か…【天魔】のビットは…『離れた場所にいる相手に拡張領域から救援物資を送る事』

が開発コンセプト…でしたよね？」

東

「そうだよ!!で! 【月光龍】^{ユエガロン}はその更に先を進んだ機体!!この3機は『救助者が何処に居

て、どんな状況でも救助が出来る事』をコンセプトにしたものなんだよ!!」

全員

「!?!」

なるほど!?

確かに簪の【天魔】のビットは拡張領域^{パススロット}を使った物資の支援は出来るけど救助は出来

ない

でもこの3機ならそれが出来る!?

そこまで考えた物だったんだ!?

全員

「……………」

東さんの説明に全員が黙り込んでいると…

永遠

「じゃが…こやつらの使用法は『もう一つ』あるんじゃないか?」

全員

「え?」

永遠が口を開いたけど…もう一つの使用法?

【月光龍^{ユエガンロン}】の支援と人命救助以外にどんな使い方が…

本音

「もう一つって何なの?」

永遠

「戦闘面じゃ。この3機の真骨頂は【月光龍^{ユエガンロン}】の支援ではない。そうじゃろ?」

永遠がそう聞くと…

東

「ピンポーン♪大正解!!!」

全員（永遠以外）

「え!?!」

当たり前なんだ…

でもコイツ等…戦闘支援以外に何が出来るんだろ?・

「ハルフアス」や「天魔」だってビットは支援しか出来ないのに…

東

「実はね?この3機は【月光龍】ユエガンロンと『合体』出来るのだよ!!!」

全員（永遠以外）

「……………え?」

東さんが何を言ったのかすぐには分からなかった…

でも暫くして…

全員（永遠以外）

「合体いいいいいいいいいいいいいい!!」

意味を理解した瞬間永遠以外の全員が叫び声を上げた

そりゃそうよ!?

まさか【月光龍^{ユエガンロン}】も【ドットブラスライザー】と同じ合体機能が備わっていたなんて

…

東

「【デスヘイズ】と合体すると遠近両方に対応した機体。【アーケランサー】だと近接型、【ジェットレイ】は高速遠距離型に変わるよ。」

驚く私達に東さんは合体した時の【月光龍^{ユエガンロン}】の説明を簡単にしてくれた

合体する前は完全に砲撃型の機体…でも合体する事でどんな相手にも対応出来る機体に変化する…これが【月光龍^{ユエガンロン}】の本当の力だったんだ…

東

「ま!!ココで説明するより実際に動かした方が早いね!!てな訳でリーちゃん!早速で悪いんだけど模擬戦してくれない?」

鈴

「いいですけど…相手は誰にします?また一夏にやって貰いますか?」

一夏

「俺はいいですよ。」

一夏はOKか…

簪の時と同じで一夏が相手になるかなって思ったけど…

束

「いっくんには悪いけど今回はかんちゃんにお願いしてもいいかな？」

簪

「私ですか!？」

簪が指名された

でも何で簪？

束

「新型同士の実戦データが欲しいんだよ。頼めるかな？」

そう言う事か…

簪

「ハイ!!任せて下さい!!」

鈴

「手加減しないわよ!!!」

簪

「望む所!!!」

こうして【月光龍^{ユエガンロン}】の最初の相手は簪になった

く鈴 Side outく

第151話：第5世代の対決【打鉄天魔VS月光龍】

く一夏 Side s

鈴

「……………」

簪

「……………」

俺達の目の前に完成した2体の第5世代が向かい合っていた

鈴の新型【月光龍】ユエガンロンと簪の新型【打鉄天魔】：

【天魔】の方は俺自身が相手をしたからその強さは良く分かってるつもりだ：
単一仕様ワンオフ・アブリタイプが発動したら最後、鈴は迂闊な攻撃が出来なくなる：

普通に考えれば簪が圧倒的に有利の筈：筈なんだけど鈴の新型は一番新しい第5世代だ：【天魔】の【六天連鎖】ラッシュユにも対抗できそうな気がするんだよな：

俺がそんな事を考えている間に：

束

「二人とも準備はいくい？」

簪&鈴

「ハイ!!!」

東

「それじゃあ…始め!!!」

ガキイイインツ!!!

簪と鈴がぶつかつた

鎧武者とドラゴンの対決…どっちが勝つんだ!?

く一夏 Side outく

く三人称 Sideく

簪

「はあああああああああつ!!!」

鈴

「りやあああああああああつ!!!」

ズガアアアンツ!!

開始と同時にぶつかり合つた2人は一端互いに距離を取る為に離れた

簪はビットである武装翼を展開し、拡張領域パススロットから2丁の銃を出すと6基の武装翼も合わせて展開した

対する鈴も頭部と右腕のレールガンと口のレールキャノンを簪に狙いを合わせたそのまま二人の砲撃戦が始まった

ドガガガガガガガガガガガガガガガガッ!!!

だが…

鈴

「チイツ!! (手数が足りない!! それに攻撃範囲が違い過ぎる!?)」

鈴は今の砲撃では自分が不利だとすぐに悟った

その為…

鈴

「早速行くわよ!! 来い!! 【ジェットレイ】!!!」

簪

「!?!」

鈴は【月光龍ユエガンロン】の支援機の一機【ジェットレイ】を呼び出した

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドッ!!!

【ジェットレイ】は現れると同時に下部を開き、そこから大量の爆雷をバラまいた

簪

「クッ!？」

上空から絶え間なく降り注ぐ爆雷によつて今度は簪が不利となつた
その隙を鈴が見逃す筈も無く…

鈴

「よしっ!!」【ジェットレイ】!! 【月光龍】と合体!!!」

ガキョンツ!!!

簪

「しまった!？」

【月光龍】と【ジェットレイ】を合体させた

合体した【月光龍】は戦闘機のような形状に変化しており3門のレールガンも1門増え4門となつていた

簪

「カ、カッコいい!？」

そんな【月光龍】の姿に大のヒーローロボット好きの簪が反応しない訳も無く、顔は見えないが目をキラキラと輝かせていた

しかし…

しかも【月光龍^{ユエガンロン}】は従来のISとは操作の仕方も全く違う事も鈴が振り回される原因となっていた

しかし…

鈴

「ぐぬぬぬぬつ!!コンニャロオオオオオオオオオオオツ!!!」

鈴も伊達に国の代表候補生になってないので次第に操作が安定し始めていた

そして、暫くして制御がある程度できるようになると…

鈴

「よし!!何とか行ける!!行くわよおおおおおおおおおおつ!!!」

簪に向かって行った

ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!

鈴は4門のレールガンを撃ちながら簪に向かって行った

簪

「クッ!?!」

突っ込んできた鈴を簪は体を捻って躲した

ガキョーンツ!!!

簪

「!?」

簪が躲すと同時に鈴は「ジェットレイ」を分離させた

分離した事で【月光龍】ユエガンロンに急ブレーキがかかり簪の目の前で止まってしまった

しかも簪は鈴を躲した態勢の為、鈴に背中を向けた状態となっていた

簪

「しまった!?」

鈴

「そこっ!!!」

ドギユウウンツ!!

ドガアアアアンツ!!

簪

「ガハッ!?」

そこに鈴はレールキャノンを撃ち込んだ

当然簪は躲す事が出来ず直撃を受け吹き飛ばされた

簪

「クウツ!!?（まさか躲した直後に分離するなんて!?なんて無茶やるのよ!?!）」

鈴

「次行くわよ!!」【デスヘイズ】!!!」

簪

「2体目!?!」

簪が態勢を立て直している間に鈴は第2の支援機【デスヘイズ】を呼び出した
そして…

鈴

「そのまま合体!!!」

ガキョソツ!!!

今度は【デスヘイズ】を【月光龍^{ユエガンロン}】に合体させた

【デスヘイズ】の大鎌を受け取ると本体は形状を変え【月光龍^{ユエガンロン}】の背中に接続された

さらに…

簪

「黒くなった!?!」

【月光龍^{ユエガンロン}】の純白のボディが【デスヘイズ】と同じ黒一色へと変わってしまった

永遠の【戦国龍】が使用する【六道剣】によって色が変わる様に【月光龍^{ユエガンロン}】も合体する支援機によって色が変わる仕様になっていた

鈴

「行くわよ!!!」

鈴は大鎌で斬りかかった

ガキインツ!!

だが、簪も曲刀を抜いて受け止めた

鈴

「グググググッ!!!」

簪

「又ウウウウッ!!!」

そのまま鏢迫り合いを続ける中…

簪

「…行け!!!」

簪は武装翼で鈴を攻撃しようとした

しかし…

鈴

「【ジェットレイ】!! 撃ち落とせ!!!」

それは鈴も同じだった

分離させた【ジェットレイ】が武装翼に向かってミサイルを撃ち始めた

